

# 弥生時代と古墳時代の軍事組織と社会

藤 原 哲

博士（文学）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

日本歴史研究専攻

平成 28 年度

（ 2016 ）



# 弥生時代と古墳時代の軍事組織と社会

## 目 次

序 章	7
第1節 本論文の位置づけ	9
第2節 本論文で用いる概念規定	13
第3節 本論文の構成	18
第1章 殺傷人骨の分析による弥生時代の戦闘戦術	21
第1節 研究史と研究の方法	23
第2節 弥生時代の武装及び武器の機能区分	24
第3節 殺傷人骨の分類と評価	27
第4節 弥生時代の戦いの具体像	40
第2章 環濠集落からみた弥生時代における戦闘論の再検討	45
第1節 環濠集落を巡る研究史	47
第2節 環濠集落の成立と展開	49
第3節 環濠集落の評価	55
第4節 環濠集落と弥生時代の戦闘像	71
第3章 副葬・生産・保有の様相からみた弥生集団の武装度	75
第1節 弥生時代の武器を巡る研究史	77
第2節 弥生時代の武器副葬にみる武器の社会的価値	79
第3節 弥生時代の鉄器生産にみる鉄製武器の普及	87
第4章 弥生時代の軍事組織	99
第1節 弥生時代の軍事組織に関する研究史と本論の立場	101
第2節 弥生時代の軍事組織像	103
第5章 古墳時代における戦闘の具体像	109
(『日本書紀』の戦闘記述に関する批判的検討)	
第1節 研究の方法と『日本書紀』の研究小史	111
第2節 『日本書紀』戦闘記述の分析	115
第3節 東アジア各地域における武器・武具の組成と戦闘の様式	140
第4節 古墳時代における戦闘の具体像	150

第6章	甲冑の副葬に関する武器副葬の分析	155
第1節	甲冑の副葬に関する研究史と研究の方法	157
第2節	副葬資料にみる甲冑副葬古墳の分類とその評価	161
第3節	武器と被葬者との関係性	177
第4節	甲冑副葬各型式の社会的背景	184
第7章	副葬品配列の分析からみた武器の社会的価値	187
第1節	古墳主体部における武器配置の分類	189
第2節	武器配列における具体事例の分析	190
第3節	武器副葬の時代的特徴と変遷	199
第4節	副葬品配列の方法からみた武器の価値	204
第8章	古墳時代における武装集団の事例的研究 ～宮崎県島内地下式横穴墓群の分析～	209
第1節	島内地下式横穴墓群の概要	211
第2節	島内地下式横穴墓群における副葬品と被葬者との相関関係	220
第3節	島内地下式横穴墓群における共同体の復元	224
第4節	南九州地域における地下式横穴墓群の位置づけ	229
第9章	古墳時代中期社会の構造的把握	235
第1節	古墳時代中期に関する研究史	237
第2節	古墳時代中期における近畿地方の古墳階層と武器副葬	239
第3節	古墳時代中期の鉄器生産について	244
第4節	古墳時代中期の武装集団	250
第5節	古墳時代中期社会における軍事組織の構造	255
第10章	武人埴輪からみた古墳時代の武装集団モデル	259
第1節	武人埴輪の研究史	261
第2節	武人埴輪の分類	264
第3節	古墳祭祀における形象埴輪の象徴的特質	272
第4節	武人埴輪の出土状況とその変遷	273
第5節	形象埴輪の造形原理と武人埴輪の政治性	279
第6節	武人埴輪の階層的構造	281
第7節	武装集団モデル	285



第1 1 章	古墳時代の軍事組織	293
第1 節	考古学的な個別事実（現象）と研究史、及び本論の立場	295
第2 節	古墳時代の軍事組織像	304
第1 2 章	戦争・国家・軍事組織の発生に関する理論的考察	309
第1 節	軍事組織に関する理論的根拠とその前提条件	311
第2 節	弥生・古墳時代の軍事参与率、服従度、凝縮性	314
第3 節	弥生・古墳時代における軍事組織の歴史的位置づけ	318
第4 節	軍事組織の変化と画期—国家形成との関連性について—	321
終 章		325
註 及び 引用・参考文献、報告書等文献		333

## 図表一覧

図1	土器等に描かれた戈と盾の人物像	25
図2	登場する主な骨格部位	28
図3	I（スダレ）タイプ殺傷模式図	30
図4	IIIc（新方）タイプ検出状況（土井ヶ浜遺跡124号人骨）	34
図5	各タイプの殺傷模式図	41
図6	韓国の環濠集落（遺跡）と日本の早期～前期（前半）の環濠が指摘される遺跡	50
図7	弥生時代前期（後半）環濠の地域性	52
図8	騎兵及び馬甲・馬冑による戦闘図	145
図9	敦煌莫高窟285窟壁画に描かれた重装騎兵の戦闘図	146
図10	甲冑副葬の各型式とその標識遺跡	163
図11	紫金山古墳遺物出土状況	170
図12	武器の大量埋納	175
図13	武器配置の型式 模式図	191
図14	C3型武器配置	200
図15	武器の集積（B2型武器配置）	201
図16	A2型武器配置	202
図17	藤ノ木古墳・鴨稻荷古墳の副葬状況	204
図18	島内地下式横穴墓群 横穴墓の各型式1（竪坑石材閉塞）	214
図19	島内地下式横穴墓群 横穴墓の各型式2（羨門石材閉塞・無羨門）	215
図20	島内地下式横穴墓群 横穴墓の各型式3（羨門土塊閉塞）	216
図21	島内地下式横穴墓群 横穴墓分布図1	217

図22	島内地下式横穴墓群 横穴墓分布図	218
図23	島内地下式横穴墓群 墓域と集落の位置関係	225
図24	島内周辺における、地下式横穴墓出土の鉄器と集落出土鉄器	227
図25	南九州地域の主要な古墳群位置図	232
図26	黒田長山古墳群における副葬武器の階層序列	252
図27	武人埴輪Ⅰ類	265
図28	武人埴輪Ⅱ類	267
図29	武人埴輪Ⅲ・Ⅳ類	270
図30	人物埴輪配列の各事例	275
図31	綿貫観音山古墳における武人埴輪出土地点	283
図32	武装集団モデルA	286
図33	武装集団モデルB・C・D	288
表1	弥生時代の殺傷人骨一覧	28
表2	弥生時代の殺傷方法仮説一覧	36
表3	環濠集落・環濠遺跡の分類一覧	55
表4	環濠集落・環濠遺跡の地域的変遷	56
表5	環濠集落・環濠遺跡一覧	57
表6	弥生時代前期～中期 主要な武器出土墳墓一覧	83
表7	弥生時代における近畿地方の鉄器量(旧五畿内)	89
表8	弥生時代における近畿地方の鉄器量(旧畿外)	89
表9	弥生時代後期 主要な武器出土墳墓一覧	91
表10	弥生時代後期の武器組成・比率	95
表11	『日本書紀』の武器・戦闘記述一覧	116
表12	古墳時代甲冑副葬古墳一覧	164
表13	武器を副葬する古墳被葬者一覧	179
表14	島内地下式横穴墓群 性別・年齢別遺物統計	221
表15	島内地下式横穴墓群 性別遺物統計(100数比率)	221
表16	古墳時代の殺傷人骨一覧	223
表17	アンジェイエフスキーによる軍事組織の諸類型	313
表18	軍事組織の変化要因	322

## 序 章



## 序 章

### はじめに ー本論文の目的ー

戦争や軍事組織といった暴力に関する研究テーマは、現代的な問題や課題の一つである。本論文は考古学という実証的な歴史研究を通じて、現代社会でも極めて深刻な問題にある戦争と平和の研究を行い、その課題の解明に寄与することを目的としている。

こういった問題意識の下、本論文は武器を主な資料として、弥生時代から古墳時代における具体的な戦闘像、武装集団や軍事組織のあり方を検討し、その歴史的な位置づけを行うものである。これを考察する上での主要な論点は次の3つとする。

- ① 弥生時代と古墳時代の具体的な戦闘形態を復元する。
- ② 弥生時代と古墳時代の具体的な武装集団や軍事組織を復元する。
- ③ 軍事組織の変遷を通じて戦争の開始や国家の成立を解明する。

すなわち、本研究の目的は、弥生時代から古墳時代（註1）の“武器”という考古資料を中心として、最初にその使用方法に基づいて戦闘形態を復元し、次いで戦闘のための集団編成原理である武装集団や軍事組織を検討し、最後に軍事組織そのものの変遷や画期から国家の形成や戦争の開始といった歴史的な事象について考察を行うものである。

### 第1節 本論文の位置づけ

#### 1.研究の前提と方向性

本研究における主要な資料は、考古遺物としての“武器”である。武器は刀剣や弓矢などの攻撃具（狭義の武器）と、甲冑などの防具（武具）とに分かれるが、本論では特に断りの無い限り両者を一括して“武器”と表現する（註2）。

利器である武器の第一義的な意味は、攻撃用の武器が“殺傷のための道具”であり、防御用の武具が“身を守るための道具”である。ただし、第7章で道具の価値的な検討を行う際に詳細するが、武器をはじめとする道具一般においては、使用価値以外にも交換価値や、象徴・記号的な価値などが存在する。

したがって、実際に武器が使用される様々な局面に関していえば、戦闘以外の“儀礼”や“威信財”としての側面も極めて重要である。ただし、これまでの考古学で武器を扱う場合は、その儀礼性や威信財としての属性に、研究がやや偏重してきた経緯がある。

例えば、弥生時代の武器研究においては、副葬された武器が呪術的な祭器であるという見解が大勢を占めた時期があり（森（貞次郎）1966）、副葬武器の考察では祭祀儀礼との関連性や、威信財としての階層性などが論じられることが多かった。古墳時代の武器についても、鉄鏃の儀仗的な側面や（水野（敏典）2009）、威信財としての甲冑の配布や流通が主として検討された（藤田（和尊）2006、川畑 2015）。

その反面、武器から軍事的な背景を検討しようとする場合においては、無条件的に武器を“戦闘や武人の痕跡”と結び付け、これを政治・経済的な事象で解釈する場合がほとんどであって、武装集団や軍事組織そのものの集団構成原理や、その変遷過程といった、より象徴性の高い社会的な考察が行われることは非常に少なかったといえる。

具体的にいうと、原田大六や近藤義郎・今井堯は群集墳における副葬品の階層差から当時の軍事組織のあり方を推察しているが（原田 1962、近藤・今井（堯）1971）、その方法は、やや単純化すれば馬具を副葬している群集墳の被葬者は“乗馬して戦う下級指揮者”であり、刀剣や鏃だけが副葬された被葬者は“歩兵”と認定する論法であった。ここでは、副葬品としての武器をア priori に実用品とみなし、かつ副葬された考古遺物が直接的に、実際の社会組織を表しているという無条件な前提に立脚して軍事組織像が推定されたのである。

同様な視点は藤田和尊や田中晋作による古墳時代の甲冑研究でも行われている。藤田和尊は古墳における副葬武器が被葬者の武装状況のおよそを反映しているとの前提に立ち、武器・武具の質・量的な優劣をもって軍事的・政治的位置関係の格差を反映すると考え、ここから古墳時代における政権構造の様相を論じる（藤田（和尊）2006）。

加えて、軍事組織を視野に入れる研究においては、その解釈部分や結論部分で“ヤマト朝廷”や“中期畿内政権”といった政治的な現象で議論が解決される場合がほとんどで、軍事組織そのものの歴史的な位置づけや、軍事組織と社会との関係性について問われるようなことは稀であった。

副葬武器から生前の個人武装や軍事組織を検討する方法論については、水野敏典がその問題点を指摘しているが（水野（敏典）1993）、田中晋作の提起した“常備軍”を巡る論争中においても、古墳出土遺物である武器や武具は葬送儀礼行為の痕跡を示すものであり、直接的に生前の武装内容や個人（集団）の保有・保管状況を示さないのではないか、といった問題提起が松

木武彦により行われた（松本 1994）。かかる指摘は、これまで古墳時代の戦闘や軍事組織を検討する多くの研究が墳墓（古墳）出土の資料に立脚せざるを得なかった考古学にとって、研究そのものの根本的な見直しを迫る疑義であったといえる。

上記のような研究動向を踏まえ、本論では武器を儀礼道具や威信具としてのみ把握するのではなく、かといって、武器を直接的に戦士や軍事組織と結び付けることも行わない。本研究の基本スタンスは、武器の儀礼的側面や威信財的側面の価値について十分留意しつつも、武器とその出土遺構の社会的な検討を通じて、弥生時代～古墳時代における武装集団や軍事組織について考察を行うものである。

すなわち本論文の研究における方向性とは、最初に形而下的な、手で触れることのできる物的な存在である武器という存在を介して、武器の使用に伴う戦闘方法や、儀礼を介した武器の使用といった実証可能な事象を復元する。次いでより高度に抽象化された武装集団や軍事組織という社会集団の存在や構成原理を考察し、これを歴史的な事象として理論的に位置づける。本研究の独自性、これまでの分析と異なる特色は、この視点と構成とにある。

## 2. 方法論的前提

上記の研究の基本的スタンスや方向性に従い、具体的な考古資料を分析するに際しての方法論的な前提について次に触れる。

考古学を用いた物的なモノの研究方法としては、主に遺物からの分析と、遺構からの分析といった両面が存在する。一般にモノ（考古資料）の実社会における一連の流れ（ライフヒストリー）としては次のような過程や推移が想定できる。

“生産” → “流通” → “使用” → “廃棄”

この中において、それぞれのモノは個々人や集団と関わることにより、社会的な関係性を帯び、かつ、それぞれの過程で大地に痕跡を残す活動が生じた場合に遺構が形成される。考古学では、こういった“生産”“流通”“使用”“廃棄”の各ステージにおいて残存する物的な痕跡を調べることで、主としてどのように製作され（生産段階）、どのように入手し（流通段階）、どのように扱われ（使用段階）、どのように廃棄されたか（廃棄段階）、といった歴史的な事象を学術的に分析することが可能となる。

日本における考古学研究においては、それぞれの個別資料について製作技術を基礎とする型式学的方法論が主流であるため、個別遺物の編年や製作技術について検討されることが多かった。このことは、研究史を紐解けば容易に理解することができるだろう。

研究の豊富な古墳時代の甲冑研究で確認しておく、まず 1920 年代から 1940 年代までにおいては後藤守一や末永雅雄が基礎的な型式学的研究を行い、雑多な武器の器種を明確にしていく作業が行われた。これによって眉底付冑や三角板革綴短甲などといった、甲冑の型式的な種類が規定・網羅される（後藤 1928、末永 1934）。

上記で規定された各型式間の前後関係、すなわち甲冑の編年作業については、1950 年代から 1970 年代において盛んに行われることとなり、1980 年代までには、現在にも続く甲冑編年の大枠が定まることとなる。編年作業は主として甲冑の製作技術の分析を通じて行われるため、この間には甲冑の技術史的な検討や、工人の編成問題が大きな論点となり（小林（謙一）1974、野上 1975）、1980 年代は甲冑の祖形や生産地の解明に議論が移った（小林（行雄）1982、鄭（澄元）・申（敬澈）1984）。

1980 年代までに編年の大枠が定まったとはいえ、製作技術の精緻な観察による編年の再検討や細分は考古学における甲冑研究の重要な柱の一つであり、現在進行形で研究が進められている（吉村 1987、滝沢 1991、高橋（工）1995、橋本（達也）2006、阪口 2009、鈴木（一有）2010、川畑 2011）。近年においては内山敏行を中心に、これまで検討されることが少なかった挂甲の詳細な技術的検討も活性化するなど（内山 2008）、製作技法分析の裾野も大きく広がっていった。

こういった甲冑研究の主流、遺物の詳細な製作技術を基礎とした型式学的な分析という方法論的立場においては、しかしながら、川畑純が述べるように、「詳細な型式学的分析から開始される武器・武具研究は、古墳時代の軍事的機構の描写にはほとんど寄与しない」（川畑 2015）という側面がある。何故ならば、個々の遺物の製作技術に基づく詳細な型式学的研究は、遺物の一連のライフヒストリーのうちの、始点としての“生産”ステージ（どのように製作されたか）の社会的な背景が主として分析の対象になるために他ならない。

純粋な遺物の型式学的な研究を行う場合、目前に観察できる材質や製作技法といった“生産”状況に関する情報量が最も多く、出土状況を加味することで“流通”や“廃棄”に関する情報を得ることができるが、これに対し“使用”に関する情報量は最も少ない。このような考古遺物の、資料としての本質的な制約のために、考古学においては武器の使用や戦闘の形態、更に武装集団（軍事組織）の分析といった研究事例は、編年や工人組織の追求に比べれば圧倒的に少なくならざるを得ないのである。

上記のように、遺物研究としての型式学的な研究のみでは、実際の使用状況に関する検討が困難なのであるが、遺構（遺物の“廃棄”ステージ）の分析に目を転じた場合、遺物がどのよ



うに用いられたかの痕跡が残る場合がある。その最も明確な事例は、殺傷人骨などに残された武器による実際の殺傷痕跡であり、この状態から、過去において武器が使用された状況を実証的に復元することが可能になる。

ただし、実用具としての道具の使用痕（武器でいえば殺傷人骨など）は極めて希少な事例であり、時代的にも地域的にも普遍的に追及できるような性質のものではない。一方、遺物の廃棄ステージとしての副葬行為、つまり祭祀や儀礼に伴う遺物の廃棄状況に関しては資料が豊富であって、通時代的に資料に基づいて検討することができるといった研究上の利点がある。

改めて確認すると、武器の副葬状況や廃棄の状況については直接的には儀礼的な状況を示すものであって、実用具としての武器の使用を明らかにするものではない。しかしながら、その背景には、儀礼という使用段階において武器が選択され、それを副葬したという、選択上の原理や価値的な序列といった社会的背景を指摘することができる。したがって、武器の副葬（廃棄）状況からは、武器に対する当時の社会や集団における思惟・原理・価値などを考察することが可能である。

このことから、武器副葬の分析手法としては、武器と戦闘や戦士を直接的に結び付けるのではなく、その社会背景に存在する威信や価値といった間接的な分析を行うことで、戦闘のための道具たる武器がどのように扱われていたかを実証的に解明することができ、このような学術的な手順を踏まえることによって、はじめて、武器からその社会における戦闘や軍事組織の位置づけを考察することができるのである。

本論では、具体的な武器の使用痕や戦闘を描いた資料がある場合は、これを分析の対象として直接的に戦闘の具体像を復元し、使用の痕跡が希薄な場合には、次策として“廃棄”（副葬）という最終的な使用段階を示す遺構の検討から、“モノ”よりも“コト”（現象）を介した社会的な背景を復元することで、間接的ながら、戦闘のあり方や集団としての武装状況（軍事組織）について考察を行うこととしたい。

## 第2節 本論文で用いる概念規定

### 1. 戦闘の概念について

本研究の目的は、武器を資料として戦闘形態や武装集団（軍事組織）といった社会の軍事的側面を検討するものであるが、具体的な分析に先立って、戦闘や武装集団（軍事組織）、戦争と

いった、主要な概念を明確にしておく。

戦闘とは、組織間における暴力行為の具体的な行使である。これを構成する攻撃、防御、用兵、作戦などの様々な現象については、主として軍事学が専門的に研究の対象としてきた（片岡（徹也）2009）。他方、戦闘行為と類似した暴力や攻撃行動、紛争などに関しては、戦場以外の社会の様々な面において観察することが可能であるため、生物学や文化人類学、経済学などの諸科学においても検討が加えられてきた。

なお、生物学が対象とする分野は、主としてサルや鳥、魚などの生物にみられる暴力的な行動や攻撃的な本能である（カーシ、エブリング 1974、ローレンツ 1985、山極 2007）。このことから、人類の歴史を対象とする考古学との直接的な関連性は低い。また、紛争が生じる過程を経済的に分析した研究（ボールディング 1971）については、紛争現象が高度に象徴化されてしまうため、集団間の闘争を扱う本論とは視点が異なっている。

これに対し、文化人類学では人類文化の一環として戦闘という具体的な現象を考察の対象にするため、本論と関連する部分が多い。文化人類学の研究対象は極めて広範であり、民族誌の分析を介した戦闘の具体像や、戦闘や戦争の心理的な問題など論点は多岐に及ぶので（Turney-High.1971、フリード、ハリス、マーフィー1977、田中（雅一）1998、栗本 1999、Keeley1996）、全体的な比較は困難であるが、本論においては別途、各論の中において幾つかの文化人類学の研究成果を参照して考察を深めたい。

戦闘や暴力といった現象については、様々な学術的視点から研究が試みられているように、それが人文科学において非常に重要な課題であることは明白であろう。近年においても、人類と戦争や暴力との関係に関する研究は進行中であって、考古学者のレブランクは自然状態の人類は凶暴で暴力的であったとし、石器時代は飢餓などの原因によって成人男性の25%もが戦争や暴力で殺されたと論証し（Leblanc 2004）、心理学者のピンカーは先史時代から近代以前までは、戦争の死亡率は現在よりもはるかに高く、かつては人間の最大の死因は殺人行為（戦争）であったと主張し（Pinker 2011）、社会学においては暴力の管理こそが国家における社会秩序のコアであり経済システムはその上に存在している、という新しい社会モデルが主張されている（North、Wallis、Weingast2009）。

戦闘に関する研究は、人間の本質部分が問われる問題でもあるため、上記のように課題とするところは非常に広範かつ複雑である。しかしながらその中において、本論が考察を試みるような原始・古代の歴史的事象としての戦闘や武装集団（軍事組織）に関する研究は、近年では欧米において研究が進展しているものの（フェリル 1988、ハンセン 2003、アングリム他 2008）、

相対的には資料数や種類が限られることから、研究事例は決して豊富とは言えず、未解決の課題が山積している。

日本の原始・古代を対象とする研究においても、その政治活動や経済活動を基礎単位とする集団研究は豊富であるが、一方で、具体的な戦闘像の復元や、軍事を集団構成原理とする軍事集団の研究は、研究事例が少ないのが実情である。しかしながら、暴力や戦闘が人間の本質的な課題である以上、その社会性や政治動向を総合的に考える上で、暴力や軍事的側面の考察は必要不可欠である。そこで本論はこれまでの研究で、やや視点が欠けていた具体的な戦闘像や武装集団の理論的な位置づけについて考察を行いたい。

## 2. 武装集団・軍事組織の概念について

武器は機能的には暴力や戦闘のための道具である。したがって、その使用方法などを分析することで一定の実証的な戦闘の様相を検討することが可能である。しかしここから一步すすんで、武器から武装集団や軍事組織などを考察しようとする、研究の困難度が高くなる。武装集団や軍事組織という存在は、道具としての武器以外にも、命令系統、士気、訓練などといった非物質的な要素を総合した、より高度に象徴的な存在であるために他ならない。

本論で用いる武装集団という用語は、武器を保有した社会集団を指す。より特化した軍事組織という概念は、政治の実行手段の一つである軍事を司る組織体、具体的には戦闘目的のために組織された集団、又はその集団の結合体としての社会的な実態を指すと規定しておく。なお、ここでいう戦闘行為とは、実際の武力行使としての戦闘以外の、抑止力としての戦力も含むものである。各本文中においては、武器を保有した個々の社会集団を検討する場合は“武装集団”という用語を用い、より抽象化した場合や、歴史的な現象・位置づけを考察する場合には“軍事組織”という用語を用いることとする。

方法論的な課題と関連づければ、武器という具体的な物的遺物が存在し、それが特定の首長などに副葬されるといった社会的な行為が確認できることから、戦闘道具としての武器がその社会構造の中において何らかの存在基盤を持ち、武器を介した一定の社会的・儀礼的な特質を体現した人々が存在していたことが把握される。

また、武器という存在が実際に利器として使用するような痕跡ではなく、孤立して単独で存在している場合には威信財的・儀礼的な扱われ方が強いと推定されるが、反面、武器としての組成的なまとまりや、利器である道具として合理的に扱われている場合には、武器の組成などを介して当時の戦闘ドクトリン（戦闘教義・戦闘様式）などを推定することが可能であり、そ

の社会的な背景として軍事的な組織体を推察することができるであろう。本論ではこのような前提や研究の立場から、武器の実際の使用（戦闘）や武器の実用的な社会状況が実証できる場合において、その背景に軍事を意識した武装集団を復元することが可能であると考ええる。

ところで、軍事組織（武装集団）の研究に関しては、軍事学の範疇において近世以降の組織体について検討するものが大部分である。原始・古代を含めた歴史的な事象としての軍事組織研究や、その軍隊と社会との相互関係の探究という論点は極めて少ないといわざるを得ない。具体的な研究成果としてはジョルジュ・カステランやスタニスラフ・アンジェイエフスキの研究が挙げられるが、アンジェイエフスキの研究は本論で参考するところが大きいので、第12章において詳細に言及する。

方法論の項で述べたとおり、本論においては、武器の実用面の検討（戦闘形態）を最初に行い、実用的な側面から武装集団の編成原理を考察するが、ここでいう集団編成原理とは軍事面に特化した社会的な集団の謂いである。これまでの古代史研究において過去の集団を検討する際は、象徴的な社会的集団（単位集団など）や政治集団（前方後円墳体制やヤマト政権など）として評価する場合が多く、軍事に特化した集団原理の追求はほぼ皆無であった。そこで本論においては、社会集団のあり方として軍事面における集団編成を復元することを追求し、かつ、これを理論的に歴史の中で位置づけたい。

### 3.戦争の概念について

戦争に関する研究も、戦闘の研究と同じく対象が非常に多岐に及び、多くは軍事学の範疇に属するが（石津（編）2004）、歴史上における戦争の位置づけについては、歴史学や考古学でも議論的になっている。近年ではアザー・ガットによって戦争と文明との関係が700頁余の大著でまとめられているが（ガット2012）、ガットの著作はイギリスの『タイムズ・リテラリー・サプリメント』の2006年度版最優秀図書賞を受賞し、日本語訳も刊行されるなど、このテーマが非常に注目度の高いものであることが伺われる。

日本考古学においては、佐原真が戦争の開始を農耕社会の開始時期、弥生時代初頭と位置づけて戦争の開始に伴う諸問題を多方面から論じている（佐原2005）。また、国立歴史民俗博物館における学際研究によって、考古学・歴史学・民俗学・人類学などの総合的な研究が行われ、戦争の諸相が解明されつつある（福井・春成（編）1999、松木・宇田川（編）1999、藤井・新井（編）2000、藤木・宇田川（編）2002、福井・新谷（編）2002）。

ところで戦争の概念については様々な意見が存在するが、主要なポイントはクラウゼビッツ

の古典的な概念（クラウゼビッツ 2001）がほぼ言い尽しているといつてよい。すなわちそれは“組織的”で、“政治的”な“暴力行為”と規定することができる（註 3）。

戦争が組織的な暴力行為であるという点については他の研究者も追認しており（建部 1906、カイヨワ 1974、栗本 1999、松本 1999）、特に疑義が生じないが、“政治的”というキーワードについては解釈の余地が異なり、むしろ近年の研究では戦争のもつ文化的な側面が強調されることが多い（キーガン 1997、ガット 2012）。

しかし“組織的な暴力行為”の名のもとに、数十万規模の総力戦と数十人規模の部族間紛争、ひいては中世の一騎打ちやマフィアの抗争などを全て“戦争”という概念で説明するのはあまりに乱暴である。暴力行為そのものは人類社会や霊長類のみではなく、自然界においても普遍的に観察できる現象である。また、ある社会においては暴力や戦闘行為も文化の一部に組み込まれていることを否定するつもりはない。しかしながら、歴史的な文脈で戦争の起源を検討する場合、有象無象な大小の暴力行為と戦争とを区分する概念上の規定は必要不可欠であろう。

ここにおいて、政治性を重視したクラウゼビッツの古典的概念が再び注目され、狭義の戦争概念としては“国家規模の組織における意図的な暴力闘争”として、単なる暴力と戦争との相違を明確にしておきたい。突き詰めていけば、“戦争”と“国家”という二つの概念規定は不可分な関係にあり、戦争の開始という命題は、国家の発生というもう一つの大問題と相互に関連する。そのため、本論において戦争の発生を検討することになれば、必然的に国家（古代国家）の発生を検討することになるのである。

本論で取り扱う弥生時代は、一般的に日本列島において農耕が開始された時期とされており、余剰生産が生まれ富を巡って階層化が生じていく時代とされる。また、弥生時代の経済的な要因を受けて、古墳時代は首長層の階層化が更に進行し、古墳の種類や規模で代表されるような階層的な集団関係が全国的に成立し、初期の国家が成立する段階、又は国家成立を準備する重要な段階と考えられている。

そのため、古墳時代に関しては様々な観点から多くの国家の成立に関する研究が行われてきた。本書も同じ指向性を示す研究であるが、武器・武具の実証的な研究を介して、軍事的な側面から理論的に戦争の開始と国家の形成を位置づけるといった本論の特徴は、これまでの研究にはなかった新たな視点の提供になる。

なお、本論では古墳時代以降の近畿地方における政治組織の名称として“ヤマト政権”という用語を用いる。ヤマトの用法は国号としてのヤマト（倭）、令制に基づいた行政範囲のヤマト（大和）、地理的な地域的名称（奈良盆地東南部、三輪山麓周辺）としてのヤマトなど多岐に及

ぶが、出現期の大規模な古墳は、ヤマトと称される奈良県（三輪山麓）に集中しており、古墳時代においてヤマトを含む近畿地方に政治的な中心部分が存在していたことは明らかである。このため本論では、古墳時代における政治組織の名称として“ヤマト政権”という用語を用い、軍事的な視点から、その国家的な側面の適否について、戦争の開始と関連づけつつ検討したい。またヤマト政権の用語について、時期を限定する場合には“中期ヤマト政権”などと称し、中央と地方との関係性を強調する場合は“ヤマト中央政権”とも記す場合もあるが、何れも同じ趣旨であることを付言しておく。

### 第3節 本論文の構成

本論文は以下の各章で構成される。

#### 序 章

#### 第1章 殺傷人骨の分析による弥生時代の戦闘戦術

#### 第2章 環濠集落からみた弥生時代における戦闘論の再検討

#### 第3章 副葬・生産・保有の様相からみた弥生集団の武装度

#### 第4章 弥生時代の軍事組織

#### 第5章 古墳時代における戦闘の具体像（『日本書紀』の戦闘記述に関する批判的検討）

#### 第6章 甲冑の副葬に関する武器副葬の分析

#### 第7章 副葬品配列の分析からみた武器の社会的価値

#### 第8章 古墳時代における武装集団の事例的研究 ～宮崎県島内地下式横穴墓群の分析～

#### 第9章 古墳時代中期社会の構造的把握

#### 第10章 武人埴輪からみた古墳時代の武装集団モデル

#### 第11章 古墳時代の軍事組織

#### 第12章 戦争・国家・軍事組織の発生に関する理論的考察

#### 終 章

本論文の構成は、時間軸として弥生時代と古墳時代とに分けて研究を進め、第1章から第4章は弥生時代を、第5章から第11章は古墳時代を取り扱う。また、弥生時代・古墳時代それぞれの戦闘形態の復元を最初に行い、各時代の武装集団・軍事組織像を復元・推論していくと

いう共通の方向性で議論を進める。

検討方法は、最初に個別の武器の種類やその使用方法といった、姿や形でとらえることができる具象的な現象について取り扱い、次いで、それら武器に付与された価値や儀礼といった社会的な背景など、次第に研究対象の象徴度を高めていき、最後に軍事組織の変遷や戦争の開始といった高度に象徴的な現象に関して、理論的な位置づけを試みるものである。

もう少し詳細に論文の流れを記しておく、時間軸の設定として第1章から第4章では弥生時代を、第5章から第11章では古墳時代を取り扱うこととし、考察の対象は、それぞれ具象的事象（武器の種類や使用方法、戦闘形態）から象徴的事象（武器の社会的価値、武装集団原理）へと考察を深化させていく構成で論述を進める。

この基本的な構成に従い、第1章では、武器の殺傷痕跡が残る殺傷人骨を主な資料として、弥生時代の武器の使用方法を復元し、ここから弥生時代の戦闘の方法や技術を明らかにする。第2章では、学史上で防御集落として説明されることの多かった環濠集落を取り上げ、環濠集落の変遷や構造などについて再検討を行い、集落間の戦乱が恒常的であるかのようなイメージとしての従来の弥生時代の戦争論について見直しを行う。

第3章では、研究の対象を武器の社会的価値や武装集団原理といった象徴的な事象に広げ、武器の副葬や集落における武器保有の地域差、鉄製武器の生産といった現象の社会的な背景などを探り、続く第4章において、具体的な弥生時代の軍事組織像を提示する。

第5章以下では時間軸を古墳時代に移し、同じく具象的な事象から次第に象徴的な思考へと考察を深めていくが、古墳時代においては第1章で検討したような、武器の具体的な使用方法を示す良好な同時代資料（殺傷人骨など）が少ない。そのため、古墳時代の武器の実用的な使用方法を明らかにするために、第5章では『日本書紀』に記される武器・戦闘記述を分析し、これを実際の武器組成や防御施設のあり方から資料批判を行った上で、古墳時代の具体的な戦闘方法を復元する。

第6章と第7章では、武器を用いた社会的な背景や価値体系といった象徴的な事象を考察するために、甲冑副葬の類型化や、副葬品の配列方法の分類などを通じて、様々な角度から武器の副葬事例を検討する。そして葬送儀礼の中における武器の扱われ方を考察し、武器に付与された社会的な価値体系などを明らかにする。

第8章では古墳時代における武装集団の事例研究として、宮崎県島内地下式横穴墓群を詳細に検討し、古墳時代における武器を所有した集団の具体像を提示し、この研究成果を受け第9章において古墳時代中期における軍事組織の構造を分析し、続く第10章においては武人埴輪

を分析することで、古墳時代後期における軍事組織の階層構造を明らかにする。そして第 11 章において、具体的な古墳時代の軍事組織像や、その変遷の画期などを提示する。

第 12 章では、これまでの分析で明らかにした弥生時代と古墳時代の戦闘や軍事組織を理論的に整理し、終章において歴史的な事象における軍事組織と社会との関係や、戦争の開始について総括する。



## 第1章 殺傷人骨の分析による弥生時代の戦闘戦術



## 第1章 殺傷人骨の分析による弥生時代の戦闘戦術

### はじめに

弥生時代は日本の歴史上において武器が普遍的に出土するようになる時代である。これらの武器が戦闘用の道具として実際に用いられた場面とはどのようなものであったのだろうか。

本章では、弥生時代の具体的な戦闘の方法を明らかにするために、武器の使用方法を検討したい。手順として最初に、弥生時代における武器の種類・組成から、弥生時代の全体的な武装のあり方を概観する。また、この時代には同時代における対人殺傷の実例を示す“殺傷人骨”という良好な資料が存在しているため、殺傷人骨に残る武器の使用痕跡から弥生時代の刀剣や弓矢がどのように使用されたのかを分析し、弥生時代の具体的な戦闘像について考察する。

### 第1節 研究史と研究の方法

殺傷人骨とは道具(武器)により人間に対して行われた殺傷・加害行為により生じたもので、武器と殺傷行為の関係により生じた痕跡、と言い換えることができる。殺傷人骨も遺跡から出土する以上、考古資料の一部といえるが、古人骨を研究対象とする形質人類学の主な資料でもある。

古人骨調査そのものの研究は考古学者ではなく、形質人類学者に依存することが多かったため、弥生時代の戦闘に関しても、これまで、佐原真(佐原 1979)・松木武彦(松木 1989)など武器(考古学)からのアプローチと、金関丈夫(金関 1951)・中橋孝博(中橋 1999)など古人骨(形質人類学)からとの両面から研究が進められてきた。

これに対し、橋口達也は武器と殺傷人骨とを正面から取り扱い、研究を大きく進歩させた(橋口 1995)。だが、殺傷人骨も詳細にみていくと、それが極めて多様であることがわかる。したがって、その分析と評価にはまだまだ多くの検討が残されているといえるであろう。

具体的な課題の一つは、殺傷人骨と武器との有機的な関係、それがどのような行為によって殺傷されたかの目的や意図を復元し、殺傷行為という人間行動そのものを解明することである。こういった課題に対し、本章では考古学サイドからの分析を試みるが、その方法としては考古学的な型式学的方法を援用し遺構と遺物、特に武器と人骨との関係を検討したい。型式学的方法

法とは主に以下のようなものである。

通常、考古資料は様々な行動の結果として一定の産物・痕跡・関係を生む。しかし、個々の物的特徴は千差万別で殺傷人骨と一口にいても右腕に切り傷があるもの、寛骨に刺し傷があるもの、など殺傷の状況は極めて多様である。

一方、そうした個別性を超えた共通の特徴もある。刺突具で刺され嵌入しているもの、利器によって斬られたもの、鈍器によって殴られたもの、などの集合である。

考古資料とは、このような特殊と普遍の統一物であり、機能・役割などの共通性によって分類された概念が型式の設定である（近藤（義郎）1976）。特に“型式”として事象を抽象する場合には、物質的な痕跡から過去の人々の行為を復原することが極めて重要な課題であるから（横山 1985）、類似した殺傷状況や人骨の解剖学的特徴に基づいて、使用された武器を想定し、さらにそれを基礎として人間の行動や殺傷状況を復原するといった手法が大きな意味を持つてくる。

さて、このようにして考古事実と、解剖学的な諸事実に基づいて資料を型式化した後には、これら諸型式がどのような人間行動によるものかを考えなければならない。それらの課題はまた人間の行動に関する他の諸学科、文化人類学などの事例を参照にして考察したい。

考古学的な型式分類のみでは、静的な物的結果のみを抽出するという限界があり、それらの生起過程や形成活動に関しては、文化人類学などとの比較検討において初めて、現実的な仮説を提示することができるからである。

## 第2節 弥生時代の武装及び武器の機能区分

本題に入る前に弥生時代の武装の全体像を概観し、次いで対人殺傷の道具となる個々の武器の機能を考察する。ただし、本章では弥生時代における武器の実用面を考察するため、刃部が鈍化し実用機能を失った祭器形武器については割愛する。

弥生時代においては土器や銅鐸などに武器を持った人物が描かれている絵画資料が存在する。このうち、武器（武装）に関するものは概ね同一のモチーフで描かれている。それは“戈と盾とをもった人物”である（図1）。

佐賀県川寄吉原遺跡の銅鐸形土製品には正面を向いた顔が表現され、腰に剣のようなものを帯び、右手に柄の短い戈、左手に小さな持盾と思われるものを持つ人物が描かれている（高島

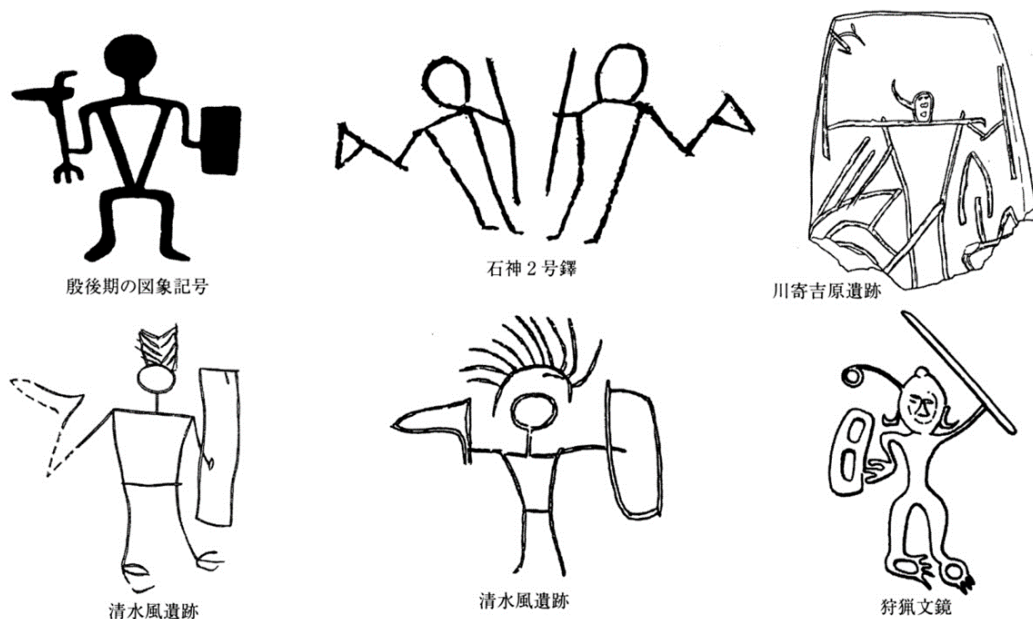


図 1 土器等に描かれた戈と盾の人物像

1980)。奈良県清水風遺跡の絵画土器には二人の人物が戈と盾を持ち、頭部に羽根のような飾り物を付けており（藤田（三郎）1999）、同様の戈と盾とのモチーフは奈良県石神 2 号鐙にも描かれている。更に古墳時代前期の狩猟文鏡にも同様のモチーフがあるが、武器の時代（時期）性を反映してか戈ではなく長剣と盾を持っている。

これらの資料は、絵画土器に記されたというあり方から具体的な戦闘の場というよりは“模擬戦”などの場、もしくは祭礼などの儀礼の場を示すとする見解が強い（桑原 1997）。描かれた描写が神話の一種であるならば、彼らは戈や盾といった武器を持つ戦士姿の神々であるかもしれない。この“戈と盾”というモチーフ（漢文で表現するところの“干戈”）は中国大陆では既に殷の時代からあり、弥生時代の図案を中国大陆からの影響と考える深澤芳樹の論考がある（深澤 1998）。更に、このモチーフを“方相氏”や道教と結び付ける考え方も指摘されている（春成 2007、黒崎 2015）。

絵画土器で認められる戦士像の儀礼的な要素については、上記のように既に多くのことが指摘されているのであるが、武器との関連で考察すると、絵画土器でみられるような儀礼などの特殊な場面における武装のモチーフは、弥生人が自らの武器に抱いていた思想の断片を表現しているといえるだろう。それは儀礼やハレの場など、人々が見守る重要な場面において弥生人自身が抱いた正式でフォーマルな武装が“戈と盾の戦士”だったと思われるのである。また、深澤の論考にあるように、これらの武装のルーツは大陸に求められるが、これは武器が渡来す

る段階で武装・儀礼・闘争思想・象徴などが一体となってもたらされたためだと考えられる。

一方、3世紀末に書かれたとされる文献資料、『魏志』倭人伝には「兵用矛盾木弓、木弓短下長上、竹箭或鐵鏃或骨鏃」という一文がある（太田（亮）1928）。『魏志』倭人伝の文章の多くは「魏略」などの文献を基としていていると考えられているが、『漢書』地理志粵地条には「兵則矛盾刀木弓弩竹矢、或骨爲鏃」という類似した一文があり、この箇所については『漢書』に拠ったとも思われる（石原（編訳）1985）。しかし同時に、『漢書』において見られる「刀」や「弩」が削られ、「鐵鏃」が加わっているなど『魏志』倭人伝の記述者は慎重に語句を選んでいる。結果として、現実の考古資料に近い情報が記されており、弓を説明した「木弓短下長上」などは和弓の特徴的な使用法で銅鐸絵画にも描かれている射法である（後藤 1937b）。

これらの記述がある程度の事実を反映していれば、彼らがみた倭人は長兵と盾、弓矢で武装した戦士像が浮かび上がってくる。出土遺物が多い剣は、普遍的な護身用であったためか、わざわざ特記するほどのことは無かったのかもしれない。

以上、弥生時代の全体的な武装について指摘したので、次いで個々の武器の機能についてみていこう。武器の機能区分については藤尾慎一郎の検討に詳しく（藤尾 1999）、それを参照して先ず次の3つに区分する。

- I 至近距離戦用武器（短刀・短剣）
- II 接近戦用武器（矛、戈、劍、刀、斧）
- III 遠距離戦用武器（弓矢・投石・投弾・投槍）

## （1）劍・刀

弥生時代の劍・刀は大型のものと小型のものがある。実用面からみた場合、大型と小型は機能的差異が考えられるため、区別しておきたい。

先ず、大型の劍・刀としては主として鉄製のものがある。機能的には諸刃造の劍が“突く”、片刃造の刀は“切る”であり、主に接近戦用の武器となる。実例では劍身 40 cm以上の鉄劍、70 cm以上の素環頭鉄刀などが知られている。

これら大型の刀劍類は、ほぼ後期以降の鉄製品を中心とした希少な存在であり、青銅製、石製などの大部分は小型のものである。出土例の多い石劍をみると、柄の部分も寸法が短く片手で持つ“短劍”である。

近畿地方では、かつて打製石槍と呼ばれた石器があり、その機能としては劍、槍、戈などが考えられているが、柄が伴わない限りその断定は困難である。しかし、幅 2.5～5 cm、長 12 cm

以上のものは、大阪府瓜生堂遺跡出土の樹皮を巻いた例などから短剣であると判断されている（禰亘田 1986）。

これら短剣の機能は、大刀・剣とは異なって“突く”“刺す”が想定できる。大刀や剣ではあまり近すぎると切れないが、取っ組み合いで刀剣を使用するなら寸法が短い短剣が有利である。すなわち、短剣は機能的にみれば肉薄戦闘用（至近距離戦用）なのである（註 4）。

## （2）矛・戈

矛・戈は長い柄を持つ。そのため、ある程度の距離を保つ接近戦での威力は大きい。矛は機能的には槍と同じく“突き刺す”ものである（槍との違いは柄の着装方法）。戈は柄に対し直角、ないしは斜めに装着するため“薙ぐ”“引っ掛ける”“振り下ろす”機能が想定できる。

## （3）弓矢

弥生時代の弓は全て自然木を利用した丸木弓である。矢の考古資料は鏃が主であり石鏃・鉄鏃・銅鏃・骨鏃などがある。様々な形態があるが、基本的な機能としては“射通す”“射切る”“射砕く”が考えられる。狩猟具か武器かの識別について佐原真・松木武彦は、打製石鏃のうち重量 2 g・全長 30 mm 以上のものを“戦闘石鏃”（＝武器）とする（佐原 1964、松木 1989）。しかし、人骨に刺さっているなど明らかに対人殺傷用に使用されている鏃に極めて小型のものがあ、単純に区分することはできない。

# 第 3 節 殺傷人骨の分類と評価

## 1. 殺傷人骨の分類

殺傷人骨、広義には武器が出土する“戦士の墓”は 1986 年に橋口達也が集成した段階で 45 例（橋口 1986）、10 年後に藤尾慎一郎が再集成した段階では 101 例が知られている（藤尾 1996）。とはいえ残存状況が良好なものは少なく、大部分は剣・鏃の切先類のみであって「戦死か刑死か副葬か」（松木 2000）議論の分かれるところである。したがって本論では確実な、又は可能性が高い対人殺傷例を取り上げ、その対人殺傷方法の分類を行い、その他の武器出土の墓（いわゆる“戦士の墓”）については必要に応じて触れる、ことを基本方針とした。

別表（図 2、表 1）にみる如く確実な、又は可能性が高い殺傷人骨は約 40 数例を挙げるこ

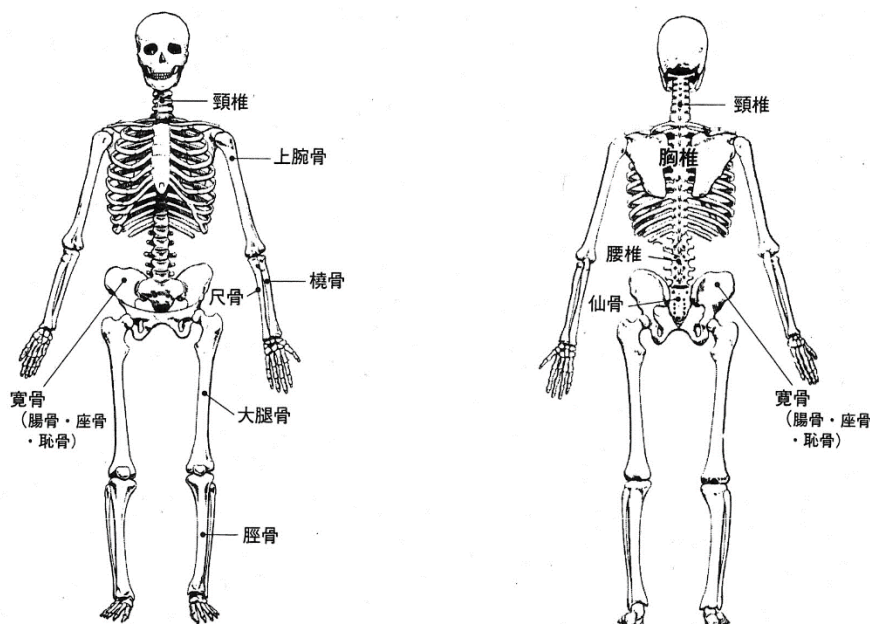


図 2 登場する主な骨格部位

表 1 弥生時代の殺傷人骨一覧

所在地	遺跡名	遺構名・性別	時期	殺傷具	殺傷状況(出土状況)	殺傷方法(復元)	文 献	タイプ		
福岡県	新町	24号	♂	早・前期	柳葉式石鏃2	左大腿骨 嵌入	後方から弓矢で射られる	志摩町1987	Ⅲa	
〃	〃	永岡	9号	♂	中期・前	利器(鋭利な刃物?)	右腕に骨折治癒例	〃	Ⅱb	
〃	〃	永岡	10号	♂	中期・中	〃	眼窩上・右腕に外傷	〃	Ⅱb	
〃	〃	永岡	32号	♂	中期・前	〃	左橈骨骨折	〃	Ⅱb	
〃	〃	永岡	95号	♂	中期・前	銅剣	左腸骨に嵌入・首欠	〃	Ⅱb	
〃	〃	永岡	100号	♂	中期・前	銅剣・石剣	左仙骨に嵌入(銅剣)	〃	I	
〃	限・西小田	2-K-491	♂	中期・後	利器	頭長左に傷	後方や下から斜上へ	〃	I	
〃	限・西小田	3-K-16 (♂)	中期・後	利器	第5頸椎以上が欠落	首狩	左上方から剣で斬りつける	筑紫野市1993	Ⅱa	
〃	限・西小田	3-K-40 (♂)	中期・後	利器	左眼窩上縁に切傷・左尺骨骨折	斬られる, 及び殴打	〃	Ⅱc		
〃	限・西小田	3-K-55	♂	中期・前	(銅剣左寛骨臼内に存)	第2頸椎以上が欠落	首狩	〃	Ⅱc	
〃	限・西小田	6-K-77	♂	中期・後	〃	頭のみ小児棺内に埋葬	首狩	〃	Ⅱc	
〃	限・西小田	6-K-101	♂	中期・後	〃	首なし	首狩	〃	Ⅱc	
〃	限・西小田	10-K-159	♂	中期・後	鈍器	前頭骨陥没	(生前に)鈍器により殴打	〃	Ⅱb	
〃	限・西小田	10-K-215	♀	後期	〃	左尺骨骨折	利器による殴打	〃	Ⅱb	
〃	限・西小田	10-K-218	♂	中期・後	石鏃5, 及び銅剣恥骨に嵌入	腰・下肢にも傷多数	矢を射こみ, 石剣でとどめ	〃	Ⅳ	
〃	限・西小田	10-K-315	♂	中期・前	〃	頭なし・左大腿骨に傷	首狩	〃	Ⅱc	
〃	坂崎東畑	1号	中期・前	骨鏃, 石鏃	左右大腿骨	下半身を射られる	〃	福岡県1997	Ⅲa	
〃	横隈孤塚	T-7	中期	石剣2, 又は利器	左尺骨切傷, 頭蓋離断?	刀剣による殺傷・首狩?	〃	小郡市2001	I・Ⅱ	
〃	横隈孤塚	K-157	♂	後期	利器(刀剣類?)	大腿骨大きく削られる	刀剣による殺傷・首狩	〃	Ⅱa	
〃	スダレ	K-3	♂	中期・中	石剣	胸椎に嵌入	背後から逆手により殺傷	〃	穂波町1976	I
〃	カルメル修道院	ST-07	中期・後	〃	首だけの埋葬	首だけの埋葬	首狩	〃	福岡県1992	Ⅱc
〃	高木	D-2	中期・初	石剣・磨鏃・打鏃	頭下部と腹部に剣・鏃	矢を射込み, 剣でとどめ	〃	福岡県1977	Ⅳ	
佐賀県	吉野ヶ里	SJ0329	中期・中	石鏃10	頭部なし・手首と肩に傷	刀剣による殺傷・首狩	〃	佐賀県1992	Ⅱ	
〃	吉野ヶ里	SJ0312	中期・中	鉄鏃	骨盤付近より出土	多数の矢を射られる	〃	〃	Ⅲc	
〃	三津永田	32号	後期	鉄鏃	右大腿骨外側	下肢を射られる	〃	橋口1995	Ⅲa	
〃	高志神社	SJ016	中期・中	銅剣1・石剣1・石鏃1	頭骨なし	首狩?	〃	千代田町2000	Ⅱc	
〃	高志神社	SJ018	中期・中	銅剣1・石剣1・石鏃1	左寛骨に銅剣・後方左から嵌入	弓矢, 及び後方より短剣	〃	〃	Ⅳ	
長崎県	根獅子	2号	♀	初期	銅剣	頭頂部に嵌入	〃	〃	I?	
〃	根獅子	〃	〃	〃	〃	銅鏃・戈説あり	〃	〃	Ⅱb	
〃	沖ノ原	〃	〃	〃	〃	利器による殴打	〃	〃	Ⅲa	
〃	有喜貝塚	三号	♂	前期	石鏃	右側面から射込まれる	〃	〃	Ⅲb	
〃	三井ヶ浜	124号	♂	前期	打鏃11, 牙鏃2	胸に射られる	〃	〃	Ⅲc	
山口県	青谷上寺地	110点(10体~)	後期	銅鏃・金属刀剣類	銅鏃の嵌入・斬創・突創	多数の矢を射られる	〃	〃	Ⅱ・Ⅳ	
鳥取県	新方	1号	前期	打製石鏃1	胸~腰に石鏃	腰上部を射られる	〃	〃	Ⅲb	
〃	新方	3号	前期	打製石鏃17(胸部多)	様々な角度から全身	多数の矢を射られる	〃	〃	Ⅲc	
〃	玉津田中	〃	〃	〃	〃	腹を刺される	〃	〃	I	
大阪府	勝部	2号	中期	打製石鏃5	胸~腰部から	多数の矢を射られる	〃	〃	Ⅲc	
〃	勝部	3号	中期	打製石剣	腰部	背中を右後方から刺す	〃	〃	I	
〃	亀井	1号・1主体	♂	中期・後	サヌカイト片	頭骨	〃	〃	Ⅲb	
〃	亀井	1号・6主体	♂	中期・後	打製石鏃1	胸部から	胸に射られる	〃	Ⅲb	
〃	亀井	2号・2主体	♂	中期・後	打製石鏃1	胸部から	胸に射られる	〃	Ⅲb	
〃	亀井	2号・4主体	♂	中期・後	打製石鏃1	胸部から	胸に射られる	〃	Ⅲb	
〃	山賀	9号	中期	石鏃4, サヌカイト1	肩~腰部から	多数の矢を射られる	〃	〃	Ⅲc	
〃	瓜生堂	6号	中期	磨製石鏃1	頭部から	首を射られる	〃	〃	Ⅲb	
〃	巨摩庵寺	2号・2主体	♂	中期・後	石鏃1	頭部から	首を射られる	〃	Ⅲb	
奈良県	四分	3号	♀	中期・後	石鏃	胸に射られる	〃	〃	Ⅲb	
〃	四分	4号	♂	中期・後	刀剣類	全身に4~5箇所	〃	〃	Ⅱa	



ができるが、前節の武器の機能的区分からこの殺傷例は以下のように分けることができるであろう。

- I 至近距離戦用武器（短刀・短剣）による殺傷
- II 接近戦用武器（矛・戈・剣・刀・斧）による殺傷
- III 遠距離戦用武器（弓矢ほか）による殺傷
- IV 遠・近距離戦用武器の複数による殺傷

#### （1）I 至近距離戦用武器による殺傷（スダレタイプ）

至近距離戦用武器（短剣）の殺傷が想定されるものには福岡県スダレ遺跡、福岡県永岡遺跡、長崎県根獅子遺跡、大阪府勝部遺跡例の出土人骨がある。これらは剣類の切先が刺突された状況の出土であって、人骨嵌入例という物的証拠から、ほぼ確実な武器による対人殺傷である。

福岡県スダレ遺跡第3号甕棺（K3）人骨は熟年の男性（中期・中頃）、甕棺は水平に置かれ頭位を下甕にして埋葬されており、K3号人骨の右側椎弓板には凝灰岩製の石製切先が嵌入していた。この切先は長35mm・幅22mmで全形は不明ながら、石剣の切先と考えられる。切先の主軸は前頭・矢状・水平面それぞれ10°・45°・45°の角度をなし、剣面は被害者の腹背におおよそ向いている。このような刺突方向からみて、加害者は被害者の背後から殺傷行為に及んだものと判断されているが、殺傷行為が首の付け根から胸椎にまで達しようとする場合、皮下組織・背筋群など約7.5cmに亘って貫かれなければならないという解剖学的所見があるため、背後からの「右利き」の逆手に振り上げた一撃」が考えられている（永井ほか1976）。

福岡県永岡遺跡の95号甕棺（SK95）は長方形の墓壇に納められた合わせ口の甕棺である（中期・前半）。発掘時には上甕の上面が陥没していたが棺内からは遺存状態の良くない熟年男性の人骨が検出された。この右腸骨稜、上前腸棘より約3cmの位置に残存長12mmの銅剣切先が嵌入している。切先は右外側やや下方より斜め上方へと突き刺されており、その先端を腸骨内面でわずかに覗かせている。

同じく永岡遺跡の100号甕棺（SK100）も長方形の墓壇に納められた合わせ口の甕棺で、検出された人骨は若年男性、比較的遺存状態が良い（中期・前半）。棺内からは銅剣と石剣が検出されたが、残存長53mmの銅剣切先が左仙腸関章部に後方より嵌入した状況であった。この位置的関係から解剖学的には正中中部より約5cm左側、第一後仙骨孔の高さでほぼ矢状方向に、後方やや下から斜め上へと貫かれ、先端部だけが折れ残った状況であると考えられている（中橋1990）。

長崎県根獅子遺跡の人骨は1933年と1941年に発掘され、再埋葬されたものを1950年に京都大学の学術調査によって再発掘されたものである。このうち第2号人骨は熟年女性、右側前頭骨外面に径8mm・幅4mm・深1mmの陥凹が見られ、その底に青錆化した金属の断面が確認された（中期・初頭）。X線写真によると残存部は長径5.5mm・短径2mmの菱形をしている。残存部が先端のごく一部であるため全体形の復元は難しく、最初に調査にあたった金関丈夫は銅鏃説（金関 1951）、橋口達也は銅剣説（橋口 1986）、春成秀爾は殺傷された位置から銅戈の可能性も指摘している（春成 1990b）。

大阪府勝部遺跡の第2区墓域・第3号墓は底板長170.5cm・幅52cmの木棺墓、棺の上半が削平されているため蓋板は

残っていなかった（中期）。人骨は頭骸骨のみ保存状態が悪いが、胴体部・脚部は比較的残りの良い仰臥伸展葬で検出された。肋骨は胸部が脚部の方へ押されたのか腹部を覆っており、その肋骨、及び腰骨に食い込むように長17cm・幅3.5cmのサヌカイト製石剣（石槍）が存在していた（中期）。石剣先端はわずかに欠損し、その下部にも脊骨と思われる骨片が認められるので、背中を右後方から腰にかけて突き刺したような状況にある（豊中市 1972）。なお、筆者が実見した勝部遺跡の木棺墓・土壇墓はアクリルエマルジョンによって人骨・土・遺物ごと固められている。

以上、北部九州・近畿地方において認められた刺突用具による殺傷、その確実な嵌入例では4例中の3例において“背後からの至近距離殺傷”が想定できた。使用される刺突具としては短剣類が中心であったと考えられる。したがって、スダレタイプの特徴としては“短剣による背後からの殺傷”とまとめることが適切であろう（図3）。他の人骨に伴わない切先出土例につ

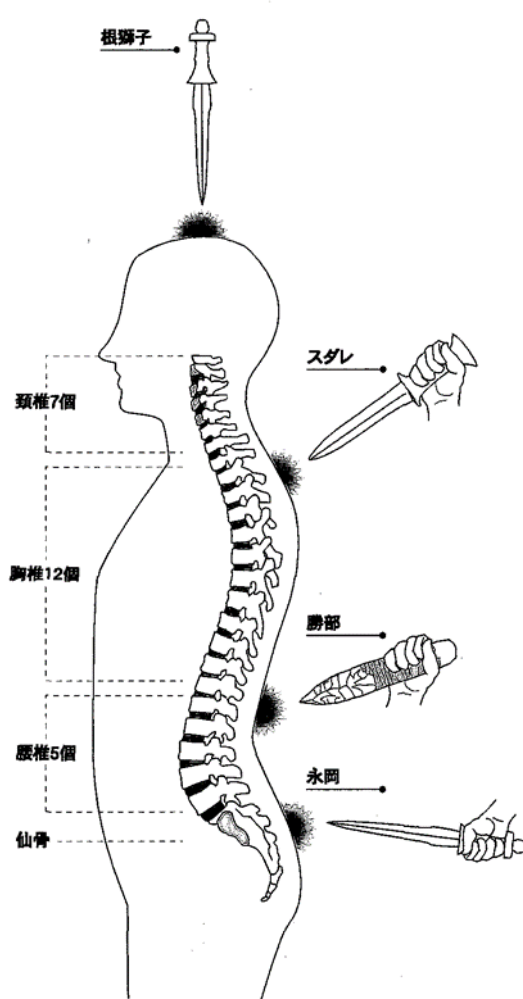


図3 I（スダレ）タイプ殺傷模式図

いての詳細は不明であるが、上の確実な嵌入例から判断すると、一部の副葬例（福島（日出海）1998）を除いて背後からの至近距離攻撃である可能性が高い。

それら短剣切先のみが出土した“戦士の墓”を類例に含めると、スダレタイプは北部九州における前期～中期において最も盛んであり（藤尾 1996）、九州以外では愛媛県持田 3 丁目遺跡（前期）、岡山県四辻土壙墓（中期）など中・四国・近畿地方でも数例を認めることができる。

## （2）Ⅱ 接近戦用武器による殺傷（狐塚 K157 タイプ・永岡 K10 タイプ・カルメルタイプ）

刀剣などによる接近戦用武器による殺傷は極めて多岐にのぼるためⅡa（狐塚）・Ⅱb（永岡 K10）・Ⅱc（カルメル）の各タイプに細分しておく。

Ⅱa の狐塚タイプは福岡県横隈狐塚遺跡 K157 例を標識とするもので、接近戦用武器（刀・剣・矛・戈）による殺傷である。具体的には、刀剣など利器による切傷として残る。

横隈狐塚 K157 号人骨は成人男性（後期）、四肢骨・椎骨・肋骨などほぼ全身の骨が残存し、保存状態も良好であったにもかかわらず、頭骨及び第 4 頸椎から上が欠損している。また、第 5 頸椎と左大腿骨に鋭い切断面がある。特に大腿骨の骨体遠位 3 分の 1 程外側面には、緻密質を大きく削り取った傷があり、この極めて鋭い切断面には鋭利な金属器（恐らく鉄刀）による殺傷が想定できる（松下 1985・橋口 1995）。

Ⅱb の永岡 K10 タイプはこれとは異なり、利器によって殴られた痕跡を残すものである。福岡県永岡遺跡 K9 号を初め、同 10 号・32 号、福岡県隈・西小田 10 地点 K218 号などの出土人骨に骨折痕が認められる（中橋 1997）。骨折例のみでは殺傷によるものか否かは断定しがたいものの、上記のような腕の外側に骨の折れた傷は、正面の敵が振り下ろしてきた武器を防ごうとした可能性があるという解剖学的所見（碓ほか 1997）から殺傷例の細分型式としておく。

永岡 K9 号人骨は熟年男性、右第 2 中手骨に強度の変形治癒骨折が認められており、手根関節面から約 15 mm の位置で骨幹が下方に屈曲し遠位部の断面には鋭利な破面をみせて突出している。永岡遺跡 K10 号人骨は熟年男性、右橈骨遠位部に骨折痕がみられ、橈骨手根関節面は手背側に傾斜しており右眼窩内半部、眼窩上切痕近くから内側上方へも約 15 mm の長さにわたってゆるい S 字状の傷痕が認められている。

Ⅱc のカルメルタイプは利器によって首を切断する、いわゆる首狩例である。福岡県カルメル修道院内遺跡（中期後半）では、ST07 号墓において首だけの埋葬がみられた。福岡県隈・西小田遺跡 6 地点 K77 号墓でも頭のみを小児棺に埋葬していたが、逆に、同遺跡 3 地点 K16 号人骨は第 5 頸椎以上を欠いている。これらの確認できる頸椎はほとんど第 3 頸椎より下位のも

ので占められているが、解剖学的には第 3～5 頸椎あたりがいわゆる首であるため、首を切断したものと判断されている（中橋 1999）。

以上のような接近戦用武器（利器・鈍器類）による殺傷は切傷などの痕跡として残るため、人骨残存の良好な所において発見されることが多い。そのため、分布としては見かけ上の偏りが著しい。福岡県横隈狐塚遺跡を初めとする、福岡県隈・西小田遺跡、福岡県永岡遺跡などの福岡県中南部（中期後半）に多く、山陰の鳥取県青谷上寺地遺跡（後期）で集中的に検出されるほか、奈良県四分遺跡（中期後半）などにおいても認められている。

### （3）Ⅲ 遠距離戦用武器による殺傷（新町タイプ・亀井タイプ・新方タイプ）

遠距離戦用武器（弓矢）の確実な類例は福岡県新町遺跡、長崎県沖ノ原遺跡、福岡県塚崎東畑遺跡、佐賀県三津永田遺跡と少ないが、弓矢による殺傷例については次のように細分しておきたい。

Ⅲa 新町 24 号タイプ 少数（5 以下の鏃）の弓矢による下肢（腹・腰）への殺傷

Ⅲb 亀井 2 号タイプ 少数（5 以下の鏃）の弓矢による上肢（胸）への殺傷

Ⅲc 新方 3 号タイプ 多数（5 以上の鏃）の弓矢による殺傷

Ⅲa の指標である福岡県新町遺跡 24 号人骨には柳葉式磨製石鏃が嵌入していた（早期）。この墓壇は長 173 cm・幅 98 cmの規模で、頭部には水銀朱が塗られ、墓壇の東北外側には夜臼式の小壺が副葬されている。左大腿骨頭部に嵌入していた磨製石鏃は、刺突時の衝撃で先端が欠損しており、切先を欠失した長 16 mmの破片が右第 1 中手骨の下、左橈骨の先端近くで先を左下方に向けて、それに続く基部を欠失した長 52 mmの破片が下肢骨下部で先を下方に向けて出土している。このことから射角は後方・斜め上から前下方へと射込まれており、厚い大殿筋を刺し貫いて大腿骨に達したものの、その際、体内で 3 片に割れたものと考えられている（中橋ほか 1987）。

鏃が人骨に嵌入した例は珍しく長崎県沖ノ原人骨、福岡県塚崎東畑 1 号、佐賀県三津永田 32 号がほぼ確実な対人殺傷例である。沖ノ原人骨は壮年の男性（前期）、第 2 腰椎の椎体右側面で石鏃 1 個が水平に嵌入している。この状況から解剖学的には右側面から射込まれ、側腹壁、肝臓、腎臓を貫き、大腰筋を通して椎体に達したものと考えられる（内藤 1974）。

三津永田 32 号人骨の甕棺出土人骨には、人骨とともに骨に嵌入した鉄鏃が出土している（後期）。鏃には骨の小片が付着するのみで、どの位置に突き刺さっていたものかは決めがたい。ただ、鏃に付着する骨片の分析から右大腿骨外側顆前上方の外側面に、向かって左の斜上方向よ

り射込まれた可能性が、更に右腸骨にも、向かって右前方の斜上方向より射込まれた鉄鏃の刺突痕も認められる（橋口 1995）。

これら殺傷人骨の共通特徴としては、腰部以下に遠距離戦用武器（鏃）が嵌入し、背後、もしくは側面から射込まれている状況が多いことが挙げられる。

Ⅲb の代表である大阪府亀井遺跡では、KM-H1 トレンチから中期末の方形周溝墓が 2 基検出されているが、埋葬主体部にある人骨にはいずれも石鏃が伴っていた。1 号墳 1 号主体は組合式木棺墓、身長 157～8 cm の男性には副葬品がなかったが、左側頭骨にサヌカイト破片（石鏃？）が突き刺さった状態で検出された。1 号墳 6 号主体では組合式木棺に 20 代後半～30 代前半の人骨が確認された。保存状態は大変悪かったが、右胸に相当する位置から石鏃 1 が出土している。2 号墳 2 号主体も木棺墓、身長 165 cm の 40 代男性が上向きの伸屈葬で埋葬されており、胸部の上位から石鏃 1 が出土している。2 号墳 4 号主体も木棺墓、身長 165～6 cm の男性人骨は土圧で押しつぶされていたが、同じく胸部から石鏃が検出されている。

これらの特徴的な事柄として、遠距離戦用武器（鏃）が上肢、特に胸部から出土していることが挙げられる。直接的な嵌入例はないものの、1 号主体部では頭骨にサヌカイト破片が突き刺さっており、2 号主体部の石鏃先端部分は欠損している、などから考えて人体に対し殺傷を加えられたものと考えたい。石鏃などは骨格まで達することは稀なので骨に嵌入しなかったであろう。

類例としては、他に大阪府瓜生堂遺跡 6 号（中期）、大阪府巨摩廃寺 2 号（後期）、奈良県四分遺跡 3 号（中期末）などがあり、先にみたⅢa（新町）タイプとの相違は胸・頸・腕など上半身の位置で鏃が出土することが多いことにある。

Ⅲc の標識となる兵庫県新方遺跡は、1997 年と 99 年の調査において 6 体（1 体は合葬）の弥生前期人骨が発見され、うち 5 体に石鏃が伴っていた。中でも 3 号人骨は全身にわたって 17 基の石鏃が検出されている。

3 号人骨は仰向けの伸展葬で、西側微高地の溝状遺構内にある木棺墓から検出されている。人骨の残存状態は良好ではなく胴部骨格は痕跡が残る程度、手骨も全て消失しているものの、その他の形態特徴から熟年男性が想定されている。人骨周辺からは 17 基もの石鏃が検出されており、その位置は胸～胴に相当する地点が多く、肩甲骨や上腕骨、あるいは頭骨に添うように出土したのも数個あった。これら石鏃の方向は一定しないため様々な角度から、恐らく何人もの手によって弓矢を射込まれるといった加撃状況が想定されている（片山 1998）。

類例としては、山口県土井ヶ浜遺跡 124 号（打製石鏃 11・牙鏃 2、前期：図 4）、大阪府山賀

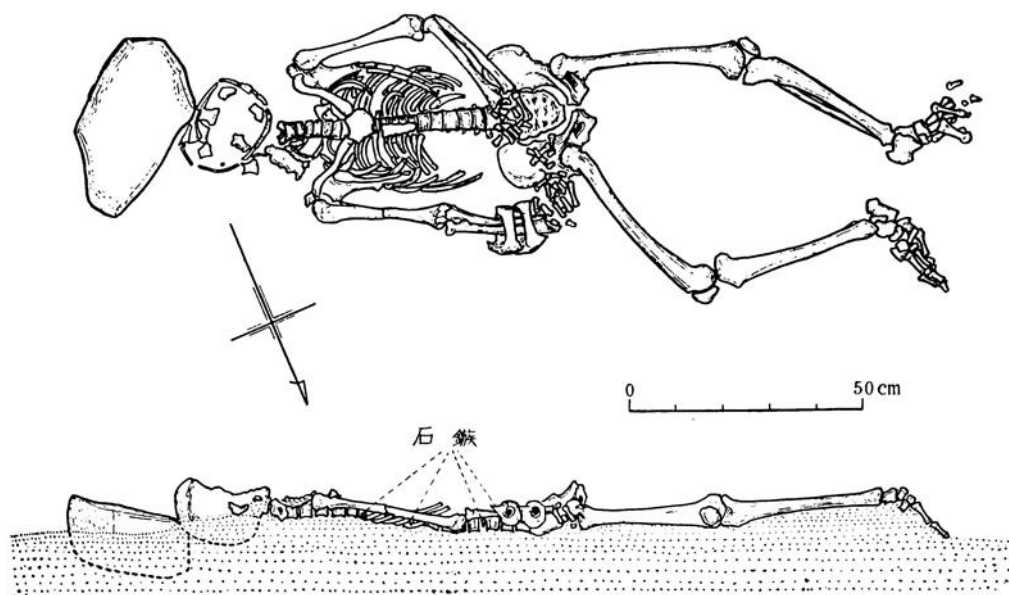


図 4 IIIc (新方) タイプ検出状況 (土井ヶ浜遺跡 124 号人骨)

遺跡 9 号 (打製石鏃 4・サヌカイト片 1、前期)、大阪府勝部遺跡 2 号 (石鏃 5、中期) において人骨と遠距離専用武器 (鏃) が共伴している。いずれも人骨に嵌入していないが、胸部などを中心に集中して出土しており、“何人もの手によって弓矢を射込まれる”といった加撃状況は同前である。

また、石鏃のみが検出された“戦士の墓”を含めると、福岡県三国の鼻遺跡 6 号木棺墓、佐賀県吉野ヶ里遺跡 SJ0312、島根県友田遺跡 SK18、岡山県清水谷遺跡木棺墓、兵庫県駄坂・船隠 9 号墳、大阪府雁屋遺跡 1 号周溝墓、京都府豊岡 1 号墓なども墓坑底面周辺から、胸・腰部に集中的、かつ鏃の方向はばらばらで出土しており、多くは (実用のショックで) 先端を欠損している、などから人体へ加撃した新方タイプである可能性が高い。

#### (4) IV 遠・近距離戦用武器の複数による殺傷 (隈・西小田 K-218 タイプ)

遠距離戦用武器 (鏃) と至近・近距離戦用武器 (剣ほか) の両方によって加撃を受けたものである。福岡県隈・西小田遺跡 10 地点 K218 号人骨を標識とする。隈・西小田遺跡群では甕棺墓数 1,550、人骨 429 という大規模な弥生時代の墓地群が検出されているが、特徴的な事柄として激しい戦闘があったことを窺わせるような殺傷人骨が多い。

その中で隈・西小田 10 地点 K218 号人骨 (熟年男性・中期後半) は特に激しい殺傷例の代表である。頭部及び第 1～第 4 頸椎がなく右骨盤恥骨部には銅剣先が刺入・残存し、その恥骨下肢には半円形の刺入孔がみられる。右大腿骨には前方よりの円形刺入口、中央前内側には長さ

10 mmに及ぶ浅い刀傷、左大腿骨中央前内側に刺入痕、右脛骨近位部前面に 18×4 mmの刺入口、中央前面に浅い刀傷、右脛骨近位部に前面より後側上方へ向かう深さ約 30 mmの穿孔痕、左脛骨近位部前面内側面に 7×6×9 mmの刺入傷痕が認められている。またこの他に 5 つの石鏃が共伴して出土している。

このような事例は希少であるが、遠距離戦用武器と近距離戦用武器が共伴して出土した人骨事例としては、福岡県高木遺跡 D12（中期）、佐賀県高志神社遺跡 SJ016（中期）などが挙げられる。

また、鳥取県青谷上寺地遺跡では KLA8 区の溝状遺構から 5,300 片を越す大量の人骨が検出されており（後期）、110 片（少なくとも 10 体分）の人骨に殺傷痕跡が確認されている。殺傷痕は刺創痕や割創痕など多様であり、受傷部は頭骨から腓骨までみられ、大部分の人骨は受傷後まもなく死亡している。人骨は男性骨が多いが女性や子供も含み、小児・成人ともに背部の創痕が多い。

この中で、No.E - 1 人骨の寛骨には水平より下方 8 度、前額面より前方 10 度、人体の左側面方向から銅鏃が嵌入しており、後部には切創痕も認められる。そのため、まず遠くから弓矢で傷を負わせて倒し、さらに近づいて斬りつけたような状況が考えられている（井上（貴央）ほか 2002）。

## 2. 対人殺傷事例の評価

形式的な分類を済ませたので、さっそく各型式の比較と評価に取り掛かろう。弥生時代の殺傷人骨も詳細にみていくと様々なタイプが確認できた。分類できたものだけでも以下のように多岐にのぼる。

- |      |          |                        |
|------|----------|------------------------|
| I    | スダレタイプ   | 短剣による至近距離（背後からの）殺傷     |
| IIa  | 横隈狐塚タイプ  | 刀剣類による近距離からの殺傷         |
| IIb  | 永岡タイプ    | 利器による殴打                |
| IIc  | カルメルタイプ  | 首の切断（首狩）               |
| IIIa | 新町タイプ    | 弓矢による下肢への殺傷（側・後背）      |
| IIIb | 亀井タイプ    | 弓矢による上肢への殺傷（正面）        |
| IIIc | 新方タイプ    | 多数の弓矢による遠距離からの殺傷       |
| IV   | 隈・西小田タイプ | 遠距離と至近・近距離からの複数武器による殺傷 |

これらは考古資料の性質上、断片的な結果としての、静的な分類にならざるを得ない。した

表 2 弥生時代の殺傷方法仮説一覧

タイプ	使用武器	具体的な殺傷方法仮説	
Ⅰ	至近距離戦用武器(短刀・短剣)	仮説①	奇襲や裏切りなどの状況で背後から近づいて殺傷した。
		仮説②	決闘や集団的な戦闘において組み打ち、逃げる敵に背後から殺傷した。
Ⅱ	接近戦用武器(矛・戈・剣・刀・斧)	仮説①	決闘など、対峙した状態で武器を使用して殺傷を行った。
		仮説②	集団間での戦闘があり、乱闘状況の中で殺傷が生じた。
		仮説③	集団戦などの諸戦闘において、敵の首を取り合った。
		仮説④	儀礼的な殺傷行為で首を切断した。
Ⅲ	遠距離戦用武器(弓矢ほか)	仮説①	集団的な戦闘中において遠距離から矢などで殺傷を受けた。
		仮説②	個人的な戦いや暗殺等の行為で弓矢による殺傷を受けた。
		仮説③	儀礼などの意図的な行為で殺傷を受けた。
Ⅳ	遠・近距離戦用武器の複数	仮説①	集団的な戦闘中において、まず矢を射込み、剣でとどめをさした。
		仮説②	個人的な戦いや暗殺等においてまず矢を射込み、剣でとどめをさした。
		仮説③	儀礼などの意図的な行為で弓矢と剣で殺傷を受けた。

がって正確な殺傷状況の復元は不可能であることを最初に記しておく。しかしながら、少なくとも各型式が生じた背景には、当時の武器の使用状況や、対人殺傷状況の差異がわずかながらでも存在したと考えるべきであろう。以下では、各型式を比較検討することで、具体的な弥生時代の対人殺傷法を浮かび上がらせていきたい(表 2)。

Ⅰ(スダレ)タイプの特徴は短剣による至近距離からの殺傷としてまとめることができた。その確実な人骨例は少ないものの、短剣切先が出土するという墓の多くも一部の副葬を除けばこの類型に属するといえるであろう。本論で扱ったⅠタイプの時期としては、弥生中期にほぼ集中しているが、短剣切先のみ出土した事例を含めると、例えば、藤尾慎一郎が集成した 101 例のうち、(数え方によっても若干異なるが)、概ね 43 例を数えることができる。このうち、41 例が北部九州に集中しており、時期的にみればⅠ期が 13 例、Ⅱ期が 15 例、Ⅲ期が 12 例、Ⅳ期が 1 例であった(藤尾 1996)。これらのことから、短剣類による殺傷が北部九州の弥生時代前半(Ⅰ～Ⅲ期)に集中していたことは間違いない。

使用された武器は概ね片手で持ち、至近距離戦闘に適した短剣である。本論でみたように、確実な嵌入例から考えると、この短剣による殺傷方法は“背後からの殺傷”の可能性が最も高かった。

上記の状況証拠から考察すると、Ⅰタイプの殺傷状況は以下の状況が考えられる。

Ⅰ－仮説① 奇襲や裏切りなどの状況で背後から近づいて殺傷した。

Ⅰ－仮説② 決闘や集団的な戦闘において組み打ち、逃げる敵に背後から殺傷した。

短剣という使用武器の性質上、個々人など、少人数を主体とする至近距離戦闘、もしくは組



討での殺傷の蓋然性が高いであろう。

ところで、具体的な考古資料でいえば、Ⅰタイプの殺傷人骨とは短剣類の殺傷痕跡以外は特に顕著な殺傷痕跡がみえないものの集合である。短剣類によって殺傷されたものの中でも、佐賀県高志神社遺跡 SJ18 人骨や、福岡県隈・西小田 10 地点 K218 人骨などは（短剣）切先と石鏃が相伴しているため、後述のⅣタイプに分類した。

こういった、Ⅳタイプの諸例などに関しては、仮説②に近い短剣の使用状況が想定され、弓矢において攻撃した後、短剣で（背後から）とどめを刺した可能性が高い。逆に、短剣以外の殺傷痕跡が確認できないⅠ類の殺傷としては、仮説②でも個人的な決闘か、むしろ仮説①の蓋然性が高いと思われる。

Ⅱタイプの殺傷事例は刀剣類の近距離殺傷や、切傷などからなる。刀剣や戈・矛など殺傷を目的とする武器での意図的な殺傷行為といえるだろう。

このうち、福岡県隈・西小田 K491 人骨では頭頂左に傷（Ⅱa タイプ）、隈・西小田 K40 人骨では左眼窩上縁に切傷（Ⅱa タイプ）、Ⅱb タイプの殴打痕、特に腕の外側に骨の折れた防御創など、正面から攻撃された状況が推察できよう。これらⅡa、b の殺傷事例の可能性としては以下のものが考えられる。

Ⅱ—仮説① 決闘など、対峙した状態で武器を使用して殺傷を行った。（この場合、後述の註 6 にあるヤノマメ族の決闘例などが参考になる）。

Ⅱ—仮説② 集団間での戦闘があり、乱闘状況の中で殺傷が生じた。

これらに対し、Ⅱc タイプは利器によって首が切断された例である。いわゆる首級をあげるといふ戦闘（合戦）での状況（鈴木（真哉）2000）を真っ先に思い浮かぶが、人類学・民族学では首狩が“人身供儀・流血供儀”と結びついた事例が多いという報告がある（山田（隆治）1960）。

したがって首狩例（Ⅱc）としては以下の可能性が挙げられよう。

Ⅱ—仮説③ 集団戦などの諸戦闘において、敵の首を取り合った。

Ⅱ—仮説④ 人類学・民族学例にあるように、“人身供儀・流血供儀”などの儀礼的な殺傷が行なわれた。

注意すべき事柄としては、横隈狐塚 K157 人骨や、吉野ヶ里 SJ0329 人骨などでは傷が一箇所ではなく、複数の箇所に残っている事実が挙げられる。そういった満身創意の状況で首狩まで行なわれているため、首狩りの事例としては激しい戦闘、特に集団間での戦闘が生起し、その後で首狩が行われるといった仮説②と③の可能性を、まずは指摘したい。

しかし、一方では、上記の殺傷人骨は単独で埋葬されていることが多いという事実があり、

特に、首だけが通常の集団墓から出土する例も認められる。奈良県四分遺跡では、男女が2人同時に、頭を西と東の交互に埋葬する、といった特異な殺傷人骨（Ⅱa・Ⅲタイプ）の検出例も知られている。そのため、単純に戦闘の結果と判断するのには躊躇するところであり、仮説④のような儀礼的な可能性も考えておきたい。また、Ⅱbタイプにあるような防御創を伴う骨折痕については、後述するヤノマメ例での決闘状況を髣髴とさせるため、仮説①の可能性も残る。

何れにせよⅡタイプ、特にⅡcの首狩例は現在の所、日本列島内では北部九州のみにみられる習俗であり、同地域では武器を使用した、かなり激しい殺傷行為（決闘・殺人・戦闘・儀礼など）が行われたことだけは確かであろう。

Ⅲタイプは弓矢による遠距離からの殺傷である。この行為に関しては物理的に考えても、矢が人骨に嵌入する事例は希少であって、殺傷されたものかどうかの判断から始めなければならなかった。

確実な対人殺傷例としては、福岡県新町24号、長崎県沖ノ原人骨、佐賀県三津永田32号例などを挙げることができる。これらは腰部以下に石・鉄鏃が嵌入しており、背・側面からの遠距離殺傷がみられるⅢaタイプのものである。

これに対し、Ⅲbタイプは胸や腕などから石鏃が出土するもので、Ⅲcタイプは多数の石鏃が人骨と共伴するものである。いずれも確実な嵌入例はないものの、先にその出土状況から、殺傷の可能性を指摘した。

さて、遠距離からの（弓矢による）殺傷に関しては以下のような状況が考えられる。

- Ⅲ—仮説① 集団的な戦闘中において遠距離から矢、又は流れ矢などで殺傷を受けた。
- Ⅲ—仮説② 個人的な戦いや暗殺などにおいて弓矢において殺傷を受けた。
- Ⅲ—仮説③ 儀礼などの意図的な行為で殺傷を受けた。

ところで、弓矢を使用した遠距離戦闘に関する示唆的な考古遺物に防御用の盾がある。弥生時代の盾は大部分が大型の置盾であるが、この置盾には岡山県南方遺跡出土の打製石鏃が射込まれた例が知られており、弓矢攻撃の防御に機能していたことが解る。こういった考古事例から、弥生時代における遠距離戦闘が生じた場合は、置盾を置いて盾越しに矢を射合うといった集団間の戦闘方法が推察できる。中世でいうところの“<sup>たてつきいくさ</sup>盾突戦”である。この置盾の出土は近畿地方に多いが（芋本 1986）、近畿地方の弥生遺跡では、時として膨大な石鏃類（“戦闘石鏃”を含めて）が出土しており、古くより集団間の遠距離戦闘が行われていたことが指摘されている（佐原 1979）。

本論の殺傷人骨でいえば、背後・側面から殺傷したⅢa タイプは、福岡県新町 24 号、長崎県沖ノ原人骨、福岡県塚崎東畑 K157 など、弥生早・前期から北部九州地方にかけて分布し、Ⅲb タイプの例は、兵庫県新方 1 号の他、大阪府亀井 2 号、大阪府亀井 6 号、大阪府瓜生堂 6 号、大阪府巨摩庵寺 2 号、奈良県四分 4 号など弥生中期の近畿地方に多い。

従って、中期の近畿地方では大量に鏃を消費するような集団間の戦闘があり、同地域を中心に分布するⅢb タイプの殺傷事例は、仮説①のような状況であった可能性が高いと考える。逆に、背後や側面から殺傷を受けたⅢa タイプは、集団間での戦闘結果であることを否定するものではないが、状況的には仮説②のように個人的な戦闘や暗殺などの可能性が高いと考えている。想像をたくましくすれば、Ⅲa タイプの殺傷は待伏や背後から近づいた歩射ではなかろうか。

一方、Ⅲc タイプはこれらⅢa、Ⅲb タイプと異なり、多くの石鏃が人骨と共伴しており、“何人もの手によって弓矢を射られる”といった特殊な状況であった。しかも、山口県土井ヶ浜 124 号、大阪府勝部 2 号、兵庫県新方 3 号などの人骨においては、意図的に頭蓋が割られたような状況にある。特に土井ヶ浜 124 号では軟部組織が付着している段階で顔面を破壊されているため、極めて凄惨な行為が行なわれたと考えられている（松下 2001）。

これら特異例から判断すると、松木武彦が分析したように「標的となった人物は固定されていたか、死後に遺骸に向けて射込まれたものと考えられる」（松木 2000）のであって、Ⅲc（新方）タイプは儀礼的な要素などが極めて強かった可能性が高い。兼康保明が指摘したような“王殺し”や“持衰”の殺害などがこれに類するかもしれない（兼康 1996）。

もちろん、Ⅲc タイプの殺傷が戦闘で生じないとは断言できない。しかし、殺傷人骨が取り上げられる場合、戦闘と結び付けられる点が多かったことを考えると、仮説③のような儀礼的な可能性を大いに強調しておきたい。

Ⅳタイプの殺傷例は、至近・近距離専用武器（刀剣類など）と遠距離専用武器（弓矢）とが並存している殺傷例である。

福岡県隈・西小田 10 地点 K218 号人骨では 5 つの石鏃が供伴するが、人骨には剣類の切先が刺入し、かつ頭部が切断されている。佐賀県高志神社 SJ016 においても寛骨に銅剣が嵌入し、同時に石鏃が供伴している。鳥取県青谷上寺地 No.E-1 人骨においても銅鏃が嵌入し、後部に切傷が認められる。このように、Ⅳタイプでは

Ⅳ―仮説①      まず矢を射込み、剣でとどめをさした。

という戦闘が行なわれた可能性が極めて高いといえよう。もちろん、個人的な殺戮なのか、

集団的な戦闘であったのか、リンチのような、又は儀礼的なものであったか、などについての判断は極めて困難である。

例えば、先にみた鳥取県青谷上寺地遺跡での 110 片の殺傷人骨の中には、女性や子供のものも含み、かつ背部の創痕が多いというものだった。これなどについては、後述註 6 にあるマリン族の“壊走”などのような状況も想定可能であって、短絡的に“集団戦”と判断することはできない。ただし、近年では弥生時代の戦闘に関して集団戦を想定する論者が多い（橋口 1995・中橋 1999）。それらの点に関して言えば、これまで検討した各型式のうちでは、IV タイプが最も集団的な戦闘による殺傷の可能性が高い、ということはあるであろう。

むしろ重視すべきは、殺傷人骨も詳細に検討してみると、思ったよりも戦闘、特に集団戦と断定できる資料は少ないといった点にこそ、求められるかもしれない（註 5）。

このIVタイプは類例が少ないものの、福岡県隈・西小田遺跡（中期・後半）や鳥取県青谷上寺地遺跡（後期）などで、集中的に多数の斬傷のある殺傷人骨（IIa タイプ）が検出されている。IVタイプそのものは弥生中期より認められる。もちろん、人骨の遺存状況などについては注意すべきであるが、弥生中期後半～後期にかけて大量の殺傷人骨が 1 遺跡から出土ようになるのは、改めて注目しなければならず、弥生時代後半においては次第に集団的な戦闘の比重が高まっていくと推察しておきたい。

#### 第4節 弥生時代の戦いの具体像

弥生時代の戦闘像に関しては、資料上の制約から細部までの状況復元は不可能である。しかしこれまでの検討の結果から考察された殺傷行為を、一案として別図（図 5）のとおり模式的に復元した。

もちろん、殺傷方法の可能性は無限に考えることができるのであって、これはあくまでも一仮説（モデル）にすぎず、個々の殺傷例全てが、これに当てはまる訳でもない。

何故ならば、考古学的な型式分類では、最終段階を起点とする静的な結果としての、特徴を捉えた区分しかできないために他ならないからである。しかしながら、弥生時代の戦闘や“戦争”とも想定される武力抗争の最大の根拠とされてきた殺傷人骨もかなりバラエティーに富んでおり、同時代の対人殺傷法が極めて多様であり複雑であった、と評価することはできるだろう。



図 5 各タイプの殺傷模式図

このことを念頭において、弥生時代の具体的な戦闘像を復元する考察を続けよう。そのためには、観念的な可能性を列挙するのではなく、文化人類学や歴史学的な諸事例を参考にして、実際の人間行動としての殺傷行為を検討し、武器が残存している現象に関して、可能な限り現実 に即したな仮説を提示していくことが重要である。以下ではこういった点に留意して、もう少し弥生時代の戦闘にこだわってみたい。

さて、民族学・人類学の事例をみてみれば、伝統的社会の戦闘においては様々な戦闘があり、段階的にエスカレートする場合が多い（註 6）。そのような事例を参考にすると、多様な対人殺傷が認められる弥生時代の武力抗争も幾つかの段階があり、実際に集団的な戦闘にまで発展するのは、極めて稀だったのではないだろうか。註 6 の民俗学・人類学の事例でみられるように、伝統的社会において頻繁に行われる戦闘は、報復闘争型の戦闘や儀礼的な戦闘である。多用される戦術としては“野戦”よりも“奇襲・襲撃・裏切り”などが多い（大林 1984）。

西日本、特に北部九州の弥生時代早期～中期にかけては、確実な人骨嵌入例（Ⅰ・Ⅲa タイプ）では“背後からの殺傷”が多く目立っていた。そのような殺傷方法がどのようなものであったのかを考えると、肉薄戦闘用の短剣で近づき、背後から強襲する殺傷状況が推定できる。代表的なスダレ遺跡では、背後からの至近距離殺傷後、少なくとも 2 ヶ月ほどは余命を保ち、落命したという解剖学的所見があるので、組討などでとどめを刺された、というよりは突発的な殺傷行為の蓋然性も認められるだろう。

これらの殺傷状況から、上記にあるような伝統的社会で多用された戦闘を類推することもできないだろうか。すなわち、背後から殺傷する事例の多い弥生時代前半の西日本一帯においては、“奇襲・襲撃・裏切り”といった数人単位の戦術こそが戦闘の中核をなしていた可能性が大きいと評価したいのである。

また、直接的には関係ないものの、『記紀』の英雄たちも騙し討ちを行っている状況が描かれている（註7）。神話段階における伝承物語においては“奇襲・襲撃・裏切り”といった行為が恒常的に行われているようである。

一方、畿内地方においては弓矢による戦闘や儀礼の可能性が高いと考えたが、註6の例で参考になるものに、矢合戦だけでは死傷者や負傷者が出ることが少ないという民族誌的な事実がある。一般には、弓矢などの投射武器よりも刀剣などの衝撃武器のほうが戦闘の威力が高いといわれている（Turney-High 1971）。日本中世の戦闘においても射芸だけでは戦闘の決着がつかないため刀剣のほうが決死・決戦の武器であった（近藤（好和）1997）。南北朝時代の軍忠状を分析したコンランによると、太刀で切られた場合は半分、矢で射られた場合は5分の1が死に、槍（鏑）で突かれた場合は致命的であるという（コンラン 1997）。

考古資料としても弥生時代の弓は縄文以来の丸木弓であって、相対的に威力・殺傷率ともに低いと考えられる。実験考古学の結果でも、確かに鏑の重量が重くなる（＝質量が大きい）ほど弓矢の破壊力は増すが、一方で矢の初速度が遅くなる（石井ほか 2002）ため、弥生時代の戦闘石鏑では弓そのものの改良が伴わない限り、かなり接近しなければ軍事的効果を得ることは難しいといえよう。

これらの諸条件を考慮すると、弥生時代において遠距離戦用武器（弓矢）が主体の戦闘が生じた場合、決定的な打撃力には欠けるのであって、徹底的な殺し合いまでには発展せずに、限定的な戦闘、もしくは遊戯的・儀礼的な要素が高かったのではないかと推察することができる（註8）。

戦闘と遊戯を結びつけることは、現代人にとっては違和感があるかもしれないが、近代的な総力戦を除けば前近代の戦闘には“遊び・儀礼・賭け・競争”などの形式を装うことは極めて多い（ホイジンガ 1987）。また、儀礼的な戦闘に関して言えば、絵画土器にみられる戈と盾を持つような祭祀的な模擬戦（中村 1987）が行われていたことも、考古学的に指摘することが可能である。

これまで、弥生時代の戦闘観では“戦争”は弥生時代から、といった見解があり（佐原 1979）、殺傷人骨はその最たる証拠として受け止められてきた。しかし、それにも関わらず、具体的な

戦闘戦術などに関してはほとんど検討されることは少なかった。

本章ではこれを具体的に検討したが、その結果では、弥生時代の対人殺傷は極めて多様にして複雑であることが評価できた。特に弥生時代前半（早期～中期）の戦闘では“奇襲・襲撃・裏切り”や儀礼的な戦闘・殺人の可能性が多いことを指摘した（註9）。

一方、中期後半～後期では人骨の出土例そのものが少ないため詳細は不明であるが、福岡県隈・西小田遺跡や鳥取県青谷上寺地遺跡などⅡ・Ⅳタイプの殺傷人骨がまとまって出土する例が知られており、激しい集団的な戦闘を想起させるものがある。

弥生後期には金属器、特に鉄が普及するが（禰亘田 1998）、凄惨な殺傷例も鉄器などの普及に応じて威力の増した鉄刀・鉄剣による鋭利な切断面として遺存する例が増加した背景が考えられる。

また、戦いが奇襲・襲撃を主とする小規模な争いから大規模な集団的な戦闘へと発展するためには組織力・動員力の確立といった社会的・政治的な成熟も決定的であり、そのような前提は弥生時代後半から古墳時代にかけての農耕社会の再編成まで待たねばならないであろう。

以上、第1章では武器の種類や使用方法から具体的な戦闘像を明らかにしてきた。次章では、これまで具体的な戦闘像を復元する上で重要な論拠となってきた環濠集落を取り上げ、弥生時代の戦闘像について多角的に考察していきたい。





## 第2章 環濠集落からみた弥生時代における戦闘論の再検討



## 第2章 環濠集落からみた弥生時代における戦闘論の再検討

### はじめに

弥生時代の具体的な戦闘像に関する言及は、これまで、剣や矛といった代表的な武器よりも、石鏃や高地性集落・環濠集落などから検討されることが多かった。

これは、学史上において弥生時代の墓域から出土する剣・矛・戈などが、主として祭祀具として認識される見解が多数を占めていたために、武器について実用面から検討されることが少なく、むしろ高地性集落や環濠集落などの防御集落を巡る議論や、石鏃の大型化現象（石鏃の武器化）などを基礎として、弥生時代の戦争論が組み立てられたために他ならない。

その結果、弥生時代の具体的な戦闘像は、多くの場合、“防御集落（環濠集落）を攻撃する集団戦闘”というイメージ、ムラ単位での集団的な戦闘という形で復元されるものが大部分であった。環濠集落の“防御集落”という一般的な理解は、弥生時代の戦闘論に非常に大きな影響を与えているのである。

そのため、弥生時代の具体的な戦闘像を考察する上では、環濠集落の総合的な理解は欠かすことができない。前章では武器と殺傷人骨との関係性から、当時の武器の使用方法を明らかにした。本章では別の視点として、環濠集落を考察することで、弥生時代における戦闘論の再検討を行いたい。

### 第1節 環濠集落を巡る研究史

環濠集落（囲郭集落、環溝集落）とは“堀や溝で囲まれた集落”のことを指す。このうち弥生時代の環濠集落をはじめて考古学的に検討したのは鏡山猛である。鏡山はその遺構を“環溝住居趾”と称し「幾つかの家戸を構成要素とする住居集団の一地劃」として集落論の中で環濠を解釈した（鏡山 1956a・1956b・1958・1960）。

他方、ほぼ同じ時期に、小野忠熙によって高地性集落の研究が行われ、環濠の機能論（環濠機能＝防御用）に注目が集中されるようになると（小野 1951・1959）、環濠集落に関する議論や歴史的評価は、防御性や戦闘に関する比重が大きくなり、環濠と戦闘論とが結びつく契機となった。

1970年代～1980年代を通じては環濠の機能的な側面を防御性に求める見解が大勢を占めるようになり、環濠集落＝防御集落という図式から、弥生社会の戦乱を政治的・社会的に解明しようとする研究が相次いで行われた。

石野博信は低地の環濠の防御性についてはじめて言及し（石野 1973）、佐原真は環濠集落を「濠や土塁をめぐらす防御的なムラ」と説明し（佐原 1979）、弥生時代の戦争論を発展させることになる。環濠集落を総括的に取り上げた都出比呂志も環濠の機能的な側面に注目しており（都出 1983）、大規模な環濠集落に関して“城塞集落”という用語を用いるなど、環濠の防御性を一層明確にしている（都出 1997）。“城塞集落”という用語については、森井貞夫も環濠集落と高地性集落の両者について、防御的機能を発達させた集落の意味で用いるなど（森井 2015）、環濠集落の“防御集落”としての評価が研究史上において注目されてきた。

田中義昭の研究にあるように集落論の枠組みで環濠を考察し、“拠点集落”の概念を提示する研究もみられたが（田中（義昭） 1976）、しかしながら、環濠集落を取り扱う研究においては、森岡秀人や松木武彦などの諸研究にみられるように環濠集落や高地性集落の機能的な問題点（防御集落としての位置づけ）が重視され、環濠の研究から弥生時代の戦乱的な様相を解明することに関心が集まることが多かったのである（森岡 1996、松木 1995b）。

これら研究の進捗と同時に、1980年代には大阪府池上・曽根遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡の調査などで大々的な報道が繰り返され、環濠集落は国民的な注目も浴び、“弥生時代の集落＝環濠集落＝防御集落”という認識が一般化するようになっていった。

1990年代以降に至ると、環濠の機能を防御用以外に求める研究も多くなる。環濠の機能については象徴的な面を求めるもの（武末 1990、吉留 1994）、用・排水的機能を重視するもの（前田 1996）、集落や集団を維持するための機能的装置として環濠を評価するもの（岡本 1998、菅 1999、豆谷 2003、小出 2006）など多様な見解が示され、環濠集落を短絡的に防御集落とみなすことに対して再検討の機運が高まっている。

一方、弥生時代の集落研究そのものとしては先に触れた田中義昭の拠点集落論の他に、単位集団論や弥生都市論（乾 1996、広瀬 1998）、基礎集団論（若林 2001）などがあり、集落論の一分野として環濠集落を取り上げる研究が行われている。例えば、関東地域において安藤広道が集落群の中での環濠集落を検討しているが、この検討では、対象が関東地方のなかの、鶴見川流域が中心であって、かなり個別の地域に限定されている（安藤 2003）。集落論の研究としては、個々の地域や集落群を詳細に分析するものが中心であるため、弥生集落全体の中で環濠集落をどのように位置づけるのかが研究の課題として挙げられる。

個々の遺跡や地域の研究は重要であるが、近年では環濠集落の集成（埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 1988、大阪府立弥生文化博物館 2001）や韓国や中国など東アジアでの成果も広く知られるようになった（九州考古学・嶺南考古学会 1998、中村（慎一） 2001、朱（永剛） 2002、Nikitin ほか 2002、日韓集落研究会 2009、李（秀鴻） 2015）。また各地域の事例研究では環濠の様々な特色も指摘されるようになるなど（片岡（宏二） 2003、山崎（頼人） ほか 2005、鳥取県教育委員会（監） 2005）、全国的・東アジア的な環濠集落の基礎的な資料蓄積は非常に進んでおり、環濠集落の全体像を検討することも可能になってきている（表 5）。

そこで本章では、環濠集落をやや鳥瞰的に概観し、弥生集落全体の中で環濠集落が占める位置について検討し、時期的・地域的な特色を抽出しながら、環濠集落の性格について検討したい。そして環濠集落の全体的な評価を試み、従来、防御集落と説明されることの多かった環濠集落を再検討し、弥生時代の具体的な戦闘イメージの是非について論じてみたい。

## 第2節 環濠集落の成立と展開

### 1. 環濠集落の出現

弥生時代において環濠集落が出現する背景には、朝鮮半島南部からの一列だけのものでなく、より古い縄文時代以来の北方ルートと長江流域との関係が存在した公算が強いという見解もあるが（寺沢（薫） 1999）、石器や土器など総合的な文化的所産から考えて、直接的な祖形としては韓国南部地域を源流とするのが妥当であろう。

韓国における環濠について、李秀鴻による集成によれば、青銅器（無紋土器）時代～三韓時代の環濠集落として 48 の遺跡が挙げられている（李（秀鴻） 2015）。なお、李秀鴻の検討によれば、上村里遺跡、八達洞遺跡、芳基里遺跡、無去洞玉峴遺跡の環濠とされている遺構は単なる溝や近代の遺構などと想定するために集成から除外しているが、表 5 の集成では、参考の意味も兼ねて上記遺跡も含めておく。

さて、韓国の環濠について日本列島の最も古い板付遺跡の環濠と比較してみると、韓国では大栗里遺跡のように比較的古い環濠が清原でみつかっているものの、環濠の大部分は蔚山（検丹里、明山里）、大邱（東川洞）、昌原（南山）、晋州（大坪里玉房）などの嶺南地方、かつて慶尚道と呼ばれていた朝鮮半島南東部に集中している。立地条件については、小地域毎に異なる傾向があり、蔚山地域は丘陵地域での、晋州地域は低地地域での環濠が多い。むしろ、一般的



図 6 韓国の環濠集落（遺跡）と日本の早期～前期（前半）の環濠が指摘される遺跡

（番号は表 5 と対応）

な傾向としては丘陵上に立地するものが多いといえるが、南山遺跡のように比高 90m にも達する高地性の遺跡も含まれている。このような占地は低台地（11m）に立地する板付遺跡と比べると一つの相違点である。

環濠の平面形態としては李秀鴻の分類によれば、卵型から円形、多条溝など 8 つに区分され、时期的な差異が推定されている。しかし日本の環濠集落との関係が最も深い無紋土器中期（青銅器時代）の環濠については、119×70m の卵型の楕円形を示す検丹里遺跡の環濠などが最も典型的な環濠であると評価できる。板付をはじめとする日本列島の初期環濠も径 100m 内外の卵型が多く、概ね韓国のもので類似しており、環濠の断面形が V 字溝主体である点は日韓の環濠に共通している。また、韓国の環濠では雙松里遺跡のように環濠外で検出される住居も多く、蓮岩洞遺跡のように儀礼場所と指摘のある遺跡も存在するが、遺跡内外から住居群が検出されており、基本的には集落の一部である事例が多いと考えられる。

このように日韓の環濠集落には相違点も認められるものの、共通する要素が多く、日本列島における環濠の源流については韓国のもので求めることができる（註 10）。こういった韓国の環濠集落が嶺南地方などを中心に比較的局地的な集落分布を示すことは、日本列島の環濠集落を考えるにあたって非常に重要である（図 6）。

日本列島において弥生時代早期～前期初頭（夜臼～板付 I 式期）で環濠と考えられる遺構が

検出されたものは福岡県江辻遺跡、福岡県那珂遺跡群、福岡県有田遺跡群、福岡県板付遺跡、福岡県上岩田遺跡、福岡県東郷登り田遺跡、福岡県今川遺跡、佐賀県小楠遺跡などである。しかし福岡県江辻遺跡の溝は非常に小規模で集落の周りを全周しないことも明らかになっており、環濠集落でない可能性が高い。その他でも集落構造の明確なものはほとんど存在せず、現在の発掘成果では弥生時代早期～前期初頭の環濠集落はほぼ皆無であるか、非常に少数であったと評価せざるを得ない。万人が納得しうる最古の環濠遺構を検出した福岡県板付遺跡においても肝心の住居群が環濠内から検出されておらず、住居群については削平されたとする立場（山崎（純男）1990）と、住居が当初より存在したことに疑問を持つ立場（片岡（宏二）2003）があるなど集落構造としては不明瞭な点が多い。

福岡県大保横枕遺跡の二重環濠は板付Ⅱa 式古段階以降に掘削されているため、弥生時代前期初頭（板付遺跡）～前期中頃（大保横枕遺跡）には確実に北部九州において環濠を伴う遺跡が出現していたことは明らかであるが、大保横枕遺跡の環濠内には貯蔵穴やピット、環濠掘削前と後世の住居跡が存在するものの、報告書によれば環濠が維持された段階（板付Ⅱa～Ⅱb 式期）の住居跡は存在せず、むしろ環濠外（南側）に住居が展開しているなど、環濠内部には同時期の住居が存在していた可能性は低い。

弥生時代早期～前期の暦年代については、いくつかの見解が並存しているが、近年研究が盛んな C14 年代を採用すると（藤尾 2004、2009、2013、2014）、弥生時代の開始（早期：山の寺・夜臼式）は紀元前 10 世紀後半～前 9 世紀中頃、前期初頭（夜臼Ⅱb・板付Ⅰ式並行期）が紀元前 8 世紀初～前 7 世紀初頃が想定でき、弥生時代早期～前期の年代が約 300 年間にも及ぶことになる。福岡県那珂遺跡や福岡県板付遺跡の環濠などの存在から、環濠を伴う遺跡は日本列島において前 9～8 世紀頃には確実に出現していたと判断される。

しかしながら、弥生時代早期～前期の 300 年という長期間において、北部九州で環濠集落の可能性が指摘されているのは数例、多くても 10 数例に過ぎないのが実情である。福岡県曲り田遺跡のように初期水田を伴う遺跡において環濠が認められないものもあるため、弥生文化が開始された段階に環濠集落が存在したと想定した場合でも、環濠を巡らす集団と巡らさない集団とが併存しており、環濠集落そのものは少数派の、極めて特殊な集落形態であったと評価することができるであろう。

弥生時代前期後半～中期初頭（板付Ⅱb 式～城ノ越式）、いわゆる環濠集落は爆発的に増加しその分布も九州から中国、四国、近畿、東海まで拡大するとされてきた。しかし北部九州の福岡県葛川遺跡、福岡県大井三倉遺跡、福岡県光岡長尾遺跡、福岡県横隈北田遺跡、福岡県横隈

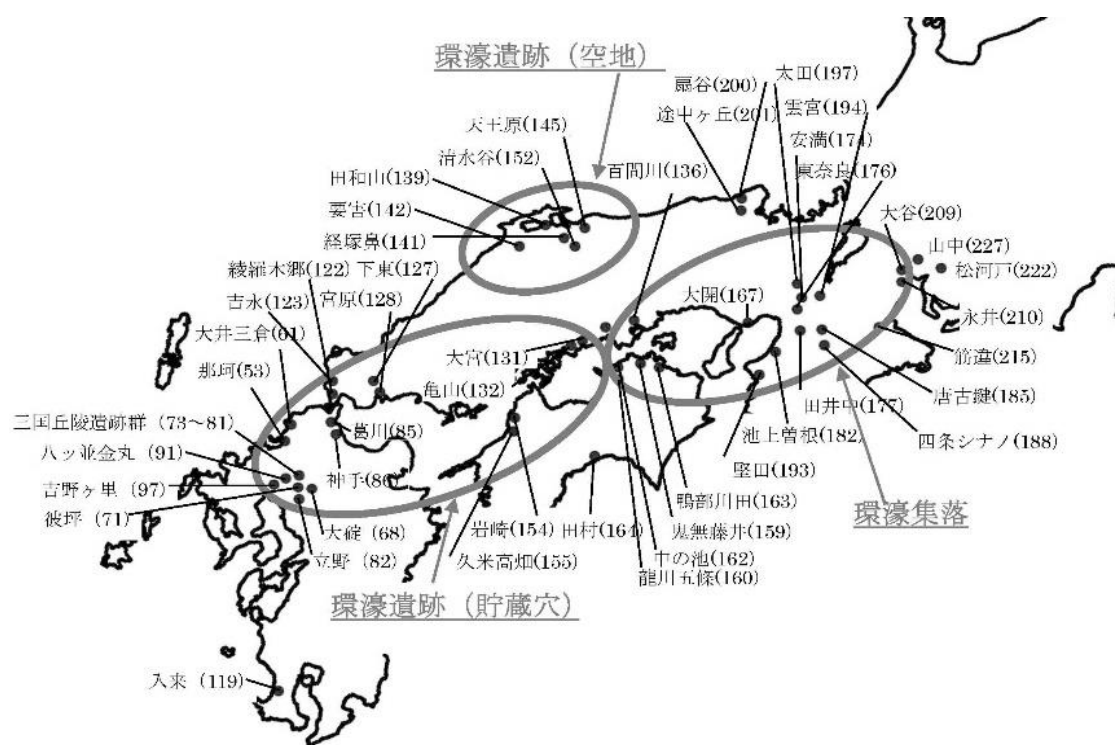


図 7 弥生時代前期（後半）環濠の地域性（番号は表 5 と対応）

山遺跡、福岡県彼坪遺跡、福岡県神手遺跡、福岡県大碕遺跡、佐賀県八ツ並金丸遺跡、山口県綾羅木郷遺跡、山口県吉永遺跡、山口県下東遺跡、広島県大宮遺跡、愛媛県岩崎遺跡などの環濠内部における発掘成果からすれば、環濠内に同時期の住居がみられる例、すなわち環濠（大溝）が集落を巡るという集落景観を復元できる事例はほとんどない。むしろ事実としては環濠内には住居がみられず、貯蔵穴群のみが検出される事例が圧倒的に多いのである。

貯蔵穴専用環濠の存在は早くより指摘されていたが、前期後半の北部九州～瀬戸内東部地域においては、貯蔵穴専用環濠こそが一般的な環濠のあり方といえる（註 11）。佐賀県吉野ヶ里遺跡など環濠集落の存在も確実であろうが、当該地域の弥生集落全体から勘案すると、環濠を有する遺跡そのものが部分的である上、さらに住居群を伴うもの（環濠集落）となると、その存在は極めて特殊的な事例といえる。

弥生時代前期後半～中期初頭の山陰地域の環濠においても積極的に集落とされるものはほぼ皆無である。島根県田和山遺跡、鳥取県清水谷遺跡、鳥取県天王原遺跡などの調査成果では環濠内部には貯蔵穴さえもなく、極端に言えば何もない空白地を環濠で囲っているものが目立つ。日本海側の兵庫県東家の上遺跡、京都府扇谷遺跡、京都府途中ヶ丘遺跡でも環濠と考えられる大溝が検出されているが、トレンチ調査が主で環濠内部の住居群の様子はよくわかっていない。



確実な環濠集落、集落域を溝が巡っていると考えられる遺跡をまとめて認めることができるのは瀬戸内東部～近畿地方にかけてである。当該地の環濠集落は立地も低地で溝の断面形態は U 字溝、多条溝を指向するなど、台地に占地し V 字溝を巡らす北部九州や山陰の環濠とは全く異なった様相を示す。

瀬戸内東部の最も古い(I 様式古～中)環濠集落の一つとしては兵庫県大開遺跡が挙げられ、岡山県百間川遺跡、岡山県清水谷遺跡、香川県龍川五条遺跡、香川県中の池遺跡、香川県鴨部・川田遺跡、香川県鬼無藤井遺跡などで住居群や遺構群を取り囲む環濠が報告されている。これより東の近畿地方では大阪府田井中遺跡、大阪府池上・曽根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、和歌山県堅田遺跡、京都府雲宮遺跡、三重県大谷遺跡、三重県永井遺跡などの環濠内には住居群やピット群が検出されている。三重県筋違遺跡、愛知県山中遺跡、愛知県松河戸遺跡などでも前期の環濠がみついているが住居群の構造が良くわからず、環濠集落になるか否かは今後の調査が必要であろう(図 7)。

上記のように農耕文化が日本列島に成立するとされる弥生時代早期～前期については、その時間幅や非集落の環濠遺跡の存在などを考慮すると、一時期における同時代の遺跡や集落全体からすれば、環濠集落の数は決して多くはなく、分布も偏在的で、やや特殊的な集落形態であったと評価することができるであろう。

## 2.環濠集落の展開

中期以降の環濠については地域差が極めて大きいため以下、地域毎に概観する。

### (1) 九州地域

北部九州では前期末に多数みられた貯蔵穴専用の環濠は中期初頭までにほぼ廃絶し、中期を通じては佐賀県吉野ヶ里遺跡や長崎県原の辻遺跡などの若干例を除いて環濠は発達しない。この地域において環濠集落が顕著になるのは後期以降である。

九州における後期の環濠は実に多様で、非常に小さい円形の環濠(佐賀県原古賀三本谷遺跡)、小さい方形の環濠(福岡県野方中原遺跡、福岡県比恵遺跡、福岡県穴江塚田遺跡)、大型の方形環濠(佐賀県千塔山遺跡)、平地の大型円形環濠(福岡県今宿五郎江遺跡、福岡県平塚川添遺跡、福岡県雀居遺跡)、高地性の小さな環濠(福岡県西ノ迫遺跡)、台地上の大型環濠(熊本県蒲生上原遺跡)丘陵上の大型環濠(熊本県西弥護免遺跡)など実に様々である。また佐賀県吉野ヶ里遺跡や長崎県原の辻遺跡など、前期から営まれている環濠集落は弥生時代後期に最も大規模

化する。

## （２）中国・山陰地域

中国・山陰地域でも貯蔵穴専用環濠や、空白地を囲っていたような環濠は中期初頭までにほぼ廃絶する。山口県下では突抜遺跡、宮ヶ久保遺跡、朝田墳墓群、岡山遺跡など中期の環濠集落や高地性集落がやや集中的にみられるが、特に大規模なものや安定的に長期にわたる集落は存在しない。弥生集落全体に占める環濠集落の数も少なく、広島県助平 2 号遺跡や鳥取県妻木晩田遺跡、兵庫県大盛山遺跡など、前期末にみられたような空地を囲む環濠遺跡が中～後期を通じて散発的に現われる他は環濠集落をあまりみることができない。

島根県では古志本郷遺跡などで後期の環濠集落の指摘がある。しかしそれらの遺跡では大溝が確認されるものの、乱流的な溝や自然流路の自然堤防上に集落が占地している状況であって、確実に集落を巡っているのかについては詳細な検討が必要である。

## （３）近畿地域

瀬戸内東部～近畿地方にかけては前期末の環濠集落が一定数認められたが、瀬戸内東部では中期初頭までに環濠のほとんどは廃絶する。一方、近畿地方においては大阪府池上・曾根遺跡、和歌山県太田・黒田遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、奈良県多遺跡、奈良県平等坊・岩室遺跡、奈良県坪井・大福遺跡など、主に前期から環濠集落として継続する遺跡で円弧を描くような大溝が検出されている。それらの環濠集落は平面規模が 300～500m 以上の極めて大規模な集落であるのが特徴で、沖積低地に営まれ、多条環濠の例が多いという特色を示す。

近畿南部の環濠集落は中期末に最盛期を迎えるが、滋賀県下之郷遺跡、滋賀県服部遺跡、滋賀県下鉤遺跡など近畿北部ではややテンポが遅れて中期末～後期に大規模化している。

## （４）関東・中部地域

東日本での弥生中期中頃以前に遡る環濠の検出例は少なく、静岡県西通北遺跡、神奈川県中里遺跡、埼玉県池上遺跡などで検出された溝において環濠の指摘もなされている。しかし内部構造が不明で環濠とするのに否定的な見解もあるなど、明確な環濠集落はほぼ皆無といっている。

弥生時代中期末の段階では、西日本では相対的に確実な環濠集落は少ないが、これに反して関東地方では、環濠集落が爆発的に増大する。神奈川県朝光寺原遺跡、神奈川県大塚遺跡、神

奈川県権田原遺跡、神奈川県砂田台遺跡、東京都飛鳥山遺跡、千葉県国府台遺跡、千葉県大崎台遺跡、千葉県道庭遺跡など、関東地方の環濠集落は概ね等質的で径 100m～200m 前後の集落規模、台地上に V 字溝を掘削し、環濠内には数十棟の竪穴住居がみられ、環濠外に方形周溝墓群の墓域が存在する、というスタイルでほぼ共通する。

東海・中部地方では、愛知県朝日遺跡など大規模な環濠集落もみられるが、それは例外的な存在で、愛知県梅坪遺跡、愛知県見晴台遺跡、愛知県三王山遺跡、愛知県猫島遺跡、愛知県伝法寺野田遺跡など、その他の環濠は径 100～150m ほどの中・小型のものが多く、近年の調査では三重県堀町遺跡、三重県天王遺跡、愛知県赤日子遺跡など、後期の環濠が数多く報告されている。また北陸地方では後期を中心に石川県杉谷チャノバタケ遺跡、新潟県裏山遺跡など高地性の環濠集落が目立つ。

### 第3節 環濠集落の評価

#### 1. 環濠集落の分類

以上、環濠遺跡・環濠集落の実例をみてきた。ここでは以下の視点から環濠遺跡・環濠集落の大まかな分類を行ってみよう。

まず、遺跡の構造上を集落（Ⅰ）と非集落（Ⅱ）とに大別した上で（註 12）、集落の規模を小型（a）、中型（b）、大型（c）とわけ、また農耕を行う上で重要な立地の条件から低地（1）、台地（2）、高地（3）とで分類する（註 13）。これらの組み合わせによって、環濠集落・環濠遺跡は理想的にはⅠ-a1 型からⅡ-c3 型まで 18 類型にわけることができる。

環濠内から住居などが認められず、貯蔵穴や土坑、空白地のみであるものは非集落の環濠遺跡（Ⅱ型）として大別しておいたが、貯蔵穴専用環濠などの性格としては除湿・対獣対策などの環濠を、何もない空白地を環濠で囲っているものなどについては聖域を聖別

表 3 環濠集落・環濠遺跡の分類一覧

類型	性 格	遺跡数	割合
Ⅰ-a1	小型低地集落	33	17%
Ⅰ-a2	小型台地集落	42	21%
Ⅰ-a3	小型高地集落	16	8%
Ⅰ-b1	中型低地集落	11	6%
Ⅰ-b2	中型台地集落	25	13%
Ⅰ-b3	中型高地集落	3	2%
Ⅰ-c1	大型低地集落	13	7%
Ⅰ-c2	大型台地集落	4	2%
Ⅰ-c3	大型高地集落	5	3%
Ⅱ-a1	小型低地非集落	9	5%
Ⅱ-a2	小型台地非集落	21	11%
Ⅱ-a3	小型高地非集落	9	9%
Ⅱ-b1	中型低地非集落	0	0%
Ⅱ-b2	中型台地非集落	1	1%
Ⅱ-b3	中型高地非集落	3	2%
Ⅱ-c1	大型低地非集落	0	0%
Ⅱ-c2	大型台地非集落	1	1%
Ⅱ-ca3	大型高地非集落	0	0%

表 4 環濠集落・環濠遺跡の地域的変遷

地域	前期前半	前期後半	中期	後期
九州	I-a2、II-a2?	II-a2		方形環濠ほか
中国		II-a3(山陰) I-a1(瀬戸内)	I-a2 II-a3	I-a3 II-a3
近畿		I-a1	I-c1	I-c1(滋賀)
中部		I-a1	I-b2	II-a3(北陸)
関東			I-b2	I-b2

するような象徴的機能を考えており、集落域を堀や溝で囲む環濠集落とは全く異なる特殊な遺構の性格が想定される（表 3、4）。

付表（表 5）でまとめておいたように、環濠を伴う遺跡の可能性が高いもので管見に触れたものは約 300 遺跡、分類できた日本列島内の遺跡数は 196 遺跡であるが、非環濠集落（II 型）は 44 遺跡にも及び、明確な環濠遺跡全体数（196 例）の 22% も占めている。従来、環濠集落として一括されてきた遺跡においても非集落の環濠遺跡が多いのであり、このことは“環濠集落＝防御集落”という説明の多かった環濠の機能を考える上でも重要であって、弥生時代の恒常的な戦闘状況との表れとして環濠集落が位置づけられてきたことの再検討が必要であろう。

では環濠集落の存在はどのような意味があるのだろうか。環濠集落（I 型）の中で最も多いものは 42 遺跡（21%）の I-a2 型（小型台地の集落）で、次いで 33 遺跡（17%）の I-a1 型（小型低地集落）、25 遺跡（13%）の I-b2 型（中型台地の集落）の順となる。

このうち、小型低地の環濠集落は前期後半の西日本に多く環濠の断面が U 字型を呈し、中型台地の環濠集落は中期末～後期の関東地方に多く V 字溝となるなどの差異はあるものの、農耕文化が開始された弥生時代という歴史性から考えると、東西それぞれの地域において本格的に農耕文化が定着した段階（西日本では前期末、東日本では中期末～後期）に出現する集落という共通項を有している。環濠集落の種類のうちで最も多いのはこのような社会的背景の下で成立した集落であり、これは環濠遺跡全体の半数（56%）を占めている。

西日本における農耕文化定着期の環濠集落は概ね小規模で、土器型式が 1 型式程度の短期間のものが多い。例えば兵庫県大開遺跡（I-a1 型）の環濠集落は畿内第 I 様式古段階から中段階に営まれ、集落規模も最大で長辺 70m、環濠内の主要遺構は竪穴住居 4 棟、貯蔵穴 11 基であって、その集落人口も 30 ～ 40 人規模を超えることはないであろう。西日本における弥生時代初頭の非常に小さな農耕集団の営んだ集落類型の一つといえる。

一方、関東地方で農耕文化が本格的に定着する中期末～後期に出現する環濠集落はやや規模

表 5 環濠集落・環濠遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
韓国								
1	川上里	蔚山				無紋土器中期		
2	検丹里	蔚山	円 118m×70m	集落(同時期・溝外にも住居あり)	低丘陵(比高50m)	無紋土器中期	V	I -a3
3	芳基里	蔚山	円 140m×(90m)	集落	低丘陵(比高10m)	無紋土器前期	U・逆台	I -a2
4	蓮岩洞	蔚山	円形	なし(儀礼場所?)	丘陵	無紋土器中期		
5	明山里	蔚山	不定	集落?	丘陵	無紋土器中期		
6	新岷洞	蔚山	一字形		丘陵	無紋土器中期		
7	校洞里	蔚山	円形		丘陵	無紋土器後期		
8	達川	蔚山	不定形		丘陵	無紋土器後期		
9	新華里	蔚山	弧状		丘陵	無紋土器中期		
10	東川洞	大邱	不定形	集落	沖積平野(39m)	無紋土器中期		
11	八達洞	大邱	円 (140m)×(80m)	集落	丘陵(40~50m)	無紋土器前期		I -a3
12	月城洞	大邱	不定形		平地	無紋土器中期		
13	大泉洞	大邱	弧状		平地	無紋土器中期		
14	南山	昌原	円 (78m)×44m	集落? 空閑地多し	丘陵(100m、比高90m)	無紋土器中期	V~U	I -a3
15	徳川里	昌原	弧状		丘陵(25m)	無紋土器中期		
16	加音丁洞	昌原	(300m)×(200m)	集落	高地(47~48m)、台地(40m)	原三国~三国		I -c3
17	上村里	晋州			河岸段丘	新石器時代中期		
18	大坪里玉房	晋州	円・方? (150m~)×	集落 方形溝が貯蔵穴群を囲む	河岸段丘	無紋土器中期		I -b2
19	加虎洞	晋州	弧状?	集落	平地	無紋土器中期		
20	耳谷里	晋州	角方形	集落	平地	無紋土器中期		
21	草田洞	晋州	一字形	集落	平地	無紋土器中期		
22	網谷洞	晋州	楕円形	集落(住居、墓)	平地	無紋土器中期		
23	上南	晋州	弧状		平地	無紋土器中期		
24	鳳凰台	金海	円 (140m)×(240m) 二重?		低丘陵(10~20m)	原三国時代		I -b2
25	大成洞	金海	一文字?		平地	原三国時代		
26	温泉洞	釜山	円形	集落(住居、木棺)	丘陵	無紋土器後期		
27	多芳里貝塚	梁山			高地(120m)	原三国時代		
28	平山里	梁山	円形	集落(住居、木棺)	丘陵(145m)	原三国時代		
29	玉山里	山清	楕円形	集落	河岸段丘	無紋土器中期		
30	沙月里	山清	円形	集落	独立丘陵(73m)	無紋土器中期		
31	佳長洞	鳥山	不定形	竪穴	丘陵	無紋土器後期		
32	樓邑里	鳥山	楕円形		丘陵	無紋土器後期		

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
33	大栗里	清原	不定形	集落	丘陵(60～70m)	無紋土器前期		
34	林洞	慶山	弧状		平地	無紋土器後期		
36	錫杖洞	慶州	一列		丘陵(53m)	無紋土器中期		
37	東鶴山	華城	円形	集落	丘陵	無紋土器後期		
38	松邑里	清道	弧状		沖積台地(70～75m)	無紋土器中期		
39	文鶴洞	仁川	一字形		丘陵	無紋土器中期		
40	雙松里	華城	円形	なし	山頂	無紋土器中期		
41	古康洞	富川	円形	集石	山頂	無紋土器後期		
42	栗田洞	水原	不定形	竪穴	丘陵	無紋土器後期		
43	盤諸里	安城	円形	自然石	山頂	無紋土器後期		
44	芳洞里	江陵	弧状	集落	丘陵	無紋土器後期		
45	上星里	牙山	円形		丘陵	無紋土器後期		
46	月岐里	舒川	楕円形	集落?	丘陵	無紋土器後期		
47	上彦里	星州	不定形	柱穴	丘陵	無紋土器後期		
48	盈倉里	陝川	弧状	住居跡、竪穴	山頂	無紋土器後期		
49	莠芝里	泗川	楕円形	集落	丘陵	無紋土器後期		
50	石宅城	洪城	楕円形	集落	丘陵	原三国時代		
51	徳岩里	順天	楕円形	集落	山頂	原三国時代		
福岡								
52	那珂遺跡群	福岡市	円 内濠(120m)×(120m)、外濠(150m)	?	低丘陵(5～11m)	早期(夜臼)	V字(SD1)、逆台(SD2)	a2
53	那珂遺跡群	福岡市	円 (60m)～(80m)×50m	貯蔵穴のみ	低丘陵(6m)	前期後葉～中期初頭(板付I～IIb)	V字	II-a2
54	有田遺跡群	福岡市	円 300m×200m	集落	中位段丘(13m)	早期～前期初頭(夜臼・板付I)	V字	I?-b2
55	有田遺跡群	福岡市	円 70m×	集落	中位段丘(13m)	前期前半	V字	I?-a2
56	今宿五郎江	福岡市	円 (270m)×200m	集落	丘陵端部～平野	後期	V字	I-b1
57	野方中原	福岡市	円:A溝(120m)×100m、方:B溝30m×25m	集落	扇状地(15～26m)	後期	A溝(逆台)、B溝(V字～逆台)	I-a1
58	板付	福岡市	円 内濠110m×80m、外濠(380m)×(190m)	内濠内は貯蔵穴のみ	低台地(11m)	前期(夜臼・板付I)	V字	II-a2
59	雀居	福岡市	円 (200m)×(130m)	集落	低地	後期	逆台	I-b1
60	比恵	福岡市	方 30m×33m	住居・井戸等あり	低台地	後期		I-a2
61	大井三倉	宗像市	円? 70m?	何もなし	低丘陵上(18m)	前期中葉・短期	V字	II-a2
62	田熊石畑	宗像市				前期	V字	
63	東郷登り立	宗像市	円?	遺構なし	平野(9m)	前期(板付I?)	V～U字	II?

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
64	光岡長尾	宗像市	円 46m×42m	貯蔵穴のみ	独立丘陵(32m)	前期後半(板付Ⅱ?)～中期初頭	V字	Ⅱ-a2
65	今川	福津市	円? (80m)×(60m)	なし(検出住居は環濠に切られる)	丘陵(14m)	前期(板付Ⅰ)	V	a2
66	平塚川添	朝倉市	円 (210m)×110m 多重環濠	集落	氾濫原微高地	後期	U字(滞水)	I-b1
67	西ノ迫	朝倉市	円 (35m)×	集落(高地性、住居あるが生活臭なし)	丘陵(100～131m)	後期	逆台	I-a3
68	大碓	うきは市	円? 98m×? 各溝の時期不明	貯蔵穴? 住居は溝外、貯蔵穴は溝内外	低地(25m)	前期後半～中期初頭	V・U字	Ⅱ-a1
69	大南	春日市	不定形?	集落	独立丘陵(50～56m)	中期～後期 長期	V字	
70	江辻	粕屋町	?	集落	平野微高地(10m)	早期・短期		非環濠集落
71	彼坪	久留米市	円 73m×	溝内土坑のみ	沖積微高地(7m)	前期後半	V字	I-a1
72	道倉	久留米市	径160m		低沖積台地上(8m)	後期～末		b1
73	津古内畑	小郡市	円? 60m×	溝内外から主に貯蔵穴	丘陵先端(52m)	前期後半(板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
74	三沢南沢	小郡市	不定? (50m)×	溝内から主に貯蔵穴	段丘(20m)	前期後半(板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
75	力武内畑	小郡市	不定? (125m)×	貯蔵穴、住居				
76	横隈山	小郡市	円 77m×53m	貯蔵穴	丘陵(33m)	前期後半	V字	Ⅱ-a2
77	上岩田	小郡市	円 60m? ×	溝内は墓のみ、住居は溝外か	低位段丘(18m)	前期(板付Ⅰ)	U字	Ⅱ?-a2
78	三沢北中尾	小郡市	円 径80m～90m	溝内から貯蔵穴	丘陵(32m)	前期中～後半(板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
79	大保横枕	小郡市	円(77m)×(76m)	二重環濠内は主に貯蔵穴	段丘上	前期後半(板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
80	横隈北田	小郡市	円 65m×45m	貯蔵穴	丘陵(33～35m)	前期中～末	V字	Ⅱ-a2
81	三国の鼻	小郡市	円 (初期)75m×、(拡張)152m×	集落	丘陵(40～43m)	後期	U字	I-a2
82	立野・大坪	八女市	円 50m? (内濠)	溝内に掘柱建物、溝外に貯蔵穴・掘柱建物	沖積地(23m)	前期後半～末	V字・U字	a1
83	辻垣畠田・長通	行橋市	不定形 180m×35m	貯蔵穴・土坑	自然堤防(10～13m)	前期前半～末	V字	Ⅱ?-a2
84	矢留堂ノ前	行橋市	円(100m)×(80m)			前期		
85	葛川	苅田町	円 57m×43m	貯蔵穴のみ	舌状丘陵先端(20m)	前期中葉(板付Ⅱa)	V字	Ⅱ-a2
86	神手	みやこ町	円? (40m)×	貯蔵穴のみ	河岸段丘上(35m)	前期後半～中期前半	V字	Ⅱ-a2
佐賀								
87	岡浦	佐賀市	円 (100m)×	集落	扇状地	後期		I-a1
88	惣座	佐賀市	方 (180m)×(160m)	集落	扇状地(17m)	後期	逆台	I-b1
89	榎木	佐賀市	円 69m×	集落	扇状地(11m)	後期(終末～古墳)	逆台	I-a1
90	小楠	武雄市	円 170m×140m	遺構なし	丘陵上(11～13m)	前期前半	V字	Ⅱ?-b2
91	ハツ並金丸	鳥栖市	円 20m×20m	環濠内竪穴1、貯蔵穴多数あり	丘陵上	前期(I前半～Ⅱ期)	V字	Ⅱ-a2
92	千塔山	基山町	方 95m×75m	集落(後期は内外住居、終末は倉庫群)	中位段丘(53m)	中期～後期	V字～U字	I-a2
93	町南	みやき町			段丘上	前期末～	逆台	
94	原古賀三本谷	みやき町	円 57m×46m 二重×2		扇状地(20m)	後期		a1
95	背ノ尾	吉野ヶ里町	径20m		段丘縁辺			
96	松原	吉野ヶ里町			段丘縁辺	後期末		
97	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	不定形 1000m×500m	集落	丘陵(20m)	前期～後期	V字	I-c2

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
長崎県								
98	原の辻	杵岐市	不定形 (750m) × (300m)	集落	低台地(18m)	前期～古墳	U字	I -c2
99	カラカミ	杵岐市	(210m) × (70m)	非集落? 祭祀関連?	丘陵部	中期後半～後期		II -b3
大分県								
100	小部	宇佐市	円	集落		後期		
101	下郡	大分市	円? (65m?) ×		自然堤防(5～7m)	後期	V字	a1
102	松木	豊後大野市	方 (70m) ×	集落? 空閑地、溝廃後に住居群	台地(226m)	後期		I ? -a3
103	中原船久手	豊後大野市	不定形 (90m) × (30m)	集落	丘陵(210m)	後期	U字	I -a3
104	二本木	豊後大野市	円? (400m) ×	集落	台地(250m)	後期	V字	I -c3
105	三輪教田	日田市	円? (150m?) ×	集落	低丘陵先端(140m)	後期		I t-a2
106	佐寺原	日田市	方 (150m?) ×	不明	台地(160m)	後期～	逆台	a2
107	小迫辻原	日田市	不定形? 150m × 100m	方形居館あり	台地(120m)	後期～	V字～U字	I ? -a2
108	白岩	玖珠町	不定形 160m ×	土坑のみ、非集落?	丘陵(390m)	後期後半	逆台	II ? -b3
宮崎								
109	下郷	宮崎市	円 80m ×	集落	洪積台地(90m)	中期末～後期(IV～V期)	逆台～V字	I -a2
110	高田	都城市	円? 80m?	集落	扇状地(148m)	中期前葉～中葉	V字	I -a1
熊本								
111	蒲生上原	山鹿市	円 190m ×	集落	台地(115m)	後期	V字～台地	I -b2
112	方保田東原	山鹿市	(330m) × (300m)	集落	台地(35m)	後期		I -c3
113	八反畑	合志市	円 (200m) ×		台地(65m)	後期		b2
114	西弥護免	大津町	円 210m × 140m	集落	丘陵	後期	V字	I -b3
115	二子塚	嘉島町	円(300m?)	集落	台地(45m)	後期	V字	I -c3
116	南鶴	南阿蘇村	不定? (500m～)	集落		後期		
117	二子塚	嘉島町	円 (300m?) ×	集落	台地(45m)	後期	V字	I -c3
118	台	菊池市		集落	台地(73m)	後期		
鹿児島								
119	入来	日置市			舌状台地(20m)		V字、U字	
120	松木藺	南さつま市						
121	西ノ丸	鹿屋市		集落	沖積地(5m)	中期	V字	
山口								
122	綾羅木郷	下関市	円? (320m?) ×	貯蔵穴のみ 非集落?	洪積台地(10～15m)	前期～中期	V字	II -c2
123	吉永	下関市	円? (100m) × 2?	住居検出なし(古墳時代の住あり)	洪積台地(4～15m)	前期後半	V字	II ? -a2
124	突抜	山口市	円? (100m?) ×	集落	河岸段丘縁辺部(260m)	中期	U字	I -a2
125	宮ヶ久保	山口市	円 130m ×	集落	盆地内微高地(300m)	中期(Ⅲ期)	U字	I -a2
126	朝田墳墓群	山口市	円 45m ×	貯蔵穴20、土坑1、竪穴住居2	丘陵上(23～45m)	中期前半(Ⅳ期)	U字	II ? -a3



番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
127	下東	山口市	円 60m ×	溝内は土坑群のみ	扇状地(17m)	前期末～中期初	V字・逆台	Ⅱ-a1
128	宮原	下松市	円 80m ×	第Ⅰ環濠内は土坑群、第Ⅱ環濠内は住居1	扇状地(46m)	前期後半	V字・U字	Ⅱ? -a1
129	岡山	周南市	円? 100m × 60m	集落? 番小屋程度か	低丘陵(45～64m)	中期後半(Ⅳ期)	V字・U字	Ⅰ-a3
130	石走山	田布施町	円 25m × 25m	集落	丘陵(39m)	後期	V字	Ⅰ-a3
広島								
131	大宮	福山市	円 80m ×	環濠内は住居なし	自然堤防(13m)	前期(後半)～Ⅱ古	U字	Ⅱ-a1
132	亀山	福山市	円 150m × 60m	非集落か 同時期の住居等なし	独立丘陵(37m)	前期(後半)～Ⅱ古	V字、U字	Ⅱ? -a2
133	助平2号	東広島市	円 36m × 26m	非集落 環濠内は何もなし	丘陵尾根(233m)	中期(Ⅲ期)	V字	Ⅱ-a3
134	溝口4号	東広島市		集落?		中期		
135	焼け	北広島町		集落	低丘陵(320m)	後期	逆台	Ⅰ-a3
岡山								
136	百間川沢田	岡山市	円 90m × 85m	集落	自然堤防(2m)	前期(後半)	V字・U字	Ⅰ-a1
137	京免	津山市	円 240m ×	集落	平地(110m)	後期	逆台	Ⅰ-b1
138	清水谷	矢掛町	円 60m × 50m	集落	舌状台地	前期(中)～中期(初頭)	U字	Ⅰ-a2
島根								
139	田和山	松江市	円 92m × 78m	なし?	独立丘陵(47m)		V字	Ⅱ-a2
140	佐太前	松江市	不定?	溝と同時期の遺構、ほぼなし	沖積低地(4m)	前期末	U字	Ⅱ-a1
141	経塚鼻	安来市	円 (50m) ×	非集落	丘陵上(45m)	前期末～中期	V字	Ⅱ-a3
142	要害	雲南市	円 (50m) ×	なし?	丘陵上(95～100m)	前期・中期	V字	Ⅱ-a3
143	古八幡付近	江津市	円 (80m) ×	集落	丘陵	中期～後期	U字	Ⅰ-a3
144	前立山	吉賀町	円 40m ×	非住居(土坑)	丘陵(310m)	中期		Ⅱ-a3
鳥取								
145	天王原	米子市	円?	非住居	丘陵(30m)	前期後葉	V字	
146	今津岸の上	米子市	円 130m × 80m		丘陵(34m)	前期後葉	V字	a3
147	妻木晩田	米子市	円 65m × 65m	何もなし	丘陵(90m)	後期前葉	V字	Ⅱ-a3
148	日下寺山	米子市	円?	何もなし?	丘陵(108m)	後期前葉	V字	
149	尾高浅山	米子市	円 130m × 60m	集落	丘陵(72m)	後期		Ⅰ-a3
150	大塚岩田	大山町	不定形??	住居あり、集落と溝の関係は不透明	台地(27m)	前期後葉	V字	
151	宮尾	南部町	円 44m × 39m		微高地(24m)	中期前葉	V字	a2
152	清水谷	南部町	円 46m × 31m	貯蔵穴のみ	丘陵(50m)	前期後葉	V字	Ⅱ-a3
153	後中尾	倉吉市	円 100m ×	集落	台地(60m)	中期	V字	Ⅰ-a3
愛媛								
154	岩崎	松山市	円? 100m ×	貯蔵穴のみ	扇状地(37m)	前期後半～Ⅱ期	逆台	Ⅱ-a1
155	久米高畑	松山市	円?	非集落か 土坑はあり	台地上(37m)	前期末～中期	逆台	Ⅱ-a2
156	来住V	松山市	円?	非集落か	台地(40m)	前期～中期中期	U字	Ⅱ? -a2

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
157	祝谷畑中	松山市	円?(150m?)	集落	丘陵(40m)	前期末～中期初頭	V字	I-b2
158	斎院烏山	松山市				前期末～中期初頭	逆台	
香川								
159	鬼無藤井	高松市	円 80m×60m	集落	沖積低地(4m)	前期後半	逆台・U字	I-a1
160	龍川五条	善通寺市	円	集落	沖積低地(23m)	前期(突帯文共伴)～中期初頭	U字	I-a1
161	五条	善通寺市	円	集落	沖積低地(20m)	前期後半～Ⅱ期	逆台	I-a1
162	中の池	丸亀市	円	集落 松菊里形住居	沖積低地(10m)	前期前半(I 期中段階)～Ⅱ期初	V字	I-a1
163	鴨部・川田	さぬき市	円	集落	谷底低地(7m)	前期前半(中段階)～中期	逆台	I-a1
高知								
164	田村	南国市	円	集落	扇状地(6～10m)	前期(中頃)～中期	V字	I-a1
徳島								
165	庄・蔵元	徳島市	円	集落? 土坑群多し	扇状地(3m)	前期中頃～中期	V字	I?-a1
166	カネガ谷	鳴門市	不定形 200m?×	集落	丘陵(85～100m)	後期	段状遺構と報告	I-b3
兵庫								
167	大開	神戸市	円 65m×45m	集落	臨海平野(4m)	前期前半	V字	I-a1
168	表山	神戸市	円		丘陵	後期		
169	熊内	神戸市	円(300m?)×	集落	扇状地(34m)	後期	U字	I-c1
170	加茂	川西市	円(300m?)×	集落	台地(40m)	中期中葉～後期		I-c2
171	寄居	たつの市	不定形	集落	丘陵谷間(40m)	後期	V字	
172	東家の上	養父市	(60m)×(30m)	非集落? 住居と環濠が重複	丘陵上(90～100m)	前期(後半)～中期(Ⅲ期)	V字	Ⅱ?-a3
173	大盛山	朝来市	円 60m×50m	非集落? 環濠内に住居1、外に4	丘陵	後期	V期	Ⅱ?-a3
大阪								
174	安満	高槻市	円 (160m)×	集落?	扇状地(9m)	前期(後半)	U字	I-b1
175	古曽部・芝谷	高槻市	不定形 (400m×200m)	集落	丘陵(70m)	後期	U字～V字	I-c3
176	東奈良	茨木市	円?(120m)×	集落	沖積平野(10m)	前期(後半)	U字	I-a1
177	田井中	八尾市	円 110m×	集落	自然堤防(9m)	前期(前半～後半)		I-a1
178	池内	松原市	円?(75m)×	集落	沖積低地(8m)	前期(中頃)		I-a1
179	東山	河南町	円 60m?×	集落	丘陵(100m)	後期	V字	I-a?1
180	野々井	堺市	円 90m×50m	集落	段丘(44m)	後期末	U字	I-a2
181	観音寺山	和泉市	不定形 450m×250m	集落	丘陵(60～65m)	後期	V字	I-c3
182	池上・曾根	和泉市ほか	円 400m×	集落	扇状地(9m)	前期(後半)～後期	U字	I-c1
奈良								
183	平等坊・岩室	天理市	円? (250m)×?	集落	沖積平野(52m)	前期～後期	U字	I-b1
184	東大寺山	天理市	不定形? (200m)×	集落	丘陵(120m)	後期	V字	I-b3
185	唐古・鍵	田原本町	円? (500m)×?	集落	沖積地(47m)	前期(新)～後期	U字	I-c1

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
186	多	田原本町	円? (350m)×?	集落	氾濫源(51~53m)	前期~中期(Ⅲ期)	U字	I-c1
187	坪井・大福	榑原市	円? (300m)×?	集落	自然堤防(61~62m)	前期~後期	U字	I-c1
188	四条シナノ	榑原市	円 150m×100m	住居なし、貯蔵穴、土坑あり	扇状地(62m)	前期前半~Ⅱ期	逆台	Ⅱ?-a1
189	川西根成柿	榑原市ほか			沖積地	前期		
190	桜井公園	桜井市	三重		丘陵(127m)	後期	V字	
191	鴨都波	御所市	円 (350m)×(250m)?		扇状地(90m)	前期(後半)~後期		I-c1
和歌山								
192	太田・黒田	和歌山市	円? (200m)×	集落	自然堤防(4~5m)	前期後半~中期(Ⅱ期)	V字	I-b1
193	堅田	御坊市	円 120m×100m	集落	自然堤防(2m)	前期(前半~後半)	U字・V字	I-a1
京都								
194	雲宮	長岡京市	円 120m×100m	集落	扇状地(10~14m)	前期前半~後半	逆台	I-a1
195	上久世	京都市	円? (100m?)×	集落	自然堤防(18m)	後期	V字	I-a1
196	木津城山遺跡	木津川市		集落	丘陵(90m)	後期	V字	
197	太田	亀岡市	円 (160m?)×	集落? 土坑墓とピット群	扇状地(100m)	前期(後半)~中期(Ⅱ期)	U字	I-a1
198	日吉ヶ丘	与謝野町	円? 100m×?	非集落 工房?あり 住居は溝外	低丘陵上	中期(Ⅲ期~Ⅳ期)		Ⅱ-a2
199	須代	与謝野町	円? (150m?)×	集落? 工房か	河岸段丘(20m)	中期(Ⅳ期)~後期	U字	I?-a2
200	扇谷	京丹後市	不定形 (250m)×(50m)	不明 住居なし	小丘陵上(55m)	前期(後半)~中期(Ⅱ期)	V字	Ⅱ?-b3
201	途中ヶ丘	京丹後市	(100m?)×	不明	台地上	前期~後期	U字	I?-a3
202	浦明	京丹後市		集落	河岸段丘(12m)	中期(Ⅱ期)	V字	
滋賀								
203	下之郷	守山市	円 300m×220m?	集落	氾濫原(94m)	中期(Ⅲ期~Ⅳ期)	U字・逆台	I-c1
204	二ノ畔・横枕	守山市	円 400m×	集落	氾濫原(94m)	中期(Ⅳ期)~後期	U字	I-c1
205	服部	守山市	円 400m×?	集落	扇状地(88m)	中期(Ⅲ期)~後期	U字	I-c1
206	伊勢	守山市	円 250m×	集落	扇状地(98m)	後期	逆台(皿状)	I-b1
207	針江北・川北	高島市	円 143m×	集落	氾濫原(87m)	後期	逆台(皿状)	I-a1
208	下鉤	栗東市	円 400m×?	集落	氾濫原(95m)	中期(Ⅳ期)~後期	逆台(皿状)	I-c1
三重								
209	大谷	四日市市	円 130m×	集落	台地上(20~30m)	前期(中段階~後半)		I-a2
210	永井	四日市市	円 (150m)×	集落?	台地上(20~30m)	前期(後半)	U字	I?-a2
211	大城	津市	不定形? 90m×	集落	丘陵(30~40m)	後期~古墳	U字	I-a3
212	納所	津市			沖積平野(5m)			
213	林垣内	津市	円?		丘陵端部	後期~古墳		
214	堀町	松坂市	円 130m×50m	集落	自然堤防(2m)	後期	U字	I-a1
215	筋違	松坂市		集落 畑	沖積平野(5m)	前期前半	V字	I?-a1
216	村竹コノ	松坂市	円(300m?)×	集落	沖積地	後期	U字	

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
217	天王	鈴鹿市	円			後期～	V字	
218	天花寺 丘丘陵	嬉野町			丘陵(37m)	後期	V字	
愛知								
219	見晴台	名古屋市	円 230m×	集落	台地縁辺(15m)	後期	V期	I-b2
220	三王山	名古屋市	円 100m×	集落	丘陵縁辺(30m)	後期～古墳	U字	I-a2
221	平手町	名古屋市	円?	集落? 西志賀貝塚北限か	沖積平野(5m)	中期(Ⅱ期～Ⅳ期)	U字	
222	松河戸	春日井市	円 120m×80m	住居未検出・土坑・墓検出	沖積平野(12～14m)	前期(中段階～後半)	逆台	Ⅱ?-a1
223	朝日	清須市	円 (350m)×(300m)	集落	後背湿地(2m)	中期(Ⅱ期)～古墳	逆台・V字	I-c1
224	阿弥陀寺	あま市	円 (450m)×(330m)	集落	沖積平野(0m)	中期(Ⅲ期)～後期	U字・逆台	I-c1
225	梅坪	豊田市	円 150m×	集落	低位段丘(38m)	後期～	V字・U字	I-a2
226	猫島	一宮市	円 200m×	集落	沖積平野(8m)	中期(Ⅱ期～Ⅲ期)	逆台	I-b1
227	山中	一宮市		住居と方形周溝墓を区画する条溝	氾濫原(5m)	前期(後半?)	U字	
228	伝法寺 野田	一宮市	円 35m×	集落	自然堤防(5m)	中期(Ⅳ期)	U字	I-a1
229	赤目子	蒲郡市				後期		
230	若宮	豊橋市				後期		
231	中根山	吉良町						
静岡								
232	伊場	浜松市	円 150m×120m	集落	海岸平野(1m)	後期	V字・U字	I-a1
233	伊場遺跡群(梶子・梶子北・中村)	浜松市	円?(400m)×	集落	海岸平野(0m)	中期(Ⅲ期)・後期	逆台	I-c1
234	松東	浜松市	円 (80m)×	集落?(住居未検出・土坑・ピット)	沖積平野(5m)	後期	U字	I?-a1
235	山の神	浜松市	円 (200m)×(170m)	集落	沖積平野(5m)	後期	U字・逆台	I-b1
236	西通北	静岡市		内部未調査	砂礫洲(6m)	中期中葉	U字・逆台	
石川								
237	西念・南新保	金沢市	円 90m×70m	集落	低地(3m)	中期(Ⅳ期)～後期	V字	I-a1
238	河田山	小松市	円(50×30m)		丘陵	後期	V字	
239	東の場タケノハナ	羽咋市				中期～後期		
240	鉢伏茶臼山	かほく市	不定形	集落	丘陵	後期		
241	杉谷チャノバタケ	中能登町	円:1号(85m)×(47m)、不定形:2号(70m)×	集落	丘陵(60～110m)	中期(Ⅳ期)(2号)、後期(1号)	V字	I-a3
242	北吉田フルワ	志賀町	不定形		丘陵	後期		
富山								
243	新堀西	富山市	円?	集落?		後期		
新潟								
244	古津八幡山	新潟市	不定形 (130m)×(100m)、(100m)×	集落	丘陵(53m)	後期	V字	I-a3

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
245	裏山	上越市	不定形 120m×60m	集落	丘陵(90m)	後期	U字	I-a3
246	斐太	妙高市	不定形 50m×		丘陵	後期～古墳		I?-a3
247	山元	村上市	不定形 100m×25m		丘陵(40m)	中期末～後期		I?-a3
248	釜蓋	村上市	円 (170m)× (100m)	集落?	低地	後期～古墳		I?-a1
岐阜								
249	宮塚	各務原市	円 60m×	非集落?	沖積地(27m)	中期	逆台	II?-a1
長野								
250	篠ノ井	長野市	円 150m	集落(溝外にも住居あり)	氾濫原(350m)	後期		I-a1
251	餅田・西一里塚	佐久市			台地(685m)	後期		
252	戸坂	佐久市			台地(710m)	後期		
253	城の前	東御市				後期		
254	大門田	東御市			河岸段丘(550m)	後期		
255	八名の 上	東御市				後期		
256	上木戸	塩尻市	円	集落(溝外にも住居あり)	台地(700m)	後期	V字	
257	中村B	伊那市	円 (100m)×		河岸段丘(648m)	後期		I-a2
258	座光寺 原	飯田市			扇状地(540～ 550m)			
259	恒川遺 跡群	飯田市			扇状地(430m)			
群馬								
260	清里・庚申塚	前橋市	円 140m×112	集落	台地(165m)	中期後半(竜見町)	V字	I-a2
261	西原	前橋市	円 (145m)×	集落	台地	後期終末～古墳 前期	逆台	I-a2
262	中村	渋川市	円 (60m?)×	集落 住居・周溝墓	河岸段丘(162m)	中期		I-a2
263	日影平	沼田市	円 110m×85m	集落 溝外にも住居あり	段丘(384m)	後期後半(樽)	V字	I-a2
264	町田小沢Ⅱ	沼田市	(96m～)	集落	段丘(比高13m)	後期終末	V・逆台	I-a2
265	高崎城 三ノ丸	高崎市	(120m)	集落	台地	後期	逆台	I-a2
266	日高	高崎市	円 130m×110m	集落	扇状地	後期		I-a1
神奈川								
267	そとごう	横浜市	方 95m×65m	住居・周溝墓	台地(50m)	後期	V字	I-a2
268	殿屋敷C区	横浜市	円 82m×73m	集落	丘陵先端(60m)	後期	V字・逆台	I-a2
269	朝光寺 原	横浜市	円 180×165m	集落	台地(28～45m)	中期末(宮の台)	V字	I-b2
270	大塚	横浜市	円 200m×130m	集落	台地(50m)	中期末(宮の台) ～後期初頭(朝光寺)	V字	I-b2
271	折本西 原	横浜市	円(300m)×	集落	台地(25m)	中期(宮の台)	V字・逆台 逆	I-b2
272	四枚畑	横浜市	方 (90m)×	集落	台地(50m)	後期前半(朝光寺 原)	逆台	I-a2
273	網崎山	横浜市	円 150m×150m	集落	台地(30m)	中～後期	V字・逆台	I-b2
274	大原	横浜市	円 130m×100m	集落(溝内外に周溝墓あり)	台地(44m)	後期(久ヶ原・弥生 町)	逆台	I-a2

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
275	権田原	横浜市	方 240m×150m	集落	台地(25m)	中期(宮の台)	V字・逆台	I-b2
276	中里	小田原市		集落	沖積低地	中期中頃		自然流 路?
277	神埼	綾瀬市	円 103m×65m	集落	台地(24m)	後期	V字	I-a2
278	原口	平塚市	円 (72m)	集落	台地(72m)	後期		I-a2
279	海老名 本郷	海老名市	円 (240m)×(80m)	集落	台地(20~22m)	後期	V字	I-b2
280	西方A	茅ヶ崎市	不定形? 400m× 260m	集落	台地(13m)	中期末	V字	I-c2
281	臼久保A	茅ヶ崎市	方形? 150m~	集落		後期		
282	砂田台	秦野市	円 (120m)× (160m)	集落	台地(55m)	中期	V字・逆台	I-a2
283	千年伊 勢山台	川崎市	円? (100m)×	集落	台地(40~42m)	後期後半	V字	I-a2
東京								
284	山王	大田区	円 (130m)×(90m)	集落	台地(24m)	後期	V字	I-a2
285	四葉地 区	板橋区	円 (100m)×(90m)	集落?	台地(15m)	後期	V字	I?-a2
286	赤羽台	北区	円 175m×132m	集落	台地(20m)	後期	V字	I-b2
287	飛鳥山	北区	円 260m×150m	集落	台地(20~25m)	中期末	V期	I-b2
288	方南峰	杉並区		集落	台地	後期		
289	下山	世田谷区	円 (90m)×(70m)	集落	台地(35~38m)	後期	逆台	I-a2
埼玉								
290	中里前 原	さいたま 市	円 100m?	集落	台地(14m)	後期	V字	I-a2
291	中里前 原北	さいたま 市	円 80m×60m	集落	台地(14m)	後期	V字	I-b2
292	北袋新 掘遺跡	さいたま 市	? (300m)×		台地	後期		I-b2
293	深作東 部遺跡 群	大宮市	円 50m?×	集落	台地(10~12m)	後期末(前野町)	V字	I-a2
294	池上	熊谷市				中期中頃	V字	非環濠集 落
295	北宿	浦和市	円 (60m~)×	集落	台地(15m)	後期	V字	I-a2
296	馬場北	浦和市	円 70m×90m	集落	台地(16m)	後期	V字	I-a2
297	木曽良	羽生市	円 70m×50m	集落	台地(14m)	後期(弥生町)	V字	I-a2
298	午王山	和光市	円 (220m)× (110m)	集落	台地(20~24m)	中期後半~後期	V字	I-b2
299	吹上	和光市	円 200m×200m	集落	台地	後期(前野町)		I-b2
300	花ノ木	和光市	円? (200m)×	集落	台地	中期後半~後期		I-b2
301	北通	富士見市	円 (300m)× (200m)?	集落	台地	後期		I-b2
302	南通	富士見市	円?	集落	台地	後期		
303	i伊佐島	ふじみ野 市	円? (80m)×	集落	台地	後期		I-a2
304	稲荷山 東	朝霞市	?		台地	後期		
千葉								
305	国府台	市川市	円? (220m)× (100m)	集落	台地(20~25m)	中期(宮の台)	V字	I-b2
306	草刈	市原市	円 径100m(古)、径 150m(新)	集落?	台地(40m)	中期		I-a2

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地(標高m)	時期(土器型式)	断面	分類
307	大厩	市原市	円 (100m) ×	集落	台地(30m)	中期	V字	I-a2
308	台	市原市	円 (185m) × (125m)	集落	台地(19m)	中期(宮の台)	V字	I-b2
309	根田代	市原市	円 205m × 135m	集落	台地(20m)	中期(宮の台)	V字	I-b2
310	南総中	市原市	円 210m × 95m	集落	台地(48～50m)	中期末～後期初頭	V字	I-b2
311	潤井戸 西山	市原市	円? (170m) × (130 m)			中期		
312	南岩崎	市原市				中期		
313	戸張作	千葉市	不定?			中期		
314	高岡大山	佐倉市	円 50m × 50m			終末～古墳		
315	石川阿ら 地	佐倉市	円? 50m ×			終末～古墳		
316	大崎台	佐倉市	円 150m × 140m	集落	台地(30m)	中期	V字	I-b2
317	田原窪	八千代市	円 130m × 120m			中期		
318	道庭	東金市	円 (230m) × (160m)	集落	台地(50m)	中期～後期		I-b2
319	根形台 遺跡群	袖ヶ浦市	円	集落	台地(30～60m)	中期	V字	
320	鹿島台	君津市		集落	台地	中期～後期		I-b2
321	萱野遺 跡	館山市				後期		
茨城								
322	屋代B	龍ヶ崎市	?	集落?	台地(23～24m)	中期(Ⅳ期)	V字	

が大きい。著名な神奈川県大塚遺跡（I-b2型）の規模は200×130m程度で、竪穴住居85棟、掘立柱建物10棟、土坑7基などが検出されている。

竪穴住居の6割に重複関係があるため1時期には概ね150人程度の人口が想定されているが、関東地方の環濠集落も短期間であるものが多く、大塚遺跡も中期後半（宮ノ台期）の期間内に成立・展開・終焉を迎え、断面V字状の環濠も早くより機能を停止している状況が発掘調査により明らかにされている。

## 2.環濠集落の評価

環濠集落の変遷を検討した結果、西日本においても、東日本においても農耕文化が本格的に定着する段階で、中小の農耕集落と思われる環濠集落が各地域で出現するという事例が多い。このため、環濠集落の大部分（分類上の約56%）は“農耕文化開始期における初期の農村”という歴史的な意義が付与されるであろう。

ただし、これまでみたように、環濠集落は源流となる韓国地域においても局所的な集落であり、その後の日本列島内における展開においても常に希少な集落形態であった。したがって、

農耕文化が定着する場合に必ずしも環濠集落が成立するのではなく、分布の地域差が顕著であることは注意が必要である。

例えば 2006 年の『弥生集落の成立と展開』の中では西日本で住居が認められる遺跡（＝集落）として 755 遺跡が集成されているが（埋蔵文化財研究会 2006）、このうち環濠集落や環濠遺跡の可能性の高いものとしては約 70 余例、集落総数の 10 分の 1 にも満たないなど、農耕文化定着期の環濠集落は集落群全体でみれば稀少な事例なのである。

分布においても偏在があり、本論で指摘したように、北部九州における弥生時代早期～前期前半においては、環濠や溝が認められる場合でも、住居などの遺構が確認できないため、積極的に集落と断定できる遺跡はほぼ皆無である。

弥生時代前期後半は、西日本各地に農耕文化が定着していく様相が知られているが、環濠集落が顕著なのは瀬戸内東部～近畿地方にかけてであって、北部九州から瀬戸内西部にかけては貯蔵穴専用の環濠が多く、山陰地域は空白地を環濠で囲み、それら以外の地では環濠そのものがみられない、といった地域的な差が大きい。弥生時代中期以降には農耕文化の定着がより東に延伸するが、中期～後期における環濠集落は関東南部に集中し、中部地域や北陸地域、若しくは関東以北の農耕文化定着段階に環濠はほとんどみることができないのとは対照的である。

日本列島における農耕文化開始期には、各地域において中・小の環濠集落（農耕集落）が築かれた傾向を認めるが、しかしながら、農耕文化開始期の諸集団の中には環濠集落を軸として成立する集団と、環濠を営まない集団とが並存しており、“標準的な弥生集落＝環濠集落”というイメージに反し、むしろ、環濠集落を営んだ集団は少数派を占めるものであったと評価することができる。

すなわち、日本列島に農耕文化が定着する過程においては、文化の伝播と共に、様々な諸集団が移動・拡散していったと考えられるのであるが、各集団においては、共同体の伝統的系譜や文化的背景がそれぞれに存在しており、そのうちの一部の特定の農耕集団たちが、自らの出自（アイデンティティ）や、他集団への防御意識などから、居住域と他とを区別・区画するために環濠を掘削したと考えられるのである。

特に関東地方の農耕文化定着期（弥生時代中期～後期前半）における環濠集落は方形周溝墓とセットで台地上に築かれ、規模や構造も均一性の強いものが多く（I-a2 や I-b2 型）、それら環濠集落が最も多く分布する関東南部においても環濠集落は決して均等には分布しない。中期後半においては神奈川県横浜市域、千葉県市原市域などの一帯に集中的に環濠集落が分布しており、対して東京、埼玉地域では、むしろ後期を中心に環濠集落が分布するなど、その存在



時期に差異が認められているのである。これらの事実からしても、環濠集落とは、様々な小集団の中でも、集落に環濠を巡らすという、特定の文化的背景を有する農耕集団たちによって営まれた可能性が高いといえるであろう。

### 3.高地性集落と環濠との関係

環濠全体（196 例）の中で、その立地が高地性を示す割合は 20%を占めている。具体的には小型高地性集落（Ⅰ-a3）が 16 例（8%）、中型高地性集落は（Ⅰ-b3）3 例（2%）、大型高地性集落（Ⅰ-c3）は 5 例（3%）であり、小型高地性非集落（Ⅱ-a3）が 9 例（5%）、中型高地性非集落が（Ⅱ-b3）3 例（2%）であって、大型高地性非集落（Ⅱ-c3）は 0%である。つまり高地性の環濠集落は、環濠全体の中で 15%、高地性の非環濠集落は 5%を占めることになる。

ただし、広島県助平遺跡（Ⅱ-a3）で典型的にみられるような、高地性の非環濠集落における環濠は聖域や空白地を取り囲むという特徴があるために“集落を守るための環濠”という概念は当てはまらない。それが防御的な観念の発露であるとしても、むしろ環濠の機能としては区画や象徴的な意味合いが高いと考えられるからである。

高地性の非環濠を除いた場合、高地性集落は環濠全体の 15%、すなわち、環濠全体の 4 分の 1 については高地性の環濠集落となる。高地性の環濠集落は学史上において戦闘や防御のための集落という見解が大勢を占めてきた経緯があるため、もう少し、高地性集落と環濠との関係性について検討してみたい。

高地性集落については、戦闘・防御用という説以外にも避難用や通信用の施設とみる見解がある。都出比呂志は高地性集落を急峻な山頂や尾根上に立地する、水稻栽培に不便な場所のもの（A 型）と平地との比高差の少ないもの（B 型）とに細分し、寺沢薫も高地性集落について平地との比高差から比高 40m以上の①類型と、それ以外の②類型とに区分している（寺沢（薫）1978）。

高地性集落のみに限定しても、上記のように幾つかの類型が設定できることから、その様相や性格が多様であって、仮に高地性集落を戦闘に起因する集落とみなした場合においても、これを実際の戦闘用とみなすか、避難用とみなすか、通信用とみなすかによっては、その復元する戦闘の実像が異なってくる。この違いは弥生時代の具体的な戦闘像を考える上では非常に重要となるだろう。

本章で検討した分類に基づけば、高地性の環濠集落については平面規模が 150m以下の小型の環濠集落が多数を占め、中・大規模の環濠集落は比較的に少ない。また、小型の環濠集落に

については、防御的な機能の高い様相のものと、住居は存在するが生活の痕跡が希薄な、のろし台や見張り台のような、集落というよりも非定住的な特殊な機能を持つものとの両者が認められる。

防御的な様相が高いものとしては、石川県杉谷チャノバタケ遺跡が挙げられる。チャノバタケ遺跡はA地区の第1環濠とC地区の第2環濠があり、このうち、A地区では住居の5棟中2棟が、C区では3棟中の2棟が火災住居で罹災するなど緊迫した様相を示す。麻柄一志が調査した成果によると、北陸地方の高地性集落には火災住居が多く、かつ火災住居が高地性集落の出現と軌を一にして急増していることから、これらを実際の戦乱に起因した現象と推定している（麻柄 1999）。

直接的に火災や戦闘の痕跡が残る集落跡は少ないが、集落形態としても、例えば山口県岡山遺跡では、環濠内からは壺・甕・鉢・高坏など土器組成を網羅し、居住域を急峻な大溝が取り囲んでいたと想定される。この環濠に関しては平地からの比高差 30m、三方が急斜面な地点に大規模な空濠を築いているものであって、その立地のあり方から防御的な機能を濃厚に備えている可能性が高い。

ただし、これら環濠から出土する土器は上層から下層まで同一の形態であり、環濠が住居跡に切られており、比較的短期間のうちに環濠は機能を失い埋没する一方、集落は環濠埋没後も継続していたと判断できる。したがって、防御的な機能の想定に関しては一時的な緊張状況の反映、小規模な不慮の奇襲や攻撃に備える状態の可能性が高く、集落が普遍的に防衛機能を維持したようなものではないと評価しておきたい。

一方、同じく小型の高地性環濠集落においても、チャノバタケ遺跡や岡山遺跡のような様相とは異なる高地性集落も存在する。福岡県西ノ迫遺跡は見晴し良好の標高 100～131mという急峻な地形に深い濠を巡らしているが、環濠の規模は 35mと非常に小規模なもので、環濠内からは住居跡が検出され煮炊き用の甕も検出されている。一方で、出土遺物が極めて少ないことから、調査報告者は「生活臭がない」と表現し、生産・埋葬・定住生活を欠いた目的遂行のためだけの特別施設、具体的にはのろし台のようなあり方を想定している。

高地性集落ののろし台的な機能は、早く都出比呂志が指摘しており（都出 1974）、中期に多い瀬戸内沿岸の高地性集落について、伊藤実が山上から航路を監視するような機能を想定している（伊藤（実） 1991）。小型の高地性環濠集落の中には、このような、みはり台やのろし台的な存在形態も一定数営まれたと評価できる。少なくとも、弥生時代の戦闘像として環濠で守られた集落を集団で攻撃するようなイメージの戦闘は皆無とはいえないものの、極めて希少な事

例としなければならない。

上記のような、小型の高地性環濠集落に対し、事例の少ない中・大規模の環濠集落については、集落規模も大きく複雑であることから、単なる防御用、戦闘用と一概に規定することは難しい。大阪府観音寺山遺跡は丘陵尾根の広い範囲に広がる大集落で、100棟を超える竪穴住居跡に、尾根の等高線に沿うように非常に大規模な溝が掘削されていた。この集落は弥生時代後期前葉～後葉の比較的長い期間に存続しており、石鏃や尖頭器、投弾といった武器が多く一定の緊張した社会状況が伺える一方、敲石や磨石といった堅果類を食用にするための道具や、石包丁などの他、朱精製の石杵や研磨用の砥石、海産物獲得用の蛸壺など、様々な生産活動の痕跡が存在している。

また、環濠は後期前葉の短期間のうちに埋没するが、その後も集落そのものは存続し、集落形態や配置はあまり変化が認められない。そのため、環濠が築かれた集落の成立初期には防御的な機能が想定されたかもしれないが、環濠は短期間に埋没し、その後は山上の生活に適した、堅果類を主とする通常の、安定した集落が営まれたと考えられている（若林 2013）。

このように、通常の農耕を生業とするには不適な高地性における環濠集落についても、それを全て単純に“環濠＝防御用”とみなすことは難しい。しかしながら、何らかの社会的緊張や防御といった戦乱が想定できる高地性環濠集落も存在するため、環濠を全く防御とは関係がないとみなすこともまた困難である。

近年の高地性集落論では、多角的にその性格の模索が追及されているが（森岡 2002）、高地性の環濠集落についても極めて多義的な様相が認められるのであって、これまでの研究で多かったように、環濠集落や高地性集落を無条件的に防御性とみなし、そこから弥生時代の戦闘像を描く方法についての再検討が必要であることだけは確実である。

#### 第4節 環濠集落と弥生時代の戦闘像

前節において、環濠集落の中で大多数を占める中・小型の低地・台地に存在する環濠集落は、その特定農耕集団との関連性を指摘したが、もちろん、環濠集落の全てが初期の農耕集落と評価することはできない。あくまでも本論で分類を試みた確実な集落としての“環濠集落”の中で、最も多い（56%）中・小型の低・台地に営まれた環濠集落形態（I-a1型・I-a2型・I-b2型）については、特定の文化的アイデンティティーを背景とする初期農耕民の環濠集落である

と評価するものである。

それ以外の環濠集落については、防御的な機能を完全に否定するものではなく、高地性集落としての環濠集落の中には防御的な機能が濃厚なものも存在するので、環濠掘削の一因として防御的な認識が存在した可能性も認めるが、それでも、弥生時代の社会においては環濠集落そのものが希少な集落形態であり、更に軍事的な要素が限定できる集落となると、極めて特殊な、限定的な現象とせざるを得ない。弥生時代の集落像については決して“環濠＝防御用＝戦闘”という図式を一般化することはできないのである。

環濠の機能は多義的であるため、その防御的な機能については、それぞれ個別毎に検討しなければならないが、環濠と戦闘との関係性を考える場合、環濠遺構以外の武器や殺傷人骨の普及や定着といった、実際に戦闘を示す可能性が多い考古資料との整合性が重要な意味を持つであろう。

遺物組成からみると、高地性集落においては出土石器の6割以上を武器で占める武器卓越型の集落が存在することが指摘されており（禰亘田 2002）、これら集落については、何らかの社会的な緊張状況の下で集落が存在した可能性が考えられる。しかしながら、このような集落は弥生集落全体では極めて例外的な存在である。

また、環濠集落の分布の偏在性について考えると、弥生時代においては、環濠集落が最も濃厚に分布する関東地方南部において鉄器・石器共に武器の出土が極めて少なく、武器はほとんど存在しないにも関わらず環濠が発達するという現象が挙げられる。これに対し、武器や殺傷人骨が多数みられ、総合的に戦闘の痕跡が最も多い北部九州地方については、弥生時代前期末は貯蔵穴専用の環濠が大部分で、弥生時代中期には環濠遺構そのものがほとんど営まれることはないなど、武器・殺傷人骨の盛行と、環濠の発達とが決してリンクしないのである。

すなわち状況証拠としては、考古学的な事象として武器や殺傷人骨が多い地域（北部九州）では集落に伴う環濠（環濠集落）が少なく、逆に武器や殺傷人骨など戦闘の痕跡がほとんどみられない地域（南関東）では環濠集落が発達するという、戦闘の考古資料と環濠との反比例的な関係性が指摘できる。これらのことは、これまで“環濠集落＝標準的な弥生集落＝防御集落”として説明されることが多かった環濠集落の図式が妥当ではないことを物語っているだろう。

既往の研究においては、弥生時代の始まりについて稲作の開始・武器の出現・防御集落（環濠集落）がほぼ同時期に始まるとされ、“弥生時代の開始＝戦争の開始”という大命題が樹立されてきた（春成 1990a、佐原 1992）。しかしながら“環濠集落＝標準的な弥生集落＝防御集落”といった一般図式が支持できない以上、農耕社会の開始と共に、普遍的に集落が防御状態にあ

るような戦闘が始まったという、戦争の開始についてのパラダイムは転換されなければならない。

もちろん、筆者は環濠の全てが戦闘と無関係であると主張するものではなく、武器が卓越する環濠集落や、焼失住居が存在する高地性の環濠集落などについては、環濠の機能として防御的な機能を十分に考えており、そもそも弥生社会は武器が出現し、戦闘が本格化した時代であるという歴史認識はこれを追認するものである。また、環濠集落の文化的な意義としては、農耕文化との関連性が高いことから、弥生文化（農耕文化）の社会的側面における指標としての可能性（藤尾 2013）も認めることができるであろう。

ただし、本論文の課題である戦闘との関連性に限定すれば、第 1 章でみたように弥生時代の戦闘形態は、極めて小規模な奇襲や待ち伏せによる戦いが主流であったと評価するものであって、それら小規模な戦闘の散発的な状況を“戦争”と位置づけることには異を唱えたい。

還元すれば、弥生時代においては普遍的に集落が環濠による防御状態にあるという従来の戦闘像や、こういった戦乱を“倭国乱”といった政治的な現象と直接的に結び付けるような集団的な戦闘のイメージについては、これを改めなければならないと結論づけるものである。

以上、第 1 章と第 2 章において、弥生時代の具体的な戦闘形態の復元に努めた。第 3 章では武器の副葬や集落における武器保有の地域差、鉄製武器の生産といった現象の社会的な背景などを探ることで、研究の対象を武器の社会的価値や武装集団原理といった象徴的な事象に広げたい。



### 第3章 副葬・生産・保有の様相からみた弥生集団の武装度





### 第3章 副葬・生産・保有の様相からみた弥生集団の武装度

#### はじめに

弥生時代は定型的な武器が出現する時代であり、石製・青銅製・鉄製の各種武器が認められるようになる。

第1章においては武器と殺傷人骨の関連性から、弥生時代の具体的な戦闘像を復元し、第2章においては、防御集落と目されることの多かった環濠集落の再検討を行い、弥生時代の戦闘論の見直しを試みた。これらを受け第3章では、より抽象性の高い弥生時代の武装集団や軍事組織の実態について検討を行う。

弥生時代における具体的な軍事組織像に関しては、古墳時代の軍事組織像を巡る検討のように、学問上で活発な論争が議論されることはなかった。これは、弥生時代の武器に関しては実用品か祭具かを巡る議論があり、武器を実用具とみなす視点が少なかったことに起因する。直接的に弥生時代の軍事組織を示すような考古資料が存在せず、また、弥生時代の軍事組織に関する文献などの補助的な資料もほぼ皆無であることも、軍事組織の議論がみられなかった原因の一つといえるであろう。

直接に検討できる資料がなく、学術的な研究の蓄積も顕著でないために、弥生時代の軍事組織や武装集団像を検討することは極めて困難であり、資料から直接的に検討することは不可能と断じてよい。ただし、序章の方法論的前提の項目で述べたように間接的な研究方法、つまり考古資料としての武器のライフヒストリーの中における、“生産”や“廃棄”などの遺構を分析することにより、当時の武器が果たした社会的な背景の復元を通じて、武装集団の社会的な存在を検討することは可能である。

本章では武器の副葬や生産、武器の出土状況などの諸相を検討することで、弥生時代における武器の社会的な価値体系や、武器の保有階層を推定し、このことを通じて弥生時代における武装集団について考えてみたい。

#### 第1節 弥生時代の武器を巡る研究史

弥生時代の墓域から出土する武器としては、主に北部九州地域において早・前期には磨製

石鏃・石剣があり、中期初頭～中期後半は青銅製の銅剣・銅戈・銅矛が副葬され、中期後半以降は鉄矛・鉄鏃などの鉄器が副葬される。これら弥生時代の武器に関して森貞次郎は青銅製武器全般を呪術的な祭器とみなすなど（森（貞次郎）1966）、その研究初期においては、武器の実用性に疑問を呈する見解が多数を占めていた。細型の銅利器については武器とみなす立場もあったものの（佐原・近藤 1974）、戦闘や軍事組織を研究する以前に、そもそも弥生時代の墓域出土の武器が実用的な武器か祭器かを巡って議論が行われ、これから積極的に戦闘形態や武装集団論を検討する視点が未成熟であったといえよう。

そのため、弥生時代の剣・矛・戈を巡る研究は、大部分は型式学的な編年や流通、系譜論、祭祀論などを主要な論点として研究が推移し、反面、弥生時代の戦闘論は、副葬武器以外の、主として環濠集落や石鏃を中心に展開することになるのである。

1990年代以降に入って、橋口達也は石製武器の使用痕跡（石剣の研ぎ直し）や人骨に嵌入した武器を詳細に分析し、従来、宝器と目されるような武器型の遺物について実用の武器であると認識し、このことから、ようやく剣・矛・戈を用いた弥生時代の具体的な戦闘像を分析する環境が整備されるようになった（橋口 1992・1995）。近年においては、大藪由美子による骨切創の実験的研究や（大藪 2008）、青銅武器の使用痕跡の分析からも（柳田 2014）、青銅製武器の実用具としての側面が認識されてきた。

これ以降、弥生時代の具体的な戦闘像の検討が進むものの、“倭国乱”という文献的な資料の影響が非常に大きく、弥生時代の戦闘の背景に関しては政治的、又は経済的な、やや観念的な解釈が志向される場合が多く、具体的な軍事組織像に関する学術的な検討について言及されることは極めて少なかった。このことは、古墳時代の軍事組織像の復元が熱心に取り組まれたのとは対照的なあり方をしている。

もちろん、弥生時代の軍事組織や武装集団像を直接的に復元する考古資料は皆無であるが、これまでの発掘調査事例や実証的な研究の蓄積によって、武器を巡る生産や副葬の状況に関する知見は飛躍的に増大している。また近年では、武器を体系的に検討することで武器の階層・地位など、その社会的な背景を検討した寺前直人の研究に代表されるように、武器の研究を介して、その社会性や集団性を検討することの有効性が示されている（寺前 2010）。

本章では、寺前が試みたような、武器を媒介とした社会や集団性の解明という研究方法により弥生時代の軍事的な諸関係を検討したい。ただし、寺前が石剣や石戈、石棒といったモノの検討を主眼としたのに対し、序論で述べたような方法論、主として武器の副葬や生産における遺構面の検討から、弥生社会における武器の取り扱いや価値的な背景を想定し、この問題に取

り組むこととする。

## 第2節 弥生時代の武器副葬にみる武器の社会的価値

### 1. 弥生文化開始期における石製武器の副葬とその社会的背景

弥生時代はその開始段階より定型化した武器が存在する。弥生時代早期の佐賀県菜畑遺跡は水稻耕作に関連した生産遺跡であるが、この遺跡から大陸系の磨製石剣や磨製石鏃など、実用的な石製武器が出土している。

磨製の武器形石器は、大陸では遼東半島から朝鮮半島にかけて分布する型式と同型式であり、日本列島における最も古いものは、佐賀県菜畑遺跡の山の寺式・夜臼Ⅰ期の包含層から磨製石鏃が、夜臼Ⅱa期の包含層から磨製石剣が出土しており、夜臼Ⅱb・板付Ⅰ期には北部九州を中心に広範囲に磨製石剣が出土する（下條 1991）。

下條信行は大陸系磨製石器について第1段階と第2段階とに大別し、第1段階はa・b・cの3小期に区分し、a期は大陸系磨製石器が北部九州に限られる段階、b期は北部九州で改変された磨製石器が瀬戸内に広がる段階、c期は地域的な石器が出現する段階としたが（下條 1994）、これら西日本に分布する大陸系磨製石器の組成としては武器（磨製石鏃、磨製石剣）と並んで生産用具（石包丁・石鎌）や工具（伐採斧、加工斧）が存在することが知られている。

このことから、巨視的な視点にたてば、弥生文化（農耕文化）成立期の農耕民たちは、農耕のための生産具や、道具製作や開発行為に必要な工具を保有すると同時に、戦うための石剣や石鏃で武装した集団であったと評価することができるのである。

ただし注意しなければならないことは、国立歴史民俗博物館の放射性炭素年代に基づく年代観の見直しによって、灌漑式水田が出現する山の寺式・夜臼Ⅰ期が前10世紀後半、弥生時代前期の開始（板付Ⅰ式）が前8世紀初頭と指摘された（藤尾 2004、2009、2013、2014）。この長期的な編年観によれば、水稻農耕の開始時期（山の寺式・夜臼Ⅰ期）と農耕集団の武装化が北部九州に広範に成立する（夜臼Ⅱb・板付Ⅰ期）のとは約100～150年の時間差が存在することになる。

福岡県雑餉隈遺跡では第15次調査において石剣や石鏃が副葬されている4基の墓が検出されている。墓の形態は木棺墓で、SR-003には有柄式磨製石剣1、有茎式磨製石鏃3が、SR-011には有柄式磨製石剣1が、SR-015には有柄式磨製石剣1、有茎式磨製石鏃5が夜臼式の土器

壺などと共に副葬されていた。また、板付Ⅰ式古段階の福岡県田久松ヶ浦遺跡では、SK206 から有柄式磨製石剣 1、有茎式磨製石鏃 1 点が、SK218 からは有茎式磨製石鏃 2 点が出土しており、弥生時代早期より個人を埋葬するに際して武器を副葬するという社会的行為が行われていたことが明らかである。

磨製石剣を副葬する風習は朝鮮半島に起原をもち、大陸系磨製石器の流入と共に北部九州に成立したものと考えられる。嶺南地域の墳墓出土の磨製石剣を分析した平群達哉は、嶺南地域の石剣の副葬行為について、その副葬位置から佩用を示すものや、僻邪の性格をもつなど、幾つかの機能を想定している（平群 2008）。

日本列島における磨製石剣や磨製石鏃を副葬した墓においては、棺内で石剣、棺外へは石鏃を副葬するといった配置の相違点や、石剣は被葬者の足元方向に、鏃は頭方向へといった配置原理の共通の規範が確認できることが指摘されており、石製武器を副葬する墓には、一定の規範や観念が看取されると推察できる（山崎（頼人）2009）。また副葬品として選択される武器は一体式磨製短剣が多く、組合せ式磨製短剣はもっぱら集落遺跡から出土するなど、副葬時に対する武器の取捨上において選択が行われていることも指摘されており（寺前 2010）、弥生時代早・前期の北部九州地域においては、既に儀礼に際する選択原理や指向など、武器に対する社会的な価値体系が、恐らく武器の流入に付随した思想や儀礼の一環として存在したと考えられる。

他方、弥生時代の開始期においては、武器の存在や武器の副葬と並んで、第 1 章でみたような実際に武器によって殺傷した事例、すなわち武器による暴力的な活動も生起していた。その早い事例としては、弥生時代早期の福岡県新町遺跡 24 号墓で被葬者の左大腿骨に磨製石鏃が嵌入した状態で出土しており、既に弥生時代早期においては、単に完形品を死者に供えるという儀礼的な行為のみならず、武器の出現、武器の副葬、殺傷人骨の存在といった戦闘や暴力に関する考古学的な資料（佐原 1999）が出揃ってくる。

上記のように、弥生文化とは、相対的にみるならば、成立の早い段階において武器形の利器を集落内で所持し、被葬者に対しては武器を副葬する行為を行い、状況によってはその武器を実際に対人戦闘に用いるような文化、農耕生産と共に、武器に象徴される武威や暴力といった価値観を内包する社会システムとして構成されていたと評価することができるだろう。

## 2. 北部九州における金属製武器の副葬とその社会的背景

日本列島においては、弥生時代前期初頭（板付Ⅰ式）の福岡県今川遺跡の転用された青銅器、

福岡県比恵遺跡の弥生時代前期（板付Ⅱ式）の遼寧式銅剣を模した木製品など、弥生時代前期段階に一定の青銅器文化が形成された可能性も指摘されているが、銅剣・銅矛・銅戈といった完形の武器形青銅器が出現するのは弥生時代中期初頭である（吉田（広）2014）。また既に中期前半においては、鋳型の存在などから青銅器生産が開始していたと推察されている（井上（義也）2013）。

初期の青銅製利器の副葬としては、福岡県吉武高木3号木棺墓において細形銅剣2、細形銅矛1、細形銅戈1が銅鏡などと共に副葬されていたものがその代表であるが、中期前半に福岡県田熊石畑遺跡の銅剣4、銅戈1など、特定の埋葬施設に多くの武器を副葬する現象が既に出現している。

北部九州における弥生墓制については、群集する集団墓から特定集団墓、王墓とも称される特定墓などの出現が相続くのであるが、これら墓制の変遷については高倉洋彰の先駆的研究によって4タイプに分類され集団内部の階層分化が進む過程が論じられている（高倉1973）。弥生時代早・前半の石製武器が副葬される墓地は高倉洋彰のいう伯玄社タイプであり、基本的に集団墓であって、磨製石剣や磨製石鏃などが副葬される事例はあるが、墓制そのものの階層性はほとんどみられないという。弥生時代の乳幼児埋葬を分析した乗安和二三によれば、弥生時代では幼児段階で既に社会的階層分化や世襲が反映された可能性が指摘されており（乗安2005）、板付遺跡の環濠に近接した位置で埋葬された副葬品が出土する小児用甕棺など、特殊な事例もあるものの、弥生時代早・前半の墓制は相対的には集団内部の階層分化が未分化であったと評価することができるであろう。

弥生時代中期の初頭になると、福岡県吉武高木遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡でみられるように、特別に質の高い副葬品を持つ特定の集団墓が現れ、吉武高木3号木棺墓においては多鈕細文鏡やヒスイ製勾玉、碧玉製管玉類と並んで細形銅剣2、細形銅矛1、細形銅戈1といった複数の武器が副葬され、社会の階層性の萌芽が認められる。

更に中期後半になると、一定の区画を持ち、副葬遺物・施設が優れるという特定墓が出現するようになり、中園聡によれば、弥生時代中期の甕棺墓はエラボレーション（手の込み方、入念の度合い）によってレベルⅠ～レベルⅤの5段階のランクが指摘されている（中園1991）。これによれば最もランクの高いレベルⅠの副葬品はガラス壁や武器形青銅器、レベルⅡは鏡や銅矛、鉄製利器、レベルⅢが銅剣単数や鉄製武器、レベルⅣは鉄製利器単数、レベルⅤは副葬品なし、とされており、武器を所有、又は副葬する事例は北部九州地域における中～高位の社会階層に属する人物であったことが伺われる。

これら武器を多数副葬するような人物像については、呪性のシンボルともいえる鏡や玉と共に武器が重視されているなど、祭祀権（政治権）と共に軍事権を掌握した人物が推定され、共同体内部の階層性のあり方からして、一定の軍事的な武装集団の存在が想定されるところである。すなわち、北部九州地域に限って述べるならば、既に弥生時代中期の段階において、稀少な青銅武器を威信財的な扱いで所持することや、武器が特定個人に集中するような社会的な背景が存在するのである。

このことから、北部九州地域では早くより武器や戦士を尊ぶ社会にあり、武器を威信財として用い、それを死後に副葬するなど、被葬者の戦士的な様相や、集団の武力を個人に還元するような、何らかの集団的な武装の編成原理が既に形成されていた可能性が認められると評価したい。

中園聡によれば、北部九州の主要な甕棺墓 750 基のうち、何らかの副葬品を持つものは 84 基 (11.5%) に過ぎないが (中園 1991)、これら墓制から復元される共同体の地理的な範囲 (領域) は唐津平野 (宇木汲田遺跡) や早良平野 (吉武高木遺跡)、佐賀平野 (吉野ヶ里遺跡) など極めて狭い範囲である。弥生時代における北部九州の諸集団は、これら小平野毎で各個に階層分化が進行したものであって、その武装集団単位も極めてコンパクトなもの、階層化されつつはあるものの、それは非常に小規模なものであったと考えた方がよいだろう。

ところで上記のような弥生時代前期～中期における武器の副葬という現象は、特に北部九州地方を中心としてのみ認められる現象である。武器の副葬事例は山口県梶栗浜遺跡の箱式石棺から出土した銅剣や、愛媛県持田 3 丁目遺跡から出土した石剣など、山口県や愛媛県などにおいても僅かながら認めることができ、弥生文化の広がりと共に武器を副葬する風習も西日本西部を中心に一定の範囲で拡散していた状況が把握できる (表 6)。

武器の副葬が全国的に行われるようになるのは弥生時代後期以降であり、それ以前の北部九州以外の西日本各地では、一般的に武器を副葬する風習は希薄である。しかしながらこの時期、北部九州以外の西日本各地において武器が全く存在していなかった訳ではない。大阪府高宮八丁遺跡では 6,500 m<sup>2</sup> の調査面積において主として前期の石鏃 1,055 (うち磨製 1)、石剣 146 (うち磨製 8) などの石製武器が出土しており、狩猟用とするにはあまりにも多い石鏃の量である。大阪府池上曾根遺跡でも 19,500 m<sup>2</sup> の調査面積において主として中期の石鏃 1,757 (うち磨製 5)、石剣 890 (うち磨製 52) などが出土しており武器そのものは大量に存在している。近畿地方では武器形祭器としての銅戈が存在し、鋳型の存在から中期後葉には生産も行われていたと考えられるが (吉田 (広) 2012)、威信財としてこれを墓へ副葬する風習はない。また山陰

表 6 弥生時代前期～中期 主要な武器出土墳墓一覧

遺跡名	都道府県	時期	主体部名	棺	短兵				長兵				遠距離武器			備考
					鉄刀	鉄剣	銅剣	石剣	鉄矛	銅矛	鉄戈	銅戈	鉄鏃	銅鏃	石鏃	
雑餉隈遺跡	福岡県福岡市	早期 (夜臼)	15次SR-003	木棺墓				1							3	
雑餉隈遺跡	福岡県福岡市	早期 (夜臼)	15次SR-011	木棺墓				1								
雑餉隈遺跡	福岡県福岡市	早期 (夜臼)	15次SR-015	木棺墓				1							5	
田久松ヶ浦	福岡県宗像市	前期(板付I古)	SK206	石槨墓				1							1	
田久松ヶ浦	福岡県宗像市	前期(板付I古)	SK218	石槨墓											2	
久原	福岡県宗像市	前期(板付I～IIa)	SK4	土槨墓				1							4	
志登支石墓	福岡県前原市	前期	6号墓	支石墓											6	
志登支石墓	福岡県前原市	前期	8号墓	支石墓											4	
三雲・井原	福岡県前原市	前期		支石墓											5	
板付 田端地区	福岡県福岡市	前期末～中期中頭		甕棺				3		3						
板倉	福岡県福岡市	前期末～中期中頭		甕棺				1								
吉武高木	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	4次 100	甕棺				1								
吉武高木	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	4次 115	甕棺				1								
吉武高木	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	4次 116	甕棺				1								
吉武高木	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	4次 117	甕棺				1								
吉武高木	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	4次 125	甕棺											1	
吉武高木	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	4次 4	木棺				1								
吉武大石	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	5次 1	甕棺											1	
吉武大石	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	5次 10	甕棺											1	
吉武大石	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	5次 45	甕棺				1				1				
吉武大石	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	5次 51	甕棺								1				
吉武大石	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	5次 67	甕棺					1							
吉武大石	福岡県福岡市	前期末～中期中頭	5次 70	甕棺				1								
大友	佐賀県唐津市	前期	3次4号	箱式石棺				1								
宇木汲田	佐賀県唐津市	前期末～中期中頭	61号	甕棺				1								
梶栗浜	山口県下関市	前期末～中期中頭		箱式石棺				2								
持田3丁目	愛媛県松山市	前期	SK32	木棺墓				1								
持田3丁目	愛媛県松山市	前期	SK34	木棺墓				1								
口酒井	兵庫県伊丹市	前期	木棺墓3	木棺墓											1	
吉武高木	福岡県福岡市	中期中頭	4次 1	木棺				1								
吉武高木	福岡県福岡市	中期中頭	4次 2	木棺				1								
吉武高木	福岡県福岡市	中期中頭	4次 3	木棺				2		1		1				
吉武大石	福岡県福岡市	中期中頭	5次 1	木棺				1				1				
田熊石畑	福岡県宗像市	中期前半						4				1				
隈・西小田	福岡県筑紫野市	中期前半	3次 109号	甕棺				1								

遺跡名	都道府県	時期	主体部名	棺	短兵				長兵				遠距離武器			備考
					鉄刀	鉄剣	銅剣	石剣	鉄矛	銅矛	鉄戈	銅戈	鉄鏃	銅鏃	石鏃	
吉武大石	福岡県福岡市	中期前半	5次 53	甕棺				1				1				
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期前半	17号	甕棺								1				
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期前半	58号	甕棺												
須玖・岡本	福岡県春日市	中期前半	K15	甕棺			1									
鎌田原	福岡県嘉穂市	中期前葉	8K	甕棺							1					
鎌田原	福岡県嘉穂市	中期前葉	8K	甕棺							1					
吉武樋渡	福岡県福岡市	中期中葉	3次 77号	甕棺			1									
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期中葉	6号	甕棺			1									
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期中葉	11号	甕棺			1									
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期中葉	37号	甕棺						1						
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期中葉	41号	甕棺						1						
久原	福岡県宗像市	中期中葉	IV区1号	土墳墓		1				1						
須玖・岡本	福岡県春日市	中期後半	K1	甕棺			1									
須玖・岡本	福岡県春日市	中期後半	K13	甕棺								1				
板倉C	福岡県福岡市	中期後半		甕棺	1											
吉武大石	福岡県福岡市	中期後半	5次 K28	甕棺		1										
東小田峰	福岡県夜須町	中期後半		甕棺							1					
立岩	福岡県飯塚市	中期後半	10号	甕棺		1				1						
立岩	福岡県飯塚市	中期後半	34号	甕棺							1					
立岩	福岡県飯塚市	中期後半	35号	甕棺							1					
立岩	福岡県飯塚市	中期後半	39号	甕棺		1										
切通	佐賀県上峰村	中期後半	4号	甕棺			1									
久原	福岡県宗像市	中期	IV区1号	土坑墓			1			1						
吉武大石	福岡県福岡市	中期	5次 5	木棺			1									
比恵	福岡県福岡市	中期	6次 SK28	甕棺			1									
三津永田	佐賀県吉野ヶ里町	中期	104号	甕棺	1											
二塚山	佐賀県上峰村	中期	46号	甕棺					1							
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期	12号	甕棺												
宇木汲田	佐賀県唐津市	中期	18号	甕棺			1									
小姓島	長崎県対馬市	中期末～後期初	5号	箱式石棺												
原田1号方形周溝墓	大阪府能勢町	中期中葉	主体部1	木棺				1								

地域においても武器副葬は顕著ではないが、島根県荒神谷遺跡で中細形銅剣 358 が埋納されるなど、大量の青銅武器が流通していることは確実である。

弥生時代前半（前期～中期）においては西日本で広範囲に武器が存在（集落から出土）する一方、死者に副葬するような副葬（墓から出土）事例は北部九州とその周辺に限定される。し



たがって弥生時代の武器副葬は、ある社会や地域の集団内において、単に武器が存在するというのみならず、その付加価値として、武器に対する社会的な通念や価値観に対応した葬送風習の差異に起因するものと評価することができる。このことは、当時のそれぞれの地域における社会や集団の思想体系の中において、武器で表象されるような暴力や武威、戦士などの社会的な価値背景を考える上で非常に重要である。

### 3. 弥生時代前期～中期における武器副葬の地域差

#### (北部九州と近畿地方との比較について)

弥生文化の開始期において武器を副葬する風習が北部九州を中心に開始し、弥生時代前半においては、特に北部九州地域において集中的に武器が副葬されたことを理解した。北部九州以外の西日本各地においては磨製・打製の石剣や石鏃が多数存在し、一部では金属製武器も流通するものの、一般には武器を副葬する風習は顕著ではない。

武器が存在する社会において、その副葬の有無に関する現象の差異は、それぞれの集団や地域内における社会的通念上での（武器に象徴される）武威の価値尺度と深い関連性があると考えられる。この価値尺度を明らかにすることは、弥生時代社会における軍事的な諸関係のあり方や側面を認識する上で非常に重要な要素である。そこで武器副葬の風習の有無からはどのような社会的背景が考えられるのか、弥生時代前半（前期～中期）の北部九州と近畿地方を対比しながら考察してみよう。

弥生時代前半（前期～中期）における武器形遺物の一般的な出土状況をみれば、北部九州においても近畿地方においても集落遺跡から石製武器が出土する事例が多い。このことから、北部九州・近畿地方、そのどちらの社会においても、それぞれ集落の集団成員たちは一定量の武器を保有していたという、集団内における武器の社会的な保有基盤は共通している。

他方、近畿地方の特徴としては第 2 章でみたように大型の環濠集落が発達し、一遺跡から 1,000 単位の石鏃など膨大な石製武器が出土することも珍しくはない。しかし近畿地方では青銅武器の大量埋納や墓への武器副葬や武器埋納が希薄であるため、佐原真が示したような戦争を示す考古学的な指標（佐原 1999）は北部九州よりは少なく、社会的通念における武器の価値も低く、武器を介した階層的な序列はより未発達であったと推察される。

これに比較すると、北部九州では弥生時代の初頭より墓に武器を副葬し、中期の初頭には、稀少性の高い青銅製武器を複数本副葬するといった、個人の死と武器とを結びつけるような葬送儀礼が行われていた。また、集落内の武器埋納（武末 2010）を始め、福岡県原町遺跡では中

細～中広形銅戈 48 本が一括埋納されるなど武器の大量埋納も行われており、第 1 章でみたように殺傷人骨の出土例も多いことから、実際に武器を行使するような暴力行為や戦闘行為が生起していたことが知られている。

このように北部九州の弥生時代前半段階においては、武器の存在、武器の副葬、武器の祭器化現象、殺傷人骨の存在（対人殺傷の発生）など、社会の様々な側面において武器の価値が高かったことを示すような考古学的な資料が数多く認められる。北部九州地域においては武器に対する社会的なステータスが非常に高かった社会が存在したと評価することができるだろう。

ただし、弥生時代前期～中期までの北部九州における墓域出土の武器量は、大部分が刀剣や矛など 1～2 本程度に過ぎず、威信財としての武器の価値は、まだまだ個人的属性の範囲を超えることはなく、それぞれの集落のあり方も平野単位の小地域でまとまっていたと考えられるため、武器を媒介とした社会的武装集団も、極めて小さな集団単位であったと考えておきたい。

以上の社会的背景について、北部九州と近畿地方の両者を対比してまとめよう。弥生時代前期～中期の北部九州では社会通念としての武器のステータスが強く、個人の死に際し武器を副葬し、中期初頭までに一度に複数本の青銅武器を副葬する事例も知られる。同時に北部九州では集落からも、主として石製の武器が出土する。北部九州地域では通常の集落に住む人々も石製武器を主として所有する一方、青銅武器を副葬するような集団や個人も社会的に成立していたと考えられる。

これに対し近畿地方では主に集落内から大量の石製武器が出土する一方、威信財としての武器を副葬する風習はほぼ皆無である。近畿地方の弥生社会では、社会通念としての武器に対する価値尺度が北部九州に比較すればより低く、特定の個人や限られた集団に属するような武器を介した身分的表象は未発達であったと判断したい。

近畿地方の 20 cm 以上の大型石剣や鉄剣形石剣については、短剣類を所持することを通して、所有者の所属や地位を表示していたと考えられるものの（寺前 2010）、これら大型短剣は他の石器類と同じく、集落の内部（包含層や溝・土壇）から出土しており、個人の死に際して副葬する青銅武器に比較すれば、階層的に突出するような社会的な武器の価値体系は未形成であったといえるだろう。

こういった価値尺度の温度差から、北部九州地方においては、弥生文化の開始期より朝鮮半島由来の、石製武器を副葬するような個人の存在が認められ、弥生時代中期までには希少な武器を占有する小規模な特定集団や戦士の階層が成立していた蓋然性が高い。対して近畿地方においては、弥生時代前期～中期の長期間にかけて、武器を所有したのは集落内に住居した一般

成員であり、特定の武装集団や戦士階層の成立は未発達であったと推定される。

むしろ、弥生社会全体の前期～中期を通じてみれば、集落内の成員各自が武装している状況が一般的であり、北部九州地方のようなあり方は、特殊な状況であったと評価することができるであろう。

### 第3節 弥生時代の鉄器生産にみる鉄製武器の普及

#### 1. 弥生時代の鉄器生産

弥生時代早期～前期における武器の廃棄（副葬）の状況を対象に、武器の価値的な背景を検討した。一方、弥生時代後期になると鉄製武器が普及し、日本列島の広範囲において実用的な鉄製武器が出土するといった、武器を取り巻く社会の大変革が生じていく。

通常、戦いや争い（戦争）はその集団がストックしている武器や武具によって争われるため、実際に武器を用いない場合においても、武器や武具の生産や保有数はその社会や集団の武装度や潜在的な戦力と非常に深く関わっている。そのような意味において、鉄製武器の生産や保有数などは、当時の戦闘や集団の武装度を考察する上での重要な構成要素の一部である。この観点から、以下では弥生時代から古墳時代前期も視野に含めて、鉄製武器の生産に関する検討を行い、その社会的な背景を考えたい。

なお、金属製品である鉄器の生産工程は原料（砂鉄・鉄鉱石など）から金属を取り出す工程（製鉄：smelting）、不純物を多く含む鉄原料（鉄塊）から鉄素材を作る工程（精錬：refining）、鍛造（forging）や鋳造（casting）といった鉄素材から鉄製品を製作する工程などが存在する。このうち弥生時代から古墳時代において検出される鉄器製作関連の遺構・遺物の多くは鍛冶に関連したものであるため、本論で用いる鉄器の“生産”とは主として鍛冶（smithing）の工程を指していることを記しておく。

日本列島における鉄器の使用は、かつては弥生時代早期にまで遡るとされていた。しかしながら放射性炭素年代に基づく問題提起（国立歴史民俗博物館 2003、藤尾ほか 2005）から、前期における鉄器の存在そのものの再検討が行われ、熊本県斎藤山遺跡出土の鉄器など、これまで弥生時代前期とされてきた鉄器の年代的な再考が迫られている（春成 2003）。

製鉄の開始時期がどこまで遡るかは議論の決着はつかず、冶金学の立場でも異なった見解が示され、鉄素材についても見解がわかれるので詳細な言及は避けたいが、福岡県赤井出遺跡 33

号住居において鍛冶工房が検出されているため（境 2004）、少なくとも鍛冶遺構、すなわち炉で熱した鉄素材を鍛冶具で鍛えて製品化するという鉄器の生産（smithing）が遺構・遺物の両面から確証できるのは弥生時代中期後半以降である。中期以前においては鑄造鉄斧を再利用した鉄器の存在が知られているが（野島 2009、藤尾 2013）、弥生時代前半に鉄器が存在したとしても、それは極めて僅かな量の舶載品であり、社会に与える影響は軽微であったといえるだろう。

その後、長崎県原の辻遺跡では中期後葉に比定される 10 cm未満の棒状の鉄器素材が出土しており、棒状素材から鉄鑿、鉄鏃などの製作（smithing）が行われていたことが推定できるほか、北部九州地域においては鉄戈など長大な鉄製武器の製作も推察されるところである（川越 1968、藤田（等） 1987）。なお、先述した原の辻遺跡では中期の船付き場遺構が検出されていることから河岸の荷揚げがや“市”の存在が想定されており、後期においては長崎県カラミ遺跡において、朝鮮半島と北部九州との間の中継交易基地が指摘されるなど（宮本 2012）、北部九州地域では弥生時代中期～後期において鉄製品の豊富な流通が指摘されている。

反面、鉄製品や鉄器工房は、弥生時代後期に至ると北部九州よりも、その他の地域（中部九州・山陰地域）において多数検出されるようになり（村上 1998、野島 2010、宮崎 2012、日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会 2012）、鉄器生産（smithing）の技術や、鉄器の使用そのものが広く拡散する状況が伺われる。日本列島全体でみれば、本格的な鉄器時代は弥生時代後期から開始するといつてよい。

古墳時代に政治の中心部が推定される近畿地方においても、確実に鉄器生産（smithing）の開始が確認できるのは弥生時代後期からであり、遺構として大阪府星ヶ丘遺跡や、京都府西京極遺跡の鍛冶遺構を挙げることができる（村上 1995、柏田 2009）。しかしながら、日本列島各地で鍛冶遺構の発見が続出するようになった 21 世紀の現在においても近畿地方、特に旧五畿内地域における鉄器生産の痕跡は、僅か数例に過ぎないのが事実である。

弥生時代終末期を中心とする時期には、大阪府中宮ドンバ遺跡 1 号墳など、近畿地方においても鉄製武器を副葬する墓も認められるが、事例は圧倒的に少なく、丹後地域（京都府大風呂墳墓群）や但馬地域（兵庫県門谷墳墓群）の墓関連遺跡において鉄剣や鉾、鉄鏃などが多数副葬されていた状況とは対照的である。

具体例を挙げると、近畿地方の北外縁たる日本海沿岸の旧丹後地域においては、京都府扇谷遺跡の鉄滓、京都府奈良岡遺跡の鍛冶遺構、京都府大風呂墳墓群における鉄製武器の副葬など、豊富な鉄器の流通を推定することができ、近畿地方の南西外縁においても、淡路島に位置する

表 7 弥生時代における近畿地方の鉄器量（旧五畿内）

		武器			農具		工具				その他		
時期	地域	刀	剣	鉄鏃	鍬鋤	鎌	斧	鉋	鑿	刀子	主要器種合計	鉄滓	その他
前～中期	旧五畿内地域	2	1	18	1	1	18	7	6	6	60	0	35
後期	旧五畿内地域	0	1	41	3	1	20	20	5	14	105	0	38
終末～古墳初	旧五畿内地域	1	3	11	0	1	1	4	0	5	26	33	11
時期不特定	旧五畿内地域	0	0	5	0	0	5	1	1	0	12	0	35
合計		3	5	75	4	3	44	32	12	25	203	33	119

表 8 弥生時代における近畿地方の鉄器量（旧畿外）

		武器			農具		工具				その他		
時期	地域	刀	剣	鉄鏃	鍬鋤	鎌	斧	鉋	鑿	刀子	主要器種合計	鉄滓	その他
前～中期	旧畿外	0	0	7	0	0	4	1	0	1	13	2	279
後期	旧畿外	8	24	83	0	0	2	75	1	12	205	0	76
終末～古墳初	旧畿外	3	30	87	0	7	8	35	1	10	181	0	47
時期不特定	旧畿外	12	0	0	0	0	5	6	3	1	27	2	16
合計		23	54	177	0	7	19	117	5	24	426	4	418

兵庫県五斗長垣内遺跡や旧播磨地域の兵庫県本位田権現谷 A 遺跡、旧紀伊地域の旧吉備中学校校庭遺跡において、弥生時代後期の鍛冶遺構が検出されており、鉄器生産（smithing）の具体像が明らかになりつつある（今井・森岡 2012）。

上記のような近畿地方外縁部と比べて、古墳時代には大型古墳に大量の金属製品を副葬するようになる近畿地方中心部（旧五畿内地域）では鉄製品や鍛冶遺構の痕跡は極めて乏しいのが現状である。試みに、『弥生時代鉄器総覧』の近畿地方の部分（川越（編）2000・50～74 頁）で、鉄器数を時期と地域とに分けて集計すると表 7 及び 8 のようになり、武器・農具・工具の主要器種数では、旧五畿内地域で後期 105 点、終末期 26 点といった鉄器の出土量となる。これに対し畿内外縁部（現在の近畿地方のうち、旧五畿内以外の京都府北部、兵庫県西部など）の鉄器出土数は後期が 205 点と、同時期の五畿内地域（105 点）の約 2 倍であり、終末期には更に格差が拡大する傾向にある。

禰垣田佳男は“見えざる鉄器”の可能性を強調するが（禰垣田 2013）、再利用や腐食による消失、更に未発見や未認識の鍛冶遺跡を含めても、弥生時代の近畿（旧五畿内）地方は相対的に鉄器の普及量は少なく、実用的な小型工具類を中心に僅かな鉄製品が流通していたと考えるのが自然である。山田隆一が指摘するように、これまでは近畿地方中枢部の鉄器化を過大に評価しすぎていた傾向があるといえるだろう（山田（隆一）1988）。

弥生時代終末～古墳時代前期に至って、近畿地方の鉄器量は副葬品を中心として急増する。

しかしながらここで注意しなければならないことは、近畿地方では古墳時代に入っても生産遺跡や集落遺跡そのものから鉄器量が急増する様子が伺えない事実であり、実用的な小型鉄製品とは異なる威信財としての鉄製品が、新たに近畿地方において急増していくのである。

奈良県纏向遺跡勝山地区からは、古墳時代初頭（布留Ⅰ期）に属する断面形状が蒲矛形の厚手の羽口が出土しているため、鉄器製作の技術的な進歩は確実である（村上 1998、2007）。また同遺跡では巻野内地区や東田地区など複数地点において鍛冶関連遺物が出土しており（石野 2011）、纏向遺跡群に所在する勝山古墳の周溝からは椀形滓を含む鉄滓、鉄器未成品が出土するため、精錬鍛冶（refining）から鍛錬鍛冶（forging）に至る工程の可能性も想定できるなど、鍛冶技術の向上と手工業生産の組織化が図られている様相を伺うことができる。しかしながら上記のような背景を勘案しても、近畿地方における同時期の鍛冶遺構の検出は極めて少なく、在地の生産力のみで古墳へ副葬された鉄製品の急増を可能とした状況を裏付けることはできないだろう。

むしろ、古墳時代前期における近畿地域の鉄器量の急増は、一般集落や実用品での需要に応えた生産量の増加、というよりは、広範な他地域との交流を通じて、首長層を中心に威信財としての鉄製品が集約されていたという経済的な要因が重要である。

人類学や社会学の分野では、非商品経済の下において財の領域が階層化されていることが指摘されており（ロジェ 1984、上野 1996）、鉄製武器などの貴重財（威信財）と小型工具類などの鉄製品とでは、異なる階層構造のもとで生産や流通が機能していたと考えられる。これについては野島永が弥生時代の鉄器の流通についてレンフルーの研究やクラ交換を参考にモデル化しているのが参考になる（野島 2000）。広域に流通する特定階層のための特別な“限定的生産”を論じる阪口英毅に従えば（花田・阪口 2013）、古墳時代前期に鉄器が急増する背景には、主として首長間同士で流通した希少財が威信財として流通し、それが墳墓に埋葬されたため残存することになったが、実用品である小型の工具類などは徹底的に再利用されたか、従来の小規模な、もしくは遺構として残らないような鍛冶によって再生産されたため、考古学的に残存することがなかったと推察できる。

既に先学が指摘しているように、弥生時代後期～古墳時代前期には、広域な鉄器（製品又は素材）の流通ルートが確保されたと考えられるのであって（都出 1991、禰宜田 1998）、このことは鉄器生産上での画期というよりも、広域流通などにより近畿地方に威信財が集積されたという政治的な動向に重要な意義があると考ええる。近畿地方において実質的に鉄器の生産が大規模化するのには古墳時代中期以降まで待たなければならないのである。

表 9 弥生時代後期 主要な武器出土墳墓一覧

遺跡名	所在地	時期	墳形	規模(m)	主体部数	短兵		長兵	長距離武器		備考
						鉄刀	剣、槍	矛、戈	鉄鏃	銅鏃	
平遺跡	福岡県みやこ町	後期?	箱式石棺						9		
塔の首遺跡3号	長崎県対馬市	後期	箱式石棺					2			
佐護クピル	長崎県対馬市	後期	箱式石棺					3			
下ガヤノキ	長崎県対馬市	後期	箱式石棺			1	1				
木坂遺跡5号	長崎県対馬市	後期	箱式石棺				1	1	1		
恵比須山遺跡8号	長崎県対馬市	後期	箱式石棺								
東浜遺跡	長崎県対馬市	後期	箱式石棺				2				
ハロウ遺跡5号	長崎県対馬市	後期	箱式石棺					1			
唐子台5丘7号	愛媛県今治市	後期	土墳墓							2	
唐子台遺跡14丘	愛媛県今治市	後期	土墳墓			1	1				
東平下周溝墓	宮崎県川南町	後期	方形周溝墓	19	1	1					
川床遺跡群	宮崎県新富町	後期	周溝墓、木棺墓、土墳			1	5		66		
方保田東原1号	熊本県山鹿市	後期	1号石棺	1.5	1		1				
下山西遺跡2号	熊本県阿蘇市	後期	箱式石棺	1.8	4		1				
下山西遺跡3号	熊本県阿蘇市	後期	箱式石棺	1.8	4		1				
下山西遺跡4号	熊本県阿蘇市	後期	箱式石棺	1.9	4		1				
経隈墳墓 3号	長崎県対馬市	後期	箱式石棺	20	3		2				
西一本杉ST009	佐賀県吉野ヶ里町	後期	?	10	1		2		33		
山古賀遺跡SC0019	佐賀県吉野ヶ里町	後期	石棺墓	2	1		1				
横田遺跡	佐賀県神埼市	後期	石棺墓	2	1		1				
礫石BSC005	佐賀県佐賀市	後期	石棺墓	2	1				1		
久池井C	佐賀県佐賀市	後期	土墳墓	2	1		1				
高津尾遺跡12号	福岡県北九州市	後期							2		
高津尾遺跡15号	福岡県北九州市	後期							2		
高津尾遺跡39号	福岡県北九州市	後期							1		
高津尾遺跡41号	福岡県北九州市	後期					1				
平原遺跡	福岡県粕屋町	後期	方形周溝墓	18	1	1			4		
宮山4号墳	島根県安来市	後期	四隅突出	30	2	1					
波来浜遺跡	島根県江津市	後期	1号墳							2	
波来浜遺跡	島根県江津市	後期	2号墳3主体						1	2	
波来浜遺跡	島根県江津市	後期	2号墳4主体							2	
西谷3号墓	島根県出雲市	後期	四隅突出	47			1				
紙子谷遺跡1号墓	鳥取県鳥取市	後期	方形墓	24	26	1					

遺跡名	所在地	時期	墳形	規模(m)	主体部数	短兵		長兵	長距離武器		備考
						鉄刀	剣、槍	矛、戈	鉄鏃	銅鏃	
榑築墳丘墓	岡山県倉敷市	後期	墳丘墓	72	2		1				
雲山鳥打墳丘墓2号墓	岡山県岡山市	後期	墳丘墓	20	3				2		
郷境墳墓群2号墓	岡山県岡山市	後期	墳丘墓				1				
郷境墳墓群3号墓	岡山県岡山市	後期	墳丘墓				2		7		
唐子台墳墓3丘土墳墓	愛媛県今治市	後期	土墳墓				1				
唐子台墳墓5丘11土墳墓	愛媛県今治市	後期	土墳墓				1				
養久山40号2号主体	兵庫県たつの市	後期	墳丘墓	10	3				1		
半田山墳墓1号墓	兵庫県たつの市	後期	墳丘墓	20	2		1		1		
白鷺山1、2号	兵庫県たつの市	後期	箱式石棺				1				
内場山SX09	兵庫県篠山市	後期	台状墓	20	13		1				
内場山SX10	兵庫県篠山市	後期	台状墓	20	13	1			17		
内場山SX11	兵庫県篠山市	後期	台状墓	20	13		1				
妙楽寺墳墓群	兵庫県豊岡市	後期					1				
大篠岡・半坂墳墓群第4主体	兵庫県豊岡市	後期	方形周溝墓	20	5		1				
大篠岡・半坂墳墓群第1主体	兵庫県豊岡市	後期	方形周溝墓	20	5				1		
上鉢山・東山墳墓群3-5主体	兵庫県豊岡市	後期								2	
上鉢山・東山墳墓群4-2主体	兵庫県豊岡市	後期							1		
上鉢山・東山墳墓群4-5主体	兵庫県豊岡市	後期							1		
上鉢山・東山墳墓群1-7主体	兵庫県豊岡市	後期								2	
立石墳墓103号	兵庫県豊岡市	後期					1				
天王山4号1号棺	兵庫県神戸市	後期	方墳	16	2	1					
中宮ドンパ1号	大阪府枚方市	後期	長方	22	1		1				
大王山9号	奈良県宇陀市	後期	方形台状墓	17	1				1		
平尾東6号墓	奈良県宇陀市	後期	方墳	13	1		1		1		
平尾東7号墓	奈良県宇陀市	後期	方墳	12	1		1		1		
見田・大沢4号	奈良県宇陀市	後期	方墳	17	1		1				
ホケノ山	奈良県桜井市	後期	前方後円	80	1						
大山3号墓	京都府京丹後市	後期		2.8	1				1		
大山5号墓	京都府京丹後市	後期		2.7	2				1		
坂野丘第2主体	京都府京丹後市	後期			3		1				
帯城7号墓	京都府京丹後市	後期	台状墓	3.5			1				
帯城B地区	京都府京丹後市	後期					3				
西谷2号墓	京都府与謝野町	後期		10	1		1				
西谷4号墓	京都府与謝野町	後期		5	3		3				



遺跡名	所在地	時期	墳形	規模(m)	主体部数	短兵		長兵	長距離武器		備考
						鉄刀	剣、槍	矛、戈	鉄鏃	銅鏃	
水無月山遺跡RD9号墓	京都府舞鶴市	後期		14	1		1		2		
水無月山遺跡RD9号墓	京都府舞鶴市	後期		12	4		1				
水無月山遺跡RD9号墓	京都府舞鶴市	後期		12	2		1				
水無月山遺跡RD9号墓	京都府舞鶴市	後期		11	1		1		15		
久田山南3号墓	京都府綾部市	後期				1	1		3		
大風炉南1号	京都府与謝野町	後期					11		4		
大風炉南1号	京都府与謝野町	後期					2		2		
大風炉南2号	京都府与謝野町	後期					1				
犬石西B8号	京都府与謝野町	後期					1				
犬石西B14号	京都府与謝野町	後期					1				
囲山3号	富山県射水市	後期	土墳墓						1		
原目山Ⅲ号墓	福井県福井市	後期				1					
原目山Ⅲ号墓	福井県福井市	後期				1					
原目山Ⅲ号墓	福井県福井市	後期				1					
原目山Ⅲ号墓	福井県福井市	後期				1					
小羽山26号	福井県福井市	後期						1			
小羽山30号	福井県福井市	後期					1				
篠ノ井7号	長野県長野市	後期	方形周溝墓				1				
篠ノ井土壇墓SK11	長野県長野市	後期							1		
村東山手SM01	長野県長野市	後期					1				
滝沢井尻遺跡	長野県飯田市	後期	方形周溝墓				2				
宮脇遺跡3号墓	千葉県木更津市	後期	方形周溝墓	15	4				1		
長平台遺跡1号墓	千葉県市原市	後期	方形周溝墓	17	1		1				
加茂C1号墳	千葉県市原市	後期	方形周溝墓	19			1				
神門5号墳	千葉県市原市	後期	方形周溝墓	38	1		1		2		
大崎台10号墳	千葉県佐倉市	後期	方形周溝墓	12	1		1				
北通8号	埼玉県富士見市	後期	方形周溝墓				1				
田端西台通2号	東京都北区	後期	方形周溝墓				1				
弁財天池1号	東京都狛江市	後期	方形周溝墓					1			
山王山5号	神奈川県横浜市	後期	方形周溝墓				1				
王子ノ台5号	神奈川県平塚市	後期	方形周溝墓				1				
新保田中村遺跡	群馬県高崎市	後期	礫床墓				1				
空沢遺跡	群馬県渋川市	後期	周溝墓				1				
有馬遺跡	群馬県渋川市	後期	方形周溝墓				1				

遺跡名	所在地	時期	墳形	規模(m)	主体部数	短兵		長兵	長距離武器		備考
						鉄刀	剣、槍	矛、戈	鉄鏃	銅鏃	
有馬遺跡	群馬県 渋川市	後期	方形周溝墓				1				
有馬遺跡	群馬県 渋川市	後期	方形周溝墓				1				
有馬遺跡	群馬県 渋川市	後期	方形周溝墓				1				
有馬遺跡	群馬県 渋川市	後期	方形周溝墓				1				
有馬遺跡	群馬県 渋川市	後期	方形周溝墓				1				
有馬遺跡	群馬県 渋川市	後期	方形周溝墓				1				
有馬遺跡	群馬県 渋川市	後期	方形周溝墓				1				
井沼方遺跡9号	埼玉県 さいたま市	後期	方形周溝墓				1				

## 2. 鉄製武器の出土量

弥生時代～古墳時代における鉄器生産を概観したが、上記のような背景の下、弥生時代後期～終末期になると、利根川以西の汎日本列島的な範囲で鉄製武器が普及し、同時に、弥生時代前半では北部九州が中心であった武器の副葬が全国的に顕在化ようになる。弥生社会全体における武器のあり方や武器の社会的な価値体系は、鉄製武器が普及し、広範囲に武器副葬が認められる弥生時代後期に大きな転換を迎えると評価することができる。

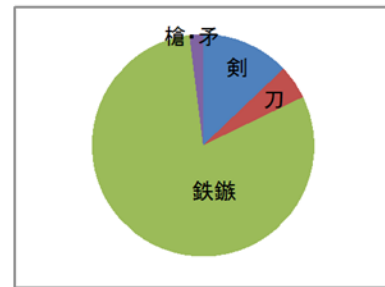
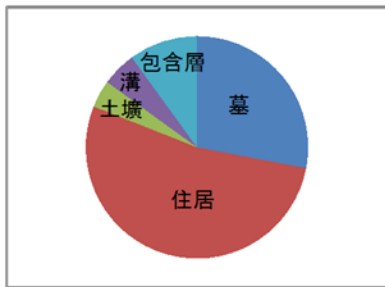
弥生時代後期～終末期に広い範囲で成立する弥生時代の墳墓は墳丘墓、区画墓、台状墓、方形周溝墓など各地域において墓制の違いが著しい(岩永 2010)ものの、副葬される武器に注目すると、これら首長墓においては、概ね剣や鏃が数本程度でしかない。

例えば、弥生時代後期における佐賀県二塚山 46 号甕棺には鉄戈 1 が副葬され、群馬県有馬遺跡では、方形周溝墓の埋葬主体にガラス玉などと共に鉄剣 1 ずつが副葬されている。方形周溝墓や土壇墓といった、投下される労働力が比較的少ない場合の副葬武器が鉄剣 1 や数基の鉄鏃などであるのに対し、円丘部が径 40m (両側の突出部を含めた墳長は 72m) と、多数の労働力が集積された大規模な首長墓たる岡山県楯築墳丘墓の主体部においても、勾玉・管玉などの一連の首飾り以外は鉄剣 1 点が副葬されていたに過ぎず、長辺 50m (突出部含む) にも及ぶ大規模な四隅突出墓たる島根県西谷 3 号墳の中心埋葬施設(第 4 主体部)でもガラス製首飾りの他は鉄剣 1 が副葬されるのみである。福岡県平原弥生墳丘墓も、後漢鏡や仿製鏡、玉類などの副葬品の多さは群を抜いているが、武器類に注目すると副葬量は素環頭刀 1 に過ぎない。

これら弥生時代後期～終末における武器が副葬された墓は、宮崎県川床遺跡群から島根県宮山 4 号墳、愛媛県唐古台墳墓群、大阪府中宮ドンバ 1 号墳、福井県原目山墳墓群、長野県篠ノ井遺跡、群馬県有馬遺跡など、日本列島の極めて広い範囲に及ぶ(表 9)。しかしながら、弥生

表 10 弥生時代後期の武器組成・比率（集計出典：川越 2000）

	鉄剣	鉄刀	鉄鏃	槍・矛	計	%
墓関連	218	71	315	35	639	28
住居関連	26	16	1159	6	1207	53
土坑・その他	22	6	70	0	98	4
溝	10	2	94	0	106	5
包含層	12	12	193	4	221	10
計	288	107	1831	45	2271	
%	13	5	81	2		



時代後期の墳墓における武器副葬は、一部の例外を除けばいずれも鉄製刀剣 1、鉄鏃・銅鏃を数本程度副葬した事例が大部分なのである。

弥生時代後期の鉄製品は墳墓のみでなく、集落跡からも出土しており、その分布も広い範囲に及び、出土数も膨大である。これを一つ一つ検討することは個人としては不可能であるが、川越哲志による集成作業が報告されているので、このデータを基に後期における鉄製武器の組成と出土遺構とをカウントしてみよう（川越 2000）。その結果は別表（表 10）のとおりであり、弥生時代後期の鉄製武器の出土傾向は、墓関連遺跡では鉄剣 218、鉄刀 71、鉄鏃 315、鉄槍・鉄矛 35、住居関連では鉄剣 26、鉄刀 16、鉄鏃 1,159、鉄製槍・矛 6、土坑その他では鉄剣 22、鉄刀 6、鉄鏃 70、溝では鉄剣 10、鉄刀 2、鉄鏃 94、包含層では鉄剣 12、鉄刀 12、鉄鏃 193、鉄製槍・矛 4 の総合計 2,271 点となる。

武器の組成をみれば鉄鏃の出土が 81%と大部分を占め、鉄製刀剣（18%）、鉄槍・矛（2%）は少数である。ただし、これを墓出土に限定すれば刀剣の割合が 45%に跳ね上がる。このことから、副葬武器として選択された器種は刀剣が多く、逆に住居関連から出土する武器は鉄鏃が多いと判断することができる。出土地点（遺構）別では住居関連の出土が 53%と過半を占め、墓関連が 28%、包含層が 10%、土坑と溝で 9%を占めるなど、弥生時代後期の鉄製武器の出土は住居関連が多いことが指摘できる。

もう少し具体的にいえば、弥生時代後期～終末においては、工房跡も含めた、遺構としての竪穴住居跡から鉄鏃などの鉄製武器が出土する事例が多い。

一方、鉄器の普及と共に、弥生時代後期・終末期においては九州から関東地域の広範囲にわたって各地域に首長墓や墳丘墓などが出現し、このことから首長層が形成されていく過程を読み取ることができるが、階層的な上位に位置づけられる首長層や有力家族層においては鉄剣を中心とする鉄製武器が副葬されている。とはいえ、首長墓への副葬量は個人に対し鉄剣や鉄鏃が少量ずつであるに過ぎず、副葬武器から社会の階層性や軍事権の独占を想定することは難しい。

例外的に弥生時代において鉄製武器を多量に副葬した日本海沿岸に関しては、旧丹後地域の京都府大風呂南 1 号墳で被葬者の頭部付近に銅釧や貝輪と共に鉄剣が集積され、更に遺骸の周辺からは玉類やガラス製釧、被葬者の左右から鉄剣、鉄鏃、ヤスなどが出土しており、集積された鉄剣は 11 本の多量に及ぶ。

しかしながら丹後地域の鉄剣副葬を分析した福島孝行は、大風呂南 1 号墓の被葬者について女性である可能性と、鉄剣の副葬が必ずしも階層に直結した副葬品でないことを示唆している（福島（孝行）2007）。弥生社会においても一被葬者に、その個人の使用を越えるような量の鉄剣を副葬するといった事実については、一定の武威や軍事的な側面も考慮しなければならないだろうが、鉄器副葬が多い丹後地域においても、通常は鉄剣 1～2 本を副葬する程度であって大風呂南 1 号墳の事例は極めて例外的な事例であるため、この 1 例を以て直ちに敷衍化することは慎まなければならないだろう。

村上恭通は弥生時代後期中葉から古墳時代前期初頭に至る、鉄製武器形副葬品が成立する背景として、非画一化段階（弥生時代後期中・後葉）、有稜系鏃に画一化がみられる段階（弥生時代終末～古墳時代初頭）、武器類全体に画一的様相がみられる段階（古墳時代前期）と発展的にまとめ、その背景に朝鮮半島からの情報のフローを読み取っているが（村上 1999）、社会の中で武威が尊ばれ、武器を用いた祭祀が重視されていくという歴史的な流れにおいては、単に武器を伴う風習や祭祀の伝達のみではなく、その共同体にとって武器に象徴される軍事が重要な構成要素となったこと、特定首長という共同体代表に武威が付与されていく階層的な武力占有への萌芽を読み取らなければならない。

これらの武器の出土状況のあり方から考えて、弥生時代後期においては一般の集落内の堅穴住居に居住する人物が、鉄鏃や場合によっては鉄剣を保有する一方、地域共同体の首長層は長刀や素環刀など威信財としての武器を副葬している状況が把握できる。ただし、この段階の首長層の武器数は個人で所持する程度の量である場合が大部分であって、埋葬に際して武器を大量に埋納する行為は一般的にはみることができない。弥生時代後期とは、相対的に特定の首長

などに突出した武器量を集中して副葬するという社会風習が希薄な社会であったと評価することができる。

一方で、弥生時代後期では、墓から出土する場合は鉄製の刀剣が多く、一般集落からは鉄・銅鏃の出土が多いことが事実として指摘でき、当時の武器に対する使用や価値付けには差異が生じていた可能性が認められる。すなわち、鉄鏃や銅鏃は集落から出土することが多いため、共同体成員が通常使用する武器としては弓矢が主であった可能性が高く、一方で、墓に副葬される武器は刀剣類が多いことから、刀剣類が首長層クラスの人々の社会的ステータスを表象していたなど、この段階において武器に対する社会的価値観の差異が存在していたと考えられるのである。

これを武装集団のあり方から考えてみると、弥生時代後期から古墳時代前期は、社会における共同体内の階層化が進行し、刀剣を佩用する首長層と弓矢による武装を主とする一般成員との間で武装集団としての機能的な分化や階層的な序列が進行していると想定することができる。

ただし、弥生時代後期においては、未だ集落や住居内から鉄鏃の出土が多いことから共同体内において軍事に携わった割合(軍事参与率:アンジェイエフスキー2004)は依然として高く、時代が下ると共に、集団内で軍事に携わる事柄が首長層に集中していく(軍事参与率が低くなっていく)と評価したい。



## 第4章 弥生時代の軍事組織





## 第4章 弥生時代の軍事組織

### はじめに

第1章から第3章にかけて、弥生時代の具体的な戦闘像や軍事組織像を検討してきた。最初に述べたように、軍事組織という概念は、命令系統、補給、訓練などといった非物質的な要素を総合した、非常に高度で象徴的な存在である。

そのため、弥生時代の軍事組織像について具体的な記述を行うのは困難であるが、本章では、これまで検討した具体的な戦闘像や、その武装集団の実像などを総合して、弥生時代の軍事組織を考察する。

### 第1節 弥生時代の軍事組織に関する研究史と本論の立場

弥生時代の武器については、第3章でみたように、研究初期には実用性に疑問を呈する見解が多数を占めており、武器の研究は型式学的な編年や流通、系譜論、祭祀論などを主要な論点として推移していた。すなわち、1950年代までの研究では、弥生時代の武器や武器副葬は周知されていたものの、具体的な戦闘に関する研究は、ほぼ皆無であったといえるであろう。

1951年に小野忠熙により高地性集落を分析した『島田川』の報告書が刊行され、1964年に『紫雲出』の報告書において佐原真が石製武器の発達を論じることで、弥生時代の戦争に関する研究の萌芽が生まれた。これ以降、弥生時代の戦闘論は主として高地性集落や石鏃の大型化現象から検討されることになるのである。

1980年代を中心にして、佐原真は環濠集落などの事例を論拠に、弥生時代の戦争論を発達させ（佐原 1979、1986a、1992）、1990年代以降になると、橋口達也が石製武器の使用痕跡（石剣の研ぎ直し）や人骨に嵌入した武器を詳細に分析し（橋口 1992・1995）、従来、宝器と目されるような武器型の遺物について実用の武器であるとの認識が広まり、ようやく剣・矛・戈を用いた弥生時代の具体的な戦闘像も指摘されるようになった。

その結果、弥生時代の社会像も、従来の牧歌的な農村としてのイメージから、ムラを濠で守り、それを巡って争いが起こる、といった戦闘的なイメージへとシフトしていくようにな

る。この段階の弥生時代における戦闘のイメージや、その歴史的な評価については田中琢の『倭人争乱』(田中(琢) 1991)、佐原真の『日本人の誕生』(佐原 1992)、松木武彦の『人はなぜ戦うのか』(松木 2001b)などの概説書において一般化されている。

これによれば、田中琢は武器を持つ人物を葬った墓地を“戦闘指揮者の墓”とし、「しだいに激しくなる地域紛争の戦いで、先頭に立って戦った人物だったにちがいない」と評価した。そして丘陵の開発に呼応して、環濠集落を拠点とした村と村の間の争いが激化・恒常化する、という歴史的な位置づけを与えた。佐原真も環濠集落を「敵襲を防ぐための防御施設」と断じ、高地性集落や石鏃の大型化の現象から弥生社会の戦闘的な様相をクローズアップした。なお、佐原は弥生時代の初期に九州で行われた戦いを“決闘”、中期に大阪湾で行われた戦いを“集団戦”と規定している。中橋孝博は人骨からの推計人口として福岡県隈・西小田遺跡の中期後半の共同体人口を 300 人、うち半分男性であった場合は 150 人とみなし、弥生時代の戦闘を数十人から数百人規模の集団戦と想定した(中橋 1999)。これらの知見を総合的に把握した松木武彦は、弥生時代の戦闘について環濠集落などを戦場とする“集落の攻防戦”を典型的な戦闘パターンとし、その規模を数十人から数百人程度と想定する。

上記の学史による研究成果のうち、本論においても、弥生文化と共に武器が出現し政治的成熟と共に戦闘が激しくなる、という事実や現象についてはこれを追認するものである。ただし、縄文時代においても十数例の殺傷人骨が認められており、縄文時代の殺傷人骨も“背後からの殺傷”事例が多いため(鈴木(尚) 1975、藤原(哲) 2004、内野 2013)、極めて小規模な“闘争”や“争い”は弥生時代以前より、恐らく人類の始まりと共に存在したと考えている。人類学者の福井勝義は戦い、紛争、略奪、殺りく 4 つの概念をまとめて戦い(conflict)としているが(福井 1987)、弥生時代の戦闘は、そのような小規模な、前国家段階の闘争、人類学で指摘されている“未開戦”(primitive war)の段階と考えられるのである(Turney-High 1971)。

また、政治的な成熟と共に鉄器の普及が戦闘の性質を変化させる、という研究史で指摘された現象に関しては、本論文においてもこれを認めるものであるが、鉄器の普及はこれまで鉄獲得といった長距離経済の把握という政治・経済的要因を特に重視する立場(都出(編) 1998、松木 2007)が多かったことに対し、本論では鉄の普及を戦闘に伴う殺傷威力の増大や、共同体成員の戦闘に参加する割合(軍事参与率: アンジェイエフスキー 2004)の変化という側面で重要視する。

研究史と異なった本論文独自の見解として、具体的な弥生時代の戦闘像を第 1 章の殺傷人骨の分析から小規模・又は儀礼的な性質であったと論じ、これまで弥生時代の戦闘研究を牽引し

てきた環濠集落などについては、第2章において、その防御的な機能を決して否定するものではないものの、様々な要因や背景を指摘し、一律に環濠集落から戦闘像を考察することに異論を唱えたことなどが主要な相違点となる。

更に、武力発生のメカニズムとしては、橋口達也や松木武彦などが人口圧や耕地の争奪、鉄などの長距離交易というような経済的要因（橋口 2007、松木 2007）を重視するのに対し、本論文では民族誌的な事例を基に非経済的な要因を重視する。なお、これまでの研究では松木武彦の研究で顕著であったように、その理論的支柱を史的唯物論に求めることが多かったが、本論では史的唯物論に基づく学説や経済至上主義を脱して、武力の発生や軍事組織の社会的・歴史的な因果関係を探ることが独自の研究として位置づけられる。

戦闘の様相としては、既往の研究の多くが、弥生文化成立以降、時間が下るに従って徐々に戦闘が激しくなり“ムラからクニへ”と発達していくと想定するのに対し、本論文では弥生時代の長期編年も参考にしながら、弥生時代の大部分は石製武器で武装した小規模な“未開戦”段階であったが、鉄製武器の普及と共に、弥生時代後期以降に戦闘の規模が拡大していくと考える。

## 第2節 弥生時代の軍事組織像

### 1. 弥生時代早・前期の軍事組織像（北部九州地域）

弥生文化の最先進地点である北部九州においては、第3章で検討したように弥生時代早期より石製の武器を副葬する風習が顕在化しており、武器の社会的な価値が高い状況が伺われるなど、武器を尊重する社会、又は戦士的な階層成立の萌芽を認めることができる。

ただし北部九州地域においても、弥生時代早・前期に限っていえば、石製武器が副葬される墓地（高倉洋彰のいう伯玄社タイプ：高倉 1973）において武器が副葬された被葬者は大部分が共同墓地（集団墓）の一角に埋納された状態にあり、突出した階層化は顕著ではない。したがって、未だ社会階層の階層的な格差は小規模か、一定の限界を有していたとしなければならない。

この段階の武器に関しても、主として石製短剣といった護身用、又は接近戦用武器と弓矢に限定されるため、弥生時代早・前期の北部九州における武装集団は、基本的には組織化される以前の段階の、武装化した農耕集団であったと評価することができる。

## 2. 弥生時代中期の軍事組織像（北部九州地域）

第3章で述べたように、弥生時代前期においても青銅器文化が成立していた可能性が存在するが、北部九州地域において石製武器に代わって銅剣・銅矛・銅戈といった金属製の武器が出現し、その副葬が始まるのは弥生時代中期初頭である。かつ、中期初頭には“王墓”とも称される質の高い副葬品を持つ特定の集団墓も現れており、青銅製の武器を複数本副葬するような事例が出現する。中期後半に至ると、北部九州地方では日本列島の他地域に先駆けて鉄器の鍛冶製作も開始されており、副葬行為から想定すると社会の階層化が急激に進行する。

この段階の北部九州地域の社会においては金属製武器の使用や、武器を媒介とした社会的なステータスの高さなどから判断して、軍事面での稀少武器を独占した集団や、軍事的に特化した戦士階層の存在を推定することができる。そのため、戦士階層が社会の中で定着し、集団内の一定の階層的な武装化、軍事的な組織化が形成されていったと考えられる。

しかしながら、階層化が顕著な北部九州の共同体は、嘉穂、福岡、早良、糸島などの、極めて小さな平地単位に存在しており、武装に特化した戦士集団が成立していたとしても、それはムラ程度の、地域的な各小共同体内の一部に限定された小さな集団内での現象であったと考えられる。

弥生時代の戦闘論で論拠とされた環濠集落については、第2章で検討したように、北部九州の前期末の状況は貯蔵穴専用の環濠が多く、中期では環濠遺構そのものが皆無に近い。戦闘の形態については、第1章で論究したように弥生時代は奇襲・襲撃を主とする小規模な争い、又は儀礼的な戦闘が主であったと考えられる。

弥生時代中期の北部九州地域は、社会の階層化や、武器の生産、武器副葬の独占といった歴史的に重要な現象が相次いで生起し、戦士的な階層や軍事組織の萌芽を認めるものである。しかしながら、北部九州地域においても、弥生時代前半までは軍事的な集団性が小地域毎の小さな集団に過ぎず、戦闘の形態も極めて小規模な戦いであったと結論づけられるだろう。

## 3. 弥生時代前期～中期の軍事組織像（北部九州以外の弥生文化分布地域）

弥生時代前期～中期にかけては、基本的に武器の副葬は北部九州以外の地域では発達することがない。第3章でみたように、武器の大部分は主として集落から石剣や石鏃などを中心とする石製武器が出土する。

このことから、北部九州以外の弥生文化分布地域においては、武器に対する副葬などの威信財的な社会的ステータスは全般的に低く、特定の戦士階層が武器を独占した様相を想定するこ

とは困難である。弥生時代前半の西日本各地においては共同体全体（集落全体）が武装しているような状況が復元できるのである。

環濠集落の防御的な機能に関しては、第2章の検討においても、これを完全に否定するものではないため、集団間の戦闘状態や、社会的な緊張状態も場合によっては生じた可能性がある。しかしながら環濠集落の大部分は、初期農耕文化における特定農耕集団との関連性が濃厚であり、環濠集落から直截的に戦闘を論じることは困難であると考ええる。

また、第1章で検討したように、弥生時代における実際の戦闘方法は小規模であったと復元できるため、武装集団が形成されていたとしても、それは組織的には未発達な状態であり、基本的には戦闘の規模も短期間かつ小規模であったと評価することができるだろう。

#### 4. 弥生時代後期の軍事組織像

弥生時代後期は鉄器の生産と武器を副葬する現象が広い範囲にわたって認めることができるようになる。第3章において弥生時代の鉄製武器の出土状況を検討した結果では、武器に対する社会的価値が低かった地点（近畿地方、中国地方、関東地方など）において新たに武器が副葬される現象が出現し、広域な範囲において鉄製武器を副葬する首長墓が形成されるようになる。このことから、弥生時代後期においては弥生文化が分布する広い範囲において、武器で表象される武威や武力を尊ぶ社会的な価値観が樹立されていく様相を伺うことができる。

これらの現象から、弥生時代中期までに北部九州の一角でのみ発達していた、社会の階層化や武器の価値的な高まり、これに付随する特定の戦士階層の発達や軍事組織の成立といった現象も、北部九州一体のみに留まらず、利根川以西の日本列島の広範囲にわたって発達していくようになると評価することができる。

また、第1章でみたように、弥生時代後期においては、鉄器の普及により武器の殺傷能力が増加し、鳥取県青谷上寺地遺跡などでは、集中的に多数の斬傷のある殺傷人骨が出土するようになるため、後期以降には、戦闘の規模や苛烈さも進展した状況が伺われるのである。石製武器による小規模な戦闘の規模が、弥生時代後期において大きくなっていく原因や画期としては、鉄製武器の使用や政治制度の成熟性が理由として挙げられるだろう。特に首長の政治権力の増大など、農耕社会の再編成には、同時に軍事的な組織度も高めていったと考えられるのである。

しかしながらその一方において、弥生時代後期においては住居・墓のいずれの地点からも一定の鉄製武器が出土しているため、武器の独占度に注目すると、未だ古墳時代に認められるような特定の首長に突出して集中される現象は認めることができない。弥生時代後期段階におけ

る軍事的背景は、緩やかな階層差の中で、軍事的指導者層と一般成員とに分かれ関係性が維持されていたと考えられる。そのため、この段階の軍事組織は階層的には一定の限界を有する組織体であったと評価することができるであろう。

## 5. 軍事組織の変化と画期

以上、弥生時代における軍事組織の概要をまとめた。これを歴史的な流れの中で位置づけるために、その変化と画期とを考察したい。原始・古代社会における武器や軍事に関連する第一の画期は、定型的な武器が出現し、石製武器（短剣）や弓矢（石鏃）などで農耕民が武装した段階（弥生時代早期～前期）が挙げられる。

社会的な背景では、弥生時代早～前期の北部九州、及び前期～中期の北部九州以外の弥生文化分布地域においては、階層化の進展が少なく、軍事組織的な階層的序列の形成を認めることができない。また、この段階は特定の墓などへ武器が集中するような武器の独占傾向も少ないため、集落内の一般成員が武装化するような、共同体全体の武装が想定される。一方、戦闘の形態も小規模、又は儀礼的なものが主体であったと評価できた。これらの諸要素から、第一の画期により成立した段階の弥生社会の軍事組織は、組織的には未発達な状況にあったと位置づけられるであろう。

弥生時代の軍事組織に関する変化の画期については、各地域間において進展の速度が異なっている。武器の副葬や武器の生産について先進的な北部九州においては、弥生時代中期初頭、遅くとも中期末までには、社会上での一定の階層化が拡大しており、稀少な金属製武器を独占的に副葬する首長の存在など、軍事的に特化した戦士階層の存在や軍事組織形成の萌芽を早くに認めることができる。

同様な状況が、北部九州以外の地域で進展するのは弥生時代後期、特に弥生時代後期後半である。弥生文化全体で評価する場合は、日本列島各地に鉄器の生産が行われるようになり、鉄製武器を副葬する首長墓が形成され、軍事的な階層が広域に成立した段階を弥生時代後期に求めたい。

したがって、汎日本列島的には、軍事組織の変化における第二の画期は弥生時代後期に位置づけられる。こういった階層化の拡大や鉄製武器の独占傾向という画期での変革の延長線上において、古墳時代前期には隔絶した首長層の形成や、その武器の独占傾向が著しくなっていくのである。

なお、弥生時代は“イネと鉄”を中心とした歴史観があり、かつ弥生文化が一気に東海地域

まで拡散したと考えられてきたが、弥生長期編年の構築によれば（藤尾 2013）、上記のような軍事面での画期の形成には、武器に伴う小さな変化が長い時間をかけて蓄積されていったと想定される。

すなわち、灌漑式水田の出現（山の寺式・夜臼Ⅰ期：前10世紀後半）から磨製石剣と石鏃の武装が北部九州で普遍化するまで（板付Ⅰ期：前8世紀初め）には約100～150年の歳月が必要であった。その後、北部九州においてさえ、主として共同体が石製武器のみで武装した時期が400年以上続き、青銅武器の出現や武器を副葬する王墓が形成されるのは中期の初頭（城ノ越）：前4世紀半ば）である。それから文献に“倭国”が記される（紀元後57年）のは更に400年後、そしてそこから“倭国乱”までは150年が経過するなど、小規模な戦闘から軍事組織が発展していく過程は非常に長い年月の積み重ねが存在する。

弥生時代長期編年に基づけば、弥生時代の大半は石製武器による武装農耕民の段階が長期に及び、ようやく弥生時代後期において急激に階層化が進展すると考えられるが、このような急激な変化要因は何に求めることができるのであろうか。弥生時代後期における軍事組織の画期と関連して、本章の最後に学史上で多数の議論が生じた“倭国乱”について言及したい。

中国史書によれば、『魏志』倭人伝に卑弥呼が女王として擁立される以前に「倭国乱相攻伐歴年」の記述があり、これについて『後漢書』東夷伝では「桓靈間倭国大乱更相攻伐歴年」として紀元後2世紀後半のこととしている。また『魏志』倭人では邪馬台国と狗奴国との「説相攻撃状」という記述や、卑弥呼死後（3世紀半ば以降）の「更相誅殺、當時殺千餘人」といった戦闘の記述がいくつか知られている。

これらの記述の史料批判としては「乱」と「相攻伐・相誅殺」という用語の差異を識別する必要性や（丸山 1995）、「桓靈の間」とは後漢王朝が乱れる時期であるため、暗愚な皇帝に対する慣用句として「乱」が用いられた可能性も考えられるなど（山尾 1986）、「倭国大乱」の性格や年代について文献記録を無批判的に用いることは慎まなければならない。しかしながら、この倭国大乱という用語は考古学へも常に大きな刺激を与えてきたという学史があり、弥生時代の戦闘や軍事組織像を総合的に評価する場合は避けて通ることができないだろう。

考古学の暦年代観では、紀元後2世紀後半は1960年代～70年代段階では弥生時代中期が該当するとされ、学史の項でみた小野忠熙や佐原真によって、弥生時代中期の軍事的様相（高地性集落の出現や石鏃の大型化）が倭国大乱と結びつけられてきた（小野 1951、佐原 1964）。その後、高地性集落が増加する時期が中期後半と後期の大きく2時期あることや、弥生時代の暦年代観の見直しによって、史書の記述と高地性集落とを直接的に結びつけることが困難になっ

てきた。

しかし 2 世紀後半に倭国で大乱があった現象は蓋然性が高いと考えられてきたため、倭国乱と考古学的事実との整合的な解釈が模索されている。近年の弥生時代の暦年代観の見直しによると、紀元後 2 世紀後半は弥生時代後期の中～後半に該当するため（西本 2007、国立歴史民俗博物館 2007）、「倭国大乱」を弥生時代後期の高地性集落と結びつける見解（前澤 1996）もあり、弥生時代後期における政治的・軍事的な緊張の歴史的な意義としては金属やその他の先進的文物の取得を巡る争いであったと評価されている（松本 2007）。

本論文での分析によれば、弥生時代早～前期の北部九州、及び前期～中期の北部九州以外の弥生文化分布地域においては軍事組織も未熟で、戦闘の形態も小規模、又は儀礼的なものが主体であったと復元してきた。従って、この段階の戦乱は各地域のムラ同士の小競り合い程度が主体であったと評価したい。

弥生時代後期は、日本列島各地で鉄器の生産が行われ、鉄製武器を副葬する首長墓が形成されるなど、軍事的な階層が広域に成立した段階、軍事組織の変化における第二の画期と捉えることができた。また第 1 章でみたように、弥生時代後期には威力の増した鉄製武器による殺傷事例が認められることや、殺傷人骨がまとまって出土する遺跡がみられるなど、戦闘の規模も拡大していく様子が伺われる。

これらを総合すると、弥生時代後期、特に後期後半においては、農耕文化の成熟による農耕社会の再編成や、階層化の進展や首長層の成立といった社会的・政治的な要因によって一定の戦乱状況が生じたと評価することができるであろう。



## 第5章 古墳時代における戦闘の具体像 (『日本書紀』の戦闘記述に関する批判的検討)



## 第5章 古墳時代における戦闘の具体像 (『日本書紀』の戦闘記述に関する批判的検討)

### はじめに

第1章から第4章においては弥生時代における戦闘像や武装集団像を検討してきた。第5章以下では古墳時代に時間軸を移し、その戦闘像や軍事組織について考察を行う。まずは、古墳時代における武器の機能的な使用方法、すなわち武器を用いた戦闘像を復元したい。

序章で述べたように、本論文の基本方針としては武器という資料を前提としつつ、具象的な事象から次第に象徴的な思考へと考察を深めていきたいが、古墳時代においては、弥生時代の殺傷人骨にみられるような武器の痕跡は皆無ではないものの資料数が非常に少ない。そのために、第1章で検討したような、殺傷人骨などから直接的に武器の使用痕を明示することが困難である。

古墳時代の武器の使用方法(=戦闘の方法)を明らかにするためには、副葬品としての武器が多い考古資料の分析のみでは、その検討は間接的にならざるを得ない。一方、古墳時代は一定の文字資料を把握することができる最初の時代でもあり、文献において武器の使用や具体的な戦闘に関する記述もみられるところである。そこで本章では文献資料としての『日本書紀』を取り上げ、武器組成や城郭遺跡の有無といった考古資料の成果と対比することで、文献資料の批判的な検討を行い、これら学術的な検討を経た後に、文献資料と考古資料とを総合して古墳時代の具体的な戦闘像について考えたい。

### 第1節 研究の方法と『日本書紀』の研究小史

#### 1. 『日本書紀』と兵制史を巡る研究史

古代の戦闘を考察する資料としては文献資料と考古資料とを挙げることができるが、どちらにおいても制約があつて一長一短である。文献資料は考古資料より具体的な情報が得られるものの資料の絶対数が極端に少なく、7世紀以前においては『記紀』がほぼ唯一の限られた資料となる。しかしながら『記紀』は後世に編纂された二次資料であるため、同時代の情報として参照するのは信憑性に大きな問題がある。

対する考古資料は年々増加の一途を辿り研究は大いに進展しているように見える。しかしながら、考古資料は“沈黙性”という性質があるため『記紀』のような文献資料ほど具体的な歴史像の復元が困難であるという問題点も指摘することができる。

かつての古代史研究は文献史学と考古学とが綿密な交流を行っていた。例えば石母田正、井上光貞、直木孝次郎などは、文献を用いる上で積極的に考古学的事実を分析の材料として取り入れ、逆に後藤守一、末永雅雄、小林行雄などの考古学研究者は積極的に文献記述との整合性を図っている（註 14）。

戦後の古代史研究は、文献では津田左右吉の記紀批判を継承することから出発し、考古学では考古資料そのものの詳細な個別研究から開始された。そのことに問題はないが、こういった研究姿勢が推し進められた現状では、資料数の少ない 7 世紀以前の文献研究が行き詰まりをみせ、考古学研究では膨大な資料の波に押しつぶされつつあるという、負の問題点が大きくなりつつある。

そこで、本章は『日本書紀』に記載された戦闘（武器）関係記述を検討した上で、一次資料としての考古資料からの“記紀批判”を行い（註 15）、しかる後に、文献研究と考古学研究とを総合することで、古代における具体的な戦闘像を復元したい。

『日本書紀』そのものについては様々な角度からの膨大な研究がある。既に『書紀』の成立直後より『日本書紀私記』で代表されるように訓読（古訓）を主目的とした研究が行われており、時代の変化と共に中世には神道的な宗教観に基づく研究が、近世には実証的な分析も試みられ、近代以降では純粋に学問的視点から国文学、歌謡学、歴史学、神話学、語学など様々な分野で研究が行われた。逐一、これらの研究を網羅することはできないので、本章で主に問題となる『日本書紀』と武器や軍事との関係を検討した事例を中心に研究史を振り返りたい。

文献史学における古代の軍事研究としては、古く伊藤東涯が 18 世紀前半に『制度通』の中で「兵制並ニ本朝軍事ノ事」として兵制の概要を記し（伊藤（東涯）1912）、明治期には栗田寛が「上古の兵制」として律令制下における軍事組織を研究している（栗田 1901）など、主として軍事制度（兵制）への関心が特に強い。1940～1960 年代には井上光貞や直木孝次郎などを中心に物部や鞍負部など、『記紀』にも記載のある“大化前代の軍事組織”に関心が集まった時期があったものの（井上（光貞）1949、直木 1968）、資料的制約のためか、下向井龍彦や松本政春の研究にみられるように、近年の兵制史研究は奈良時代以降のものに集中しつつある（下向井 1987、松本 2002）。

むしろ『日本書紀』に関連した軍事史研究では歴史学よりも国文学との関連において問題の

根源に肉薄した研究が行われている。例えば『記紀』の中にみられる戦闘歌謡の分析(高木 1933)を材料とした石母田正が英雄時代論を提唱し(石母田 1947)、万葉集に記された防人を巡る考察を通じて岸俊男が国造軍を分析している(岸 1955)。その他、日本武尊伝説を通じて建部の軍事的性格を追及した上田正昭の研究(上田 1999)、『日本書紀』の文学的一側面として平家物語のような“いくさがたり”を読み取ろうとする研究(むしゃこうじ 1973)などが、直接、又は間接的に『日本書紀』を資料として文学との関連から古代の戦闘や戦争に踏み込む研究を行っており、純粋な歴史学(文献史学)の研究が制度的側面(兵制)に関心が集中したのとは対照的である。

このような研究の傾向の中にあって、笹山晴生は広い視野から古代の軍事組織や沿革などを網羅的に扱っており『記紀』の戦闘に関する記述についても、集団的戦闘に乏しいこと、騎馬による戦闘が少ないこと、姦計が多いことなど、非常に重要な事柄を指摘している(笹山 1962、1975、1984)。

また、近年においては『日本書紀』をテキストとして正面から軍事問題を分析する野田嶺志の研究や(野田 1995、1999)、若槻真治の研究(若槻 2009、2011、2013)もみられるようになった。ただし、『日本書紀』は後世に編纂された書籍(二次資料)であるため、これをテキストとして用いる場合は資料批判という方法論的な手続きが必要不可欠である点は十分な注意が必要である。

一方、考古学の分野では物的資料としての武器について、『日本書紀』を始めとした古記録から検討するという、新井白石や伊勢貞丈などの有職故実の伝統が江戸時代より存在している(故実叢書編集部 1993a、1993b)。武器・武具の各部名称についても伝統的な名称が援用されており、学術用語として現在まで定着しているものも多い(高橋(健自) 1910、末永 1930)。

その後、古典における武器・武具の用語と考古資料との関係については斎藤忠の一連の研究があり、古典の中の考古学用語が整理され都牟加利大刀、高麗剣、頭椎大刀といった武器の実像について検討が加えられている(斎藤 1985)。しかし戦後の研究においては考古資料そのものの詳細な個別研究が主流であり『日本書紀』の記述を追求するような研究はごく一部のものの、部分的な解釈に留まるものに過ぎなかったといえるだろう。

むしろ考古資料と文献記述との関係性においては、文献研究での成果と考古学的諸事実とを結びつける研究、例えば文献に記述のある豪族と古墳の築造集団とを比較する研究などは非常に数多く行われ一定の成果を上げている(註 16)。しかしながら方法論的な問題点において、考古資料そのものから『日本書紀』の資料批判の試みた上で、改めてテキストとしての『日本

書紀』と考古事実とを結びつけるような研究態度は少ないというのが実情であろう。

本章では文献研究と考古学研究とを総合する方法論的手段として、歴史上の第一次資料（考古資料）から二次資料である『日本書紀』の記述を批判的に検討することで、古代における戦闘の具体像を検討してみたい。

## 2. 『日本書紀』戦闘記述の分類

以下の検討部分では『日本書紀』に記載された武器・戦闘記述を取り上げる。なお、ここでのいうのは剣・弓・盾などの武器や武具と、これを用いた暴力や戦闘に関する記述である。それらの記述は千差万別であり様々な表現がみられる。したがって、幾つかの群に分けて類型的な分類を行うのが適当であろう。また、『日本書紀』は各巻の用語の不統一があり複数の述作者がいたことが指摘され区分論として研究が大いに進んでいる。

そこで、戦闘記述を A～F の 6 つの類型的表現に区分し、また書紀区分論に基づく I～VI の 6 つの区分を組み合わせ、これまでの実証的な文献研究や考古学研究からの成果を援用して各記述の検討を行いたい。

分類の基準としては、先ず区分論を参照にして書紀全体を次の I～VI 群に区分する。『日本書紀』の区分論は古くから活発に議論されてきた問題であるが（註 17）、近年の代表的な区分論である小島憲之と森博達の研究（小島 1988、森（博達）1999）のうち、森区分の理解には音韻学の知識が不可欠であるため、本章では出典論など歴史的な資料学との関連性が強い小島区分を採用し、『日本書紀』を以下のように区分した。

I（巻一・二）

II（巻三～十三）

III（巻十四～二十一）

IV（二十二～二十七）

V（二十八）

VI（二十九・三十）

ただし、巻二十八は壬申の乱という一大戦乱を扱っているため、これを独立させている。また、本章は主として古墳時代の戦闘に関する研究に主眼を置いているため、特に I～III 群を中心として分析を行い、必要に応じて IV～VI 群について言及することを断わっておく。

武器記述の内容としては、

A 型記述（武器・武装の具体的記述、又はその使用による個人的戦闘）

B1 型記述（簡素・抽象的な国内の戦闘記述）

B2 型記述（簡素・抽象的な国外の戦闘記述）

C1 型記述（具体的な国内の戦闘シーン）

C2 型記述（具体的な国外の戦闘シーン）

D 型記述（儀礼・祭祀における武器関係記述）

E 型記述（その他）

に分けた。なお、前後に関連性のある記述（援軍要請など）が存在する場合は、具体的な戦闘記述の続きとして C 型に含め、クーデターなどに関しては特に目立った戦闘情景や集団的な戦闘描写があるものを除いては B1 型に含んでいる。

戦闘（武器）記述に関しては、どの記述までを戦闘関係と受け止めるかによって若干のカウント数が異なってくるが、概ね表 11 のように数えることができた。これによれば I～VI の各群においてもかなり武器・戦闘記述の隔たりがあり、書紀編者の関心の度合い、もしくは編者が利用した原資料（素材）の差があらわれている。以下、具体的に検討していきたい。

## 第2節 『日本書紀』戦闘記述の分析

### 1. I 群（巻一～二（神代））における武器・戦闘記述

I 群、神代上・下巻における武器・戦闘記述は 12 例と各群の中でも記述数は比較的に少ない。内訳は A 型（武器・個人戦闘）記述が 6 例と半数を占め、D 型（儀礼・祭祀）記述が 2 例、E 型（その他）記述が 4 例である。

具体的な武器の使用例としては「乃ち帯かせる十握剣を抜き、寸に其の蛇を斬りたまふ」という素戔鳴命の八岐大蛇退治の場面や、味耜高彥根神の「其の帯ける剣大葉刈を抜きて、喪屋を斫仆せつ」などの個人的な武器の使用例が目立つ。儀礼関係としては天照と素戔鳴の誓約の場面や、天石窟戸で天鈿女命が「茅纏之稍」を持つ例がある。

このように I 群の特色は戦闘記述の希少な点にあり、特に集団的な戦闘記述は皆無である。このことは、書紀編者においても具体的・現実的な戦闘に関する情報が希少であったことの証左となるであろう。武器としても「十握剣」「草薙剣」「大葉刈」などの名称のみでは現実的な検討は困難であるが、「十握」という点から長剣（刀）をイメージしていた様子は伺うことができる。唯一、この群における具体的な武装として次の記述がある。

表 11 『日本書紀』の武器・戦闘記述一覧

I 群	神代					
記述類型		卷		記述箇所	武器使用者	内容
A型記述	武器・個人	神代・上	卷一	第五段	伊奘諾尊	軻遇突智を剣で斬る
		〃	〃	第五段	伊奘諾尊	剣を振るい黄泉より脱出
		〃	〃	第五段	月夜見尊	保食神を剣で殺す
		神代・上	卷一	第六段	天照大神	武装記述
		〃	〃	第八段	素戔鳴命	八岐大蛇を剣で斬る
		神代・下	卷二	第九段	味耜高彥根命	喪屋を刀で斬る
D型記述	儀礼・祭祀	神代・上	卷一	第六段	素戔鳴命	剣を使って誓約
		〃	〃	第七段	天鈿女命	天石窟戸の前で矛で踊る
E型記述	その他	神代・下	卷一	第四段	伊奘諾尊	矛で国造り
		〃	卷二	第九段	天稚彦	反矢の故事
		〃	〃	〃	武甕槌神ほか	国譲りで剣の上に坐る
		〃	〃	〃	大己貴神	国譲りで広矛を授ける

II 群	神武～安康					
記述類型		卷		記述箇所	武器使用者	内容
A型記述	武器・個人	神武	卷三	戊午八月二日	兄猾	剣・弓で追い込む。久米歌有り
		綏靖	卷四	神武～安康	神淳名川命	狩猟用鎌で殺害
		崇神	卷五	四十八年一月十日	豊城君	山上で槍を突き、剣を振るう
		〃	〃	六十年七月十四日	出雲振根	刀と木刀を取り替える
		垂仁	卷六	四年九月二十三日	皇后狭穗姫	匕首による天皇暗殺未遂
		景行	卷七	十二年九月五日	神夏磯媛	白旗による帰順
		〃	〃	二十七年十月十三日	日本武尊	童女に変装して川上梟師を殺す
		〃	〃	四十年七月十六日	東夷	箭を頭に蔵し、刀を衣に佩く
		応神	卷十	九年四月	武内宿禰	横刀で殴仆す
		仁徳	卷十一	四十年二月	阿俄能胡ほか	隼別皇子、雌鳥皇女の殺害
		〃	〃	六十五年是歳	宿禰	剣を佩き、弓を使う
		〃	〃	六十七年是歳	笠臣県守	虬を剣で斬る
		履中、反正	卷十二	即位前紀	刺額巾	仲皇子を厠で刺殺す
		允恭、安康	卷十三	允恭五年七月十四日	玉田宿禰	尾張吾襲を道路に殺す
B1型記述	簡素・国内	神武	卷三	戊午十月一日	神武	八十梟師を国見坂で撃つ。久米歌有り
		〃	〃	己未二月二十日	神武	土蜘蛛を皆誅す
		崇神	卷五	十年九月九日	四道將軍	派遣
		〃	〃	十一年四月二十七日	四道將軍	帰還
		景行	卷七	十二年十月	土蜘蛛	襲って殺す
		〃	〃	〃	打猿	撃って破る



Ⅱ群	神武～安康				
記述類型	卷		記述箇所	武器使用者	内容
B1型記述 簡素・国内					
	仲哀	卷八	元年閏十一月四日	仲哀	兵卒を遣わして蒲見別王を誅す
	〃	〃	二年三月～八月	仲哀	熊襲を討とうと出発・信託有り
	神功	卷九	摂政前紀（仲哀九年三月）	神功	熊襲他を兵を挙げて撃つ
	仁徳	卷十一	即位前紀	仁徳	大山守皇子を伏兵で囲み溺死
	〃	〃	五十五年	上毛野田道	蝦夷に敗れる
	履中、反正	卷十二	履中即位前紀	仲皇子	兵を興して宮を囲む
	允恭、安康	卷十三	允恭五年七月十四日	允恭	玉田宿禰の家を囲み誅す（衣に甲の記載有り）
	〃	〃	安康即位前紀	安康	木梨輕皇子を兵で囲む。穴穂括箭・輕箭の記事
	〃	〃	安康元年二月五日	安康	兵を起こし大草香皇子の家を囲む
B2型記述 簡素・国外	垂仁	卷六	二年是歳		任那・新羅の抗争
	神功	卷九	摂政前紀（仲哀九年十月）	神功	新羅親征・船師海に満ち云々
	〃	〃	〃	神功	新羅親征異伝・軍船海に満ち云々
	〃	〃	四十九年三月	荒田別・鹿我別	精兵を率いて新羅を撃ち破る
	〃	〃	六十二年	葛城襲津彦	新羅を撃たしむ
C1型記述 具体・国内	神武	卷三	戊午四月九日	神武	長髓彦と孔舎衛坂で戦い、後退
	〃	〃	戊午十一月七日	神武	兄磯城を挟撃して破る。久米歌有り
	〃	〃	戊申十二月四日	神武	兵を縦って急に攻める。歩鞠の記述、久米歌有り
	崇神	卷五	十年九月二十七日	彦国葺	武埴安彦の乱。挑河で矢合戦
	垂仁	卷六	四年十月一日	八綱田	狭穂彦王の乱。稲城での攻防
	神功	卷九	二年二月	武内宿禰	忍熊王の乱。欺いて撃つ
C2型記述 具体・国外	仁徳	卷十二	五十三年五月	上毛野田道	对新羅での騎馬戦
D型記述 儀礼・祭祀	崇神	卷五	九年三月十五日	崇神	盾・矛を神社に奉納
	垂仁	卷六	三年三月	天日槍	刀・鉾の神宝とする
	〃	〃	三十九年十月	五十瓊敷命	一千口の剣を石上神宮に納める
	〃	〃	八十八年七月十日	天日槍	出石の小刀を祠に祀る
	成務	卷七	五年九月	成務	造長、稲置に盾・矛を与えて表とした
	神功	卷九	摂政前紀（仲哀九年四月）	武内宿禰	剣・鏡を捧げて祈る
	〃	〃	摂政前紀（仲哀九年九月）	神功	新羅親征を前に刀・矛を奉る
	〃	〃	五十二年九月十日	久氐	七枝刀を献る
	仁徳	卷十一	十二年七月三日		高麗国が鉄盾・鉄的を貢る
E型記述 その他	神武	卷三	戊午十月一日	道臣命	忍坂邑に饗宴を設け虐殺。久米歌有り
	〃	〃	己未三月七日	神武	令・凶徒就戮されぬ云々
	〃	〃	三十一年四月一日	伊奘諾尊	日本は細戈の千足る国云々
	垂仁	卷六	七年七月七日	野見宿禰	搦力する

Ⅱ群	神武～安康				
記述類型	卷		記述箇所	武器使用者	内容
E型記述	その他				
	〃	〃	三十四年三月二日	垂仁	矛を挙げて亀を刺す
	景行	卷七	四十年是歳	日本武尊	東征。賊を焼き滅ぼす
	〃	〃	四十年七月十六日	日本武尊	蝦夷、戦わずして従う
	〃	〃	十二年九月一日	麻剥	誘って捕らえて殺す
	〃	〃	十二月	市乾鹿文	熊襲梟帥酔わせて殺す
	仲哀	卷八	八年九月五日	神	神託。兵を挙げて熊襲を伐つより新羅を云々
	神功	卷九	摂政前紀（仲哀九年四月）	神功	新羅親征の決意。夫れ師を興こし云々
	〃	〃	摂政前紀（仲哀九年九月）	神功	親征前の命令。金鼓節無く云々

Ⅲ群	雄略～崇峻					
記述類型	卷		記述箇所	武器使用者	内容	
A型記述	武器・個人	雄略	卷十四	即位前紀（安康三年八月九日）	眉輪王	安康天皇を熟睡中に刺し弑す
		〃	〃	〃	雄略	八釣白彦皇子を刀で斬る。武装記述有り
		〃	〃	即位前紀（安康三年十月）	雄略	市辺押磐皇子を狩りに誘い射殺す
		〃	〃	元年十月三日	雄略	刀を抜いて大津馬飼を斬る
		〃	〃	三年四月	枳莒喻	不意に打ち殺す、経き死ぬ云々
		〃	〃	五年二月	雄略	猪を弓で刺し、舎人を斬らむとす云々
		〃	〃	七年八月	吉備下道臣	小女・鶏を刀を抜きて殺す
		〃	〃	九年五月	紀大磐宿禰	在韓將軍の内紛。後より射る
		〃	〃	十三年八月	大樹臣	刀を抜いて文石子麻呂を斬る。敢死志一百を領し宅を囲む云々
		武烈	卷一六	即位前紀	武列	大太刀をたればき立ちて抜かずとも云々
	安閑	卷十八	元年閏十二月	武蔵国造笠原使主		武蔵国造の同族争い
	欽明	卷十九	五年十一月	稚子の皮甲		二人に化りて相闘う
	〃	〃	六年十一月	膳臣巴提便		刀を帯び甲を撰て虎を刺殺す
	敏達	卷二十	元年六月	高麗大使		暗殺される、杖で頭を打ち、刀で腹を刺す
	〃	〃	十二年是歳	日羅		甲を被、馬に乗り云々
	〃	〃	〃	日羅		日羅暗殺（武器記述はなし）
	〃	〃	十四年八月	蘇我馬子、物部守屋		誅の応酬、刀を佩き、獵箭等の記事
	用明	卷二十一	二年四月	迹見赤檮		刀を抜きて中臣勝海を殺しつ
	〃	〃	〃	大伴毘羅比		手に弓箭、皮盾を執りて大臣を守護る
	崇峻	〃	五年十月	東漢直駒		崇峻を殺せまつらしむ云々。人を断つ・兵杖の記事有り
B1型記述	簡素・国内	雄略	卷十四	即位前紀	雄略	兵を興こして円大臣宅を燔く
	〃	〃	〃	七年八月	雄略	物部の兵三十を遣わし七十人を誅殺す
	〃	〃	〃	十四年四月	根使主	稲城を造りて待ち戦う。城は堅しの記述

Ⅲ群	雄略～崇峻				
記述類型	卷		記述箇所	武器使用者	内容
B1型記述 簡素・国内					
	清寧	卷十五	雄略二十三年	大伴室屋ほか	軍士を發して大蔵を圍繞み火を縦ける云々
	武烈	卷十六	即位前紀	大伴金村	数千の兵を將て鮪臣を戮す
	〃	〃	〃	大伴金村	兵を率て大臣の宅を囲み燔く
	敏達	卷二十	十年閏二月	蝦夷	数千、辺境を寇ふ
	用明	卷二十一	元年五月	穴穂部皇子	兵を率て圍繞む、物部守屋三輪君逆を斬す
	崇峻	〃	即位前紀	佐伯丹経手	兵を飾りて穴穂部皇子宮を囲む（肩を撃つ）
B2型記述 簡素・国外	雄略	卷十四	二十年冬	高麗王	軍兵を發して伐ちて百済を尽す（百済本記に云わく云々）
	〃	〃	二十三年是歳	筑紫安到臣ほか	船師を率いて高麗を撃つ
	繼体	卷十七	七年六月	伴跋国	己汝の土を略奪ふ云々
	〃	〃	二十三年三月	新羅	三城を拔り、亦五城を拔る
	宣化	卷十八	二年十月一日	大伴狭手彦	新羅、任那に寇ふ、往きて任那を鎮め云々
	繼体	卷十九	六年		高麗大乱、鼓を伐ちて宮門に戦闘へり
	〃	〃	七年是歳		高麗大乱、闘い死ねる者二千余
C1型記述 具体・国内	雄略	卷十四	十八年八月	物部目連	朝日郎の討伐
	〃	〃	二十三年八月	吉備臣尾代	新羅遠征途中の蝦夷反乱、尾代の奮戦
		卷二十一	即位前紀	蘇我馬子	蘇我・物部戦争（軍兵・奴軍・稲城・射ること雨の如し等の記述）
			（続）	（続）捕鳥部万	一人でゲリラ戦・弓箭・剣・刀子の使用例
C2型記述 具体・国外	雄略	卷十四	八年二月	膳臣斑鳩	新羅救援・高句麗軍撃破
	〃	〃	九年三月	紀小弓宿禰	対新羅戦・大伴津麻呂の敵陣へ赴く奮戦
	顕宗	卷十五	三年是歳	紀大磐宿禰	軍を進めて百済を逆撃つ
	繼体	卷十七	八年三月～十年九月	物部伊勢ほか	己汝・帶沙うをめぐる争い（城・船師の記述有り）
	〃	〃	二十一～二十二年	筑紫国造磐井	磐井の乱・旗鼓相望み埃塵相接げる云々
	〃	〃	二十三年三月～二十四年	近江毛野臣	渡海・將軍・境を越え、四村を抄掠め、兵を迎え討ち、城を抜く云々
	欽明	卷十九	九年四月	百済対高句麗	馬津城の役、高麗兵を率て馬津城を囲む
			（続）九年十一月	（続）	三百七十を百済に送り城を築かしむ
			（続）十一年二月	（続）	矢三十具を賜う
			（続）十一年四月	（続）	百済聖明王、高麗を攻めて禽れる奴を献上
			（続）十一年四月	（続）	百済、狼の虜十口を献る
			（続）十二年三月	（続）	一千斛を百済王に賜う
			（続）十二年是歳	（続）	聖明王、高麗を伐ち漢城を獲つ
	欽明	卷十九	十三年是歳	百済対新羅・高句麗	百済漢城を棄る、新羅入り居り
			（続）十四年正月	（続）	百済軍兵を乞う
			（続）十四年六月	（続）	馬二匹、船二隻、弓五十張、箭五十具を内臣に命じて賜う
			（続）十四年八月	（続）	百済の上表文・援軍依頼・前軍後軍の記述有り

Ⅲ群	雄略～崇峻					
記述類型	卷		記述箇所	武器使用者	内容	
C2型記述	具体・国外					
			(続) 十四年十月	(続)	百済王子余昌、高麗軍と戦う	
			(続) 十五年正月	(続)	百済の援軍要請・軍千、馬百、船四十を約束	
			(続) 十五年二月	(続)	援軍要請、同時に上番の交代あり	
			(続) 十五年五月	(続)	内臣、船師を率いて百済へ詣る云々	
			(続) 十五年十一月	(続)	内臣の援軍で新羅征伐、物部莫奇委沙奇火箭で活躍	
			同上記事	(続)	事方に急なり云々。援軍要請、獲りたる民等を献上	
	欽明	卷十九	十五年十二月	余昌	新羅討伐へ、聖明王戦死	
			(続)	(続)	余昌圍繞まれ、筑紫国造が箭を雨の如く發し活躍	
			(続) 十六年二月	(続)	聖明王戦死の報告、兵革の単語	
			(続) 十七年正月	(続)	百済王子恵帰国、船師と勇士千人が送る	
			(続) 二十二年是歳	(続)	新羅、城を築きて日本に備ふ	
			(続) 二十三年正月	(続)	任那滅亡	
			(続) 二十三年六月	(続)	新羅に報復の詔、長戟、強弩の武器記述	
	欽明	卷十九	二十三年七月	紀男麻呂、河辺臣瓊缶	任那へ、印書を落とし河辺臣大敗	
	欽明	卷十九	二十三年八月(年代誤)	大伴連狭手彦	兵数万高麗へ、勝ち宮へ入る	
	崇峻	卷二十一	四年十一月	紀男麻呂	二万余の軍を領て筑紫へ	
D型記述	儀礼・祭礼	雄略	卷十四	十三年八月	雄略	馬八匹・太刀八口で祓除う
	清寧	卷十五	清寧四年九月一日			百寮と海表の使者に射させられる
	繼体	卷十七	即位前紀	倭彦王		兵杖を設け迎え奉る
	宣化	卷十八		宣化		劍・鏡を上り即位
E型記述	その他	雄略	卷十四	二十三年四月	雄略	兵器・筑紫軍士五百人を遣わす
	顕宗	卷十五	即位前紀	顕宗		受難中・射る・節を持ち、の記述
	武列	卷一六	一～三年	武列		暴虐記述・城・三刃の矛・弓等の記述
	欽明	卷十九	元年九月五日	欽明		幾許の軍卒で新羅を伐つこと得む
	〃	〃	二年四月～	聖明王		任那復興会議・攻め・救援など単語有り
	〃	〃	五年十一月	聖明王		任那復興会議・三千の兵士・城などの単語有り
	敏達	卷二十	十二年是歳	日羅		対百済政策、伏兵、壘塞を築かむ
	〃	〃	十四年三月	物部守屋		塔を倒して火を縦けて燐く
	用明	卷二十一	二年四月	中臣勝海		家に衆を集へて
	崇峻	〃	即位前紀	物部守屋		軍衆、三度驚駭す（氣勢をあげる）
	〃	〃	〃			餌香川原に斬られた人あり

IV群	推古・舒明				
記述類型		卷	記述箇所	武器使用者	内容
A型記述	武器・個人	推古	卷二十二 二十年正月	推古	太刀ならば呉の真刀云々
		〃	〃 二十六年是歳	河辺臣	劍案りて曰く（劍の柄を握って）
		〃	〃 三十二年四月	一僧	斧を執りて祖父を殴つ
		舒明	卷二十三 八年三月	三輪君小鷦鷯	頸を刺して死せぬ
B2型記述	簡素・国外	推古	卷二十二 二十六年八月	高麗使	隋の煬帝三十万の衆で攻め、弩、石弓等を献上
C1型記述	具体・国内	舒明	卷二十三 即位前紀	蘇我蝦夷	境部臣を殺さむとして平を興こして遣す
		〃	〃 九年是歳	上毛野君形名	蝦夷征伐、敗たれて囲まる、妻、劍を佩き
C2型記述	具体・国外	推古	卷二十一 八年四月	境部臣	万余の衆を率て新羅を撃つ
		〃	〃 十年二月～四月	久米皇子	軍衆二万五千人、船舶、軍糧の単語有り
		〃	〃 三十一年是歳	境部臣雄麻呂	数万の衆を率て新羅を征討つ（船師海に満つ）
D型記述	儀礼・祭礼	推古	卷二十二 十一年十一月	皇太子（厩戸皇子）	大盾と鞆とを作り旗幟に絵く
		舒明	卷二十三 四年十月	大伴連馬養	唐使の迎えに鼓、吹、旗幟を用いる
E型記述	その他	舒明	卷二十三 即位前紀	山背大兄王	敵矛の中取りもてる事の如くに云々

V群	皇極～天智				
記述類型		卷	記述箇所	武器使用者	内容
A型記述	武器・個人	皇極	卷二十四 四年六月	中大兄皇子	乙巳の変、蘇我入鹿暗殺、武器使用記述多
		〃	〃 (続)	中大兄皇子	法興寺に入り、城として備ふ
		〃	〃 (続)	漢直等	甲を撰、兵を持ち、軍陣を設ける
		考徳	卷二十五 即位前紀	古人大兄皇子	佩かせる刀を解きて地に投擲ち云々
		〃	〃 大化元年八月		兵庫を起造り刀、甲、矢を収聚め云々
		〃	〃 大化元年九月		種々の兵器を集めしむ
		〃	〃 大化五年三月	物部二田造塩	大刀を抜き其の穴を刺し挙げて叱咤び啼叫びて今し斬るりつ云々
B1型記述	簡素・国内	考徳	卷二十五 大化元年九月	中大兄皇子	兵若干（三十人）を将て古人大市皇子を討たしむ
		〃	〃 大化五年三月	蘇我倉山田石川麻呂	天皇兵を興こして大臣の宅を囲む
		斉明	卷二十六 四年四月	阿倍臣	舟師一百八十艘を率て蝦夷を討つ
		〃	〃 四年十一月	有馬皇子	造宮る丁を率ゐて家に囲ましむ
		〃	〃 四年是歳	阿倍引田臣比羅夫	肅慎を討つ
		〃	〃 五年是歳	阿倍臣	舟師一百八十艘を率て蝦夷国を討たしむ
		〃	〃	或本に云はく	阿倍臣、肅慎と戦いて帰り虜四十九人を献る
B2型記述	簡素・国外	皇極	卷二十四 元年正月	阿曇比羅夫	百済国、今し大いに乱れたり云々
		〃	〃	高麗使	高句麗大臣、百八十余人を殺せり
		斉明	卷二十六 四年是歳	或本に云はく	大唐、新羅、百済を伐つ
		〃	〃 六年七月	日本世記に曰く	（新羅王）春秋、蘇定方の手を借りて百済を撃たしめ亡ぼしぬ
C1型記述	具体・国内	皇極	卷二十四 二年十一月	奴三成	山背皇子襲われる、三成の奮戦

V 群	皇極～天智				
記述類型	巻		記述箇所	武器使用者	内容
C1型記述	具体・国内				
	斉明	巻二十六	六年三月	阿倍臣	二百艘を率て肅慎国を伐たしむ、 (肅慎)己が柵に拠りて戦う
C2型記述	対百済	斉明	巻二十六	蘇定法、新羅王春秋	舟師、兵馬を率て百済を挟撃し王城を陥とす云々
	〃	〃	〃	鬼室福信	散けたる卒を誘り聚む、兵、楫を以ちて戦う云々
	〃	〃	(続)	(続)	援軍要請、筑紫に軍器を備ふ
	〃	〃	(続)	(続)	御舟西に征きて始めて海路に就く
	天智	巻二十七	斉明七年八月	阿曇比羅夫	百済を救はしむ、兵杖、五穀を送りたまふ
	〃	〃	斉明七年九月	豊璋	軍五千余を率て本郷に衛送らしむ
	〃	〃	元年正月	鬼室福信	矢十万隻、糸五百斤ほかを賜ふ
	〃	〃	元年五月	阿曇比羅夫	船師一百七十艘を率て豊璋等を百済国に送り
	〃	〃	元年十二月	豊璋	避城遷都、山陰を設置き、尽く防御とし云々
	〃	〃	元年是歳		兵甲を修繕め、船舶を備具へ軍糧を儲設く
	〃	〃	二年二月	新羅人	百済の南畔の四州を焼燔き、京を戻す
	〃	〃	二年三月	上毛野君稚子	二万七千人を率て新羅を打たしむ
	〃	〃	二年六月	〃	新羅の二城を取る
	〃	〃	二年六月	豊璋	鬼室福信を斬りて首を醺にす
	〃	〃	二年八月		新羅、百済王城を繞む、大唐の軍將、戦船一百七十艘を率て白村江に
	〃	〃	〃		白村江の戦い、官軍敗績れぬ
	〃	〃	二年九月		百済、州柔城降ひぬ、国人日本の船師と日本へ向かう
C2型記述	対高麗	天智	巻二十七	蘇定方	水陸二路よりして高麗の城下に至る
	〃	〃	斉明七年十二月		唐軍の雲車、衝輦、鼓鉦吼然す
	〃	〃	元年(二月)		唐人、新羅人、高麗を伐つ
	〃	〃	七年十月	(唐將軍)英公	高麗を打ち滅ぼす
D型記述	儀礼・祭礼	皇極	巻二十四	翺岐	射獵を觀しむ
	〃	〃	元年七月	翺岐	健児に命じて相撲とらしむ
	考徳	巻二十五	即位前紀	大伴長徳・犬上健部君	考徳即位時、金の鞆を帯びて壇の左右に立つ
	〃	〃	大化三年正月		朝庭にして射す
	斉明	巻二十六	四年七月	蝦夷二百余	蛸旗・鼓・弓矢・刀・鎧ほかを賜ふ
	〃	〃	五年七月	難波吉士男人書に曰く	蝦夷、弓三、箭八十を(大唐)天子に獻る
	天智	巻二十七	斉明七年是歳	岸田臣麻呂	宝剑を献つりて
	〃	〃	天智三年二月	大氏・小氏・伴造	大刀、小刀、干盾、弓矢を賜ふ
	〃	〃	六年十一月	椋磨ら	斧二十六、鉾六十四、刀子六十二枚ほかを賜う
	〃	〃	七年七月	近江国	武を講ひ、又多に牧を置きて馬を放つ
E型記述	その他	皇極	巻二十四	蘇我蝦夷・入鹿	邸宅の記述、家の外に城柵を作り云々

V 群	皇極～天智				
記述類型	卷		記述箇所	武器使用者	内容
E 型記述	その他				
	考徳	卷二十五	大化二年正月		改新詔・凡そ兵は人の身ごとに刀、甲、弓、矢、幟、鼓を輸せ云々
	〃	〃	大化三年是歳		淳足柵を造り柵戸を置く
	〃	〃	大化四年是歳		磐舟柵を治めて蝦夷に備ふ
	斉明	卷二十六	四年是歳	或本に云はく	国家（日本）、兵士甲衆を以ちて西北の畔に陣ね城柵を繕修ふ
	天智	卷二十七	斉明七年是歳	高麗を救う軍将等	火を然く、細き響有り、鳴鑼の如し
	〃	〃	天智三年是歳		防、烽を置く、水を貯え水城と曰ふ
	〃	〃	四年八月	億礼福留ほか	長門、筑紫に城を築かしむ
	〃	〃	四年十月		大いに菟道に關す
	〃	〃	六年十一月		高安城、屋島城、金田城を築く
	〃	〃	七年是歳	道行	草薙劍を盗み新羅に逃げ向く
	〃	〃	八年八月	天智	（高安に）城を修めむと欲すも止めて作りたまはず
	〃	〃	八年十月	藤原鎌足	生きては軍国に務無し云々
	〃	〃	八年是冬		高安城を修りて
	〃	〃	九年二月		長門城一、筑紫城二つを築く
	〃	〃	十年十一月	郭務棕ら	彼の防人驚駭きて射戦はむ

VI 群	天武				
記述類型	卷		記述箇所	武器使用者	内容
	〃	〃	元年五月	朴井雄君	山陵造る人夫に兵を執らしむ
C1型記述	天武方	天武	卷二十八 元年六月	村国男依	東国へ挙兵指令、壬申乱勃発
	〃	〃	(続)	伊賀郡司ら	数百の衆を率て帰りまつる
	〃	〃	(続)	伊勢国司ら	五百軍を發して鈴鹿山道を塞へむとす
	〃	〃	(続)	村国男依	美濃の師三千人を發して不破道を塞ふる
	〃	〃	(続)	山背部小田ほか	東海の軍を發す
	〃	〃	(続)	尾張国司小千部鉏鉤	二万の衆を率て帰りまつる
	〃	〃	(続)	高市皇子	臂を攘り劍を按りて
	〃	〃	元年七月	紀阿閉麻呂	数万の衆を率て伊勢より越えて倭に向はしめ
	〃	〃	(続)	村国男依	数万の衆を率て近江に入らしめたまふ
	〃	〃	(続)	村国男依	各地で勝ち瀬田に至る、途中、千余騎を倭京へ
	〃	〃	(続)	村国男依	瀬田の合戦
	〃	〃	(続)	羽田矢国ら	三尾城を降しつ
	〃	〃	(続)	天武	乱終結、処分者を宣する
C1型記述	近江方	天武	卷二十八 元年六月	一臣	急く驍騎を聚へて逐はむには
	〃	〃	(続)	韋那君盤鉏ほか	東国、倭京、筑紫、悉くに兵を興さしむ
	〃	〃	(続)	樟使主磐手	（吉備国守広島を）刀を抜きて殺す

VI群	天武					
記述類型		卷		記述箇所	武器使用者	内容
C1型記述	近江方					
		〃	〃	(続)	栗隈王	挙兵を断る、剣を押し進む
		〃	〃	(続)	書直葉	伏兵山より出でて葉等が後を遮ふ
		〃	〃	元年七月	山部王ほか	数万の衆を率て不破を襲わんとし て犬上川の浜に軍す
		〃	〃	(続)	羽田矢国	山部王殺され、近江軍帰順
		〃	〃	(続)		精兵を放ち忽ちに玉倉部邑を衝く
		〃	〃	(続)	田辺小隅	「金」の合言葉で夜襲、田中足麻呂 軍を破る
		〃	〃	(続)	田辺小隅	小隅さらに進むも多品治に敗れる
		〃	〃	(続)	智尊	旗幟野を覆い云々、智尊の奮戦
		〃	〃	(続)	大友皇子	瀬田より逃げるも、自ら縊れる
C1型記述	吹負方	天武	卷二十八	元年六月	大伴吹負	(倭に)留りて豪傑を招き数十人を 得つ
		〃	〃	(続)	〃	吹負の策略、穂積臣百足を斬るて殺 しつ
		〃	〃	元年七月	〃	古京の橋板を盾とし守る
		〃	〃	(続)	〃	近江方の大野果安と戦い敗れる
		〃	〃	(続)	〃	散卒を招聚め葦池の側に戦ふ、勇士 来目の奮戦
		〃	〃	(続)	〃	犬養五十君と戦う、廬井鯨の奮戦
D型記述	儀礼・祭礼	天武	卷二十八	元年五月	郭務棕ら	甲、冑、弓矢を賜ふ
		〃	〃	元年七月	高市許梅	神がかり、馬と種々の兵器を奉れ
E型記述	その他	天武	卷二十八	即位前紀	天武	雄抜にして神武あり
		〃	〃	〃	〃	私の兵器を取りて悉くに司に納めた まふ
		〃	〃	元年五月	朴井雄君	山陵造る人夫に兵を執らしむ

第Ⅶ群	天武・持統					
記述類型		卷		記述箇所	武器使用者	内容
A型記述	武器・個人	天武	卷二十九	四年十一月	人	妖言して自ら刎ねて死ぬ
		〃	〃	十三年閏四月	福揚	自ら頸を刺して死ぬ
		〃	〃	十四年十一月		大角、鼓、幡旗、弩ほか、私家に置 くべからず
		持統	卷三十	七年十月		人ごとに甲一領、大刀一口、弓一張 云々
B1型記述	簡素・国内	持統	卷三十	称制前紀		敢死者数万に命せて諸の要害の地に 置きたまふ
		〃	〃	〃		美濃の軍将等と大倭の桀豪と云々
D型記述	儀礼・祭礼	天武	卷二十九	三年八月	忍壁皇子	石上神宮の神宝を瑩かしむ
		〃	〃	四年一月		西門の庭に射ふ
		〃	〃	四年三月	土佐大神	神刀一口を以ちて進む
		〃	〃	五年正月		西門の庭に射ふ
		〃	〃	五年八月		大祓の用物、刀、刀子、矢ほか



第Ⅶ群	天武・持統					
記述類型		卷		記述箇所	武器使用者	内容
D型記述						
		〃	〃	六年正月		南門に射ふ
		〃	〃	七年正月		南門に射ふ
		〃	〃	八年正月		西門に射ふ
		〃	〃	八年十月	新羅	刀、旗の類を貢る
		〃	〃	九年正月		南門に射ふ
		〃	〃	九年九月		馬的射させたまふ
		〃	〃	十年正月		朝廷に射ふ
		〃	〃	十一年七月	隼人	朝廷に相撲る
		〃	〃	十三年正月		東庭に御しまし射はしむ
		〃	〃	朱雀元年六月		病をトふに草薙剣に祟れり
		〃	〃	朱雀元年九月	藤原大島	兵政官の事を誅たてまつる
		持統	卷三十	二年十一月	草壁皇子	盾節儻を奏へまつる
		〃	〃	三年七月		習射所を築かしむ
		〃	〃	三年閏八月	河内王	兵杖を授け
		〃	〃	四年正月	物部（石川） 麻呂	大盾を樹つ、剣を奉 upper
		〃	〃	八年正月	六位より以下	射す
		〃	〃	九年正月		射す
		〃	〃	九年五月	隼人	相撲を観す
		〃	〃	十年正月		南門に射ふ
		〃	〃	十年三月	越・肅慎	斧等を賜ふ
E型記述	その他	天武	卷二十九	四年二月	天武	高安城に幸す
		〃	〃	四年六月	恵尺	大き役に勞えり
		〃	〃	五年九月		京、畿内に遣して人別の兵を校へしむ
		〃	〃	八年二月	紀堅麻呂	壬申の年の功を以ちて
		〃	〃	八年二月		兵と馬とを檢校へむ
		〃	〃	八年三月	大分稚見	大役に先鋒として瀬田の營を敗れり
		〃	〃	八年十一月		難波に羅城を築く
		〃	〃	十一年二月	舍人糠虫	壬申の年の功を以ちて
		〃	〃	十一年三月	土師真敷	壬申の年の功を以ちて
		〃	〃	十二年六月	大伴望多	壬申の年の勲績
		〃	〃	十二年十一月		諸国に陣法を習はしむ
		〃	〃	十三年閏四月		闘す、因りて進士、威儀を教えよ
		〃	〃	十三年閏四月		凡そ政の要は軍事なり云々
		〃	〃	十四年九月		各人夫の兵を校へしむ

第Ⅶ群	天武・持統					
記述類型		卷		記述箇所	武器使用者	内容
E型記述	その他					
		〃	〃	十四年十一月	筑紫大宰	鉄一万斤、箭竹二千連を請す
		〃	〃	十四年十二月	防人	海中に飄蕩ひ
		持統	卷三十	三年二月	筑紫の防人	年限に満ちなば替へよ
		〃	〃	三年八月		射を観す
		〃	〃	閏八月	諸国司	其の兵士は武事を習はしめよ
		〃	〃	三年九月	石川麻呂	新城を監しめたまふ
		〃	〃	三年十月	持統	高安城に幸す
		〃	〃	三年十一月	高田三成	三兵に閑へることを褒美て物賜ふ
		〃	〃	四年九月	大伴部博麻	軍丁（兵士）遣唐使と帰還
		〃	〃	四年十月	大伴部博麻	百済を救う役に虜にせられたり
		〃	〃	七年九月	蚊屋木間	壬申の年の役に功を褒めたまふとなり
		〃	〃	七年十二月	陣法博士	諸国に教習はしむ

#### （史料一）神代上第六段一書第一

「乃設<sub>二</sub>大夫武備<sub>一</sub>、躬帶<sub>二</sub>十握劍・九握劍・八握劍<sub>一</sub>、又背上負<sub>二</sub>靱<sub>一</sub>、又臂著<sub>二</sub>稜威高鞞<sub>一</sub>、手捉<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、親迎防禦。」

これは天照大神が素戔鳴命を高天原に迎える時の武装であり、書紀の編者自身が「神代」と称した古い過去のイメージであるが、『古事記』にも類似した表現があり、『日本書紀』の「一書曰」にも複数の同様な記述が列挙されているので、同種の伝承がかなり広範囲にわたって認知されていたのであろう。

ところで、考古学的には日本列島において定型的な武器が出土するのは弥生時代以降である。弥生時代の武装としては“鳥装の武人”像が一般的であり、第1章でみたように絵画土器を見ると、持盾に柄の短い戈を持つというモチーフが多い。靱・鞞そのものは僅かな実例と形象埴輪によって確認できるもので古墳時代前期を遡るものはない。むしろ、ここで描かれる天照大神の武人像は、従来から言われているように形象埴輪、特に第10章で検討する武人埴輪のイメージと合致している（註18）。

書紀編者自身が換算したところによると、神武元年は紀元前660年、この暦は儀鳳暦の算法を使って古代に遡って逆算したと考えられている（小川1997）。また編者は『魏志』倭人伝の卑弥呼を神功皇后に擬していたようで、神功紀の中に倭人伝の年号を記している。しかし、書

紀編者がイメージした「神代」の武人像は（編者自身の換算に反し）史料的には概ね 5～6 世紀を遡ることはできない。この年代観は編者が利用した原資料の（又はその編纂された）上限を示しているといえるであろう。

## 2. II 群（巻三～十三巻（神武～安康））における武器・戦闘記述

II 群は巻二（神武）～巻十三（允恭・安康）を対象としている。このうち、武器・戦闘記述は 62 例を数えることができた。内訳は A 型（武器・個人的戦闘）記述が 14 例（22.6%）、B1 型（簡素な国内戦闘）記述が 15 例（24.1%）、B2 型（簡素な国外戦闘）記述が 5 例（8.1%）、C1 型（具体的な国内戦闘）記述が 6 例（9.7%）、C2 型（具体的な国外戦闘）記述が 1 例（1.6%）、D 型（儀礼・祭祀）記述が 9 例（15%）、E 型（その他）記述が 12 例（19.3%）である。

各型の記述がみられるが、最も多いのは B1 型（簡素な国内戦闘）記述である。これは神武天皇に関する「乃ち偏師を分け遣し皆誅さしめたまふ」、崇神天皇の四道將軍の派遣、景行天皇の「石室の土蜘蛛を襲ひて、稲葉の川上に破り、悉に其の党を殺す」などの簡素な戦闘（討伐）記述が多いためである。

神夏磯媛の服従には長剣、大鏡、瓊を櫛にかけ白旗を掲げるといふ、やや具体的なシーンがあるが、白旗を「亦素幡樹」とする表現は『魏書』など漢籍に多い表現である。その他では「偏師」という言葉が『文選』にみえ、景行天皇の討伐には弓矢を「流らふること雨の如し」といふ類型的な表現があり、四道將軍の派遣も「既にして共に印綬を授けて將軍としたまふ」といふような漢籍的な表現（『後漢書』）で彩られている。將軍の名称自体も中国大陆由来のものである。

B2 型（簡素な国外戦闘）記述も 5 例あるが、これは神功皇后紀にほぼ集中している。その中には「沙至比跪」「木羅斤資」といふ人名や「多羅」「比利」など地名の字音表記に百済独自の表現がみえ、「百済三書」からの引用が古くから指摘されている（山尾 1978、三品 2002）。一方で神功皇后の詔には「金鼓無章云々」などの兵書（『呉子』『孫子』）からの漢籍的脚色が認められる。

これら『日本書紀』における漢籍や漢訳仏典の出典に関する研究については河村秀根・益根親子の研究にみられるなど江戸時代にまで遡る古くからの研究があり、多数の出典が知られている。なお、近年では原典の直接利用でなく類書、特に初唐の欧陽詢などの撰する『芸文類聚』からの孫引きが多いことが指摘されている（小島 1988）。

このように、II 群で最も多いのは伝説的・物語風の記述であり、戦闘記述も具体性に欠け、

内容が紋切り型の簡素なものが中心であるといえよう。このことは書紀編者が利用できた資料が断片的であるか、又は政治的な理由によって意図的に創作した結果だと考えられ、内容の資料的な価値には大きな疑問が残る。

津田左右吉は、神功皇后の新羅討伐、日本尊の熊襲・東国討などの物語、仲哀・神功皇后以前の部分に含まれている様々の説話については、歴史的な事実の記録として認められず、後人の述作であることを指摘している。すなわち、新羅遠征の物語を神功皇后の時代とし、東国遠征を景行期とする類は後世の時代の反映であるとし、後の時代の事実を上代に移して物語にしたがために、その内容が空虚（簡素な記載）になったというのである（津田 1924）。しかしながら、文字として記された段階で伝承として伝えられてきた物語に新しい衣装を着せた可能性は否定できないため、伝承の核の部分について年代が遡ることを否定することはできないだろう。

そのような関係において、Ⅱ群においても具体的な集団戦闘の記述が初めて出てくる。国内関係（C1 型）では神武と長髓彦による孔舎衛坂の戦い、巻五の武埴安彦の乱、巻九の忍熊王の乱、国外関係（C2 型）では巻十二の上毛野田道の騎馬戦である。この外に巻六では狭穗彦王の乱で「稻城」が初出する。

#### （史料二）神武即位前紀戊午年四月条

「皇師勅<sub>レ</sub>兵歩趣<sub>二</sub>竜田<sub>一</sub>。（略）時長髓彦（略）則尽起<sub>二</sub>属兵<sub>一</sub>、徼<sub>二</sub>之於孔舎衛坂<sub>一</sub>与之会戦。有<sub>二</sub>流矢<sub>一</sub>、中<sub>二</sub>五瀬命肱脛<sub>一</sub>、皇師不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>進戦<sub>一</sub>。（略）却至<sub>二</sub>草香之津<sub>一</sub>、植<sub>レ</sub>盾而為<sub>二</sub>雄誥<sub>一</sub>焉。」

#### （史料三）崇神十年九月条

「武埴安彦与<sub>二</sub>妻吾田媛<sub>一</sub>謀反逆、興<sub>レ</sub>師忽至。（略）時天皇（略）復遣<sub>二</sub>大彦与<sub>二</sub>和珥臣遠祖彦国葺<sub>一</sub>、（略）与<sub>二</sub>埴安彦<sub>一</sub>挟<sub>レ</sub>河屯之、（略）於<sub>レ</sub>是各争<sub>二</sub>先射<sub>一</sub>。武埴安彦先射<sub>二</sub>彦国葺<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>中。後彦国葺射<sub>二</sub>埴安彦<sub>一</sub>。中<sub>レ</sub>胸而殺焉。其軍衆脅退。則追破<sub>二</sub>於河北<sub>一</sub>、而斬<sub>レ</sub>首過<sub>レ</sub>半。（略）乃脱<sub>レ</sub>甲而逃之。」

#### （史料四）垂仁五年十月条

「時狭穗彦興<sub>レ</sub>師距之、忽積<sub>レ</sub>稻作<sub>レ</sub>城。其堅不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>破。此謂<sub>二</sub>稻城<sub>一</sub>也。（略）則將軍八綱田放<sub>レ</sub>火焚<sub>二</sub>其城<sub>一</sub>。」

#### （史料五）神功摂政元年三月条

「爰武内宿禰等選<sub>二</sub>精兵<sub>一</sub>從<sub>二</sub>山背<sub>一</sub>出之、至菟道<sub>一</sub>以屯<sub>二</sub>河北<sub>一</sub>。忍熊王出<sub>レ</sub>營欲<sub>レ</sub>戦。時有<sub>二</sub>熊之凝者<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>忍熊王軍之先鋒<sub>一</sub>。則欲<sub>レ</sub>勸<sub>二</sub>己衆<sub>一</sub>。因以高唱之歌曰、（略）忍熊王信<sub>二</sub>其誘言<sub>一</sub>

一、悉令<sub>二</sub>軍衆<sub>一</sub>、解<sub>レ</sub>兵投<sub>二</sub>河水<sub>一</sub>、而断<sub>レ</sub>弦。爰武内宿禰令<sub>二</sub>三軍<sub>一</sub>、出<sub>二</sub>儲弦<sub>一</sub>更張、以佩<sub>二</sub>真刀<sub>一</sub>、度<sub>レ</sub>河而進之。(略)軍衆走之。及<sub>二</sub>于狹狹浪栗林<sub>一</sub>而多斬。」

(史料六) 仁德五十三年五月条

「新羅起<sub>レ</sub>兵而距之。爰新羅人日日挑戰。田道固<sub>レ</sub>塞而不<sub>レ</sub>出。時新羅軍卒一人、有<sub>レ</sub>放<sub>二</sub>于營外<sub>一</sub>。則掠俘之、因問<sub>二</sub>消息<sub>一</sub>、対曰、有<sub>二</sub>強力者<sub>一</sub>。曰<sub>二</sub>百衝<sub>一</sub>、輕捷猛幹。每為<sub>二</sub>軍右前鋒<sub>一</sub>。故伺之擊<sub>レ</sub>左則敗也。時新羅空<sub>レ</sub>左備<sub>レ</sub>右。於<sub>レ</sub>是田道連<sub>二</sub>精騎<sub>一</sub>擊<sub>二</sub>其左<sub>一</sub>。新羅軍潰之。因縱<sub>レ</sub>兵、乘之殺<sub>二</sub>數百人<sub>一</sub>、即虜<sub>二</sub>四邑之人民<sub>一</sub>以帰焉。」

孔舍衛坂の戦い(史料二)で登場する主武器は「矢」「盾」、武埴安彦の乱(史料三)でも矢合戦が描かれ、忍熊王の乱(史料五)では戦闘歌謡を歌った後、計略により「弓」「刀」で攻撃をしている。武器の具体的な形状が不明なので考古資料からの検討の余地は無いが、戦闘の内容は極めて具体的で、何らかの原資料に基づく記述である可能性が高い。特に何れも歩兵戦主体で「弓・矢」での戦闘例が多く、戦闘前の熊之凝の戦闘歌謡や、戦術として姦計が目立つ点などは物的資料からだけでは何うことのできない興味深い内容を知ることができる。

戦闘に詭計が多いことについて笹山晴生は、騙し討ちに関する物語が『日本書紀』と『古事記』とに共通してみられることが多いこと、すなわち、神武東征における忍坂の酒宴を利用した謀殺、神渟名川耳彦による手研耳尊の睡眠中の射殺、出雲振根の水浴中に相手の真刀と自分の木刀とを取り換えての殺害(『古事記』では倭建尊の話とされる)、日本武尊の童女に変装しての酒宴での謀殺などは、『記紀』に共通してみられることから説話としての成立が古いことを指摘している。一方、武埴安彦の乱や狭穂彦の乱、特に神功皇后の西征記事などは『古事記』との性格の相違が明瞭で、『日本書紀』では個人としての英雄譚ではなく、王命を受けた軍隊による討伐・鎮圧として描かれていることが『古事記』に比べてより後次的・政治的な要請を伺わせるという(笹山 1984)。

周知のように『古事記』の成立は、その序文に 712 (和銅五) 年とあり、『続日本紀』には 720 (養老四) 年に『日本紀』の撰上が記されていることから、通常は『古事記』が古く、『日本書紀』が新しいとされる。しかしながら『古事記』と『日本書紀』の前後関係、記紀前後論については『古事記』の偽書説も含めて様々な説が説かれており、国文学者の梅澤伊勢三は書紀風な旧記類の漢文が、和漢折衷体で書き直れたものが『古事記』であると推定している(梅澤(伊勢三) 1962)。その前後関係はともかく、笹山の指摘にあるように『日本書紀』と『古事記』の何れにも類似の記載があり、かつ物語・説話風な記述に関しては、成立の古い素材を根拠とし

ている蓋然性が高く、古い時代の戦闘を伝えている可能性が強いと考えられる。

その他の記述としては、(史料四)にみえる稲城は一般には稲穂か粃を積み上げて作った城と解されている。しかし稲を積み上げただけでは堅牢な防御施設にならないであろう。一説には『延喜式』の表現に神垣に懸ける稲が「横山」にたとえられることから、邸宅の周囲の垣に稲を積み懸ける様がむしろ「稲城」の表現にふさわしいという見解もある(仁藤 1998)。考古学からも稲城についての言及があり、かつては囲形埴輪を稲城とみなす見解もあったが(北野(耕平) 1975)、近年ではこれは否定されており、囲形埴輪と水との関係性が指摘されている(穂積 2012)。

稲城についての実証は難しいが、国内において城郭などの恒常的施設がほとんど描かれないのは『日本書紀』の特色の一つである。書紀編者が筆を揮うことができたのは「家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を作る。門毎に水を盛るる船一、木鉤数十を置きて、火災に備へ、常に力人をして兵を持ちて家を守らしめる」(蘇我蝦夷の邸宅の描写・皇極三年十一月条)といった程度であった。城郭の少ないことは、乙巳の変に際しても「中大兄、即ち法興寺に入り、城として備ふ」(皇極四年六月条)とあるなど、常設の防御施設が存在しないために寺院を利用している様子が描かれていることも傍証になろう。後述するように、こういった国内に防御施設が少ない事実は考古学からも実証することが可能であって、書紀編者の記事はある程度の史実を反映していると評価することができる。

一方、上毛野田道の騎馬戦(史料六)は若干の検討が可能である。田道の騎馬戦は書紀編者自らが記す所では仁徳五十三年(365年)である。朝鮮半島での最古の馬具は原三国時代にまで遡るが、漢代あるいはそれ以前の車馬具に系譜が求められるもので、慕容鮮卑の騎乗用馬具に系譜が求められる馬具、柳昌煥や諫早直人のいう“初期馬具”に関連する乗馬の風習(馬具)は4世紀前半に朝鮮半島で受容されており、加耶地方の最古の馬具(轡)は4世紀第2四半期に編年される(李(蘭暎)・金(斗喆) 1999、柳(昌煥) 2008、諫早 2013)。日本列島での馬具の普及は5世紀前半とされることが多いが(桃崎 2006)、福岡県池の上6号墳や兵庫県行者塚古墳出土の轡などは4世紀代に含まれる可能性も指摘されており(中山 2001)、纏向遺跡第109次調査で出土した木製輪鍔は4世紀初め(布留1式)に比定されている(橋本(輝彦) 2002)。

上記の考古学的知見は馬具そのものであるが、一方で騎兵の成立に関しては国内における挂甲の受容を騎馬戦と関連づけようとする意見もある(小野山 1959)。しかしながら、日本の甲冑を騎馬戦用とする見解には否定的な意見が多く(増田 1970、穴沢 1988)、日本列島において

実用的な馬具が主流となり、騎馬勢力が成長するのは概ね6世紀前半以降としなければならない（岡安 1983）。笹山晴生も『記紀』の戦闘には騎馬による戦闘の記述がほとんどなく、6世紀以前の旧辞の世界にあっては集団的な騎馬戦はふさわしくないと指摘している（笹山 1984）。

このような考古学的な知見があるため、編者自身の記述した田道の戦闘を歴史的事実として無条件に信じることはできない。また、新羅の勇士の名前が「百衝」という日本的な名前であることからしても、日本側の伝承である可能性が高い（三品 2002）。

しかし、騎兵による戦場が朝鮮半島であること、田道が上毛野（群馬）の豪族であること、それ以前の記述において騎兵の記述が皆無であること、などは極めて重要な事柄であると考えられる。先に述べたように日本において実用的な馬具が主流となるのは6世紀以降であるが、日本の馬具副葬古墳が多いのは、群馬県約 300 基、福岡県約 270 基、長野県約 240 基、静岡県約 180 基、栃木県約 100 基など（長野県立博物館 1998）、馬具を副葬する古墳は主に東国を中心に分布している。

このような諸点から考えて、上毛野田道の騎兵の伝承は書紀編纂時において幾分古くに挿入された上毛野氏の伝承であって、全くの空想・創作では無いとしておきたい。持統五年八月条の墓記を上進させた十八氏族の中に上毛野氏が含まれており、それら独自の伝承を書紀編者は参考にしたのであろう。

十八氏族に上進させたものは、北野本などの古写本には「墓記」とあり、『釈日本紀』には「纂記」とある。本書では小島憲之ほかの校訂に従い（小島ほか（校訂）1998）墓記と解する。なお、坂本太郎は纂記を十八氏の独特の伝承記録とし、大三輪、上毛野、膳、紀、大伴、石上氏関係の記述には、『日本書紀』の広範囲にわたって数カ所ずつ、纂記に基づくとおぼしき記述があることを論じている（坂本（太郎）1946）。坂本は後に古写本（北野本など）が“纂記”を“墓記”としていることを認識しているが（坂本（太郎）1988）、氏の述べるように、『日本書紀』に有力氏族の伝承家記がとりいれられているという視点は依然として有効であろう。

その他、Ⅱ群においては、久米歌のような戦闘歌謡が知られている。久米歌の戦闘的な内容に初めて注目したのは文学史家の高木市之助であり、その文学的な叙事詩が生まれた社会、ないし時代を問題視することで英雄時代論争の端緒をひらいた（高木 1933）。高木が文学的な見地から英雄時代を提唱したのに対し、石母田正は、これを歴史的な問題として昇華させた。石母田はヘーゲル美学を借り、法律以前（前国家段階）における権力の行使や法が英雄的個性の具体的行動として現れる時代を英雄時代とし、久米歌などの戦闘歌謡をもって4～5世紀の段階、氏のいう大和国家の成立と発展という疾風怒濤の時代に英雄時代が存在したことを論じた

(石母田 1947)。英雄時代論に対しては批判的な見解もあるが(北山(茂夫) 1956、土橋 1960)、その再反論もある(井上(光貞) 1965、上田 1968) など、一時期盛んに論じられた。また近年においては、松木武彦や土生田純之など考古学研究者から英雄時代論を再評価する動きが認められる(松木 2001b、土生田 2009)。

何れにせよ、久米舞(久米歌)が戦闘的な舞踊や歌謡であることは間違いないだろう。これについて西郷信綱は、久米歌=久米舞は大嘗祭における一種の模擬戦(mock combat)であったと指摘する(西郷 1967)。また、青木敦は霊剣信仰との関連から、古き呪的な“剣の歌舞”の存在をそこに想定し、かつては地域共同体の“戦闘舞踊”であったものが『記紀』編集の前夜に宮廷神話の中に組み込まれ、やがて宮廷行事の一つとして儀式化したと想定しているなど(青木(敦) 1981)、古代における戦闘のあり方を考える上で、戦闘と歌謡や、儀礼・模擬戦との関連性は極めて重要である。

以上、Ⅱ群の特徴としては政治的な理由によるものか、意図的に創作した文飾や漢籍風の簡素なものが多い。しかしながらその一方で、「百済三書」や「旧辞」、各氏族伝承など、雑多な資料を基に再構成されたとと思われる内容も存在していると評価することができるだろう。

### 3. Ⅲ群(巻十四～二十一巻(雄略～用明・崇峻))における武器・戦闘記述

Ⅲ群、巻十四(雄略)～巻二十一(用明・崇峻)の武器・戦闘記述は各群のうち最多の88例を数える。これはC2型(具体的な国外戦闘)記述が33例(37.5%)に及ぶためであるが、特に欽明九年四月の馬津城の役から連年のように百済と高句麗との戦いに関連する具体的な記述が相次いでいる。

これらの対外記述については、古くより「百済三書」を典拠とした記述が想定され、多くの先学によって研究されている(今西 1970、池内 1970、山尾 1978、井上(秀雄) 1980、三品 2002、仁藤 2015)。その結果、「百済三書」の成立に関しては様々な説が提唱されているが、朝鮮半島における戦闘記述のほとんどがこれに負っていることは事実であり、少なくとも、書紀編纂時において古代貴族たちが抱いた具体的な大陸での戦闘イメージを知ることができよう。

百済三書については多くの研究史が存在し、それらを検討した仁藤敦史は、『日本書紀』編者は干支の移動による改変を行っているものの、「貴国」「倭」「日本」という国号表記の不統一に典型的に表れているように、基本的に分注として引用された原文への潤色は少なかったことを指摘している。また、その性格としては王代と干支が記載された特殊史で、通史的な歴史書ではなく特定の年代や対象に基づくもの、具体的には断絶した王系ごとに百済遺民の出自や奉仕



の根源を語るものであって、最初に「百濟本記」が成立し、「百濟記」「百濟新撰」が順次編纂されたとする。このうち、最も古いと考えられる「百濟本記」において「日本」号が用いられていることから、仁藤は三書の成立を8世紀初頭に位置づけている（仁藤 2015）。

以下、Ⅲ群における具体的な戦闘関係記述を検討していきたい。

（史料七） 雄略九年三月条

「紀小弓宿禰亦収<sub>レ</sub>兵、与<sub>二</sub>大伴談連等<sub>一</sub>会。兵復大振、与<sub>二</sub>遺衆<sub>一</sub>戰。是夕大伴談連及紀岡前来目連、皆力闘而死。談連從人同姓津麻呂、後入<sub>二</sub>軍中<sub>一</sub>、尋<sub>二</sub>覓其主<sub>一</sub>。從<sub>レ</sub>軍不<sub>二</sub>見出<sub>一</sub>。問曰、吾主大伴公、何处在也。人告之曰、汝主等果為<sub>二</sub>敵手<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>殺、指<sub>二</sub>示屍处<sub>一</sub>。津麻呂聞之踏叱曰、主既已陷。何用独全、因復赴<sub>レ</sub>敵、同時殞命。」

（史料八） 繼體八年三月条

「伴跋築<sub>二</sub>城於子吞・帶沙<sub>一</sub>、而連<sub>二</sub>滿奚<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>烽候・邸閣<sub>一</sub>、以備<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>。復築<sub>二</sub>城於爾列比・麻須比<sub>一</sub>、而絰<sub>二</sub>麻且奚・推封<sub>一</sub>、聚<sub>二</sub>士卒・兵器<sub>一</sub>以逼<sub>二</sub>新羅<sub>一</sub>、駟<sub>二</sub>略子女<sub>一</sub>、剥<sub>二</sub>掠村邑<sub>一</sub>。凶勢所<sub>レ</sub>加、罕<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>遺類<sub>一</sub>。」

（史料九） 繼體二十四年九月条

「毛野臣聞<sub>二</sub>百濟兵来<sub>一</sub>、迎<sub>二</sub>討背評<sub>一</sub>、傷死者半。百濟則捉<sub>二</sub>奴須久利<sub>一</sub>、扭・械・枷・鎖、而共<sub>二</sub>新羅<sub>一</sub>圍<sub>二</sub>城<sub>一</sub>、責<sub>二</sub>罵阿利斯等<sub>一</sub>曰、可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>毛野臣<sub>一</sub>。毛野臣嬰城自固、勢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>擒。於是二国凶<sub>一</sub>度便地、淹留弦晦。築<sub>二</sub>城而還<sub>一</sub>、号曰<sub>二</sub>久礼牟羅城<sub>一</sub>。還時触路、拔<sub>二</sub>騰利枳牟羅・布那牟羅・牟雌枳牟羅・阿夫羅・久知波多枳・五城<sub>一</sub>。」

（史料十） 欽明十四年十月条

「百濟王子余昌悉發<sub>二</sub>國中兵<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>高麗国<sub>一</sub>、築<sub>二</sub>百合野塞<sub>一</sub>、眠<sub>二</sub>食軍士<sub>一</sub>。是夕觀覽、鉅野墳腴、平原瀟迤、人跡罕見、犬声蔑<sub>レ</sub>聞。俄而儻忽之際、聞<sub>二</sub>鼓吹之声<sub>一</sub>。餘昌乃大驚、打<sub>二</sub>鼓相応<sub>一</sub>、通夜固守。凌晨起見<sub>二</sub>曠野之中<sub>一</sub>、覆如<sub>二</sub>青山<sub>一</sub>、旌旗充滿。合明有<sub>二</sub>着<sub>一</sub>頸鎧者一騎、挿<sub>二</sub>鏡者<sub>一</sub>。二騎、珥<sub>二</sub>豹尾<sub>一</sub>者二騎、并五騎<sub>上</sub>、連轡至來問曰、小兒等言、於<sub>二</sub>吾野中<sub>一</sub>、客人有在。何得<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>迎礼<sub>一</sub>也。今欲早知<sub>二</sub>与<sub>一</sub>吾可<sub>二</sub>以<sub>一</sub>例問答者姓名年位<sub>上</sub>。余昌対曰、姓是同姓、位是杆率、年二十九矣。百濟反問。亦如<sub>二</sub>前法<sub>一</sub>而対答焉。遂乃立<sub>二</sub>標而合戰<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是百濟以<sub>二</sub>鉾刺<sub>一</sub>隨高麗勇士於馬<sub>一</sub>斬<sub>レ</sub>首。仍刺<sub>二</sub>拳頭於鉾末<sub>一</sub>、還入示<sub>レ</sub>衆。」

（史料十一） 欽明十五年十二月条

「臣先遣<sub>二</sub>東方領物部莫哥武連<sub>一</sub>、領<sub>二</sub>其方軍士<sub>一</sub>、攻<sub>二</sub>函山城<sub>一</sub>。有至臣所<sub>二</sub>将来<sub>一</sub>民筑紫物部莫奇委沙奇、能射<sub>二</sub>火箭<sub>一</sub>。蒙<sub>二</sub>天皇威靈<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>月九日酉時<sub>一</sub>、焚<sub>二</sub>城拔之<sub>一</sub>。」

(史料十二) 欽明十五年十二月条

「新羅聞<sub>二</sub>明王親来<sub>一</sub>、悉<sub>二</sub>發<sub>二</sub>國中兵<sub>一</sub>、斷<sub>レ</sub>道擊破。(略)余昌遂見<sub>二</sub>圍繞<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>出不<sub>レ</sub>得。士卒遑駭、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>所凶<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>能射人、筑紫国造<sub>一</sub>。進而彎<sub>レ</sub>弓、占擬射<sub>二</sub>落新羅卒最勇壯者<sub>一</sub>。發箭之利、通<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>乘鞍前後橋<sub>一</sub>、及<sub>二</sub>其被甲領會<sub>一</sub>也。復統發箭如<sub>レ</sub>雨弥厲不<sub>レ</sub>懈、射<sub>二</sub>却<sub>二</sub>圍軍<sub>一</sub>。由<sub>レ</sub>是余昌及諸将等、得<sub>下</sub>從<sub>二</sub>間道<sub>一</sub>逃歸<sub>上</sub>。余昌讚<sub>二</sub>国造射<sub>二</sub>却<sub>二</sub>圍軍<sub>一</sub>、尊而名曰<sub>二</sub>鞍橋君<sub>一</sub>。」

(史料十三) 欽明二十三年七月条

「(紀男麻呂宿禰)、以<sub>二</sub>薦集部首登弭<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>於百濟<sub>一</sub>約<sub>二</sub>束軍計<sub>一</sub>。登弭仍宿<sub>二</sub>妻家<sub>一</sub>。落<sub>二</sub>印書・弓箭於路<sub>一</sub>。新羅具知<sub>二</sub>軍計<sub>一</sub>。卒起<sub>二</sub>大兵<sub>一</sub>、尋属<sub>二</sub>敗亡<sub>一</sub>、乞<sub>二</sub>降帰附<sub>一</sub>。紀男麻呂宿禰取<sub>レ</sub>勝旋<sub>レ</sub>師、入<sub>二</sub>百濟宮<sub>一</sub>。(略)河辺臣瓊缶独進転闘、所<sub>レ</sub>向皆拔。新羅更举<sub>二</sub>白旗<sub>一</sub>、投<sub>レ</sub>兵降首。河辺臣瓊缶元不<sub>レ</sub>曉<sub>レ</sub>兵、対<sub>二</sub>举<sub>二</sub>白旗<sub>一</sub>、空爾独進。新羅闘将曰、將軍河辺臣今欲<sub>レ</sub>降矣。乃進<sub>レ</sub>軍逆戦。(略)新羅闘将手持<sub>二</sub>鉤戟<sub>一</sub>、追至<sub>二</sub>城洫<sub>一</sub>、運<sub>レ</sub>戟擊之。(略)闘将自就<sub>二</sub>營中<sub>一</sub>、悉生<sub>二</sub>虜河辺臣瓊缶等及其随婦<sub>一</sub>。(略)闘将遂於<sub>二</sub>露地<sub>一</sub>、斡<sub>二</sub>其婦女<sub>一</sub>。(略)同時所<sub>レ</sub>虜調吉士伊企難、為人勇烈、終不<sub>二</sub>降服<sub>一</sub>。新羅闘将拔<sub>レ</sub>刀欲<sub>レ</sub>斬。逼而脱<sub>レ</sub>禪、追令<sub>下</sub>以<sub>二</sub>尻臀<sub>一</sub>向<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>、大号叫曰<sub>上</sub>、(略)由<sub>レ</sub>是見<sub>レ</sub>殺。其子舅子亦抱<sub>二</sub>其父<sub>一</sub>而死。」

(史料八) では「城」「烽候」「邸閣」によって防衛線を築き、子女を捕らえ村邑を侵略するような戦闘が記され、(史料九) では毛野臣が城に籠って守りを固めている様子が描かれる。(史料十) の百濟王子余昌の戦いでは“鼓・笛・軍旗による進軍”→“互いの名乗りあい”→“騎兵の戦闘”(矛で馬を刺し落として首を斬る)といった一連の戦闘が描かれているが、この戦場は「鉅野墳腴し、平原瀟迤して、人跡罕に見、犬声聞くこと蔑し」とあるから、我々は静寂した朝、遙かに広がる大陸の平野を想像しなければならない。

(史料十一) では筑紫の物部莫奇委沙奇が火箭を射て城を焼き落とし、(史料十二) では筑紫国造が雨の如く箭を射て百濟王子余昌が脱出する状況を描く。(史料十三) では紀男麻呂宿禰が機密文書を落とし、その結果、河辺臣瓊缶が降伏する。この戦闘で新羅の闘将は鉤戟を持ち追撃する。記述にはまた、降伏をあらわす「白旗」や、捕虜が「斡」され責め込まれる状況が描かれている。

このように朝鮮半島の戦闘において、書紀編者は「攻城戦」、「騎馬戦」、「村々の略奪」を描き、使用する武器も「弓矢」はともかく「矛」「戟」などの長柄武器が数多く登場する。これらの各条には『文撰』『漢書』『説文』などとの類似語が若干認められ、(史料八) には「日本」の

名称もみえるなど、そのままを歴史的資料として認めることはできないが、(史料十)の具体的な戦闘に関しては比較的文飾が少ないことが指摘されており(むしゃこうじ 1973)、特に古代史における“画期としての雄略朝”の時代以降に具体的な記述が増えてきたことは極めて重要である。

岸俊夫は『万葉集』や『日本霊異記』の巻頭に雄略の時代を据えていることや、『日本書記』の成立過程において雄略以前と以後との間に顕著な区分があったことが想定されることなどから、古代人が歴史的に雄略朝を画期的な時代と受け止めていたと想定しているが(岸 1984)、雄略(オホハツセノワカタケル)に比定される倭王武の上表文には国内・国外の征服事実が記されており、鈴木靖民は中国大陆の府官を模して、倭を含む中国周辺諸国において府官的秩序が形成されたとし、武=雄略の時代に王権の宮廷を支える諸種の職能集団とそれを管理・統率する世襲職が整備・改組・拡充されるなどの大きな画期が存在したと指摘している(鈴木(靖民) 1985)。

また、天野末喜は倭王武、雄略天皇の在世期間を5世紀第四半期前後とし、その墳墓の候補として、墳長242mの大阪府岡ミサンザイ古墳(伝仲哀陵)を挙げ、岡ミサンザイ古墳以降は大王墓とそれ以外の前方後円墳の格差が際立つようになること、陪塚がなくなり、一方で小型古墳の築造が増加し群集墳が増えてくるなどの変化を認め、このことから大王権の生成か、初期的官僚機構の出現といった歴史的過程を読み取ろうとしている。同時に、この時代は陶邑における須恵器生産や、大県・大県南遺跡における鉄器生産、薮屋北遺跡における馬生産、法円坂の倉庫群と難波津など、考古学的に注目すべき現象が存在することを挙げ、雄略朝を新しい時代を画する結節点であったとする(天野 2010)。

上記のような、“画期としての雄略朝”以降における国外の戦闘記述では、欽明記の朝鮮半島での激しさを増す戦闘情景や、度重なる援軍要請などの一連の有機的な繋がりで具体的な戦闘に関する記事が進む。記述の内容については「百済三書」などの引用が古くより指摘されているところだが、朝鮮側の資料である『三国史記』などにおいても同種の記述があり、例えば百済の聖明王が敗れる戦闘(欽明十五年十二月条)では『三国史記』新羅本紀第四、真興王十五年七月条(金(富軾) 1980)や百済本紀第四、聖王三十二年七月条(金(富軾) 1983)において、十二月と七月との異伝はあるものの、『日本書記』と同様の内容が記されているため、何らかの類似する伝承が朝鮮半島においても伝えられていたと考えられる。

『三国史記』における“倭”関係記事を分析した木下礼仁によれば、『日本書紀』と『三国史記』、『三国遺事』とは不一致な部分もあるが、共通した同一の原資料にたどりつかざるを得な

い類似伝承記事が見出されるといい、そういった原資料については『日本書紀』編纂以前に、朝鮮半島から日本列島へもたらされた蓋然性を指摘している（木下 1993）。

また、Ⅲ群以降の対外戦闘では、大陸へ送られた兵士や軍事物資数も具体的に記述されるようになっていく。そこに記された兵士数は「筑紫国軍士五百人」（雄略二十三年四月条）、「三百七十人」（欽明九年十月条）、「矢三十具」（欽明十一年二月条）、「良馬二匹同船二隻弓五十張矢五十具」（欽明十四年六月）、「助軍数一千馬一百匹船四十隻」（欽明十五年正月条）、「勇士一千人」（欽明十七年正月条）、「兵数万」（欽明二十三年八月条）、「二万餘軍」（崇峻四年十一月条）などである。これらから『日本書紀』の編者は、大陸での戦闘を大部分が数百～千人規模の集団的な戦闘として描いていると判断できる。

上記のような朝鮮半島での戦闘と対極的にある国内での具体的戦闘記述として、朝日朗の征伐、吉備尾代の奮戦、そして蘇我・物部戦争をみてみよう。

#### （史料十四） 雄略十八年八月条

「朝日朗聞官軍至、即逆戰於伊賀青墓。自矜能射、謂官軍曰、朝日朗手、誰入可中也。其所發箭、穿二重甲。官軍皆懼。菟代宿禰不敢進擊。相持二日一夜。於是物部目連自執大刀、使筑紫聞物部大斧手、執盾叱於軍中、俱進。朝日朗乃遙見、而射穿大斧手盾・二重甲、并入身肉一寸。大斧手以盾翳物部目連。目連即獲朝日朗、斬之。」

#### （史料十五） 雄略二十三年八月条

「於是尾代從家来、会蝦夷於娑婆水門合戰。而射蝦夷等、或踊或伏、能避脱箭、終不可射。是以尾代空彈弓弦、於海浜上、射死踊伏者二隊。二囊之箭既尽、即喚船人索箭。船人恐而自退。尾代乃立弓執末而歌曰、（略）唱訖自斬数人、更追至丹波国浦掛水門、尽逼殺之。」

#### （史料十六） 崇峻即位前紀

「（蘇我馬子宿禰大臣）俱率軍旅、進討大連。（略）大連親率子弟与奴軍、築稻城而戰。於是大連昇衣措朴枝間、臨射如雨。其軍強盛填家溢野。（略）爰有迹見首赤禰、射墮大連於枝下、而誅大連并其子等。由是大連之軍忽然自敗。（略）（物部守屋大連資人捕鳥部万）、形色憔悴、持弓帶劍、独自出来。有司遣数百衛士、圍万。（略）万即發箭。一無不中。衛士等恐不敢近。（略）於是有一衛士、疾馳先万。而伏河側、擬射中膝。万即拔箭、張弓發箭、伏地而号曰、（略）衛士等競馳射万。」

万便<sub>二</sub>扨飛矢<sub>一</sub>、殺<sub>二</sub>三十餘人<sub>一</sub>。仍以<sub>二</sub>持劍<sub>一</sub>、三載<sub>二</sub>其弓<sub>一</sub>、還屈<sub>二</sub>其劍<sub>一</sub>、投<sub>二</sub>河水裏<sub>一</sub>、別以<sub>二</sub>刀子<sub>一</sub>刺<sub>二</sub>頸死焉<sub>一</sub>。」

伊勢の朝日朗は「自ら能く射ることを矜り」「其の発つ箭は二重の甲を穿す」といい、吉備尾代は蝦夷に対し弓を射たが、「二囊の箭、既に尽き」と、歌を詠んで斬り込んでいる。このように、国内での具体的な戦闘（C1型）記述は対外（C2型）記述とは異なり、騎馬戦の状況がほぼ皆無であり、「弓矢」主体の戦闘が中心となる。「斬る」という表現があることから接近した場合は刀剣類の使用が想定されていると評価できるだろう。（史料十六）における捕鳥部万の奮戦では、万は弓矢を射、また、矢を膝に射られた後も敵の矢を払い、三十余人を殺す。万の武装は弓矢・剣・刀子である。

その他では（史料十四）の筑紫聞物部大斧手が「盾を執り軍中に叱びめして」と、考古資料では希少な「持盾」を使用していること、（史料十六）では大将物部守屋自らが「射ること雨の如し」と弓矢を射ている状況、大将が射られると物部軍は「忽然に自づから敗れぬ」となるような指揮系統の脆弱さが描かれていることなどが興味深い。これらの具体的な記述の他に、著名な磐井の乱が知られているが、対外戦争の一環として乱が勃発しており、「旗鼓相望、埃塵相接」と戦闘情景もまことに簡素なものである。磐井の乱の戦闘記述は古くから指摘されているように、『芸文類聚』に同一の文章が知られている。なお、蘇我・物部戦争について笹山晴生は全国から兵力が動員されることはなく、その兵力は皇族・貴族以下の家産的なものであったことを推定している（笹山 1984）。

また、防衛施設での戦闘に際しても国内での戦闘記述は対外記述とは異なっており、簡素な記述（B1）が多い。これには「兵を率いて～宅を圍繞み燔く」といった類型的表現が多いため他に他ならない。

「稻城」の記述は（史料十六）の他にも一例ある（雄略十四年四月条）が、いずれも具体的な稲城の情景は不明とせざるを得ない。ただし、小根臣が「天皇の城は堅からず、我が父の城は堅し」と述べたように、国内では大王の地位にあるものでも堅固な城郭を発達させていない状況が間接的に描かれている。

そのため、これらの「兵を率いて～宅を圍繞み燔く」戦闘では「物部の兵士三十人を遣わして（略）七十人を誅殺さしめたまふ」（雄略七年八月条）といった程度の規模であった。武烈即位前紀には「数千の兵を率いて」という表現があるが、前後の言説から『後漢書』の引用が考えられるため、国内での戦闘では数十人程度の小規模なものが大部分であったのが事実として

は近いであろう。先にみた大陸での戦闘規模と比較しても、かなり小規模であり、かつ書紀編者は国内と国外の戦闘を明確に描き分けており、国内においては激しい城郭戦闘をほとんど描いてはいない。

#### 4. IV群（卷二十八卷（天武））における武器・戦闘記述

卷二十八は天武元年一年間の争乱（壬申の乱）の記録で、大部分が戦闘記事によって占められている。その中でも特に具体的な戦闘シーンとしては以下のものがある。

##### （史料十七）天武元年六月条

「爰大友皇子謂群臣曰、将何計。一臣進曰、遲謀将後。不如、急聚驍騎、乘跡而逐之。皇子不從。」

##### （史料十八）天武元年六月条

「東方驛使磐鍬等将及不破、磐鍬独疑山中有兵、以後之緩行。時伏兵自山出、遮葉等之後。磐鍬見之、知葉等見、捕、則返逃走、僅得脱。」

##### （史料十九）天武元年六月条

「是日、大友連吹負（略）曰、我詐称高市皇子、率数十騎、自飛鳥寺北路出之臨營。乃汝内応之。（略）先秦造熊令犢鼻、而乘馬馳之、俾謂於寺西營中曰、高市皇子自不破至。軍衆多從。（略）時營中軍衆聞熊叫声、悉散走。（略）乃举高市皇子之命、喚穗積臣百足於小墾田兵庫。爰百足乘馬緩来、逮于飛鳥寺西槻下。有人曰、下馬也。時百足下馬遲之。便取其襟以引墮、射中一箭。因拔刀斬而殺之。」

##### （史料二十）天武元年七月条

「（将軍吹負）則遣赤麻呂・忌部首子人、令戍古京。於是赤麻呂等詣古京、而解取道路橋板、作盾、豎於京辺衢以守之。（略）於是果安追至八口、企而視京、每街豎楯。疑有伏兵、乃稍引還之。」

##### （史料二十一）天武元年七月条

「甲牛、近江別將田辺小隅越鹿深山、而卷幟抱鼓、詣于倉歷。以夜半之、銜梅穿城、劇入營中。則畏己卒与足麻呂衆難別、以每人令言金。仍拔刀而毆之、非言金乃斬耳。於是足摩侶悉乱之、事忽起不知所為。」

##### （史料二十二）天武元年七月条

「男依等到瀬田。時大友皇子及群臣等共營於橋西、而大成陣、不見其後。旗幟

蔽野、埃塵連天、鉦鼓之声聞数十里。列弩乱發、矢下如雨。其将智尊率精兵、以先鋒距之。仍切斷橋中須容三丈、置一長坂、設有蹋板度者、乃引板將墮。是以不得進襲。於是勇敢士、曰大分君稚臣。則棄長矛以重環甲、拔刀急蹈板度之。便斷着板綱、以被矢入陣。衆悉乱而散走之、不可禁。時將軍智尊、拔刀斬退者。而不能止。」

（史料二十三）天武元年七月条

「(將軍吹負) 到当麻衢、与老伎史韩国軍戰葦池側。時有勇士久目者、拔刀急馳、直入軍中。騎士繼踵而進之。則近江軍悉走之、追斬甚多。」

（史料二十四）天武元年七月条

「於是近江将犬養連五十君、自中道至之留村屋、而遣別将廬井造鯨、率二百精兵、衝將軍營。當時麾下軍少、以不能距。爰有大井寺奴名德麻呂等五人、從軍。即德麻呂等為先鋒以進射之。鯨軍不能進。是日、三輪君高市麻呂・置始連菟当上道、戰于箸陵。大破近江軍、而乘勝兼斷鯨軍之後。鯨軍悉解走、多殺士卒。鯨乘白馬以逃之、馬墮泥田、不能進行。則將軍吹負謂甲斐勇者曰、其乘白馬者廬井鯨也。急迫以射。於是甲斐勇者馳追之、此及鯨、々急鞭馬、々能拔以出泥、即馳之得脱。」

（史料十七）は騎兵による襲撃の提言、（史料十八）は伏兵、（史料十九）は大伴吹負の計略（内応）、（史料二十）は市街戦に備えて橋板を盾として並べる状況、（史料二十一）は夜襲、（史料二十二）は橋をはさんだ会戦、（史料二十三・二十四）は勇者による刀剣・弓矢での肉薄戦闘が描かれている。壬申の乱においては、騎兵による騎馬戦や伏兵、市街戦など、中世の軍記物にみられる各種の戦闘スタイルがほぼ出揃っているといつて良い。

壬申紀における騎兵の活用として注目すべきは、持統七年十月の詔で淨冠より直冠までは「甲一領・大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚・鞍馬」を、勤冠より進冠までは「大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚」をそれぞれ準備するように命じていることである。これについて笹山晴生は天武朝以降、皇族・貴族・官人層に武芸への習熟が強力に要請された背景には、中国風の宮廷儀礼が整備されたことの対応とも考えられるが、おそらくそれだけでなく、中央集権化の政策を、畿内勢力の優位の上に推進していこうとする意図によるものと想定している（笹山1984）。本論で関連するところに言及すれば、乱直後の指揮官クラスに該当する人々に甲冑や皆具した馬具の準備を命じていることは実際の武装についても示唆するところが大きいだろう。

しかし一方で、地形の起伏が大きい日本列島は騎馬戦に不向きで、戦国時代の日本の馬についても、宣教師のルイス・フロイスはヨーロッパでは馬上で戦うが、日本では戦わねばならぬ時には馬から下りると証言している（松田・ヨリッセン 1983）など、実際にどの程度、騎馬での戦闘が行われたかは疑問が残る。

そうはいつても、「馬、泥田に堕ち、進行くこと能はず。」（天武元年七月条）と素直に記している部分もみられ、雄略以前の記述などと比較すると、壬申紀の戦闘記述は歴史資料としての信憑性はかなり高いと考えられるのである。

### 第3節 東アジア各地域における武器・武具の組成と戦闘の様式

#### 1. 日本列島における武器組成とその使用方法の推定

書紀編者がイメージした戦闘像についていくつか検討してみた。考古学からの『日本書紀』批判といっても、上記の個々の戦闘情景を検討することはできない。しかし、書紀編者が描き分けた国内と国外の武器や防御施設の差異についてはある程度検討することが可能である。すなわち、列島内と大陸（朝鮮半島）との間の武器組成の比較、城郭遺構の差異などによって、書紀編者のイメージする戦闘像の検討を行うことができる。

書紀編者は大陸での戦闘に「攻城戦」、「騎馬戦」を描き、大陸においては、数多くの城と城とによる連絡網によって軍事態勢が整えられている状況を描写している。更に斉明七年十二月条では「雲車・衝輦」という、日本列島ではみることのない攻城戦武器を唐軍が使用していることを記すなど、城郭戦のイメージも書紀編者は認知している。

『書記』の記述では、大陸での戦闘で使用する武器は「弓矢」はともかく、「矛」「戟」が主であった。「矛（鉾）」という言葉は一概に現在の矛ではないが、少なくとも列島に比較して長柄武器が主体であったことはわかり、武器以外では鼓・笛・軍旗などが効果的に使用されている。鼓などは大化以降の武器収公記事にみえるので7世紀には日本列島にも存在したであろうが、本論で検討した国内での具体的な戦闘シーンでは決して描かれることがない。

一方の国内の戦闘では、本格的な城郭戦や騎馬戦が登場しない反面、「弓」を主武器とする歩兵戦が中心となる。稲城の記述も大陸での「城（さし）」と比較すると明らかに描き分けがおこなわれており、城をめぐる攻防戦が描かれず、具体的な騎馬戦の例が登場するのは「壬申紀」にほぼ限定される。



これらの事例を考古資料から批判的に検討するために、日本列島における具体的な武器・武器の組成について整理する。

3世紀半ばから4世紀に至る前期古墳から出土する武器の中で最も出土が多いのは刀剣と弓矢（鏃）である。例えば奈良県黒塚古墳（●130m）では刀1、剣26、鉄鏃170、小礼片が、岡山県花光寺山古墳（●90m）の小石室からは大刀3、素環頭大刀1、短剣4、鉄槍4、銅鏃17、鉄鏃57が、滋賀県雪野山古墳（●70m）では鉄刀2、鉄剣5、鉄槍3、靱2、銅鏃96、鉄鏃43、小礼革綴冑1、木製短甲1が、福島県会津大塚山古墳（●114m）南棺では素環頭大刀1、直刀1、鉄剣7、銅鏃29、鉄鏃48が、大阪府庭島古墳（■56m）では鉄刀4、鉄剣3、鉄槍3、靱1、鉄鏃135、銅鏃56が、それぞれ出土している。

前期においては、素環頭大刀や小礼式の甲冑は比較的大型の古墳のみにみられるなど儀仗的な性格が強く、有稜系や柳葉系の銅鏃・鉄鏃などは形態から実用性が疑わしいものも含んでいる。また、大型の古墳に多数の武器が副葬される場合は槍など長柄武器が含まれることも多く、奈良県メスリ山古墳（●250m）の鉄槍212、京都府園部垣内古墳（●82m）の鉄槍23のように大量に槍が出土した古墳も散見できるものの、大部分の中小古墳の副葬武器は刀剣数振、鉄・銅鏃数本～数十本程度であって、古墳時代前期における武器の全体的な傾向としては刀剣と弓矢（鏃）が中心で、それに少量の槍など長柄武器が加わる、という武器組成が基本的なあり方と評価することができるであろう。その他としては実際の遺物や盾形埴輪の事例から知られるように大型の盾が存在しており、鉄製甲冑は一部の有力首長層の威儀具として存在していたと考えられる。

古墳時代中期では福岡県宮司井出ノ上古墳（○26m）第2主体は長刀1、長剣1、鉄刀1、鉄剣1、鉄矛1、鉄鏃26、短甲1が、栃木県佐野八幡古墳（○46m）からは鉄刀2、鉄剣1、鉄鏃35、衝角付冑1、短甲1が、滋賀県新開1号墳（○36m）南遺構からは鉄刀5、鉄剣9、鉄矛4、鉄鏃80、衝角付冑1、眉庇付冑4、短甲4、盾3、馬具一式が、大阪府土保山古墳1号棺（○27m）の棺内外からは柄頭1、鉄矛3、鉄鏃50、短甲2、盾1、馬具が、兵庫県亀山古墳（○40m）第1主体部からは鉄刀1、鉄剣6、鉄槍1、鉄鏃1束、眉庇付冑1、短甲1が、宮崎県六野原6号墳（○12m）からは鉄刀2、鉄剣3、鉄矛3、鉄鏃25、衝角付冑1、短甲1が出土している。

古墳時代中期においては鉄剣102を埋納した大阪府西墓山古墳（□20m）、鉄剣145を埋納した大阪府野中古墳（□8m）、衝角付冑11、眉庇付冑13、短甲24を埋納した大阪府黒姫山古墳（●144m）などの武器の大量埋納が行われているため、副葬遺物から実際の武装を把握する

ことは困難であるが、出土遺物の組成をみる限り、当時の武装大系としては刀剣や弓矢が中心であることは前期と同様であり、長柄武器では槍より矛が増加傾向にある。

鏃は銅鏃が消失し鉄鏃も長頸鏃が中心になるなど、実用的な威力（貫通力）が増大する。甲冑の出土量が増加することから、複雑な製作工程が必要な甲冑が大量生産されていたことも伺われる。中期には馬具の副葬も広まるが、中期前半（5～6期）までは馬具の出土する古墳も比較的限られており、前期における甲冑と同じく威信財的な性格が強いと位置づけられるだろう。

後期においては大阪府寛弘寺 75 号墳（○10m）では鉄刀 2、鉄矛 2、鉄鏃 1 群、馬具が、栃木県七廻鏡塚古墳（○28m）の舟形木棺からは玉纏大刀 1、大刀 1、矛 1、弓 2、鉄鏃 88、鏑矢 5、靱、馬具が、千葉県経僧塚古墳（○24m）からは大刀 6、矢入具 1、鉄鏃 201、馬具 2 式が出土している。後期においても刀剣と鏃からなる武器組成が基本であるが、刀剣は長刀（大刀）が中心となり、威信具としての装飾的な飾大刀が増加する。一方で馬具は実用的で簡素なものが多くなり、鉄鏃も実用的な長頸鏃で占められる。また長柄武器の矛も比重が増加する。

以上、時系列の順で古墳出土の武器組成を概観したが、時期的な変遷によって変化が伺われるものの、日本列島における全般的な 3～6・7 世紀の武器は刀剣と弓矢という組合せが最もポピュラーである。その中で中期には甲冑が、後期には長頸鏃と実用的な馬具が普及していくことは実際の武装を考える上で重要であろう。希少な威信財のあり方からすれば、指揮官クラスは前期には鉄製甲冑を、中期には乗馬スタイルで存在感を誇示したといえる。

一方、刀剣と弓矢の普遍的なあり方からは、古墳時代前半の実際の戦闘として、まずは歩兵を主体とする遠距離からの弓矢戦闘（矢合戦）が中心であり、近接時には刀剣で戦うという戦闘の様式が推定されるところである。また長柄武器が補助的な存在であるため、接近戦ではより個人的な色彩の強い刀剣による戦いの集合体であった可能性が指摘できる。

## 2. 中国大陸における武器と戦闘の様相

『日本書紀』の戦闘記述では国内と国外の戦闘において明確な差異を認めることができた。この点について朝鮮半島、ひいては東アジア全体の戦闘の具体像を検討してみたい。まずは資料が豊富な中国大陸における戦闘技術の変遷を歴史的に位置づけ、大陸での戦闘のあり方を考えていきたい。

中国大陸における新石器時代には、石鏃や骨鏃、石製の鉞といった定型的な武器の他に、環濠集落（姜寨遺跡：仰韶文化期）や城壁（王城崗遺跡：龍山文化期）といった防御的施設、殺傷人骨（江蘇大墩子 316 号墓：大汶口文化期）など、佐原真が指摘した戦争を証拠だてる考古

学的事実（佐原 1999）が出現している。

また、この段階の特徴的な武器である鉞は、威儀具として男性に副葬される事例も多く、石製のものから玉石や青銅で作られるようになり、権力や刑罰・軍事の象徴となっていく。石鏃は龍山文化期に重くて深く突き刺さるものが増加し、集団間の戦闘が激化したとされる（岡村 1993）。佐川正敏は中国の新石器時代において、中・遠距離で弓矢を使用した後に石斧・鉞で白兵戦を展開した、という戦闘様式を推定し、紀元前 4,000～5,000 年代を“アジア最古の戦争の開始”と評価する（佐川 1996）。しかしながら、この段階では中国大陆でも文字資料が存在せず、沈黙資料としての考古資料が中心となるため、直接的な戦闘や軍事組織を示す資料は寡少とならざるを得ない。

殷・周時代には、考古資料として戈・戟・矛・鉞・劍といった武器形青銅器が出現する。殷末～西周時代初期には、山西の高紅墓出土例や河北の白浮村墓 M2・M3 墓の事例など、青銅製の冑も出現している（千葉 2015）が、最も普遍的で多い青銅武器は戈である（今井（晃樹） 2001）。また、殷代後期以降、馬車に繋がれたままの車馬坑や、全身骨格を保った馬が馬坑から大量に出土するようになる（菊池 2009）。こういった戈と馬車との存在から、この時代では兵士が馬車を御しながら進み、すれ違いざまの肉薄戦闘時には戈を用いて相手を引っ掛けるような戦闘方法、すなわち馬車に乗って戦う戦車（Chariot）での戦闘（車戦）が想定できる（楊（泓） 1985）。

古くから文字記録が残る中国では、殷・周時代前後から武装や戦闘について文献的な検討が可能になり、戦闘の具体的な様相がかなり明確になってくる。西周時代の戦闘は先述したような戦車戦が中心であったため、その軍事力は「乗」という戦車の数量であらわされていた。また馬車の所持や維持には高価な費用が必要であるため、この時代の戦闘は貴族を中心とした短期決戦（会戦）が主流で、各国の兵力もせいぜい車数数百両という程度である。一車当りの徒（歩兵）は約 30 人程度であり、覇者である斉の桓公の兵力は「三万人、車八百乗」であったという（林 1972）。

また『春秋左氏伝』には戦闘の重要な決断要素として詩書や礼楽といった徳や義、人格を重視する記述が散見しており（小倉 1988）、当時の戦争は儀礼的な様相も強かったとも想定されるだろう。例えば宋の襄公は泓の会戦（紀元前 638 年）において、楚軍が川を渡り、更に陣が整えるのを待って戦いを開始し敗退する。これは後に“宋襄の仁”として嘲笑の的になるのであるが、逆にいえば、襄公は伝統的な戦闘のルールを守ろうとしたが故に、敵の陣形が整うのを待ち、結果として戦闘に敗れたともいえる。『武経七書』（久保（天随）（校） 1913）の一つで

ある『司馬法』でも「古者逐奔、不過百步。縦綏不過三舍。是以明其礼也。」とあり、昔の戦いでは敗走する敵を百歩以上は追撃しなかったこと、撤退する際も三舍以上は追わなかったことなどのルールが存在したことを記している。

こういった西周時代の、礼節に則った貴族による戦車戦は、春秋から戦国時代へ移るにしたがって実力本位の苛烈な戦いへと変わっていく。軍隊の主力は少数の貴族中心であったものから一般に徴募する歩兵や騎兵に移り変わり、「徒十万、車六百乘、騎五千疋」というように、兵力の計算も徒兵・騎兵などの総数によって示されるようになる。戦国時代には如何に多くの民を動員するかといった、国力を傾注した大規模で本格的な戦争が行われていたことがわかるのである（湯浅 1999）。

考古資料では、春秋時代から戦国時代にかけて鉄製武器が普及し弩の使用も始まる。河北省易県燕下都 44 号出土遺物では冑、劍、戈、矛、鏃などの鉄製武器が出土しており、依然として青銅武器の優位性が高いものの、一般には戦国時代以降を鉄器時代と呼んでいる（飯島 2003）。武器以外の戦争を示す考古資料としては戦闘（紀元前 260 年の長平の戦い）に関連する人骨の出土や、邯鄲城のような防御施設などといった戦争に関する考古資料も存在する。

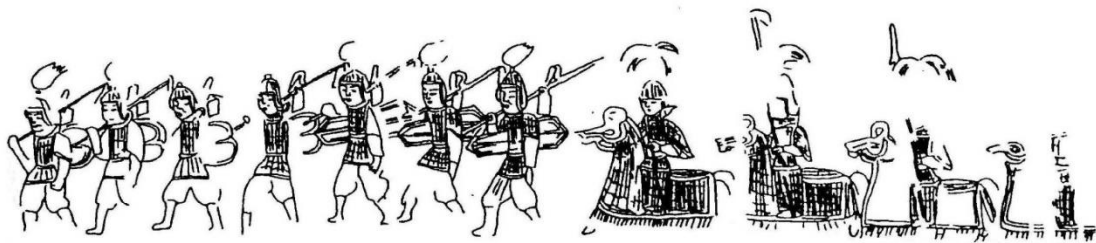
その他、より具体的に戦闘や軍装を示す造型・絵画資料として春秋・戦国時代には青銅容器に戦闘図を描いたものがあり、そこには戈や盾、短劍を用いて戦闘、攻城戦、水上戦などを行う歩兵が記されている（林 1972、深澤 1998）。秦漢時代には著名な始皇帝陵で代表される写実的な兵馬俑坑などの考古学的な造型資料が存在しているが、騎兵の比率は始皇帝陵の兵馬俑で少なく、前漢の楊家灣漢墓陪葬葬坑における騎馬俑がより多い。こういった造形資料としての兵馬俑坑の分析からは秦から漢へかけて騎兵の占める割合が高くなることが指摘されており（来村 2001）、本格的に騎兵が軍の主力を占めるようになるのも前漢の文帝・景帝以降のこととされる（駒田（編） 1985）。

後漢時代では直接的に戦争を示す絵画資料として墓葬装飾である画像石に戦闘を表現したものがあり“胡漢交戦図”と呼ばれるモチーフでは、漢の騎兵が戟など長柄の武器を用いて胡人の騎兵を馬から引きずり落とそうとする場面や、首を斬られた胡人兵などが描かれている（増田 1967、友田 2008）。また、その他の交戦図でも弓矢や環頭大刀、長柄武器を用いたものが存在している。

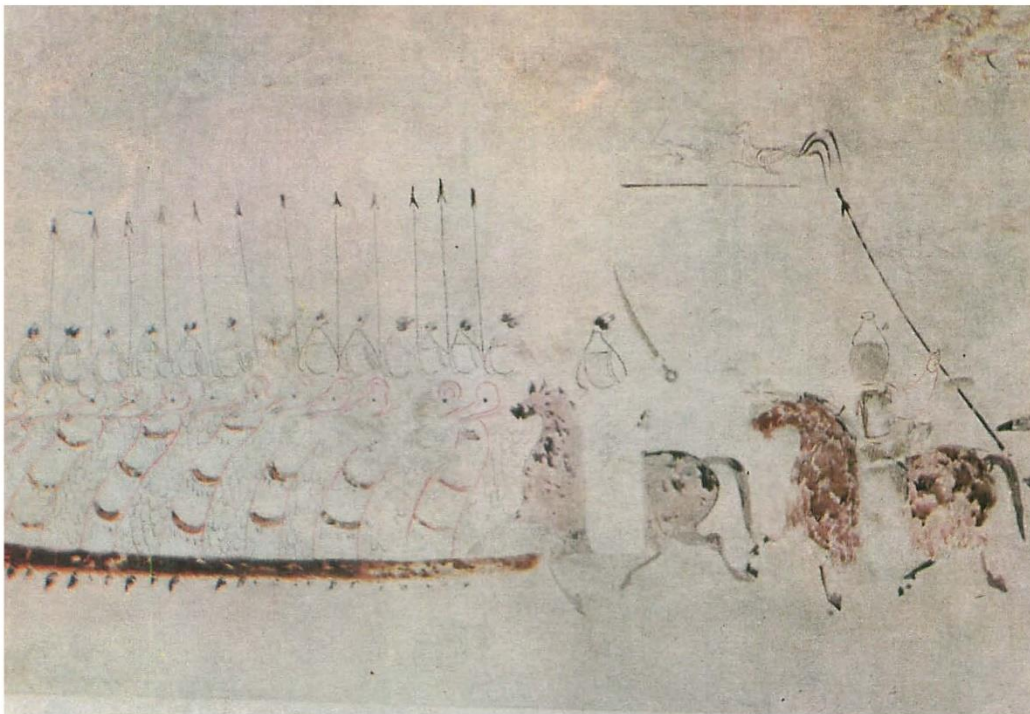
これら考古資料である武器や造型・絵画資料などを総合すると、戦国～秦漢時代においては戦車に代わって歩兵、次いで騎兵の比重が高くなっていき、北方騎馬民族との民族的な対立を内包しつつ、中国大陸においては、領土国家単位による大規模な戦闘や攻城戦が繰り返され



胡漢交戦図における騎兵



安岳 3 号墳に描かれた重装騎兵と歩兵



菊水里古墳に描かれた重装騎兵

図 8 騎兵及び馬甲・馬冑による戦闘図



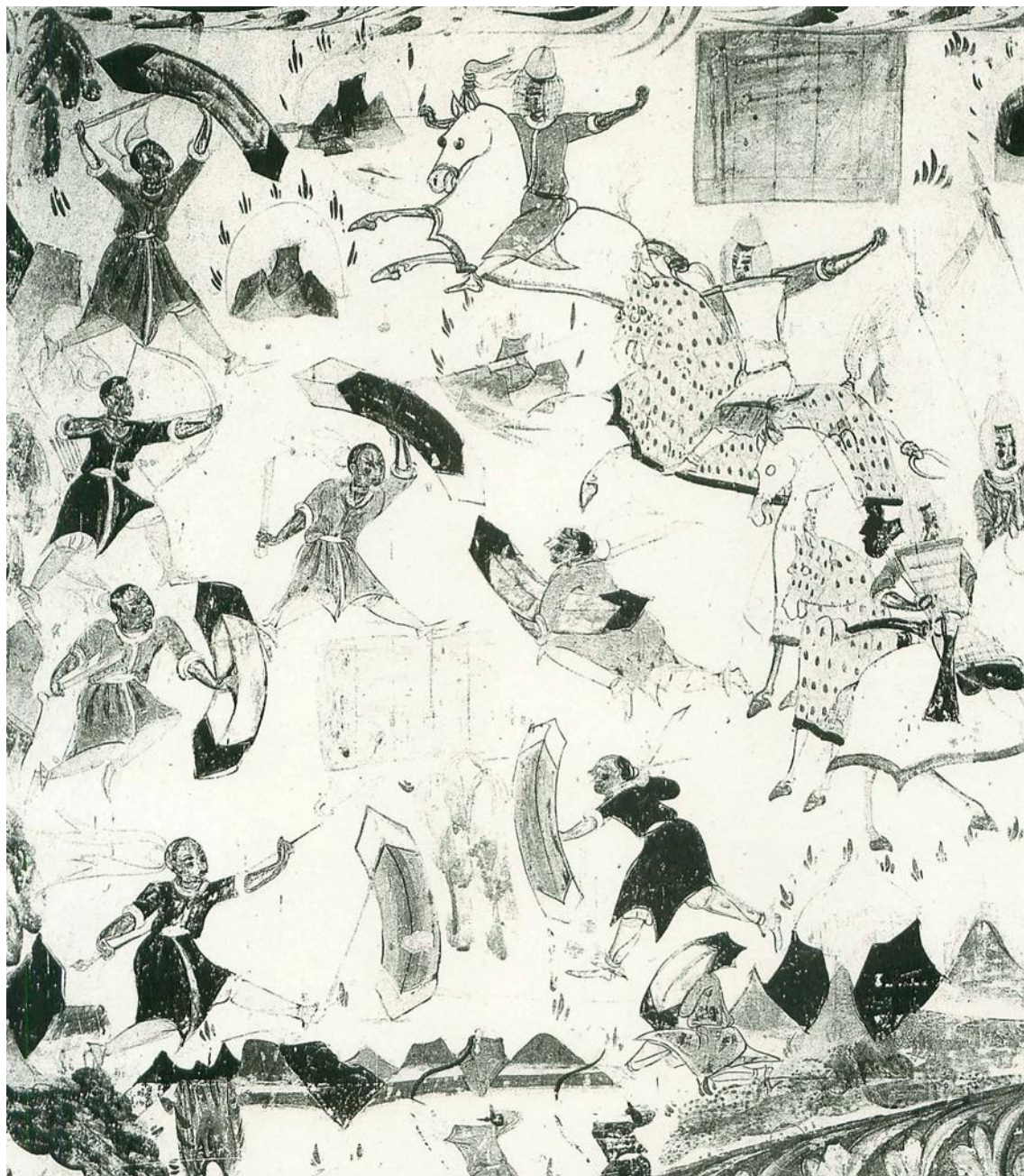


図 9 敦煌莫高窟 285 窟壁画に描かれた重装騎兵の戦闘図

ていたと評価することができるであろう。

次の三国・晋～五胡十六国の時代における武器としては、遼寧省北票の十二台 88M1 の出土遺物があり（小林（謙一）2006）、細長い梯形鉄板を組み合わせた冑、小札を組み合わせた鎧冑などと共に馬甲や馬冑も出土している。このことから前燕時代では、馬まで武装した重装騎兵（中国文献にいう“甲騎・鉄騎”）が存在していたことが推察できる。馬甲・馬冑の実際の考古資料としては日・中・韓で 28 例ほどが確認されており、中国では 4 世紀後半～5 世紀、韓国で

は 5 世紀、日本では 6 世紀代とされるものが多い（神谷 2006）。また北魏俑といった造型的な考古資料においても可動式の高い札甲と重装備の騎兵といった武装を伺うことができる（柳（涵） 1959、市元 2001）。

より直接的な戦闘を示す考古資料としては、馬甲・馬冑による戦闘図（図 8）があり、中国甘肅省の敦煌莫高窟 285 窟壁画（西魏）（敦煌文物研究所（編）1980：図 9）や、朝鮮半島三室塚壁画（高句麗）（朝鮮民主主義人民共和国文化保存指導局写真帳編集室（編）1979）など、点的であるものの極めて広い範囲で類似した戦闘様式をみることができる。これらの絵画資料をみると、重装騎兵たちは長柄の武器を持ち、これに付随する歩兵は片手に盾、もう片方に戟、刀剣、斧などを所持している。

蒙古鉢形甲を研究した穴沢咏光は、日本から中央アジア、ヨーロッパまで同種の武具がみられるとして、広い視野から重装騎兵の戦闘が行われていたことを論証しているが（穴沢 1988）、騎馬までも武装した重装騎兵の戦闘は、この時期における騎馬民族共通の戦闘様式として広く欧州～中央アジア、華北、朝鮮半島北部を含むユーラシア的な潮流であったといえるだろう。

華南（東晋・六朝期）では武器の出土が少なく、壁画の題材や俑も少ないので戦闘の復元は困難であるが、弩が主力兵器であり、両腹の鎧については 4 世紀前半には東晋において採用されたと推察されている（藤井（康隆） 2004）。

### 3. 朝鮮半島における武器と戦闘の様相

中国大陆での戦闘の移り変わりを確認し、東アジアにおける大局的な戦闘の変遷を位置づけることができたので、これを踏まえた上で、本題に戻り、『日本書記』の記述内容を検討するため日韓の武器組成や戦闘様式の差異を明らかにしていきたい。

朝鮮半島における主要な武器組成の変遷をみると、2 世紀代の慶尚南道金海市大成洞 27 号墳（木槨墓）の出土武器は鉄剣 1、鉄矛 1、鉄鏃 1 という武器組成であるが、3 世紀では慶尚南道金海市礼安里 150 号墳（木槨墓）では鉄矛 3、有刺利器 1、鉄鏃 15、縦細長板革綴冑 1 が、慶尚南道金海市良洞里 235 号墳（土槨木槨）では環頭大刀 1、鉄剣 2、鉄矛 6、大型矛 1、鉄鏃 70 が出土している。

4 世紀代では礼安里 110 号（石槨墓）では鉄矛 1、鉄鏃 5 が、大成洞 2 号墳（木槨墓）では鉄槍 12、三枝槍 1、鉄矛 1、冑 2、板甲 1、鉄鏃 4、馬具が、大成洞 18 号墳（木槨墓）では素環頭大刀 2、鉄槍 2、鉄矛 1、鉄鏃 92 が、良洞里 78 号墳（土槨木槨）からは鉄剣 1、鉄矛 1、有刺利器 1、冑 1、板甲 1、馬具が、良洞里 340 号墳（土槨木槨）からは鉄矛 5、鉄鏃 4、冑、

馬具が出土している。

5 世紀代では慶尚南道釜山特別市福泉洞 11 号墳（石槨墓）では鉄刀 3、鉄剣 3、鉄矛 13、有刺利器 2、鉄鏃 106、胡籥 1、蒙古鉢形冑 1 が、礼安里 126 号墳（石槨墓）からは鉄矛 1、鉄鏃 8 が、大成洞 11 号墳（木槨墓）からは鉄矛 26、鉄鏃 5、挂甲、馬甲、馬具が、良洞里 304 号墳（竪穴式石槨墓）の主槨からは環頭大刀 2、鉄矛 3、有刺利器 1、鉄鏃 18 が出土している。

上記のように 2 世紀以降の朝鮮半島における最も普遍的な武器は矛で、朝鮮半島南部においても多数の矛が副葬されている。忠清南道の 2 世紀末～5 世紀の武器・馬具を集成した李南爽によると、百済地域では武器の出土する遺跡は少ないものの、出土武器は刀剣類・鉄矛・鉄鏃が中心となる（李（南爽）2004）。嶺南地方、すなわち弁韓～伽耶地方における武器組成についての高久健二の集計では、全ての時代を通じて最も多い武器は矛と鏃（弓矢）であった（高久 2004）。また漢江流域の最前線に位置する高句麗遺跡では、九宜洞堡壘のような軍事施設が発掘されており、鉄矛 9、鉄長刀 2 種、鉄斧 4、鉄鏃 3,000 余点の武器量から当時の最小部隊単位（10 名程度）の武装が復元されている（崔（鍾澤）2001）。

一方、鉄鏃の形態そのものは日韓共に類似しているが、有刺利器など日本列島では珍しい遺物も朝鮮半島では比較的に認めることができる。また鉄斧については、朝鮮半島では副葬例が多く、高句麗壁画などをみても武器（闘斧）として用いる事例があったことにも注意しなければならない。

いずれにせよ、朝鮮半島では長柄武器が主流であって、戦闘方法としては遠距離では弓矢による攻撃を行い、近接戦闘では密集した矛や槍による長柄武器での戦闘に移行していったと考えられるのであって、刀剣類と弓矢が主武器の日本列島における武器組成と比較した場合、朝鮮半島では矛の出現頻度が圧倒的に多く、この点が日韓の戦闘様式の差異を示すと考えられる。

伽耶地域の鉄矛を分析した門田誠一は、石突を有し長大な鉄矛をもった重装騎兵と、短い鉄矛をもった歩兵という二つの軍構造を想定しているが（門田 1988）、当該時期における朝鮮半島北部では、高句麗壁画で描かれているような馬甲で全身武装を行った重装備の騎馬兵が戦場に投入されており（朱（榮憲）1963、堀田（啓一）1979）、馬甲の出土も日本列島の 3 例に対し朝鮮半島では 17 例と多い（神谷 2006）。朝鮮半島においては重装騎兵に対抗するためにも集団による長柄武器による戦闘が効果を発揮していたと評価できよう。齊藤大輔は鉄矛の形態と軍構成は高句麗や伽耶などの各国の同盟・従属関係などによって類型化されると予察しているが（齊藤 2014）、金斗喆における伽耶の武器と戦術の研究においても、当時の戦闘における主武器は矛（鏃）・鉞・槍などの長柄武器とされており（金（斗喆）2003）、韓国考古学の研究



者では高句麗南征を大きな画期とみなし、北方の騎馬文化（特に重装騎兵戦術）の影響を重視している（崔（鍾圭）1984、李（蘭暎）・金（斗喆）1999）。

次いで 3～6 世紀の日韓における城郭遺跡について確認しておく。朝鮮半島の三国時代には多くの城、特に山城が築かれており、旧高句麗領をも含めると約 2,000 ヶ所に及ぶ山城の存在が推測されている（亀田 1995）。発掘調査が行われたのはそのごく一部であるが、1980 年代以降、夢村土城、木川土城、扶蘇山城などで調査が実施され、次第に多くの事柄が明らかになっている。三国時代史においては、古代の山城は主要な研究テーマの一つなのである。

それらの研究成果を基にすれば、朝鮮半島の山城は大きく“鉢巻式”と“包谷式”に二分され、特に百済・伽耶地域では外郭線規模が 2 km 以下の中・小規模の城郭が多く、高句麗地域には大型の包谷式系の山城が多い（伊（武炳）1991、向井 1990）。井上秀雄によれば、「城」は「内城」（宮殿）を、「郭」は「外城」（居住区・工房）を指すが、朝鮮半島では中国大陆とは異なり、住民たちの逃げ城として「郭」（外城）を中心に発達しており（井上（秀雄）1987）、山城にはあらかじめ軍器や食料を備蓄しておくものであったとされている（全（栄来）1987）。そして、これらの多数の城郭はそれぞれ孤立しているのではなく、相互に関連して一つの防御体系を形成していた。蔡熙国は山城の配置から衛星防御大系、縦深防御大系、前線防御大系などの防御体制を指摘する（蔡（熙国）1987）。

一方、同時代における日本列島では城郭遺跡が極めて貧弱である。考古学的事実においては、日本列島においては環濠集落が廃絶した後、集落域まで城壁や堀で囲む施設は存在せず、あえて言えば首長居館という東国地方に多い方形施設において大規模な堀を伴うこともあり、福島県建鉾山遺跡については古墳時代の東北経営のための軍事拠点という見解もあるが（坂本（和俊）1998）、それぞれの首長居館は存続時期が短く、集団を恒常的に防御するための施設ではない。

対して、日本列島における本格的な城郭遺跡としては朝鮮式山城が知られている。向井一雄は西日本古代山城の類型化を行い第 1 期～3 期に編年しているが、向井によれば朝鮮半島における山城は 5～7 世紀に定型化し、日本での出現時期は朝鮮式山城の系譜の中で最後発となる 7 世紀中葉で、いわゆる神籠石系の山城を日本における一種の消化形態として位置づけている。また、日本に導入された朝鮮式山城は独自の展開をほとんどみせずに廃城と共に消滅しているのであるが、このことは日本への山城伝播が非常に政治的な色彩の強いものであったことを証明しているという（向井 1990）。

以上、東アジアの大きな流れの中で戦闘をみるならば、本論で問題となる古墳時代（3 世紀

～6 世紀)においては、中国大陸、特にその華北地域では北方騎馬民族の流入による五胡十六国の分裂抗争がみられ、彼ら騎馬民族の戦闘方式は重装騎兵を主力とするものであった。この時代、朝鮮半島においても城郭を巡る重装騎兵と矛・弓矢による戦闘が中心である一方、日本列島内では刀剣と弓矢が主、長柄武器(槍・矛)は補助的な存在であり、城郭施設も未発達であったと評価することができるのである。

#### 第4節 古墳時代における戦闘の具体像

これまでの検討によって、『日本書紀』の編者がイメージした戦闘像が全くの空想ではなかったことが解る。もちろん編者の年代的な換算は大いに誤っており、彼らが紀元前7世紀以前に想定していた「神代」のイメージもせいぜい5～6世紀までしか遡ることはできず、4世紀以前についての歴史的根拠は著しく乏しくなってしまう。また神武東征、景行天皇の土蜘蛛討伐、神功皇后の新羅親征などは戦闘の記述が極めて多いものの、親征するや容易に討伐されたり、降伏するなど抽象的な記述が多数を占め、漢籍による文飾が甚だしく、単調な内容になってしまっている。それらは明らかに書紀編纂時における政治的な意図から大部分が装飾されたであろうことは疑い得ない。

これと対比すると、本章で検討したような“具体的な”戦闘記述を書紀編者が描くにあたっては、主として日本列島での戦いは徒歩による弓矢戦や騙しうちを、朝鮮半島における戦闘では長柄武器や騎馬戦による城郭戦闘を描いており、このことは一次資料である考古資料の武器組成や城郭遺跡のあり方からも大局的に合致する点が多い。したがって、編者たちがイメージした具体的な戦闘記述は(意識的であるにせよ、ないにせよ)何らかの古伝承や筆録された素材に基づいて編集されたものと判断することができる。

以上、一連の記紀批判を済ませたので、一次資料である考古資料と、資料批判を経た文献資料とを総合して、研究の目的である古代の戦闘像の復元を試みよう。

考古資料による武器組成によれば、日本列島では古墳時代を通じて刀剣と弓矢が主武器であり、副武器として槍や矛の長柄武器が存在する。また馬具は当初は飾り馬具で威信財的な要素が高かったが、6世紀以降では実用的な簡素な馬具も普及する。

本章の研究成果では、『日本書紀』の記す太古の戦闘は5世紀以降に筆録された伝説や伝承を断片的に伝えたと判断したが、これらをみると、日本列島内の歩兵戦では、両軍が対峙する

と盾を立てて（植盾）、「雄誥」など雄たけびを挙げ、「貴人は 貴人どちら 親友はも 親友どちら いざ闘はな 我は」という戦闘歌謡を歌って味方を鼓舞していた状況が描かれている。その後、戦闘は「各先に射むことを争う」といった矢合戦が交わされる。すなわち、日本列島においては雄たけびや歌謡といった儀礼的なパフォーマンスで士気を高め、次いで矢合戦で戦うという流れが伝統的、一般的な戦闘様式であったと評価することができるのである。

日本列島における戦闘が弓矢主体であったことは、伊勢の朝日朗が「自ら能く射ることを矜り」、筑紫の物部莫奇委沙奇は朝鮮半島での戦闘において火箭を用いて城を陥落させるなど、武力の象徴として弓矢の巧みさが強調されることから伺われる。筑紫国造も「能く射る」ことから「鞍橋君」の名称を奉られており、日本武尊は遠征にあたって「善く射む者を得て、与に行かむと欲ふ」と語るなど、倭人たちにとってみれば、武威の証明となったのは「弓矢」であり、当時の戦闘様式も遠距離からの弓矢戦闘（矢合戦）が中心であったと評価することができる。

古墳時代前期においては有稜系の銅鐙など、実用機能よりも、より目立つ華美で儀仗的な鐙が存在するが（水野（敏典）2009）、このことは弓矢が武力の象徴として儀礼の上でも重視されてきた伝統が存在していたことを証していると指摘しておこう。

また、国内での戦闘においては恒常的な防御施設を巡る戦闘が描かれることがなく、姦計や騙まし討ちが多用されている。これは国内では徹底的な攻城戦（壊滅戦）がみられず、組織的・継続的な戦闘能力や戦術が未発達でもあったことの裏返しであって、5 世紀以前の国内での戦闘では儀礼的な弓矢戦が重視されていたこととも関連があると推察されるところである。

考古資料から判断すると 5 世紀には日本列島において乗馬の風習が広まる。朝鮮半島では騎馬民族の高句麗が既に 4 世紀から重装騎兵による戦術を採用しており、その南下政策によって朝鮮半島南部でも重装騎兵の戦術を採用していくが、朝鮮半島における主な攻撃具は日本列島とは異なって、あくまでも矛などの長柄武器が基本である。

『日本書紀』の記述や壁画古墳から判断すると、朝鮮半島では「旌旗充滿」する「鼓吹」で統率された強力な重装騎兵の軍隊で戦闘が行われていた。欽明十四年十月条の百済王子余昌の百合塞の戦闘では、戦闘前には代表者が「姓は是同姓、位は是杆率、年は二十九なり」など互いに姓名を名乗りあってから戦闘を開始するなど、一定のルールが存在するといった儀礼的な様相を残す反面、戦闘においては「標を立てて」「鼓を打ちて疾く闘い」「鉦を以ちて勇士を馬より刺し墜として首を斬る」といった組織的・機動的な戦闘が繰り広げられている。

朝鮮半島における戦闘では重装騎兵の攻撃や城郭を巡る徹底的な戦闘が繰り広げられており、

戦闘目的も明らかに拠点確保（領土拡張）にあったため、城郭のネットワークが発達している様子が考古資料や『日本書紀』の記録から伺うことができるのである。

欽明二十三年七月条では「新羅の闘将、手に鉤戟を持ちて、追いて城廬に至りて、戟を運して撃つ」とあり、継体八年三月条では「伴跛、城を子吞・帶沙に築きて、満奚に連ね、（略）士卒・兵器を聚えて新羅を逼め、子女を駈略し、村邑を剥掠す」というような激烈な戦闘が行われていた。このことは国内での戦闘情景が「物部の兵士三十人を遣わして、七十人を誅殺さしめたまふ」といった数十人規模の小規模な戦闘が主であったこととは対照的である。

大陸へ派遣された兵士の数は「筑紫火君を遣して、勇士一千人を率て、衛りて弥弓に送らしむ」（欽明十七年正月条）とあるように概ね数百～千程度のものを「筑紫君」「毛野臣」「紀宿禰」といった九州や東国などの豪族軍主体で編成されていたと考えられる。和歌山県大谷古墳や埼玉県將軍塚古墳からは国内では類例の少ない馬甲が出土しており、朝鮮半島での戦闘経験を有した首長の中には、騎馬による戦闘戦術の情報を入手することが可能だった人物も存在したのであろう。

弓矢戦闘主体による儀礼的な様相を残す、歩兵戦主体の戦闘様式を闘ってきた古墳時代の倭人たちにとってみれば、自らの戦闘様式とは全く異なった、城郭と領土拡張、重装騎兵による攻撃など、一国を滅亡に追いやるほどの激烈な戦闘に遭遇して、非常に大きな衝撃を受けたことは想像に難くない。

5世紀～6世紀を通じては、考古学的に鉄製甲冑の大量生産、殺傷威力の増す長頸鏃の採用、馬具の受容と普及など、武器・武具の革新などが目覚ましく起きており、急ピッチで軍事面の改革が急がれている様子が伺われる。この背景には彼らが遭遇した異なる戦闘様式との邂逅が横たわっていると評価したい。

更に7世紀代に入ると、百済の滅亡、白村江の敗戦など、対外的な焦眉の問題が次々と起こり、小手先での軍事改革では対外問題は対処できなくなる。このときに至って律令国家建設が強力に推し進められ、国民皆兵制による律令兵制が成立するという軍事組織の変革が志向される。

天武天皇が「凡そ政要は軍事なり」（天武十三年四月条）と喝破したとおり、5世紀～7世紀の一連の社会政治的な変革の背景には、軍事的な組織・制度の変革が同時並行で進行しており、古墳時代から律令時代へという歴史の大きな流れの中には、常に軍事的な諸問題が底流しているのである。

以上、第5章においては、文献資料としての『日本書紀』を取り上げ、古墳時代の具体的な

戦闘像を明らかにしたが、本章の研究史で述べたとおり、『日本書紀』は後世に編纂された二次資料であり、そこから読み取れる情報も限界がある。そこで次章以下では視点を変え、考古資料を中心に、古墳時代の軍事組織像を検討していきたい。



## 第6章 甲冑の副葬に関する武器副葬の分析





## 第6章 甲冑の副葬に関する武器副葬の分析

### はじめに

第5章では、武器の使用や具体的な戦闘に関する記述もみられる『日本書紀』の記述を基に、古墳時代における武器の使用方法（＝戦闘の方法）を明らかにしてきた。他方、考古資料は副葬品としての武器資料が多いため、直接的には武器の使用に関する情報は少ないものの、型式学的方法論を介して、社会の軍事的側面に迫ることができる。そこで以下では、考古学的な研究手法に則って、古墳時代における軍事組織像を検討していく。

さて、古墳時代においては、第1章の殺傷人骨でみたような、具体的な戦闘を復元する資料が少なくなり、反面、墳墓から大量の武器が出土する。直接的な資料が存在しない場合において、軍事組織を検討する方法論的課題については序章で述べた通りであり、本章以下は武器副葬という遺物の“廃棄”のステージにおける遺構の検討から“モノ”というよりも“コト”の現象を介して社会的な背景を復元することで、具体的な戦闘像や武装集団の解明を目指したい。

これに沿って、第6章～第8章にかけては武器副葬の様々な諸相から古墳時代の武装集団について考察を試みるが、第6章では甲冑副葬古墳における甲冑の数量や組成を取り上げて、その社会的な背景を検討する。

### 第1節 甲冑の副葬に関する研究史と研究の方法

#### 1. 古墳時代の“常備軍”を巡る研究史とその問題点

古墳時代は鉄製の武器・武具が普遍化し、広域な軍事組織や武器の生産・流通が存在する時代と考えられている。このうち、遺構の分析から軍事組織像を復元した研究が既に試みられている。

考古学において遺構面（武器を副葬する古墳）から軍事組織に言及した研究は、北野耕平が大阪府アリ山古墳の調査を通じて、中期の近畿地方における大量埋納武器の背景に、大和政権の親衛隊的性格をもった軍事機構の存在を指摘したことに始まる（北野（耕平）1964）。武器の大量埋納古墳と軍事組織との関連性は、田中晋作により“常備軍”の分析へと発展し、ここにおいて、考古学においても本格的な軍事組織を巡る研究と議論が生じることになった。

遺構分析を通じて軍事組織像を考えるにあたっては、田中晋作の常備軍仮説は考古学的な研究による具体的かつ刺激的な軍事組織像の提示であり、その最も重要な論文である「武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について―百舌鳥・古市古墳群を中心に―」は、遺構から軍事組織を検討する上でのヒントや課題が凝縮して内包された論文である。なお、古墳時代の軍事組織を巡る研究は常備軍仮説のみではなく、その他の研究については別途に第 11 章でまとめるが、田中の常備軍仮説は古墳時代の軍事組織像を巡る論争の端緒として極めて重要であるため、本章では以下にもう少し細かくみておきたい

上記の論文は 1993 年の『古代文化』誌上に 上（45－8 号）、下（45－10 号）巻の 2 回に分けて掲載されたもので、それ以前に田中が発表した諸論文を下敷きに、古墳時代の軍事組織の復元、具体的には「古墳時代中期、百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団のもとに常備軍が成立していた可能性を指摘」（上巻：13 頁）することを目的として執筆されたものである（註 19）。

軍事組織像を復元するための研究方法として田中は「古墳に埋納された武器は、当時の武装、もしくは武器の所有形態のあり方においてなされたとの前提」（上巻：13 頁）で論を進める。実は、この前提が後に論争を生じさせることになるが、研究方法の問題点については後述する。

そして田中は、百舌鳥・古市古墳群などの近畿地方の未盗掘古墳において、武器の埋納状態には 4 つの形態があるとし、大塚古墳型、野中古墳型、西墓山古墳型、西小山古墳型として型式の設定を行った。

それぞれは、型式名となった各古墳における武器の副葬状況を標識としており、大塚古墳型と西小山古墳型は人体埋納古墳で、大塚古墳型は個人が使用する範囲の武器組成や副葬量を指し、それを超える武器の多数埋納を西小山古墳型として区分した。また、非人体埋納古墳で極めて大量の武器を集積しているものを野中古墳型と西墓山古墳型とし、前者は大塚古墳型と武器組成が類似するもの、後者を特定武器の大量集積とした。

その上で田中は、先の前提から、人体埋葬施設に武器が副葬された大塚古墳型や西小山古墳は、古墳被葬者などの個人的所有に基づくもの、「甲冑をもった有力古墳の被葬者を頂点とする武装単位のひとつの型」（上巻：19 頁）、「古墳被葬者を中核とし、彼を取り巻く少数のものによって構成される組織」（下巻：21 頁）を表現しているとした。特に西小山型古墳については武器の埋納量が多いことから、「戦時、もしくはそれに類する緊急時にあらたに編成される組織に貸与するための武器の備蓄」（下巻：17 頁）を想定し、武器副葬の差異のあらわれを平時編成、戦時編成などの相違と対比させた。

一方、野中古墳型や西墓山古墳型といった武器の大量埋納については、「人体埋葬から分離さ

れ、その被葬者が所持する武器が別個に存在」(下巻：15 頁)していることから、「ある者から、もしくは、ある組織から、甲冑をもつ一般古墳被葬者と異なる人々に貸与されるために存在した武器の一部」(上巻：20 頁)であるとした。このうち、西墓山古墳型については、甲冑を伴わず、特定の武器が大量に集積されるといった特徴から「戦時、もしくはそれに類する緊急時にあらたに編成される組織に貸与するための武器の備蓄」(下巻：19 頁)と、ここにおいても戦時や平時の軍事組織の反映と対比させた。

上記の各型式のうち、“常備軍”存在の最大の根拠とされたのは野中古墳型の武器副葬である。野中古墳型は大阪府野中古墳の出土状況を指標とするもので、人体埋葬を主眼としない武器を大量に埋納した古墳のうち、甲冑、特に最新の機能を持つ甲冑 1 に対し 1 の刀・剣が帰属した埋納状態を示すものとされたが、田中は野中古墳における甲冑や武器の出土状況を詳細に検討した上で、特定の甲冑に帰属する刀剣が事前に抽出されていた状況を想定した。そして野中古墳型は西墓山古墳型のように多数の備蓄された武器とは別に、「事前に使用するものが存在することを前提としているものと考えられる」(下巻：19 頁)ことから、これらの大量の武器を使用する集団、常備軍の存在を反映していると評価した。

すなわち野中古墳型の武器埋納のあり方は「特定の人間、もしくは、特定の組織の防衛のために存在し、その防衛される主体者の、もしくは組織の中核にあった人物の死に際して、その一部の単位が一括して埋納された」(下巻：21 頁)と結論づけ、ここから百舌鳥・古市古墳群の周辺に常備軍が存在した可能性の指摘が導かれたのである。

## 2.本章の方法

以上、田中の常備軍仮説についてやや詳細にみてきた。常備軍仮説についてはその後、様々な疑義が生じ、学史的な論争を生んでいるため、古墳時代の軍事組織についての統一見解が確立されてはいるものではない(註 20)。学説の整理や古墳時代の軍事組織像についての研究動向については第 11 章にて触れるが、田中の常備軍仮説そのものは、論争上で様々な問題点の指摘や、それぞれ研究者の解釈上の相違点が存在するため、その派生する論点也多岐に及んでいる。しかしながら、それらの論争の中で顕著化した最も重要な問題点とは、考古学における軍事組織復元のための主な資料が古墳から出土する副葬品である、という点に収束することができるだろう。

考古学から軍事組織や戦争を研究するための資料としては、防御集落、武器、殺傷人骨、武器の副葬などが存在するが(佐原 1999)、それぞれの資料的特質や価値は相対的に異なってい

る。例えば、殺傷人骨は暴力行為や戦闘行為を示す直接的な同時代資料であり、戦闘や暴力行為を復元する上で最重要な資料になる。他方、武器形の祭器や武器の副葬などについては、儀礼の復元や思想の検討、個別資料の製作技術などに関しては重要な資料的価値を有するが、反面、実際の戦闘や軍事組織などを検討する際は間接的な資料とならざるを得ない。

古墳時代においては、当時の武器や武装を復元する主な資料は“古墳”という墳墓における葬送儀礼のための副葬品が大部分である。このような制限上から、資料の由来（出土状況）としては、第一義的には葬送儀礼の結果（痕跡）と評価されるべき性質のものであり、ここから親衛軍や常備軍といった具体的な軍事組織の存在を実証することは、直接的には不可能と判断せざるを得ない。これが古墳時代における軍事組織問題を巡る考古学の最大の問題点・限界点であるといえるであろう。

田中晋作の常備軍仮説を巡る研究は、学史上は極めて意義ある重要なものであるが、その研究に際しては、考古資料の現象のみからは事実と照らし合わせるができない、戦時と平時の区分や武装集団の常備性などの概念を用いて“常備軍”を論じたことは、研究の方法として大きな問題を残すことになる。

科学哲学者のポパーによれば、有意な命題とは、どうすれば反証できるかを明確に示した命題を指す（ポパー1971）。これを常備軍論争に援用するならば、一義的には葬送儀礼の痕跡としての副葬資料であるに過ぎない考古資料においては、常備軍や戦時・平時の検証可能性が低いのはもちろん、同様に、それら反証の検証も不可能であるため、常備軍論争においては命題や議論そのものが有意さを帯びないのである。このことが近年の軍事組織研究の低迷さを物語っているといえるであろう。

では考古学において軍事組織研究が学問的に不要であるか、と問えば筆者は必要だと答えたい。何故ならば、科学的事実とは、クーンのパラダイム概念によれば、それぞれの時代に共通の枠組みであるパラダイムに規定される相対的事実と考えられるからである（クーン 1971）。したがって、大胆な仮説の提示と議論は、その学問的発達のためには不可避である。常備軍仮説についても、古墳時代の軍事構造や社会に関する新たな知見や認識が増加されたことなどは、研究の発展を考える上では極めて有意義な議論であったと評価することができるであろう。

上記のような論争の意義と問題点を認知した上で、今後、古墳時代の軍事組織はどのような研究が可能であろうか。田中晋作の常備軍仮説では、命題の設定そのものに問題点が存在するが、田中が試みた武器の副葬状況を“型式”的に分類する研究手段は、考古学において最も基本的な研究の方法であり、副葬型式の差異から社会的な背景を読み取ろうという試みは大いに

評価されるべきものであると考える。型式の分類方法や、その評価については様々な視点があるにせよ、武器の埋納状況を特定の特徴や共通性によって区分する方法論は考古学的にはオーソドックスな研究手段である。また型式とは別の観点からみれば、なんらかの程度の集団性の表現や規範であり、これを明確にすることによって、考古学においても、その背後にある社会や組織といった象徴的な概念を検討することが可能になる。

したがって、考古学の研究においては、型式の設定とその特徴や枠組みの抽出といった、反証可能な資料分析を行った上で、“武器＝軍事的な社会状況の反映”という現象の指摘がどの程度可能であるか、という分析が非常に重要な意味を持つ。

遺構面から古墳時代の軍事組織を検討する場合は、まずは遺構の分析を通じて儀礼的な背景や社会的意義を考察することで、武器が扱われた価値体系を明らかにすることが先決であり、その成果を受けて、社会的な視点から軍事組織の存在を考えなければならないといえるであろう。そこで次節以下では、上記の問題点を鑑み、武器の有する社会的・価値的な復元を主として行い、それらの研究成果を蓄積した後に軍事組織について言及したい。

## 第2節 副葬資料にみる甲冑副葬古墳の分類とその評価

### 1. 甲冑を伴う武器副葬の各型式

前章において古墳時代の軍事組織についての方法論や問題点についてとりまとめたので、改めて古墳へ副葬された武器について検討していきたい。古墳に副葬された武器全てを対象とすると膨大な数になるため、本章では主として甲冑を副葬した古墳を取り扱い、その分類基準については田中晋作の先行研究などを参照した上で（田中（晋作）1993）、副葬された武器の実用性の反映の強弱を考慮し、以下の3型式にまとめた（図10）。

#### 甲冑副葬Ⅰ型

- ・ 被葬者1が想定される主体部において、甲冑1、複数の刀剣や長柄の武器、数群までの鉄鏃で構成された武器副葬

#### 甲冑副葬Ⅱ型

- ・ 被葬者1が想定される主体部において、甲冑3以上、又は甲冑1に対し1器種5以上の武器など、個人使用の範囲を逸脱した大量の武器が副葬されている武器副葬

#### 甲冑副葬Ⅲ型

- ・ 主体部の大部分を武器・武具が占めるなど、極めて大量の武器を集積しているもの  
甲冑以外の武器の大量集積を含む

上記の区分のうち、甲冑副葬Ⅰ型は田中分類の大塚古墳型に、甲冑副葬Ⅱ型は西小山古墳型に、甲冑副葬Ⅲ型は西墓山古墳型・野中古墳型にそれぞれ該当する。なお、田中分析では、主として古墳時代中期の、近畿地方中枢部（百舌鳥・古市古墳群）での甲冑埋納古墳を主な資料としていたが、本章では、より普遍的な現象を検討するために、もう少し視野を広げ、古墳時代の甲冑を副葬する、未盗掘、ないしはそれに類する主要事例を広く集成した。

集成結果は別表(表 12)のとおり、170 例の甲冑副葬古墳を挙げることができた。各形式については区分の困難な部分もあるが、改めてカウントしたところ、甲冑副葬Ⅰ型 115 例 (68%)、Ⅱ型 50 例 (29%)、Ⅲ型 5 例 (3%) という結果を得ることができた。甲冑を共伴した、かつ出土状況が良好なものに限定されるので、考古学的な型式学で全てを網羅的に把握することはできないが、今回の集成によって、古墳時代における甲冑の副葬傾向は読み取ることができるだろう。以下、その特徴をまとめておく。

古墳時代における甲冑の副葬については、個人使用の範囲内で納まるような甲冑副葬Ⅰ型が過半数を占めており、Ⅰ型とⅡ型とで 97%を占めている。甲冑副葬Ⅲ型は事例が圧倒的に少ない特殊な事例であることが理解できる。甲冑副葬Ⅰ型が全体を通してみると最も主流であるとはいえ、Ⅱ型の副葬例も一定数の数があり、何らかの社会的・集団的な背景を考古学的に指摘することが可能となる。

甲冑副葬Ⅱ型の特徴としては前期古墳、特に前期の大型古墳に多いことが特徴といえる。もう少し細かく時期的な変遷をみていくと、古墳時代前期前半（集成 1～2 期）において、甲冑を副葬した古墳は 70m 以上の前方後円墳のみであり、その 3 例は全てが甲冑副葬Ⅱ型である。古墳時代前期前半の甲冑副葬は社会的な最上級階層を中心に行われ、その副葬方法は甲冑副葬Ⅱ型、すなわち甲冑 1 に対し 5 以上の武器など、個人使用の範囲を逸脱した大量の武器が副葬されるといった副葬行為が主流であったことが指摘できる。

前期後半（集成 3～4 期）の 23 例では甲冑副葬Ⅰ型が 12 例 (52%)、Ⅱ型が 11 例 (48%) と早くもⅠ型が過半数を占めているものの、まだⅡ型とⅠ型とは事例数が拮抗している。

中期初頭（集成 5 期）の 25 例では甲冑副葬Ⅰ型 16 例 (64%)、Ⅱ型 8 例 (32%)、Ⅲ型 1 例 (4%) と甲冑副葬Ⅰ型の優位が確立され、甲冑を伴うⅢ型の出現も認められる。

中期中葉（集成 6 期）の 34 例では甲冑副葬Ⅰ型 26 例 (76%)、Ⅱ型 7 例 (21%)、Ⅲ型 1 例 (3%)、中期末（集成 7 期）の 52 例ではⅠ型 35 例 (67%)、Ⅱ型 14 例 (27%)、Ⅲ型 3 例

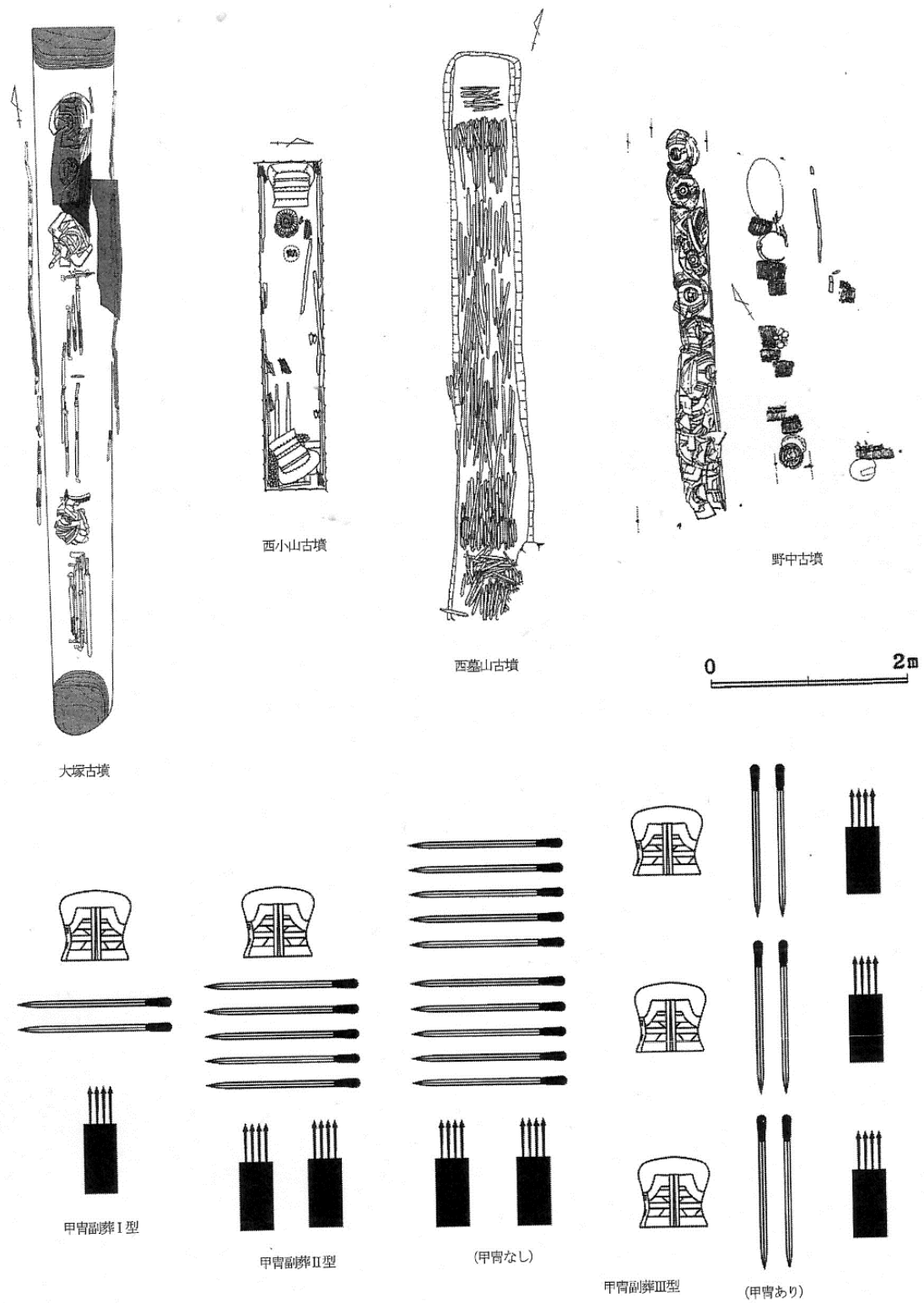


図 10 甲冑副葬の各型式とその標識遺跡

表 12 古墳時代甲冑副葬古墳一覧

遺跡名	所在地	古墳構造				短兵		長兵		飛兵		冑			甲		甲冑類型
		時期	墳形	規模 (m)	主体部	刀	剣	槍	矛	銅鏃	鉄鏃	衝角	盾庇	その他	短甲	挂甲	
椿井大塚山	京都府	1	●	170	竪穴式石槨	7	10	7		19	200			1		1	Ⅱ
黒塚	奈良県	1	●	130	竪穴式石槨	1	26				170			600			Ⅱ
雪野山	滋賀県	2	●	70	竪穴式石郭	3	7	1		92	33			1	1		Ⅱ
安土瓢箪山	滋賀県	3	●	162	竪穴式石槨	3	14			30	17				1		Ⅱ
松林山	静岡県	3	●	116	竪穴式石槨	3	12		12	80					1		Ⅱ
紫金山	大阪府	3	●	100	竪穴式石槨	37	32				153				1		Ⅱ
大丸山古墳	山梨県	3	●	99	竪穴式石室	8	8				12				1		Ⅱ
園部垣内	京都府	3	●	82	粘土郭	23	50	23		15	87				1		Ⅱ
新沢千塚500号	奈良県	3	●	62	主+副槨	23	4	8	1	26	1				1		Ⅱ
若八幡宮	福岡県	3	●	48	舟形木棺	2	1				20				1		I
瓦谷1号	京都府	3	●	30	1号		1	7			46			1	1		I
瓦谷1号	京都府	3	●	30	2号	2	1	1	2	1	30				1		I
庭島塚	大阪府	3	■	56	木棺	4	3	1		56	135						Ⅱ
岩瀬狐塚	茨城県	3	■	44	粘土槨	1	1			4					1		I
中山B-1号	島根県	3	■	22	第一主体		2								1		I
龍門寺1号	岐阜県	3	○	17	割竹形木棺	2					49				1		I
鴨都波1号	奈良県	3	□	20	粘土石槨	2	5	2			35				1		I
貝吹山	大阪府	4	●	135	南棺	1	1					1			1		I
石山	三重県	4	●	120	中央			44			1			1			Ⅱ
石山	三重県	4	●	120	東	22	2	19		48	220				1		Ⅱ
黄金塚	大阪府	4	●	109	東	2	4	3	1		110	1			1		I
黄金塚	大阪府	4	●	109	西	3	4			1	110	1			1		I
老司	福岡県	4	●	76	3号石室	8	7		3		104				1		Ⅱ
盾塚	大阪府	4	●	64	後円部	11	7				388	1			2		Ⅱ
鋤崎	福岡県	4	●	62	3号棺	1			1							1	I
柴垣円山1号墳	石川県	4	○	22	箱式石棺	3									1		I
久津川車塚	京都府	5	●	180	竪穴式石室	56	11	1			50	5			5		Ⅱ
百舌鳥大塚山	大阪府	5	●	168	1号槨	8	8	1	1		3束	1			1		Ⅱ
百舌鳥大塚山	大阪府	5	●	168	2号槨		1					1			5		Ⅲ
古郡家1号墳	鳥取県	5	●	90	第3主体主体		5								1		I
毘売塚	島根県	5	●	41	舟形石棺		2	1	1		2				1		I
東車塚	大阪府	5	■	65	第1号棺	4	6					1			1		Ⅱ
茶すり山	兵庫県	5	○	91	第1主体部	30	19	15	19		389	2			2		Ⅱ
野毛大塚	東京都	5	○	82	第1主体部	19					25	1			1		Ⅱ
野毛大塚	東京都	5	○	82	第2主体部	6	3					1			1		Ⅱ



遺跡名	所在地	古墳構造				短兵		長兵		飛兵		冑			甲		甲冑類型
		時期	墳形	規模 (m)	主体部	刀	剣	槍	矛	銅鏃	鉄鏃	衝角	盾庇	その他	短甲	挂甲	
月の輪	岡山県	5	○	60	中央主体部	3	13	1		3束	2束				1		Ⅱ
大塚	大阪府	5	○	56	第2主体部東柳	10	8	3				2			3		Ⅰ
大塚	大阪府	5	○	56	第2主体部西柳		1	3			28	1			1		Ⅰ
風吹山	大阪府	5	○	50	南棺	1	1					1			1		Ⅰ
佐野八幡山	栃木県	5	○	46	箱式石棺	2	1				35	1			1		Ⅰ
斑鳩大塚	奈良県	5	○	35	割竹形木棺	3					24				1		Ⅰ
谷内21号墳	富山市	5	○	30	土壙	1	2				60				2		Ⅰ
亀山第1号墳	広島県	5	○	28	粘土柳	1	3	4	4		150				1		Ⅰ
安久路3号墳	静岡県	5	○	27	北主体部	3	2								1		Ⅰ
安久路2号墳	静岡県	5	○	26	木棺直葬	1	1					1			1		Ⅰ
宮司井出ノ上	福岡県	5	○	25	2号主体部	1	2		1		25				1		Ⅰ
惠解山2号墳	徳島県	5	○	25	西棺	2	8				98	1			1		Ⅱ
長瀬西	群馬県	5	○	25	竪穴式石室				1		一括				1		Ⅰ
二子山1号墳	京都府	5	○	20	西柳	4	1	1			17	1			1		Ⅰ
茶臼山9号墳	石川県	5	○	16	第2主体部	1	1				1束	1			1		Ⅰ
新沢千塚508号墳	奈良県	5	○	17	東棺		2								1		Ⅰ
雲部車塚	兵庫県	6	●	140	長持型石棺	34	8		2		107	4			6		Ⅱ
ベンショ塚	奈良県	6	●	106	第2主体部			1			1～		1		1		Ⅰ
津屋崎10号墳	福岡県	6	●	70	竪穴系石柳	1			11		160	1				3000	Ⅰ
赤堀茶臼山	群馬県	6	●	59	1号柳	2	3		1		9				1		Ⅰ
御獅子塚	大阪府	6	●	55	第1主体部	1	2				30	1			1		Ⅰ
御獅子塚	大阪府	6	●	55	第2主体部	1		3	4		170		1		1		Ⅰ
天狗山	岡山県	6	●	46	竪穴式石室	2	1				9					1	Ⅰ
随庵	岡山県	6	●	40	竪穴式石室	2	4	1	2		12	1			1		Ⅰ
浄土寺山古墳	宮崎県	6	●	34	粘土柳	6	12		1		80		1		1		Ⅰ
今井1号	奈良県	6	●		前方部土坑						100	1			1		Ⅰ
私市丸山	京都府	6	○	71	第1主体部主体		2				38	1			1		Ⅰ
私市丸山	京都府	6	○	71	第2主体部主体	4					47	1			1		Ⅰ
天神山7号	福井県	6	○	52	1号埋納施設	2	8		3		3	1			1		Ⅱ
産土山	京都府	6	○	50	長持形石棺	3	4				2	1			1		Ⅰ
七観	大阪府	6	○	50	古頂中央部							5			5		Ⅲ
小野大塚	兵庫県	6	○	45	割竹形木棺	4		2	1		1束		1		2		Ⅰ
西小山	大阪府	6	○	40	竪穴式石室	23			2		107		1		2	800	Ⅱ
原間6号	香川県	6	○	30	木棺	3	1								1		Ⅰ
鞍塚	大阪府	6	○	39	組合式木棺	4	2	2	2		163	1			1		Ⅰ

遺跡名	所在地	古墳構造				短兵		長兵		飛兵		冑			甲		甲冑類型
		時期	墳形	規模 (m)	主体部	刀	剣	槍	矛	銅鏃	鉄鏃	衝角	盾庇	その他	短甲	挂甲	
新開1号	滋賀県	6	○	36	南遺構	7	7		4		80	1	4		4		Ⅱ
琵琶隈	福岡県	6	○	25	竪穴式石室	1	1				19					1	I
堂山1号	大阪府	6	○	25	箱形木棺	18	3	1	1		198	1			1		Ⅱ
市尾今田1号墳	奈良県	6	○	22	木棺直葬	5	1	1	2		160	1			2		I
寺内63号	和歌山県	6	○	21	粘土槨		1	1			42	1			1		I
桜ヶ丘	長野県	6	○	15	竪穴式石室	1	5		1		31	1			1		Ⅱ
湯山6号墳	鳥取県	6	○	13	箱式石棺	3					17	1			1		I
恵解山1号墳	徳島県	6	○	6	箱式石棺	2	2				24	1			2		I
花登1号墳	福岡県	6	○		竪穴式石室	1					26				1		I
五条猫塚	奈良県	6	□	32	竪穴式石室		1		6		724		3		2	2領～	Ⅱ
佐野山	岡山県	6	□	25	箱式石棺		2				48				1		I
高山1号墳	奈良県	6	□	23	割竹形木棺	3	4				50				2		I
ニゴレ	京都府	6	□	20	割竹形木棺		2				11	1			1		I
沖田11号	兵庫県	6	□	18	第2主体	2	1				1束				1		I
法花堂2号墳	兵庫県	6			箱式石棺	2					39～	1			1		I
黒姫山	大阪府	7	●	144	前方部主体部	14	10		9		56	11	13		24		Ⅲ
鶴山	群馬県	7	●	104	竪穴式石室	6	1		1		100～	1	1		3		I
津屋崎41号墳	福岡県	7	●	97	横穴式石室	41	4				300				1		Ⅱ
和田山5号墳	石川県	7	●	56	A棺	5	10	4			多数		1		1		Ⅱ
和田山5号墳	石川県	7	●	56	B棺	11	3	2			多数				1		Ⅱ
狐山	石川県	7	●	54	箱式石棺	4	2		1		3～	1			1		I
唐櫃山	大阪府	7	●	53	冢形石棺	1	1				50	2	2		2		I
志段味大塚	愛知県	7	●	51	粘土槨						500					700	I
向山1号	福井県	7	●	48	第1主体部	7	4	1	3		41				2		Ⅱ
向山1号	福井県	7	●	48	第2主体部	7		1	2		50				1		Ⅱ
溝口の塚	長野県	7	●	46	竪穴式石室	3	1	1			64	1			2		I
勝負砂	岡山県	7	●	42	竪穴式石室		2		2		3束				1		I
カンス塚	兵庫県	7	●	30	竪穴式石室	9	3				7束				1		Ⅱ
近代	三重県	7	●	30	竪穴式石槨	2	2	2							1		I
池尻2号墳	兵庫県	7	●	11	組合式木棺		3		3		5+2束	1			1		I
八重原1号墳	千葉県	7	○	55	木棺直葬	2			1		49				2		I
亀山	兵庫県	7	○	40	第1主体部	1	6	1	1		1束		1		1		Ⅱ
亀山	兵庫県	7	○	40	第2主体部	1	3				1束				1		I
飯綱山古墳群第10号墳	新潟県	7	○	40	竪穴式石室	2	1		2		束				2		I
朝光寺原1号墳	神奈川	7	○	37	割竹形木棺	3	8		1		3束		1		1		Ⅱ

遺跡名	所在地	古墳構造				短兵		長兵		飛兵		冑			甲		甲冑類型
		時期	墳形	規模 (m)	主体部	刀	剣	槍	矛	銅鏃	鉄鏃	衝角	盾庇	その他	短甲	挂甲	
宮山	兵庫県	7	○	30	第2主体部	40			5		3束～					840	Ⅱ
宮山	兵庫県	7	○	30	第3主体部	26 ～			5		100～	1			1		Ⅱ
妙前大塚	長野県	7	○	30	礫郭	4	4		1		40		1				Ⅰ
かんかん塚	山梨県	7	○	25	竪穴式石室		1		2		123	1			1		Ⅰ
東耕地3号墳	埼玉県	7	○	25	割竹形木棺	1	1		1		10				1		Ⅰ
稲童21号墳	福岡県	7	○	22	横穴式石室	2	2		3		40		1		2		Ⅰ
川上	香川県	7	○	22	竪穴式石室	1	1		2		2	1			1		Ⅰ
城ノ下1号墳	広島県	7	○	21	土擴墓	3	1		1		83				1		Ⅰ
正崎2号墳	岡山県	7	○	20	第1主体部	1	2		2		5		1		1		Ⅰ
大井七ツ塚	香川県	7	○	20	4号	6		1			一式		1		1		Ⅱ
小谷13号墳	三重県	7	○	20	粘土槨	2	4				13				1		Ⅰ
土保山	大阪府	7	○	20	木棺		1		3		50				2		Ⅰ
土保山	大阪府	7	○	20	粘土槨						100	2					Ⅰ
稲童8号墳	福岡県	7	○	19	横穴式石室	3	1		2		34	1			1		Ⅰ
奥山大塚	兵庫県	7	○	15	竪穴式石室	3			3		1		1		1		Ⅰ
円照寺基山1号墳	奈良県	7	○	13	東側主体部	6	2				27～	2	4		6		Ⅱ
六野原6号墳	宮崎県	7	○	12	粘土槨	2	3		2		25	1			1		Ⅰ
後出7号墳	奈良県	7	○	12	割竹形木棺	10 ～	1	1			2束				1		Ⅱ
西山3号墳	石川県	7	○		木棺直葬	2	1				30		1		1		Ⅰ
塚山古墳	島根県	7	□	33	礫床	1	4	1							1		Ⅰ
野中	大阪府	7	□	28	1列	8	3					3	7		10		Ⅲ
野中	大阪府	7	□	28	2列						625		1		1		Ⅲ
塚山古墳	奈良県	7	□	24	組合式石棺	1	2		1		15	1			1		Ⅰ
新沢千塚139号墳	奈良県	7	□	23	木棺直葬	2	2				83		1		1		Ⅰ
八重田16号墳	三重県	7	□	16	木棺直葬	2		2			36	1			1		Ⅰ
亀井	大阪府	7	□	7	2号	1					9	1			1		Ⅰ
岡本山A-3号	大阪府	7			隅円方穴	1					19				1		Ⅰ
六野原8号地下式	宮崎県	7			地下式横穴墓	5	4				1		1		1		Ⅰ
六野原10号地下式	宮崎県	7			地下式横穴墓	8	3						1		1		Ⅱ
下北方5号地下式	宮崎県	7			地下式横穴墓	2	3		4		50		1		1		Ⅰ
島内3号墓	宮崎県	7			地下式横穴墓		3				5				1		Ⅰ
埼玉稲荷山古墳	埼玉県	8	●	120	第1主体	4	2		2		180					1	Ⅰ
三味塚古墳	茨城県	8	●	85	箱式石棺	1	1									1	Ⅰ
三味塚古墳	茨城県	8	●	85	棺外木箱施設	1					160	1			1	1	Ⅰ
大谷古墳	和歌山県	8	●	70	家型石棺	6	2				多数	1				1	Ⅱ

遺跡名	所在地	古墳構造				短兵		長兵		飛兵		冑			甲		甲冑類型
		時期	墳形	規模 (m)	主体部	刀	剣	槍	矛	銅鏃	鉄鏃	衝角	眉庇	その他	短甲	挂甲	
大谷古墳	和歌山県	8	●	70	木箱ほか				5						1		Ⅱ
池殿奥5号墳	奈良県	8	●	22	前方部南棺	1									1		Ⅰ
新沢千塚109号墳	奈良県	8	■	28	前方部主体部	6	2	2	1		5束				1	1	Ⅱ
セストノ	福岡県	8	○	60	横穴式石室	7	1		2		150				1		Ⅱ
東間部多1号墳	千葉県	8	○	28	南棺	1					16				1		Ⅰ
烏山2号墳	千葉県	8	○	23	木棺		1				3				1		Ⅰ
新沢千塚281号墳	奈良県	8	○	23	組合式木棺	2	2		3		47	1			1		Ⅰ
舟塚山8号墳	茨城県	8	○	23	木棺	3									1		Ⅰ
新沢千塚115号墳	奈良県	8	○	18	組合式木棺	3	1				48	1			1		Ⅰ
月の木1号	長野県	8	○	22	埋葬施設1	1					10				1		Ⅰ
花野井大塚	千葉県	8	○	20	木棺直葬	2	1				3束				1		Ⅰ
金塚古墳	千葉県	8	○	20	墳頂西端				1		2				1		Ⅰ
黒田長山4号墳	滋賀県	8	○	17	南棺	2					32				1		Ⅰ
黒田長山4号墳	滋賀県	8	○	17	北棺	1	4		2		46				1		Ⅰ
雲雀山2号墳	滋賀県	8	○	17	竪穴式石室	2	3		1		35				1		Ⅰ
吸坂丸山5号墳	石川県	8	○	15	木棺	1			1		5	1					Ⅰ
新沢千塚173号墳	奈良県	8	○	14	組合式木棺	1			1		21				1		Ⅰ
後出2号墳	奈良県	8	○	14	割竹形木棺	4	4	2	5		96				3		Ⅱ
後出3号墳	奈良県	8	○	13	第1主体	1	2				11				1		Ⅰ
後出3号墳	奈良県	8	○	13	第2主体		1	1			62				1		Ⅰ
倭文6号墳	鳥取県	8	○	13	木棺	2			3		90	1			1		Ⅰ
新沢千塚510号墳	奈良県	8	○	12	組合式木棺	2	3				20				1		Ⅰ
本関町2号墳	群馬県	8	○	12	組合式木棺	1					25				1		Ⅰ
古保利44号墳	広島県	8	○	10	竪穴式石室						2					1	Ⅰ
兵家12号墳	奈良県	8	○		木棺		2				47		1		1		Ⅰ
一夜塚古墳	埼玉県	9	○	36	木炭櫛	3					○					1	Ⅰ
どうまん塚古墳	埼玉県	9	○	25	木棺	2					2束					1	Ⅰ
団子塚9号墳	静岡県	9	○	17	木棺						3束					1	Ⅰ
綿貫観音山	群馬県	10	●	97	横穴式石室	7			9		493			1		1	Ⅱ
金鈴塚古墳	千葉県	10	●	95	箱式石棺	17			3		500	1				1	Ⅱ

(6%) となるなど、中期中～中期後半にかけて、甲冑副葬の事例そのものが多くなり、うち甲冑副葬Ⅰ型が約7割の大半を占めるようになる。

甲冑は型式的には、集成7期（中期末）と8期（後期初頭）との区別が難しいが、集成8期とした28例では甲冑副葬Ⅰ型23例（82%）、Ⅱ型5例（18%）と甲冑副葬Ⅰ型が8割強を占

めるようになる。後期中葉（集成 9 期）以降は横穴式石室の普及に伴い、良好な状況の武器共伴事例の提示が難しくなるが、後期後半（9～10 期）の 5 例ではⅠ型 3 例（60%）、Ⅱ型 2 例（40%）と、甲冑副葬Ⅰ型が過半数を占めていた。

また、墳形別に視点を変えてみると、前方後円墳 58 例のうち、甲冑副葬Ⅰ型 30 例（52%）、Ⅱ型 26 例（45%）、Ⅲ型 2 例（3%）と僅かながらⅠ型が多いものの、墳丘規模が 100m を超える大型前方後円墳に限定すれば甲冑副葬Ⅱ型やⅢ型といった武器の大量副葬や埋納が過半数を超え、前期古墳かつ大型古墳であるほど、甲冑副葬Ⅱ型である傾向は顕著である。

円墳 88 例では甲冑副葬Ⅰ型 68 例（77%）、Ⅱ型 19 例（22%）、Ⅲ型 1 例（1%）と圧倒的にⅠ型が多数を占めるが、前方後円墳での傾向と同じく、兵庫県茶すり山古墳や東京都野毛大塚古墳など比較的によく、かつ大型の円墳は甲冑副葬Ⅱ型となる傾向が高い。方墳及び墳形不明の 19 例では、甲冑副葬Ⅰ型が 15 例（78%）、Ⅱ型 2 例（11%）、Ⅲ型が 2 例（11%）と甲冑副葬Ⅰ型が大多数である。

以上のように、古式の大型前方後円墳や円墳では甲冑副葬Ⅱ型の割合が高くなり、特に前期前半の大型前方後円墳はほぼ全て甲冑副葬Ⅱ型である。一方、円墳・方墳は甲冑副葬Ⅰ型が多く、中期以降の小型円墳や方墳はほぼ甲冑副葬Ⅰ型で占められている。上記の全体的傾向を押さえた上で、より詳細に各型式について分析していこう。

### （1）甲冑副葬Ⅱ型の諸特徴

埋葬に際して武器を副葬するといった行為は、武器が出現する弥生時代早期に既に認めることができる。第 3 章において検討したように、弥生時代における武器の副葬は地域や時期に偏在があり、弥生時代後期、特に終末期において漸く全国的に普遍的な現象となるが、その副葬量は、一部の例外を除いて鉄製刀剣 1、鉄鏃・銅鏃が数本程度と、概ね個人の使用量を超える数量ではない。

ところが古墳時代に入ると、副葬量は一変する。甲冑副葬古墳でいえば、京都府椿井大塚山古墳（●：170m）や、奈良県黒塚古墳（●：130m）といった古墳発生期の大型古墳は全て甲冑副葬Ⅱ型で占められるようになるなど、古墳時代前期の大型前方後円墳における甲冑副葬のあり方は、ほぼ全ての事例で甲冑副葬Ⅱ型になるのである。このことは古墳祭祀の始原的な武器の取り扱い方の特徴（伝統）を示していると評価することができるであろう。

大阪府紫金山古墳（●：100m）での事例をみてみると、副葬品は石室内と、石室の壁体上部外縁の 2 ヶ所から出土している。石室内には長大な割竹形木棺を取り囲むように、石室の壁体

上部外縁も一列になって、武器を始め鏡、農工具、装身具などが配列されていた。また、人体が推定される付近には頭部の方格規矩四神鏡、頸や手の部分に玉類があった他は何もなく、大部分の副葬品はこれらを取り囲むように配列することが意図されているようである（図 11）。

このうち、豎矧板革綴短甲は石室南壁（足側）の小口部分に鏡や貝輪、鍬形石などと共に集積されており、箆手は北壁小口（頭側）の反対側に置かれているなど配列位置が異なっている。甲冑 1 に対する武器量は鉄刀 21、鉄剣 11、短刀 4、鉄鏃 153 であり、この他に石室外で鉄刀 16、鉄剣 21 も出土している。ここにおいても甲冑 1 に対する数的な共通性はみられない。刀剣類はまた、鋒を南に向き、鉄鏃では鋒が北を向くか南を向くかで型式に違いがあることが観察されており、道具としての機能的な価値よりも、刀剣類などを多量に“並べる”という行為そのものが重視されている状況が伺われる。

前期の大型古墳にみられる甲冑副葬Ⅱ型の武器配列のこのようなあり方からは、武器そのものの機能性を重視することや、組成的なセット関係といった実用面での特徴を重視した痕跡がみられず、実際の武器組成や軍事組織を推定させるような規範を認めることはできない。むしろ、これらの量的多寡は古墳祭祀での厚葬性の所以と考えられ、古墳祭祀の本質は武器や農工具、鏡などを大量に副葬することそのものに主眼が置かれていたといえる。これら武器副葬が、当時の首長たちの武装の一端を覗かせていることは認められるものの、ここから直接的に軍事組織を復元することは極めて困難であって、甲冑副葬Ⅱ型の特徴としては、特に儀礼的な様相が高いという点が重要になるのである。

他方、出土遺物などを検討することで、葬送儀礼に反映した社会状況の側面を考古学的に考察することはできる。既往の研究において指摘されていることであるが、概ね次のような現象

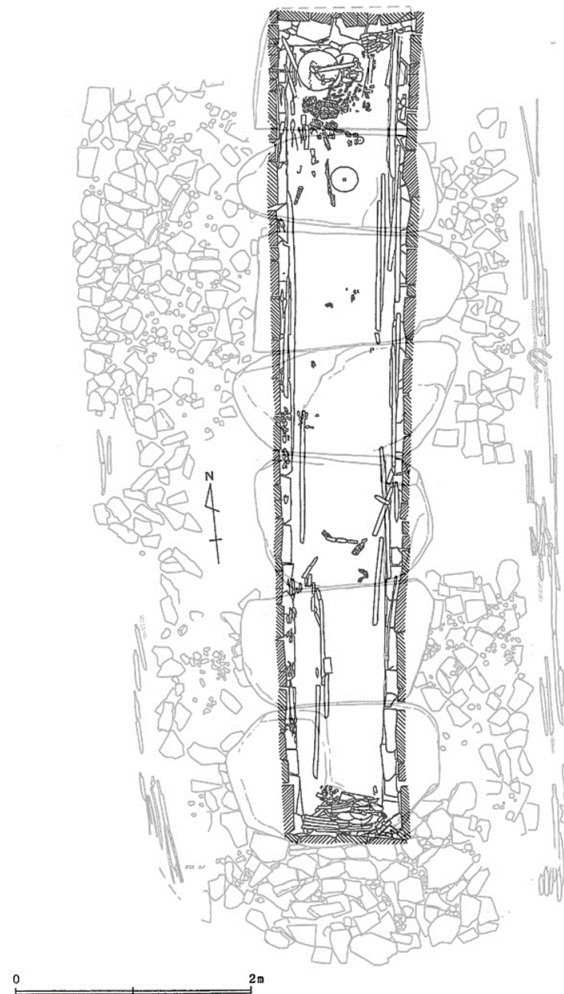


図 11 紫金山古墳遺物出土状況

は指摘することができるだろう。

- ・ 古墳時代前期の甲冑資料は比較的少数であり、分布も畿内地域に集中し、大型古墳出土が多い（橋本・鈴木 2014）。
- ・ 前期の鉄製甲冑は、小札革綴甲、堅矧板革綴短甲、方形板革綴短甲など多様で規範性が少ない（小林（謙一） 1997）。

したがって、古墳時代前期においては、各地域を代表するような大首長層、特に近畿地方における大首長が鉄製甲冑を所持することが可能であり、それら大首長を中心に武装集団が存在した可能性が高い一方、鉄製甲冑の製作や流通のあり方は多様であり、広範囲で統一的な指揮系統に基づく軍事組織が存在した可能性は低いと推定される。

## （2）甲冑副葬Ⅰ型の諸特徴

中・小規模の円墳などにおいて圧倒的に多くみられる甲冑副葬Ⅰ型は、田中晋作の分類では大塚古墳型に該当するが、大塚古墳型の指標となった大阪府大塚古墳を通して、甲冑副葬Ⅰ型の被葬者像、甲冑を副葬した中・小型古墳の被葬者像について確認しておこう。

大塚古墳が所在する大阪府桜塚古墳群は、かつては40基ほどで構成されていたとされるが、現状では大石塚古墳（●：76m）・小石塚古墳（●：49m）・大塚古墳（○：56m）・御獅子塚古墳（●：55m）・南天平塚古墳（○：27m）の5基が残るのみである。古墳の分布は東側と西側とに大きく分かれ、概ね西群の大石塚→小石塚が前期末に築かれ、中期に入って東群の大塚→御獅子塚→南天平塚へ移るという首長墓系譜を追うことができる。また、西群の中で大塚古墳は最大の規模であり、大塚古墳の被葬者像としては、直径56mの円墳という中規模の古墳ながらも、一地域（桜塚古墳群）における盟主的な首長層であったとすることができる。

上記のように、大塚古墳の被葬者像の社会的背景としては、畿内の一小地域での複数の連続する中小首長の盟主墳（50mクラスの円墳）という位置づけが可能であり、ここへ副葬された武器類は、数代にわたって地域に存在した、中小首長が扱うことができた武器であることを示している。

先に確認したように、甲冑副葬Ⅱ型は大型前方後円墳や大型円墳に多く、前期前半の大型前方後円墳のほぼ全てが甲冑副葬Ⅱ型であった。これに対し甲冑副葬Ⅰ型は、むしろ中小の円・方墳に多くみられる型式である。こういった被葬者層の相違点を念頭において、再度、甲冑副葬Ⅰ型をみてみよう。

古墳時代前期前半の大型古墳では甲冑副葬Ⅱ型が顕著であるが、Ⅰ型の甲冑副葬も前期の後

半になると福岡県若八幡宮古墳（●：48m）、京都府瓦谷1号墳（●：30m）、茨城県岩瀬狐塚古墳（■：44m）、島根県中山B-1号墳（■：22m）、岐阜県龍門寺1号墳（○：17m）など、概ね50m規模以下の古墳において確認でき、前期の末には大阪府黄金塚古墳（●：109m）や大阪府貝吹山古墳（●：135m）といった100m規模の大型前方後円墳においても存在が認められる。

中期に入ると、甲冑副葬Ⅰ型を示す古墳の規模や性質が変化してくる。栃木県佐野八幡山古墳（○：46m）、静岡県安久路2・3号墳（○：26～27m）、福岡県宮司井出ノ上古墳（○：25m）、京都府産土山古墳（○：50m）など、50m以下の中・小型の円墳の古墳被葬者などの中に甲冑副葬Ⅰ型が広まっていき、島根県毘売塚（●：41m）、奈良県新沢千塚508号墳（○：17m）、鳥取県湯山6号墳（○：13m）、京都府ニゴレ古墳（□：20m）、三重県近代古墳（●：30m）、兵庫県亀山古墳（○：40m）、神奈川県朝光寺原古墳群1号墳（○：37m）、埼玉県東耕地3号墳（○：25m）など、副葬品がほぼ武器のみに特化した事例が増加する。

また、その副葬武器の配列状況であるが、甲冑副葬Ⅱ型のように、特定武器を大量に“並べる”のではなく、被葬者が推定される位置に接して、身を守るための防具（甲冑）、接近戦用武器（刀剣）、遠距離戦用武器（弓矢）など、実際に武器を装備した場合の1セット程度を副葬し、冑を短甲の中に収めるなど、実用的な組み合わせが重視される傾向にある（註21）。

したがって、中期における甲冑副葬Ⅰ型が増加した背景には、古墳祭祀における武器の取り扱い上での認識変化（武器の象徴的な価値から実用性としての価値）が想定され、これを葬送儀礼の変化とのみ限定せずに、その社会的背景に実際の武器を使用する集団の成立と拡大を想定することが可能になる（註22）。特に中期後半以降の甲冑副葬Ⅰ型は直径20m未満の円墳での事例が多くなるため、遅くとも、古墳時代中期末～後期初頭には、実際に武器としての価値や使用方法を熟知した、在地の中・小首長を核とする、広範な武装階層が成立していったと評価することができるだろう。

### （3）甲冑副葬Ⅲ型の諸特徴

武器副葬の大部を占める甲冑副葬Ⅰ型とⅡ型については検討を行ったので、これらを踏まえた上で、希少事例である武器副葬Ⅲ型の検討に入ろう。

田中論文では常備軍の論拠となる最大の証拠として野中古墳型を取り上げており、その後の論争においても野中古墳で代表される武器の大量埋納（図12）が主要な論点の一つになっているが、繰り返すように大阪府野中古墳（□：28m）や大阪府七観古墳（○：50m）のような甲



冑副葬Ⅲ型は、甲冑副葬の中では僅か数パーセントの極めて特異な希少事例である。

甲冑副葬Ⅲ型の存在を考えるにあたっては、これら武器の大量埋納が突然変異的に発生したものではないことは重要である。甲冑を伴わないが、武器大量埋納の最も古い事例のひとつとして奈良県メスリ山古墳（●：224m）が知られている。メスリ山古墳は大王クラスの関与が想定される古墳時代前期の大型前方後円墳で、主室は盗掘を受けていたが、副室は底面に盾が置かれたと考えられ、石室の両端に大量の槍が切先を南北両壁面に向け、規則正しく積み上げられていた。鉄製槍は南端では107本、北端では105本が23～26列程度で7段程度に積み上げられており、交互に重ねるようにして置いたと考えられている。更にこの上からは7グループに分かれる236本の銅鏃と鉄製弓、石製鏃などが検出され、これ以外にも石室北端には斧、鉋、鑿、刀子、錐、鋸などの工具類などが集積されていた。

メスリ山古墳の武器の集積状況は田中晋作の分類でいう西墓山古墳型であり、武器組成としては、ほぼ鉄製槍に特化したものである。槍については、石室北側では呑口式を中心として、やや長めの身もある一方、石室南側では直線式を中心として、やや短めの身もあるなどもありもあることから、この段階から既に武器製作の画一化や機能による区別や集積などが行われていたことが確認できる。しかしながらその一方で、実用性の欠如した鉄製弓や鉄製矢、儀礼的様相の強い柳葉型の銅鏃や石製鏃などが同じ副室に収められており、鉄製農工具の集積という一般の古墳副葬品での通用品が同じく集積されていることにも注意しなければならないであろう。したがって、古墳に埋納されたこれら副葬品については、武器備蓄の反映というよりも、前期の大型古墳で顕著であった副葬品の多量埋納の延長線上にあると認めるほうが妥当である。

ただし、前期の甲冑副葬Ⅱ型では人体を取り囲むような“並べる”配列に重点が置かれていたが、メスリ山古墳では画一的な武器の集積や、呑口式と直線式の差異に基づく配列の区別など、より武器の取り扱いについて特化した様相が指摘でき、当時の大王クラスにおける武器の生産や保管・管理体制の専門的な分化といった社会的な状況が副葬行為に反映されている可能性が高い。

中期に入ると武器の大量集積行為は最も発展する。しかし古墳数と分布地域は非常に限られた状況にあり、田中が挙げた大阪府アリ山古墳（□：45m）大阪府野中古墳（□：28m）、大阪府西墓山古墳（□：20m）、大阪府七観古墳（○：50m）、大阪府黒姫山古墳（●：144m）、大阪府百舌鳥大塚山古墳（●：168m）の他には、京都府恵解山古墳（●：124m）が挙げられる程度に過ぎない。これら大量集積古墳の大部分は、先にみたメスリ山古墳と同様な特定武器の集積、すなわち田中分類の西墓山古墳型であり、武器のセット的な取り扱いが想定される野

中古墳型は、野中古墳と黒姫山古墳の2事例のみである。このことからしても、田中分類の野中古墳型は例外中の例外的な事例であることが理解できるだろう。

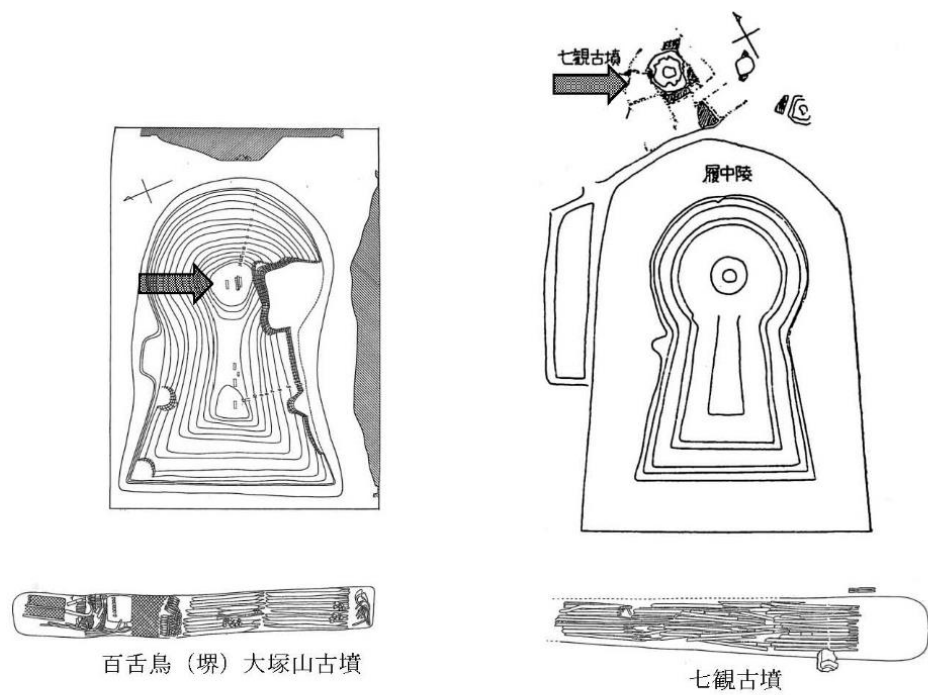
時間軸で整理すると前期（集成3期）のメスリ山古墳をはじめ、中期前半（集成5期）の百舌鳥大塚山古墳や恵解山古墳は、おしなべて田中分類の西墓山古墳型が該当する。そのため、武器の大量埋納という行為は、古墳発生期より続く武器の多量副葬（甲冑副葬Ⅱ型）から派生し、奈良盆地南東部や、百舌鳥・古市古墳群の大王クラスの葬送儀礼を中心に採用され、中期中頃～後半にかけては百舌鳥・古市古墳群の特定陵墓の陪塚においてのみ行われた、という大まかな流れが理解できる。

ところで、田中分類の西墓山古墳型は甲冑を伴わず、特定の武器が大量に集積されるという共通項を有するが、古墳それぞれの武器の種類や組成については統一されているとは言い難い。武器の組成上では、刀剣類を大量に集積した事例が最も多く、鍔類や槍などがこれに次ぐ。刀剣や鉄鍔の比率もそれぞれが異なり、刀剣の大きさもアリ山古墳では刀が90.3～112.5 cm、剣が66.5 cm～82.2 cmと比較的に大型であるのに対し、恵解山古墳では刀が56～79 cmの細身で、既に非実用的な指摘があるなど（豊島 2000b）、用いられている武器の規格には格差が大きい。大量武器の埋納は実際の備蓄品の転用というより、それぞれの埋納時に、それぞれの事情に応じて武器の種類や量が選ばれたと考えられるのである。

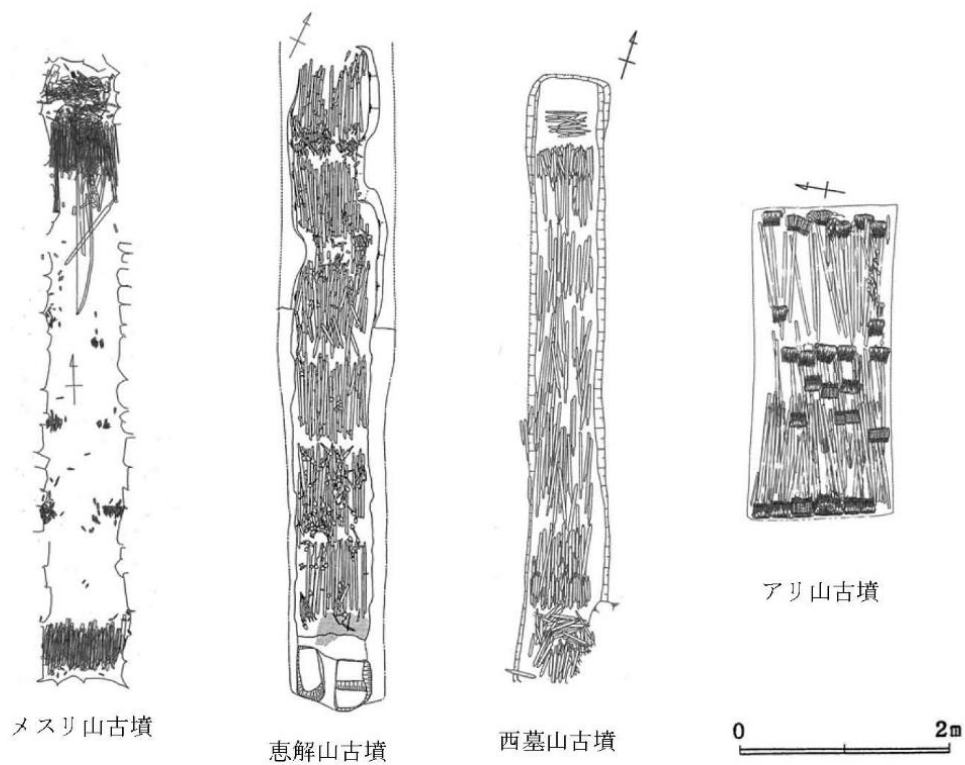
また、武器の大量埋納は木製の木箱に収められていることや、刀剣や鉄鍔の鋒を特定方向に揃えて埋納されることが顕著であるが、木製の収納施設については、西墓山古墳と七観古墳では割竹形木棺に似た長大な長方形、アリ山古墳はより正方形に近い木櫃形である。時間軸で見ると、メスリ山古墳のような石室内に武器を収めるものが古く、木棺のような長大な形がこれに次ぎ、正方形に近い木櫃が新しいといえるであろう。

このことは武器の大量埋納行為が人体埋納施設に準じた形で発生・発展し、最後は道具を収めることにのみ主眼が移ったことを示している。つまり武器の大量埋納行為は、古墳の人体埋葬に伴う儀礼からの延長線上に位置づけられ、当初は武器の組成的統一よりも、切先の方角を揃えるというような、整然とした配置そのものに注意が向けられているのである。既に紫金山古墳の事例でみたように、前期前半の大規模古墳における武器配置（甲冑副葬Ⅱ型）でも刀剣類や鍔類は、鋒を特定の方向に向けることが多かったが、これら儀礼的な“並べる”行為の延長線上に武器の集積行為も位置づけられるといえるだろう。

西墓山古墳においては、木製容器内に鉄鍔、短剣、短刀、ヤス状鉄製品など7つに区分して配置され、恵解山古墳ではまず6群の刀剣類が鋒を揃えて並べ、その上の北半分は鉄鍔や短剣



#### 武器の大量埋納 出土地点



#### 武器の大量埋納 遺物出土状況

図 12 武器の大量埋納

を並べて置き、南半分はやや雑然と置いている。これらの配置から、大量の武器埋納については、既に先学が指摘しているように、武器をまとめて埋納した複数の供献者（集団）の存在が推定され（豊島 2000b）、田中が武器副葬の背後に想定した武器庫からの抽出や、備蓄という概念を強いて当てはめる必要もないだろう。

ただし、論争で最大の的となった野中古墳については、田中晋作の詳細な検討結果があるように、武器組成の背景には一定の規範がみと取れると積極的に評価したい。すなわち、野中古墳では遺物第1列とされる長方形の木櫃内に短甲10があり、それぞれの短甲内に冑がみられ、短甲列の両脇に刀剣が置かれていた。また遺物第2列の木櫃内には短甲と冑各1と鋒を揃えた8群の鉄鏃（625本）などが副葬されている。このことから、田中は甲冑・刀剣・弓矢からなる実際の武装の単位をそこに見出したのである。同様な事例は黒姫山古墳においても指摘され、出土した遺物量は甲冑24と刀剣24であって、甲冑とそれに帰属すると推定される、ほぼ同数の刀剣の存在が推定できるのである。

このような出土の事例は極めて希少であり、新たな事例の追加もないため、検証が困難であるが、近年に再調査された七観古墳の第2埴（東郭）については攪乱が激しいものの、検出された武器は衝角付冑2、短甲2、頸甲1、肩甲2、剣6で短甲の内部に衝角付冑や鏃が収められており（杉井・上野（編）2012、阪口 2014）、組成的な規範が存在する可能性が高いだろう。また出土年が1896年と古いものの、近年再調査された兵庫県雲部車塚古墳においても、再調査で識別された出土武器は鉄剣3、鉄刀3、鉄矛3、衝角付冑3、短甲3などであり（兵庫県立考古博物館 2010）、こちらも組成的な規範が存在していた可能性が想定できよう。1927年に調査された奈良県円照寺墓山1号墳や1959年に調査された同2号墳においては攪乱が激しく明確な検出状況は不明瞭であるが、小円墳で多数の甲冑が出土しており、内部構造が珍しい可能性が指摘されており（末永 1968、伊達 1968）、組成的なまとまりがあった可能性も考えておきたい。

少なくとも、野中古墳や黒姫山古墳については、遺物（武器・武具）に対する古墳祭祀での取り扱い上での認識の変化を確認することができる。古墳時代初頭の甲冑副葬Ⅱ型や、前期～中期前半に盛行する甲冑副葬Ⅲ型においては、実用具としての組成の統一は認められず、むしろ同種多量の“並べる”という行為に重点が置かれているため、恵解山古墳例のように非実用的な刀剣を大量に生産して葬送儀礼に用いているという事実も生じることになるのである。

ところが中期後半の野中古墳に至っては、従来の刀剣群を大量埋納した第4列や、農工具のみを埋納した第5列と並んで、1つの木櫃にはセット関係にある短甲とその付属具が収められ

ており、武器の埋納に際しては実用的なセット関係が重視されている様相が伺われる。副葬量は桁違いであるが、同様に武器を木櫃内に納めた事例としては大阪府土保山古墳（○：20m）や茨城県三昧塚古墳（●：85m）があり、古墳時代中期末～後期初頭における武器の実用面を重視した社会的な背景が広範囲に浸透している様子が伺われる。

このように、古墳時代中期～後期初頭の武器の扱いについては武器の実用品としての認識が強くなっていると評価することができるため、ある程度、武器の実用的な側面、すなわち実際に武器を用いる戦闘や軍事組織などを間接的にではあるが表現している可能性が高いのである。

### 第3節 武器と被葬者との関係性

#### 1. 個別事例の抽出

これまでの検討において、甲冑副葬Ⅱ型は古式の大型前方後円墳などに多く、甲冑副葬Ⅰ型は小型の円墳や方墳に多い形態であることが理解できた。そして、甲冑副葬Ⅱ型は武器の実用面や組成を重視した痕跡がなく、その被葬者も前方後円墳に葬られたような大首長層であること、逆に甲冑副葬Ⅰ型の被葬者は中・小首長であり、武器の組成や実用的な組み合わせを重視した副葬を読み取った。特に、武器の副葬量が多い甲冑副葬Ⅱ型やⅢ型については儀礼性の強いことを指摘した。

本節では、このことを別の視点から確認し、論拠の補完としたい。別の視点とは武器が副葬される被葬者の性別である。ただし、被葬者のわかる事例は少ないため、本節の対象は甲冑副葬古墳にのみ留まらず、武器の副葬と、その副葬対象者が明らかな1棺1埋納古墳を中心として調べてみたい。また、古墳時代後期については横穴式石室や横穴墓に伴う追葬や片付けなどが生じるので副葬品が特定できる良好な人骨が少ないため、主として古墳時代前期～中期を対象とする。

武器と被葬者の性別に関しては、古墳における副葬品（物的遺物＝考古学）と被葬者（古人骨＝形質人類学）との研究それぞれが個別に行われてきた傾向が強く、副葬品と被葬者との関連性を追求する研究は少ないと言っても大過ない。僅かに女性被葬者の性格や、親族構成などのやや特殊なテーマに強い関心が払われてきたが（今井（堯）1982、辻村1983、辻村1988、川西・辻村1992）、この中にあって清新章は古人骨から埋葬の原理を追求する過程で副葬品と性別との関連性について触れ、鏃、甲冑、鍬形石が男性に、車輪石、石釧釧の一部が女性に属

する可能性が高いことを明らかにし、女性に武器を副葬する事例は確認できるものの、副葬武器の種類は主に刀剣であるなどの事実から、女性首長と軍事への関わりは比較的に少なかったとしている（清家 1996、1998、2004、2010）。

本節ではこれらの研究を参照した上で、古墳時代前期～中期における武器と被葬者との関係性について整理しておきたい。

### （１）前期における副葬武器と被葬者の性別

古墳時代前期において 1 棺 1 埋葬を中心に武器と人骨が共伴した事例は 27 事例を確認した（表 13）。これには墳長 110m の前方後円墳である鳥取県馬山 4 号墳から、7m 程度の方墳である広島県山の神 4 号墳まで規模は様々である。しかも人骨が遺存しやすい箱式石棺からの検出例が多いので事例の偏在性は否めない。また香川県快天山古墳事例のように歯冠から復元した性別など、やや確実性が不定なものも含んでいる。

それを承知の上で前期古墳から検出した古人骨と武器との相関関係をみてみると、28 人の被葬者に対して男性 21 例（75%）、女性 5 例（18%）、性別不明 2 例（7%）と圧倒的に武器が副葬された事例は男性が多い。より詳細にみてみると、成人、又は壮年の男性が全体の 57 パーセント（16 例）も占めており、武器が副葬された幼・小児は存在せず、兵庫県横田山古墳（□12m：箱式石棺）から出土した剣 1 と共伴した人骨が若年男性と鑑定されているのが最も若い事例である。武器副葬の老人も確認できなかった。

また、6 例の前方後円墳（馬山 4 号墳、快天山古墳、向野田古墳、黄金塚古墳、三池平古墳、養久山 1 号墳）で人骨が検出された被葬者 7 人のうち 3 名（43%）が女性と前方後円墳に葬られた武器副葬被葬者に限定すれば女性の割合が高くなる。もちろん、人骨が検出されたのはごく限られた例であり、箱式石棺など主体となる埋葬施設ではない場合もあるが、前期における円墳や方墳の被葬者 19 例（男性 17 例（89%）・女性 2 例（11%））と比較すると、武器副葬の女性割合が約 4 倍の開きが認められるので、前方後円墳に埋葬された武器を副葬する被葬者は女性が多いと評価することができるだろう。

出土武器と被葬者との関係では、比較的多量に武器が副葬されている大阪府黄金山古墳（●85m：粘土郭）で刀 2、剣 4、槍 3、鏃 110、衝角付冑 1、短甲 1 を副葬しているのが壮年男性、静岡県三池平古墳（●68m：竪穴式石室）の刀 10、剣 16、鏃 100 を副葬しているのが成人男性、京都府作山 1 号墳（○28m：箱式石棺）の剣 12 を副葬しているのが熟年男性であるなど、多数の武器を副葬しているのは男性が目立ち、方形板革綴甲冑が出土している島根県中山 B -

表 13 武器を副葬する古墳被葬者一覧

					武器													非武器											
					短兵		長兵	遠距離専用武器		防具					馬具			その他	装身具					農工具					
遺跡名	性別	墳形	遺構	時期	刀	剣	矛・ヤリ	鏃	靱、胡録	衝角付	盾庇付	短甲	挂甲・小礼甲	付属具	盾	鬚	鏡板	金具類		鏡	腕輪類	玉類	天冠	耳環	櫛	農工具	針	刀子	その他
馬山4号墳	♀成人	●110m	第1箱式棺(第2主体)	前期	1															1		8							
快天山古墳	♀成人？	●100m	2号石棺	前期		1														1		2				2		2	
快天山古墳	♂成人？	●100m	3号石棺	前期		1		1												1									
向野田古墳	♀成年	●86m		前期	3	4	1													3	21	314				3		78	
黄金塚古墳	♂壮年	●85m	東柳	前期	2	4	3	110		1		1			1	1			3	3	1	1047				17		7	6
三池平古墳	♂成人	●68m		前期	10	16		100											2	2	2	251				23		2	6
権現山51号墳	♂熟年	■43m		前期		1	5	13												5		220				15			4
養久山1号墳	♂成年	●31m	第3主体	前期		1																8				1			
潜塚古墳	♂壮年	○30m	1号棺	前期		1														1		2				3		2	
作山1号墳	♂熟年	○28m		前期		12														1	2	537				4		4	
小山3号墳	♂熟年→♂熟年	○25m	第1主体	前期				2																		2			
小山3号墳	♂熟年	○25m	第2主体	前期		2																				4			
中山B-1号墳	♂成年	■22m	第1主体	前期		2						1														1		1	
稲葉山9号墳	♂成年2体	□20m	2号石棺	前期	1	1													1										
石槌山1号墳	♂壮年	○20m	第1主体	前期				14												1		49				2		1	
左坂B2号墳	♂壮年	○18m	第一主体部	前期		2		6																		3			
秋葉山2号墳	♀壮年	○16m	第2主体主体	前期	1																					1			
殿山9号墳	♂壮年	□13m	第2主体	前期		1		1																		1			
稲童11号墳	成年	○12m	第2主体	前期																								1	
横田山古墳	♂若年	□12m		前期		1																				2			
南方裏山古墳	♂壮年	○10m		前期		2														1						2		1	1
田多地引谷7号墳	♂壮年	10m	第3主体	前期		1																				1			1
田多地引谷10号墳	♂壮年	10m	第2主体	前期				1																					
草場第二遺跡19号方形墓	♂成年	□9m	51号石棺墓	前期		1		2																					
山の神4号墳	♀壮年	□7m	第1主体	前期				1																					
稲童13号墳	成年	□？5m～	1号	前期			1																						
浅川3号墳	♂壮年			前期		1													1	1									

					武具														非武具										
					短兵		長兵	遠距離専用武器		防具					馬具				その他	装身具					農工具				
遺跡名	性別	墳形	遺構	時期	刀	剣	矛・やり	鏃	鞍、胡録	衝角付	盾庇付	短甲	挂甲・小札甲	付属具	盾	轡	鏡板	金具類		鏡	腕輪類	玉類	天冠	耳環	櫛	農工具	針	刀子	その他
三ツ城古墳	♀	●91m	一号	中期	2															1		14							
三ツ城古墳	♂壮年	●91m	二号	中期	1																1	2			4			1	
古郡家1号墳	♂壮年	●90m	3号棺	中期		5		25				1								1					4	4	1	3	
老司古墳	♂成人2	●78m	2号石室	中期		3		61				1				1				1									
老司古墳	♀熟年	●78m	3号石室	中期	8	7		104				1			1	2		1		9		135		2	1	28	15	1	
谷口古墳	♂成年	●77m	前方部石棺	中期		2																2							
丸隈山古墳	♂熟年	●75m	横穴式石室	中期	2	1		7											2	2		80							
月の輪古墳	♂老年	○61m	中央主体	中期	3	13	1	133				1		1						1		18				12		4	
月の輪古墳	♀老年？	○61m	南主体	中期	4	3		1												1	1	1400			8		22	1	1
毘売塚古墳	壮年	●50m		中期		2	1	3				1										3							
大谷古墳	♀熟年	●32m	第1主体	中期		1														1		34				1		1	
甲山古墳	♀熟年	○30m？	1号館	中期	2																								
七夕池古墳	♀熟年	○29m		中期	1															1	2	3320			10			2	2
井手ノ上古墳	♂熟年	○26m	2号主体	中期	2	2	1	25				1														8		2	
井手ノ上古墳	♂成年	○26m	3号主体	中期	1		1	1														1				1			1
恵解山2号墳	♂老年	○25m	西石棺	中期	2	8		98		1		1		1								16			2	11		1	4
塚山古墳	♂壮年	□24m		中期	1	2	2	267		1		1		1					2						1	22		4	24
柿坪中山3号墳	♂成年	□23m		中期		1		2																					
長瀬高浜1号墳	♀熟年	○22m		中期	1			1																	1			1	
柴垣丸山1号墳	♂壮年	○21m		中期	2	1						1																1	
柿坪中山4号墳	♂塾年	○20m	第1主体	中期		1		1																		2			1
屋喜山9号墳	♂若年	○20m		中期		1																29			11			1	
下大谷1号墳	♂若年	□20m	第Ⅱ主体	中期				2																		2			1
常旗邸1号墳	若年	○20m		中期	1			21																				1	2
猪の窪1号墳	♂若年(初葬)	○18m	(棺内遺物)	中期		5																3						1	1
猪の窪1号墳	♂熟年(追葬)	○18m	(棺外遺物)	中期		1		15																		5			
立山山24号墳	♂熟年	○18m		中期		1		1												1	1	294						1	
鶴ヶ峯山頂古墳	♂熟年	○16m	1号石棺	中期			1																			2		1	
別府遺跡1号方形周溝墓	♂熟年	□15m		中期			1	3																	1	4			



					武器														非武器										
					短兵		長兵	遠距離専用武器		防具					馬具				その他	装身具					農工具				
遺跡名	性別	墳形	遺構	時期	刀	剣	矛・ヤリ	鐵	藪、胡録	衝角付	肩庇付	短甲	挂甲・小札甲	付属具	盾	轡	鏡板	金具類		鏡	腕輪類	玉類	天冠	耳環	櫛	農工具	針	刀子	その他
前山古墳	♂老人	○15m		中期		2														1						6			1
新宮東山2号墳	♂壮年	□14m	1号棺	中期	1	1		9													1								4
八幡山古墳	♂壮年	○14m		中期	2			35		1		1										3			2				
七曲山1号墳	♂壮～熟年、♂壮年	○13m		中期	1		1																			4	2		
立山山23号墳	♂成年	○13m		中期		2		10								3		2	2	1		1027						4	
池の上1号墳	♂熟年	□13m	第3主体部	中期																									
池の上1号墳	♂成年	□13m	第4主体部	中期				4																		2	1		
沼6号墳	♂成人、熟年	□13m		中期		1																							
土師の里8号墳	♂若年	□12m	第1主体	中期	1	1																							
大橋3号墳	♂熟年	□12m～？	1号石棺	中期		1		3																		2	1		
立山山28号墳	♀成年	○11m		中期		1																						1	
古川平原5号墳	♂壮年	○10m		中期				1														1					1		1
下張坪56号墳	♂熟年	○9m	1号	中期		1		5																					
長瀬高浜28号墳	成年	○9m		中期		1																							
西の浦古墳	♂熟年	○8m		中期		1																				6	1	1	
立山山25号墳	♂成年	○9m		中期	2	1		18												1								1	
柿原古墳群	♂成年	8m	G区C-1号	中期		1																			1			1	
近内古墳	♂壮年	○5m		中期	1	3		4																		6	2	3	
稲重15号墳	♂成年	○4m		中期		1						1										1				1			
柿原古墳群	♂熟年	4m	I区C-52号	中期				1																				1	
古寺Ⅱ7号墳	♂成年	●		中期				16																					
池の上4号墳	♀成人→♀成年	□		中期		1		25																				1	
横岡古墳Ⅶ号墳	♂熟年			中期	3	2																							
番出1号石棺	♂若年又は成年			中期	1	1														1					1				
古寺遺跡	♀若年		D11号	中期																									
岡3号墳	♂壮年			中期				2																				1	
法花堂2号墳	成人			中期	2			39		1		1												1	4	2	1	1	
三味塚古墳	♂成年	●85m		後期	1	1							1							2		2272	1	1	1	50	3	3	
藤ノ木古墳	♀青年、♂壮年	○48m		後期	5	1		809	2				1			2	2	2	4		10,000	1	2						4
経僧塚古墳	♂若年(東人骨)	○45m		後期	3			89	1							2	2	13				49	2				1	1	

					武器													非武器											
					短兵		長兵	遠距離専用武器		防具					馬具			その他	装身具					農工具					
遺跡名	性別	墳形	遺構	時期	刀	剣	矛・やり	鐵	鍬、胡録	衝角付	盾庇付	短甲	挂甲・小札甲	付属具	盾	轡	鏡板	金具類		鏡	腕輪類	玉類	天冠	耳環	櫛	農工具	針	刀子	その他
経僧塚古墳	♀老年 (西人骨)	○45m		後期	2			105																2					
桑57号墳	♀成年	○32m		後期	2	2															3		510	1	2		2	4	9
七廻り鏡塚古墳	♂熟年	○30m?		後期	1		1	88	1							1				2					2				4
稲童21号墳	成年	○22m		後期	2	2	3	80			1	2		○	2	1	2			1		37				3			
多田山2号墳	成年～熟年	○20m	第1主体	後期	1																							1	
島古墳群5号墳	♂熟年	○16m		後期	1																								
上島古墳	♂成人?	○15m		後期	1															1	1	184		1			3	4	7
兵家11号墳	♂壮年?		西主体部	後期				5														60						1	

1号墳（□22m：箱式石棺）の被葬者も成年男性である。

## （2）中期における副葬武器と被葬者の性別

古墳時代中期において1棺1埋葬を中心に武器と人骨が共伴した事例は51古墳、被葬者60名を確認した。墳長規模は91mの前方後円墳である広島県三ツ城古墳から4mの円墳である福岡県稲堂15号墳まで、主体部構造も粘土郭、竪穴系横口石室、箱式石棺、円筒棺、石蓋土抗墓まで様々な形態を含んでいる。

60例の男女比では男性45例（75%）、女性11例（18%）、性別不明4例（7%）と前期における男女比とほぼ同数であった。細かくみると幼・小児の事例は認められなかったものの、若年男性5例（8%）、成人・壮年男性22例（37%）、熟年男性15例（25%）、老人男性3例（5%）、若年女性1例（2%）、熟年女性5例（8%）、老人女性1例（2%）、その他5例（8%）となる。これらの結果から武器を副葬している被葬者としては圧倒的に成人～熟年男性の割合が高いことがわかる。

51古墳のうち、前方後円墳は9基であるが、これに限定して男女比をみると男性7例、女性3例で女性の割合は30%、前期の前方後円墳に武器が副葬された女性の割合（43%）より低くなってはいるが、中期全体の女性比率（18%）と比較すれば、依然として前方後円墳に副葬武器が伴う場合は女性の割合は高い事実が指摘できる。

表13の集成では、武器の大量埋納古墳と人骨との関係性は明らかではなく、近畿地方の大型墳墓においても人骨出土事例が皆無のため資料の不完全性は否めない。しかし与えられた資

料の中では比較的武器が多数出土した福岡県老司古墳 3 号石室（●78m：竪穴系横口式石槨）では刀 8、剣 7、鏃 104、短甲、馬具が副葬されていたのが熟年女性、岡山県月の輪古墳中央主体（○61m：粘土郭）では刀 3、剣 13、槍 1、鏃 133、短甲 1 が副葬されていたのは老人男性の可能性が、徳島県恵解山 2 号墳西石棺（○25m：箱式石棺）では刀 2、剣 8、鏃 98、衝角付冑 1、短甲 1 が副葬されたのが老人男性、奈良県塚山古墳（□24m：箱式石棺）では刀 1、剣 2、槍 2、鏃 267、衝角付冑 1、短甲 1 が副葬されていたのは壮年男性、と武器が比較的多数副葬されている事例は男性が多いのは前期の状況と同一である。

中期において甲冑と共伴した人骨は 12 例を数えるが、その男女比としては男性 9、女性 1、性別不明 2 で、中でも壮年～熟年男性が 8 例も占めている。一方、馬具と人骨が共伴した事例は 3 例（福岡県老司古墳 2 号石室、同 3 号石室、福岡県立山山 23 号墳）で北部九州のみと偏りが激しいが、男女比では男性 3、女性 1 であり、甲冑と同様に馬具も男性へ副葬される割合が高いと推察される。上記で述べた以外の古墳から出土する武器のあり方としては概ね刀剣や鏃の若干数量が被葬者に副葬されるものが大部分であるが、全体的に武器は男性に副葬されていることが多いと評価することができるだろう。

## 2. 副葬行為の性別と階層性

甲冑副葬の差異としてⅠ～Ⅲ型の分類を行い、その特徴を検討していくことで、甲冑副葬の量や時期の変遷は、葬送儀礼に現れた社会階層の儀礼性の強弱にその原因が求められた。別の視点から武器が副葬された被葬者の性別をみてみたところ、古墳の形態や規模に応じて、武器を副葬する被葬者像はそれぞれが異なっていることを再確認した。

すなわち、前期～中期において武器が副葬された被葬者では男性が 75%、女性が 18%と男性の割合が高く、中でも成年・壮年男性が過半数を占めている。しかし一方で武器が副葬されていた女性も存在し、特に前方後円墳の被葬者に限定すると前期で約 43%、中期でも 30%と、武器が副葬されていた女性の比率が高くなる。武器を副葬した古墳のうち、前方後円墳を除いた円墳・方墳などの平均では男性 77%、女性 14%であるから、武器が副葬された前方後円墳の被葬者は女性比率が 3～4 倍程度は高率なのである。対照的に中期の小型円墳などで武器を副葬した事例は成人男性が多く、特に甲冑類や馬具などについては前期～後期を通じてほぼ全て壮年～熟年男性に副葬が限られているという特質が指摘できよう。

上記の分析結果から、甲冑副葬Ⅱ型の多い前期～中期の前方後円墳に埋葬された集団と、中期の甲冑副葬Ⅰ型で占められる小型円墳などに埋葬された集団においては、葬送儀礼や副葬行

為に伴う社会的規範（原理）がやや異なっていたと推察することができる。前方後円墳や大型墳墓に埋葬された大首長クラスの階層では、武器と被葬者性別との関連性が希薄であって、男性も女性も武器を副葬しており、大多数は武器以外にも鏡や玉類、腕輪、農工具など豊富な威信財を副葬するような葬送儀礼を行っている。ここにおいて武器は、主として男性に帰属する実用的な攻撃具というよりも、多数の威信財の一つとしての儀礼的な価値で取り扱われているのである。そういった儀礼的な一環の中にあって、甲冑副葬Ⅰ型における武器については、実用品という価値よりは何らかの象徴的な意味が付与されていた可能性が高い。

これに対し、小型の円・方墳などに埋葬された小首長クラスの甲冑Ⅱ型の副葬においては、武器が副葬されたのは壮～塾年の男性が圧倒的に多く、武器と性別との関連性が濃厚であり、かつ葬送儀礼上においても実用的なセット関係で取り扱われているために、実際の武器を使用する使用価値としての前提や、その使用方法を熟知した被葬者像が想定できるのである。

#### 第4節 甲冑副葬各型式の社会的背景

第2節において甲冑副葬の各型式を検討した結果、その大部分を占める甲冑副葬Ⅰ型の被葬者像としては、地域の中・小首長層である蓋然性が高く、その個人使用で納まる範囲の副葬武器量は中・小首長が扱うことのできた武器の状況を間接的にせよ表現していることが想定できた。

甲冑副葬Ⅱ型については、前期の大規模古墳や大古墳群の一角を占める古墳である場合が多く、その被葬者の背後にはより大規模な権力的存在が想定できる。このことは甲冑副葬Ⅲ型の位置づけを考えると更に明確化してくる。Ⅲ型の大量埋納古墳の代表である野中古墳や西墓山古墳は、古市古墳群という当時、最も大規模な古墳が築造された地域、政治的な中枢に位置する古墳群の中の、階層的な序列の中に組み込まれた古墳の一つであり、甲冑副葬Ⅲ型については、ほぼ近畿中枢部にのみ存在する非常に希少な例である。

このことから、先ず、甲冑副葬Ⅲ型のような大量の武器埋納や保有は、当時の政治的中枢に関連したもの、具体的な被葬者像はヤマト政権などの政治的最上位階層が比定され、甲冑副葬Ⅱ型は中央・地方の大首長クラスが、甲冑副葬Ⅰ型は全国各地の中・小首長に多い類型であることがわかる。したがって、これらの類型の差異は田中が想定したような武装単位の差異（平時か戦時か、備蓄かなど）といった区分ではなく、むしろ当時の社会階層や階層別の儀礼度の

強弱の具象化であると考えられる。

他面、甲冑副葬類型は時代によって変遷があり、それぞれの類型においても特徴的な変化が認められることは、古墳時代の軍事組織を間接的にせよ考察する上では極めて重要である。

古墳時代前期においては、大規模な古墳を中心に甲冑副葬Ⅱ型が認めることができたため、多量の武器を独占した大首長層を中心として軍事的な集団が組織された状況が推察できるところである。しかしながら、前期では甲冑の副葬がほぼ中央・地方の大中首長クラスに限られること、かつ鉄製武器の企画化が未発達なことなどから、その軍事組織は部分的や限定的なものであって、決して広域で統一的な全国的組織ではなかったと想定される。

いずれにせよ、甲冑副葬Ⅱ型の武器副葬は儀礼的な様相が強いため、軍事組織像の詳細な検討が極めて困難であることは、考古学という学問の限界であり、このことは研究方法の項で述べたとおりである。

古墳時代中期に至ると、近畿地方においてのみ甲冑副葬Ⅲ型という、希少事例が集中し、間接的ながら、大規模な武器の生産や保管の管理体制が整備される状況が伺われる。特に、中期後半の野中古墳や黒姫山古墳などにおいては、武器の埋納において甲冑とそれに帰属すると思われる刀剣や鉄鏃の抽出も可能であることから、単なる儀礼的行為に留まらず、武器の実用的な取り扱いの社会的な反映も想定が可能であろう。

したがって、当時の政治的中枢部（ヤマト政権）においては、武器の生産や管理の組織化が進展すると同時に、武器の実用的な価値の上昇という社会的背景の事実から、実際の軍事的な組織構造においても、一定の整備が進行したものと考えられるのである。

他方、広域な軍事組織のあり方を中央と地方との関連性でみるならば、古墳時代中期は甲冑副葬Ⅰ型が急増し、甲冑の副葬が在地の中・小首長層に拡大していった社会的な様相が確認できる。また、副葬の内容についても、武器のみに特化した副葬や、武器のセット的な配列に変化するなど、副葬品の取り扱いについて、より実用的な面が重視される傾向が認められる。これらの現象から、古墳時代中期～後期初頭には、在地の中・小首長を核とする、広範な武装階層が成立していったと積極的に評価したい。

以上、第6章では甲冑副葬古墳における甲冑の数量や組成を取り上げて、その社会的な背景を検討することで、古墳時代の武装集団について考察を試みた。序章で述べたように、副葬（廃棄ステージ）における資料からは直接的に軍事組織などを検討することが困難であるため、その社会の背景に存在する現象の間接的な分析を行うことで軍事組織の研究が可能になる。そこで次章では、この副葬行為の社会的な価値を複眼的に解明するために、別の視点として副葬品

の配列方法や武器の価値的な問題を取り上げ、その社会的背景の現象を解明したい。

## 第7章 副葬品配列の分析からみた武器の社会的価値





## 第7章 副葬品配列の分析からみた武器の社会的価値

### はじめに

本論文の主な研究指針は、武器の“廃棄”のステージ（副葬段階）における遺構の検討から、“モノ”よりも“コト”の現象を介して社会的な背景を復元することで、具体的な戦闘像や武装集団（軍事組織）の解明を行うものである。

この一環として、第6章では甲冑副葬古墳における甲冑の数量や組成を取り上げて、その社会的な背景を検討し、武器副葬から当時の首長層が取り扱った甲冑の状況を間接的にせよ想定してきた。

本章では、第6章で検討してきた副葬武器の社会的な背景を解明する方向性をもう一步進め、甲冑以外の武器全般を視野に含め、埋葬主体への配列方法から検討することで、埋葬時に付与された武器の価値的な背景を考察し、この問題をより深く掘り下げたい。

### 第1節 古墳主体部における武器配置の分類

古墳の副葬遺物の出土状況（配列状況）は、それ自体が考古学の研究対象の一つである。小林行雄が副葬品配列に棺内と棺外の区別を行って以来（小林（行雄）1941）、用田政晴や今尾文昭が遺物の配列をより詳細に検討し（用田1980、今尾1984）、近年では被葬者の身体部位までも視野に含めた研究が行われている（光本2001）。また研究が細分化する過程では、鈴木一有や宇垣匡雅など、武器の副葬や配列に特化した研究（鈴木（一有）1996、宇垣1997）も試みられた。これら副葬品配列の検討は主として前期古墳を対象とするものが多く、前期から中期へ、更に中期から後期へといった変化の過程やプロセスが解明されていないといった問題点も指摘されている（岸本2010）。

ここでは、今尾文昭の研究を参照して、副葬品の配置行為は、埋葬施設の構築作業にともなう各段階に行われる、という見解に従う（今尾1984）。そして古墳の築造とそれぞれの段階で行われる儀礼行為との関係性を念頭に置きつつ、副葬段階を次のように区分する。

#### 墳丘構築

- ↓ 墓擴の掘下、棺・槨の設置
- ↓ 棺への被葬者の埋葬（A 段階）
- ↓ 棺の空白地への副葬（B 段階）
- ↓ 棺の蓋、粘土被覆や槨の構築など（C 段階）
- 天井石の架構、墓擴の埋設など

それぞれの段階において実施された儀礼痕跡から把握される武器の出土状況は、棺内の人体周辺配列（A 段階＝A 型配置）、人体周辺以外の棺内配列（B 段階＝B 型配置）、棺外配列（C 段階＝C 型配置）と大きく分けることができる。この他に、武器に関しては人体を埋葬しない遺物専用の埋納が知られているので、これは D 型として区別する。また、A～D のそれぞれの型式については便宜上、次のように細分しておく（図 13）。

- A1 型 武器（刀剣や鏃など）を棺内の人体周辺に副えるもの
- A2 型 A 型のうち、特に甲冑、刀剣、弓矢など異なる機能を持つ 3 種類以上の武器を少数ずつ人体周囲に配置するもの
- B1 型 棺内の人体周辺以外の空白地に少量の武器を配置するもの
- B2 型 棺内の空白地に武器を集積するもの
- C1 型 棺外に少数の武器を副葬するもの
- C2 型 棺外に武器を集積するもの
- C3 型 棺外に武器を集積するもののうち、特に棺を囲むように配置するもの
- D1 型 刀剣、甲冑、弓矢などを木箱などに収納するもの
- D2 型 大量の武器を石室などに集積するもの

## 第 2 節 武器配列における具体事例の分析

前節において区分した出土状況を具体的な古墳に即してみていく。なお、研究の性格上、対象とする古墳は出土状況が原位置を保つ未盗掘の竪穴系主体部の代表的なものとなることを断わっておく。また、第 6 章で検討した結果では、古墳の規模や、その被葬者階層によって葬送儀礼が異なっている様相が想定できたため、便宜的に墳長 100m 以上の古墳を a クラス、50～99m クラスの古墳を b クラス、49m 以下の墳墓を c クラスとして分けてみていく。

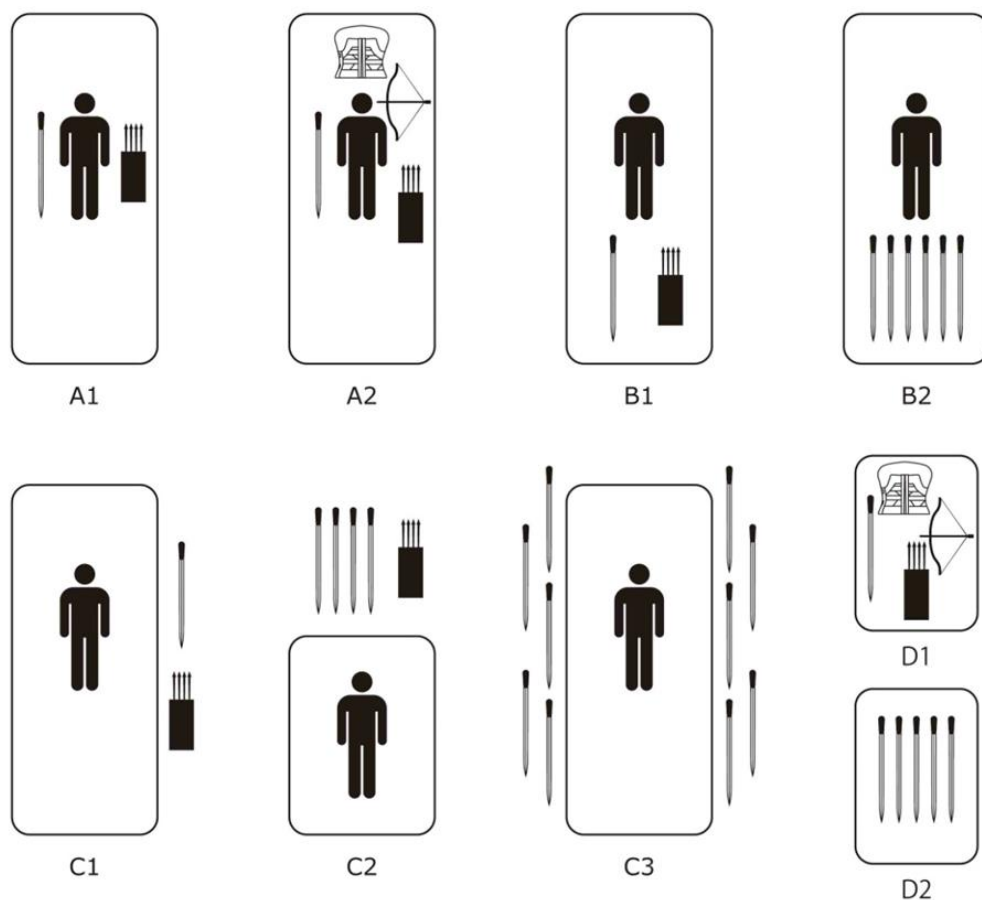


図 13 武器配置の型式 模式図

### 1. 前期（集成 1～4 期）・近畿地方

近畿地方における a クラス（100m以上）の古式古墳で配列状況が明らかなものとしては奈良県黒塚古墳（1 期：●130m）が挙げられる。黒塚古墳の主体部は長 8.3mの竪穴式石室（割竹形木棺）で、棺内の人体推定付近や南小口から少量の武器が出土しているが（A1 型＋B1 型）、大部分の副葬品（鏡 33、鉄刀・鉄剣又は鉄槍 25、鉄鏃 170）は棺の周囲（棺外）に並べられていた（C3 型）。大阪府紫金山古墳（3 期：●100m）でも鉄製刀剣 35、鉄鏃 153 が竪穴石室の壁四周の板石の上に配され、石室壁の上部外縁においても鉄製刀剣 37 が出土しているなど、主に棺を取り囲むように武器が配置されている（C3 型）。滋賀県安土瓢箪山古墳（3 期：●162 m）、三重県石山古墳（4 期：●120m）など近畿周辺の a クラスの前方後円墳においても、未盗掘の主体部における武器配置は棺を取り囲むような C3 型配置が主である。

前期の近畿地方では b クラス古墳（50～99m）においても C3 型の武器配置が顕著な事例が

多い。京都府園部垣内古墳（3期：●82m）では人体推定付近には玉類と鏡のみが置かれ、鉄製刀剣や鉄槍、短甲といった武器はほぼ全て棺外（槨内）から棺を取り囲むようにして出土している（C3型）。また京都府寺戸大塚古墳（2期：●95m）、京都府長法寺南原古墳（3期：■62m）、京都府瓦谷1号墳（3期：●51m）もC3型の武器配置であり、大阪府庭島塚古墳（3期：■56m）のように木棺を囲んだ武器が弓矢（靫1、鉄鏃135、銅鏃56）中心という独特なC3型配置も存在している。一方、bクラス古墳の中には武器を集積した施設も知られており、奈良県新沢千塚500号墳（3期：●62m）の後円部副槨からは鉄製刀剣27、鉄槍・矛2、鉄鏃27、短甲1などの武器が集中的に出土している（D2型）。

cクラスの古墳（49m以下）では奈良県鴨都波1号墳（3期：□20m）のように鉄製刀剣、靫、矢、短甲など主要な武器が棺の周囲を囲むもの（C3型）もあるが、京都府作り山1号墳（3期：○36m）では組合式石棺の副室に農工具と鉄剣12を納めている（B2型）。これより更に小規模な奈良県池ノ内古墳群（4期○13～16m）、野山古墳群菖蒲谷支群3号墳（4期：区画墓）などでは、主として数点の鉄製刀剣や鉄・銅鏃が棺内から出土している（A1型）。

## 2. 前期（集成1～4期）・東日本

東日本（前期）aクラス（100m～）の群馬県前橋天神山古墳（3期：●129m）は正式報告が未刊なものの、武器の大半は粘土槨と木棺内の両端から出土している状況である（C3型＋B1型？）。静岡県松林山古墳（3期：●116m）の竪穴式石室では中央部（人体想定位置）に武器はなく、それ以外の棺内に密集した鉄製刀剣や靫（と鏃）が置かれ（B2型）、石室の壁面に沿って矛も出土している（C1型）。福島県会津大塚山古墳（3期：●114m）では南棺の推定頭位付近に鏃、人体付近に鉄刀があり（A1型）、それ以外の棺内において鉄製刀剣や鉄・銅鏃が配置されている（B1型）。

bクラス古墳（50～99m）の武器配置は概ね棺内中心で、武器数も比較的少ないが、それぞれの配置方法はややまとまりを欠く感じである。栃木県山王寺大枡塚古墳（4期：■96m）は棺内の人体推定地付近に鉄製刀剣や靫、銅鏃などが出土し（A1型）、神奈川県加瀬白山古墳（4期：●87m）の後円部木炭槨では人体推定位置を取り囲むように鉄製刀剣が出土し棺の西端で鉄鏃が数点出土している（A1＋B1型）。福島県大安場1号墳（4期：■83m）も棺内から鉄刀1、鉄剣1、鉄槍1が出土し（A1型）、栃木県駒形大塚古墳（2期：■64m）、長野県弘法山古墳（1期：■63m）、静岡県赤門上古墳（3期：●57m）、千葉県新皇塚古墳（4期：■60m）、千葉県神門3号墳（1期：●57m）においても棺内から武器が出土している。

c クラス古墳(49m以下)では岐阜県龍門寺1号墳(3期:○17m)においては短甲1、鉄刀2、鉄鏃49は棺外から検出されている(C3型)。しかし東日本cクラス古墳の大部分は棺内配置(A・B型)が中心であり、静岡県新豊院山2号墳(1期:●34m)、群馬県朝倉2号墳(4期:○23m)、群馬県成瀬向山1号墳(3期:□20m)などで少量の武器が棺内に副葬されている。その中であって茨城県岩瀬狐塚古墳(3期:■44m)では粘土槨内の人体推定地点の周辺から鉄製刀剣2、銅鏃4、短甲1といった武器・武具類が出土している(A2型)。

### 3. 前期(集成1~4期)・西日本

西日本におけるa・bクラス(50m~)の前期古墳では近畿地方と同じくC型配置が多いが、それ以外の配置状況も存在する。福岡県一貴山銚子塚古墳(4期:●103m)後円部の主体部においては鏡と鉄製刀剣が石室に沿って取り囲むように並べてあり、石室壁の上面でも石室を取り囲むように鉄製刀剣や鉄鏃が入念に配置されている(C3型)。これに対し日本海側の鳥取県馬山4号墳(3期:●100m)では7つの主体部のうち武器が出土しているのは竪穴石室と第一箱式棺のみで、いずれも棺外に若干の武器が配置されている(C1型)。

bクラス古墳でも熊本県向野田古墳(4期:●86m)、大分県免ヶ平古墳(2期:●69m)では刀剣などによって棺を取り囲んだ配置であり、これに対し宮崎県西都原72号墳(3期:●70m)の前方部主体部からは鉄剣と鉄鏃が(A1型か)、後円部の粘土槨・木棺内には鉄製刀剣4がやや密集して置かれている(B1型か)。

cクラス古墳(49m以下)では様々な武器配置がみられ、岡山県新庄天神山古墳(2期:○40m)や福岡県若八幡宮古墳(3期:●48m)では武器が棺外を取り囲んでいるが(C3型)、島根県奥才14号墳(3期:○18m)第1主体では武器が箱式石棺に接した白色粘土に被覆され(C1型)、岡山県用木1号墳(3期:○31m)では鉄製刀剣4(A1型)と銅鏃37が棺内に密集して出土し(B2型)、兵庫県養久山1号墳(1期:●32m)第1主体(竪穴式石室)の副葬武器は鉄剣2(A1型)、山口県国森古墳(2期:□30m)では木棺内から鉄剣1、鉄槍1、鉄鏃39、棺外から矛1が検出された(A1+C1型)。

この他では高塚墳ではないものの、南九州地方の弥生末~古墳時代にかけて土壙墓に鉄剣や鉄鏃を数点ほど副葬する遺跡(宮崎県川床遺跡、鹿児島県成川遺跡)があり特筆される。

### 4. 中期(集成5~7期)・近畿地方

中期の近畿地方におけるaクラス古墳(100m以上)で内部主体が明らかな事例は少ない。

京都府久津川車塚古墳（5期：●180m）は明治27年に発掘された際の見取図と大正4年に梅原末治が調査した際の図面に若干の相違点があるが、棺内に鏡や玉類などの装飾品が多く、棺外には武器・武具、石製模造品が配置されていた状況は共通している（C2型か）。大阪府百舌鳥大塚山古墳（5期：●168m）は戦後の開発（破壊）によって跡形も無く消滅したが、前方部に4つ、後円部に4つの粘土槨が存在したことが知られている。1号槨と7号槨が人体埋納で、残りの主体部6基は遺物専用の埋納施設であったと考えられ、例えば4号槨の遺物のみで鉄製刀剣2群200、鉄矛1、鉄鏃6群、手斧16、鉄製の鋸、斧、鎌、鉗という膨大な量であった（D2型）。京都府恵解山古墳（5期：●124m）でも、後円部の石室は未調査であるが、前方部より大量の武器を埋納した遺物専用施設が検出され（D2型）、大阪府黒姫山古墳（7期：●144m）でも前方部石室内では短甲24、衝角付冑11、眉庇付冑13、甲冑付属品、鉄製刀剣24、鉄矛9、鉄鏃56などの大量の武器・武具類が納められていた（D2型）。大型古墳の陪塚的な存在で墳長そのものはb・cクラスとなるが、大阪府七観古墳（6期：○50m）、大阪府アリ山古墳（6期：□45m）、大阪府野中古墳（7期：□28m）、大阪府西墓山古墳（6期：□20m）でも遺物専用埋納施設（D2型）と考えられる遺構が報告されている。

中期のbクラス古墳（50～99m）では大阪府大塚古墳（5期○56m）、大阪府御獅子塚古墳（6期：●55m）などにおいて棺内外の各段階（A・B・C型）から大量の武器が出土している。大阪府東車塚古墳（5期：■65m）、兵庫県水堂古墳（5期：●60m）、大阪府風吹山古墳（5期：○56m）などでは棺内に武器が置かれ（A1型、B1型）、大阪府唐櫃山古墳（7期：●53m）では主体部そのものは盗掘を受けていたが、棺外の石室内に甲冑類を主とする武具類などが配置されていた（C2型）。

近畿地方ではcクラス古墳（49m以下）においても大阪府鞍塚古墳（6期：○39m）、大阪府珠金塚古墳（6期：□27m）などで棺内外の各段階（A・B・C型）から武器が大量に出土している。奈良県塚山古墳（7期：□24m）では人骨の左右両側に剣2、刀子1があり（A1型）、組合式石棺に付属する副室には甲冑1組、鉄鏃、鉄製工具などが密集して置かれ（B2型）、棺外からも鉄製刀剣や鉄槍が認められている（C3型）。滋賀県新開1号墳（6期：○36m）、大阪府西小山古墳（6期：○40m）では棺内より武器が出土しているが（A・B型）、特に、奈良県野山古墳群などの墳丘規模が10m～20m程度の小型古墳においては大部分が刀剣や鏃など少量の武器が棺内から出土している。京都府上人ヶ平18号墳（7期：□8m）、大阪府亀井古墳2号主体部（7期：□7m）、滋賀県宇佐山13号墳（5期：箱式石棺）、大阪府土師の里遺跡（5～7期：埴輪棺）など、その他の低墳丘墓や土器棺、土擴墓においても武器が出土する場合は棺内

外から少量の武器が出土する程度である。

## 5. 中期（集成 5～7 期）・東日本

東日本における a・b クラス（50m～）においては棺内へ武器が配置される事例が多い。東京都野毛大塚山古墳（5 期：○82m）の第一主体部（粘土槨・割竹形木棺）では人体推定地点の両脇に鉄製刀剣を配し（A1 型）、頭位側の北東端には鉄製刀剣、足元側には甲冑と鉄製刀剣、鉄槍、鉄鏃が密集して置かれていた（B2）。群馬県赤堀茶臼山古墳（6 期：●59m）の木炭槨第 1 号では人体推定位置の両脇に鉄製刀剣を、棺の東（頭位）側に鉄製刀剣、鉄鏃、短甲を配置する（B1 型）。石川県和田山 5 号墳（7 期：●56m）は後円部に 2 基の粘土槨があり、A 槨の棺内では人体推定位置の両脇部分に鉄製刀剣（A2）、頭部付近に鏡と甲冑 1 組、足下から鉄鏃や鉄製農工具が出土しており（B1 型）、B 槨棺内西側には短甲と鉄製刀剣が密集して置かれていた（B2 型）。千葉県八重原 1 号墳（7 期：○55m）、福井県天神山 7 号墳（6 期：○52m）でも棺内に武器が配置されている（A、B 型）。

c クラス古墳（49m以下）においても主に棺内へ武器を配置しているが、特に人体の周囲に甲冑、鉄製刀剣、鉄鏃など様々な用途の武器を少数ずつ配置した A2 型の武器配列が非常に多い。栃木県佐野八幡山古墳（5 期：○46m）の竪穴式石室では人骨両脇の位置より鉄刀が出土、歯牙側（頭位側）である石室北東端に短甲と衝角付冑が、反対の南西（足元側）には鉄鏃が置かれていた（A2 型）。静岡県安久路 2 号墳（5 期：○26m）、安久路 3 号墳（5 期：○27m）、富山県谷地 12 号墳（5 期：○30m）、石川県茶臼山 9 号墳（5 期：○16m）第 2 主体部、神奈川県朝光寺原 1 号墳（7 期：○37m）、三重県小谷 13 号墳（7 期：○20m）第 1 主体部なども同様の A2 型配置で人体（推定地点）周辺から鉄製刀剣、鉄鏃、甲冑といった複数種類の武器が出土している。甲冑を伴わないものの、棺内から刀剣や鏃などの武器が出土しているものでは栃木県桑 57 号墳（7 期：○32m）、福井県龍ヶ岡古墳（5 期：○30m）、愛知県松ヶ洞 8 号墳 2 号棺（7 期：○16m）、などが挙げられる（A1 型）。

棺の内外から武器が出土している事例も存在する。埼玉県東耕地 3 号墳（7 期：○25m）の副葬品としては棺内より短甲 1、鉄刀 1、鉄剣 1 をコの字状に配し（A1 型）、棺外からは鉄矛 1、鉄鏃 10 が出土している（C3 型）。三重県八重田 16 号墳（7 期：□16m）は木棺直葬で棺内から鉄刀 2、鉄槍 2、鉄鏃 36 が出土し（A1 型）、主体部から 50 cm 東に離れた棺外から短甲 1 が出土している（C3 型）。静岡県千人塚古墳（7 期：○49m）の第 2 主体部では中央部の空白地（人体推定位置）を鉄製刀剣と甲冑が囲み（A1 型）、棺外から鉄鏃や鉄剣が出土している

(C3 型)。また、近畿周辺に位置する三重県わき塚 1 号墳 (5 期 : □23m) では土坑内 (木箱) に武器をはじめとした遺物埋納施設が報告されている (D1 型)。

高塚古墳以外の土壙墓から武器が出土する事例もあり、長野県八幡原遺跡土壙墓 1 (7 期、木棺墓か) は推定人体の左側に鉄製農工具のほか鉄鏃 7 が (A1 型)、土壙墓 2 (7 期、木棺墓か) からは白玉、U 字鍬、鉄斧、鉋と共に鉄製直刀 1 が出土している (A1 型)。

## 6. 中期 (集成 5～7 期) ・西日本

西日本における a・b クラス (50m～) の古墳のうち兵庫県雲部車塚古墳 (6 期 : ●140m) は明治年間に発掘されたが、比較的正確な記録が残っている。それを参照すると竪穴式石室内に長持形石棺があり、石室内に甲冑を始めとする武器を置き、壁面には刀剣が掛けられていたとされる。壁に刀剣を掛けるのは類例がなく特異な棺外配置 (C 型) である。

兵庫県茶すり山古墳 (5 期 : ○91m) 第 1 主体部は木棺で棺内が 4 つに区画され、人体が推定される中央区画には鉄製刀剣がコの字に囲まれ、更にその上に革盾をかぶせていた痕跡が残っていた (A1 型)。岡山県月の輪古墳 (5 期 : ○60m) は 3 つの粘土槨があり、中央主体は人体推定位置の両脇に鉄製刀剣が配置され (A1 型)、その足元より西側には鉄製刀剣や鉄鏃、鉄製工具類が密集しており (B2 型)、頭位の東方には短甲が置かれていた。棺外からは槍も出土している (C1 型)。

当該期の東日本と同じく、西日本でも棺内の人体周辺から 3 種類以上の武器が少数ずつ出土した事例があり、b クラスの京都府私市丸山古墳 (6 期 : ○71m) 第 1 主体部では鉄剣 2、胡籜 1、鉄鏃 38、甲冑 1 組の武器が出土 (A2 型)、京都府産土山古墳 (6 期 : ○50m) でも棺内に甲冑や鉄鏃が配置されているが、副葬された武器は個人が使用できる程度の少量ずつである (A2+C1 型)。

c クラスの古墳 (49m 以下) においても人体周辺に異なる機能をもつ 3 種類以上の武器を少数ずつ配置した副葬 (A2 型) が多数みられる。福岡県井出ノ上古墳 (5 期 : ○25m) の第 2 主体部は箱式石棺で熟年男性の人骨が良好に残り、左肩から肘付近に鉄刀 1、鉄剣 1、鉄矛 1、鉄鏃 9、左側足元に鉄刀 1、右肩から肘にかけて鉄剣 1、鉄鏃 16、下腿部分に短甲 1 が副葬されていた (A2 型)。この他にも岡山県勝負砂古墳 (7 期 : ●42m)、兵庫県小野大塚古墳 (6 期 : ○45m)、福岡県花簗 1 号墳 (6 期 : ○)、福岡県稲童 21 号墳 (7 期 : ○22m)、福岡県琵琶隈古墳 (6 期 : ○25m) 広島県亀山古墳 (7 期 ○40m)、岡山県正崎 2 号墳 (7 期 : ○20m)、香川県大井七つ塚 4 号墳 (7 期 : ○20m)、兵庫県奥山大塚古墳 (7 期 : ○15m)、宮崎県六野原



6号墳（7期：○12m）、香川県川上古墳（7期：○22m）、兵庫県法花堂2号墳（7期：墳丘不明）などの主体部においても同様なA2型の武器配列が確認できる。

棺内外から武器が出土する事例としては広島県城ノ下1号墳（7期：○21m）、愛媛県猪の窪古墳（5期：○18m）などが存在するが、兵庫県沖田11号墳（6期：□18m）第2主体では1墓擴に2つの箱式石棺が設けられており、南棺内の身体部分両脇には鉄製刀剣、左側には鉄鏃が配置され（A1型）、更に石棺外では解かれた（解体した状態で）短甲が出土する（C3型）という珍しい出土状況である。

高塚古墳以外の事例として宮崎県六野原地下式10号墓（7期：地下式横穴墓）や宮崎県島内地下式横穴墓群（7～8期：地下式横穴墓）などで多数の武器が出土している。

## 7. 後期（集成8～10期）・近畿地方

近畿地方における後期古墳は墳丘規模が小さく横穴式石室が多いことから、未盗掘で武器の配列状況が明らかな具体例は極端に少なくなる。未盗掘古墳のうち奈良県藤ノ木古墳（10期：○48m）は両袖式の横穴式石室にある家形石棺棺内における2体の被葬者周辺に玉、耳飾、飾金具、鏡、金銅製冠、金銅製履などの装身具が副葬され、武器としては鉄製大刀5、短剣1がそれぞれ被葬者の脇から出土している（A1型）。棺外石室内からは挂甲、鉄鏃、馬具などが出土しているが後世の攪乱を受けていて整然としていない。滋賀県鴨稻荷山古墳（9期：●60m）の主体部も横穴式石室で、玄室には家形石棺が安置されていた。石棺内は明治35年に発掘され、大正12年に再調査されている。棺内には装飾品と武器、棺外には土器と馬具があったとされ、発掘当時の見取図によれば棺の内部両側に沿って（人体の両脇に）大刀が各1あり（A1型）、棺南側に冠、北側に沓がみられた。また中央部には柄頭を東方にした剣が斜めに横たえられ、あたかも身体に佩いたかの様な位置にあったという。大阪府富木車塚古墳（9期：●48m）では6つの主体部が検出され、それぞれから鉄刀、鉄鏃数点が出土している（A1型）。

横穴式石室導入前の初期群集墳における武器の配列状況としては滋賀県黒田長山古墳群、奈良県後出古墳群などがあり、10～20m程度の円墳からA1型やA2型など様々な武器配置がみられ、奈良県野山古墳群においても8期の10～20m程度の方・円墳が検出されているが棺内への武器配置が多い（A1型）。

## 8. 後期（集成8～10期）・東日本

東日本におけるa・bクラス（50m～）の古墳では茨城県三昧塚古墳（8期：●85m）におい

て主体部の調査が行われている。主体部は箱式石棺で頭蓋骨周辺からは金銅冠、垂飾付耳環が検出され、手玉と貝釧を装着した状況で出土している。冠の左側には鏡、人体の両脇に鉄製大刀 2、鉄剣 1 が添えられ、足元方向では鏡、櫛、刀子、鉄鏃、甲冑が置かれており（A2 型）、これとは別に棺外には戟 1 の出土（C3 型）と遺物専用の埋納施設が存在する。この施設からは刀 1、刀子 1、鉄鏃 160、短甲 1、挂甲 1、衝角付冑 1、鉄斧 1、馬具、砥石が出土している（D2 型）。千葉県姉崎山王山古墳（9 期：●69m）では鏡や金冠などの装身具を除いて環頭大刀と木装大刀、胡籙 2 具に納められた鉄鏃が出土した（A1 型）。

後期における東日本 c クラス（49m 以下）古墳では中期から引き続き A2 型の副葬が散見できる。静岡県団子塚 9 号（9 期：○17m）、栃木県七廻鏡塚古墳（9 期：○28m）、静岡県石之形古墳（8 期：○27m）、千葉県経僧塚古墳（10 期：○24m）、茨城県舟塚山 8 号墳（9 期：○8m）などでも人体周辺から 3 種類以上の異なった機能を有する武器を少量ずつ副葬した A2 型、及びそれに類する武器配置が行われている。

初期の群集墳である群馬県多田山古墳群では棺内から少量の武器が出土した事例が認められ（A1 型）、同じく愛知県愛野向山古墳群（8 期）においても明確な高い盛土を持たない 10m 以下の小円墳（箱式木棺）などから武器が出土する場合は棺内から鉄製刀剣や鏃などが数本程度である（A1 型）。

## 9. 後期（集成 8～10 期）・西日本

西日本でも 50m 以上の後期古墳で竪穴系内部主体が残存した事例は少ない。宮崎県西都原古墳 202 号（9 期：●50m）の後円部主体は 1912 年の今西龍による調査記録があり、それによれば「屍体ヲ安置シ其頭ヲ西北ニ向ケテ、枕頭ニハ平瓮、玉類ヲ置キ、土ヲ寄スルコト二尺ニシテ其ノ頭部ノ左ニ直刀及嚴瓮ヲ、其ノ腰部ノ左ニ嚴瓮ヲ置キ脚部ハ土ヲ寄スルコト一尺餘ニシテ直刀、鉄鏃等ヲ置キシモノ、如シ」とあるから棺内から玉類、須恵器、鉄刀、鉄鏃が出土していることがわかる（A1 型か）。

西日本では 50m 以下でも竪穴系の内部主体を持つ古墳は少ないが、兵庫県西山・奈良山古墳群の事例では西山 1 号墳（10 期：○10m）の第 1 主体部埋葬施設 1（木棺直葬）の棺内から須恵器、土玉、鉄鏃 2 が出土しているように少量の武器を棺内に副葬した事例が認められる（A1 型）。その中で西山 6 号墳（9～10 期：●35m）の後円部埋葬施設 6（木棺直葬）は棺内の東小口部で金銅冠を着装した頭蓋骨が出土し、人体左脇に鉄刀、右脇に刀子が置かれていた。棺中央右脇には鉄矛が、足下の西小口では鉄鏃一括が置かれ弓飾金具も出土している（A2 型）。

### 第3節 武器副葬の時代的特徴と変遷

武器の副葬状況の代表事例をみてきた。それぞれの状況は千差万別であるが、各時代、各墳丘ランクで、それぞれ特徴的な配列があることも指摘することができる。ここではそれぞれ時代性を特徴付けるような配列状況をまとめておく。

#### 1. 古墳時代前期の副葬品配列の特徴

前期における大型古墳（a クラス）を特徴づけるのは棺（槨）を武器で取り囲む配列である。棺内には鏡や玉類など個人的な装身具があり、小口部分などに武器がみられることもあるが、武器配列の中心は C3 型とした棺外での棺を取り囲むような武器配置といえる（図 14）。また A・B・C の各段階で副葬（葬送儀礼）行為を行っているという厚葬性も特徴的であろう。

この C3 型を主とする配列様式は集成 1 期（京都府椿井大塚山古墳）まで遡ることが可能と考えられ、特に近畿地方においては前期の大型古墳（a・b クラス）のほぼ全て、更に c クラスにおいても存在することから（奈良県鴨都波 1 号墳）、かなり普遍的な武器配置であったと評価することができるだろう。

また近畿以外でも大・中型の古墳（a・b クラス）を中心として広い分布を示し、東は静岡（三平池古墳）から岐阜（龍門寺 1 号墳）あたりのラインまで、西は瀬戸内沿岸を中心に福岡（一貴山銚子塚古墳）・大分（免ヶ平古墳）まで明確な分布領域を示す。これらの事実から C3 型の痕跡を残すような、棺外で武器を取り囲む配列を伴う共通的な葬送儀礼が、前期の大・中の首長たちによって実施されていたと考えて大過ない。

一方、前期における小型の古墳（c クラス）においては木棺や箱式石棺などの棺内に数本程度の刀剣や鉄鏃を副葬するものが多く（A1 型）、弥生時代からの伝統的な武器副葬が継承されている可能性が高い。第 3 章で確認したように、弥生時代後・終末期の墳墓への副葬品では一部の例外を除いて全国的に刀や鉄・銅鏃を数本程度副葬するに過ぎず、古墳時代前期における小古墳の中には古墳のあり方や地域的特徴（一墳丘での多数の主体部、伝統的な箱式石棺など）からみて、弥生時代後・終末期からの連続性が明らかなものが認められるためである。

静岡以東や山陰、南九州などの大・中型（a・b クラス）の墳墓については、そういった少数の武器を棺内に副葬するという伝統的な影響と、政治的中枢（近畿地方）で多くみられる同種多量の武器を棺外に配置する、という影響との強弱によって、少数を棺外に配置したり（鳥取県馬山 4 号墳）、棺内に中程度の武器を副葬する（栃木県山王寺大枡塚古墳）などといった、や

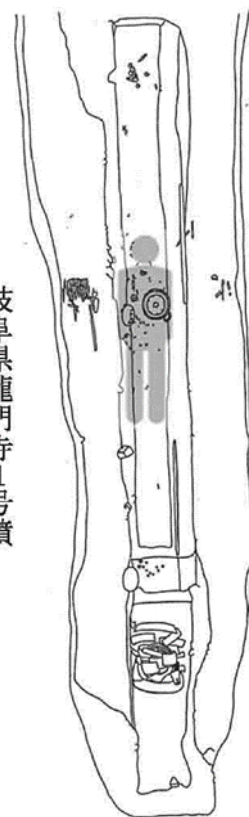
大阪府紫金山古墳



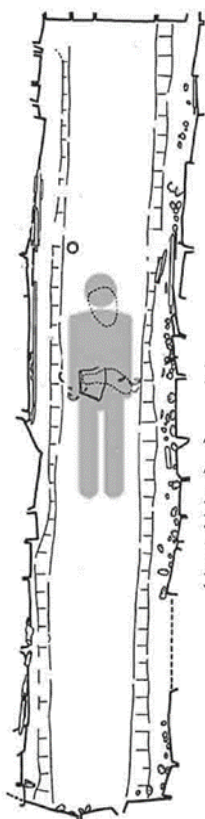
滋賀県安土瓢箪山古墳



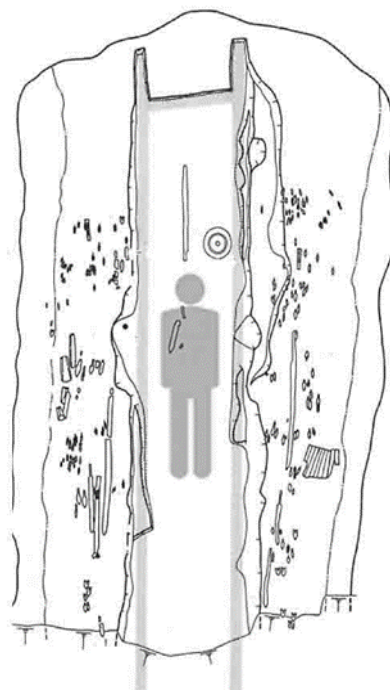
岐阜県龍門寺1号墳



大分県免ヶ平古墳



大阪府庭島塚古墳



静岡県三池平古墳

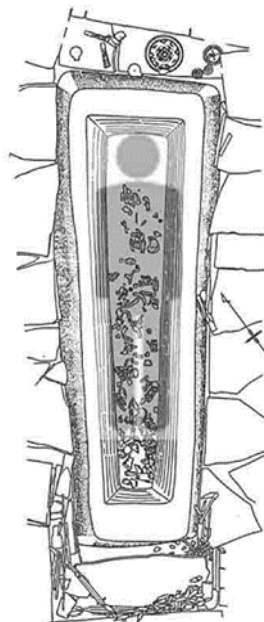


図 14 C3型武器配置 (スケール不同：人型アイコン 1.5m)

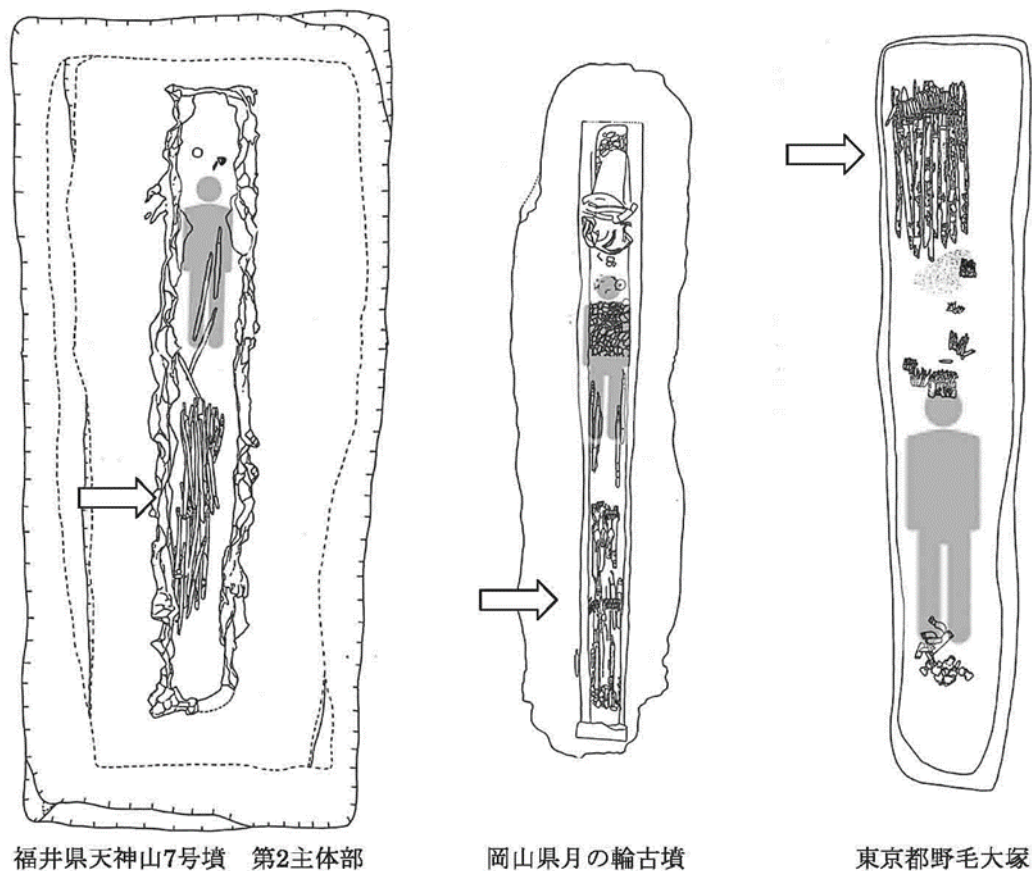


図 15 武器の集積（B2 型武器配置）（スケール不同：人型アイコン 1.5m）

や均一性を欠く配置を生じせしめていると考えられる。

## 2. 古墳時代中期の副葬品配列の特徴

近畿における a・b クラス前期古墳の武器配置の特徴は、棺外に武器を並べることで、遺骸を外部から密封・遮断しようという試みであったと考えられるが、中期の大・中型の古墳では武器の同種多量性への偏好さが濃厚となる。武器の大量埋納施設は奈良県南西部の一角において早くに発達し（メスリ山古墳、新沢千塚 500 号墳、池ノ奥 1～3 号墳）、中期（集成 5 期）以降に普遍化していく。

その発展過程を模式化すれば以下の通りである。まず古式古墳（集成 1 期）の奈良県黒塚古墳では石室南小口部分に鉄鏃、小礼、鉄製農工具などの副葬品を置き、京都府寺戸大塚古墳においても 14 振程度の刀剣が木棺内の一ヶ所に上下相重なって出土するなど、武器を集積する行為は古墳発生期から認めることができる。

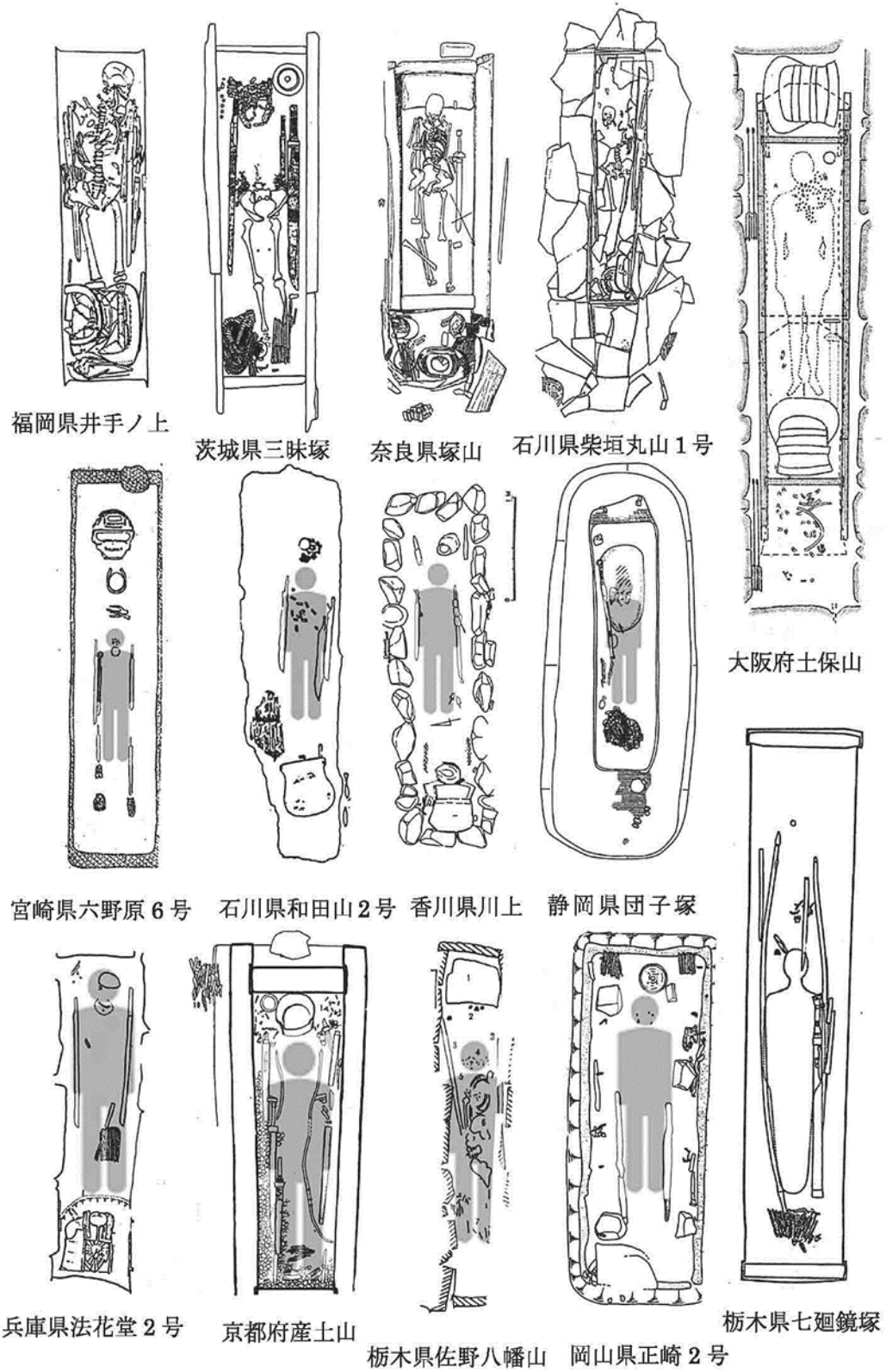


図 16 A2型武器配置 (スケール不同：人型アイコン 1.5m)

その後、集成 3 期の京都府作り山 1 号墳では石棺の副室部分に農工具と鉄剣 12 がまとまって納められ、集成 5 期の兵庫県茶すり山古墳では棺内を 4 つに区画し、甲冑や武器類、盾などが区画毎に整然と並べられるなど、武器を集積する行為は急激に進む。先述したように奈良県南西部の一角で武器を大量に納める遺物埋納施設が出現しているのも集成 3～4 期である。

集成 5 期の大阪府百舌鳥大塚山古墳では前方後円墳内の 6 か所に遺物埋納専用施設が認められており、大王クラスの一古墳から出土する武器量は膨大な数にのぼる。6 期以降では大阪府七観古墳のように古墳外に付属する遺物埋納施設の陪塚に大量の武器が納められるようになり、武器以外に鉄製農工具（大阪府西墓山古墳西列）、鉄鋌（奈良県大和 6 号墳）、滑石製模造品（大阪府カトンボ山古墳）などといった器種分化に基づく大量埋納が明瞭になる。これら副葬品を膨大に消費するような古墳祭祀は、主として近畿地方の大首長によって執行されるが、同地域では中クラスの古墳でも棺外に武器をまとめて置くような武器配置がみられるなど（大阪府唐櫃山古墳、和歌山県大谷古墳）、特に数的極大化への偏好が顕著である。

このような武器を大量に副葬するという時代的特徴は地方の大・中首長（a・b クラスの古墳を築いた地方首長）たちへも影響を与えている。例えば東京都野毛大塚古墳では刀剣や鉄鏃などが群ごとにまとめて置かれており、福井県天神山 7 号墳では棺内に 2 列で密集した刀剣類が置かれていた。また岡山県月の輪古墳の棺内では同様に鉄製刀剣や鉄鏃、工具類を密集して置いているのである（図 15）。

中期の大首長たちによる武器副葬の意識は前期から中期にかけて“遺骸の遮断”から“大量に埋納する”へと変化しているが、一方、中・小型の古墳ではやや異なる儀礼体系の下に武器が副葬されていたと評価することができる。

中・小首長たちの副葬行為は、前期の“刀剣や鏃を数本”といった弥生後・終末期に類似していた行為から、中期には甲冑、鉄製刀剣、弓矢といった 3 種類以上の用途の異なる少数の武器を人体周辺に副葬するものが全国各地に多数みられるようになる（A2 型）。典型的な事例は福岡県井出ノ上古墳のように、熟年男性の足元（又は頭位）に甲冑を置き、人体の左右脇には鉄製刀剣、鉄鏃などを配置する（図 16）。棺内外の区別や甲冑の有無を問わなければ奈良県塚山古墳や埼玉県東耕地 3 号墳などにおいても人体周辺に少数ずつの武器を副葬しており、副葬品における武器の比率は高い。

### 3. 古墳時代後期の副葬品配列の特徴

甲冑、刀剣、弓矢（鏃）といった 3 種類以上の武器を少数ずつ配置する副葬（A2 型）は後期



初頭（集成 8 期）まで多く、東国では 80m クラスの茨城県三昧塚古墳においてもみることができる。また、三昧塚では別の一領具足を納めたような小型の遺物埋納施設が付属しているが、中・小古墳における豊富な種類の武器の扱い方は実際の個人的装具（武装）を彷彿とさせるものがある。

また後期においては、a・b クラスの近畿地方における大首長間において流行した武器副葬の大量化は急速に影を潜め、武器の副葬も少数の飾大刀や挂甲などに限定されて

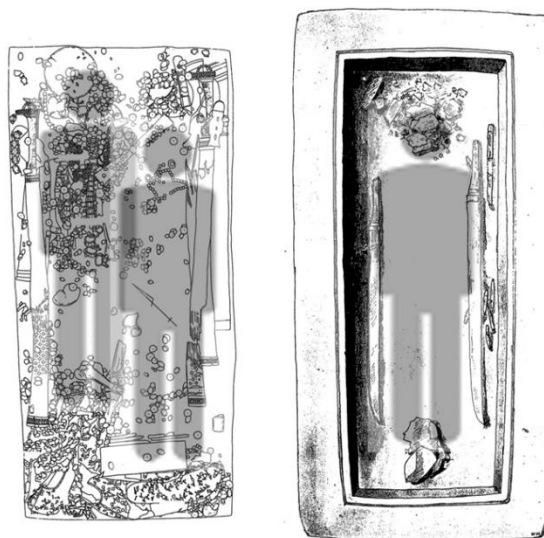


図 17 藤ノ木古墳・鴨稻荷古墳の副葬状況

くる。奈良県藤ノ木古墳や滋賀県鴨稻荷古墳の棺内（人体周辺）からは冠や玉類、沓などの装飾品と共に飾大刀や刀子が副葬されているが、そのような副葬品組成から判断する限り、後期古墳の棺内に副葬されている武器は、実際に生前の被葬者が装着していた個人的属性の高い遺物であったと推定できるものである（図 17）。

#### 第 4 節 副葬品配列の方法からみた武器の価値

序章において武器は本義的には対人殺傷のための利器である、と記した。しかし武器へ託された思考や機能は利器としての機能以外に様々な価値的側面が存在する。モノにおける様々な価値の追及といった問題は、これまでも主に経済学分野で研究されてきた。例えば、カール・マルクスはモノには使用価値と交換価値があるとするが、使用価値とはモノの功利的な面であり、交換価値とはいわゆる商品としての価値側面である（マルクス 1969）。こういった古典的なモノの価値観に対し、ジャン・ボードリヤールは、モースの贈与論（モース 2009）やバタイユの消尽論（バタイユ 1973）を駆使して、モノには使用価値や交換価値には還元できない象徴価値や記号的な意味があると説いた（ボードリヤール 1980、1981）。

マルクスやボードリヤールは現代社会を解明する方法論としてモノの価値を追求したのであるが、考古資料である過去の武器、特に古墳という墳墓から出土する武器の意味を考察する際においても極めて有意義な手法であろう。そこで、ボードリヤールなどの研究を参照に、道具



の価値的側面を以下の4つのカテゴリーに区分し、前節で検討した古墳出土武器の意義について検討を加える。

第1のカテゴリー	使用価値	対人殺傷（利器）としての武器
第2のカテゴリー	交換価値	交換や配布される経済的価値としての武器
第3のカテゴリー	象徴	象徴的な贈与や祭祀行為における武器
第4のカテゴリー	記号	身分の表象を意味する武器

4つのカテゴリーのうち、第1のカテゴリーである使用価値とは、容器としての土器、穂摘具としての石包丁、というモノの利器としての価値、あらゆる道具の第一義的なカテゴリーである。武器・武具に関して言えば“殺傷のための道具”や“殺傷から身を守るための道具”という価値がこれに該当する。

第2のカテゴリーである交換価値は主に近代経済学において検討されてきた物的側面である。しかし前近代的な社会においても“クラ”交易として知られるトロブリアン諸島の首飾りや腕輪などのように、交換価値として重要視された道具が存在しており（マリノフスキー1967）、地理的な長距離移動が証明される考古資料（鉄製甲冑など）についても贈与交換に伴う交換価値が付与された可能性は高い。

その他では、ボードリヤールの研究で知られるように使用価値や交換価値には還元できない象徴的な価値（第3カテゴリー）や記号的な価値（第4カテゴリー）を有するモノも存在する。例えば、刃部が鈍化した利器や意図的に折り曲げられた刀剣などについては第三の道具として何らかの象徴的・記号的な意味が付与されていたと推定できるだろう。

象徴（Symbol）と記号（Sign）とは互いに関連する内容もあるが、全く異なる概念でもある。象徴とはある種の観念や概念をより具体的な事物や形によって表現したものを指し、記号とは何かを指し示すことを通じて意味を発生させるものを指す、すなわち象徴とは多義的な意味を内包するイメージを具象化したもの、記号とは言語やマークなど、ある種の規範によって意味が付与されたものである。武器の場合でいえば攻撃力、防御力というような観念を特定の武器によって表現した場合は本質的に象徴的価値であり、武器を所持することで身分階級など規範的コードを表象した場合は本質的には記号的価値である。

さて、古墳時代の武器の副葬を検討した結果、古墳へ副葬された武器の扱いは、時代性や古墳の規模などによって異なっている状況が把握できた。このことは、様々な集団性や葬送儀礼体系の中において、武器がどのように認識されていたかの思考的な背景を表現していると考えられる。

前期における大型古墳を特徴付ける武器副葬は、主に棺外に武器を取り囲むように配列するものである。そこには武器を用いて古墳被葬者であるかつての首長を密封し、僻邪などの遮断的な効果が期待されていたと想定できる。その思考体系の中で重視された価値は武器の持つ武威や武徳、すなわち第3カテゴリーの象徴性である。

広瀬和雄は前方後円墳の機能として、首長の遺骸を保護・密封・僻邪することによって聖性を保持・顕彰し、共同体を守護するイデオロギー的な装置を想定するが（広瀬 2008）、刀剣など同種多量の武器によって遺骸を外部から遮断しようという思考回路や儀礼体系は、前期における各地の大首長クラスを通じた共通認識として、広範な地域で受け入れられていたと考えられる（註 23）。

中期の大・中型の古墳においては、大量の武器を埋納することが時代の特徴性として指摘できるが、中期の大量埋納における副葬品の意義としては、量的な誇示や消費などを通じての象徴性、といった価値が古墳祭祀の中で見出されていたといえるだろう（註 24）。

横穴式石室の導入、須恵器の副葬などといった葬送観念の大変革（註 25）を経た後期における大王クラスの墳墓（奈良県藤ノ木古墳、滋賀県鴨稲荷古墳）では、実際に身に着けていたと考えられる金銅製冠や沓、豪華な玉類などと共に飾大刀が出土している。この段階における武器は飾大刀で代表されるように装飾性が強くなり、むしろ実用品としての武器よりも被葬者の身分を表象する記号的な意味が重視されていたと考えられる。

上記のような武器の価値観の変遷、“象徴性・儀礼性を帯びた武器副葬”から“記号としての個人的属性を帯びた武器副葬”といった遷り変わりは主として近畿地方を中心とする大型古墳（大王、大首長クラス）のものである。一方、多くの小古墳（50m以下、特に20m以下の古墳や低墳丘墓）においては、それらとはやや異なる価値体系が想定できる。

前期の小古墳にみられる副葬品の多くは刀剣や鉄鏃が数本程度に過ぎず、むしろ弥生後・終末期に全国規模でみられた風習に類似している。特定少数の武器については象徴的な意味合いも考えることができるが、玉類などと共に棺内の人体付近から出土することが多く、むしろ実際に生前に使用していたものを副葬した蓋然性が高いであろう。

中期においても、大・中型の古墳被葬者が武器の大量埋納、特に同種多量の埋納に価値を見出しているのに対し、中・小型の古墳では、A2型の武器配列でみられるような、甲冑・刀剣・弓矢など多種類の武器・武具をそれぞれ少数ずつ人体周辺に副葬する事例が多い。被葬者周辺に並べられたこれらの武器は、身を守るための防具（甲冑）、接近戦用武器（刀剣）、遠距離戦用武器（弓矢）など利用価値としてはそれぞれが異なる用途を持つものであり、それらが揃う

ことによって戦闘機能を満たすことができるもの、かつ実際に装備した場合の1セット程度の武器量であったと評価することができる。

通常、日本列島における弥生～古墳時代の墳墓や祭祀遺跡などから出土する遺物の特徴としては、弥生時代の儀仗化した青銅武器（銅矛・銅剣）は同種大量に埋納され（石橋 2011）、古墳時代の一般的な祭祀遺跡では手づくね土器、ミニチュア模造品などが同種大量に埋納される（東日本埋蔵文化財研究会 1993）。更に本章でみたように古墳時代前期の大型墳墓においては鏡、剣、腕輪など特定威信財のみが選別されて集中的に埋納されているなど、象徴的な価値を有する祭祀遺物の用い方としては、特定の器種を集中的に選別し、その上で大量に集積するような行為が行われるのが一般的である。古墳時代前期～中期において大・中型の古墳で発達した武器の大量埋納化への変遷も、儀礼的用具の象徴的価値への傾斜過程として位置づけることができるであろう。

それら同種大量に埋納された儀礼的な道具と比較すれば、中期の中・小型古墳では甲冑、刀剣、弓矢（鏃）といった用途の異なる武装体系を満たし、それぞれ個人が使用可能な少量ずつを被葬者周辺に並べる配列様式を抽出することができた。その葬送儀礼の際に武器に付与された価値体系としては第1、もしくは第4のカテゴリー、すなわち利器としての総合的な武装体系や、生前に武備を専らとした身分の記号性としての武装であった可能性が高いであろう。

古墳から出土する武器については、仮器化した奈良県メスリ山古墳の鉄弓・鉄矢の外に意図的に利用価値を喪失させた折れ曲げた鉄器（門田 2006）など、非実用性を前提としたものも確かに存在している。しかし古墳出土武器の大部分は刃部の鋭利さや耐久性などから判断すれば実際に使用可能な形態を示しており、弥生時代の青銅武器が大型化・儀仗化といった非実用的な側面を強調していったのとは対照的である。多様な形態を示す古墳時代の鉄鏃についても時代が下るに従って全体的には先尖化、細身化、長頸化を志向し後世の実戦用鉄鏃（征矢）に類似している（松木 2001a）。このことは古墳へ副葬される鉄製農工具が小型化・ミニチュア化する（寺沢（知子） 1979）のと比較しても武器における実用的な機能的進化は目覚ましいものがある。

ただし実際に使用可能な能力（可能態）を有するとしても、現実的に実用品であったか否かは別問題であり、明確に実用品と非実用品との二項目に分類することも無意味であろう。この点について香川県王墓山古墳（9期：●46m）出土の挂甲は皮紐通しの孔以外にクサビ形の穴が認められ、穴の周囲は裏側に捲かれている。この状況から高速で飛来した鉄鏃による矢傷が想定されており、実際に使用（佩用）していた挂甲であった可能性が高い。また長野県や徳島

県下においては副葬されている馬具（轡）の欠損部分を修繕した痕跡が報告されており（松尾 1996・栗林 1999）、現実の使用、欠損、修繕のサイクルを経た道具が副葬されていることが証明されている。古墳の葬送儀礼のために副葬された道具には、明らかに実際に使用していたものも含んでいることは注意すべきであろう。

このように、武器の価値的な社会的背景から、中・小型の古墳から出土する武器においては、その配置状況や価値的背景の面から考えても、実際の武装体系の状況を反映した可能性が極めて高いと評価することができるのである。

以上、第 6 章と第 7 章では、葬送儀礼の中における武器の扱われ方を検討することで、その背後に存在する、武器の社会的な背景や価値体系といった象徴的な社会背景を考察してきた。このことを通じて、武器の副葬を介した実際の武装集団や軍事組織について検討できる可能性が指摘できたので、次章では古墳時代における武装集団の事例研究を行い、この論点をより豊かにしていきたい。

## 第8章 古墳時代における武装集団の事例的研究 ～宮崎県島内地下式横穴墓群の分析～



## 第8章 古墳時代における武装集団の事例的研究 ～宮崎県島内地下式横穴墓群の分析～

### はじめに

序章で述べたように、武器の廃棄（副葬）ステージにおいて直接的に把握されるのは、その葬送儀礼としてのあり方に過ぎない。したがって、ここから武装集団や軍事組織を直接的に復元することは方法論上での問題が存在する。

しかしながら、第6章と第7章で武器副葬の変遷や背景を検討した結果、古墳時代中期の、特に中小の古墳においては、武器の実用面を重視した副葬が行われていることを指摘することができた。したがって、古墳時代中期の副葬資料からは、実際の武装集団や軍事組織について検討する可能性が開かれるといえるであろう。

本章では上記の検討を受け、古墳時代中期の武装集団に関する個別的な事例研究を行い、具体的な武装集団の様相を把握したい。フィールドとした遺跡は武器が大量に埋納され、未盗掘での検出が多く、その被葬者像や周辺の集落との関係性が良好に把握できる宮崎県島内地下式横穴墓群を選び、詳細な武装集団のあり方を復元する。

### 第1節 島内地下式横穴墓群の概要

#### 1 島内地下式横穴墓群の研究史

島内地下式横穴墓群は宮崎県えびの市に所在する。周知のように地下式横穴墓群とは5世紀～8世紀の南九州東部に分布する古墳時代墓制の一つである。

島内地下式横穴墓群は古くから良く知られた遺跡であり、明治時代に出土したとされる遺物が東京国立博物館に所蔵され（島内1号墳）、1933年には12基が県指定されている。1933～35年にも電線塔建設などにより遺物が出土している（2号墓、A号墓）が、遺跡地は農地解放後に区画整理され県指定古墳も失われていった。その後、自然災害による陥没や崩落、畑の耕作中などに発見されたものが調査され、1990年までには島内で計12基の遺跡が知られていた。

1994～1995年には早魃による地割れ（天井崩落）が原因となり47基の墓（17～63号）の緊急調査が行われ大きな成果が得られた。また鹿児島大学の3次にわたる学術調査が実施され

(69～79号、86～91号)、人骨に関する解剖学的な調査など貴重な成果が相次いだ(竹中・大西 1998、1999、2000)。2007年には送電線建設に関わる開発の事前緊急調査によって11基の地下式横穴墓(113～115号、117～124号)が検出され、その後も1～2年間隔で陥没の通報があり、えびの市教育委員会によって継続的に緊急発掘調査が行われている。また2012年9月には主要遺物の1,029点が重要文化財に指定され、2015年には新たに首長クラスの豊富な副葬品を有する地下式横穴墓139号が検出された。

島内地下式横穴墓群の特徴的な事象としては次のようなことが挙げられる。

- ・ 武器の副葬が多い。

島内地下式横穴墓群の主要な時期は5世紀後半～6世紀初頭(集成7～8期)が比定されており、甲冑、刀剣、鏃類、少量ではあるが槍、馬具など豊富な種類の武器が出土している。

- ・ 多数の未盗掘墓の発掘調査事例がある。

現在までに130基ほどの地下式横穴墓が調査・報告され、300体以上の人骨の検出がある。また地下式横穴墓という墓制の特徴から人骨や遺物の遺存状態が極めて良好である。

- ・ 殺傷人骨の存在。

人骨の中には7例程度の殺傷人骨が報告されている。これは後述するように古墳時代における全国の殺傷人骨の約半数を占める。

## 2 島内地下式横穴墓群の編年観と墓群構造

地下式横穴墓とは地上から垂直方向に竪坑を掘り、更にそこから横穴の玄室を設け、入口の開閉は竪坑の上部や玄室の入口(羨道)で行う。墳丘を有する事例もあるが大部分が無墳丘、又は低墳丘墓であって、墳丘をみせる要素の強い高塚墳、いわゆる“古墳”の本質とはやや異なった点に重心が置かれた構造物である。

考古学研究の基礎となる分類や編年については地下式横穴墓でも早くから試みられている。日高正晴は地下式横穴の床面(平面形態)と羨道との関係に注目し、長方形床面の妻入型(第一様式)、長方形又は梯平の平入型(第二様式)、隅丸形平入型(第三様式)の3つに大別を行い、第一様式から第三様式への変遷観を提示した(日高(正晴)1958、1988)。

その後、石川恒太郎や福尾正彦、北郷泰道は屍床の有無や玄室の天井形態(家型・アーチ型、棚状施設など)、平面プラン(両袖・片袖)、閉塞部などのそれぞれの視点から編年の細分を試みているが(石川1973、福尾1980、北郷1982)、日高が分類した妻入りと平入の大別は現在



でも受け継がれており、妻入りから平入りへという編年は地下式横穴の基礎的な変遷基準の一つである。

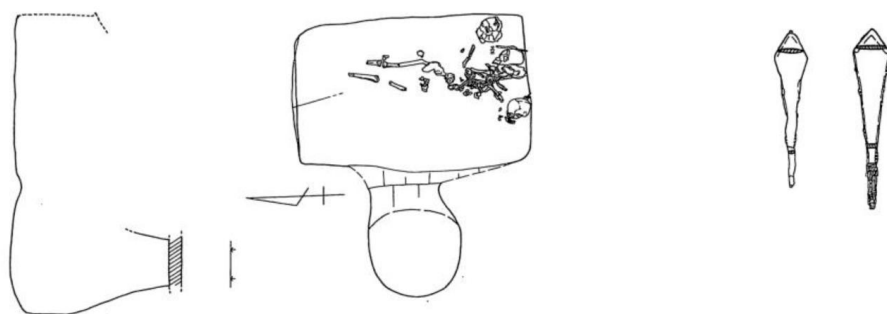
島内の地下式横穴については、そのほとんどが平入りで玄室形態は方形～円形プランを呈する。地下式横穴墓全体の中では妻入型よりも後出する横穴墓群といえるだろう。報告書（えびの市教育委員会 2001『島内地下式横穴墓群』）では中野和浩により、閉塞方法に基軸を置いて堅坑上部閉塞タイプ（Ⅰ類）と羨門閉塞タイプ（Ⅱ類）とに分類されており、更に数の多いⅡ類は閉塞材によって板（A類）、板石（B類）、火山灰塊（C類）の3タイプで細分されている。同書の報告書の中では、玄室の平面形態を「長方形から隅丸形へという変遷を仮定し」、出土遺物を交えて大まかな変遷観が提示されている。

本論ではこれらの研究史を参考とし、地下式横穴墓を玄室と羨道との関係から、A 妻入り、B 平入り、C 無羨道の3つに、閉塞タイプを、a 堅坑石材閉塞、b 堅坑土塊閉塞、c 羨門石材閉塞、d 羨門土塊閉塞の4つに（註 26）、玄室の平面形態を、1 四角形、2 隅丸形、3 不定形、4 丸形の4つに区分して、編年や分布を検討してみよう。

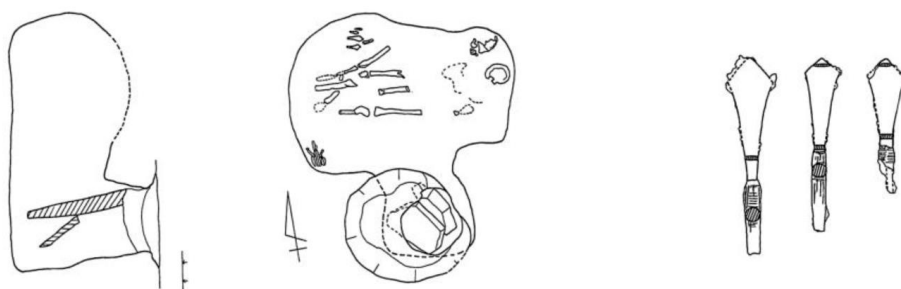
これらの組み合わせによっては、理念的に地下式横穴墓は Aa1 から Cd4 まで 48 通りの形態に分類できるのであるが、島内地下式横穴墓群の場合は、ほぼ全てが平入りであり、形式的に存在しないものもあるため、主に対象となるのは平入りの各型式、Ba1（平入・堅石・四角）、Ba2（平入・堅石・隅丸）、Ba3（平入・堅石・不定）、Ba4（平入・堅石・丸形）、Bc1（平入・羨石・四角）、Bc2（平入・羨石・隅丸）、Bc3（平入・羨石・不定）、Bc4（平入・羨石・丸形）、Bd1（平入・羨土・四角）、Bd2（平入・羨土・隅丸）、Bd3（平入・羨土・不定）、Bd4（平入・羨土・丸形）などに限られる（図 18～20）。

横穴墓そのものの型式からは、堅坑及び羨門閉塞の各タイプ共に平面形態が四角（1）→隅丸（2）→不定形（3）→丸型（4）と移行すると考えられよう。しかし一方で出土甲冑についてみれば羨門閉塞・四角（Bc1）型の 76 号墓で三角板革綴衝角付冑が、堅坑閉塞・隅丸（Ba2）型の 3 号墓からは三角板鋳留短甲が出土している他は、ほぼ同型式に属する帯金式の横矧板鋳留短甲であり、羨道石材閉塞の四角型（21 号墓）や楕円～不定形（62 号墓）の地下式横穴墓でも初葬に伴う圭頭鍬や甲冑の形式的な差異はそれほど顕著ではない。遺物からは堅坑閉塞のものがやや先行するとは思われるが、堅坑閉塞と羨門閉塞の各タイプは概ね集成 7 期のうちで納まると考えられる。

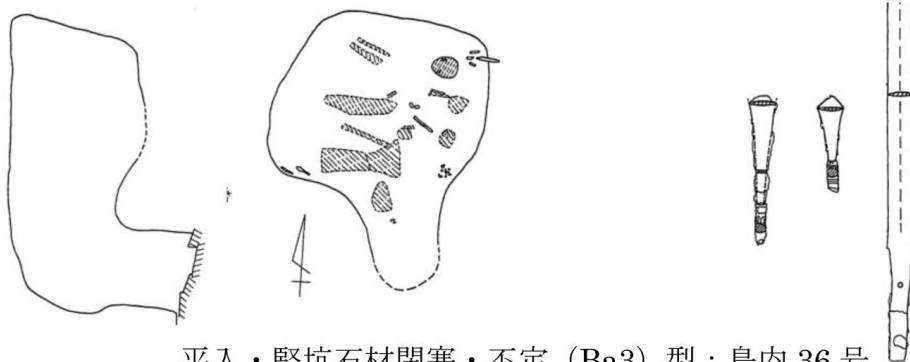
これに対し、羨門土塊閉塞の各型式（Bd1、Bd2、Bd3、Bd4）や無羨道（C 型：37 号、58 号）型、そして戦前に調査されている甲冑出土の 1 号墓、轡出土の 2 号墓などは、出土遺物な



平入・竪坑石材閉塞・四角（Ba1）型：島内 97 号



平入・竪坑石材閉塞・隅丸（Ba2）型：島内 16 号

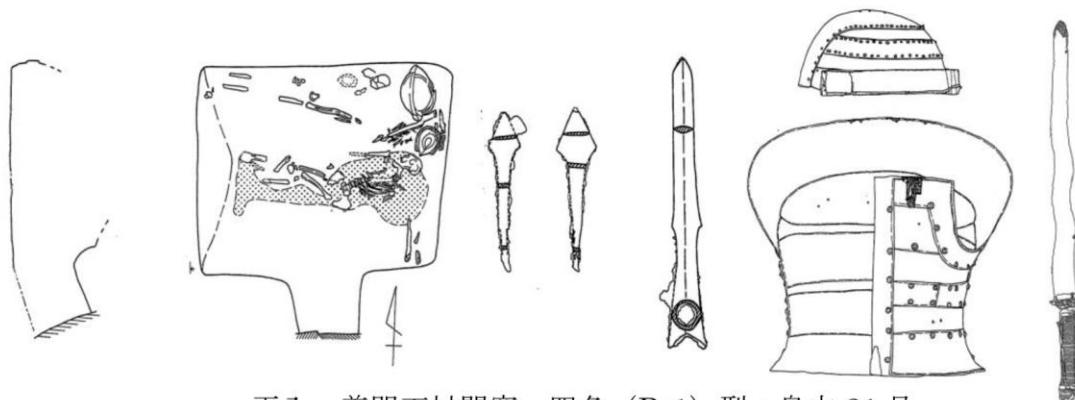


平入・竪坑石材閉塞・不定（Ba3）型：島内 36 号

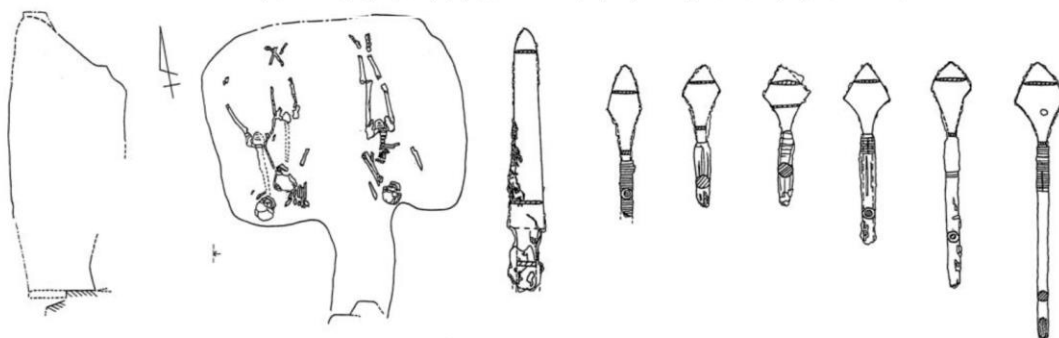


0 2m 平入・竪坑石材閉塞・不定（Ba3）型 島内 64 号

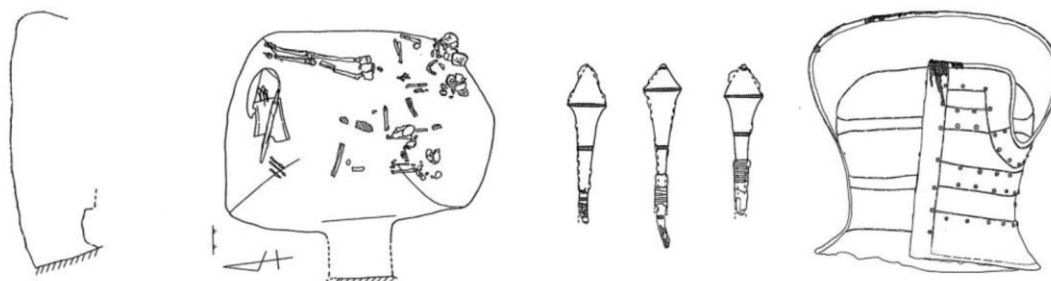
図 18 島内地下式横穴墓群 横穴墓の各型式 1（竪坑石材閉塞）



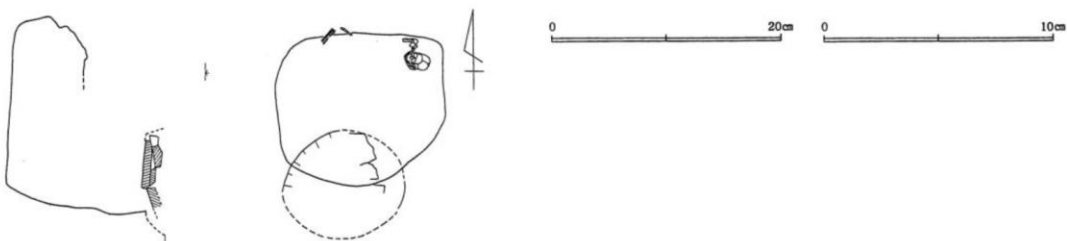
平入・羨門石材閉塞・四角（Bc1）型：島内 21 号



平入・羨門石材閉塞・隅丸（Bc2）型：島内 22 号



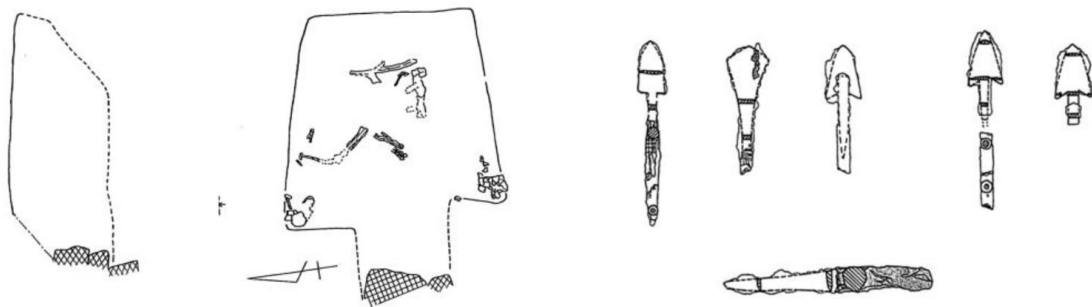
平入・羨門石材閉塞・不定（Bc3）型：島内 62 号



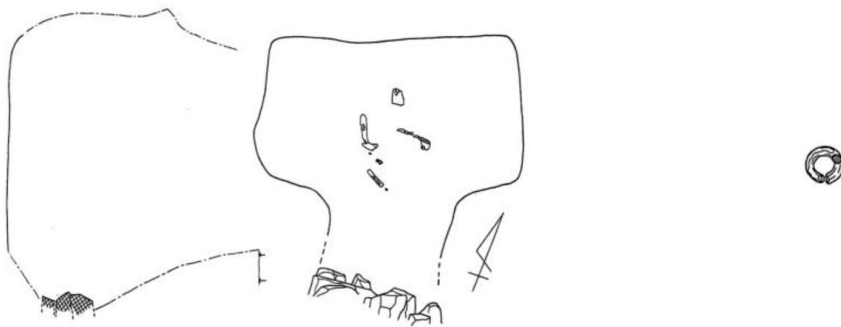
竪坑・無羨門（Ca）型：島内 37 号



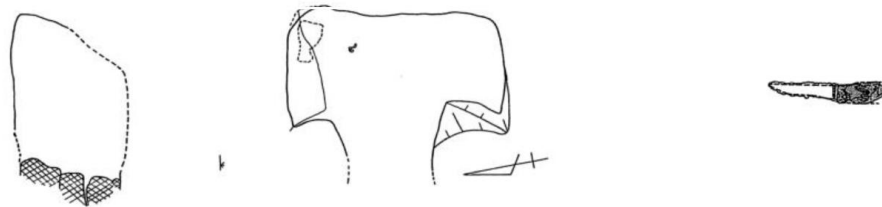
図 19 島内地下式横穴墓群 横穴墓の各型式 2（羨門石材閉塞・無羨門）



平入・羨門土塊閉塞・四角（Bd1）型：島内 34



平入・羨門土塊閉塞・隅丸（Bd2）型：島内 43 号



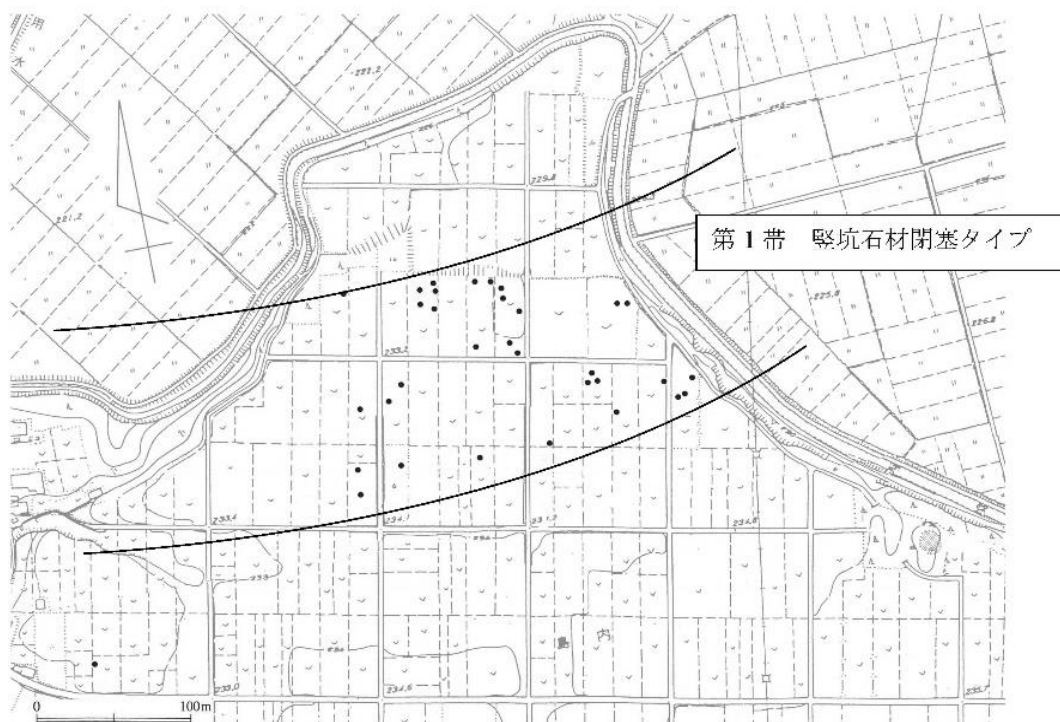
平入・羨門土塊閉塞・不定（Bd3）型：島内 18 号



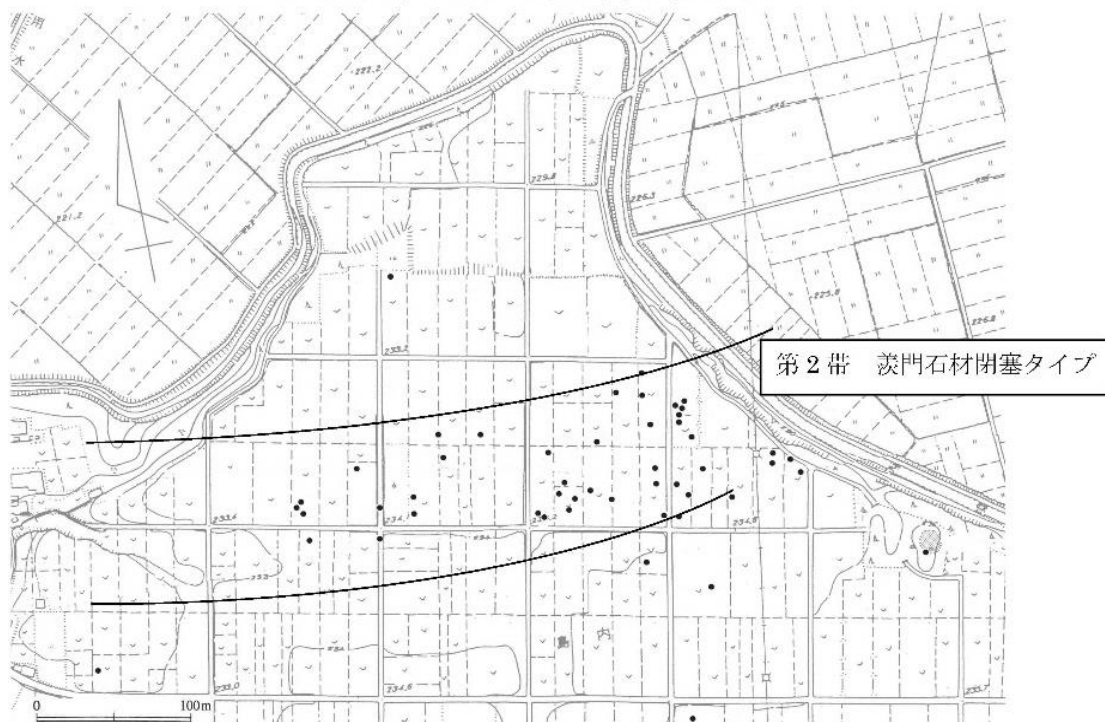
図 20 島内地下式横穴墓群 横穴墓の各型式 3（羨門土塊閉塞）

どから時間的にはやや後出する（集成 8 期）ものと考えられる。

それぞれの主な各型式の分布をみると、竪坑の石材閉塞グループ（Ba1～4）は台地の中央北部に円弧状に分布している。台地北端は砂利採集で消失した地下式横穴墓があったとされるため、本来はもう少し北へ延びると思われるが、現状での竪坑の分布領域を第 1 帯としておく。羨門石材閉塞の各型式（Bc1～4）はそれより南の、台地中央部の東西に帯のように分布し（第 2 帯）、羨門土塊閉塞タイプ（Bd1～4）は台地の最も南側で北東から南西にかけて分布している（第 3 帯）。この他には島内地下式横穴墓群では唯一、墳丘が遺存する 1 号墓は直径 27m、



島内地下式横穴墓群 竪坑石材閉塞分布図



島内地下式横穴墓群 羨門石材閉塞分布図

図 21 島内地下式横穴墓群 横穴墓分布図 1



図 22 島内地下式横穴墓群 横穴墓分布図 2

高さ 2.5m で石室状施設（石槨）を有する高塚古墳（円墳）であり台地南東端に独立的に存在している。

以上の分布から、島内地下式横穴墓群の墓域は北側の北西～南東にかけての第 1 帯、中央東西の第 2 帯、南東側の北東から南西にかけての第 3 帯、そして 1 号墓（真幸古墳）を中心とする第 4 帯との大きく 4 つに区分することができる（図 21・22）。

島内地下式横穴墓群の形成過程としては集成 7 期を中心とする時期（5 世紀中～後半）にかけて竪坑タイプが一貫して第 1 帯に、羨門閉塞タイプは第 2 帯に連続して集中的に築かれたと考えられる。その次の段階に位置づけられる集成 8 期（5 世紀末～6 世紀初頭）の首長墓として高塚古墳の 1 号墓（真幸古墳）が第 4 帯に、また 6 世紀以降には第 3 帯に羨門土塊型や無羨道の地下式横穴墓が順次、築かれていったと評価できるだろう。

北端は削平されており、第 1 帯と第 2 帯とは一部が重複しているが、1 号墓を除いて甲冑（2 号、3 号、21 号、62 号、76 号、81 号、115 号）や蛇行剣（21 号、24 号、32 号、50 号、55 号、96 号、117 号）、銀象嵌大刀（114 号）が出土した墓はいずれも第 2 帯の範囲に分布しており、島内では第 2 帯が中心軸となって墓域が形成されたと考えられる。

同時期に竪坑タイプと羨門タイプという異なる形式の地下式横穴墓が概ね並列して築かれる背景として、築造小集団の出自や血統、集落などの違いが分布帯に表出されている可能性が考

えられる。このことから、島内地下式横穴墓群の築造集団は複数の小集団から構成された墓域であった蓋然性が高いといえるだろう。

環状の墓群構造は宮崎県西諸県地方における山間部の地下式横穴墓群で広く一般的にみられる現象である。このことについて中野和浩は、地下式横穴墓群を広義の群集墳としながら縄文～弥生時代にみられる環状配列墓に類似する集団墓と評価している（中野 1998）。島内を始めとする南九州の地下式横穴墓の多くは中期中頃～後期初頭（集成 7～8 期）に群集しているのであるが、古墳時代後期（集成 9～10 期）に盛行する、いわゆる“群集墳”とは一線を画しているといつて良い。同時期（7～8 期）の初期群集墳として武器・武具の副葬が多い奈良県後出古墳群と比較しても、後出古墳群の総数が 22 基に過ぎないのに対し、島内では調査された地下式横穴が 130 余基にも及ぶ。また地下式横穴墓群は後述するごとく老若男女のあらゆる性別・年齢の人物が埋葬され、特定個人の首長墓的な様相が強い前～中期の高塚古墳よりも、より集団墓・家族墓的な様相が濃厚である。

出土遺物からみてみれば、島内地下式横穴墓群は武器の偏在的な副葬が特徴として挙げられる。同じ地下式横穴墓でも宮崎県下北方 5 号墳は墳丘を有し、武器以外にも馬具や鏡、装身具など高塚古墳の副葬品目と同じようなものが出土しており、宮崎県本庄地下式横穴墓群でも鏡や須恵器が出土している。これに対し島内地下式横穴墓群は豊富な副葬品を有する反面、副葬品目がかかなり偏っており、須恵器がみられず、装身具や刀子を除くと鉄鏃や刀剣・甲冑が中心であり、骨鏃が大量に出土するなど、古墳時代の一般的な副葬品の原則と較べれば、やや異質である。

橋本達也は島内での甲冑が分散して副葬されていること、鉄鏃の大量集積もみられないことなどから、威信財としての武器よりも実際の政治・軍事に関わった功績に対する下賜品を想定し「近畿中央政権と直接的な関係を結び、また朝鮮半島での倭人の軍事行動にも関わるようなことがあったのではないか」という評価を与えている（橋本（達也）2012a）。非常に聞くべきところが多い所見である。

人骨から親族関係を分析した吉村和昭によれば、西日本各地では一般に 5 世紀代は父系に基づく埋葬原理（田中良之モデルの基本モデルⅡ：田中（良之）1995）であるのに対し、島内やその周辺では女性のみの埋葬や、初葬の女性に武器が伴うことなどから、双系の埋葬原理（田中モデルの基本モデルⅠ）が維持されているなど、西日本の一般的な親族関係や葬送儀礼と異なる原理を想定している（吉村 2012a）。

島内周辺では、地下式横穴墓に先立つ墓制として板石積石室墓が知られているが、反対に前

期～中期における高塚古墳が希薄でもあり、特に甲冑や銀象嵌大刀を副葬した首長墓的な地下式横穴墓も、その他の墓と形態的には大差がなく、積極的な“見せる”要素が乏しい構造であることも、極めて重要な要素である。

上記の様々な諸点（地下式横穴墓という特質、墓群の構造、副葬品の偏在性、親族関係の伝統性）などから判断して、島内地下式横穴墓群はいわゆる“古墳”という墓制文化とはやや異なる文化的構造を基層としていると考えられる。もちろん、地下式横穴墓も大枠としては古墳文化の一部であるが、在地的な要素が非常に強固な独特の墓制文化であったことを改めて確認しておきたい。

## 第2節 島内地下式横穴墓群における副葬品と被葬者との相関関係

島内地下式横穴墓群では130基ほどの地下式横穴墓、332体の埋葬人体（痕跡を含む）が確認されている（註27）。このうち性別や年齢がある程度明らかなものは245体で、別表（表14）で示したごとく、乳幼児から老年まで幅広い性別・年齢の人骨が検出されている。島内では、比較的短い間に老若男女のあらゆる人々が地下式横穴墓に埋葬されていたといえるだろう。

出土遺物の概要としては刀剣や、骨鏃・鉄鏃、甲冑などの武器副葬が多く、僅かであるが矛や馬具が副葬されている。特殊な武器である蛇行剣も多い。武器以外の副葬品としては貝製腕輪類や玉類など装飾具と農工具（特に工具）や刀子が検出されている。

各性別・年齢別の被葬者に対応する出土遺物数は別表（表14）のとおりであるが、各遺物の数を比較する場合、それぞれの資料数が異なると比較が困難なので、各性別の資料数（人体数）をそれぞれ100体と仮定した比例値も、同じく別表（表15）において示す。

100体分の比率数値という同じ条件で副葬品数を比較してみると、刀剣や鏃、甲冑などの武器類と農工具は女性に比して男性に多く副葬されており、逆に腕輪類や玉類は男性に比して女性に多く副葬されていることが理解できる。これをやや単純化してまとめるならば、島内地下式横穴墓群における副葬品と被葬者との相関関係は概ね次の4つに整理することができる。

### A 特定の性別や年齢を対象に副葬された遺物

特定の遺物については、それぞれ特定の対象（性別や年齢）へと副葬される。甲冑や矛は壮～熟年男性のみへ、蛇行剣も大部分が壮年男性に副葬されている。馬具は非常に数が少ないがA号墳や2号墳など首長クラスの特定期墓から出土している。また、農工具は刀剣や鏃など武器



表 14 島内地下式横穴墓群 性別・年齢別遺物統計

性別	年齢	資料数 (n)	武 器											非武器						
			短兵			長兵	遠距離用武器		防具		馬具		その他	装身具			農工具		その他	
			刀	剣	鉈行剣	矛	骨鏃	鉄鏃	衝角付	短甲	褌・はみ	金具類		腕輪類	玉類	耳環	農工具	刀子		
♂	若年	3	1	0	0	0	19	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
♂	壮年	44	9	9	5	0	48	210	0	2	0	0	2	0	0	1	3	18	1	
♂	熟年	29	3	3	1	2	14	69	2	1	1	3	0	7	1	1	3	11	0	
♀	若年	6	0	1	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
♀	壮年	34	1	2	1	0	11	51	0	0	0	0	0	2	63	0	0	13	1	
♀	熟年	25	0	2	0	0	27	11	0	0	0	0	0	23	0	1	0	8	0	
♀	老年	6	0	0	0	0	2	18	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	1	
不明	幼児	17	0	3	0	0	0	19	0	0	0	0	0	1	0	0	0	6	0	
不明	小児	21	1	1	0	0	6	44	0	0	0	0	0	9	0	0	1	16	3	
不明	若年	20	2	2	0	0	19	47	0	0	0	0	0	0	1	2	0	6	0	
不明	壮年	31	1	8	0	0	47	93	1	1	0	0	1	0	0	0	1	7	3	
不明	熟年	9	0	2	2	0	2	10	0	0	0	0	0	1	0	0	2	3	2	
♂	総数	76	13	12	6	2	81	289	2	3	1	3	2	7	1	2	6	30	1	
♀	総数	71	1	5	1	0	40	99	0	0	0	0	0	31	63	1	1	22	3	
不明	総数	98	4	16	2	0	74	213	1	1	0	0	1	11	1	2	4	38	8	
総 計		245	18	33	9	2	195	601	3	4	1	3	3	49	65	5	11	90	12	

表 15 島内地下式横穴墓群 性別遺物統計 (100 数比率)

性別	資料数 (n)	武 器											非武器						
		短兵			長兵	遠距離用武器		防具		馬具		その他	装身具			農工具		その他	
		刀	剣	鉈行剣	矛	骨鏃	鉄鏃	衝角付	短甲	褌・はみ	金具類		腕輪類	玉類	耳環	農工具	刀子		
♂	100	17	16	8	3	111	396	3	4	1	4	3	10	1	3	8	41	1	
♀	100	1	7	1	0	56	139	0	0	0	0	0	44	89	1	1	31	4	
不明	100	4	16	2	0	76	217	1	1	0	0	1	11	1	2	4	39	8	

を有する男性との相関性が高い遺物である。

その他の刀剣や鏃などについては男女の双方に副葬されているが、全体の数的比率をみれば、相対として武器の副葬事例は男性が多い。一方、女性との関係性が高いのが貝製腕輪類や玉類で、腕輪類は大部分が女性に対して副葬されており、小児への副葬率も高い。

#### B 副葬品の中で普遍的に認められる遺物

埋葬人体のうち副葬品を有するものは約 3 分の 2 で 230 体である。副葬品がある場合、全ての性別や年齢を通じて頻度が高いのは鏃（鉄鏃・骨鏃）と刀子である。これら鏃や刀子については幼・小児から老年まで認められるため、被葬者の個性や実用性を現すというよりは、儀礼的・象徴的な意味を有する副葬品であった可能性が高い。

#### C 副葬品そのものが存在しないもの

埋葬人体 332 体のうち 102 例と約 3 分の 1 がこれに該当する。性別が明らかなものをみれば男性 14 例に対し女性 32 例と女性比率、特に壮～熟年の女性や幼・小児の比率がやや高い。

以上の状況から島内の副葬儀礼を単純化すれば、墓群に葬られた被葬者には副葬品あり（A・

B) と副葬品なし (C) とに大別することができる。島内では副葬品ありが約 3 分の 2、副葬品なしが約 3 分の 1 の人数であり、後者については壮～熟年の女性や幼・小児の割合がやや高い。副葬品がある場合、鏃や刀子といった基礎的な副葬品 (B) が幼・小児から老年まで広い範囲にわたって普遍的に認められる。

その一方、年齢や性差に偏った副葬 (A) も確認でき、成～壮年の男子には刀剣や鏃といった武器を副葬する割合が高く、逆に貝製腕輪など装飾品については女性・乳幼児が多い。農工具は必ず武器と共伴しており男性との関連性が強い。更に甲冑、蛇行剣、馬具・鏡などは副葬事例そのものが少なく、墓群の中でも有力者と考えられるような特定被葬者 (男性) に副葬されている。また、殺傷人骨については 300 体のうちの 7 例 (2.3%)、このうち壮年～熟年男性が 5 例を占めているなど殺傷人骨も男性比率が高い。

出土遺物と被葬者との関連性では、刀剣と鏃など、極めて単純化して論を進めているが、例えば、鉄鏃などについては様々な型式があり、実用性が疑われるものもこれに含まれていることは筆者も承知している。しかしながら、本章では副葬武器の分析を実用性か非実用性かという二项目的な視点ではなく、より全体的な葬送儀礼行為の枠内のなかでの武器のあり方を考察したい。このことについて、鉄鏃や刀子が乳幼児にも副葬されているという事実は、副葬武器を単に機能的・実用的な価値のみで把握することが誤りであることを示している。かかる指摘は、地下式横穴墓という副葬品と被葬者との関係性が明確にできる極めて希少な出土状況の結果であって、被葬者の性別や年齢などが把握することができない大多数の古墳出土の武器について考える場合の重要な指針となるだろう。

その他、地下式横穴墓で女性への武器副葬や女性の初葬がみられることに関して北郷泰道は、南九州における女性兵士の存在を指摘しているが (北郷 1994)、副葬品の統計分析を行った結果では、武器や殺傷人骨は男性との関連性が強いことが明らかである。南九州においては女性の武装も極めて重要な問題点であるが、島内のあり方を総体的にみれば、武器に関する事柄については、男性優位の社会であったことが伺われる。

一方、幼・小児へも鉄鏃や刀子といった基礎的な副葬品が添えられているために、刀剣や鉄鏃が出土するといって被葬者が直ちに武人であると断言することはできない。しかしながら、副葬品は全く没個性的な規範で副葬されているのではなく、特定の性別や年齢への偏りも指摘できるところである。そういった事実から判断すれば、島内地下式横穴墓群の武器副葬は普遍的・儀礼的な要素と個々人の社会性を表現する要素とが入り混じって、緩やかな社会の階層差を表象していると評価することができる。

表 16 古墳時代の殺傷人骨一覧

所在県	遺跡名	時期	性別	年齢	殺傷概要	備 考
新潟県	ケラマキ3号墳	後期	♂	壮年	頭蓋、上腕骨、左脛骨に鋭利な刀傷	
静岡県	宗光寺横穴墓	後期	♀	壮年	鈍器による頭部穿孔	
徳島県	犬山天神山古墳	中期	♀	熟年	頭部右側には刃物傷	
鳥取県	(箱式石棺出土人骨)		♀	壮年	鈍器による頭蓋への損傷	
島根県	沢平横穴群	後期	♀	壮年	左上腕骨外側面に鋭利な傷跡	
福岡県	井手ノ上古墳	中期	♂	熟年	左股関節(大腿骨、脛骨)に外傷性疾患	
宮崎県	常心原地下式横穴墓群	後期	♂	熟年	鈍器による頭部に陥没骨折	
宮崎県	島内23号墳	中期	不明	壮年	折損した鉄剣あり、殺傷物か？	
宮崎県	島内29号墳	中期	♂	熟年	左前腕骨折	
宮崎県	島内87号墳	中期	♂	熟年	骨盤下から破折した骨鏃	
宮崎県	島内89号墳	中期	♂	熟年	前頭骨に陥没骨折	
宮崎県	島内99号墳	中期	♂	壮年	頭蓋、鎖骨、寛骨、肩甲骨、肋骨、脛骨、腓骨等に9ヶ所の斬・切・刺創	
宮崎県	島内104号墳	中期	♀	熟年	右頭頂骨に刺創	
宮崎県	島内126号墳	中期	♂	壮年	前頭骨に陥没骨折	

ただし、先にみたように島内の墓制は通常の“古墳”とはやや異質な文化的原理が推定されるのであって、副葬武器については個人所有の範囲を超えないような数量で集団墓に分散副葬されており、特定首長へ大量に武器を埋納する事例もある高塚古墳の葬送儀礼と較べれば、より実用的・個人的装備や、実際の武装集団のあり方を示している蓋然性が高いといえる。

本節の最後に、島内で特徴的な殺傷人骨について言及しておく。殺傷痕が残る古人骨は縄文時代で 15 例、弥生時代で 47 例、古墳時代に 14 例と弥生時代に多い。古墳時代のものは検出数そのものが少なく、これら僅かの事例からどこまで一般化できるかは疑問であるが、全国集成した結果では 14 例が報告されており（表 16）、現状からは以下のような事実が指摘できる。

古墳時代の殺傷人骨の性別をみると、島内では壮年～熟年の男性が大多数を占めるのに対し、島内以外の全国例では成人女性の割合も高い。また殺傷の方法としては、第 1 章でみたように、縄文～弥生時代には“背後からの殺傷”事例が多いのであるが、古墳時代では背後からの殺傷事例がほぼ皆無であるのが特徴的で、鈍器による頭蓋の陥没事例が多いことが注意を引く。宮崎県常心原地下式横穴人骨の頭蓋の陥没骨折について竹中正巳は「丸い石のような物や比較的鈍な突起物が直的したために起こったのであろう。傷害物としては、石、石器や金槌などが候補として挙げられる」（竹中ほか 2007）としているが、古墳時代の武器組成として、槌や斧など、かかる殺傷に特化した武器は知られていないので、何らかの突発的な暴力であった可能性も考慮しなければならない。

いずれにせよ、古墳時代の殺傷人骨そのものが全国的に稀少であるため、今後の事例増加を

待って詳細に検討しなければならないが、そのような中であっても、島内地下式横穴墓群は全国的に殺傷人骨の出土例が非常に多いという暴力的な特徴だけは確認しておきたい。

### 第3節 島内地下式横穴墓群における共同体の復元

島内地下式横穴墓群の分布や構造を検討した結果、島内には集成7～8期（5世紀後半～6世紀初頭）を中心とした時期に130基ほどの地下式横穴墓群と300人ほどの被葬者を確認することができた。これら被葬者たちは具体的にどのような社会集団を営んでいたのだろうか。

島内に葬られた人々の確実な居住域は不明であるが、島内の2 km北に宮崎県内小野遺跡、2 km北東に宮崎県妙見遺跡、宮崎県古屋敷遺跡、3.5 km西に宮崎県天神免遺跡、岡松遺跡など、同時代の集落跡が所在している（図23）。本節ではこれら同時代集落を検討することで、島内地下式横穴墓群を築いた人々の社会的構造、すなわち共同体の具体像を考えたい。

まずは島内周辺の歴史的な人口の推移や規模を確認しておこう。島内地下式横穴墓群が所在する地域は旧国名では日向国諸県郡馬関田郷真幸に該当する。真幸は『延喜式』に記載もある真砥駅から転じた地名とされ、地形的には九州山地と霧島山地との挟まれた加久藤盆地西部を占める。また川内川の上流地域にあたることから同川の堆積作用によって形成された肥沃な土壌が控えている。

近世の島内村（島中村）は薩摩藩直轄領で、江戸期の村高は777石～1,162石程度、1891（明治24）年の記録では東西4町、南北10町、戸数91、人口391人（男性201、女性190人）とあり、島内を含む昌明寺、岡松、向江、浦など10ヶ村が合併した真幸村の同年の総人口は3,395人であった（角川日本地名大辞典編纂委員会（編）1986）。

1920（大正9）年における国勢調査結果では宮崎県の総人口が651,097人、近世以前の人口は不明とせざるを得ないが、澤田悟一は奈良時代（8世紀）における日向国の人口を学術的に45,750人と推計しているので（澤田1927）、古代における宮崎の人口は大正時代の1割以下であったといえる。

更に遡る古墳時代の人口についても、大正時代の島内村（400人）や真幸村（3,000人）の1割以下と推定できるだろう。具体的な数値を示すのは躊躇するところであるが、概ね40人～300人程度から大きく逸脱することはないと考えておきたい。もちろん、近世の村落領域と古墳時代のそれとは同一視できないが、島内から2.5 km南東には宮崎県灰塚地下式横穴墓群が、

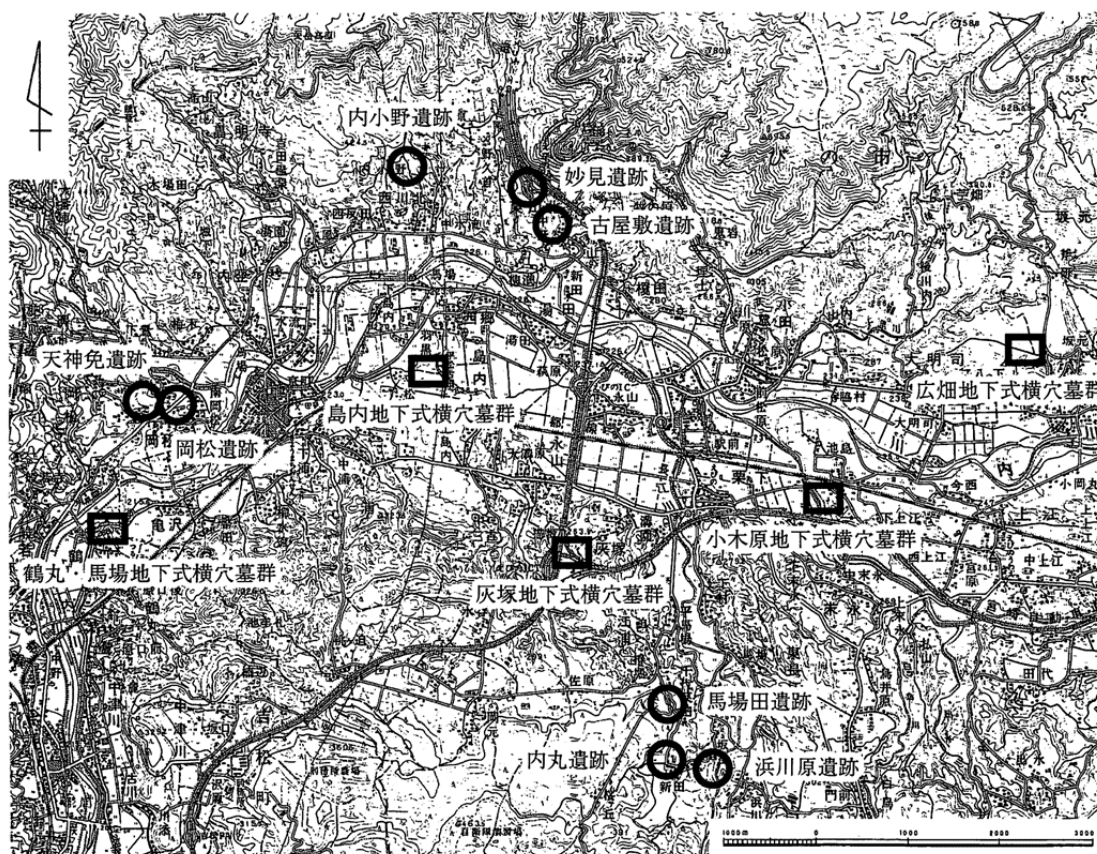


図 23 島内地下式横穴墓群 墓域と集落の位置関係 (□は墓域、○は集落)

同じく南西 4 km には鹿児島県鶴丸・馬場地下式横穴墓群が、南東 5 km には宮崎県小木原地下式横穴墓群 (久見迫・馬頭・蔵地下式横穴墓) が、7 km 東には宮崎県広畑 (芋畑) 地下式横穴墓群が存在するなど、近接して同時代の地下式横穴墓群が存在しており、特に小木原台地上にはかつて 300 基を超す大規模な地下式横穴墓群が築かれているため (木崎 1971)、島内の被葬者集団の生活領域も、2~3 km 圏の狭い範囲内に納まると推察される。

島内地下式横穴墓群の墓域は、地下レーザ調査の結果などから南北 650m、東西 350~400 m とされているが、この台地北側は砂利採取によって遺構が失われており、更に過去に消失した地下式横穴墓も考慮すると、現在の 2 倍以上の地下式横穴墓がこの地域に存在したと考えて大過ない。島内に存在した地下式横穴墓を約 300 基とし、1 基あたり 3 人の埋葬とすれば、島内に埋葬された総数は約 1,000 人にのぼる。

これが 5 世紀~6 世紀に渡って葬られ、3~4 世代の共同体成員が葬られた総数だとすると、1 世代当たり約 250~300 人の被葬者が島内に埋葬された計算になる。

以上の数値は不可知の部分の推計したものであり、数値そのものに拘泥するつもりはないが、先に島内における共同体人口を 40~300 人と想定したため、少なくとも、この共同体成員の大

部分が地下式横穴墓に葬られたことだけは確実であろう。事実として島内では乳幼児から老年までの幅広い層の男女が埋葬されており、墓を通じて一つの共同体の様相をかなりダイレクトに表現している蓋然性が高いことは重要である。

次に、この集団をもう少し具象化するため、島内周辺における同時代の集落をみてみたい。島内と同時代の集落である内小野遺跡、妙見遺跡、古屋敷遺跡、天神免遺跡・岡松遺跡はいずれも川内川の河岸段丘上や緩斜面をなす丘陵端部などに立地している。

天神免遺跡・岡松遺跡では集落内に 5 世紀～6 世紀の地下式横穴墓が検出されており、これら集落の人々も地下式横穴墓を築く墓制文化であったこと、また集落内で検出される地下式横穴墓は全て小型の小児用が推定されるため、成人男女の大部分は集落外の地下式横穴墓に埋葬されたと判断できる。

天神免遺跡 74 号住居から出土した高坏内面から錫が検出され、錫を用いた生産活動が推定されるところであるが、島内 115 号地下式横穴墓からも錫製の耳環 1 対（2 点）、同 123 号地下式横穴墓からも 1 対（2 点）がそれぞれ出土しており、錫の生産と副葬とを通じて島内とその周辺集落との関連性が指摘されている。

発掘調査が実施されたこれら遺跡のうち、以下では比較的大規模に調査された天神免遺跡と岡松遺跡を中心として当該期における集落の具体像を把握し、集落内の生産活動、武器保有などに言及してみたい。

天神免遺跡と岡松遺跡では弥生時代後期～古墳時代にかけての竪穴住居 230 軒と集落内の乳幼児～小児用地下式横穴墓 28 基などが検出されているが、このうち、島内地下式横穴墓群の中心時期である 5 世紀後半から 6 世紀初頭（集成 7～8 期）に時期比定されている住居に限定すれば天神免遺跡 SA17、SA20、SA39、SA72、SA78、SA108、SA110、SA118、SA119、SA123、SA134、SA166 など 20 数棟を挙げることができる。

住居規模は天神免遺跡 SA72 が 4×4m の方形、SA12 が 4.4×4.1m の略円形など、概ね 4～5m 内外のものが多く、住居規模からは若干の目的差・階層差が想定されるものの、全体的には等質的な住居群の集合として集落が構成されており、社会的に突出した階層の居住区画や倉庫群などは検出されていない。

集落の出土土器は、例えば内小野遺跡では数万点の土師器に対し、報告された須恵器片は 38 点など土師器が大半であり須恵器片は若干量である。島内地下式横穴墓群において須恵器の出土がほぼ皆無であることと同じ傾向にあるといえるだろう。

土器以外の特徴的な遺物として天神免遺跡 SA72 から鉄滓、SA78 から鉄床石、SA110 から



図 24 島内周辺における、地下式横穴墓出土の鉄器と集落出土鉄器

高坏転用の羽口 5、埴塙、ガラス小玉 1、砥石 3、台石 8、鉄床石 1 が、SA123 からは高坏転用の羽口 3、癒着鉄器片、鉄滓など、鍛冶関係の遺物が多数出土している。

5 世紀後半から 6 世紀初頭（集成 7～8 期）に時期比定できる住居に限定すれば遺物数も限られるので、概ね 5 世紀代～6 世紀代まで視野を広げれば、天神免遺跡の住居跡からは羽口（高坏転用）12、鉄床石 10、台石 52、砥石 26 点などが出土している。これら遺物には鉄滓や被熱土器が共伴する事例もあり、高い確率、恐らく集落全体の竪穴住居の 1 割程度は軽作業や小鍛冶などの生産活動を行っていたと評価することができるだろう。天神免遺跡 SA193（6 世紀後半）からは焼成不良の土器一括が出土しており土器生産も行われていたと考えられる。

鍛冶遺構の存在を反映してか、天神免遺跡・岡本遺跡の住居跡からは鉄刀 1、鉄製轡 1、鉄鏃 31、刀子 18、鉄鎌 4、鋤先 2、鉋 1、その他鉄器片 8 など、多数の鉄器が出土している（図 24）。組成的には武器類が多数を占め、農工具類が少ないという特徴が指摘できる。こういった集落内の鉄器組成は島内の副葬品組成と概ね一致しているが、反対に副葬品として存在するが、集落で出土していないものとしては甲冑、蛇行剣、骨鏃などが挙げられる。

橋本達也は島内地下式横穴墓群の副葬品目が武器と刀子に著しく偏り、特に農工具の出土が少ないことについて、島内に葬られた人々の生業が山での狩猟採集などの比重が高く、農耕への依存度が低かったためと想定している（橋本（達也）2012a）。島内周辺における同時期の集落においても段丘上に立地し、住居跡から同傾向の鉄器が出土しており、橋本が指摘した事実を首肯することができる。

天神免遺跡の住居からはツブラジイを主とする炭化種子 20 点（SA40）、オニグルミ 8 点（SA58）など、食用が可能な堅果類が検出されていることも、狩猟採集に重点を置いた生業の傍証になるだろう。別の視点から島内の被葬者と植物との関係をみてみれば、島内 69 号墓第 2 号人骨の左肋骨から出した種子はツクサ科が同定されており（堀田（満）1999）、同じく 69 号墓 2 号人骨の糞石からはアブラナ科、イネ科、アカザ科－ヒユ科の花粉が多く採取され、島内 69 号の被葬者は、これらの野菜類ないし薬用植物の摂取が推定されている（金原・金原 1999）。また、島内 47 号墓 1 号人骨の上顎前歯舌側面に LSAMAT という特殊摩耗がみられるが、このことについて竹中正巳・大西智和は食事や作業の際に、上顎歯・口蓋と舌との間に植物などを挟み、舌や手を使い、それらを押し引きし、しごく行為をしていた可能性を指摘している（竹中・大西 2000）。

一方、集落全体の生産活動では、天神免、岡元、内小野、妙見の何れの集落跡においても鍛冶生産の痕跡が検出されており、地下式横穴墓への副葬品に多い鉄鏃や刀子、斧、鎌といった小型の鉄製品は集落内で生産することが可能な体制であったと推察できる。反面、甲冑や蛇行剣など、地下式横穴墓への副葬はあるものの、集落内からの出土が認められない複雑な鉄製品については外部から入手していたと考えなければならない。

このうち、古墳時代中期の甲冑については、基本的に短甲の押しつけ板に代表される大型の曲面加工部分などに高度な技術が用いられているため、古くより畿内の特定工房での製作が想定されているところであるが（小林（謙一）1974）、塚本敏夫は島内 3 号墓の三角板鋌留短甲に鋌頭が扁平な、かしめ鋌がみられ、先進の鍛造技術に基づく型打鋌でないことから、在地の鍛冶工人による修理の可能性を指摘している（塚本 1993）。また吉村和昭は南九州で出土例の



多い左前胴から後胴右脇まで一枚で作られている甲冑について、畿内や千葉の甲冑でも同様の癖が認められるとし、5世紀の南九州においては、修理を行ったとしても、在地における甲冑の製作は無かったと指摘している（吉村 2003）。

鉄鏃について橋本達也は、島内における圭頭鏃は九州南部で独自の発展をしている在地性のもの、長頸鏃は広域流域で入手したものとし、広域流通する長頸鏃が島内に副葬された現象について、中央政権から配布された可能性を指摘している（橋本（達也）2012a）。

蛇行剣をA～Cの3タイプ2系譜に分類した北山峰生によれば、島内地下式横穴墓群出土の9点の蛇行剣のうち5点がAタイプ、3点がCタイプであり、島内の被葬者が2タイプの工人与接点を有していたと推定している。その上で北山は、蛇行剣は工人から直接に被葬者へもたらされたものではなく、特定の集団が各地の被葬者へ蛇行剣を配布するといった構図を想定している（北山（峰生）2003）。

以上、島内における共同体の特徴をまとめておこう。島内地下式横穴墓群の造墓集団（被葬者集団）としては複数の系統（出自や集落）から構成される集団と考えられる。生業としては農耕よりも狩猟採集に重点を置いており、若干の階層差が現れているといえるが、全体的には等質的な300人規模以下の共同体であったと評価することができる。

この集団はまた、小規模な鍛冶や骨鏃の使用など、独自の生産活動により武器の一部について自弁が可能であったが、一方、甲冑や蛇行剣など、複雑な武器についてはヤマト中央政権と直接・間接的な交流や配布を通じて入手していたと推察される。武器の多量さと並んで、殺傷痕跡が残る埋葬人骨の出土が全国的にも多く、実際に何らかの暴力的な活動にも従事した集団であったと評価しておきたい。

#### 第4節 南九州地域における地下式横穴墓群の位置づけ

これまで島内地下式横穴墓群の具体的な武器副葬のあり方を検討してきたが、島内は“地下式横穴墓”という南九州で発達した地域的特色の強い墓の群集であり、副葬品目をみても貝輪や骨鏃・蛇行剣などかなり特色ある副葬状況が認められる。しかし一方では甲冑を始めとする豊富な武器類（鉄製品）など、決して一地域でのみで完結した生産や流通では説明できない副葬品も有しており“辺境の一事例”として問題を矮小化することは避けなければならない。ここでもう少し視野を広げて、南九州地域における古墳時代中期の墓制や首長墓などの変遷を概

観し、その中で島内地下式横穴墓群の位置づけを行いたい（図 25）。

南九州地域にみられる古墳時代の墓制としては地下式横穴墓の他にも前方後円墳、円墳・方墳があり（註 28）、その他には地下式板石積石室墓、立石土壙墓、石棺墓、土壙墓、横穴墓などが存在する（註 29）。これら様々な墓制が知られているが、古墳時代中期後半の南九州においては、以下のような 3 種類の墓制が営まれていたと整理することができる。

- α 全国的、かつ政治的な階層性が推定される前方後円墳・円墳
- β 南九州独特な在地的要素の強い地下式横穴墓群、地下式板石積式石室
- θ 伝統的かつ普遍的な箱式棺・土壙墓

すなわち、古墳時代の南九州地域の人々は地下式横穴墓や箱式棺に葬られるという、伝統的・又は地域的に独自のシステムを維持しつつ、しかしながら、決して閉鎖的に孤立していたわけではなく、その上部構造として、汎日本列島的な前方後円墳や円墳という共通の墓制によって、全国的な社会体制の一部に組み込まれていたと考えられるのである。

このうち、中期後半（7 期）の南九州の古墳群、特に首長墓や盟主墳を中心として、前方後円墳と在地的な墓制との関連性からグルーピングを試みると、南九州においては

- I 前方後円墳や円墳など高塚墳のみで構成される古墳群
- II 前方後円墳や円墳など高塚古墳と地下式横穴墓などの在地的な墓制が共存する古墳群
- III 地下式横穴墓群など、在地的な墓のみで構成される古墳群

の 3 つの類型が存在する。I のようなグループとしては小丸川流域の宮崎県持田古墳群や川南古墳群、南方古墳群などの延岡地域が挙げられ、II のグループとしては宮崎県西都原古墳群や宮崎県生目古墳群、宮崎県下北方古墳群、宮崎県六野原古墳群などにおいて様々なあり方がみられる。III のグループとしては本論で検討した島内地下式横穴墓群のように、基本的に前方後円墳や円墳が分布しない地域での地下式横穴墓群があり、島内以外の事例としては宮崎県小木原地下式横穴墓群や宮崎県立切地下式横穴墓群など前方後円墳が空白の山間地において地下式墳墓などが群集している。

このように地下式横穴墓も南九州地方における古墳時代の墓制文化の一翼を担っていたのであるが、一方で地下式横穴墓は南九州東半にのみ分布する地域的・在地的な要素の強い墳墓であることは否定しがたい事実である。

古墳時代の“古墳”という墓制はその墳形や規模に応じて、首長の社会身分や系譜などが表現されているという学説が有力である。地下式横穴墓には下北方 5 号地下式横穴墓や西都原 4 号地下式横穴墓など、全国的にみても一級の質・量を誇る副葬品が埋納された首長墓の様相を

示すものもあるが、豊富な種類の副葬品を有する首長墓的な地下式横穴墓は、広義の宮崎平野のみにみられるものであり、時期についても中期末～後期初頭の地下式横穴墓成立初期に限られる（東（憲章）1994）。

地下式横穴墓が前方後円墳や円墳といった高塚の古墳と共存するような場合では、鹿児島県岡崎古墳群で端的に認められるように、高塚古墳の周溝に付属（寄生）したり墳丘裾部に築かれる場合が多い。地下式横穴墓が周溝などに築かれた円墳は“地下式墓寄生型円墳”とも呼称され、古墳群の中では高塚古墳に従属する形態を示しているが、地下式横穴墓は前方後円墳や円墳よりは階層的に劣位に位置づけられていたと指摘することができる。そして地下式横穴墓を築いた在地的な集団の上位者には前方後円墳で表出される、より広い意味での政治的序列が形成されていたと推察されるのである。

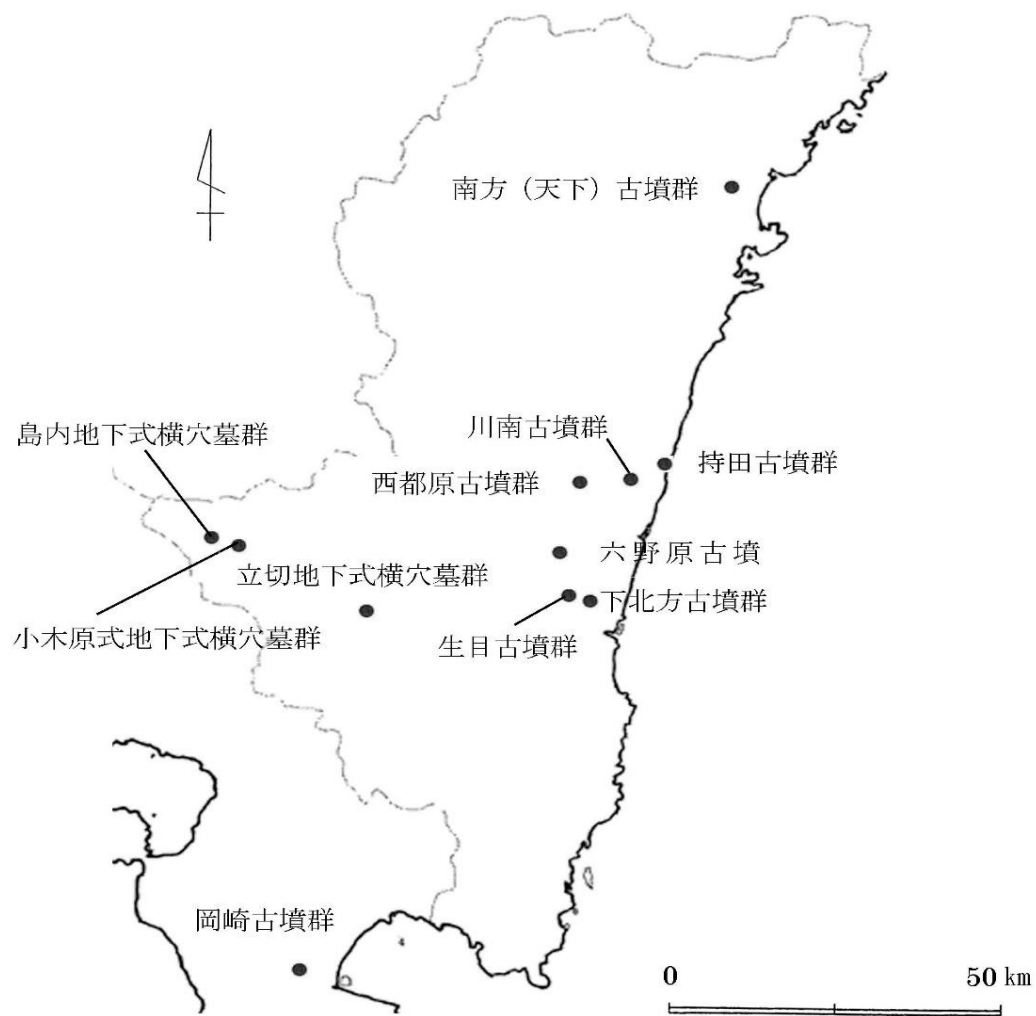
むしろ、島内を含めた大部分の地下式横穴墓は、これまで前方後円墳や円墳が分布しない山間部において数百を超えて群集する場合があります、集落内に小型の地下式横穴墓を築く事例も存在するため、南九州の在地的な中間層の人々によって営まれていた、家族墓的な墓制であったと評価することができる。

彼らは、前方後円墳国家や前方後円墳体制として表出される当時の日本列島内の政治的・社会的な階層構造（註30）においては、近畿地域を中心域とする古墳文化の西端、文化的には外縁や周縁に位置する人々であり、前方後円墳で象徴される政治体制、ヤマト政権の下においては劣位な存在であったと評価しておきたい。

このような社会階層的に劣位にある地下式横穴墓群の被葬者は、しかしながら、一方では中央で製作・配布したと考えられるような豊富な武器を有しており、場合によっては高塚古墳よりも豪華な武器類などを副葬している事例がある。政治的には劣位な文化的周縁に位置する集団が、何故、優秀な武器や武具を保有していたのであろうか。以下では南九州地域の首長墓系列という視点から島内地下式横穴墓群とその被葬者集団について考えてみよう。

南九州における古墳時代前期からの首長墓系譜をみると、前期には宮崎県生目古墳群、宮崎県西都原古墳群、宮崎県持田古墳群などの特定地域において70～100mを超える大型の前方後円墳が継続的に築造されている。南九州でも西日本の各地域と同じように、面的ではなく点的なネットワークの結びつきによる有力首長層を介してヤマト中央政権と結びつき、早くからその政治組織の一部に組み込まれていたと考えられる。

持田古墳群においては鏡・剣・玉類などが出土しており、前期の大古墳では西日本各地の副葬品目と共通した鏡・武器・農工具などの特定威信財が副葬されたことは想像に難くない。そ



宮崎県内における主要な古墳群の消長(太線は中心となる時期)										
古墳群	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期
持田古墳群										
川南古墳群										
南方(天下)古墳群										
西都原古墳群										
岡崎古墳群										
六野原古墳群										
島内地下式横穴墓群										
小木原地下式横穴墓群										
立切地下式横穴墓群										
生目古墳群										
下北方古墳群										

図 25 南九州地域の主要な古墳群位置図

こには社会的に突出した威信財を有する個人を媒介とした権力的な構造が想定されるのである。しかしながらこのような古墳のあり方は汎日本列島的な現象であって、特に南九州における特殊事例ではない。

前期において累世的に築かれた前方後円墳は、南九州においては中期に至ると生目古墳群や持田古墳群においては首長系譜の断絶や古墳規模の著しい縮小がみられるようになる。また西都原古墳群では古墳群内で複数あった系譜が一本化され、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳といった九州最大の古墳が築かれるが、それ以降は古墳の規模が縮小する。

反面では、前期古墳が希薄であった延岡地域において南方（天下）古墳群などが築かれるようになり、浄土寺山古墳のように蛇行剣や甲冑など豊富な武器類を副葬している中型古墳も現れる。生目古墳群や西都原古墳群において地下式横穴墓が築かれるようになるのも、こういった伝統的な首長墓系列としての古墳群が縮小傾向を示す時期であり、宮崎において 100m を超すような前方後円墳が築かれない 7～8 期に島内などの諸県地域の山間部などでは在地特有の地下式横穴墓を用いた群集墓が盛んに築かれてくるのである。

これまでの検討において地下式横穴墓は南九州東部の在地色の強い墓であり、古墳序列の位置づけからは、前方後円墳や円墳といった高塚古墳に比べれば政治的・社会階層的には劣位にあった人々の墓制であったと評価した。しかし一方では島内の事例のように豊富な武器や武具を保有しており、決して孤立した在地集団という訳ではなかったといえる。島内で出土した銀象嵌龍文大刀は全国でも 3 例目、龍虎と日輪が象嵌された銀象嵌龍文大刀の類例としては奈良県新沢千塚 327 号墳の類例が挙げられ、かかる希少な製品を入手するにはヤマト中央政権との、直接的、又は間接的な交渉が明らかに不可欠なのである。

これら一連の現象をより広い視点から考察すれば、ヤマト政権は古墳時代中期における中央と地域との政治的な関係性において、これまでの伝統的な各地域の大首長層にかわり、より在地に密着した小集団との間に政治的関係を結び、結果として軍事の象徴たる武器や武具が在地の小集団へ直接・又は間接的に配布された結果であると評価することができるだろう。

以上、第 8 章では古墳時代における宮崎県島内地下式横穴墓群を事例研究として、古墳時代中期の武装集団の復元を試みた。この検討を通じて、古墳時代中期における武装集団の中央と地方との関係性も予察できたため、次章では古墳時代中期における中央の軍事的様相や、日本列島における軍事組織の構造的な把握を試みたい。



## 第 9 章 古墳時代中期社会の構造的把握





## 第9章 古墳時代中期社会の構造的把握

### はじめに

序章で述べたように、副葬された武器は最終的には葬送儀礼行為に基づくものである。しかしながら、第6章と第7章における武器の廃棄（副葬）ステージの検討結果により、古墳時代中期の副葬資料は実際の武装集団や軍事組織を反映している可能性が高いことを論じてきた。その具体的な武装集団のあり方を明らかにするために、第8章において宮崎県島内地下式横穴墓群の事例研究も試みた。

これらの検討によって、古墳時代中期の具体的な武装集団像を復元する検討材料が集まったので、本章では、更に鉄器生産や政治的動向を加味しつつ、古墳時代中期の社会を構造的に把握し、古墳時代中期における軍事組織について考察を行いたい。

### 第1節 古墳時代中期に関する研究史

古墳時代の時期区分に関しては、大正年間には喜田貞吉が古墳の編年を前・後の2期に分けその解釈を巡って高橋健自と論争を行っている（喜田 1914）。その後、前方後円墳の変遷については後藤守一が3様式に分け（後藤 1935）、浜田耕作がⅠ（最古期）～Ⅳ（後期）の4区分（浜田 1936）とするなど、幾つかの学説が発表されてきた。

このうち、単なる古墳の変遷に留まらず、古墳時代の文化そのものを前期・中期・後期の3時期に区分することは後藤守一の見解に始まるが、その中でも、特に古墳時代中期の文化に注目したのは小林行雄である。小林は後藤の文化相としての3時期区分法を受け継ぎつつ、近畿地方と関東地方の、又は近畿地方と九州地方との文化の伝播問題を論じ、古墳時代中期を5世紀代に比定した（小林（行雄） 1950）。この研究により中期の古墳文化については独立した地位が与えられることになるのである。

一方、群集墳の成立を重視する近藤義郎は古墳時代を前・後の2時期に区分することを主張し（近藤（義郎） 1956）、この考えを受けて、大塚初重は前・後の2大区分、うち前期を4区分、後期を3区分の8期に分けて体系的な古墳時代の変遷を論じた（大塚 1966）。

ここにおいて、古墳時代の時期区分の学説は、大きく前期・中期・後期の3時期に区分する方法と前期・後期の2時期に区分する方法が並び立つようになる。その後、埴輪編年や須恵器編年の整備が進み、古墳時代の年代観も細分化が進行し、11小期に区分した和田晴吾案（和田（晴吾）1987）や、10小期に区分した広瀬和雄案（広瀬1991）などが発表されていく。

このうち、和田案では小期（小様式）を11期に設定したが、大別（様式）として前期・中期・後期の3区分を採用しており、中期を設定する理由として墳丘、外部施設、埴輪、内部（埋葬）施設、副葬品の全てにわたって、中期に固有のもの、あるいは中期的なものが存在し、独自の様式を形成していると主張している。また、川西宏幸は古墳時代の政治史を検討する過程で、中期畿内政権論を提唱し、古墳時代中期の政治構造として、前期ともまた後期とも相違する政治上の結合体の存在を想定した（川西1988）。

現象的には、古墳時代前期の大王墓の中心地域が奈良盆地であったのに対し、古墳時代中期に至ると、河内・和泉地域においてより巨大な古墳群が形成されるようになる。このことは文献史学の王朝交代説（水野（祐）1954）や河内王朝説（上田1967、岡田1977）などと議論が合致する部分もあり、中期ヤマト政権の政治的な解明は、古墳時代における政治史研究の一つの論点となり、様々な検討が加えられている。

川西宏幸が多方面から検討しているとおり、古墳時代中期は、それ独自の文化や政治体制が想定できるのであるが、近年において橋本達也は甲冑を素材として古墳時代中期の独自性を強く主張している。それによれば、古墳時代中期の政治や社会構造をもっとも表出している考古資料は古市・百舌鳥古墳群の成立と武装具様式の変革であって、古墳時代中期とは近畿中央部の政権が朝鮮半島諸国との対外交渉・軍事権を代表し、直接的に半島情勢に関与し、それを契機として南九州から南東北に至る広範な地域との新たな政治秩序の構築、階層的序列化によってより強力な中央政権が形成される時代であるとした。そして中期の終焉を、橋本は帯金式甲冑の製作中止及び配布関係の途絶によって画されるとしている（橋本（達也）2005、2010）。

橋本の見解を参考に、本論で取り扱う武器や軍事組織との関係で述べるならば、古墳時代中期とは帯金式短甲が成立し、第5章～7章でみてきたように武器の副葬量が急増するなど、学史上で繰り返し指摘されているように武器の大量生産が実現化する一方、本論で多方面から検討したように、副葬に際しての武器の実用的な取り扱いという社会的な背景の成立を指摘することが可能である。また、前章の島内地下式横穴墓群の事例研究で詳細したように、地方においても武器を大量に副葬する小古墳群が現れ、軍事力や軍事組織において著しい拡充がおきたことが想定されるところである。

このように、軍事的な側面においても、古墳時代中期は、前期とも後期とも異なる独自の政治・社会体制が存在したと想定されるため、本論においては前・中・後期の3時期区分を採用し、特に、武器副葬が最も発達し、その実用的な取り扱いが行われている社会的な背景から、副葬武器が実際の軍事組織を反映している可能性が最も高い古墳時代中期に的を絞り、その構造的把握を試み軍事組織のあり方を考究していきたい。

## 第2節 古墳時代中期における近畿地方の古墳階層と武器副葬

### 1. 古墳の社会性について

古墳時代前期における古墳階層の頂点は大和盆地南東部が挙げられるが、古墳時代中期に至ると、このような墳丘規模や規模格差がより大きくなり、大阪府の古市古墳群や百舌鳥古墳群などにおいて日本列島最大規模の古墳群が成立する。

古墳時代中期において、大規模な労働力が投下された古墳が存在するという事実は何を物語っているのだろうか。本論で何度も述べているように、古墳や古墳の副葬武器からは直接的に戦闘方法や軍事組織を検討することは不可能である。しかしながら、古墳時代中期という社会を構造的に把握するためには、先ずもって古墳を抜きにしては考えることができない。そこで、古墳の意義と、その代表的な遺跡をみてみたい

古墳の「墳」の字は盛土をなす墓を意味しているため、古墳の即物的な理解は“土を高くもった高塚の古い時代の墓”の謂いとなる。しかしながら、この概念はあまりに即物的な理解に過ぎないだろう、むしろ古墳そのものが文化のメルクマークとなる古墳時代や古墳文化といった社会的背景の下に築かれた墳墓こそが古墳であり、墳丘・埋葬施設・副葬品などの諸要素で構成された、かつ膨大な労働力を投下して特定の地域や時代に構築されたという背景を有する社会的な存在が古墳である。

古墳をこのような社会的存在として規定することが可能なのは、古墳時代と称される3世紀～7世紀の日本列島において、多様性の中にも共通の要素としての画一性を保持した多数の古墳が長期にわたって築かれ続けたために他ならない。そのような意味において古墳とは単なる墓ではないのであって、古墳を媒介として政治や社会を研究することは古墳時代研究の一つの主要な柱であるといえるだろう。

既に大正年間に高橋健自は「百年前のも千年前のも古い墳墓ならば古墳といえる訳であ

るが」と断わりながらも、しかし古墳とは「高く著しい墳丘を以て造営された上代の墳墓に対してのみ用ひられる」と時代性や形態を限定しており「古墳はその時代に於て築かれた重んずべき記念物」という評価を与えている（高橋（健自）1922）。また古墳は「権力を掌手に収めていた上流貴族にしてはじめて造りえたもの」（小林（行雄）1951a）という認識から、古墳の発生は「ある特定の政治権力者の出現を物語るものにほかならない」（大塚 1974）という政治・社会的な歴史的な事象として捉えられてきたのである。

こういった見解に対し西嶋定生は古墳をより政治的な存在として重視した。西嶋によれば前方後円墳が定型化して全国に広がるという事実は単なる文化の伝播では説明できないのであって、そこには身分制の表現など、全国的に共通した社会的な機能（政治的関係性、すなわち国家構造における身分的表現）が働いていたと推定できるとする（西嶋（定生）1961）。西嶋の研究は古墳を政治的な記念物とみなす点で非常に画期的な研究であったといえるだろう。

次いで近藤義郎は「考古学はもともと、その時代に特徴的で地域的には普遍的な考古資料に着目し、それを時代の標識」にするとし、古墳という独特な墓制を標識として古墳時代が設定されたこと、また「おしなべて古墳といっても、大小・優劣・貧富の差は歴然と形成されているのである。だから、この点に即していえば、古墳時代を階級および階層の差異が墓制に極端に反映した時代であると規定することができる。あるいはいいかえて、特定の葬送観念の下に人々がその社会的位置を極端に反映した時代であるとすることもできる」とし（近藤（義郎）1966）、古墳を政治面に限らず葬送観念というイデオロギーをも含めた社会的側面から重視している。

白石太一郎も「古墳とは本来死者を埋葬することを目的として築造された墓であり、その意味ではすぐれてイデオロギー的な築造物である」としながら「またそれと同時に古墳がきわめて社会的・政治的性格の強い構築物であることを認めなければならない」「墳墓の造営が、それ自体、社会的・政治的に、とりわけ政治的にも大きな意味をもっていたのが「古墳時代」であるといえよう」と説明し（白石 1969）、都出比呂志は古墳時代を国家段階と位置づけ、「この社会関係を考古学的に象徴するものは前方後円墳を頂点とする政治秩序の形成である」として「墳丘の形態によって首長の系譜や格式を表現し、またその規模によって実力を示すという二重原理による身分表示のシステムがここに成立したのだといえよう」と古墳の存在を政治的な面からより総合的に分析した（都出 1991）。

近年の、21 世紀での古墳論をみても古墳の持つ政治性や社会性、イデオロギー性はとみに重視されている。土生田純之は「古墳とは共同体の規範から首長（王）が自由となって権威

を確立しつつあるとき、こうした段階にあった広域の諸首長が連合して共通の王者にふさわしい墓制を創出したが、この墓制の規範下にある墓のこと」とし、時代によって形態などの変化はみられるが、古墳の「政治的・精神的象徴物であることに大きな変化はなかった」としている（土生田 2003）。また広瀬和雄は古墳の代表たる前方後円墳について「中央—地方の契機をもって、祭祀と政治を媒介的に表出した墓制」であり「画一性と階層性を見せる墳墓」といった定義を与えている（広瀬 2007）。

これらの研究史から明らかなように古墳は単なる墓ではなく、古墳の研究を媒介として往時の社会階層や構造を検討することは古墳研究者の共通認識であるといっても過言ではない。したがって古墳や古墳の副葬武器から直接的に戦闘方法や軍事組織の検討が不可能であっても、古墳の社会的な存在から、当時の政治・社会構造を把握することは可能としなければならない。

以下では、古墳時代中期における社会の構造的な把握のために、当時の政治的な中心部であると想定される近畿地方中枢部の古墳である、大阪府古市古墳群の階層的な構造について最初にみておきたい。

## 2. 古市古墳群について

古市古墳群は大阪府の東南部に位置する、羽曳野市・藤井寺市を中心に広がる大古墳群で、東西約 3 キロ、南北 4 キロの範囲内に 126 基（現存する墳丘を有する古墳は 44 基）の古墳で構成されている。

古市古墳群の 126 基のうちには菅田御廟山古墳（●：425）を始め、仲津山古墳（●：290m）、岡ミサンザイ古墳（●：242m）、市野山古墳（●：230m）、墓山古墳（●：225m）、津堂城山古墳（●：208m）と 200m を超える大型前方後円墳を 6 基含み、野中宮山古墳（●：154m）、峰ヶ塚古墳（●：96m）、稲荷塚古墳（●：50m）、軽里 4 号墳（●：18m）など、構成される前方後円墳の規模は非常に幅が広い。また墳形も多様で青山 1 号墳（○：62m）や翠鳥園 15 号墳（○：15m）、向墓山古墳（□：68m）、青山 5 号墳（□：7m）など、大小の円・方墳や、土師の里遺跡群では埴輪棺や土壙墓なども多数検出されている。こういった多様な墳形や規模の大小からは、大王墓から中・小首長までの社会的な階層差を如実に表現する古墳構造であるといえるだろう。

一方、消滅した古墳も多く、古墳の内部まで把握できるものも少ない。200m を超える古墳では、1912 年に地元の人々によって石棺が掘り起こされた津堂城山古墳（4 期：●208m）を除いて埋葬主体はほぼ不明であり、その他で主体部が調査されたものとしては盾塚古墳（4 期：

●64m)、岡古墳(4期:□33m)、高塚山古墳(5期:○50m)、アリ山古墳(6期:□45m)、鞍塚古墳(6期:○39m)、珠金塚古墳(6期:□:27m)、西墓山古墳(6期:□:20m)、唐櫃山古墳(7期:●53m)、長持山古墳(7期:○40m)、野中古墳(7期:□28m)、藤の森古墳(7期:○22m)、峰ヶ塚古墳(8期:●98m)、土師里遺跡群などが挙げられる。

古墳群の築造時期は、4世紀後半(4期)から6世紀後半(9期)までの約200年間に築造されており全てが一度に築かれたものではないため、古墳時代中期の一時期(集成6期前後)に築かれたと想定される古墳、その中で内部構造が判明しているものを中心に古墳階層と武器との関係をみてみよう。

古市古墳群における6期を前後する墳墓階層としては誉田御廟山古墳(●425m)や墓山古墳(●225m)などの大規模な前方後円墳があり、これら大規模古墳にはアリ山古墳や西墓山古墳などの陪塚的な方墳などが付属している。次いではざみ山古墳(●103m)、青山1号墳(●73m)など中規模の前方後円墳や帆立貝型古墳が、更に珠金塚古墳(□27m)や土師の里8号墳(□12m)といった中・小の円・方墳があり、それより下位には土師の里遺跡群でみられるような埴輪棺群や土槨墓群が存在している。このように古市の狭い範囲内においては複数階層にわたる古墳の序列が築かれているのである。

では、このような近畿地方中枢部における階層的な差異を示す古墳群のあり方の中において、古墳と副葬武器との関係性はこういったものであろうか。先述したように200mを超えるような大規模墳墓の内部は調査事例が無いために不明とせざるを得ないが、これらの陪塚と推定される小古墳の遺物埋納施設には大量の武器が副葬されている。例えばアリ山古墳の中央施設からは槍40、矛3、鉄鏃70、北施設から刀77、剣8、矛1、鉄鏃1,542が、西墓山古墳東列では刀42、剣36、槍87、矛1、短剣66が埋納されていた。

次の50m～100mクラスの中規模古墳では、6期の古墳で副葬品の全容が明らかなものは知られないため、参考として8期の峰ヶ塚古墳(●98m)や4期の楯塚古墳(●64m)をみると、峰ヶ塚古墳の後円部には家形石棺を納めた石室が確認され、盗掘を受けていたにも関わらず、刀、鉄鏃、盾、挂甲、馬具などの豊富な武器が出土しており、楯塚古墳からも刀剣や鉄鏃、短甲を始めとして鏡、玉類、鉄製農工具など豊富な品目の副葬品が出土している。したがって6期のはざみ山古墳や青山1号墳においても、当初、豊富な副葬品が埋納され、多数の刀剣や甲冑、鉄鏃などが副葬していたことは確実である。

次いで、珠金塚古墳(□27m)や土師の里8号墳(□12m)といった中・小古墳の円・方墳に副葬された武器としては、珠金塚古墳には東西に並んだ二つの粘土槨があり、南槨の棺内か

らは鏡や短甲衝角付冑、玉類の一群や刀子群・工具類などが副葬され人体周辺には刀剣類なども縦列した状態で出土している。南槨棺外からは槨の周囲を武器・武具・工具が囲むように配置されており、北郭においても被葬者の左右両手の位置や首の位置に玉類が、遺体頭部に甲冑、周辺に刀剣など武器・農工具・服飾類が豊富に副葬されていた。土師の里 8 号墳は珠金塚古墳より一回り小さな方墳であるが、主体部が 3 基の埴輪棺で、うち副葬品が最も多い第 1 主体部でも棺内に刀 1、剣 1、棺上に鋤 1、鎌 1、斧 1、鉄鏃 8 が副葬されているに過ぎず、珠金塚古墳とは主体部構造や副葬品の多寡に大きな差異が認められる。このことから古墳が表出する社会階層の違いは墳丘規模や墳形のみならず埋葬施設の構造も非常に大きいと考えられる。

上記よりも下位の社会階層が想定される低・無墳丘墓としては土師の里遺跡群でみられるような埴輪棺群や土壇墓群が挙げられる。土師の里遺跡では 6 期の埴輪棺や土壇墓が 30 基以上検出されている。埴輪棺は長さ 1～2m 程度のもので専用棺と転用棺があるが、大部分は副葬品がみられず、副葬した場合も刀子、鉄鏃、刀などが数点程度である。

### 3. 古墳時代中期における近畿地方の特殊性

上記のように、古市古墳群のような近畿地方中枢部の大規模な古墳群においては、古墳の階層性、規模の大小や構造の複雑さ、副葬品の多寡などにみられる階層性が高度に発達しており、政治・社会的にも非常に複雑な格差を表出していると評価することができる。

集成 6 期における古市古墳群においては、菅田御廟山（伝応神陵）古墳（●425m）>墓山古墳（●225m）>はざみ山古墳（●103m）>青山 1 号墳（73m）>小規模な前方後円墳や中小の方・円墳>土師の里遺跡群でみられるような埴輪棺群、などといった、少なくとも 5～6 層以上の階層的な関係性を把握することが可能であり、かつ、大規模な古墳には幾つかの陪塚的な小古墳が付属して存在している。

このような複雑な階層差の中でも、局地的な支群に限定していけば、もう少し単純化した階層関係を認めることも不可能ではないが、むしろ古市古墳群の大きな特徴としては、そういった各支群よりなる古墳群の上に、200mを超えるような、より大規模で隔絶した古墳がみられ、更にそういった大規模古墳にはそれぞれ陪塚が付属する、といった上部階層の複雑さにこそ求められる。そのことは当時の社会構造における上部組織としての政治的機関の存在を伺わせるものである。

この時期の大古墳に付属する陪塚については、武器を集積した大阪府七観古墳や、鉄製農工具を集積した大阪府西墓山古墳西列、鉄鋌を集積した奈良県大和 6 号墳、滑石製模造品を集積

した大阪府カトンボ山古墳など、器種分化に基づく大量埋納が明瞭なものが多く、こういった大量埋納の陪塚が、概ね古市古墳群など近畿中枢部の大古墳群にのみみられることから、近畿中枢部においては特定の職種や生産に携わった階層毎の政治的組織機構の整備が図られていた背景が推察されるのである。

いずれにせよ、古墳とは単なる墓ではなく、墳形、墳丘規模、占地場所、埋葬施設構造、副葬品の質量など、明確に階層序列や規範を有した存在であって、古墳時代の社会や文化は階層序列に基づく社会であったと捉えることが可能である。そして古墳の階層的な序列から判断すると、古墳時代は高度に発達した階層社会であるが、階層化社会を政治力学的に判断すると、それぞれの階層の利益や富を調節・維持するための政治力の機構整備や行使が不可欠であったと評価しなければならない。すなわち古市古墳群のようなあり方からは、社会の上部機構としての政治的組織の存在や充実という社会的な背景を積極的に読み取りたい。

### 第3節 古墳時代中期の鉄器生産について

#### 1. 古墳時代中期における鉄器生産について

武器の大量埋納で確認できるように、古墳時代は大量の武器・武具が生産・消費された時代であった。これらの武器が全て戦闘に用いられたとは断言できないが、武器とは本義的には戦闘のための道具である。古墳時代という社会は、数ある威信具の中でも、特に武器が選択され生産・副葬された社会であった事実は認めなければならない。

また、武器を必要とする軍事組織が存続するためには、鉄器の生産や補充は欠かすことができない重要な要素である。このことから武器や武具の生産量や保有数とは、その社会や集団の武装度や潜在的な戦力と非常に深く関わっているともいえるだろう。では、古墳時代中期における大量の鉄器はどのように生産・集積されたのであろうか。本章では次に、鉄器生産のあり方について検討を試みたい。

鉄器の生産遺跡の分類については坂靖や花田勝広の先行研究がある(坂 1998a、花田 1999)。以下ではこれらを参照として、古墳時代中期の鉄器生産を A 集中専業型、B 居館隣接型、C 集落付属型の 3 つに整理したい。なお、第 3 章の弥生時代の鉄器生産の項で述べたように、鉄器の生産は製鉄 (smelting) 工程、精錬 (refining) 工程、鍛冶 (smithing) 工程などの幾つかの工程があるため、必要に応じて生産の内容について注記する。



## (1) 集中專業型

A の集中專業型としては大阪府大泉遺跡・大泉南遺跡、大阪府綾南北遺跡、大阪府太平寺遺跡などが挙げられる。何れも部分的な調査であるが、大泉遺跡は河内地域の、太平寺遺跡は和泉地域の、現在知られている最大規模の鍛冶遺構・遺物の出土遺跡であり、太平寺遺跡は百舌鳥古墳群に、大泉遺跡は古市古墳群に近接して所在している。

河内地方の生駒山地南麓に位置する大泉遺跡・大泉南遺跡における鍛冶遺構の時期は 5 世紀～8 世紀まで及んでいる。同遺跡の特徴としては、器壁が 2～3 cm の大型専用羽口を用い、高坏転用羽口は皆無であること、大量の鉄滓と鍛冶炉、炭窯、石敷などの鍛冶関係遺構が確認されていること、韓式系の土器が出土しており、渡来人との関係性が考えられること、製塩土器も多数出土していることなどが挙げられる（古代を考える会 1991）。

下水道建設に伴うトレンチ調査が多いため遺跡の全容は不明瞭であるが、少なくとも 1,500 m<sup>2</sup> の調査面積で 390 kg の鉄滓、900 を超える羽口という多数の鍛冶関連遺物が出土している（北野（重）1991）。1 m<sup>2</sup> 当たりの平均値に換算すれば、鉄滓量は 0.26 kg、羽口は 0.6 個分が出土していることになる。大泉遺跡は東西 250m、南北 300m ほどの範囲で鉄滓や鍛冶関連遺物が検出されているため、遺跡全体（59,000 m<sup>2</sup>）では鉄滓 15 t、羽口 35,000 個という膨大な鍛冶関連遺物が埋没している推計となるだろう。

出土鉄滓の金属学的分析を行った大澤正己によると、大泉遺跡の鉄滓は鉾石系を素材とした、ウスタイトなどの全鉄分が 65.8% と高い鍛冶滓であるとしており（大澤 1991）、一方で、出土する大型の椀形滓などについては、精錬工程で多くみられるという指摘もあり（古瀬 1991）、実際はどのような鍛冶が行われたのかは、研究者の間でも意見の一致をみない。

鍛冶の操業は 5 世紀代に遡るが、時期的には 6 世紀代のものが多い。6 世紀後半～7 世紀にかけては大阪府田辺遺跡でも 1,000 m<sup>2</sup> の調査面積から鉄滓 500kg、羽口 421 個という大泉遺跡に匹敵する量の遺物が検出されており、北河内の大阪府森遺跡でも、5 世紀後半～7 世紀にわたる多数の鉄滓と鑊羽口、鍛冶関連遺構が検出されている。これらの遺跡のあり方から、河内地域における鍛冶の操業は 5 世紀より專業化が開始し、6 世紀にはより集約・大規模化し、大量な鉄製品の供給が可能になっていく状況が伺われる。

和泉地域の百舌鳥古墳群近隣には、大阪府綾南北遺跡、大阪府東上野芝遺跡、大阪府土師遺跡、大阪府太平寺遺跡などの 5 世紀代の鍛冶関連遺跡が存在する。これらの中では太平寺遺跡において、古墳時代中期の遺構面から大量の鉄滓、鑊羽口が出土しており、数量的には、太平寺遺跡第Ⅱ区（4,918 m<sup>2</sup>）から鑊羽口 62 点、砥石 11 点、鉄滓 440 個体（11.3kg）が出土して

いることから、和泉地域においては最も規模が大きい鍛冶遺跡であったと考えられる。太平寺遺跡の出土遺物は埋没河川や包含層出土が大部分を占めるため、生産の具体的様相は不明瞭であるが、同時に須恵器の不良品が大量に出土しており、須恵器製作や須恵器工人とも関連性のある鉄器生産遺跡であったと想定されている。

一方、綾南北遺跡、東上野芝遺跡、土師遺跡は共に百舌鳥古墳群に隣接した位置に立地している。この一帯は古代の大島郡土師郷に属し、土師部などの古墳築造や葬送儀礼に関与した地域であったことが指摘されており、綾南北遺跡からは鍛冶炉以外にも、木製鞍、鞘、木刀、田舟、織物などの木製品や製塩土器、石製刀子など、多様な生産関係遺物が出土しているため、鉄器やその他の手工業生産が一体となった大規模な専門的生産遺跡である可能性が高い（花田 1989）。

## （２）居館隣接型

B の居館隣接型の鍛冶遺跡としては奈良県南郷遺跡群、奈良県布留遺跡、奈良県名柄遺跡などが挙げられる。鉄器生産と豪族居館との関係性については、群馬県三ツ寺 I 遺跡において居館内部での鍛冶作業が報告されており、関東地方を中心にその関係性に注目が集まっている（橋本（博文） 2008、内山 2012）。

近畿地方では豪族居館そのものの様相が不明瞭であったが、調査事例の増加や遺跡の再評価を通じて 1998 年には 23 例の豪族居館が指摘されるに至り（坂 1998b）、豪族居館と類似した大型倉庫群にも学界の注目が集まった（積山 1990）。また奈良県南郷遺跡群で大規模な発掘調査が進展することで、坂靖を中心として豪族居館に関連した遺跡群の総合的な研究も進み（坂 2009）、豪族居館と鉄器生産についての検討材料も豊富になりつつある。

近年では豪族居館の代表たる三ツ寺 I 遺跡について、いわゆる“居館”であったのかに異論を唱える研究もあるが、少なくとも、これら遺跡が古墳時代の階層的上位に位置する人々の政治的・祭祀的な拠点であったことは疑いないであろう（坂 2013）。こういった拠点施設と隣接する鉄器生産のあり方を類型 B（居館隣接型）としてみていく。

南郷遺跡群は 5 世紀前半から 6 世紀を主とする大遺跡群で、遺跡範囲は南北 1.4km、東西 1.7km に及ぶ。遺跡地内は一般的な竪穴住居からなる居住地域（下茶屋カマ田遺跡ほか）、大壁建物や石垣を伴う掘立柱建物などからなる中間層住居域（南郷安田遺跡）、鉄器生産を始めとした各種工房群（南郷角田遺跡）、導水施設などの祭祀空間（南郷大東遺跡）など、いくつかのブロック的な区分が認められる。

南郷遺跡群内においては各種の手工業生産が盛んに行われているが、鉄製品については、一般住居の内外から韃羽口や鉄滓などの鍛冶関係遺物が広範囲にわたって出土しており、日常的に鍛冶活動が行われていた様子が伺われる。鍛冶関係の遺物総量としては鉄滓 32kg、韃羽口 61 個に及び、鉄器以外では銅や銀、玉・ガラス製品の製作も行われていることが明らかとされている。南郷角田遺跡では鉄・銅・銀・ガラス・鹿角・滑石などを含む焼土が広がり、土坑 (SK10) から小札片が出土しているなど、甲冑・刀剣などの武器も製作していた可能性が高い。

南郷遺跡群以外の居館隣接型鉄器生産遺跡としては、奈良県布留遺跡が挙げられる (山内 2008)。布留遺跡では、三島 (中里) 地区の流路跡から木製・鹿角製の木製刀剣装具が多数出土しており、製作工程を示す遺物も存在する。遺構は明らかでないものの流路跡から 30kg に及ぶ鉄滓が出土し、住居内から鉄鉗の出土もあるため (山内 1997)、付近で 5 世紀～6 世紀頃に武器工房が存在したことは明らかであろう。また、杣之内 (アゼクラ) 地区において、中期の掘立柱建物 2 棟以上と石葺の護岸がみかっており、居館の一部と推定され、宇久保遺跡においても一辺 60cm の巨大柱穴の掘立柱建物 (古墳時代後期) が検出されている。

このように布留遺跡においても、南郷遺跡群と同じように政治的拠点 (首長居館・大型住居)、鉄器工房群、竪穴住居群、祭祀地点、渡来系の人々の存在など、さまざまな様相が包括された大規模な遺跡が形成されていたことが判明しつつあり、奈良県名柄遺跡においても居館跡と鉄滓、碧玉チップ、木製刀把末製品などが出土しており、居館と手工業生産との関係を伺わせる (藤田 (和尊) 1991)。

### (3) 集落付属型

C の集落付属型の鉄器生産は主として鍛冶生産 (smithing) に伴うもので、大阪府長原遺跡、大阪府亀川遺跡、大阪府私部南遺跡などが挙げられる。大阪府長原遺跡の古墳時代集落は遺跡地の東西に広がっており、時期的には 5 世紀前半の東側の集落から、5 世紀後葉～6 世紀前半の西集落へと移動している。東集落においては大壁建物といった住居跡や馬の埋葬といった習俗の他に、初期須恵器、軟質土器、陶質土器、韓式系土器などが多量に出土しており、渡来人が形成した集落であった可能性が極めて高い。

古墳時代中期の鍛冶工房は NG02 - 8 区で検出された“コ”の字形の溝に囲まれた SB005・006 であって、この周辺からは台石や鉄滓が出土している。隣接する NG95 - 36 区からも韃羽口と椀形滓が出土しているが、これら鉄滓について金属学的分析を行った大澤正己は、NG95 - 36 出土の鉄滓を高温沸した鍛接滓、NG02 - 8 区出土の鉄滓を低温滓と報告し、長原遺跡の鉄

滓を鍛練鍛冶滓と評価している（大澤 2005）。

大阪府私部南遺跡では古墳時代後期の水田の他に谷、流路、溝などが検出されており、集落からは多数の竪穴住居や掘立柱建物が検出されているが、このうち、07 - 1 調査における平坦面 1 の 10 - 95 溝から轆羽口や鉄滓、鍛造薄片が出土しており、5 世紀後半以降と考えられる竪穴住居 13 でも轆の羽口や鉄滓、鍛冶炉が検出されている。また、06 - 2 調査区では 5 世紀末の竪穴住居 3 で多数の炭や焼土、鉄滓、轆羽口などが検出された鍛冶関連工房跡が検出され、06 - 1 区から鉄鋌が検出されるなど、製鉄関連遺構の存在から集落内の各平坦面で小規模な工房が展開していた遺跡と考えられている。一方で、集落内からは初期須恵器や韓式系土器なども出土しており、渡来人との関わりも指摘されているところである。

大阪府亀川遺跡においては古墳時代中期末～後期にかけて集落が営まれている。このうち 5 世紀末～6 世紀初頭の住居は住居 720、694、405 などが該当し、1 時期に 3～4 棟程度の竪穴住居が同時併存していたと考えられる。出土遺物としては鎌、鍬、鋤などの農具や錐、刀子などの工具、鏃などの狩猟具・武器といった実用的な鉄器の他に、紡錘車などの紡織具、土錘・石錘などの漁労具などが出土している。

亀川遺跡出土鉄器の多くは祭祀遺構と考えられる落ち込みや土坑から検出されているが、椀形滓や鉄滓、棒状の鉄製品、板状鉄製品などが出土しており、集落内において鉄器製作の鍛冶が行われていたことが推定される。長原、私部南遺跡、亀川遺跡の他にも、大阪府神並遺跡、大阪府深田遺跡、大阪府友井東遺跡などにおいて、鉄滓や轆羽口が出土する遺跡が幾つか知られており小鍛冶が行われていた可能性が指摘されているため（花田 1999 坂 1998a）、近畿地方においては小規模な鉄器生産程度は広範囲に行われていた状況が伺われる。

集落における鉄器組成に関しては、大阪府讃良郡条里遺跡での出土組成が参考になるだろう。讃良郡条里遺跡は河内牧が推定される大阪府葦屋北遺跡に隣接しており、馬匹生産に関わる特殊な遺跡が想定されるところであるが、自然流路や包含層から祭祀に用いられたと考えられる鉄鎌 1、刀子 2、釣針 1、鉄剣 1、鉄矛 1、鉄鏃 5 といった鉄器が出土しており、小型の工具類や武器類の生産や保有が集落内において可能であったことが伺われる。

以上、鉄器の生産遺跡を A 集中專業型、B 居館隣接型、C 集落付属型の 3 つに類型化した。このうち、A 集中專業型は他の鍛冶遺構と比較すると、専門的な大型羽口の存在や極めて大量の椀形滓などの出土から、精錬（refining）工程が行われていたと考えられ、花田勝弘が検討したように王権傘下の中核工房として評価でき（花田 1989）、B 居館隣接型は南郷遺跡群における木工・玉生産、ガラス製品の製作などから、有力豪族層が組織した様々な物資の生産を行っ

たものであり（坂 2009）、鉄器生産としては製品を製作する鍛冶（smithing）工程が主であったと考えられる。C 集落付属型は実用的な小型の道具類を製作（鍛冶生産：smithing）した集落鍛冶と考えられる。

このように鉄器製作の3類型については、遺跡の性格（鉄器の製作工程）に相違点が認められるものの、類型の差異を超えて渡来人の痕跡が濃厚である事例が多いことは共通している。ここでいう渡来系要素とは、大壁住居といった直接的な生活痕跡の他に、韓式系土器や初期須恵器などの物的な根拠が多いことから把握することが可能であるが、古墳時代中期の手工業生産が渡来系技術によって革新された、という見解は古くより指摘されているところでもあり、多言を必要とはしないだろう（藤間 1962、白石 1990）。短甲など武器の製作技術についても、渡来工人による新技術導入が説かれており（北野（耕平）1963）、鍛冶技術そのものも渡来系技術の関与が指摘されているなど（亀田 2000、花田 2000、真壁 2003）、古墳時代中期における武器製作や鉄器生産は渡来人との深い関係性を伺うことができる。

“渡来系の要素”という抽象化した表現を用いたが、坂靖は王権を支えた渡来系集団固有の性格として開発集団、鉄・鉄器生産集団、馬飼集団を挙げている（坂 2009）。別の視点からすると、亀田修一が指摘しているように技術・文化の伝播には必ずや“人”が介在しているのであって（亀田 2003）、当然、そこには渡来人たちの人的関係も考慮しなければならない。

中期における鉄器生産の3類型の差異を“人”レベルで考えると、鉄器生産工人の政治的な編成の相違がその背景に推定できるだろう。もう少し具体的に記述すれば、集中専業型の鉄器生産は、鉄製武器を大量に消費するといった、大古墳群の造営などに代表される“国家的”プロジェクト（註 31）のために設置された工房や鉄器の生産管理を、B 居館隣接型は大首長クラスによって管理・運営された鉄器の生産工房の人々を、C 集落付属型は渡来系の人々が関与した、小規模な集落内鉄器生産が行われていたと評価することができるのである。

このことに関連して、堀田啓一は大和地域と河内地域の生産遺跡の違いから渡来系工人集団の構成組織の差を指摘しているが、（堀田（啓一）1993）、古墳時代の鉄器生産の全体像について古瀬清秀は“政治権力を支えた鍛冶”と“村方鍛冶”の二つに分けている（古瀬 1991）。関東地方の鍛冶遺構としては通常の集落内に存在する住居兼用の竪穴鍛冶遺構（森戸類型）が主体となるが（内山 1998）、畿内地域における古墳時代においては、国家的なプロジェクトのための大規模な鉄器生産（refining）の管理や、大首長による複合的な鉄器生産や王権の政治的政策に基づく鉄器生産（smithing）が中心であったと評価することができる。

更に近畿地方における中期の集落付属型の鍛冶遺跡においては、長原遺跡で代表されるよう

に渡来的な要素が非常に強く、集落付属型とはいえ、それは自然発生的な集落内の村方鍛冶ではなく、王権の政治的政策に基づく、渡来系の人々の移住や配置といった政治性の高い集落（計画村落）（註 32）とその周辺において、集落内の鍛冶生産が行われたと考えられるのである。

#### 第4節 古墳時代中期の武装集団

第8章において、島内地下式横穴墓群の検討から、古墳時代中期の武装集団の実例を詳細に検討した。島内の事例は多数の未盗掘の墓が検出され、甲冑の副葬や保有をダイレクトに検討できる稀有な事例である。島内の事例は地方の個別事例1例に過ぎないのであるが、他方、これほど詳細に武器副葬の状況を構造的に理解できる遺跡も存在しない。

そこで、本節では島内地下式横穴墓群と同じような、中期を中心とする代表的な甲冑が出土する中小古墳群の具体的な事例を示すことで、甲冑を多数副葬した中小の古墳群の特徴を明らかにし、古墳時代中期における武装集団の具体像についての補強を試みたい。

##### 1. 奈良県後出古墳群

後出古墳群は奈良県東部の宇陀市にある口宇陀盆地の小丘陵上に立地している。古墳群は22基であるが実際に調査されているものは16基、これら古墳の墳形自体は8～18m規模の小円墳群で墳丘の形態や埋葬施設構造の差異は少ないものの、初期群集墳の中では特筆すべき多量の武器が出土している。

1号墳（○：15m）の主体部は割竹形木棺と考えられ、刀2、剣1、鉄鏃32、刀子3が棺内より出土している。2号墳（○：14m）は5mの長い墓壇に割竹形木棺を安置しており、棺の内外より玉類90、短甲3、刀4、剣4、槍2、矛5、弓金具3、鉄鏃104、刀子3、鏝2、鉋3、鉄斧2、鉄鎌1などが出土した。3号墳（○：13m）は2つの主体部があり、第1主体から短甲1、刀1、剣2、鉄鏃23、馬具1式、刀子2、鉄鎌1、針1が、第2主体から鏡1、櫛12、短甲1、刀4、蛇行剣1、槍1、弓金具1、鉄鏃73、刀子1などが出土している。6号墳（○：10m）の主体部（割竹形木棺）からは剣1、鉄鏃5、刀子1、鋤1、鉋2、針5、鏝1、砥石1が出土している。7号墳（○：12m）も主体部は割竹形木棺で棺内外より短甲1、刀4、剣4、蛇行剣1、槍2、鉄鏃180という大量の武器が出土している。8号墳（○：9m）の主体部も割竹形木棺と考えられ、刀1、鉄鏃2、刀子3、鉄斧1などが出土している。12号墳（○：11m）

の主体部は割竹形木棺で玉類 139、刀 1、鉄鏃 18、刀子 1 が出土している。14 号墳（○：8m）の主体部も割竹形木棺と考えられ、櫛 1、刀子 1、鉄鏃 4、鉄鎌 1 が出土している。15 号墳（○：7.5m）は割竹形木棺が設置されたと考えられる土壙から刀 1、鉄鏃 7、刀子 2 が出土した。16 号墳（○：11m）の主体部からは刀 1、鉄鏃 11、刀子 1 が出土している。17 号墳（○：7m）の主体部からは刀 1、刀子 1 が出土している。18 号墳（○：18m）には主体部が 2 基あり、第 1 主体は割竹形木棺で刀 3、剣 3、蛇行剣 1、鉄鏃 10、刀子 6 などが、第 2 主体からは刀 1、鉄鏃 1、刀子 1、鉄鎌 1 などが出土している。20 号墳（○：15m）は丘陵方向に沿って 2 つの主体部があり、第 1 主体は長さ 4.5m の割竹形木棺に鏡 2、櫛 6、玉類 24、刀 3、剣 2、矛 1、鉄鏃 26、刀子 4、鉄鎌 1、鉄鑿 1、鉄斧 1 が、第 2 主体からは刀 1、鉄鏃 51 などが出土した。

後出古墳群は短期間の中で築造されているが、3 号墳と 7 号墳がやや古く（7～8 期）、それ以外は 8 期を中心に築造されたといえる。このうち最も規模の大きい古墳は直径 18m の 18 号墳で最も小さいものは直径 7m の 17 号墳である。埋葬施設は何れも割竹形木棺であるが、2 体埋納がみられる 3 号墳と 18 号墳は古墳群内でも規模が大きく、副葬品量も 2 倍となる。

時期的にやや古い 3 号墳と 7 号墳を除いたもので、比較的規模が大きく、かつ丘陵頂点を占地して小グループの中心に位置づけられる古墳は 1 号墳、2 号墳、16 号墳、18 号墳、20 号墳である。中でも最も標高の高く平坦面が広い地点は 3 号墳や 7 号墳など、最初に古墳が築かれた場所でもあり、この地点の 3 号墳、1 号墳、2 号墳などが後出古墳群の最も中心的な古墳であったといえる。残りの 16 号墳、18 号墳、20 号墳は丘陵内のやや独立した高台に立地しているため、1～3 号墳と同等か、共同体内のやや劣位な指導者の墳墓であったと評価することができであろう。

これらの古墳の規模や副葬品、位置的なあり方から、後出古墳群における序列関係としては、古墳群内の支群において有力な位置を占める 1・2 号墳、16 号墳、18 号墳、20 号墳などを中心として、その周辺に数基の古墳群を配する 3～4 グループの小集団が存在する構造が想定される。これら各支群（小集団）の時期としては 3・7 号墳→1・2 号墳という、概ね 2 世代の首長が存在すると考えられるが、古墳の規模などから判断して、小集団間の格差は比較的小さなものであったと考えられる。

## 2. 滋賀県黒田長山古墳群

黒田長山古墳群は滋賀県北部、長浜市の大箕山の支丘尾根上に立地する 21 基の群集墳で、出土土器からは比較的短い時期（8 期）に相次いで築かれたと考えられる。盟主墳である 4 号

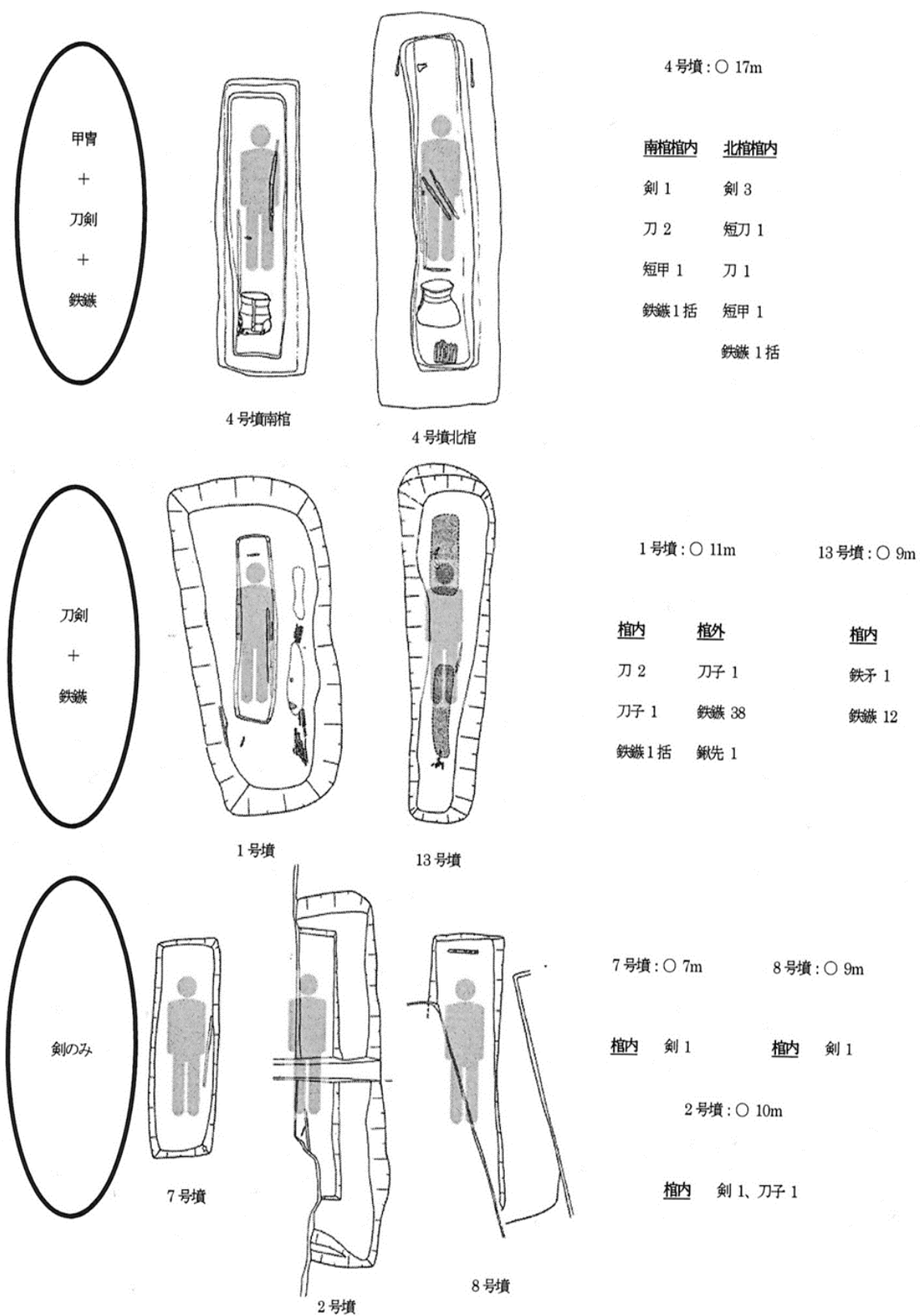


図 26 黒田長山古墳群における副葬武器の階層序列 (人型アイコン 1.5m)



墳を除けば墳丘規模も小さい円墳が殆どで、埴輪や葺石など外部施設も無く主体部も木棺を 1 棺直葬するのみであるため階層的な差異があまり認められない等質的な墳墓群である。ただし副葬品はほぼ鉄製武器で占められている点が特徴的で、被葬者集団の性格を現わしていると推定できる。

個々の古墳をみると、黒田長山 1 号墳（○：11m）からは刀 2、鉄鏃 38、刀子 2 が、2 号墳（○：10m）の棺内からは剣 1、刀子 1 が出土した。5 号墳は 10m の円墳で棺上に鉄斧 1 を伴った主体部が存在し、7 号墳（○：6m）では木棺直葬の主体部に並行して刀 1 が、8 号墳（○：9m）の棺内からは剣 1 が出土した。9 号墳（○：7m）も棺内から刀 1、10 号墳（○：7m）からは刀 1、刀子 1 が出土した。また 13 号墳は削平されていたものの（復元径 9m）主体部の棺内から鉄鏃 12、刀子 1、鉄矛 1 が出土し、14 号墳（○：6m）の木棺内からも剣 1 と鉄鏃 17 が出土している。この他の 3 号墳（○：10m）、6 号墳（○：10m）、18 号墳（○：9m）、19 号墳（○：9m）は出土遺物が無いか土器が検出されたのみであり、11 号・12 号・16 号・17 号・20 号・21 号墳は削平が激しく出土遺物は皆無か、土器片が出土したのみであった。

これらのあり方から、黒田長山古墳群が具現する集団間の階層差は 4 号墳>その他の円墳という構造が把握できる。より細かくみれば、4 号墳以外の円墳群は古墳構造や埋葬施設から基本的には等質的であるものの、副葬品に関しては鉄製武器があるもの（1 号墳、2 号墳、5 号墳、7 号墳、8 号墳、9 号墳、10 号墳、13 号墳、14 号墳）と、鉄製品が存在しないか若干の土器のみを副葬するもの（6 号墳、11 号墳、12 号墳、16 号墳、17 号墳、18 号墳、19 号墳、20 号墳、21 号墳）との二者が認められ、かつ、鉄製品の副葬品の中でも、刀剣・鉄鏃・刀子などを含むものから、刀子のみの少量を副葬するといった、僅かな階層差を現わしている可能性が推定できる（図 26）。

### 3. 群馬県金井東遺跡

古墳資料ではないが、近年発掘された群馬県金井東裏遺跡の甲着用人物の事例を参考までに挙げておく。本遺跡からは実際に甲冑を着用した人物が出土しており、当時の武人のあり方を考察する上では極めて重要なのであるが、現在調査中で報告書も未完であるため、これまで公表された資料の概要と予察に留めておく。

金井東裏遺跡では、6 世紀初頭の火山灰層（FA）に覆われた状態で、甲を着用した人骨が出土している（杉山（秀宏）ほか 2014）。甲を着用した人物が検出されたのは金井東遺跡の第 4 区で、甲着用人骨（1 号人骨）の他に成人女性（3 号人骨）と乳・幼児（2・4 号人骨）の 4 体が

検出されている。1号人骨は身長163cmの成人男性で、火砕流積載物に覆われ、両腕とも肘を曲げて、手のひらを顔の近くに置いて、両膝を地面につき、うつ伏せで倒れていた。装着していた甲は小札甲、冑は横矧板鋌留衝角付冑で付属具は認められなかった。また腰部には提碁と刀子を吊り下げていた。

1号人骨の西隣からは鉄鏃20点が、その西には骨製小札を含む2号甲が出土し、更に南西5mからは鉄矛が出土しているため、この人物は武器としては鉄矛と鉄鏃とで武装していたと考えることができる。周辺の道路からは足跡が検出されており、火山灰降下後、歩いて移動している途中で火砕流に遭遇した状況が伺われる。

ところで金井東裏遺跡の所在する群馬県渋川市は前方後円墳の認められない地域であり（桜岡2014）、人骨が検出された隣接地で、FA層に覆われた（人骨より少し前の時代の）円墳が2基検出されている。これら古墳の規模は8m～16mの非常に小さな円墳で、鉄剣、鉄刀、鉄製工具、砥石などが出土しているが甲冑の出土はない。

金井東遺跡の1号人骨が被災した地点（出土位置）を重要視して、甲着装人骨が小円墳の被葬者集団と関連がある人物であるとするならば、6世紀初頭前後における古墳時代の関東地域では、直径数m～十数mの小円墳を築く集団でさえも、甲冑を着用し、矛や鏃で武装していた可能性も想定される。

#### 4. 古墳時代中期における武器副葬集団について

第8章において島内地下式横穴墓群の詳細な事例研究を試み、本章において、古墳時代中期を主とする同様な武器副葬集団の幾つかを検討した。これらの結果を受け、古墳時代中期の軍事組織のあり方を考察しよう。

第6章と本章でみたように、古墳時代中期においては、近畿地方において大量の武器の副葬が行われている。また第8章の島内地下式横穴墓群の個別事例で検討したごとく、ヤマト中央政権は、これまでの伝統的大首長に代わり、地域の小首長ないし小集団を直接把握・組織していったという政治的背景が考えられる。

ところで、上記のような政治的プロセス、すなわちヤマト政権が、古墳時代中期に地域の小首長を取り込んでいく事象は、これまでの考古学研究においても比較的一般に描かれることの多かった歴史像である。例えば、甘粕健は関東南部の古墳群を分析する上で大和政権等は新興の家父長層の一部に身分的な特権を与え、武器を供与することによって、親衛軍にしたとあげたと考察し（甘粕1970）、藤田和尊は中期における中・小古墳での甲冑副葬が全国的にみられ

る変化は、和泉・河内の政権が旧来の在地首長層を牽制するための新勢力を勢力下におさめる政策の顕現と考えた（藤田（和尊）1988）。全国的古墳築造の諸段階を検討した和田晴吾も、中期を前後する画期において首長層の階層分化や新興の中・小首長の組み込みを想定している（和田（晴吾）1998）。本論文の第7章でも、副葬武器の価値的な問題から、中小古墳の被葬者層の背後に軍事組織の可能性を指摘したところである。

このように既往の研究において、中期のヤマト政権が新興の中小集団を政治的に組み込んでいったという現象や歴史観は繰り返し指摘されているところである。第8章の島内地下式横穴墓群の事例や、本章の武器を多量に副葬する中・小古墳群の成立に関しても、このような汎日本列島の政治的プロセスの個別具体例として把握しなければならないだろう。

島内地下式横穴墓群の分析によって、これら武器を多数副葬する古墳時代中期の中・小規模の共同体としては、複数の系統で構成された、2～3程度の緩やかな階層差を有する、比較的に格差の小さい等質的な集団であったと推定した。この集団は威信財を副葬したような一族の代表者を中心として血縁で結ばれた数百人規模の在地の共同体であり、直接にヤマト政権と交流を持つなど、軍事に特化した武装集団であった蓋然性が高いであろう。

集団において戦闘に動員される人数の割合をアンジェイエフスキーは軍事参与率（Military Participation Ratio）と定義付けたが（アンジェイエフスキー2004）、軍事組織の性格を決定付ける上で、その集団における軍事参与率の割合は非常に重要である。

島内集団の場合、被葬者の3分の2は鉄鏃などの鉄製品を副葬しており、集落内で鍛冶生産を行っているため、小型武器の自弁や保有数は多く、軍事に携わる人々の割合は比較的に高い集団であったといえる。

結論として、島内地下式横穴墓群や、本節でみたような古墳階層的には不相応な武器を多量に副葬する中・小の古墳群の被葬者集団像としては、軍事参与率が高い在地の小集団、軍事的な専門性の高い武装集団であったと評価することができる。これら武装集団の成立を古墳時代中期における汎日本列島の政治的プロセスの一環として認めるならば、中期ヤマト政権は、専門性の高い地方の武装小集団を点的に組み込んでいくことにより、全国的な軍事組織を構築・整備していったと評価することができるのである。

## 第5節 古墳時代中期社会における軍事組織の構造

軍事機構が組織されるための前提には、武器の生産が欠くことができないが、古墳時代中期においては、近畿地方で大量の武器・武具の生産と管理が行われていたと考えられている。本章でも確認したように、古墳時代中期の近畿地方においては古市・百舌鳥古墳群の隣接地や政治的拠点（豪族居館）などを中心に、大規模に鉄製品が製作されていた状況が伺われるのである。

鉄器生産の大規模化のみに留まらず、古墳時代中期の近畿地方では須恵器生産（大阪府大庭寺遺跡、大阪府茄子作遺跡）や馬匹生産（大阪府讃良郡条里遺跡、大阪府薮屋北遺跡）など、新規の渡来系技術を多方面で受容しており（財団法人大阪府文化財センターほか 2006 年）、こういった大規模で専門的な生産活動は、大阪府法円坂遺跡などの大型掘立柱建物群に象徴されるように（大阪歴史学会 1989、細川 2003）、大量に生産・集積（保管）され、流通や配布、消費、副葬などに用いられたと考えられているところである。

かかる生産活動や経済的な背景の下に、近畿地方においては武器の生産・保管・消費の経済的システムが形成されたと評価することができる。個々の武器研究では、定形的な帯金式甲冑の出現に生産上の転換点が指摘されているが（野上 1968、小林（謙一） 1974）、帯金式甲冑の出現は単に甲冑だけの問題ではなく、政治的意図をもって創出された古墳時代中期開始の指標とする見解も表明されており（橋本（達也） 2005）、鉄器生産の専門化と大量の武器（甲冑）生産は、時代区分の指標となるような重要な社会的画期であることを意味している。

上記のようなシステムの構築により、古墳時代中期には、大量の武器の生産・配布・埋納などを遂行した政権の存在が把握でき、同時に、一定の組織化を達成した軍事組織が形成されていたと評価することができるのである。考古資料の限界性から、その軍事組織が親衛軍であるか、常備軍であるかなどの詳細な性格づけは極めて困難であるが、中期後半の野中古墳や黒姫山古墳にみられる、武器の実用的な取り扱いといった社会的背景から考えて、ヤマト政権の中核部には大量の武器を取り扱う専門的な武装集団が組織化されていた蓋然性が高い。

一方、古墳時代中期における地方の軍事組織像としては、第 8 章や本章で検討したように、中・小の武器を大量に副葬（保有）する集団が存在している。これらの集団は、比較的小規模で等質的な、武器を取り扱う集団が比定できた。特に、第 6 章でみたように、古墳時代中期では、全国各地において墳径 20m 以下の小円墳被葬者で甲冑や武器に副葬が特化した被葬者に甲冑副葬Ⅰ型が多いため、日本列島各地においても在地の首長層を中心にして軍事に特化した軍事小首長が広範囲に成立していたと考えられる。

これらの知見を総合して、古墳時代中期の全体的な軍事組織像を復元してみると、まず、中

期ヤマト政権の中枢部では、大量の武器の生産や配布などを管理し得た政治機構が形成されており、これに対応する形で武装集団の軍事組織化が整備していったと考えられる。

一方、中央と地方との関係性においては、武器の配布などを通じたヤマト政権を求心的にし、地方の中・小首長層の軍事的な武装集団が関連づけられ、階層的・重層的に交差しながら、広域な全国規模での有機的な軍事組織が形成されていた状況が復元できる。

以上で検討した古墳時代中期の軍事組織の最大の特徴は、武器の実用面を重視し、埋葬に際して武器を副葬した中・小の首長層を基盤とする、専門性の高い、職業戦士的な武装集団が中核になり組織化されていたと考えられることに尽きる。このような軍事組織の形態を歴史的に位置づけるならば、古墳時代中期とは、不完全ではあっても、単なる豪族軍の寄せ集めの組織を脱し、専門性の高い武装集団を中核として、全国的な軍事機構が構築された段階と評価することができるのである。

考古学的な検討のみでは軍事組織の詳細な内容、例えば軍事的職名やそれぞれの権限、兵数、上番や傭兵の有無、戦時と平時の差異や、組織の常備性といった個別の内容については、副葬武器という考古資料のみの検討では不明瞭とせざるを得ない。しかしながら、既往の研究成果にみる古墳時代中期の鉄器生産・保管・配布・副葬といった考古学情報や、本論で検討した社会的背景の考察の結果では、古墳時代中期の軍事的な側面は極めて複雑な社会的様相を示している。

当時の軍事組織は漠然とした豪族軍の寄せ集めのイメージのみでは、決して説明することはできないのであって、研究の進展に伴い、より具体的な軍事組織像の提示が求められていくであろう。

以上、第6章と第7章における副葬行為における社会背景の分析から、古墳時代中期の軍事組織を復元できる可能性を見出し、これに基づいて第8章と第9章において古墳時代中期の社会構造について検討を行い、広域な軍事組織の存在が復元できた。次章ではこれに続く古墳時代後期における武装集団の様相について検討を行いたい。



## 第10章 武人埴輪からみた古墳時代の武装集団モデル





## 第10章 武人埴輪からみた古墳時代の武装集団モデル

### はじめに

本論文においては、様々な資料や学術的成果を基にして戦争や軍事組織の研究を試みているが、そもそも考古資料は断片的なものが多く、考古学の研究は常にその僅かな断片から全体を復元しなければならないといえるであろう。しかし僅かであるからこそ、その資料は多いほうが望ましいし、複数の資料による多方向からの分析と検証が不可欠である。

戦争の研究を考古学の分野から推し進めた佐原真は、戦争の考古学的事実として、A 防御集落、B 武器、C 殺傷人骨、D 武器の副葬、E 武器形祭器、F 戦士・戦争場面の造形の6つを挙げた（佐原 1999）。このうち、A（防御集落）、B（武器）、C（殺傷人骨）、D（武器の副葬）については第1章から第9章までの各章で検討を重ねてきたが、Fの戦士・戦争場面の造形について言及するところは少なかった。

資料の希少性がその理由の一つであるが、古墳時代においては武人埴輪という戦士を造形した資料が存在している。そこで本章では武人埴輪の“戦士の造形”という側面に注目し、これを主な資料として、古墳時代後期における武装集団について考察してみたい。

### 第1節 武人埴輪の研究史

武人埴輪を包括した広義の人物・形象埴輪の主な研究方向としては、過去の風俗を取り扱うもの、編年や型式分類を行うもの、製作技術や生産・分布を対象とするもの、埴輪配列など古墳祭祀の意義や体系を明らかにするもの、などが主要な議論の的となっている。

武人埴輪を用いて正面から軍事組織を究明した研究はほぼ皆無であるが、これまでも、上記の研究範疇の中で武人埴輪の軍事的な側面についていくつかの言及がみられた。

研究初期(1940年代以前)における人物埴輪の研究は、主に風俗的な解明を主眼としており、その中において高橋健自は「埴輪土偶に現われたる武装」と題した一文で、武人埴輪に表現された挂甲や短甲、肩鎧、衝角付冑、眉庇付冑、籠手などについて検討を行ない、往時の武装を考証している（高橋（健自）1926）。冑や盾などの個別研究を推し進めた後藤守一も、武器・武具を研究する中で、武装埴輪や武器形埴輪を参照しているが、より網羅的・概説的な参考資料

として用いることが多く、特に武人埴輪のみに特化して研究を行っているものではない（後藤 1942a、b）。これら初期の研究段階では武器を身にまとった埴輪の資料収集は盛んであったが、これを用いて学術的に軍事組織を検討するような視座は、未だ存在していなかったといえるであろう。

1940年代までに主流であった埴輪から往古の風俗を検討する研究は、1950年代以降にはやや下火にはなるものの、埴輪の服飾（佐田 1974、市毛 1991、武田 1993、塚田 2010）や赤彩・入墨関係（市毛 1964、1969、伊藤（純） 1984、市丸 1996）といった風俗的な解明は現在でも人物埴輪における研究課題の一つである。近年においては、研究初期の素朴な風俗研究と比較すると、より階層や職掌など当時の社会復元が視野に入れられており、埴輪の階層的な構造が明らかになってきた。

埴輪から階層や職掌などを検討することは社会復元上の大きな進歩であるが、武人埴輪については単純に“武人”という職掌的な人物と目されることが多く、そこから一步進んで、政治組織としての軍事組織の構造まで言及する研究は行われていない。

一方、主に 1950 年代以降の発掘調査の進展によって埴輪における編年や型式分類、製作技術や生産・分布研究、埴輪配列の分析を通じて埴輪祭祀の意義や体系を検討すること等が人物埴輪研究の主流になっていった。

このうち、埴輪配列を巡る研究は、既に戦前よりその萌芽をみるが（島田 1929、谷木 1930、後藤 1931）、水野正好による「埴輪芸能論」の発表後、学界においては埴輪列の意義を巡って活発な検討が試みられた。埴輪配列の分析について、以下では研究の画期となった水野正好の「埴輪芸能論」を振り返りつつ（水野（正好） 1971）、その方法論的な課題や前提を精査してみよう。なお、以下で「水野論文」やその引用文は全て上記の論文を指す。

水野論文では、最初に人物埴輪群像の特色を「豪族の職業集団であり、朝廷でいうならば、外廷を構成している「部」の一部にあたる性質をもつ」と評価する。すなわち、水野正好は人物埴輪群像を豪族の政治機構の集約とみなすことから研究を開始したのである。

この、人物埴輪群を政治機構の表出とする新鮮な視点によって、これまで古代の風俗や美術的鑑賞的に過ぎなかった人物埴輪は、歴史的な資料として位置づけることが可能になった。これが水野論文の学史上における画期的な業績の一つである。

さらに水野は、政治機構の集約という埴輪配列の静的な情景に、当時の“リズムや音”を与えることを試みた。具体的には、豪族のもとに組織された各職業集団は、「その職種に基づく姿態なり、舞なり、歌によって、古墳祭式に参加し、埴輪とされているのであって、組織と芸能

がそこでは一本化している」と論じることで、氏の埴輪芸能論の主題が立ち現れてくる。

豪族に組織された政治機構（職掌）と、それぞれの芸能による儀礼への参加という論理から、水野は埴輪で表現された芸能は、単なる宴における遊びしぐさではなく、極めて政治的要素の強い芸能であって、その意味するところは「新たにたつ族長に、つかえることを表現するもの」と結論付けた。ここにおいて、学史上著名な埴輪群像の首長権継承儀礼説が導かれ、大いに流布される。

水野論文の最も基礎的な視点は繰り返すように、人物埴輪が政治機構（職掌）を表すという前提にあり、その当然の帰結として、水野は盾持ちの埴輪を門部に、武人の埴輪を太刀佩部・韃負部などにそれぞれ対比させて軍事的な職掌集団（軍事組織）を想定する。

その後の埴輪配列を巡る研究については、埴輪を“群”として捉え、それに意味を付与する、という水野の研究方法は継承されるものの、人物埴輪群から政治機構に言及する分析は極めて少ない。埴輪配列に関する研究の視座は、埴輪配列の背後にある政治構造の解明よりも、むしろ、市毛勲のいう“列と隊”（市毛 1985）などの配列を有機的な集合体と捉え、その表現された情景や姿態について儀礼的な意味付けを行うことに研究が集中していったのである。

水野論文以降の埴輪配列に関する研究は、大別して個別の古墳出土事例を分析する方法と、その普遍的・構造的な把握を試みる方法の2方向とに研究が細分化していくが、その評価として殯説、供養説、犠牲説、神宴儀式説、顕彰説、神仙世界説、死後の近従説など様々な仮説が乱立するといった問題が生じることになり、近年では、お互いの方法論を巡って批判も生じている。すなわち、塚田良道は埴輪配列の解釈について、個々の古墳を対象に各研究者が個別的行った解釈に関して、その法則性や普遍性の欠如を指摘し（塚田 2001）、対して日高慎は法則性や客観性の重要性を示しつつも、解釈や結論を導くためには、多少なりとも論理の飛躍が必要であると反論している（日高（慎） 2002）。

本章の立場としては、序章や第6章の方法論に関して述べたように、遺構の検討などを通じて社会的な背景を復元することで、具体的な戦闘像や武装集団の解明を目指したい。そのために、埴輪群像について見解が乱立する個別具体的な儀礼の内容については参考とするが深追いをせず、形象埴輪の持つ象徴的な価値や、人物埴輪の政治的階層性といった、社会性や集団性に還元した命題について検討することにしたい。特に、研究の嚆矢たる水野論文に立ち返り、武人埴輪を政治的な職掌とみなして、その軍事組織の集団的構造について考察を行う。

ところで、人物埴輪の一分野たる武人埴輪の個別研究としては、その型式分類や、配置位置といった、考古学的な基本的諸属性（塚田 1999）に留まらず、埴輪の軍楽隊という存在から戦

術の変化を読み取る研究（塚田 1994）や、盾持ち埴輪や盾形埴輪などを資料として律令軍制との関わりを論じる研究（津野 2011）など、近年においては武人埴輪の軍事的要素についても次第に注目されてきている。

また、特に森田悌が埴輪の祭祀の意味を考えることから派生して武人埴輪に注目し、武人埴輪を軍事と関連づけて論じている。その結果、武人埴輪を將軍層が宴席の場で久米舞に通じる陣舞を舞う像と評価し、首長－將軍・別將－従兵、人夫、獵人という軍事組織像を提示した（森田（悌）2001）。武人埴輪の分析から軍事組織の構造を示唆した森田の研究は、今後の研究動向を参照する上で極めて重要である。

本章においては、近年研究が盛んな埴輪配列の成果などを基礎に、埴輪配列の研究でこれまで視点が欠けていた、武人埴輪の軍事面における社会的な側面について分析を行い、その階層的な構造や埴輪配列での役割の分析から、古墳時代における軍事組織について考察を試みたい。

## 第2節 武人埴輪の分類

検討の開始に当たって、本節では武人埴輪の分類についてまとめておく。武人埴輪を含む広義の人物埴輪の分類については各部位の形態を中心とした分類（稲村 1999、塚田 1996）、人物の種類（職掌）を中心とした分類（車崎 2004、井上（裕一）2004・2005）などがありそれぞれ詳細であるが、武人埴輪そのものについては亀井正道や塚田良道が武人埴輪を大きく3つに区分している（亀井 1995、塚田 1999）。

本節では、上記の研究を参考としながら、武人埴輪の最大の特徴である武器・武装に着目して、武人埴輪をⅠ類（籠手＋刀の軽装備）、Ⅱ類（重装備）、Ⅲ類（軽武装その他）、Ⅳ類（盾持）の大きく4つに区分したい。

上記区分のうち、武人埴輪Ⅱ類が亀井分類の「甲冑着用武人」、塚田分類のVa～c に、武人埴輪Ⅲ類が亀井分類の「軽装の武人」、塚田分類のVd に、武人埴輪Ⅳ類が亀井分類の「盾持人」、塚田分類のVe に該当する。武装した人物の区分は先行研究とほぼ同じであるが、本論の特徴は防具として籠手、武器として刀剣を所持した人物を軽装備の武装した人物として捉え、3つに区分されていた武人埴輪に武人埴輪Ⅰ類を追加したところにある。

以下、それぞれの武人埴輪の様相を概観する。

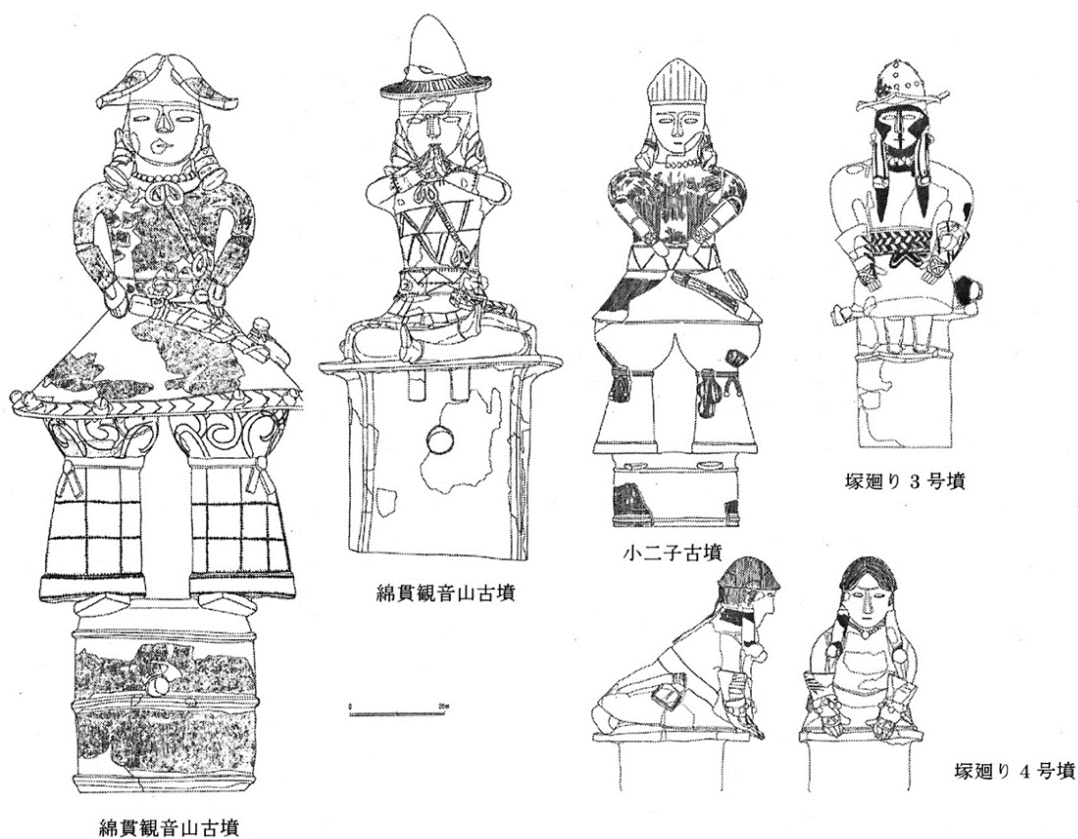


図 27 武人埴輪Ⅰ類

### 1. 武人埴輪Ⅰ類（籠手+刀剣による軽装備）

武人埴輪Ⅰ類は防具としては両手に籠手を着装し、武器として刀剣を佩用する軽装備の武人像である(図 27)。武装の共通性が認められるものの、それぞれの所作には様々なものがあり、立像、跪座、座位など極めて多様あって、このことが武人埴輪Ⅰ類の大きな特徴の一つとなっている。

このうち、全身立像としては群馬県綿貫観音山古墳出土例や、群馬県小二子古墳出土例など、比較的多くの事例を挙げることができる。

綿貫観音山古墳の振り分け髪で腰に手をあてた男子像は双脚も表現した全身立像で、下げ美豆良を肩まで垂らし、襟は左前で大きな結び紐が2つ表現されている。衣は筒袖が肘まで伸びており、手首から肘までは手甲と籠手の防具が着装され、上衣の腰から下では端部を肥厚させ鈴が付き、腰部には鞆尻を斜め下に向け、円形柄頭の大刀を佩用している。また腰帯部分にも鈴の表現がみられ、鞆が吊り下げられている。脚部分は大口の太い禰を脚結で結び、扁平な靴を履く。

椅子に座るものとして群馬県塚廻り3号墳の男子埴輪では、半球形で装飾が施されたたつば付

きの山高帽をかぶり、太い下げ美豆良は胸あたりまで垂れ、首輪を巻く。この資料では上衣の表現は不明瞭であるが、幅広の帯を締め、椅子に腰かけて手甲と籠手をはめた両手を膝の上に置き、椅子の左側には刃部を下にした玉纏大刀を置いている。

あぐらをかく姿としては福島県神谷作 101 号出土例がある。これは鈴を付けた天冠を被り、髪形は肩まで垂れる下げ美豆良で耳は耳環で飾っている。冠、顔、衣などに赤彩が残っており、前へ突き出して合掌した腕には手甲、及び三角文の装飾の入った籠手を装着する。上衣にも三角文の模様が認められ、あぐらをかき左腰に柄の曲がった刀と鞘を下げる。

跪づく姿としては群馬県塚廻り 4 号墳出土例、茨城県青木出土例などがある。塚廻り 4 号墳の事例では平坦な台上に膝を折り、両手をつき、顔を前方に向けた姿勢をとる。髪形は振り分け髪に美豆良で、背中へ垂髪を下ろしている。両手には手甲と大きな籠手を装着しており、籠手の上に鈴のついた釦をはめ、右腰には革製の鞆と鹿角製刀子を帯びる。茨城県青木出土のものも、作風は異なるものの、同種の姿態で膝を折り、両手をつき、その腕には籠手、腰には大刀を帯びている。

その他のスタイルとしては籠手をはめ、左腰に大刀を帯び、琴を弹奏する群馬県朝倉出土例や、籠手をはめ、大刀や鞘を下げ、左手には鷹を乗せた群馬県上淵名出土例、顎鬚を生やして大刀を吊るす千葉県姫塚古墳出土例など、Ⅰ類の武人埴輪像は様々な所作をとり、服飾や帽子などは多様かつ個性的であるが、いずれにおいても腕に籠手を装着し、大刀や弓矢などで武装している男子像であることは共通点として指摘することができる。

## 2. 武人埴輪Ⅱ類（重装備）

甲冑や武器の重武装の表現をした武人埴輪は、大きく抜刀スタイル（Ⅱa 類）と両手を広げたり上げたりするもの（Ⅱb 類）とに分かれる(図 28)。

このうち、冑と甲を着装した抜刀スタイルの武人埴輪Ⅱa 類は関東地方に広く認められる定形スタイルであるが、より細かくみても北関東西部（両毛地域）、北関東東部（常陸地域）、関東中～関東南西部（武蔵～上総地域）の主に 3 地域とで、特徴的な製作技術や作風の違いが知られている。

北関東西部（両毛地域）の武人埴輪Ⅱa 類は写実的でフル装備の全身像が顕著である。国宝として著名な群馬県太田市出土の武人埴輪（東京国立博物館所蔵）は衝角付冑と挂甲の武装に肩甲、膝甲、籠手、臑当などを装着し、右手は腰に帯びた大刀に手をかけ、左手には鞘を巻き付け、弓を持ち、背中には鞆を負っている。



図 28 武人埴輪Ⅱ類

杉山秀宏の調査によれば、東毛地域の定形的な抜刀スタイルの武人埴輪は 6 世紀前半の群馬県上芝古墳出土例、群馬県高塚古墳出土例などを祖型とし、その技術的系譜を受け継いで 6 世紀後半に群馬県太田市周辺にて同一の製作技術で武人埴輪が作られ、靫を背負うもの（相川考古館所蔵品、東京国立博物館所蔵品）と胡禄を提げるもの（シアトルアジア美術館所蔵品、国立歴史民俗博物館所蔵品、天理参考館所蔵品）との 2 者があるとされている（杉山（秀宏）2009）。

太田市周辺で製作されたもののほど写実的ではないが、群馬県綿貫観音山古墳出土例や、栃木

県中山 8 号墳出土の武人埴輪も、抜刀スタイルの全身武人像（Ⅱa 類）であり、このような抜刀スタイルが人物埴輪の造形上で定形化していたことを物語る。

一方、北関東東部（常陸地域）でも抜刀スタイルの武人埴輪（Ⅱa 類）が多いが、この地域では上半身と下半身とを分離して製作するという、製作技術上において特徴的な一群の武人埴輪が存在している。分離製作による抜刀スタイルの武人埴輪Ⅱa 類としては、茨城県玉里舟塚古墳出土例や茨城県北屋敷 2 号墳出土例、栃木県鶏塚古墳出土例などが代表であり、茨城県不二内古墳出土例なども腕部を欠損しているが、分離成形で抜刀スタイルの全身武人像であったと考えられる。

このような分離成形技法の生産地は、茨城県八幡北山埴輪窯跡と茨城県馬渡埴輪窯跡とで確認されている（稲村 1999）。出土数の多い茨城県玉里舟塚古墳をみると、10 個体以上の分離整形による武人埴輪が出土しており、冑と甲とを着装し、右手が大刀の柄に手をかけた抜刀スタイルのもの（Ⅱa 類）だけに留まらず、挂甲を着用し、冑は着用しない抜刀スタイルをとるものや、他に類例の乏しい両手を突き出して矛（槍）をかまえた武人埴輪などの豊富な種類が認められる。なお、常陸地域には八幡北山埴輪窯跡や馬渡埴輪窯跡とは異なる系統の人物埴輪を生産した茨城県元太田山埴輪窯跡が知られており、武人埴輪に限っても分離成形以外のものも存在する。

関東中～関東南西部（武蔵～上総地域）においては、上述してきたものとは異なる作風による抜刀スタイルの武人埴輪が知られている。埼玉県生田塚埴輪窯跡群において出土している武人像は衝角付冑と挂甲を着装し、右腕で大刀をつかんだ典型的な抜刀スタイルであるが、目の表現がたれ気味である点や、肩の張りが大きく腕が棒状である点、基部が長楕円形で低位置に凸帯を巡らし前後左右の 4 ヶ所に円孔を空けるなど、生田塚埴輪窯の他の人物埴輪との強い共通性を有している。生田塚埴輪窯産の埴輪については主に関東中～関東南西部（埼玉県南部～千葉県北部）に供給されていたことが明らかにされているため（山崎（武）1995、大谷 2001）、この地域においても定形的な抜刀スタイルの武人埴輪が流通していたことが推定できる。

しかしながら、むしろ、下総型埴輪が分布する関東中～南部地域においては、冑と甲を着装し両手を広げたり下げたりする武人埴輪Ⅱb 類が多い。この地域の武人埴輪Ⅱb 類は直立の半身像が多く、東毛地域の写実的な埴輪と比べると省略化が顕著である。千葉県殿部田 5 号墳出土品のうち全形を把握できる 2 体の武人埴輪をみると、何れも衝角付冑と挂甲を着装し、腰に刀剣を帯びている。作りは粗雑で足の表現がみられず、極めて短い腕が付き、右手を前や上に掲げ、左手は横に下げている。このような短い右手を前に、左手を下にした所作の武人は千葉



県小川台 3 号墳の武人埴輪にも認められ、歌舞か何かの所作を示すものかもしれない。

Ⅱb 類の全身像としては、千葉県小川台 5 号墳の武人埴輪は衝角付冑と挂甲を着装し、腰に大刀を帯びていた痕跡が残っている。甲冑の表現は雑であり、右手は失われているが、左手は短く広げる。埼玉県瓦塚古墳出土品は衝角付甲と鉾留式短甲を着用した全身像であるが、腕は非常に短く前に突き出している。神奈川県登山 1 号墳の武人埴輪は衝角付冑を着装し、かつて鷹掌とされていたが、腰に大刀を帯びた全身像であり、右手を前に突き出している武人埴輪である。

### 3. 武人埴輪Ⅲ類（軽装備その他・弓矢を所持しているもの）

武人埴輪の中では弓矢を所持している軽武装の武人埴輪が存在している。関東地方では、このⅢ類武人埴輪は数が少ない。具体的な事例として弓矢と鞆を所持した人物埴輪は、茨城県玉里舟塚古墳出土例や群馬県今井神社 2 号墳出土例、北方文化博物館所蔵の伝茨城県出土人物埴輪などが挙げられる。このうち、今井神社 2 号墳の埴輪は背に鞆を背負い、左腕に弓を横たえ、腕に籠手を装着しており(図 29)、伝茨城出土品は背に鞆を負い、大刀を佩いている。

このような、甲冑を着用せずに弓矢（鞆）を所持したものとしては狩人の指摘もあるが、亀井正道は軽装の人物像は大部分が半身像で、全身像の多い挂甲武人像に比べると、形態と装備の面で格差があるとし、武人間の格差(身分差)を指摘しており、筆者もこれに従う(亀井 1995)。

なお、近畿地方では重武装の武人像（Ⅱ類）は大阪府今城塚古墳出土例など事例があるものの、極めて数が少ないのに対し、弓矢や鞆を所持した武人埴輪（Ⅲ類）の事例は大阪府蕃上山古墳例、奈良県池田遺跡例、奈良県寺口忍海 D27 号墳例、大阪府軽里 4 号墳例など比較的多く、重武装の武人埴輪（Ⅱ類）が多く、軽武装の武人埴輪（Ⅲ類）が少ない関東地方とは対照的なあり方を示している。

### 4. 武人埴輪Ⅳ類（盾に顔面が付いた、いわゆる盾持ち人物埴輪）

盾持ち埴輪は冑を装着したⅣa 類と冑を着装しないⅣb 類とに区分できる。冑を着装した盾持ち埴輪としては奈良県池田 4 号墳例、群馬県保渡田八幡山古墳例、茨城県富士見 1 号墳例などを挙げるができるが、小野本敦の編年によれば冑を着装したものが古いという傾向が指摘されている（小野本 2004）。ただし、冑を着装した武人埴輪Ⅳa 類は絶対数が少なく、大部分は冑の表現の無いⅣb 類であって、大きい目、耳のラッパ状造形、高い鼻、入れ墨（黥面）、様々な冠帽表現など、多様で個性的な容姿表現が特徴である。その中には埼玉県前の山古墳出

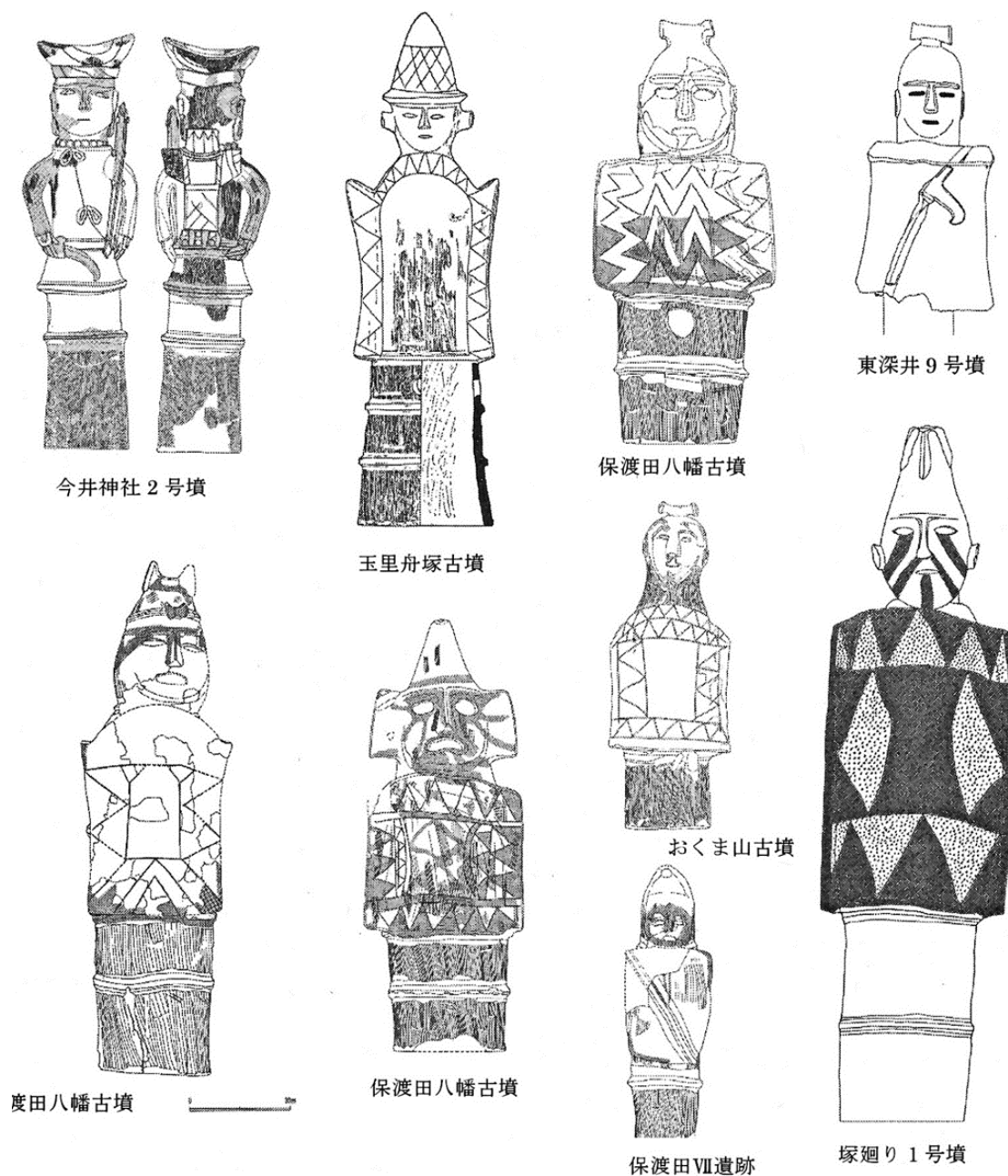


図 29 武人埴輪Ⅲ・Ⅳ類

土例の笑う盾持ち埴輪や、頬に入れ墨をした奈良県羽子田 1 号埴例、群馬県山名原口Ⅱ遺跡出土例の小石で歯を表現している異様な形相など、様々な表現がみられる(図 29)。

盾持ち埴輪の初現については奈良県茅原大塚古墳出土品や、福岡県拝塚古墳出土品によって古墳時代前期末～中期初頭にまで遡り、塩谷修の集成によれば、盾持ち埴輪は北が福島から南は熊本まで 58 遺跡 102 体が出土している(塩谷 2001)。盾持ち埴輪は人物造形の埴輪の中では数が多く、かつ最も長い期間作られ続けた埴輪であった。

盾持ち埴輪の武装をみると、盾の表面に立体的な戟（句兵）の表現を施したものが知られている（太田（博之）1995）。千葉県東深井9号埴出土埴輪や埼玉県権現坂埴輪窯出土例、埼玉県十条出土埴輪例のほか、群馬県太子塚古墳からまとまって出土しており、広範囲において共通の表現が認められる。このことから、少なくとも関東においては盾持ち埴輪に伴う武器としては句兵（長柄武器）という認識が存在していた蓋然性が高い。

また、盾持ち埴輪には福島県原山1号墳や、奈良県寺戸鳥掛遺跡の出土品で、盾に手を添えている事例が存在している。盾持ち埴輪の盾について、塩谷修は持ち盾を想定し、津野仁は列を形成して置盾として使用していたと判断している（津野 2011）。埴輪表現そのものからは、顔だけ覗かせて全身が盾で隠れているなど、盾面の面積が極めて大きいことが強調されており、そこに表現された盾は基本的には置き盾であり、持ち盾であったとしても、機能的には置き盾に近い用法の表現であると考えておきたい。

盾持ち埴輪にみられる入墨表現（黥面）は、『記紀』の記述において軍事面に関係の深い氏族（久米氏、安曇氏、馬飼部、猪養部）などに黥面をした記述があることとの共通性が指摘されている（伊藤（純）1984）。ただし、市毛勲によれば顔面ヘラガキのある人物埴輪は近畿地方及びその周辺出土が過半数を占め、人物埴輪の盛行した関東地方の事例は僅かである。このことを踏まえ、市毛は顔面ヘラガキ表現が即、入墨の表現ではないとし、関東地方のヘラガキは顔面赤彩の表現とみて、入墨は畿内を中心とした西日本の下層の人々にみられた風習と位置づけている（市毛 1993）。いずれにおいても、盾持ち埴輪の人物が、当時の社会階層の中において比較的下層であることは疑い得ない。

盾持ちの人物が笑ったり、容貌魁偉な点については、久米舞などの芸能と類似しているという指摘があり（水野（正好）1971）、一般には“僻邪の性格”などの呪術的な面で説明されることが多い（若松・日高 1992・1993・1994）。しかしながら、松本政春によると、古代においては戦闘の開始に先立ち、まず軍の先鋒によって言葉での挑発や謀略、及び戦意高揚などの示威行動がとられた上で、遠隔戦として弓矢の戦いが行われたと考えられている（註 33）。その証拠として、松本は西暦 740 年の藤原広嗣の乱における隼人による言葉合戦の呪術的な性格を論述しているが（松本 1999）、松本が述べるように、古代における軍事力とは武力（武器・戦闘力）と呪力の総合されたものであり、一般的な兵士や盾持ちの兵士たちも単なる武力のみではなく、その呪術的能力が期待されたと考えたほうが自然である。したがって、盾持ち埴輪の人物が容貌魁偉であることについては、これを単に呪術的な現象とのみ捉えるのではなく、その軍事的な性格や背景も考慮しなければならないであろう。

### 第3節 古墳祭祀における形象埴輪の象徴的特質

武人埴輪の型式分類を行ったが、武人埴輪とは埴輪の一種であり、そもそも埴輪とは古墳という“場”における総合的な葬送儀礼行為の一環で制作されたオブジェクト（造形物）である。

ところで第7章第4節において、副葬品としての武器に関連して、モノにおける価値的な背景を検討したが、その際にモノの価値を4つのカテゴリーに区分した。すなわち第1のカテゴリーは使用価値、第2のカテゴリーは交換価値、第3のカテゴリーは象徴的価値、第4のカテゴリーは記号的価値である。こういったモノの価値的な側面を形象埴輪に当てはめると、形象埴輪とは、何らかの事象を象った土製品という性質上、使用価値や交換価値に比すれば、より象徴的価値の比率が高いモノといえるだろう。

本節では、武人埴輪の意味を考える前提作業として、象徴物としての形象埴輪の変遷を念頭に置きながら、その意味合い、特に価値的な象徴性の強弱などについて確認したい。

埴輪の大部分を占める円筒埴輪の役割は、古墳の段築部分に囲繞するような、外部を区画（境界）するために用いられることが基本である。器台と壺が合体し実用性を失ったものが特殊器台や朝顔形埴輪になったように、円筒埴輪類は極めて象徴度の高い造形物であったと考えられる。

何らかの事象を具象化した形象埴輪に関していえば、その出現期たる古墳時代前期の配列状況は、奈良県陵山古墳でみられるように、主体部直上を方形あるいは矩形に配された円筒埴輪列の中心に単体の家形埴輪を配し、その周囲に多くの蓋形埴輪、さらに少数の靫形埴輪、盾形埴輪などを配するものであった。

このうち、古墳時代前期中頃～後葉にかけて最初に製作された形象埴輪は家形埴輪で、稲村繁によると、当初は“祭殿型”とされた開放的な形態が中心であった（稲村 2000）。この家形埴輪の意味について、小笠原好彦は首長霊の依代、もしくは首長霊の所在を示す形代と位置づけているが（小笠原 2014）、形象埴輪とは、古墳祭祀における首長や、儀礼に関わる核心的な内容を象徴化することで創出されたと評価することができるだろう。

森田克行は、古墳時代前期を第Ⅰ段階とし、埴輪配列の役割を古墳主体部における埋葬儀礼・儀式に直接かわる「秘儀」として取り扱われていたとするが（森田（克行）2008）、古墳時代前期を中心とする葬送儀礼においては、実際の武器そのものも土中深くに埋納され（隠され）、武器を所持する人物（武人）も埴輪などにより外部から区画された（隠された）状況で儀礼が執行された様相が復元されるだろう。

武器を象った形象埴輪についていえば、それが特定の武器のみを対象として選抜的に造形された存在であることから、攻撃や防御といった観念的な現象を、それぞれ靱や盾に代表させて象徴的に表わしたものと想定することができる。

古墳時代前期末から中期に至ると、儀礼の“場”としての古墳は巨大化していく。そして近畿地方を中心に、鉄製武器が大量に埋納される事態となるが、辻川哲郎は、古墳時代中期の器材埋納施設に関して、儀礼の視覚的強調が意図され、蕩尽行為によるみせびらかし（ディスプレイ）行為の結果と考えている（辻川 1999）。この事例が参考になるように、古墳の祭祀は時代が下るに従って“見せる”要素が次第に強まってくるのである。

こういった総合的な儀礼行為の変容によって、形象埴輪による配列も、周溝内の濠内や墳丘造り出し部、外堤など、外部からみせるための工夫をした場所に配列されるようになり、森田克行は、この段階（第2段階：前期末から中期）における埴輪配列のあり方を、あからさまにすることに意義があった顕儀（I）とする（森田（克行）2008）。

坂靖は形象埴輪の種類増加を、首長の権威を示すために各所で行われた儀礼を象徴的に表現したものと指摘している（板 2000）。鶏は早朝に儀礼の刻限を告げる存在であり、白鳥は日本武尊の白鳥伝説などを想起させるもの、馬は被葬者の権威や犠牲獣が想定され、犬・猪・鹿などは狩猟儀礼に関わるものとするのである。

多様な人物埴輪が作られるようになるのは、古墳時代中期中頃以降であるが、初期人物埴輪の出土を良好に示す大阪府蕃上山古墳や大阪府大山古墳の出土事例から、人物埴輪では女子の像が基本単位として機能していたことが指摘されている（稲村 2001）。初期の人物埴輪は、儀礼を執行する人物（巫女やその護衛する武人）を象ることで発生したと評価することができるだろう。

すなわち、かつては秘儀として、極めて象徴度の高い観念的な概念（首長霊や儀礼上の僻邪観念など）を象徴していた形象埴輪は、よりみせるための儀礼へ変容することによって、具体的な儀礼行為の様相（儀礼を執行する動物や人物）を造形するという構造的な変化が想定できるのである。

この方向性を念頭に置きながら、次節では人物埴輪出現後の埴輪の役割、特に本論の材料となる武人埴輪を中心にみていこう。

#### 第4節 武人埴輪の出土状況とその変遷

形象埴輪の構造的な変容過程を概観した（註 34）。以下、古墳時代後期～終末期の時間軸において、時系列の順に具体的な武人埴輪の主要な出土状況を概観する（図 30）。

埴輪祭祀が先行している古墳時代後期初頭の近畿地方における大王陵の事例たる大阪府今城塚古墳では、古墳の二重の堀を区画する内堤に張り出し部分が存在しており、多量の形象埴輪群が樹立されていた。

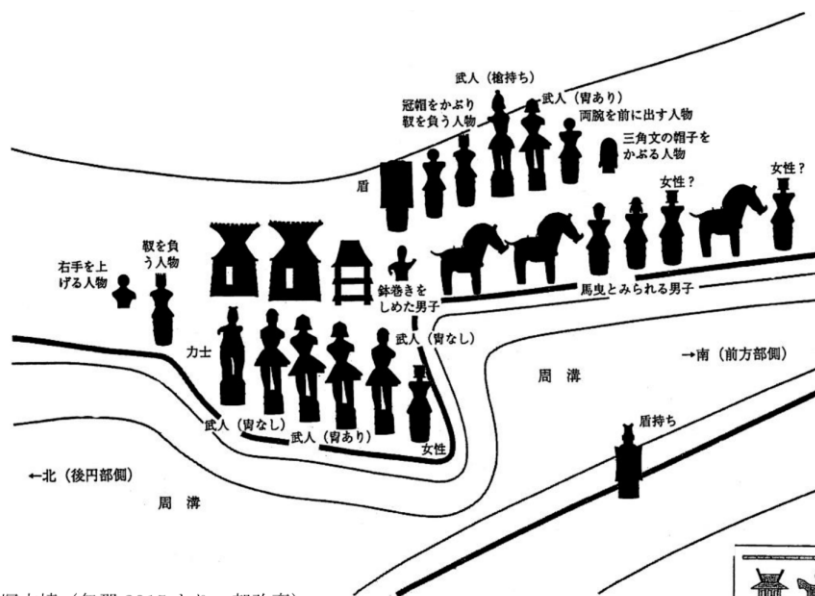
張り出し部分は柵形埴輪によって 4 つに区画された空間があり、東から 1・2・3・4 区と称されている。各区から家形埴輪が出土しているため、大型の家形埴輪が埴輪祭祀の中心であったと推定されており、特に 3 区では多数の家形埴輪の他に女性（巫女）群が加わることから、埴輪祭祀の核心部分と考えられている。すなわちこの埴輪配列においては、家形埴輪や女性（巫女）埴輪が埴輪祭祀の核になっており、その周辺区域にて武人埴輪が存在するという構造をとるのである。

今城塚古墳の埴輪配列について森田克行は宮門あるいは宮外での公的儀礼空間（2・3・4 区）と私的儀礼空間（1 区）からなる各種の儀礼を含む殯宮の再現を複合的に表現したものとみる（森田（克行）2011）。

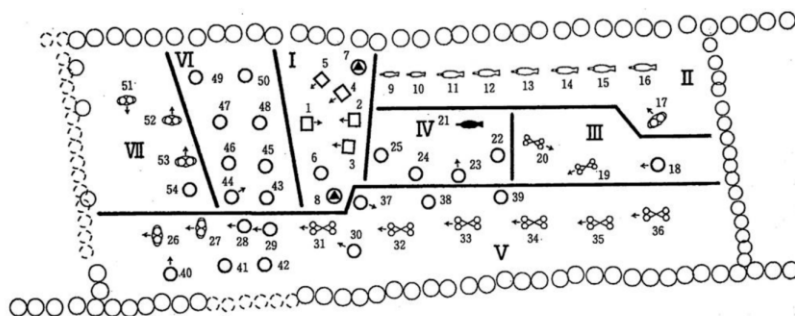
このうち、武人埴輪が出土しているのは第 4 区であり、力士埴輪や鷹飼埴輪、馬・牛列などと共に武装人物像が配列されている。これら 4 区の埴輪組成（種類）から、その埴輪群像は様々な職掌を象徴的に表現している可能性が高く、そうであれば、武人埴輪は軍事や警護に従事した職掌の代表として位置づけられていたと評価できるであろう。

関東地方における古い段階の人物埴輪配列事例としては群馬県保渡田八幡古墳が知られている。保渡田八幡古墳では、古墳の内堤 A 区の円筒埴輪で囲まれた一角で多数の形象埴輪が出土しており、複数のグルーピング案が提示されている（水野（正好）1971、若林 2000）。その意義を巡る代表的な説では、研究史で述べた水野正好の首長権継承儀礼（水野（正好）1971）と若狭徹の時間軸の異なる祭祀や権威的行事、財物の顕示説（若狭 2000）とがある。

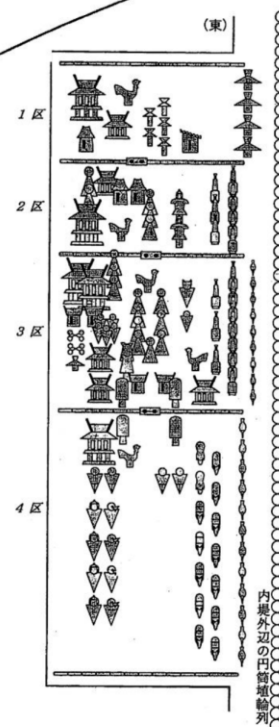
埴輪配列の構造としては、その中心部分は座位の人物が集中する中央西よりの北側（水野配列案の第 8 区、若狭配列案の第 I 区）であることは間違いないだろう。対して武人埴輪や甲冑埴輪といった武器関連の埴輪は、主に南西の一隅（水野配列案の第 6 区、若狭配列案の第 V 区）に集中している。この区画の配列については、水野案が“軍事（武人）集団”を、若狭案では“財物の顕示・威風の表示”を想定している。このうち、若狭案によれば、武人埴輪のある V 区の配列は職制を示すものではなく、多くの服飾物を装着した様や、財物としての甲冑そのものに意味があると考察している。



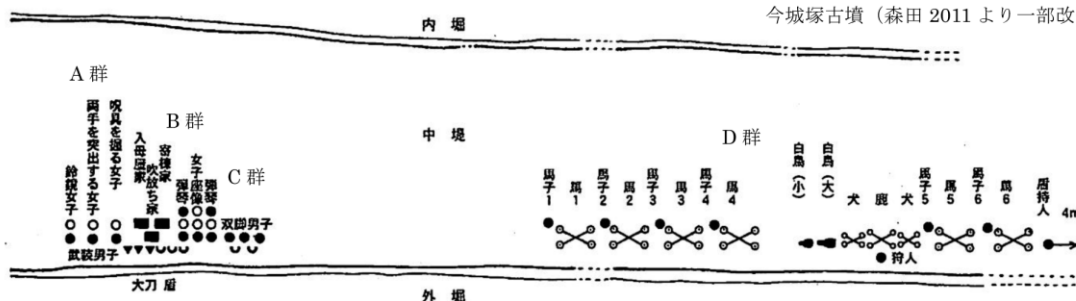
玉里舟塚古墳 (忽那 2015 より一部改変)



保渡田八幡塚古墳 (若狭 2000 より一部改変)



今城塚古墳 (森田 2011 より一部改変)



瓦塚古墳 (日高 2000 より一部改変)

図 30 人物埴輪配列の各事例

保渡田八幡古墳の武人埴輪は、関東における初期の埴輪群であって、時代が下る古墳時代後期後半のものに比べれば、価値的な背景としては、儀礼の象徴的な意味合いも強いと考えられるため、若狭の解釈も一面においては大いに認めておきたい。しかしながら、個別的な解釈から、それを服飾物が装着した様や、財物としての甲冑そのものに価値が付与されたとのみ見做すのではなく、象徴的価値から具象的価値という形象埴輪の変遷の流れの中において、権威や職掌を体現する人物（首長や武人）そのものが埴輪の造形対象に移ったという構造的な背景を考慮する必要があるだろう。そこにおいては首長を取り巻く武器や軍事集団の存在が比喩的に表現されているのである。

埼玉県瓦塚古墳では、古墳の西側中堤上で多数の人物・形象埴輪が樹立されていた。ここから転落し、堀から出土した埴輪群の詳細な配列状況が復元されているが、埴輪配列の構造上の特質としては A 群の女性（巫女）埴輪や B 群の家形埴輪が核心部分であったことは間違いないといえる。このうち C 群については、配置の再検討（日高（慎）2000）もあり配列関係が不明瞭であるが、B 群～C 群にかけて盾形埴輪や短甲着用男子など、武器や武装に関連する埴輪が配列されていると復元できる。

瓦塚古墳の埴輪配列については、魂振り歌舞の再現に代表される殯の状況が想定されているが（若松・日高 1992、1993、1994）、この想定において武人埴輪（武人埴輪Ⅱ類）は、背後に位置する最も重要な中心的存在（家形埴輪や巫女埴輪）を守護する役割が、盾持ち埴輪（武人埴輪Ⅳ類）は招かれざるものを中心の形象埴輪群に近づけないようにする存在が想定されている（若松・日高 1994）。ここにおいて武人埴輪は、首長の構成する軍事的な職掌や組織における人物の象徴化として配列されていると捉えることができるであろう。

茨城県玉里舟塚古墳では、古墳の西造り出し部分付近の周堤に転落した状態で多数の形象埴輪が出土している。人物埴輪は 29 体確認されているが、特に武人埴輪が突出して多く、矛（槍）をかまえる武人（Ⅲ類武人埴輪）、抜刀スタイルの武人（Ⅱ類武人埴輪）王冠状の冠をかぶり鞆を背負う男子（Ⅲ類武人埴輪）、盾持埴輪（Ⅳ類武人埴輪）などの各種類が出土している。

遺物の転落状況から、人物埴輪群は造り出しから前方部にかけて集中して樹立されていたと考えられ、忽那敬三による復元によれば、造り出し部分に家形埴輪と武人埴輪が重点的に配置され、墳丘側（前方部）では馬形、武人、人物埴輪が配置される一方、盾持埴輪は墳丘上や周溝対岸など、人物埴輪群とは離れた位置で単独で配置されていたと考えられている（忽那 2015）。

女性（巫女）埴輪は少なく、かつその配列が不明瞭であるものの、出土埴輪の組成から、造り出し部分に家形埴輪や武人埴輪が並んでいたことは間違いないであろう。これら武人埴輪に



については、特に冠を頭に頂いた鞍負の男子（武人埴輪Ⅲ類）や、138.5 cmと非常に大きな矛（槍）を持つ武人埴輪など、埴輪群像の中心と考えられる人物が武人であるのが大きな特徴である。その埴輪配列を想定すると、埴輪祭祀の中心部分は家形埴輪と特殊な武人埴輪があり、その周囲に別の武人埴輪（武人埴輪Ⅱ類）が群集していた様相が復元できる。

玉里舟塚古墳の埴輪配列については、近年における埴輪の再整理によって、力士の他に、馬子、琴弾、鷹匠などの多様な人物の種類も想定されており、今城塚古墳の埴輪配列との類似性が指摘されている（忽那敬三 2015）。しかしながら、玉里舟塚古墳の特色、今城塚古墳との大きな相違点は、武人埴輪の数が極めて多く、埴輪配置での中心主題の一翼を担い、かつ群として存在していることが指摘できよう。したがって武人埴輪群は、単なる守護や武威の象徴に留まらずに、実際の武装する集団、すなわち職掌としての軍事集団や、首長層の軍事組織の象徴化が想定できるのである。

古墳時代後期後半から終末期にかけて埴輪祭祀が盛行した房総地帯では、主に埴輪が列状に配列される。この段階の埴輪について、小川台 5 号墳や殿部田 1 号墳の武人埴輪をみると、作りが雑で省略化しており、脚部もない半身像が多い。

千葉県城山 1 号墳では、形象埴輪群が墳丘西側中腹を中心に検出されている。この部分の埴輪配列は墳丘西側の前方部北側から後円部にかけて 1 列で武人埴輪、馬形埴輪 2、武人埴輪、両手をあげる男子、女子 3、男子 2 と続き、最後に家形埴輪が置かれて円筒埴輪列に接続していた。

千葉県小川台 5 号墳でも墳丘北側中段の前方部～くびれ部、後円部前方までに形象埴輪が 1 列に樹立されている。全てが現位置を保つものではないが、概ね先頭より馬形埴輪、馬子、馬形埴輪、武人埴輪 4、鈴を腰につけた女子、女子、男子などと続き最後は家形埴輪が配置されていたと考えられている。

千葉県殿部田 1 号墳では墳丘の東南側中段には形象埴輪列が、墳丘の上段には円筒埴輪列が配列され、中段埴輪列では前方部よりくびれ部にかけて、鎌を腰につける人物 2、飾馬、裸馬、挂甲着装の武人 3～4、女子埴輪 3、琴を弾く人物、女子埴輪、器種不明 2、頭に壺をのせた人物、家形埴輪 2 と 1 列に続く。

関東南部の埴輪配列では、上記のような列的な配列が多いが、滝口宏が述べるように、配置の場所の狭長なために、群とせず列としたとは考え難い（滝口 1963）。

古墳祭祀における、隠された儀礼から顕現化する儀礼への変容方向を指摘したが、後期後半以降における埴輪配置は、群としてのまとまりを失い、それぞれの埴輪も墳丘の外側に正面を

向くようになるなど、より良くみせるための工夫が更に進行したものであって、この一環として埴輪配列も一列に並べられるようになったと想定される。犬木努は列状配置をとる人物埴輪群像について今城塚古墳の形象埴輪配置の縮小形態とするが（犬木 2007、2008）、造り出しなどにおける群構成の埴輪配置に比べると、配列に占めるそれぞれの位置づけや役割そのものが簡略化し、不鮮明になっているとしなければならない。

他方、千葉県姫塚古墳においては、個々にモデルがいたかのような個別の特徴を表現した人物（例えば髭を生やした大刀を吊り下げる老人）が存在することから、被葬者の生前に関係した人物を描いたという説（杉山（晋作）1996、2000）が提出されている。人物埴輪配列の最終段階、現実的な具象的造形物への最も発達した後期後半段階における人物埴輪の造形については、単に儀礼行為の類型的な表現に留まらず、より実際の、現実の人物をモデルとして造形される傾向が強まっていくと考えられる。

すなわち、形象埴輪の変化方向としては儀礼を執行する人物の様相を象徴的（定型的）に造形していたものから、より現実の具象化が進行するという一貫した時代的方向性の過程において、人物埴輪は次第に特定の人物とその周辺をモデルとして象るようになっていったと評価することができるのである。

先にみた玉里舟塚古墳（後期中頃）においても、一般には女性埴輪が多数をしめる人物埴輪群組成において、武人埴輪が極めて多いという個別の特徴があり、長柄を持つ武人埴輪などは他に類例のない独特な形態である。

玉里舟塚古墳は、霞が浦北辺の卓越した首長墓として位置づけられているが（日高（慎）2010）、同古墳の副葬品は、盗掘を受けている二重の箱式棺から挂甲小札、大刀柄頭、鹿角製刀装具、鉄鏃、馬具、玉類などが出土し、茨城県立歴史資料館に所蔵されている伝舟塚資料には挂甲小札、装飾付大刀、直刀、鉾（石突）、鉄鏃、馬具が存在するなど、この古墳は副葬品の面からみても、特に武器に関連するものが多い。

埴輪や副葬品なども総合すると、玉里舟塚古墳は武器や武人埴輪の卓越が濃厚な特徴として挙げられ、その被葬者は軍事に関連した軍事首長（豪族）である蓋然性が極めて高く、埴輪配列もそういった被葬者の性質を表現していると評価できる。なお主体部の出土人骨の分析によれば、その被葬者は 20 歳前後の若い男性とされている。

埴輪には被葬者は表現されないという見解もあるが（増田 1976）、人物埴輪と被葬者との関係については日高慎が検討を行っている。埴輪の発注は被葬者の生前である可能性が高いため、その意志が反映している可能性が高いと想定した日高は、被葬者それぞれの境遇を反映した埴

輪群像が一定の決まりの中で並べられたと考えた。

具体的な事例としては、渡来人的な筒袖姿の男子が表現された千葉県山倉 1 方墳の男性や栃木県甲塚古墳の埴輪群などを挙げている。特に甲塚古墳では、女性用の横坐り馬が存在すること、他に類例のない機織り埴輪が存在すること、男女比率において女子像が多いことなどから、その被葬者として女性を想定するなど（日高（慎）2014）、人物埴輪像が被葬者などの特定の人物をモデルにして造形されたことを指摘している（日高（慎）2015）。

このように、東国の武人埴輪の配列については、類型的な表現やしぐさがみられる一方、特に時代が下るに従って、一定の範囲内において個性的なものも多くなり、より具象的に、被葬者や特定の人物そのものなどを象る様相が強まっていくと考えられるのである。

## 第5節 形象埴輪の造形原理と武人埴輪の政治性

形象埴輪の出現から、人物（武人）埴輪が出現しどのように配列されていたかを概観したが、古墳における葬送儀礼は時代の変化と共に変容することが明らかできたと思う。このことは、先行研究において既に指摘された事柄であり、高橋克壽が祈りから顕彰へという表現でそれを指摘し（高橋（克壽）1996）、坂靖も埴輪の一元的意義を否定した上で、その性格の変容（隠れた→みせる）を主張する（坂 2000）。

筆者も古墳祭祀の隠れた様相からみせるものへと変化するという見解に同調するものである。更にこれに付言するならば、そういった変化に応じて、形象埴輪における造形対象の価値的原理は、象徴から具象へという方向性で遷移したと評価することができるであろう。

形象埴輪における造形原理を模式的にまとめるならば、以下のような大まかな変化方向を辿ると考えられる。

- 1 期 儀礼の本質や概念を象徴的に象る段階
- 2 期 儀礼行為や、儀礼を執行する人物の様相を類型的に象る段階
- 3 期 特定の人物やその周辺を象る段階

1 期とは古墳時代前期～中期を中心とする時期で、古墳祭祀の中心は“隠された”主体部での儀礼であると考えられる。形象埴輪についても圍繞・区画に用いられる傾向が強く、その造形は家や蓋といった首長権力や首長霊といった、儀礼そのものに付随する要素を象徴的に示したものが中心であって、武器が示す力や武威も攻撃具（戟）と防具（盾）で代表されることで

象徴化される。これら形象埴輪は時代が下るとみせる要素が強くなっていく。

2 期は動物・人物埴輪が多様になる中期中頃～後期前半を主とする時期で、古墳祭祀のみせる要素や、埴輪の具象的な性格が強まることで、形象埴輪の造形対象が儀礼の概念的様相から、儀礼行為そのものや、行為を執行する人物まで拡大してくる。すなわち儀礼を執り行う女性（巫女）を中心とする情景や、飲食儀礼、狩猟儀礼などといった人物や情景を類型的（象徴的）に象る段階といえる。

なお、近畿地方においては横穴式石室の導入に伴って、他界観や葬送儀礼に大きな変革が生じ、総合的な古墳祭祀の内容そのものが変化する。その結果、葬送儀礼の場としての古墳の規模が縮小し、埴輪を用いる祭祀そのものが急激に縮小・衰退していくと評価できるだろう。

これに反し関東地方においては、大規模な古墳は継続して古墳時代後期から終末期にかけて盛んに築かれ、儀礼の“場”としての古墳は更にみせる要素や顕在化を強めていく。

3 期は古墳時代後期後半以降の関東地方を中心に展開するもので、人物埴輪の類型的な要素（表情・姿態・服装など）が弱まり、みせる要素や具象的な造形が強い段階、その種類や姿態が最も多様な時期とすることができる。

さて、上記の大まかな変遷過程を確認しつつ、研究史上において指摘されてきた埴輪配列の各説について再検討してみよう。

埴輪配列の仮説としては、葬列説（後藤 1937a）、殯説（和歌森 1958、若松 1992）、首長権継承儀礼説（水野（正好）1971 橋本（博文）1980）、神宴儀礼説（森田（悌）1995）、生前生活表現説（杉山（晋作）1996）、死後の近習説（塚田 1998）、神仙世界説（辰巳 2011）など多数の仮説が提示されている。

これら各説はそれぞれ評価すべき部分も多いが、先にみたように、埴輪の価値や意義は時間の経過と共に変容しており、一つの仮説で全ての状況を網羅することはできない。

象徴から具象へという形象埴輪の造形対象の変遷原理を当てはめるならば、各説のうち、神宴儀礼説、首長権継承儀礼説といった、埴輪群像が何らかの儀礼を表現しているとする考えは 2 期の埴輪配列においては妥当性が高く、人物埴輪が生前の生活を表現しているとする説は 3 期の新しい要素の埴輪配列の解釈として極めて妥当であると評価することができる。

ところで、埴輪の対象が象徴的概念から現実の具体的事象を象っていくといっても、最後まで漢・唐代に中国大陆で流行した明器のように家屋や井戸、厨房、便所、家畜などといった日常生活に根差したものを造形することは無かった。

埴輪として選択されるものは、首長の政治・儀礼的な世界に関連したものが主体であり、埴

輪の配列に関する構造や規則を守りながら、現実世界、特に首長を取り巻く世界を控えめに具象化しているとまとめることができる。

埴輪群像の表現が死後の近習説や神仙世界説といった来世の世界を描くという見解について筆者は、古代人は死者の世界のイメージを持っていなかったという森田悌の見解（森田（悌）2008）を概ね支持するので、これに従わないが、仮に死後の世界を表わしているとしても、そこで想定される理想境などは、当時の現実世界の映し絵的な投影になるはずである。

そうすると、時間的な価値の変容があるに関わらず、人物埴輪の造形対象の原理における最大公約数の特質は、何れも首長層の属する世界（政治・宗教世界）に関連したものということであって、水野正好が前提としたように、間接的であっても、首長層の政治機構に近いものが表示されている蓋然性が極めて高いと見做さねばならない。

ここにおいて、武人埴輪の首長層における政治機構、特にその軍事的な職種や軍事組織を検討する妥当性が改めて確認される。

序章の方法論で述べたように、考古資料は社会性や集団性などに還元して考察することが重要である。したがって、武人埴輪から軍事問題を考察する際も、軍事組織の階層的といった集団的な諸関係に昇華した命題を設定することが妥当であろう。文献資料を傍証とした軍事組織の個別具体的な職名や役割（例えば舍人や輓負部など）は考古資料からは反証不能でもあるため、中心課題として論じることを筆者は採らない。

そこで次節では、武人埴輪の階層的な問題に的を絞り、しかる後に武装集団の階層モデルを提示して古墳時代における軍事問題、特に古墳時代後期における軍事組織を中心に考察してみたい。

## 第6節 武人埴輪の階層的構造

武人埴輪が首長の政治機構や、それに近い関係性を象徴的に表象している蓋然性を認めるならば、それを一步すすめて、当時の軍事的な職掌集団、すなわち軍事組織はどのような構造であったと考察することができるだろうか。

本論では武人埴輪を武器や武装を基準にして4類型に区分を行った。埴輪で表現された人物像が当時の服飾や階層を全て網羅しているとは断定できないが、武人埴輪の各形態からは、少なくとも4つの武装形態が古墳時代に存在したことを実証的に論ずることが可能である。

ここで重要なことは、一般的に被服・装飾の機能については実用性や審美的な効用の他に、社会的・象徴的な価値的側面が内包される場合が多いことである。被服や装飾の社会的な標示機能とは、服飾・装飾などにより、その人物の男女の性別、未婚・既婚の区分、身分や社会集団の差を表わすことであり、前近代において、そのような機能は普遍的に認めることができるだろう。

埴輪の姿態や服飾についても、そのような社会的・象徴的な標識機能の視点から、これまでも埴輪人物の階層や職掌が検討されてきた。

例えば、市毛勲は主に男性埴輪を対象とした検討において、髪形が明瞭に階層を表わしているとし、大きく首長層と職業集団（部民）とに明瞭な区分があったことを指摘している（市毛1991）。また橋本博文は、胡座の男子、椅子に坐す貴人と巫女、全身立像の貴人などが、その装身具のあり方から最も高位の人物であるとし（橋本（博文）1993）、井上裕一も人物埴輪の属性として髪形は男女を表わし、被物は男子だけに限られ階級や職掌を表象し、服装も本来は階級や職掌を表わすとする（井上（裕一）2004・2005）。

これら諸研究を参考にすれば、本論で設定した4種類の武装については、それぞれの髪形や服飾などの諸属性から、当時の社会における相互の階層関係を推定することが可能である。

すなわち、籠手と刀剣による軽武装の武人埴輪Ⅰ類や、重武装の武人埴輪Ⅱ類は、その表現内容からして、当時の上層階層の人物像をあらわしており、盾持ち表現の武人埴輪Ⅳ類は最も階層的に低い人々を表現していると評価することができるだろう。

これを別の視点から再確認するために武人埴輪の具体的な配列状況（出土状況）をみてみよう。4種類の武人埴輪が全て共伴して出土し、その相互の位置関係を把握できる事例として群馬県綿貫観音山古墳の事例が挙げられる。

綿貫観音山古墳は墳長97mの前方後円墳で、人物埴輪は墳丘上の中段面の、主体部である後円部の横穴式石室の入り口からくびれ部に掛けてほぼ一列で並べられていた。この列的構成のうち、石室に最も近い位置には、あぐらをかき合掌する所作で、籠手と大刀を所持している人物と、台座に端坐し、祭具を持する正装女子像が対座し、この2人を中心に、いわゆる三人童子や女性（巫女）と鞆負の男子が周囲に控えていた。

この中で、鞆負の男子については、本論の分類でいう武人埴輪Ⅲ類であり、埴輪群像の中心となるあぐらをかき男子（武人埴輪Ⅰ類）の背後に3体が並列している配列状況を示していた。また、石室に最も近い上記ユニットの位置から、くびれ部の周辺までにかけて、石室に近い順より、振り分け髪の武人埴輪Ⅰ類、重武装の武人埴輪Ⅱ類、鋤を担ぐ農夫埴輪が、更に前方部

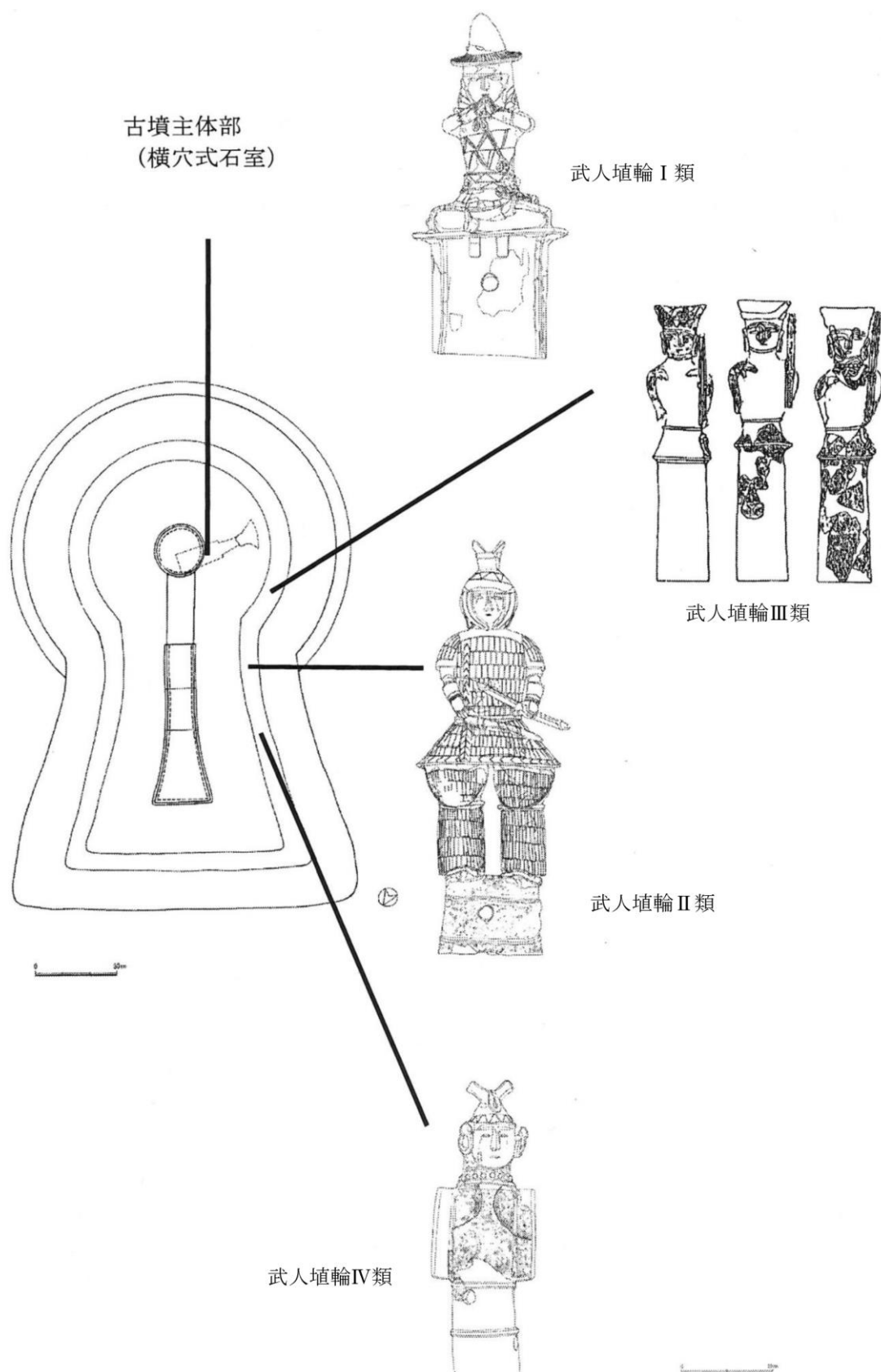


図 31 綿貫観音山古墳における武人埴輪出土地点

側へむかって盾持ちの武人埴輪Ⅳ類や馬形埴輪が並んでいく。このほかには前方部側では盾持ち埴輪が馬曳き（馬子）埴輪と共に並んでいた（図 31）。

上記のような配置のあり方や、先述した埴輪そのものの髪型や衣服などの諸属性から判断すると、主体部である石室に近い位置で、かつ埴輪そのものが大きく立派であるほど、その人物が社会的な上位階層に位置していたと評価することができる。

人物埴輪の配列については、研究の進展により法則性が指摘されており、塚田良道は埴輪配列を第 1～5 形式に区分している（註 35）。武人埴輪についてみると、主に軽装の武人（武人埴輪Ⅰ類）が塚田の埴輪配列分析による第 1・3 形式に、重装武人（武人埴輪Ⅱ類）が第 3 形式に、盾持ち埴輪（武人埴輪Ⅳ類）が第 5 形式に位置づけられる。

人物埴輪の配置に関する法則性を明らかにした塚田の構造分析は極めて優れたもので、かつ普遍的な妥当性が高いため、本論の武人埴輪に関しても、概ね塚田の指摘する構造（塚田 1996・2007）と同じ位置的な関係にあることを筆者も認める。

ただし、塚田の人物埴輪における階層構造の分析は、主に人物埴輪の配置上における規則的な法則性を論点としている。筆者の立場は、塚田の示す構造的な埴輪配置のあり方を認めた上で、その背景に水野正好の指摘した視点、武人埴輪を豪族の政治機構の構造とみなし、そこから、具体的な軍事面の組織的構造を積極的に読み取ろうとするものである。

人物埴輪像から軍事的な問題を読み取るに際して、塚田は文献資料の成果を援用して、武人埴輪を舍人や鞍負、盾持ち埴輪を久米部などに比定しているが、本研究は具体的な職掌の名称やあり方よりも、軍事組織の集団原理や、その構造的な把握を試みる点が、塚田と筆者の研究の大きな相違点である。

武人埴輪から政治的（軍事的）な組織体としての階層構造を想定するならば、その類型における表現の差異は、普遍的な社会的階層や職掌のメタファー、もしくはシンボライズされた造形であったと判断できるだろう。これを念頭に置いて 4 類型の武人埴輪の相対的な社会的位置を考察すると、概ね社会の上位階層から下位階層に向かってⅠ類（Ⅲ類）－Ⅱ類－Ⅳ類という関係性を明示することができる。

すなわち武人埴輪Ⅰ類は髪型や衣服、装飾品や全身像での表現、特徴的な所作などから、社会階層では最上位にあたり、共同体の代表者や統率者を表現していると評価することができる。

武人埴輪Ⅲ類については、奈良県池田 9 号墳の事例のように肩まで垂れる長い美豆良を結び、冠をつけるような上位階層の人物を表現したと考えられるものから、群馬県今井神社 2 号墳の出土例のように半身表現で、やや階層が低いと考えられるものまで幅が広い。



ただし、綿抜観音山古墳の出土状況では、あぐらをかく武人埴輪Ⅰ類の背後に3体の鞍負の男子（武人埴輪Ⅲ類）が並んで出土していることから、武人表現としての武人埴輪3類については、上位階層の人物に近習する親衛軍的集団であったと評価したい。

武人埴輪Ⅱ類については全身に甲冑を身に付けた典型的な武人像であり、その武器・武装に特化した象徴的な表現、かつ社会階層の中でも上位であったと考えられることから、その位置づけとしては武装の専門的な集団、すなわち職掌的な軍事指揮者層を想定する。

武人埴輪Ⅳ類は盾を持ち、長柄武器で武装した表現である。盾持ち埴輪の大部分は冑を被らない半身像で、その出土地点も上位階層の人物が集合する人物埴輪群像からは離れた位置に配列されているため、兵卒的な集団の表現と考えられる。

## 第7節 武装集団モデル

以上、武人埴輪の階層や役割を検討した。このことから、軍事組織を考える上で最も重要な組織の階層的な上下関係を想定することが可能になる。また、埴輪配列の位置や役割といった、埴輪祭祀の中での取り扱い情報を加味することで、“戦士の造形”としての武人埴輪から武装集団のモデル化を試みよう。

### 1. 武装集団モデルA

武装集団モデルAは武人埴輪Ⅰ類－Ⅲ類－Ⅱ類－Ⅳ類という階層の序列から構成される武装集団（軍事組織）類型である(図32)。群馬県綿貫観音山古墳での配列状況を指標とする。

繰り返し述べているように、綿貫観音山古墳においては武人埴輪Ⅰ類が首長やそれに類する立場で埴輪祭祀の中心を占める一方、そこからの距離によって立場の異なる武人埴輪Ⅲ類やⅣ類が存在している。これらⅠ～Ⅳ類の全ての武人を階層的に並べて類型化した、最も複雑で大規模な軍事組織のあり方が武装集団モデルAである。

ところで、綿貫観音山古墳は大規模な前方後円墳で、主体部からは武器のみならず、鏡や工具など豊富な副葬品が出土しており、その被葬者は広域な地域を統治した、上毛野の首長が想定されているところである。

ここでの埴輪配列から想定される武装集団モデルAとしては、親衛軍に護衛された首長層が最上位に君臨し、戦闘の実務部隊としては、職掌としての武人埴輪Ⅱ類や一般兵卒としての武

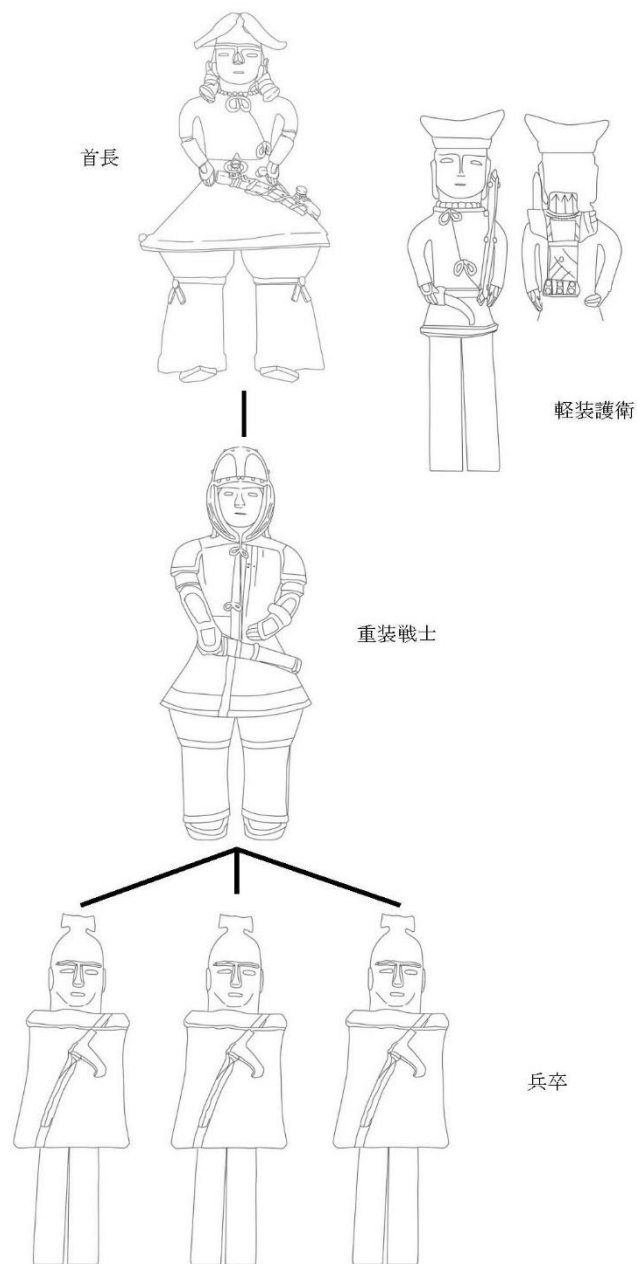


図 32 武装集団モデルA

人埴輪Ⅳ類が存在するものであって、有力な地方豪族が組織した軍事組織のモデルとして評価することができるだろう。

## 2. 武装集団モデルB

武装集団モデルBは、武装集団の指揮官クラスとして武人埴輪Ⅰ類があり、その下に武人埴輪Ⅱ類（軽負）や武人埴輪Ⅲ類（重装武人）が存在するという武装集団のあり方を示す類型で

ある(図 33)。

この類型は武装集団モデル A の部分的な縮小版であって、首長周辺の護衛や警護を目的とする組織体のモデルとすることができる。

なお、関東地方には靱負の人物埴輪像(武人埴輪Ⅲ類)が少ないため、良好は指標となる埴輪配列を示すことができないが、近畿地方においては、靱負の出土が多いことから、古墳時代後期の近畿地方中枢部においては首長層と、その親衛軍からなる軍事組織が中核であったと考えられる。

近畿地方に多いⅢ類の武人埴輪、すなわち弓を持ち靱を背負う男性や弓を持つ男性は多くの場合、顔に入れ墨を施しており、盾持ち人物埴輪の顔と共通するなど、比較的に低い身分のものを表現している可能性が高い(市毛 1993)。

近畿地方においては、後代でいう隼人や久米部などといった身分的に低い階層の人々により軍事機構の組織化が進行しており、社会的な階層や身分差、制度などが、関東地方より強固でシステムチックに組織化していたため、首長階層は自ら軍事的な側面を強調する必要はなかったと考えられる。逆にいえば、東国においては、軽武装とはいえ、首長層においても自ら武威をしめした武人首長の様相を色濃く残しているといえるだろう。

### 3. 武装集団モデル C

武装集団モデル C は階層的な上位に武人埴輪Ⅰ類(首長)やⅢ類(靱負)といった軽武装の人物があり、その下に一般兵卒としての武人埴輪Ⅳ類(盾持)が配される構造を示す類型である(図 33)。参考となる埴輪配列のあり方として群馬県塚廻り古墳群を挙げておく。

塚廻り古墳群では全長 20m 前後の円墳と帆立貝式古墳が 7 基発見されているが、このうち、3 号墳や 4 号墳において武人埴輪Ⅰ類が検出されており、1 号墳においては盾持ち埴輪の他に盾形埴輪・大刀埴輪・靱形埴輪が出土している。時期的な差異が異なるが、武人埴輪Ⅰ類とⅣ類との組成的な組合せから、この武装集団モデルが構成されているのである。

ところで、塚廻り古墳群の被葬者像としては、墳丘規模や墳形から、地域の中小の豪族層や有力家族層などが比定できるが、これら中・小の埴輪祭祀においても、それぞれ首長と目される武人埴輪Ⅰ類が存在することから、古墳時代の各共同体においては、その大小に関わらず首長が存在し、それぞれの首長が軽重を問わずに武装していたと考えられる。

事実として、関東地方は古墳時代後期に古墳へ副葬される武具が増加し、全国でも最多の甲冑出土地帯となることが指摘されている(内山 2006)。一方、全国的な傾向として、古墳時代

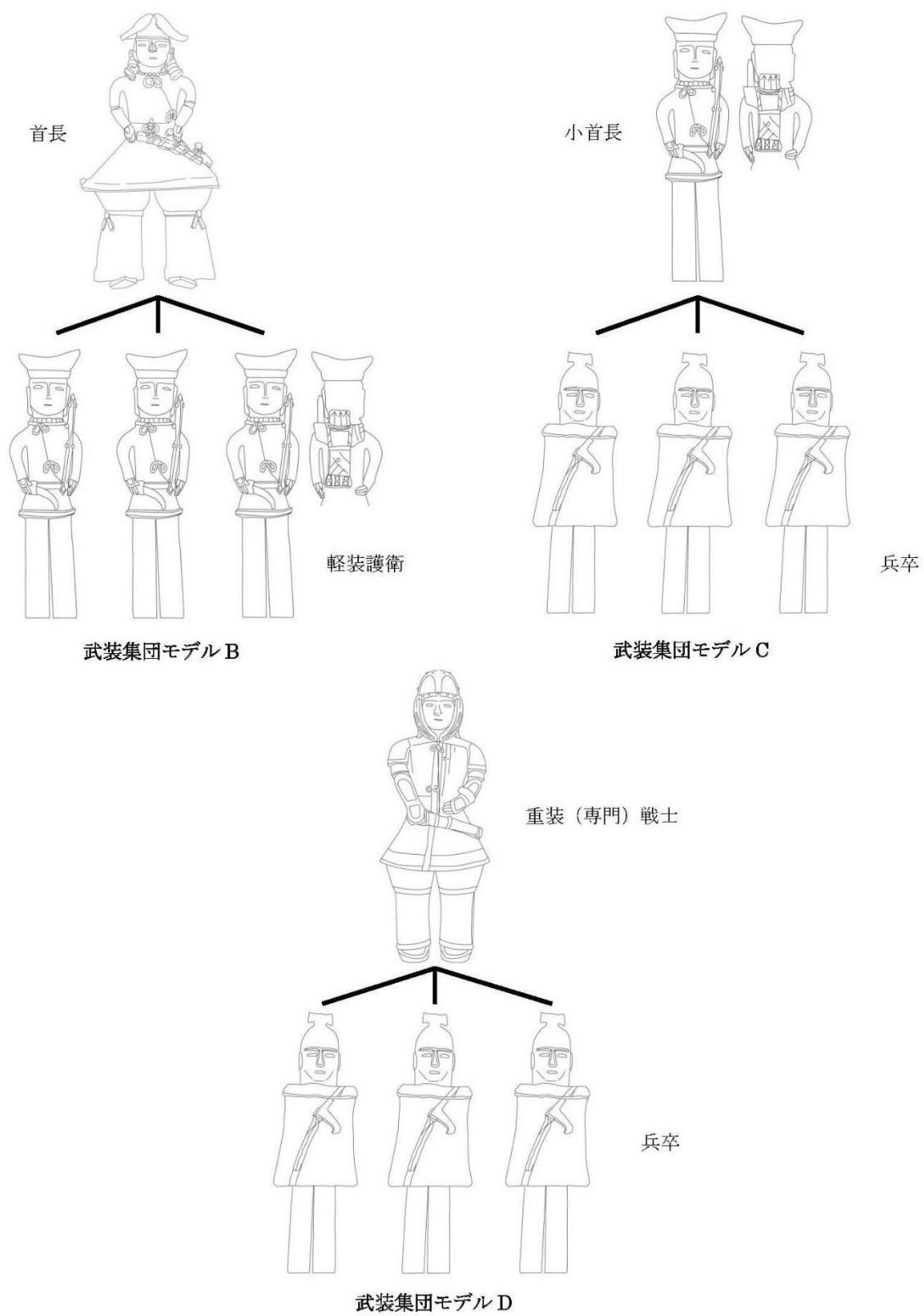


図 33 武装集団モデル B・C・D

後期の群集墳からは馬具、刀剣、鉄鏃などの武器が出土する例が多く、武器・武具が広範な階層において使用されていた状況が伺われる。広瀬和雄が指摘しているように、古墳時代後期～終末期に爆発的に築かれる群集墳から鉄製の武器が普遍的に出土する。このことから有力農民層においても、かなりの確率で鉄製武器を保有していたと考えられるのである（広瀬 2007）。

これらの現象から、古墳時代後期には中・小の共同体においても、武装化が進行していると考えられるが、武装集団モデル C とは比較的小規模・低階層の軽装備な軍事組織を想定しておきたい。

#### 4. 武装集団モデル D

武装集団モデル D は武人埴輪Ⅱ類（重装武人）とⅣ類（盾持）とから構成される類型であり、茨城県玉里舟塚古墳の出土状況を指標とする。

玉里舟塚古墳においては武人埴輪Ⅱ類が集中して存在していることは先述したが、一方において埴輪配列の中心部分から離れて盾持ち埴輪も検出されている。このような武人埴輪Ⅱ類（重装備）とⅣ類（盾持）との階層的な組み合わせから導かれた類型が武装集団モデル D である（図 33）。

指標とした玉里舟塚古墳は先述したように、武人埴輪が多く、若い男性が埋葬された主体部の副葬品も武器が多いなど、埴輪や副葬品を総合的にみても、その被葬者は軍事に関連した軍事首長（豪族）である蓋然性が極めて高い。

ここで類型化される組織構造は、軍事を専門的に取り扱う職掌的な指揮者層（軍事的首長層）と、実際の兵卒からなる、機能的・専門性の高い武装集団が想定できるのである。

#### 5. 武装集団モデルの意義

以上、武人埴輪の検討から、古墳時代後期の武装集団については A～D の 4 つのモデルが導かれ、様々な形態の武装集団が存在していたことが想定できた。

古墳時代の軍事組織については、一般的に首長層が組織した豪族軍や、その連合体としてイメージされることが多いのであるが、本論で提示した武人埴輪による軍事組織のモデル化によれば、様々な形態の武装集団が存在していた様相が推定できるのである。すなわち、古墳時代後期の軍事組織は、単純な、又は一元的な組織などでは決してなく、大小様々な軍事組織が、当時の政治状況を反映しながら存在するという、極めて複雑な様相であったと評価することができるであろう。

古墳時代後期の軍事組織の学史については水野敏典が適切にまとめている。水野は、これまでの古墳時代後期の軍事組織研究は国家の軍隊、地域国家の軍隊、国造の軍、天皇の親衛軍である舍人騎兵、地域的な武装など、極めて多岐に及ぶものの、各論稿の中で論じられている軍事組織以外の軍事組織の存在については明らかにされていないものが多く、相互の関係も不明な点が多いということを欠点として挙げている（水野（敏典）1993）。

研究史上において古墳時代後期の軍事組織として検討されている地域国家の軍隊、国造の軍、天皇の親衛軍などに関しては、以下のようなものが挙げられる。国造軍とは、岸俊男が東国と深い関係のある防人の組織的構造を明らかにすることで提唱された概念である。岸によれば『万葉集』巻二十に収載された左註に、作者の地位を示す国造丁（国造）、助丁、主帳丁、火長などの身分記載があり、これを大化前代の国造軍の遺制とする（岸 1955）。

野田嶺志は防人の編成が力役懲発の形をとることから、防人編成を国造軍の遺制とする見解には疑問を呈しているが（野田 1980）、岸説は多くの人に受け入れられており（笹山 1962、松本 1985、五十嵐 2013）、大化前代において既に国造の下に、指揮者（国造クラス）―士官クラス―兵卒クラスといった複数の指揮命令系統（軍事組織）が整備されていたと考えられている。

文献史学において指摘されている大化前代の軍事集団としては、大伴や門号氏族などの軍事的伴造、靱負、物部、舍人、隼人などがあり、これら軍事集団の大部分は天皇の親衛軍的な護衛兵であったとされている。直木孝次郎によれば、これら軍事集団は律令兵制で五衛府などに再編成されていくのであるが（直木 1968）、逆に言えば、令前兵制においては、様々な護衛兵（武装集団）が複雑に入り組んで、全体としての軍事組織が形成されていたと推察されるのである。

天皇の親衛隊的な護衛兵である五衛府は、令制の兵衛定数でも 400 人と規模の小さいもので、それ以前の伴造や靱負、舍人といった個々の戦士集団も、比較的小規模なものが中心であったと評価したい。このうち、舍人や靱負について、井上光貞は東国や九州の国造の子弟から構成されているとし、より古い（5 世紀後半）靱負は九州中央部の、新しい（6 世紀）舍人は主として東国から供給されたことが指摘されている（井上（光貞）1949）。

また、古代兵制史では 6 世紀代（古墳時代後期）に東国国造の子弟よりなる舍人軍（B 型舍人）が設置される事柄が非常に重要な画期とされており（直木 1968）、6 世紀において中央政権（天皇家）の軍事的基盤が、主として東国地方に求められたことが指摘されている。

その他、新納泉は装飾付き大刀の考古学的な研究から、古墳時代後期の階層的な兵制構造を想定している。新納は装飾付大刀を地方豪族や上層農民など、それぞれの集団の中で軍事組織

の頂点を占めていた人物に伴う副葬品と考え、首長墓型と群集墳型と大きく二つに分けた。その上で新納は首長墓型について、一国に及ぶ広い地域の軍事組織（国造軍相当）を想定し、他方、装飾付大刀を出土する小規模な古墳や横穴の被葬者（群集墳型）については郡程度の地域における有力家族層の組織体を考えている（新納 1983）。

なお、群集墳を含む後期古墳の武器副葬の格差から、それを実際の軍事装備の階層構造の反映とした研究も知られており（原田 1962）、文献史学では、野田嶺志が古代の武力を担った兵士像を解明する中で、魁師、梟師、渠師といった邑・村レベルでの軍指揮者と、その武装集団を描きだしている（野田 1999）。

古墳時代後期においては、上記で指摘された様々な軍事組織が存在していると推察されるが、先に取り上げた水野敏典の、古墳時代後期における軍事組織の相互関係は不明な点が多い、という研究史上における欠点の指摘を逆手にとれば、古墳時代後期の軍事組織には、様々な武装集団が存在することが重要であり、古墳時代後期においては、本論でモデル化したような大小の武装集団が共同体の規模や数に応じて存在し、それらが複合的に積み重なり、更にヤマト中央政権との関係性も有しながら、全体として軍事組織が形成されていたと推定できるのである。

本章の成果を積極的に評価して古墳時代の軍事組織を具体的に示した場合、既往の研究における国造軍のような地方首長（豪族）の軍事組織（岸 1955）が武装集団 A に、伴造や靱負、舍人といった護衛兵（井上（光貞）1949、直木 1968）が武装集団 B に、群集墳被葬者のような小さな有力家族層の軍事的組織体（新納 1983）を武装集団 C に、武装集団モデル D は本論の第 9 章でみたような軍事を専門的に取り扱う職掌的な武装集団などに、それぞれ比定できると評価することができるだろう。





## 第 11 章 古墳時代の軍事組織



## 第11章 古墳時代の軍事組織

### はじめに

第5章から第10章にかけて、古墳時代の具体的な戦闘像や武装集団像の検討を進めてきた。弥生時代の小結部分（第4章）でも述べたように、軍事組織という概念は、命令系統、補給、訓練などといった非物質的な要素を総合した、非常に高度で象徴的な存在である。

古墳時代の軍事組織像についても具体的な記述を行うのは困難であるが、本章は小結としてこれまで検討してきた成果を総合して、古墳時代における軍事組織像の提示を行いたい。

なお、研究史の項で述べたように、古墳時代の軍事組織については豊富な研究史が存在するため、以下においては、研究史上の成果や解釈について本論での検討結果を交えながら整理を行い、しかる後に本論での見解を示すことにする。

### 第1節 考古学的な個別事実（現象）と研究史、及び本論の立場

古墳時代の武器や武具については豊富な研究が存在しており、考古学的な現象や客観的な事実の大枠に関しては定まっている部分も多い。もちろん、その現象の個々の解釈や、詳細な位置づけなどについては議論が分かれるところであるが、客観的な事実や現象に関しては、普遍的な共通認識を共有することができる。本節では、それら個々の事象に関する研究史をまとめ、本論の立場や独自性を明確にしたい。

#### 1. 金属製甲冑が出現する現象

鉄製甲冑が出現するのは古墳時代初頭である。前期におけるその他の武器、鉄剣や鉄鏃・銅鏃などについては、弥生時代後～終末期からの一定の連続性が認められるが、防具については、木製の短甲が弥生時代から存在する反面、鉄製の甲冑は古墳時代から出現しているという現象が認められている。

古墳時代前期の甲冑に関しては、1920～1930年代より山梨県大丸山古墳や静岡県松林山古墳において既に知られており、末永雅雄は方形鉄板を革綴する技法として「カルタ鉄革綴」という名称を付してした（末永 1934）。また、1950年代には京都府椿井大塚山古墳で小札革

綴冑が出土しており、希少な革綴冑の全体像が復元提示された。

しかしながら、前期の甲冑は類例が極めて乏しいこともあり、研究事例が少なかったのが実情である。1990年代以降、滋賀県雪野山古墳、京都府瓦谷1号墳などで甲冑の出土が相次ぎ、ようやく研究が活発化する（高橋（克壽）1993、橋本（達也）1996、小林（謙一）1997）。それらの研究の進展によって、古墳時代前期の甲冑は小札革綴冑、小札革綴甲、竪矧板革綴短甲、方形板革綴短甲などの各型式が存在するが、出土例が少ないにも関わらず、いずれも多様性に富んでいることが明らかとされるようになった（小林（謙一）1997）。資料の希少さと多様性から位置づけが困難な点も多く、製作地や系譜、冑と甲との組み合わせのあり方、編年観などについては、議論が分かれる。例えば、竪矧板革綴短甲については輸入品であるとの見解が多いが、日本製とする見解もあり（高橋（工）1995）、茨城県狐塚古墳の方形板革綴短甲に関しては二案の復元案が提示されている（滝沢 1990、橋本（達也）1998）。

本論で関連するところに関して言及すれば、軍事組織や武装を考える上では、鉄製の甲冑が出現する現象は極めて重要である。第4章でみたように、前期の大型古墳に多い甲冑副葬Ⅱ型では、武器・武具の配列状態として道具としての機能的な価値よりも、刀剣類などを多量に“並べる”行為そのものが重視されている状況が伺われる。すなわち、古墳時代前期の多量の武器の副葬は、基本的に武器以外の宝器と同じような扱いを受け、その副葬行為は、直接的には古墳祭祀における厚葬性の所以と考えることができる。したがって、武器の副葬行為が当時の首長たちの武装の一端を覗かせていることは認められるものの、ここから直接的に軍事組織を復元することは極めて困難であると評価したい。

ただし、古墳時代前期の甲冑資料が少数である点、かつ畿内地域の大型古墳からの出土が多いという事実や、甲冑の製作技法が多様で規範性が少ない現象からすると、古墳時代前期においては、各地域を代表するような大首長層、特に近畿地方における大首長が鉄製甲冑を所持することが可能であり、それら大首長を中心に軍事集団が存在した可能性が高いと考えられる一方、鉄製甲冑の製作や流通のあり方は多様であるため、広範囲で統一的な指揮系統に基づく軍事組織が存在した可能性は低いと推定されるのである。

## 2. 中期の帯金式甲冑に関する現象

帯金式甲冑出現以降の中期の甲冑については、研究初期から検討されている膨大な研究の蓄積があり、論点も多岐に及び複雑で、容易に要約することはできない。ただし、現象面における解釈や位置づけには多様な見解があるが、大枠としての共通現象として次のような事柄を指

摘することができる。

### （１）生産の現象

中期の甲冑については北野耕平が鋳留式甲冑の出現にからめて前代には存在しない画期的な技術と位置づけ、これを大陸からの渡来工人の所産とみなした。そしてこの新技術による甲冑の量産体制は、朝鮮半島などの軍事行動と関連する大和政権の武力体制強化に求めたのである（北野（耕平）1963）。

その後、野上丈助は前期の短甲の多様性や、鉄鍬における少数多型式などから、前期の鉄器生産を分散的・小規模な生産であったとし、長方形革綴短甲の出現以降においては、型式上の統一化がみられ、鋳留など外来の新技術導入が行われ、工人の組織が進行し、同一規格の大量生産が実現したと考察した（野上1968）。

次いで、小林謙一は鉄製武器に関して、大和政権の軍事力との関連性を考慮に入れつつ、個々の遺物の詳細な技術について検討を加え、短甲における帯金の出現や地板の変化など鍛造技術、鋳留技術、開閉装置、鍍金技術などを細かく検討し、工人の編成や系統について論じた。その結果、長方板革綴短甲の成立に続き、三角板革綴短甲の出土量の増加現象は大和政権の統制で組織化された結果と考え、鋳留技法、鍍金技法、眉庇付冑などは密接に関連していることから、その背景として、甲冑の製作を単なる輸入ではなく技術工人の渡来に基づく歴史的な現象と想定した。また、同じ特徴をもった甲冑が畿内地域と各地方で共通し、大量埋納などが畿内地域を中心に認められる現象について、甲冑は畿内で製作されたものが各地域へもたらされたと解釈し、大和政権の統制の下、甲冑工人が統制・量産化されたという生産状況の背景を示したのである（小林（謙一）1974）。

このように、1960～70年代には甲冑の生産や技術に関する現象（事実）が整理され、その研究は大きく進歩し、その後の研究は、主に甲冑の系譜を巡る議論や、編年や技法に関する細部の検討や細別が行われることになる。

これらの検討によって明らかにされた甲冑の変遷観の大枠や、中期における甲冑の量産体制、甲冑が近畿地方の政治組織によって統制され各地へ配布された、などの見解については現在でも変更する必要性を認めない。筆者も、甲冑の生産面に関する現象については先学に従うものであり、それ以上、詳細を検討する能力もないが、本論で関連するところに関して言及すれば、軍事組織を編成・維持していく上で必須な武器の生産が重要になる。そこで第9章においては古墳時代中期における甲冑を含む鉄器生産が、渡来系の技術系譜を有し近畿地方で生産・保管

されたという認識の追認を試みるため、弥生時代～古墳時代に至る鉄器生産遺構の検討を行い、古墳時代中期には集中專業型、居館隣接型、集落付属型など各種の鉄器生産が行われ、特に集中專業型や居館隣接型については国家的な、又は大首長・豪族層が渡来技術を導入して鉄器生産を行っていたことを推定した。

学史で指摘されてきた通り、甲冑に関しては近畿地方を中心に大量に生産・集積（保管）され、流通や配布、消費、副葬などに用いられたと考えられる。このことが直接、軍事組織を論じることにはならないが、古墳時代の中期の近畿地方において、武器を大量に生産するという潜在的な政治力・生産力を有していたことは、当時の軍事的な社会的背景を検討する上でも非常に重要になるだろう。

## （2）分布の現象

中期の甲冑が出土する古墳は日本列島で広域に広がり、特に中小の古墳から出土するという現象はこれまでも指摘されてきた。これについては、1975年に田中新史が関東地方の甲冑出土古墳を検討する中で「短甲一領埋納の中型古墳」という表現で示している。田中は甲冑の型式や共伴遺物の年代、更に甲冑が埋納されたセット関係や出土位置を重視して甲冑が出土した古墳の分析を進め、そのあり方として①大王陵単位に大量に集積されたもの、②地域の主要古墳が同一型式を集中的に保有するもの、③古墳群内では集中するが群内では分散するもの、④短甲一領が一基（または数基）みられるもの、の4つに大別し、甲冑の配布や副葬から、首長層の政治的動向や武器を副葬した武人的な被葬者像について言及した（田中（新史）1975）。

田中の先駆的研究は、それまでの甲冑の個別遺物の検討を通じて編年や工人のあり方を考察する方向性とは異なって、武器副葬や副葬された古墳、その被葬者像といった主に遺構面からの考察という方法論上の大きな転換があった。同様な研究方向、すなわち甲冑が副葬された遺構（武器副葬古墳）や事象（甲冑の配布や副葬行為）の解釈を通じて研究を行うことは、その後、藤田和尊や田中晋作により強力に進められ、本論の主なテーマの一つである軍事組織を巡る論争が行われた。本論の研究は主にこの研究方向に連なるものである。

ところで、古墳時代中期に甲冑が出土する古墳が中小の古墳を中心に広域に分布するという客観的な事象（事実）については、研究史においても本論でも異論するものではない。ただし、それぞれの研究においては、主に方法論的な手法や研究の論点が異なっているといえるであろう。田中晋作の“常備軍”を巡る研究での立場の異同については第6章で詳しく検討したので、もう一つの主要な研究である藤田和尊の研究に触れ、これらの課題を考えておきたい。

藤田は、甲冑セットの組合せを類型化し、最新甲冑セット（Ⅰ類型）が濃厚な地域と、その周辺地域を甲冑の供給地域とする。また、このⅠ類型（野中パターン）については、一括して大量に保管されていた武器庫から無造作に取り出したものと解釈した。そして新旧を取り混ぜた諸段階の甲冑セットの事例として、畿内地域における墓山パターンと地方における月岡パターンを設定し、中期後葉の甲 3、冑 2 の数的なセット関係を鶴山パターンとした。すなわち、藤田の研究では古墳（廃棄状況としての遺構）における甲冑の型式的な組み合わせ状況から、供給元である畿内地方の政治的影響力の濃淡を読み取り、百舌鳥古市古墳群に中心をおく野中パターンについて甲冑の集中管理体制を想定し、地方の小古墳被葬者に伴い甲冑が出土する現象に関しては、地方の軍事組織が大きく発展したものではなく、中央政権による政治的な動向（牽制や懐柔策）による結果とみなしたのである（藤田（和尊）2006）。

藤田の論旨の組み立ては①「副葬武器が被葬者の武装状況を反映している」②「甲冑の生産と流通は畿内地域からの一元的流通である」という二つの大前提を基に議論が進行する。このうち、前提②に関しては先述したように、型式的な分析を通じて先学において指摘されたことであるため異論がなく、①の前提については、結論として筆者も認めるところであるが、“常備軍論争”で議論されているように、①の仮定をそもその前提として論を進めることは、方法論上では問題が残る。

本論では副葬武器は葬送儀礼のあり方の中において検討すべきであると考え、無条件的に“武器副葬＝武器保有”と認知せずに、遺物の廃棄状況（儀礼における使用痕跡）から社会的な武器の取り扱い方の価値体系を考察し、これを介した上で軍事組織像を考察する、という立場をとる。

藤田の分析においても、本論の研究においても、客観的な事実や現象（武器の大量生産・埋納・配布）の認識は共通しており、その最終的な結論としては、同様に、近畿地方中枢部において大量の武器が生産・管理され、その社会的な背景として、近畿地方においては一定の軍事組織が存在した結果と考える。しかしながら、方法論上の差異から解釈に至る過程が異なっているといえるだろう。藤田論では副葬武器が被葬者の武装状況を反映しているという無批判的な前提から、武器の大量埋納を“甲冑集中管理体制の体现者として陪塚に葬られた被葬者に対して供献された”結果とみなすのに対し、本論では大量埋納は“古墳祭祀の儀礼的な副葬量の肥大化”とみる。

両者の相違は副葬甲冑の位置づけ、副葬武器を実際の武装反映とみるか、副葬儀礼の一環として見るかという根本的な差異に基づくものであるが、近畿地方中枢部において武器が大量に

生産・管理されたという客観的な現象の認識は同じであることから、これらの社会的な背景として、同様に、近畿地方においては一定の軍事組織が存在した結果と考える訳である。

従って、副葬品に武器が選ばれた理由や、武器の実用的な社会的背景を明確にしておかなければ、武器は祭祀に用いられる為に大量に生産・副葬された、という論旨も理論的には成立し、辻川哲郎のように器財埋納施設を“埋葬儀礼空間の拡大”と“儀礼段階の追加”という視点から解釈を試み、大量埋納を威信財の蕩尽行為で説明する立場も可能になる（辻川 1999）。

中期の甲冑出土古墳に中小古墳が多い、という客観的な事実（現象）においても中央の政治的な影響の結果とみる点では、本論と藤田論共に、最終的な解釈結果は同じである。とはいえ、解釈に至る道程は異なるものであり、藤田論では甲冑の分布を中央政権の牽制や懐柔策という政治的な結果と評価する。しかしながら、モノの移動には配布や贈与など様々な形態があり、滋賀県黒田長山古墳群や、宮崎県島内地下式横穴墓群など、中小の古墳群において、集中的に武器や甲冑が出土する古墳群が存在している現象について注意しなければならない。

川畑純は、副葬段階において一つの古墳群から出土する甲冑は雑多なものの集積ではなく、型式学に基づく特定系統の短甲が集中する傾向にあることを検討し、帰属する集団毎に武器の生産工房（管理者）との関係が限定され、それぞれの被葬者は集団内での個人的な活動の範囲において、それぞれが武器を入手したと考えるが（川畑 2015）、威信財が授受される過程で武器・武具が選択され、それが個人的な活動の結果であれば、同一古墳群内で副葬品が武器に特化しているような場合は、単にモノの移動を政治的な政策現象からのみ解釈するのではなく、武器で象徴される軍事的な側面を有する集団行動（武装集団・軍事集団）の存在も視野に含めなければならないであろう。

### （3）武器の大量埋納に関する現象

古墳より多数の武器が検出されるような事例は早くより知られており、1930年代には奈良県円照寺墓山1号墳（末永 1930）や大阪府七観古墳（末永 1933）など武器が集中的に出土する古墳も報告されていた。しかし初期の古墳時代研究は遺物を中心としたものであって、遺構や出土状況などが詳細に検討されるのは主として1950年代以降になってからのことである。

人体埋葬のない陪塚の存在が問題の俎上にあがったのは1953年のカトンボ山古墳の報告であり、この報告書において七観古墳のように武器を主として埋納した陪塚は、主墳の付属的な装飾であり主墳内の埋蔵設備の延長であると評価された。また北野耕平のアリ山古墳の調査と報告によって、中期の近畿地方における大量埋納武器の背景に、大和政権の親衛隊的性格をも



った軍事機構の存在が指摘されるようになった（北野（耕平）1964）。

その後、武器のみを納めたと想定される小古墳の類例が増加し、殺傷道具が大量に埋納された原因をめぐって古墳時代中期の軍事組織と結びつける議論が主張されてくる。そういった視点から研究に取り組んだものとしては藤田和尊や田中晋作があり（藤田（和尊）1988、田中（晋作）1993）、特に田中は古墳に埋納された武器は平時には特定の場所に保管されていたという前提から、大量の武器埋納に関しては戦時に編成される組織に貸与するための備蓄を示すと考え、特定首長などの死に際して、その一部の単位が一括して埋納されたと想定した。

こういった見解に対し、松木武彦は武器の埋納とは第一義的に葬送儀礼行為の痕跡だとして批判を行っている（松木 1994）。また豊島直博は鉄器埋納遺構について、儀礼用に特別に生産された武器である可能性を指摘しているが（豊島 2000b）、いずれも田中からの再反論もあり、容易に結論が得られていないのが現状である。

近年では『日本書紀』の壬申の乱における兵器奉納記事などを中心に野中やアリ山などの事例を古墳でなく国家的な戦争祭祀を目的とする“土壇”とみなす見解（藤原（学）2003）、あるいは文化人類学的見地から、埋葬儀礼の場で富の大量消費をみせつけることで、首長が社会的威信を高める行為が大規模化、複雑化したものとみなす立場（辻川 1999、鉄器文化研究会 2000、久保（哲正）2001）など様々な視点から大量埋納の意味が検討されている。

上記のように、武器の大量埋納という行為については、1930～1950 年代までは事例の報告と蓄積が行われ、1950～60 年代においてカトンボ山古墳や、アリ山古墳などの遺構としての大量埋納が注目されるようになった。そして 1980～90 年代に至って、大量の武器が埋納される行為の背景に軍事組織のあり方を読み取ろうという積極的な検討も行われるようになるのである。

研究の多くは、武器の副葬と被葬者との関係を実際の武装状況や武器管理の反映とみなす前提で研究が行われており、“常備軍論争”を巡る議論で武器の副葬を被葬者の武装状況の反映とみなす前提に批判が加えられた結果、近年では儀礼としての側面から大量埋納行為が見直されつつある。しかしながら、大量埋納という遺構を第一義的には儀礼行為であるとみなすにしても、これがどのような思想的背景で儀礼が行われたのかや、何故、中期において大量に埋納する器財が武器・武具であるのか、といった理由の解明にはならない。

本論では、上記のような学史に鑑み、第 6 章と 7 章において武器副葬を遺物のライフヒストリーにおける廃棄段階と位置づけ、この“廃棄行為＝副葬行為”の変遷や、社会的な背景を考察することで、副葬行為の結果たる大量埋納は、古墳祭祀の儀礼的な副葬量の肥大化と

みなした。しかし一方で、武器を取り扱う社会的な背景が、武器の実用面を重視する方向性にあることから、単なる儀礼行為とのみ見做さずに、その背景に軍事的な諸関係が内包されていると想定したのである。

大量埋納に限定すれば、この行為は古墳祭祀の儀礼的な副葬量の肥大化であるが、反面、武器を大量に生産・管理していたという事実は明らかであり、かつ、武器の実用面での価値が強まるといった社会的な状況から、第9章で示したように実際に武器を生産・管理した軍事的な機構が近畿地方に存在すると考えるのである。

#### 4.後期における武器副葬の変化現象

古墳時代前期～中期までの軍事組織に関する検討は、主として副葬された武器・武具、特に甲冑を中心に行われてきた。しかしながら、後期に入り横穴式石室が導入されると葬送観念の変化と共に、近畿地方の首長墓では甲冑の副葬は急速に減少する。

むしろ、後期における甲冑の副葬は東国地方を中心にみられるが（内山 2006）、これまで古墳時代後期の軍事組織を巡る研究は、甲冑以外の武器である装飾付大刀、馬具、鉄鏃など、甲冑の研究史的流れとは別個に、主として武器や武器副葬古墳の階層性や分布などを中心に検討が行われてきた（新納 1983、岡安 1983、水野（敏典）1993）。また、文献史学では大化前代の軍事制度を巡る研究の進展がみられたため（井上（光貞）1949、直木 1968）、律令時代に接続する古墳時代後期の軍事組織の研究では、文献史学の成果を視野に入れる立場が多い。

本論では、第10章において、これまで軍事的側面から検討されることが少ない武人埴輪を取り上げた。武人埴輪は古墳時代の風俗や、埴輪祭祀の論点で検討されることが多かったが、具体的な軍事組織を検討する上では、実際に武器を装備した人物の形象として非常に重要な価値を持つ。そこで、これを検討することで、古墳時代の具体的な軍事組織のアウトラインを示したのである。

前・中期の軍事組織に関する研究との関連でいえば、後期においては東国で武人埴輪の様々な階層が認められ、後期社会の軍事組織像のアウトラインを示すことができた一方、これまで大量に武器を埋納していた近畿地方では武人埴輪そのものも少なく、埴輪配列の中でも巫女や家形埴輪などの中心（核心）部分から、武人埴輪は距離を置いた状況が読み取れた。

古墳時代後期の近畿地方の首長墓では、武器副葬の大量化といった取り扱いは急速に影を潜め、武器の副葬も少数の飾大刀や挂甲などに限定されてくる。第7章でみたように、奈良県藤

ノ木古墳や滋賀県鴨稻荷古墳の棺内（人体周辺）からは冠や玉類、沓などの装飾品と共に飾大刀や刀子が副葬されているが、そのような副葬品組成から判断する限り、後期古墳の棺内に副葬されている武器は、実際に生前の被葬者が装着していた個人的属性の高い遺物であったと推定でき、大阪府阿武山古墳の段階における被葬者に至っては、副葬品そのものが皆無になっていく。

古墳時代後期の近畿地方の首長層の価値的背景としては、葬送の儀礼そのものの重要度が低下していったと評価することができるであろう。すなわち、近畿地方の首長層の視点で葬送儀礼の歴史的背景を模式化すれば、武器と副葬との関係性は次のような変遷を経ていくと評価することができる。

- ・ 宝器の埋葬など象徴的な儀礼の様相が高い段階（古墳時代前期）
- ・ 武器の実用性などを重視した、儀礼行為に現実的な側面を反映させた段階（古墳時代中期）
- ・ 副葬品や威信財の儀礼が記号化し、副葬そのものの価値が失われていく段階（古墳時代後期）

川畑純は武器の分析結果から、古墳時代半ばに“量的格差表象システム（量差システム）”から“質的格差表象システム（質差システム）”へという社会の構造的な転換があったとし、これを国家形成過程における最大の変化と位置づける（川畑 2015）。量差システムとは量の保持が社会的階層差を表示する社会システムの謂いであるが、武器の大量埋納という現象は、厳密に言えばその量の保持を表示したのではなく、むしろ廃棄の卓越であり、社会におけるシステム背景としては、ポトラッチ的な“気前よさ”（モース 2009）つまり消費による財力の誇示が反映していると思われる。したがって量差システムから質差システムの変更は、それそのものの自律的な展開ではなく、古墳の葬送儀礼における抽象的な儀礼行為から実用的な儀礼行為への変化の中において捉えるべきものであり、更にその先には儀礼そのもの変容や価値の変化が生じていくのである。

すなわち、古墳時代後期の社会においては、軍事機構を含む政治的な組織機構が充実していき、社会的な秩序がシステム化していくために、首長層たちの立場においては、威信財で社会的な結合を再確認するような葬送儀礼や、武器を大量に埋納するポトラッチ的な“気前よさ”をアピールする必要性がなくなったと考えられる。その社会的背景は実際の政治的組織機構の充実により、儀礼的な行為が変容・無価値化することであって、軍事組織に関して言えば、その充実の結果として律令時代の軍団制に向かう整備化が推定されるのである。

## 第2節 古墳時代の軍事組織像

### 1. 古墳時代前期の軍事組織像

研究史的成果、及び本論での検討結果を総合すると、古墳時代前期の軍事組織は相対的に未発達な状況にあったと結論する。

第6章でみたように、古墳時代前期の武器副葬は儀礼的な様相が特に強く、武器の威信財的な価値側面が極めて高いと評価できる。そのため、武器の副葬は様々な宝器（鏡・石製腕輪）と並んで、威信財の儀礼的・象徴的な使用が推定できるのである。したがって、武器が副葬されているからといって、無批判的に軍事組織を推定するのは不可であると主張する。

個々の武器に関していえば、研究史の中で前期における甲冑は製作技法が多様で規範性が少ないことが明らかにされたことは先述したとおりであるが、刀剣類については、畿内地域によって他地域の製品の再分配が想定される（豊島 2010）など、その生産上における集約性は脆弱であったと考えられる。また、前期を中心とする銅鏃については儀礼的な要素が強いことは指摘されていたが（松木 1991）、前～中期の矢鏃の流通について、川畑純は矢ではなく鏃のみとして生産・流通していた状況を明らかにするなど、矢鏃が純粋な武器の授受ではなく、首長同士のモノの交換や授受を目的とする交換財としての側面が強かったことを指摘している（川畑 2015）。

これらの研究を総合すると、古墳時代前期の武器は戦闘道具としての機能面においても、葬送状況（廃棄状況）においても、そのどちらも儀礼的な側面の価値が重視されていた様相が極めて高く、軍事や武器というよりも、むしろ武威という象徴的側面を内包しつつ、祭祀具や威信財として重視されており、武器の存在から直ちに広範囲で統一的な指揮系統に基づく軍事組織が存在したと考えることはできないのである。

第3章においては弥生時代の軍事組織の階層化が未発達であったと論じ、弥生時代後期に首長層に武器が副葬されるなど、特定首長に軍事権が移っていく様相を想定したが、古墳時代前期の軍事組織としては、弥生時代後期からの連続的な位置づけ、各地域の共同体毎において軍事権を把握した首長層が、それぞれ個別に集団的な武装を形成していた段階と評価することができるだろう。

### 2. 古墳時代中期の軍事組織像

古墳時代中期は、日本列島において初めて、広域な軍事組織が形成された時代であると結論

する。もちろん、その組織は未成熟で、広域とはいえず点と線との関係であったが、広範囲な武装集団の紐帯は軍事組織の形成を考える上では画期的な現象である。

古墳時代中期においては、客観的な武器の量的増加や副葬事例、又は既往の武器・武具研究の成果を考慮すると、近畿地方において大量の武器・武具の生産と管理が行われていたことは確実であろう。鉄器生産の専門化と大量の武器（甲冑）生産は、軍事組織を考える上で重要な社会的画期として位置づけられる。

近畿地方において大量の武器の生産・配布・埋納などを遂行した政権の存在が推定されることから、同時に、古墳時代中期には一定の組織化を達成した軍事組織が形成されていたと評価したい。考古資料の限界性から、その軍事組織が親衛軍であるか、常備軍であるかなどの詳細な性格付けは極めて困難であるが、古墳時代中期後半の野中古墳や黒姫山古墳にみられる、武器の実用的な取り扱いといった社会的背景から考えて、ヤマト政権の中枢部には大量の武器を取り扱う専門的な武装集団が組織化されていた蓋然性が高いと考えている。

一方、第6章でみたように、古墳時代中期では、全国各地において墳径50m以下の小円墳被葬者で、甲冑や武器に副葬が特化した被葬者に甲冑副葬Ⅰ型が認められるため、列島各地においても在地の首長層を中心にして軍事に特化した軍事小首長が広範に成立していたと考えられる。地方における軍事的な専門性の高い武装集団の具体像は第8章において検討した。

古墳時代中期の全体的な軍事組織像としては、中期ヤマト政権の中枢部において大量の武器の生産や配布などを管理し得た政治機構が形成されており、これに対応する形で武装集団の軍事組織化が整備されていた状況を想定する。また地方においては武器の配布などを通じて中央と地方の中・小の首長層の軍事的な武装集団が組織化され、広域な全国規模での有機的な軍事組織が形成されたと評価することができるのである。

### 3.古墳時代後期の軍事組織像

古墳時代後期には、様々な武装集団の階層（職掌）化が進行する一方、武器を所有した階層の裾野が広がり、後の律令軍制を準備していく段階と考えられる。

後期古墳の副葬武器としては装飾付大刀や馬具が特徴的であるが、新納泉（新納1983）や穴沢啄光（穴沢・馬見1977）、岡安光彦（岡安1986）などが、それぞれ個別の武器や馬具から軍事組織のあり方を検討している。また、古墳時代後期に該当する段階（6～7世紀）においては文献史学においても軍事組織に言及する研究が認められ、舍人や鞍負は大化前代の軍事集団として、国造軍については律令前代の軍事組織として古くより注目されてきた（井上（光貞）1949、

岸 1955)。

本論ではこれまでの研究とはやや視点を変え、第 10 章において武人埴輪を資料として、古墳時代後期の武装集団として 4 つのモデルを提示し、軍事組織のアウトラインを示した。これに既往の諸研究での研究成果を比較・参照すると、軍事組織モデル A は後世の国造軍の組織に対応するような大きな軍事組織を、軍事組織モデル B は首長を巡る護衛や警護を目的とする組織体（モデル B）を、武装集団モデル C は比較的小規模・低階層の軽装備な軍事組織を、武装集団モデル D は本論の第 9 章でみたような軍事を専門的に取り扱う職掌的な武装集団を想定した。

古墳時代後期においては、軍事組織モデル A や D のような国家の軍隊や地方首長の軍隊があり、特にヤマト政権中枢部においては武装集団モデル B のような組織体がシステムチックに整備していたと考えられる。一方、地方においては群集墳の爆発的増加にみられるように、武器を所持する階層の裾野が広がり、武装集団モデル C のような小規模・低階層な武装集団も形成されていくと評価できる。

歴史的な位置づけとしては、古墳時代後期の軍事組織は、学史上において独立兵科としての騎兵の成立や、対外軍隊としての国造軍の成立が指摘されており、群集墳の形成に伴う武器副葬の裾野の拡大から、軍事的な武装集団が量的に拡大していったと考えられるが、本論で示したように、古墳時代後期の軍事組織は単純な、又は一元的な組織では決してなく、様々な軍事組織の規模やパターンが考えられ、これら軍事組織の充実が次代の律令軍制を準備すると考えられるのである。

#### 4. 軍事組織の変化と画期

以上、古墳時代における軍事組織のあり方を示すことができたので、その画期を示して本章を閉じたい。第 4 章において、原始・古代社会における武器や軍事に関連する第一の画期としては定型的な武器が出現し、武装農耕民が成立する弥生時代前期を、第二の画期としては、日本列島各地に鉄製武器を副葬する首長墓が形成され、軍事的な階層が広域に成立した弥生時代後期段階とした。

基本的に古墳時代前期の軍事組織は、第二の画期における弥生時代後期からの流れを汲むものであって、その軍事組織の特徴は政治や軍事を統括した首長が存在すること、すなわち各共同体はそれぞれの首長を求心的に、軍事的な関係性や集団的な武装を形成していたと考えられる。ただし、首長層の武器の扱いは、特に古墳時代前期において儀礼的な様相が顕著で、実際

の全国的な軍事組織の整備は未発達であったと位置づけておきたい。

これに続く第三の画期は古墳時代中期とする。中期以降、武器の実用的な取り扱いという社会的な動きが顕在化し、古墳祭祀の儀礼においても、武器の宝器としての扱いから実際の武器組成を重視した扱いに変化していく。また、本論で検討したように、武器を介した広域な流通や、共通する武器副葬の儀礼が執り行われるなど、古墳時代中期は点と線との関係ながら、列島初の広域な軍事組織が形成された段階であると評価することができる。

古墳時代中期に成立した汎列島規模での軍事組織の構造は、後期において制度的・システムの充実に充ちていったと推定される。近畿地方中枢部の首長層においては、武器の威信財としての機能が喪失していき、武器副葬といった行為を介して維持されてきた、儀礼的な、又は人的な結合原理を中心に組織化されていた軍事組織が、より制度的に組織化されていくと推定できる。また一方では、全国的な規模で、社会的な武器の所持階層がより広範囲になり、武器の保有階層が拡大していくが、このことは後の律令軍制へとつながると評価することができるだろう。

古墳時代中期に成立し、後期において充実に充ちていった汎列島規模の軍事組織構造は、7～8世紀における律令兵制の成立をもって、新しい第四の画期を迎えることになるのである。





## 第 12 章 戦争・国家・軍事組織の発生に関する理論的考察



## 第12章 戦争・国家・軍事組織の発生に関する理論的考察

### はじめに

本論文の各章では弥生時代から古墳時代に至る、具体的な実際の戦闘像や軍事組織像について検討してきた。

本章ではこれらの成果を取りまとめ、弥生時代から古墳時代への過程における、戦争の開始や国家の形成、軍事組織の変遷などを理論的に位置づけ、その歴史的意義を考察したい。

### 第1節 軍事組織に関する理論的根拠とその前提条件

序章で述べたように、原始・古代の軍事的な論点の一つに戦争の開始を巡る議論がある。日本列島においては、佐原真が戦争の開始を農耕社会の開始時期、すなわち弥生時代初頭と位置づけてこの問題を多方面から論じている（佐原 2005）。

ところで、ある武力闘争が戦争か否かを決定するためには、“戦争”そのものの概念規定が不可欠である。序章において最初に定義したように、“戦争”の概念を厳密に規定すれば、武力闘争を行使する集団の政治的目的や遂行能力といった組織的な様相、その武力抗争の主体が国家規模であるかどうかが非常に重要なポイントとなる。

逆に、国家の概念から考察した場合、古くヴェーバの研究や、唯物論的な古典的研究で議論されたように、警察や軍隊などの暴力集団（装置）の合法的な独占が、国家の概念規定に際して重要な一要素として重視されてきたのは周知のとおりである（ヴェーバー1980、レーニン2011）。

“戦争”（warfare）や“軍事組織”（military organization）という軍事的な領域と“国家”（state）との相関関係は極めて深い繋がりが存在しており、そのために戦争や国家の発生を解明しようとするれば、“戦争”・“国家”・“軍事組織”などの諸関係について理論的な整合性が求められる。

では国家が発生する段階の軍事組織は理論的にどのように導かれるであろうか。これを検討する方法論は幾つか存在するが、日本古代史における考古資料を用いた研究課題の一つとしては、理論面での分析が少ないことが指摘されている。

実証的な個々の研究成果は、具体的な物的資料を用いて研究が進展しているのであるが、それら個々の事実が、歴史の上でいかなる位置を占め、いかに規定されるか、といった理論上の整理が、十分に議論されていないのである（松木 1995a）。

そこで本章においては、国家の中の重要な一側面である軍事組織の理論的な検討を試みたい。理論分析の前提は比較社会学の方法論から軍事組織のあり方を理論的に研究しているアンジェイエフスキーの研究を基礎とする（アンジェイエフスキー2004）。

国家形成期の軍事組織に関する理論的問題としては、これまでは階級社会における支配層の武力占有という史的唯物論での議論に集中してきた傾向が強く、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』を理論的支柱として、古代の人民闘争などの視点により説明されることがほぼ唯一の理論的な研究とされてきた（註 36）。

近年ではマルクス・エンゲルス理論以外の闘争・戦争モデルなどの紹介も行われているが（植木 1999）、依然として唯物史観の影響は強い。学史における論争や、そこから導かれた結論には留意しつつも、より豊かな議論のためには、多くの視点から検討を行い、その整合性をとることが学問的発展のためには有意義であろう。

アンジェイエフスキーの研究そのものは、原著の初版が 1954 年にまで遡る古いものであるが、類例のない軍事組織と社会についての非常に精緻な理論的分析であり、古典的な価値の再評価も試みられている。以下では、アンジェイエフスキー理論を紹介すると共に、本章における理論的前提を明確にしておく。

アンジェイエフスキーによれば、戦争は文化の産物であり、社会内部および社会間で絶え間なく行われる闘争は、権力、富、威信を求めて争われる。また彼によれば社会階層とはある社会において多少とも同一の地位を持つ個人の集まりであり、“社会的階層構成”とは地位、富の分配、および政治的権利に関する総合的評価の結果を示している。逆にいえば、社会的階層構成とは富、地位および政治的権力に関する不平等を総称したものであり、社会的不平等と同一語であるという。

その上でアンジェイエフスキーは軍事組織の形態を、軍事参与率（Military Participation Ratio）、服従度（Subordination）、凝集性の度合い（Cohesion）の三つの軸から分類を行なっている（表 17）。

軍事参与率とは全人口の中で戦争に動員される兵士の割合であり、高い場合を M、低い場合を m とする。服従度とは軍隊の服従関係や従属関係であり、高い場合を S、低い場合を s とする。凝集性とは軍事団体の組織の強固さや緊密さであり、高い場合を C、低い場合を c とする。

表 17 アンジェイエフスキーによる軍事組織の諸類型

型式	略号	軍事参与率(M/m)	服従度(S/s)	凝縮性(C/c)	類例
騎士型	mSc	低い(m)	低い(s)	低い(c)	盗賊騎士団、戦士カースト
マサイ型	MsC	高い(M)	低い(s)	高い(C)	コサック社会、マサイ族
	MSc	高い(M)	高い(S)	低い(c)	あり得ない
タレンシ型	Msc	高い(M)	低い(s)	低い(c)	タレンシ族、北米開拓者
一般徴兵型	MSC	高い(M)	高い(S)	高い(C)	近代ヨーロッパ、秦
スパルタ型	msC	低い(m)	低い(s)	高い(C)	ドーリア国家(スパルタ)
職業戦士型	mSC	低い(m)	高い(S)	高い(C)	アッバース朝カリフ、絶対王政
	mSc	低い(m)	高い(S)	低い(c)	あり得ない

軍事参与率：全人口の中での戦争に動員される兵士の割合

服従度：軍事団体や戦士の服従関係や従属関係

凝縮性：軍事団体の組織の強固さや緊密さ

註：服従性は凝縮性を意味し、その逆は真ではない。したがって、高い服従性と低い凝縮性の共存は理論的にありえない。

アンジェイエフスキーは、これらの組合せから軍事組織の純粋な理念型として 6 種類を導いている。6 つの軍事組織とは①mSc（騎士型）、②MsC（マサイ型）、③Msc（タレンシ型）、④MSC（一般徴兵型）、⑤msC（スパルタ型）、⑥mSC（職業戦士型）の 6 つである。

- ① 騎士型とは低い軍事参与率、服従度、凝集性によって特徴付けられるものであり、代表例として中世ドイツの盗賊騎士団、13 世紀インドの戦士カーストなどがある。
- ② マサイ型とは高い軍事参与率、低い服従性、及び高い凝集性を持っているもので、コサック社会、東アフリカのマサイ族などが事例とされる。
- ③ タレンシ型とは軍事的参与率が高く、服従性及び凝集性が共に低いもので、事例としてはガーナ北部に居住するタレンシ族や北アメリカの開拓者が挙げられる。
- ④ 一般徴兵型は軍事参与率、服従性、凝集性がいずれも高いもので近代ヨーロッパや秦代の中国が該当する。
- ⑤ スパルタ型は低い軍事参与率と服従性および高い凝集性によって特徴づけられるもので、スパルタを始めとするドーリア国家のような事例が該当する。
- ⑥ 職業戦士型は低い軍事参与率と高い従属性および凝集性によって特徴付けられるもので初期アッバース朝のカリフ制度や、専門的訓練を受けた職業的軍人に支えられた西欧の絶対王政国家などが事例となる。

以上がアンジェイエフスキー理論の基礎であり、これを基に、氏は社会と軍事組織のあり方や、軍事組織の変化する動的な過程を考察する。本論では日本古代の軍事組織のあり方がどのようなものであったかを考える上で、アンジェイエフスキー分類を基礎に考察してみたい。

なお、アンジェイエフスキーの分類指標は軍事参与率、服従度、凝縮性の 3 項目であるが、

原始・古代においては、それぞれの内容を示す数量的な提示は不可能である。そこで、本章ではこれまでの各章にて検討してきた成果を基礎としてこの問題を考えたい。具体的には第3章や第10章で検討した、弥生時代や古墳時代の武器の保有や生産などの研究成果から当時の軍事参与率を推定し、第6章や第7章などで検討した古墳の墳墓や規模といった社会の階層性から服従度の高低を、また、第1章、第5章などで検討した具体的な戦闘像のあり方から凝縮性の度合いについて考察したい。

## 第2節 弥生・古墳時代の軍事参与率、服従度、凝縮性

### 1. 弥生時代における軍事参与率、服従度、凝縮性の割合

#### (1) 軍事参与率

軍事参与率とは全人口の中で戦争に動員される兵士の割合を指す。ここでは、物的痕跡である武器が、当時の社会集団全体の中でどのように独占されていたか、という状況から軍事参与率の割合を推定したい。

第3章でみたように、弥生社会における武器は概ね集落跡、もしくは墓域から出土する。特に大型の環濠集落などから石鏃や石剣など膨大な石製武器が出土するように、大部分は集落跡からの出土で占められている。第3章で取り上げた弥生時代後期の鉄製武器に関しても、鉄製武器は住居関連からの出土が53%の過半数を占めるなど、大部分が集落（住居）からの出土である。

弥生時代においては、武器が集落の内部から出土するという一般的な傾向が認められることから、弥生時代で武器を所有したのは集落内に住居した一般成員であり、武装集団の具体像としては、集団の一般成員による武装が中心であったと評価したい。すなわち、弥生社会の大部分では、共同体成員の武器を保有した割合、換言すれば共同体内において軍事に携わった人々（軍事参与率の割合）は比較的に高かったものと考察できる。

上記のように、弥生社会の軍事参与率の割合は基本的には高い傾向が伺われるのであるが、第4章で考察したように、弥生時代の軍事組織のあり方は地域や時代によって進展の速度が異なっていたことが指摘できる。大まかにいうと弥生時代早～前期の北部九州、及び前期～中期の北部九州以外の弥生文化分布地域においては、首長層における武器の独占傾向が少ないため、

集落内の一般成員が武装化するような共同体全体の武装の平準傾向が想定されるのである。

一方、弥生社会の最先端地帯である北部九州地域では、弥生時代中期の段階において銅剣・銅矛・銅戈といった金属製武器の出現とその副葬が顕著化する。第4章で検討したように、北部九州地帯においては、軍事面での稀少武器の独占や、軍事面に特化した戦士階層の存在を推定することができるだろう。また、弥生時代後期においては鉄器の使用が広い範囲にわたって認められ、日本列島各地において鉄器の生産が開始し、鉄製武器を副葬する首長墓が形成されるようになるなど、首長層の鉄製武器に関する独占的傾向が急速に進行していき、結果として古墳時代前期の武器の多量副葬へと至るようになる。

すなわち、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、鉄製武器の普及に伴い、社会における軍事参与率（全人口の中で戦争に動員される兵士の割合）は次第に低くなり、特定の武器を独占した首長層によって軍事組織が形成されていくといった歴史的な潮流を読み取ることができるのである。

## （2）服従度

服従度とは軍隊の服従関係や従属関係を示す指標であるが、これについては、考古学が得意としてきた墓制の階層性などから、弥生社会での服従度を推察したい。

弥生時代の墓制研究においては、第3章でみたように、特に北部九州地域において、農耕文化の開始期より武器などの副葬品を墓へ納める行為が生じている。ただし、北部九州地域においても、弥生時代の早・前期に限っていえば、武器は石製の短剣が主であって、武器が副葬された被葬者の大部分が共同墓地（集団墓）の一角に埋没された状態にあり、突出した階層化は未だ顕著では無いため、その服従度は全般的に低いものであったと考えられる。

弥生時代中期の北部九州地域では、石製武器に代わって銅剣・銅矛・銅戈といった金属製武器の出現とその副葬が始まり、“王墓”とも称される質の高い副葬品を持つ特定の集団墓が現れ、青銅製の武器を複数本副葬するような事例があらわれる。更に中期後半には、北部九州地方では日本列島の他地域に先駆けて鉄器の製作も開始されており、副葬行為から伺われる社会の階層化が急激に進行していく。

このことから、北部九州地帯においては、弥生時代中期段階に社会の服従度が一定の高さに達していると考えるが、これに比べると、北部九州以外の他地域全般に関しては、弥生時代前期～中期における武器は集落から出土する事例が中心であって、墓域へ武器などを副葬する行為そのものが少ないといえる。

古墳時代に階層化が急激に進行する近畿地方においても方形周溝墓と土壙墓といった墓制の差異や、大型の方形周溝墓の存在などから、若干の社会的な階層差の存在が指摘されているが（岩松 1992、藤井（等） 2005）、そこから想定される階層差は北部九州地域と比すれば小さく、副葬品目として武器が選択されてはいないために、社会における武器を尊ぶ価値観も希薄であったといえるだろう。

また、第 3 章でみたように、弥生時代後期の社会では、汎日本列島的に鉄器の生産や使用が普遍化し、各地の弥生時代の墳丘墓などに鉄製武器が副葬されるようになる。このことから、弥生時代後期段階に至ると、汎列島的には階層化が進展していくことで、武器保有の格差などが生じていると評価することができる。

以上のような、墓制から伺える社会の階層性から考えると、弥生社会の服従度に関しては全般的には服従度が低い社会であったと位置づけたい。ただし、先にみた軍事参与率と同じく、弥生時代中期を中心とする北部九州地域や、弥生時代後期～終末期の汎日本列島社会においては、墓制にあらわれる集団間の関係性などから、弥生社会の中においても服従度が高まっていた状況が想定されるのである。

### （3）凝縮性

軍事組織に関する指標の最後となる凝集性の度合いは、軍事団体の組織の強固さや緊密さを指す。これについては、当時の戦闘技術の面から考えてみたい。

第 1 章において、実際に武器による殺傷痕の残る殺傷人骨を検討した結果、弥生時代の対人殺傷の実例は、背後からの殺傷事例が多く、奇襲や襲撃といった数人単位の戦闘行為が主であったことを論じた。加えて、絵画土器にみるように、弥生時代においては儀礼的な戦闘行為が行われたことも指摘することができた。

また、第 2 章で検討したように、従来、防御集落とみなされることの多かった環濠集落も、詳細に検討すると、集落以外の環濠遺跡の事例も多く、弥生社会においては集落間で戦闘を行うような大規模な戦闘は非常に少ないケースと想定した。

このような諸点から、弥生時代の戦闘は“未開戦”（primitive war）段階であったと評価することができるが（藤原（哲） 2004）、文化人類学において指摘されてきた未開戦の特徴としては、戦術的な作戦や、明確な指揮と統制、十分な補給といった要素の未発達なことが挙げられている（Turney-High 1971）。従って、弥生時代の軍事集団における組織の強固さや緊密さについても、相対的には低かったとしなければならない。



なお、人類学者の福井勝義は戦い、紛争、略奪、殺りくの4つの概念をまとめて戦い(conflict)としているが(福井 1987)、戦争の概念規定は序章に述べたとおりであって、本論は“国家規模の組織における意図的な暴力闘争”を戦争(warfare)として認識し、前国家段階の紛争や戦闘を“未開戦”段階とするものである。

## 2.古墳時代における軍事参与率、服従度、凝縮性の割合

### (1) 軍事参与率

古墳時代は京都府椿井大塚山古墳や奈良県黒塚古墳でみるように、当初より大規模な首長墓である古墳に鏡や農工具と並んで鉄製の武器が副葬されている。しかしながら古墳時代前期の副葬武器には、儀礼的様相の高い銅鏃などの割合も高く、武器組成が完全に鉄器化しているわけではない(松木 1991)。本論文の第6章においても、古墳時代前期、かつ大型の前方後円墳であるほど甲冑副葬の儀礼的な傾向が高い様相について指摘を行った。

一方、古墳時代中期には、第9章で鉄器の生産状況を検討したように、大阪府大泉遺跡などで鉄器の集中的・専門的な大規模生産が可能になり、武器の鉄器化が完了する。また第6章や第7章の武器副葬の項で検討したとおり、大阪府野中古墳や西墓山古墳などで大量の鉄製武器の埋納が行われており、古墳時代中期には共同体内部における実用的な鉄製武器の独占状況が、大王層や首長層を中心に大きく進展していくのである。

このように、古墳時代においては鉄製武器が首長層を中心に独占された状況であったことが理解できるため、実際に武器を用いて軍事に携わる階層も、社会全体でみれば特定階層や特定集団に偏在していたといえるだろう。すなわち、古墳時代の軍事参与率は比較的に低い状況であったと評価できるのである。

### (2) 服従度

墳墓における階層性から推察すると、古墳時代は各地域において社会の階層化が著しく進展した時代であったといえる。本論では、第6・7・9章において武器副葬の質や量の差異は、当時の社会階層などの具象化であると指摘したが、学史上においても、古墳の階層性に関する研究は枚挙に暇がない。

具体的には、第9章でみたように古市古墳群の126基からなる古墳群では、全長425mに達する前方後円墳の誉田御廟山古墳(伝応神陵)から墳長18mの軽里古墳までの規模による差異

が顕著であると共に、青山1号墳などの円墳や、向墓山古墳などの方墳、土師の里遺跡群での埴輪棺や土壇墓といった多様な墓の形態が認められ、規模や形態に基づく古墳の差異が明瞭である。日本列島各地でも首長墓系列が辿れる古墳群が大小様々に築かれていることは、地域史の研究の深化により明らかにされている。

学史上で何度も指摘されているように、古墳時代社会は明確な社会的階層性の顕在化が特徴であり、このことから、当時の社会内部における服従度は相対的に高く、軍事組織についても一定の服従度があったものと考えなければならないだろう。

### (3) 凝縮性

古墳時代の戦闘技術を復元する方法として、第5章で『日本書紀』に記された戦闘記述の分析を行った。その成果によれば、古墳時代の伝統的な戦闘様式は弓矢などによる遠距離戦闘が中心であったが、古墳時代中期～後期頃を中心とする対外戦争での経験を通じて、本格的な集団戦闘や騎馬戦術が行われるようになる様相を論じた。

一方、第8章で武装集団の個別事例を分析し、第9章で古墳時代中期社会の軍事組織について構造的に検討した結果、この段階には、中央と地方との関係性において武器の配布などを通じてヤマト中央政権を求心的に、地方の中・小首長層の軍事的な武装集団が関連づけられ、階層的・重層的に交差しながら広域な全国規模での有機的な軍事組織が形成されていた状況を復元した。すなわち、古墳時代中期においては、王権と地方の諸首長との間に軍事的な序列が成立していたと考えられるのである。

これらの状況から、古墳時代における軍事的な凝縮性については弥生時代よりは高くなっており、その度合いは低から高への過渡期、古墳時代前期段階では未だ低い、古墳時代中期以降は高まっていくと評価しておきたい。

## 第3節 弥生・古墳時代における軍事組織の歴史的位置づけ

### 1. 弥生時代における軍事組織の歴史的位置づけ

前節において弥生時代から古墳時代の軍事的な社会側面をアンジェイエフスキー分類の指標となる軍事参与率、服従度、凝縮性などの関連で検討した。

アンジェイエフスキーの分類は、彼自信が述べているように純粋類型であるに過ぎず、現実

の軍事組織や社会構造は、理想類型の様々な混合体であることは明白である。実際の社会には、それぞれの地域差や時期差によって様相が異なることは筆者も承知している。しかしながら、これら純粹類型の検討は戦争の開始や、国家形成という比較的広い視点から、社会を理論的に分析する限りにおいては、非常に有効な方法論であると考ええる。

特に国家発生期の軍事組織については、直接的な資料は皆無で、間接的な物的痕跡（考古資料）しか知られていないのが実情であるならば、全体像を把握する上で、理論的な抽象化も有効な研究方法の一つであるといえよう。本節ではこの視点からもう少し理論的な問題点を考察する。

さて、これまでの検討において、弥生時代は相対的に軍事参与率が高く、服従度、凝縮性のいずれもが低かったと評価した。アンジェイエフスキー分類に当てはめると、弥生社会の軍事組織はタレンシ型（Msc）が該当する。

ただし、弥生社会においても、中期段階の北部九州や、弥生時代後期の段階については金属製武器の生産や、その首長層への武器副葬といった様相から、これらの社会においては相対的に軍事参与率、服従度、凝縮性のいずれもが低いと評価することができる。これをアンジェイエフスキー分類に当てはめると、中期段階の北部九州や後期段階の弥生時代社会においては騎士型（msc）を想定しておきたい。

アンジェイエフスキーによれば、タレンシ型は一般的に、内部が部分に分かれておらず、組織的でない、比較的平等な社会にみられる軍事組織類型とされる。軍事参与率が高いということは、武器を独占する戦士階級が存在しないことを、服従性が低いことは命令権が存在しないことを意味するものであって、真の意味で小規模かつ、政府が存在しないような社会にのみ存在するというのである。

タレンシ型の指標となったタレンシ族は、西アフリカのサバンナ地帯に居住する農耕民で、サーヴィスの進化モデルでは、部族（Tribes）社会に該当するが（サーヴィス 1991）、かかる伝統的で小規模な部族社会や首長制の社会について、クラストルは“国家に抗する社会”と位置づけ、“国家”とは対比すべき自立性をもった社会であると規定している（クラストル 1987）。

弥生時代については、部族社会よりも階層化が進行した首長制段階に位置づけたいが（都出 1996）、本論で検討している軍事的な側面でいえば、一般に武器の生産と保有は各集落内において営まれ（軍事参与率が低い）、戦闘の形態も奇襲や襲撃といった小規模なものであるため（服従度・凝縮性が低い）、これに対応する軍事組織も小規模な軍事組織の範疇に含むのが該当である。これまでの研究史を尊重し、あえて史的唯物論の議論に対応させるならば、松木武彦

も検討しているように、弥生時代とは基本的に公的権力の形成以前における“人民の武装”段階と評価することができるであろう（松木 2007）。

一方、先進的な北部九州においては弥生時代中期以降に、その他の弥生時代社会については後期以降において、鉄器の生産や鉄製武器の首長層を中心とした副葬が行われており、その軍事組織の形態は騎士型へ移行していくと考えることができる。

騎士型の軍事組織は、低い軍事参与率、低い凝縮性及び低い服従性によって特徴づけられる。アンジェイエフスキーは騎士型の軍事組織として、低い軍事参与率と結びついた急峻な階層構成、低い凝縮性と支配階層内部での平等主義を挙げており、その政治形態の代表を貴族共和制としている。

弥生時代中期の北部九州地帯や、弥生時代後期以降の社会においては、王墓や首長墓の成立や、そこへ副葬された武器などから、武器を所持した首長層の成立が顕著になると想定できる。しかしながら、ここでの階層差は、古墳時代の首長層の武器の独占と比較すると、まだまだ軍事参与率や服従度などは一定の高さに留まっている状態である。

それでもこの歴史的な道程の先に古墳時代が成立することを考えると、この段階は、社会の階層性が未成熟なタレンシ型の軍事組織と、階層性や集権化が著しい古墳時代中期以降との間の移行期であって、軍事組織的にいえば半独立的な多数の政治的集合や組織によって特徴づけられると評価することができるであろう。

## 2. 古墳時代における軍事組織の歴史的位置づけ

古墳時代の軍事組織については、鉄製武器が首長層に独占されていた状況や、古墳の階層差に表象される階層分化の進展が認められるため、弥生時代に比すれば、より軍事参与率が低くなり、服従度、凝縮性はやや高めになると考えられる。

ただし、第 6・7 章において、古墳時代前期の武器は機能的にも、葬送（廃棄）状況においても、どちらも儀礼的な側面の価値が極めて高いことを指摘した。また、第 5 章において、古墳時代の伝統的な戦闘様式は、弓矢などによる儀礼的な様相を色濃く残す遠距離戦闘が中心であったが、古墳時代中期～後期頃を中心とする対外戦争での経験を通じて、本格的な集団戦闘や騎馬戦術が行われるようになる様相を論じた。これらの状況から古墳時代の前期段階は、未だ軍事参与率、服従度、凝縮性共に相対的に低いものであり、弥生時代後期段階と同じく騎士的な軍事組織であったと結論づける。

古墳時代中期においては、本論で繰り返し述べてきたように、社会における武器の実用的な

取り扱いが顕在化し、儀礼についても伝統的な宝器としての扱いから、武器の組成を重視した扱い方法に変化していく。また、武器の大量埋納に代表されるような近畿地方での武器生産の集中化や、その広域な流通、第8章の武装集団の事例的研究の中で考察したような中央と地方との軍事的諸側面などから、それが点と線との関係ながら、日本列島初の広域な軍事組織が形成された段階であると評価できるものである。

古墳時代中期以降においては、首長層の武器の独占化が進行し軍事参与率が更に低くなる一方、階層化や戦闘の苛烈さが上昇することにより、社会の服従度や凝縮性が急激に高まったと想定できる。低い軍事参与率、高い服従度と凝縮性の軍事組織は、アンジェイエフスキーによれば職業戦士型の軍事組織が該当する。彼によれば、この軍事組織は階層構造が急峻で、専制的に支配される社会に見出すことが多いものの、ごく小さい社会から、規模の大きな社会まで存在しており、それぞれが極めて変化に富むものであるとしている。

第7章において、古墳に副葬された武器の問題を検討した結果においても、中・小の首長を中心に軍事組織が復元できる可能性が指摘できるなど、軍事組織の広汎な階層性や同一性（すなわち服従度、凝縮性が高い）が認められ、少なくとも弥生時代に比すれば、古墳時代中期には首長層という特定階層による軍事的な組織化が進行していたことは疑い得ないであろう。

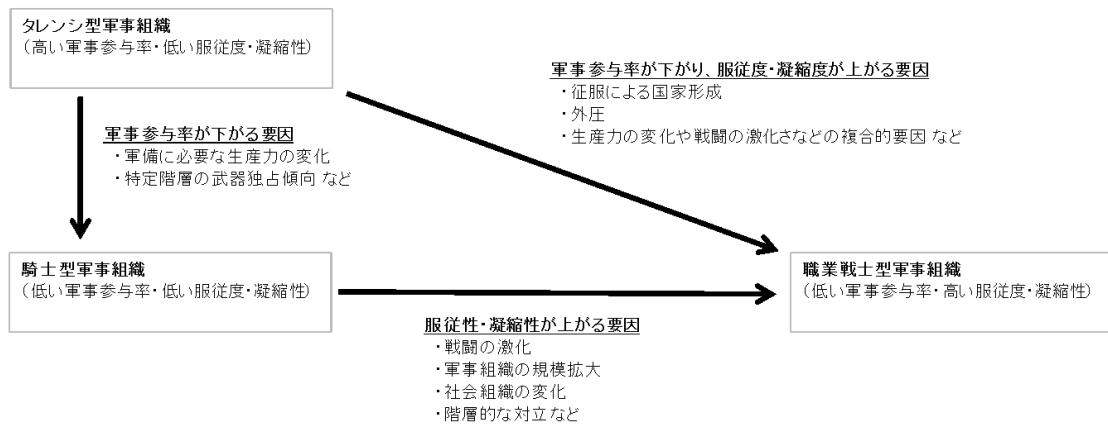
ただし古墳時代の軍事組織の実態については、議論が多岐に及び課題や問題点も多い。同様に、古墳時代が国家段階であったかについても諸説がある（註37）。次節では、弥生時代から古墳時代に至る階層化の過程において、暴力的な集団組織である軍事組織はどのような変化の特徴と画期が認められるのかに的を絞り、国家の成立と軍事組織との関係性について論じてみたい。

#### 第4節 軍事組織の変化と画期—国家形成との関連性について—

歴史的な位置づけとして弥生時代前期～中期は相対的にタレンシ型（Msc）の軍事組織、弥生時代後期（中期の北部九州地帯含む）～古墳時代前期は騎士型（msc）の軍事組織、古墳時代中期～後期は職業戦士型（mSC）の軍事組織であると規定した場合、タレンシ型から騎士型、更に職業戦士型へと変化する過程は、およそ次のような説明が可能である（表18）。

一般に暴力の行使や脅迫によって他人を強制する能力は、他の何物にも還元できない権力の一形態である。軍事参与率（全人口の中で戦争に動員される兵士の割合）が低下し、特定階層

表 18 軍事組織の変化要因



による軍事権や武装権の独占を可能にする社会的な背景の一つとしては、軍備を整えるための費用や生産力の変化が挙げられよう。

何故ならば、ある社会における軍事参与率は、軍備の経済的な負担と、軍事組織の果たす効用の有効性との両者により規定されるため、鉄器の使用やその普及度（量産化）という武器や武具の経済的要因が、軍事参与率の変化を不可避免的に導くからに他ならない。

具体的に示そう、例えば弥生時代前半の大部分の社会においては、集落内で膨大な石製武器が廃棄されるというあり方から、集落内において石材や石製武器が保有され、共同体内における軍備に参加する人々（軍事参与率）も多数であったことが推察される。

しかし石製の武器類に替わり、鉄製武器を装備するためには、材料の入手や、高度な製作技術の習得など、膨大な労力の蓄積や社会的な投資が必要となる。そのような対価品としての鉄製品を独占することは、首長階層の軍事的・社会的な権力を生じさせ、一方、鉄製武器による戦闘が常態化することによって、鉄製武器を入手し、軍事に参加する人口の割合（軍事参与率）が低くなるのは必然である。

第3章で述べたように、日本列島における鉄器の使用は、かつては弥生時代前期にまで遡るとされていた。しかしながら放射性炭素年代に基づく問題提起から、これまで弥生時代前期とされてきた鉄器の年代的な再考が迫られており、製鉄の開始時期については未だ解決していない（註38）。しかしながら、弥生時代前半に鉄器が存在したとしても、それは極めて僅かな量の舶載品であると考えられるため、社会に与える影響は軽微であったといえるだろう。

武器としての鉄器の普及によって軍事参与率に変化が生じる画期としては、鉄器の製作（smithing）が本格的に開始される時期、北部九州では弥生時代中期が該当する。しかしながら鉄器生産の技術や鉄器の使用そのものが、広く日本列島に拡散するのは弥生時代後期である

ため、汎日本列島的にみれば、弥生時代後期、特に後期後半である紀元後 3 世紀を前後する時期に軍事参与率を変化させる非常に大きな画期を認めることができる。

3～4 世紀には、広域な鉄器（製品又は素材）の流通ルートが確保するとされるものの（都出 1991、禰亘田 1998）、第 3 章で確認したように、鉄器の生産そのものでは画期とするほどの変化は認められず、特に古墳時代に政治的中心となる近畿地方では鉄器生産遺跡は依然として少ない（註 39）。古墳時代前期段階における鉄製品の普及には一定の限界性が想定され、軍事集団も比較的小規模なまとまり（服従度や凝縮性は依然として低い段階）であったと評価しておきたい。

むしろ、鉄器生産の大きな変化は古墳時代中期（5 世紀）段階にこそ求められる。第 9 章でみたように、この段階には大阪府大県遺跡などにおいて鉄器の集中的・専門的な生産が開始されるためである。古墳への武器の大量埋納も古墳時代中期以降に顕著化することをみても、5 世紀前後に鉄器の量産化が進展した傍証となるだろう。

これら鉄器の量産化によって、首長層の鉄製武器の独占は質量共に卓越したものになり、戦士階層の優越性や軍事集団の組織化が強固になっていくと考えられる。そのような意味において古墳時代中期（5 世紀）前後の社会は軍事参与率が変化する極めて大きな画期であったといえる。

別の視点から軍事組織の服従度や凝縮性の変化について検討してみれば、アンジェイエフスキーが述べているように、集団内の統制の強さや服従度は、一般的に戦闘の頻度や苛烈さ、又は軍事集団の規模に比例して高まる傾向が認められる。

弥生時代前半における戦闘は短剣や弓矢による戦闘が主なもので、第 1 章の戦闘戦術の復元からは儀礼的要素が高い少人数の戦闘であったと評価することができた。したがって、弥生時代前半の軍事組織については、明確な軍事的指揮や計画性、規律の強度などは相対的に低かったといえるであろう。

弥生時代後期には鉄製武器が普及するため、装備上の経済的要因によって軍事参与率が下がると共に、鉄製武器による殺傷が認められる殺傷人骨が増加し、鳥取県青谷上寺地遺跡など一遺跡で大量の人骨が出土するようになるなど、戦闘や暴力の規模はやや大きくなっていくと考えられる。ただし、日本列島における古墳時代前半の伝統的な戦闘の実像としては、第 5 章でみたように、苛烈な壊滅戦や攻城戦などは希少な事例であって、首長層たちによる弓矢戦闘が中心の、貴族的・儀礼的な様相が濃厚に残存した戦闘であったと評価することができる。

服従度や凝縮性が高まる契機となる戦闘の苛烈化や、軍事組織の拡大といった現象は、朝鮮

半島における異なる戦闘様式との摩擦と、これに対応した国内の軍事組織の充実とに求めたい。弓矢戦闘主体による儀礼的な様相を残す、歩兵主体の戦闘様式を戦ってきた古墳時代の人々にとっては、城郭と領土拡張、重装騎兵による戦闘といった苛烈な朝鮮半島での軍事経験との接触に触発され、5～6世紀にかけては鉄製甲冑の大量生産や殺傷威力の増す長頸鏃の採用、馬具の受容と普及など、武器・武具の革新が相次ぐようになる。

古墳時代中期の5世紀を前後する時期には、対外的な接触を通じて戦闘が苛烈になり（凝縮性が上昇し）、同時に国内においても汎日本列島的な軍事機能の組織化が進行（服従度が上昇）していった状況が読み取れるのである。古墳時代中期の武器や武具の革新はこれまでも重視されてきたところであるが、軍事参与率、服従度、凝縮性のそれぞれの分野において一連の変化が推定される古墳時代中期の軍事的な画期は、組織面でのあり方も含め、従来よりも更に高く評価しなければならないのではないだろうか。こういった軍事的側面は、軍事と非常に深い関連のある“国家”の形成についても画期的な現象であったといえるだろう。

国家の指標の一つとして軍事組織の整備を重視し、当時の対外的・政治的な戦闘の存在を勘案すれば、古墳時代中期とは国家規模の軍事組織が本格的に指向され始めた段階であって、“戦争”の名に値する武力闘争が開始された時期であると評価することができるのである。

古墳時代後期においては、第11章でまとめたように、武器の威信財としての機能が喪失していき、儀礼的な、又は人的な結合原理から組織化されていた軍事組織が、よりシステムの組織化によって軍事組織が整備されていったと推定され、同時に武器の所持階層がより広範囲になり、武器の保有階層が拡大していくと想定されるため、軍事参与率が高くなることによって一般徴収型（MSC）へと軍事組織がシフトしていき、律令軍制において、国家における軍事組織は新たな段階を迎えると評価することができるだろう。



## 終章



## 終 章

序章において設定した本論文の主要論点は以下の①から③の3つである。これらの課題について、本論文ではどのような検討を行い、どのような成果を得られたのかを終章で総括する。

- ① 弥生時代と古墳時代の具体的な戦闘形態を復元する。
- ② 弥生時代と古墳時代の具体的な武装集団や軍事組織を復元する。
- ③ 軍事組織の変遷を通じて戦争の開始や国家の成立を解明する。

### 1. 弥生時代の戦闘形態について

弥生時代は学史上において武器が出現し、現在へと続く戦争が開始する歴史的な時代とされる。本論文では、第1章において弥生時代の人骨に残る武器の殺傷痕（殺傷人骨）を検討し、第2章において環濠集落について検討を行った。

殺傷人骨の分析では、弥生時代前期～中期は、背後からの対人殺傷事例が多いことを明らかにした。また、環濠集落の分析では、その変遷や分布を追求することで、防御以外の環濠の様々な機能を推定した。

弥生時代の戦闘像について、従来は環濠集落を巡る集団戦というイメージが大勢を占めていた。しかしながら、本論文では、環濠の防御以外の機能について提言を行い、殺傷人骨の分析結果に基づいて“奇襲・襲撃・裏切り”といった数人単位の戦術や儀礼的な戦闘こそが、弥生時代の戦闘の主体であったことを明示した。

本論文では、弥生時代の具体的な戦闘像を奇襲・襲撃や儀礼的な戦闘といった極めて小規模で散発的な戦闘や儀礼的な暴力行為が中心であったとすることで、既往の研究で指摘されてきた、農耕文化の開始時期から普遍的に集落が防御状態にあるような激しい戦闘が始まった、という見解には異を唱えたことが独自の見解である。

### 2. 弥生時代の軍事組織像について

弥生時代の武器については、研究初期では実用性に疑問を呈する見解が多数を占めており、本格的な軍事組織像の検討は皆無であったが、本論文の第3章と第4章では、弥生時代の集落における武器の出土状況や生産状況、墓域での副葬状況を分析し、弥生時代における武器の社会的な価値背景の視点から、弥生時代の軍事組織像の考察を試みた。

検討の結果、弥生時代前期～中期では、武器が集落域から出土する事例が多く、北部九州地

域を除いて、武器の威信財としての社会的ステータスも全般的に低いことを明らかにした。これらの分析を踏まえ、弥生時代前期～中期（北部九州地域を除く）の軍事組織像としては、集落内の一般成員が威信財とまではいえない武器で武装化するような共同体全体の武装状況（武装した農耕集団）を想定した。

一方、弥生時代後期末（北部九州地域では中期以降）に至ると、利根川以西の地域で金属製の武器が普及し、武器を副葬する首長墓も出現する。このことから、本論文では弥生時代後期末以降の社会において、威信財としての金属製武器を独占した首長階層や戦士的な階層の成立を推定し、そこに軍事的な組織が成立する萌芽を認めた。

弥生時代における具体的な軍事組織の研究や、軍事に特化した社会集団の具体的な分析は、従来の研究においてはほとんど行われていないため、本論文は初めて網羅的にこれを扱った研究として位置づけることができるだろう。特に弥生長期編年に基づいて、灌漑農耕の開始から石製武器のみで武装された期間が 500 年近くの長期に及ぶことが明らかとなったが、この段階の軍事組織が武装した農耕集団の段階にあったということを示した初の研究成果として評価することができる。

### 3. 古墳時代の戦闘形態について

古墳時代の戦闘像に関しては、その軍事組織の研究に比して研究事例が少なく不明瞭な点が多かった。

本論文では第 5 章において『日本書紀』の戦闘記述を、実際の考古資料から批判的に検討を行い、考古学と文献史学との融合を試みた。これによって 3 世紀～6 世紀の東アジア世界においては重装騎兵による戦闘や、城郭の攻防戦が主流になっていたのであるが、武器組成や『日本書紀』の記述から考察を加えると、日本列島の戦闘は徒歩による弓矢戦闘が主流であり、長柄武器や城郭が発達した朝鮮半島における戦闘との相違点を指摘することができた。

また、弓矢戦闘主体による儀礼的な様相を残す戦闘様式を闊ってきた古墳時代の倭人たちにとってみれば、自らの戦闘様式とは全く異なった、城郭と領土拡張、重装騎兵による攻撃など、一国を滅亡に追いやるほどの激烈な戦闘に遭遇することで、古墳時代中期（5 世紀）以降、武器の改良や乗馬風習の導入といった軍事的な改革が図られた政治的な背景を指摘した。

古墳時代の戦闘像については、具体的な様相を総括的かつ学術的に検討した事例は少ないため、本論文ではこの研究を大いに推進することができたといえる。

#### 4.古墳時代の軍事組織像について

古墳時代の軍事組織に関しては、“常備軍”を巡る論争などの研究史が存在する。しかしながら、考古学の資料の大部分が古墳からの出土遺物（副葬された儀礼的道具）であることから、副葬資料の取り扱いに関する課題が指摘されている。

第6章と7章においては、古墳出土の武器は葬送儀礼の痕跡であるという前提を明確にした上で、多角的に分析を試みた。具体的には、甲冑を副葬した状況の型式分類や、墳墓における副葬品配列の分類、武器を副葬した被葬者の性別の検討などを試みた。こういった分析を通じて、古墳時代における武器の社会的な価値体系を明らかにした。

武器の価値を社会背景から考察した結果、古墳時代前期の武器副葬や、古式の大型前方後円墳祭祀、古墳時代中期の武器の大量埋納などについては、副葬行為における儀礼的な様相が強く、直接的に副葬武器から軍事組織を復元することが困難であることを示した。

他方、特に古墳時代中期における中小首長層の武器副葬に関しては、埋納に際して実際の武器組成を意識した副葬行為が行われていることを明らかにした。このことから、古墳時代中期の副葬資料からは、実際の軍事組織像を描ける可能性が導かれた。

この成果を受け、第8章と第9章では古墳時代中期に的を絞り、より詳細な軍事組織像の復元を試みた。その結果、古墳時代中期では、近畿地方中枢部に存在した政権（ヤマト政権）において、大量の武器の生産や配布などを管理した政治機構が形成されていたことを再確認した。更に、中期のヤマト政権が、地方の専門的な武装集団を点的に組み込むことによって、全国的な軍事組織を構築していた状況を具体的に示した。

第10章においては、古墳に設置された埴輪のうち、武人を象った武人埴輪を分析した。分析の方法は、古墳に並べられた埴輪祭祀の検討や、武人埴輪の組合せをモデル化することである。このことによって、古墳時代中期に成立した全国規模の軍事組織が、古墳時代後期には整備充実している状況を論じた。

第11章では、第5章から第10章まで多方面から検討した古墳時代における軍事組織像をとりまとめた。そして古墳時代の軍事組織が、相対的に未発達な古墳時代前期の段階から、古墳時代中期に広域な軍事組織が日本列島において初めて形成され、後期に至ると様々な武装集団の階層（職掌）化が進行していく様相を具体的に指摘した。

本論文の大きな成果としては、研究の課題として指摘されていた古墳の副葬武器の資料的な取り扱いについて、武器副葬の行為を多角的に検討することで、従来の“副葬武器が実際の武装内容を反映する”といった無批判的な前提に基づく軍事組織の研究手法の課題解決へ向けて

推進することができたことにある。

## 5.戦争・国家・軍事組織の発生に関する理論的位置づけについて

第1章から第11章における個別の研究成果を受け、第12章においては弥生時代から古墳時代における軍事組織の変遷に関する理論的な考察や歴史的な位置づけを行った。

アンジェイエフスキーの社会学的な研究を基礎として考察を行い、弥生時代前期～中期社会の軍事組織の様相はタレンシ型 (Msc)、弥生時代後期 (中期の北部九州地域含む) ～古墳時代前期における軍事組織は騎士型 (msc)、古墳時代中期～後期の軍事組織は職業戦士型 (mSC) の軍事組織であると規定した。

そして鉄製武器が普及する弥生時代後期や、軍事組織が整備化されていく古墳時代中期を変化の画期として重視し、特に古墳時代中期 (5世紀) においては、軍事参与率・服従度・凝縮性が共に変化する最大の画期を認め、この段階こそ、国家規模の軍事組織が本格的に指向され始めた段階、“戦争” の名に値する武力闘争が開始された時期であると評価した。

## 6.軍事組織の変遷に関する歴史的な位置づけについて

弥生時代から古墳時代における軍事組織の形態と画期をまとめるならば、第一の画期は定型な武器が出現し、武装農耕民が成立する弥生時代前期段階であり、これによって成立した各地の武装農耕集団は、タレンシ型 (Msc) の軍事組織であって、集落内の一般成員が武装化するような共同体全体の武装段階であったと評価できる。

第二の画期は、日本列島各地に鉄製武器を副葬する首長墓が形成され、軍事的な階層が広域に成立した段階であり、北部九州では弥生時代中期、利根川以西の日本列島各地では弥生時代後期後半の段階である。この画期以降では、各共同体はそれぞれの首長を求心的に、軍事的な関係性や集団的な武装を形成していたと考えられる。

その軍事組織は騎士型 (msc) であり、半独立的な多数の政治的集合 (首長層) を中心に形成された軍事組織によって特徴づけられる。この段階においては軍事的な組織や機構はその成立の萌芽をみるが、しかしながら弥生時代後期～古墳時代前期における首長層の武器の扱いは、儀礼的な様相が顕著で、全国的で広域な軍事組織の整備は未発達であったと位置づけておきたい。

第三の画期は古墳時代中期とする。様々な視点から検討を加えた結果、古墳時代中期社会は点と線との関係ながら、列島初の広域な軍事組織が形成された段階であると評価することがで

きる。この段階において成立した軍事組織は職業戦士型（mSC）であり、中小の軍事に特化したような専門的な武装集団（首長階層）を中心に構成されていたと考えられる。

古墳時代中期に成立した、汎列島規模での軍事組織の構造は、後期において制度的・システム的に充実していったと推定される。近畿地方中枢部の首長層においては、武器の威信財としての機能が喪失していき、武器副葬といった行為を介して維持されてきた、儀礼的な、又は人的な結合原理を中心に組織化されていた軍事組織が、より制度的に組織化されていくと評価できるだろう。

また一方では、全国的な規模で、社会的な武器の所持階層がより広範囲になり、武器の保有階層が拡大していくが、このことは後の律令軍制へとつながっていく。古墳時代中期に成立し、後期において充実していった汎列島規模の軍事組織構造は、7世紀～8世紀における律令兵制の成立をもって、新しい第四の画期を迎えることになるのである。

国家の発生や古墳時代の軍事組織に関しては、これまでも盛んにする研究されているが、これら研究に関しては、理論面での分析が乏しいことが課題の一つとして挙げられる。本論文においては、武装集団や軍事組織という社会集団の存在や構成原理を考察し、これを歴史的な事象として理論的に位置づけたことが重要である。古墳時代中期における政治構造の重要性はこれまでも指摘されているところであるが、本論文では軍事参与率・服従度・凝縮性といった軍事的な問題に特化して古墳時代中期の重要性を強調し、同時に国家の形成をこの段階に導いたところに、その研究の特色が挙げられる。





## 註 及び 引用・参考文献、報告書等文献



## 註

(註1) 時期区分としては、弥生時代は畿内V様式編年を基準としてI様式を弥生時代前期、II～IV様式を弥生時代中期、V様式を弥生時代後期とした（京都帝国大学文学部考古学教室 1943）。全国の並行関係としては『日本農耕社会の生成』や『弥生式土器集成図録』などを参考とし（日本考古学協会（編）1961、小林・杉原（編）1968）、突帯文土器共伴の時期を弥生時代早期と位置づける。

古墳時代を記述するに際しては、『前方後円墳集成』の10期編年（以下、集成編年：広瀬 1991）を採用し、集成1～4期を古墳時代前期、5～7期を古墳時代中期、8～10期を古墳時代後期とする。円墳や方墳などについては主要な出土遺物の型式から集成編年の時期に換算し直した。なお、古墳を記述する場合において、古墳の墳形を省略する場合は前方後円墳・帆立貝式古墳を●、前方後方墳を■、円墳を○、方墳を□とする。

(註2) 武器の名称については時期によって変化があるため、史料や参考文献の字句を除いて、文中では主として冑（カブト）や甲（ヨロイ）、剣（ケン）、刀（カタナ）、矛（ホコ）、槍（ヤリ）、弓（ユミ）、矢（ヤ）、盾（タテ）、で用語を統一した。

(註3) クラウゼビッツ（Karl von Clausewitz）の『戦争論（VON KRAGE）』（原書の初版 1832-1834 年）では、戦争の定義として「戦争とは、敵をしてわれらの意思に屈服せしめるための暴力行為のことである」（また戦争とは）「実にまた一つの政治的手段であり、政治的交渉の継続であり、他の手段による政治的交渉の継続にほかならない」とする（クラウゼビッツ 2001）。

(註4) 短剣は最も簡単に基本的な武器として石器時代から世界各地で用いられている。主な用途は「護身・暗殺」であり、取っ組み合いの闘争においては長い剣よりも扱いやすいという（ダイアグラムグループ 1982）。日本中世の武器としても太刀と短刀は機能が異なり、短刀は「組討」用（取っ組み合いの戦闘）であって、「逆手に取る」ことが基本であったとされる（近藤 1997）。

(註5) 武器と殺傷人骨との関係性から武器の使用法と戦闘像を検討した。しかしながら、これらの考古学的な諸事実をいくら集めたとしても「集団」や「武力衝突」を直接的に証明することが非常に困難であることを自覚する必要がある。

戦争を直接的に把握できるような考古資料としては実際に戦闘が行われた戦場を発掘して証拠をみつけることが確実な研究方法である。戦場の発掘調査は戦場考古学（Battlefield Archaeology）という分野として実際に研究されており、カスター将軍が全滅したビッグ・ホーンやトルコのガリボリの戦場跡などの調査が行われている。日本でも沖繩戦の塹壕、中国の虎頭要塞、南洋諸島の戦跡などの調査も行われており、熊本県山頭遺跡では西南戦争の戦場が発掘されている（菊地（編）2011）。また、島原の乱における原城の発掘調査から多数の殺傷人骨が検出されている。

しかしこれら戦場考古学は近現代の事例が中心であって通常、文献記録の残らない原始・古代の戦場を発掘調査で証明できるような事例はまず存在しない。文献資料により実

際に戦場となったことが推定される中世城郭を実際に発掘調査しても、殺傷人骨や武器が出土することは基本的に無く、物質資料から戦闘の実像を直接把握することは極めて困難であるとされる（千田 2009）。

また、形質人類学（骨考古学）の立場から、受傷人骨のほとんどは埋葬行為が行われたものであり、「戦争」と「諍い」を混同してはならないという提言があるなど、受傷人骨のみからでは戦争の有無を判断することは難しい面が多いことが指摘されている（谷畑・鈴木 2004）。

(註6) 著名な南米ヤノマメ族は熱帯ジャングルで焼畑農耕を主として生活している。その最も無害な暴力は、誹謗中傷の原因とする「胸叩きの決闘」（chest-pounding duel）である。これは交互に胸を殴り合うものであり、血を流さないといったルールが守られる。次の暴力レベルは「棍棒での闘い」（club fight）であり、同じく交互に棍棒で頭を殴りあう。そして死者が出るようなことになれば「襲撃」（raid）に発展する。襲撃の目的は敵の数名を殺して、みつからないうちに素早く逃れることにある。襲撃は報復襲撃を生み、数名単位の小競り合いといった襲撃が頻繁に続く。実際、ほとんどの戦争はこういった報復動機によって引き伸ばされる。究極の暴力レベルは「nomohoni」と呼ばれる裏切行為であり、偽って相手を饗宴に招き、一気に多数を騙し討ちするなどの行為がある（シャグノン 1977、Chagnon 1983）。

東ニューギニアのマリン族は焼畑農耕を主とするが、人口密度はヤノマメ族より高く氏族集団を基本単位としている。ここでは殺人・呪い・女性の誘拐・レイプなどを原因として争いが起きる。始まりは「なんでもない戦い」（noting fight）であり、敵対する2集団は置盾と弓で武装し横列に並び盾越しに矢を射かけあう。この矢合戦（bow-and-arrow fight）では遊戯的な性格が強く死者や重傷者が出ることは滅多にない。戦いがエスカレートすると斧・槍などが使用される「本当の戦い」（true fight）の「襲撃」（raid）や「壊走」（rout）に発展する。「襲撃」とは夜陰に敵の村を襲うものであり敵の数名を殺害すると撤退する。「壊走」とは究極の戦いであり、敵の村を襲い火を放って男・女・老人・子供の見境なく殺戮する（Vayda 1976）。

(註7) 神武天皇は酒宴を利用して敵軍を謀殺、日本武尊は少女に変装して熊襲武を殺害するなど（笹山 1984）。

(註8) オッターバインによれば武器の種類と社会の集権化の度合いには相関関係がある。集権化された社会では投射武器（projectile weapon）よりも、衝撃武器（shock weapon）が使用される蓋然性が高い（Otterbein 1994）。そのため、至近・近距離武器が主体となる九州の戦いがより凄惨であり、激しい戦いは権力集中の発達をいち早く促した可能性も指摘できる。文化的背景としては尚武の気風を育み、荒々しい男らしさや残忍な攻撃性が褒め称えられる社会を想定する。北部九州のみでみられる首狩や、青銅武器が大型化し、祭器として崇められるという考古事実は、そういった社会体系から説明することができるであろう。

一方、畿内では弓矢という遠距離武器が主体であり、戦闘の徹底性は低く、より儀礼的・スポーツ的な戦闘が主であったのではないであろうか。畿内では抑制的な暴力儀礼や小競り合い、又は祭礼が徹底的な死闘を避ける文化様式を築

いており、より緩やかな共同体（大畿内）として均衡を保っていたと評価したい。

(註 9) ターニー＝ハイは“未開の戦争” (primitive war) が“真の戦争” (true war) を超える境界 (military horizon) として 1.戦術的作戦 (tactical operations)、2.明確な指揮と統制 (definite command and control)、3.敵の抵抗を排し戦闘を遂行する能力 (ability to conduct a campaign)、4.明確な動機 (the motive must have some clarity)、5.十分な補給 (an adequate supply) を挙げている (Turney-high 1971)。このターニー＝ハイの区別にはかなり理念的であるとの反論もあるが (栗本 1999)、キーリーも指摘しているように前国家段階の戦争と国家段階の戦争では様々な点で異なっているという事実は残っているといえる (Keeley 1996)。

(註 10) 日本の環濠集落と韓国の環濠集落の実年代の前後関係はどうであろうか。当該期の実年代については学界でいくつかの見解が併存している。その候補の一つである C14 年代ではこれまで BC300 年頃に想定されていた韓国の粘土帯土器 (板付 II 式併行) の C14 年代が BC5 世紀のある時点、BC6 世紀代に遡る可能性が指摘されるなど、弥生時代の C14 年代と齟齬のない年代観が指摘されているので、韓国の無紋土器時代の年代もやや遡って考える必要があるだろう。

(註 11) 堅穴住居の存在がない点については削平されたとする見解が根強いが、北部九州の大多数の環濠内に住居跡の形跡が認められず、堅穴住居が認められる削平のない遺跡においては環濠が認められないことから、特殊な住居形態であったか、もしくは当初から住居が存在しなかった可能性が高いであろう。

(註 12) 集落概念については、地理学や民俗学では単なる居住域だけを意味せず、ムラ (集落)・ノラ (耕地)・ヤマ (山野) を含む広範囲は社会的統一とみる見解が強い (福田 1980)。しかし限られた面積の発掘調査に依拠する考古学においては、そのような景観復元は不可能である。そのため、本論では住居群 (堅穴住居・掘立柱建物) などの遺構が検出された地点を“集落”として把握する。そして溝によって同時代の住居群が囲まれた遺跡を“環濠集落”とし、集住の痕跡がない、非集落的な景観の環濠を“環濠遺跡”とする。

(註 13) 小型 (a) とは集落の平面規模が概ね 150m 未満のもの、中型 (b) とは 150～300m 程度のもの、大型 (c) とは 300m 以上のものとし、低地 (1) とは沖積平野や扇状地などに立地するもの、台地 (2) とは比高差 30m 未満で台地や河岸段丘などに立地するもの、高地 (3) とは比高差 30m 以上で丘陵や山地に立地しているものである。

(註 14) 文献研究者で考古学的な事実を分析の材料にしたものとしては (石母田 1947、井上 (光貞) 1949、直木 1968) などがあり、考古学研究者で文献的な事実との整合を図った研究としては (後藤 1928、永末 1941、小林 (行雄) 1951b) などがある。

(註 15) 日本書紀の基本テキストとしては以下のものを参照とした (黒坂 (編) 1951、1952、小島ほか (校訂) 1994、1996、1998)。

(註 16) 具体的な研究事例としては岸俊男が『記紀』に記載の

ある葛城氏・和珥氏などの大和地方の有力首長の本拠地 (占居) を大和盆地の地図上で示し、大和地方の古墳群と比較検討したものがある (岸 1959)。古代豪族と古墳群とを比較した研究は非常に多く、例えば、近年でも (塚口 2010) などの研究を挙げることができる。

(註 17) 区分論としては古く和田秀松が 1936 年の『本朝書籍目録考証』において「一書曰、一本云」などの用語の違いに注目して区分表を作成しており (和田 (秀松) 1936)、鴻巣隼雄は「群卿」、「群臣」、「貢職」、「朝貢」などの語句の分布に着目し (鴻巣 1939)、藤井信男は天皇即位記事の表記に注目し (藤井 (信男) 1952)、西宮一民は万葉仮名の共通性や語句の用法に着目し (西宮 1970)、小島憲之は書紀編纂時の素材に着目し (小島 1988)、森博達 (音韻や漢文の文法上から  $\alpha$  群と  $\beta$  群と注目して (森 (博達) 1999)、それぞれ分類を試みている。これらの区分論については山田英雄が研究史と一覧表をまとめていて詳しい (山田 (英雄) 1976)。

(註 18) 『記紀』の神々や登場人物の風俗、特に服装・髪型については古く後藤守一、小林行雄などによって活発に議論されたものの一つであり、5 世紀以降の人物埴輪と共通する点が多いことが指摘されている (小林 (行雄) 1976)。このことに関して佐原真は「1600 年前の衣装と 1400 年前の刀を持つ、2600 年前のはずの神武さま」と評している (佐原 1992)。

(註 19) 「武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について」以外の田中の主な軍事組織を巡る研究については次のものがある (田中 (晋作) 1981、田中 (晋作) 1994、田中 (晋作) 1995、田中 (晋作) 2000、田中 (晋作) 2001、田中 (晋作) 2004、田中 (晋作) 2008、田中・西川 (編) 2010)。

(註 20) “常備軍”に関する田中晋作の見解は本論文で述べたとおりであるが、これから派生した軍事組織を巡る議論上の意見や見解については様々なものがある (藤田 (和尊) 1995、藤田 (和尊) 2006、松木 1994、松木 1995a、村上 1998、豊島 2000a、豊島 2000b、豊島 2010)。

このうち、常備軍仮説との関連で述べれば、これに対する最大の批判点は田中の遺構解釈上の問題点、すなわち古墳という埋葬施設での出土状況から、実際の武装内容の細部まで復元することの妥当性である。特に野中古墳で代表されるような武器の大量埋納の評価が多様であり、大量埋納武器が実用か否かという議論も、その延長線上に存在する。

一方、これら見解に対する田中の再反論の主要な論旨は、古墳に副葬された武器が葬送儀礼の結果という点については同意しつつも、その儀礼そのものの背景に、当時の武器の所有や管理形態を背景とする、ある種の規範を認めることができるとする。中でも田中が注目する点は、武器・武具が葬送儀礼の中核を占めていた大量埋納古墳についての特殊性や、武器の実用的な機能改良を主とする型式変化などである。これら相互の見解の差異は、一部、紙上において明確に主張され、応酬が行われているが、共同見解や統一見解として同意されているものは少ない。

(註 21) 中小円墳に副葬された武器が 1 セット程度であるという認識は、既に都出比呂志が指摘している (都出 1991)。武器のセット的な埋納の方法 (副葬品の配列方法) に関しては第 7 章において別途、詳細に検討する。

- (註 22) 田中新史は 5 世紀における短甲出土の中規模円墳の被葬者像として、中・小規模の地方在地首長層の軍事的な性格をもった集団の存在を想定している(田中(新史)1975)。また、滝沢誠は短甲出土の中・小規模古墳について、政權藤下を中心に進められてきた軍事編成が中・小首長を取り込むかたちで広域に及ぼされた結果と推察している(滝沢1991)。
- (註 23) 前・中期の大規模古墳においては鏡・武器・農具など特定の威信財を中心とした大量の埋納儀礼が行われ、個人の死を特徴付けるものが少ない。そのために前・中期古墳に底流する儀礼の本質とは、決して個々人の死生や魂の救済を主たる問題としたものではなく、死者の社会的地位、威信、富といった死者にまつわる社会秩序の維持や再生産に重点が置かれていたものと考えられる。こういった社会的な葬送儀礼の実例としてはギアツによるバリ島の事例(ギアツ1990)やインドネシアのトラジャ族の事例(山下・堀内1986)などの文化人類学において報告された事例が参考になる。
- (註 24) 儀礼の概念として人類学者の青木保は一方の極に超越的な、または象徴的な事象と大きくかわるものとしての儀礼を置き、他方にはパフォーマンスを含む日常的な出来事と重なるレベルとして儀式(ceremonious)を対置し、両者の全体をさして儀礼(ritual)という用語をあてた。そして儀礼の意義としては「人間は動物と同じく、社会に生きるかぎりコミュニケーションや集団の結束や攻撃性の回避などの面から「儀礼化」し、文化形式としてそれを発達させ、儀礼行動を行わざるを得ないが、それはまたこの日常の現実の不安定な両義性の中で、何か確たる真実を求めて、絶えず儀礼をしなくてはならないことも意味する」と説明している(青木(保)2006)。貴重な威信財としての武器を埋納し二度と使用できないようにするような儀礼行為は一種のポトラッチ的な富の破壊や浪費であり、別の見方からすれば人知を超越した存在や霊的なものへの供儀や贈与の一種ともいえる。
- (註 25) 後期古墳における儀礼行為の考古学的研究としては小林行雄のヨモツヘグイ(黄泉戸喫)儀礼(小林(行雄)1949)、白石太一郎のコトワタシ(事戸渡)儀礼(白石1975)などが知られているが、これらの復元された儀礼からは、古墳時代後期には、肉体が減んでも魂は生き続けるというような霊肉二元論に基づく観念的な他界観の類推も可能であり、前・中期の葬送儀礼とは異なって死後の他界観や魂といったような観念的な思考体系を具現化する儀礼的な行為を反復することによって死に対する意味づけが行われていたと推察できる。なお、古墳時代における葬送儀礼を具体的に復元したものとしては岩松保の研究がある(岩松2006)。
- (註 26) 板材閉塞については類例が少ないため石材閉塞も含めて分類する。
- (註 27) 島内地下式横穴墓群の人骨数、出土遺物数については、宮崎県1993『宮崎県史』資料編 考古2、えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓群』、えびの市教育委員会2010『島内地下式横穴墓群』Ⅱ、えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓群』Ⅲ、えびの市教育委員会2012『島内地下式横穴墓群』Ⅳからカウントと統計を行った。
- (註 28) 前方後円墳(帆立貝式古墳)は社会階層の最も上位クラスに位置すると考えられている墓制で、南九州の代表例としては宮崎県生目3号墳(3期:●140m)、鹿児島県唐仁1号墳(4期:●150m)、宮崎県女狭穂塚古墳(5期:●176m)、宮崎県男狭穂塚古墳(5期:●176m)、鹿児島県横瀬古墳(7期:●137m)などが存在する。古墳時代中期の南九州地域における円墳は前方後円墳が立地する台地付近か周辺地区に造営されることが多く、この中には階層的な小型円墳も認められるなど、他の墓制と比べれば、前方後円墳との関わりが比較的に濃厚な高塚古墳といえる。代表的なものとして宮崎県西都原169号(飯盛塚・旧110号)墳(5期:○44m)、と170号(雑掌塚・旧111号)墳(5期:○44m)、宮崎県野地古墳(7期:○10m)などを挙げておく。
- (註 29) 低墳丘や墳丘を持たない箱式棺は広く全国的に存在するが、南九州地域においては熊本県寺島5号墳や熊本県番出1号墳のように肥前地方沿岸部などに多く認められる。横穴墓も全国的に広く分布する墓制であるが、南九州地域において横穴墓が盛行するのは6世紀後半(9期)以降である。地下式板石積石室墓や立石土壙墓は地下式横穴墓と並んで南九州を代表する在地的な特色ある墓制であり、地下式横穴墓が南九州東半分に近いとは対照的に、南九州西半分に分布している。
- (註 30) “前方後円墳体制”とは都出比呂志の、“前方後円墳国家”とは広瀬和雄の概念規定である。都出比呂志は古墳時代を国家段階と位置づけ、「この社会関係を考古学的に象徴するものは前方後円墳を頂点とする政治秩序の形成である」として「墳丘の形態によって首長の系譜や格式を表現し、またその規模によって実力を示すという二重原理による身分表示のシステムがここに成立したのだといえよう」と古墳の存在を政治的な面からより総合的に分析した(都出1991)。広瀬和雄は古墳の代表たる前方後円墳について「中央―地方の契機をもって、祭祀と政治を媒介的に表出した墓制」であり「画一性と階層性を見せる墳墓」といった定義を与え(広瀬2007)、前方後円墳に表象された政治体制を読み解いている。
- (註 31) 原始・古代に関する国家論としては古典(マルクス・エンゲルス)学説(原1972)、文化人類学などの基づく欧米研究の影響を受けた学説(鈴木(靖民)1990、都出1991)など諸説がある。ここでは大量の労働力を駆使して、先進技術を集中採用するなど、意図(政治)的な計画に基づくと考えられる大規模な土木工事や手工業生産の再編を仮に“国家的”とした。なお、古墳時代を国家段階とみなす考古学的研究として広瀬和雄の学説を挙げておく(広瀬2003)。
- (註 32) 計画村落とは直木孝次郎が古代の村落について指摘した概念(直木1965)であるが、考古学からも検討の対象となり(萩原1995)、古墳時代の集落について、計画村落を適用する事例もある(早野2005)。
- (註 33) 第5章において『日本書紀』に記載のある具体的な戦闘記述を分析したところ、古墳時代の国内での戦闘は徒歩による弓矢戦が主体であり、儀礼的な様相を残していると評価したが、武人埴輪のあり方から考えても徒歩による刀剣や弓矢での戦闘が主であったことを追認することができ

るであろう。

埴輪の中には乗馬した姿の人物が存在し、数は少ないながらも関東、北陸、東北、九州と各地に確認されている(南雲 1993)。この騎乗の人物に武人埴輪Ⅰ類も存在する。群馬県雷電神社跡古墳出土品がそれであり、飾馬に騎乗した人物は帽子を被り、下げ美豆良を肩まで下ろし、両手に籠手をはめ、左手で手綱を握り、右腰に胡籬、左腰に大刀と鞍を下げ、さらに左手に弓を持っている姿を示す。しかしながら騎馬の武人埴輪、特に重装備の騎馬武人像の存在は認められないため、古墳時代の日本列島においては、首長は飾馬に騎乗して威儀を正すことはあったと思われるが、実戦に際しての騎兵的な様相は希薄であるとせざるを得ない。

(註 34) 武人埴輪と先行する器材埴輪との関係に関しては、例えば大阪府長原 45 号墳出土例のように顔を付けた(ただし腕はない)甲冑埴輪が存在することが知られている。器材埴輪(盾・甲冑)と武人埴輪(盾持ち埴輪、武装人物像)との形式的な連続性については、これを否定する見解(高橋(克壽) 1988)と関連性を認める意見(塚田 1999)との両者があり、比較的否定的な見解が多いが(杉山(晋作)ほか 1999)、造形対象の象徴から具象へという形象埴輪の変遷原理を念頭に置くと、単なる器材(盾・甲冑)から、顔が付き、より具象化が進行することで、最終的には武器を身にまとった人物そのもの(武人埴輪)が成立していくと考えることも可能であるため、本稿では一定の関連性を認める見解に左端しておきたい。

(註 35) 塚田良道の 1996 年の論文では“ゾーン”の用語を用いており(塚田 1996)、一般的にはその用語が広まっているが、ゾーンは空間の範囲を示す用語であり、形式相互の関係を示すのには適切でない、と著者自らが“ゾーン”を“形式”に改めているため(塚田 2007)、著者の意向を尊重し、形式と表現する。

(註 36) エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』(エンゲルス 1954)を理論的な支柱として、史的唯物論では様々な検討が行われた。特に日本古代史における国家形成論や、その軍事的側面については、原秀三郎(原 1972)や、吉田晶の研究(吉田(晶) 1993)などが理論的に精緻を極めている。

(註 37) 唯物論の影響を受けた研究に基づく理論的な検討では、弥生時代を氏族共同体、古墳時代を部族連合とする見解が存在し(近藤 1983)、国家の成立についても成文法(例えば大宝律令の完成=801 年)を重視するなど、国家成立の時期をやや遅らせる傾向にあるが(原 1984)、近年の考古学では古墳時代を初期国家段階や国家段階とみなす見解が提出されている(都出 1991、広瀬 2003)。古墳時代に階層化が急激に進化したとする見解は共通するものの、“国家”と称する社会段階であったのかについては、国家の概念規定の複雑さも影響して、未だ定説をみないというのが現状であろう。

(註 38) 鉄生産(製鉄: smelting)については弥生時代開始説(川越 1968、潮見 1982)、古墳時代中期開始説(野上 1968、東(潮) 1999)、古墳時代後期開始説(大澤 1977、真壁 2003)などがあり確実な鉄生産の上限については見解がわかれ学界の合意を得るには至っていない。なお、岡山県引カナク

ロ谷遺跡などから、6 世紀代に鉄生産(製鉄: smelting)が行われていることはほぼ確実視されている。

(註 39) 近年、近畿地方でも弥生時代～古墳時代の製鉄遺跡(鍛冶: smithing)が検出されているが、京都府奈具岡遺跡、兵庫県五斗長垣内遺跡、兵庫県本位田権現谷 A 遺跡、和歌山県旧吉備中学校校庭遺跡など、大部分が旧五畿内より外部の地域に属しており、近畿地方中枢部(旧五畿内地域)において製鉄遺跡(鍛冶: smithing)が急増するのは古墳時代中期以降である。

## 引用・参考文献

### ア行:

青木敦 1981「英雄伝承考—古代文学史におけるその座標と背景—」跡見学園短期大学紀要 17

青木保 2006『儀礼の象徴性』岩波書店

麻栴一志 1999「焼かれた村—北陸地方の火災住居について—」『考古学に学ぶ』遺構と遺物 同志社大学考古学シリーズⅦ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

東潮 1999『古代東アジアの鉄と倭』渓水社

穴沢味光 1988「『蒙古鉢形』冑と四～七世紀の軍事技術」『考古学叢考』中 斎藤忠先生頒寿記念論文集 吉川弘文館

穴沢味光・馬目順一 1975「南部朝鮮出土の鉄製鋌留短甲」『朝鮮学報』76 朝鮮学会

甘粕健 1970「武蔵国造の反乱」『古代の日本』7 角川書店、

天野末喜 2010「倭王武の時代—雄略朝をめぐる一視点—」『同志社大学考古学研究会 50 周年論集』同志社考古刊行会事務局

有馬義人 2001「日向(宮崎県)の横穴墓」第 4 回九州前方後円墳研究会大会『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅱ分冊(資料編)九州前方後円墳研究会

アングリム・S ほか(天野淑子(訳)、松原俊文(監)) 2008『戦闘技術の歴史』1 古代編 創元社

アンジェイエフスキー・S(坂井達郎(訳)) 2004『軍事組織と社会』新曜社

安藤広道 2003「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』50-1 考古学研究会

アードレイ・R(徳田 喜三郎・森本佳樹・伊沢敏生(訳)) 1973『アフリカ創生記』筑摩書房

### イ行:

飯島武次 2003『中国考古学概論』同成社

碓修二ほか 1997「隈・西小田地区遺跡群出土弥生人骨の骨病変について」『隈・西小田遺跡群』筑紫野市教育委員会

五十嵐基善 2013「律令制下における軍隊編成に関する基礎的考察」『日本古代学』5

池内宏『日本上代史の一研究』中公美術出版

諫早直人 2013「日韓初期馬具の比較検討」『日韓交渉の考古学』古墳時代 日韓交渉の考古学古墳時代研究会

石井紫朗ほか編 2002『武器の進化と退化の学際的研究』一弓矢編— 国際日本文化研究センター

石川恒太郎 1973『地下式古墳の研究』帝国地方行政協会

石川恒太郎 1983「地下式古墳の源流」『考古学研究』30-2 考古学研究会

石津朋之(編) 2004『戦争の本質と軍事力の諸相』彩流社  
 石野博信 1973「3世紀の高城と水城」『古代学研究』68 古代学研究会  
 石野博信 2011『大和・纏向遺跡』(第3版) 学生社  
 石野博信(編) 1995『全国古墳編年集成』雄山閣  
 石橋茂登 2011「銅鐸・武器形青銅器の埋納状態に関する一考察」『千葉大学人文社会科学研究』22 千葉大学大学院人文社会科学部研究科  
 石原道博(編訳) 1985『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』中国正史日本伝 1 岩波書店  
 石母田正 1947「古代貴族の英雄時代—古事記の一考察—」『論集史学』(原秀三郎(監) 1972『歴史科学大系』1 日本原始共産性社会と国家の形成 校倉書房に再録)  
 市毛勲 1964「人物埴輪顔面の赤彩色について」『考古学雑誌』50-1 日本考古学会  
 市毛勲 1969「本邦古代における鯨面と顔面彩色—人物埴輪の赤彩色について—」『考古学雑誌』54-4 日本考古学会  
 市毛勲 1985「人物埴輪における隊と列の形成」『古代探叢』II—早稲田大学考古学会創立 35 周年記念考古学論集—  
 市毛勲 1991「人物埴輪における姿態別服飾について—古墳時代の階層と職掌—」『古代探叢』III 早稲田大学考古学会創立 40 周年記念考古学論集 早稲田大学出版部  
 市毛勲 1993「埴輪と入墨」『考古学ジャーナル』357 特集 埴輪にみる装飾と服飾 ニューサイエンス社  
 市丸靖子 1996「人物埴輪赤彩考—茨城県内古墳出土の人物埴輪の様相—」『埴輪研究会誌』2 埴輪研究会  
 市元壘 2001「北朝鎮墓俑の甲冑」『古代武器研究』2 古代武器研究会  
 伊藤純 1984「古代日本における鯨面系譜試論」『ヒストリア』104 大阪歴史学会  
 伊藤東涯(飯田傳一(校註)) 1912『制度通』金港堂書籍  
 伊藤実「瀬戸内の環濠集落と高地性集落」1991『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集 児嶋隆人先生喜寿記念事業会  
 稲村繁 1999『人物埴輪の研究』同成社  
 稲村繁 2000「家形埴輪論」『埴輪研究会誌』4  
 稲村繁 2001「初期人物埴輪があらわすもの」『日本考古学の基礎研究』茨城大学考古学研究室 20 周年記念論文集 茨城大学人文学部考古学研究室  
 乾哲也 1996「弥生中期における池上曽根遺跡の集落構造」『ヒストリア』152 大阪歴史学会  
 犬木努 2007「形象埴輪『列状配置』の本義」『志学台考古』7 大阪大谷大学文化財学科  
 犬木努 2008「形象埴輪『列状配置』についての補遺」東北・関東前方後円墳研究会(編)『古墳の風景—構造と機能—』考古学リーダー13 六一書房  
 井上晃・井上貴央ほか 1991「古人骨(古墳時代人)にみられた疾患と損傷」『法医学の実際と研究』34 東北大学医学部法医学教室  
 井上貴央ほか 2002「青谷上寺地遺跡から検出された人骨」『青谷上寺地遺跡』4 財団法人鳥取県教育文化財団  
 井上秀雄 1980「百濟三書の資料的価値」『ゼミナール日本古代史』下 光文社  
 井上秀雄 1987「東アジアの中の古代朝鮮の城郭」『田村圓澄先生

古希記念 東アジアの日本』考古美術編 吉川弘文館  
 井上光貞 1949「大和国家の軍事的基礎」『日本古代史の諸問題』思索社(井上光貞 1971『日本古代史の諸問題』思索社に再録)  
 井上光貞 1965『日本の歴史』1 神話から歴史へ 中央公論社  
 井上裕一 2004・2005「人物埴輪の構造と主題—表象の分類と構成—」『古代』I (116)、II (118) 早稲田大学考古学会  
 井上義也 2013「福岡平野の弥生時代青銅器生産の開始期—須玖遺跡群を中心に—」『福岡大学考古学論集』2 福岡大学考古学研究室  
 尹武炳(島津義昭(訳)) 1991「山城・王城・泗此都城」『古文化談叢』24 九州古文化研究会  
 今井堯 1982「古墳時代前期における女性の地位」『歴史評論』1981-2 歴史科学評議会  
 今井晃樹 2001「西周時代青銅武器の分類と系譜」『中国考古学』1 日本中国考古学会  
 今井真由美・森岡秀人 2012「弥生集落に占める鉄器工房の特質」『考古学ジャーナル』631 特集 弥生集落の動態 ニューサイエンス社  
 今尾文昭 1984「古墳祭祀の画一性と非画一性」『橿原考古学研究所論集』6 吉川弘文館  
 今西竜 1970『百済史研究』国書刊行会  
 芋本隆裕 1986「甲と盾」金関恕ほか(編)『弥生文化の研究』9 雄山閣  
 宇垣匡雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』44-1 考古学研究会  
 岩松保 1992「墓域の中の集団構成—近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—」『京都府埋蔵文化財情報』44-45 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 岩松保 2006「古墳時代後期における葬送儀礼の実態」『京都府埋蔵文化財情報』99 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 岩永省三 1980「弥生時代青銅器の型式分類編年試考—剣矛戈として—」『九州考古学』55 九州考古学会  
 岩永省三 2010「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合研究博物館研究報告』8 九州大学総合研究博物館  
**ウ行：**  
 ヴァイダ・A (大林太良(訳)) 1977「報告／戦争の諸形態についての諸段階」M・フリードほか(編)『戦争の人類学』ペリカン社  
 ヴェーバー・M (脇圭平(訳)) 1980『職業としての政治』岩波書店  
 植木武 1999「闘争・戦争モデル」『国家の形成 人類学・考古学からのアプローチ』三一書房  
 上田正昭 1967『大和朝廷』角川書店  
 上田正昭 1968「戦闘歌舞の伝流」『日本古代国家研究』塙書房  
 上田正昭 1999「建部と語部」『歴史と人物』上田正昭著作集 7 角川書店  
 上野千鶴子 1996「贈与と交換と文化変容」『贈与と市場の社会学』岩波講座現在社会学 17 岩波書店  
 内野那奈 2013「受傷人骨からみた縄文の争い」『立命館文学』633 立命館人文学会  
 内山敏行 1998「関東地域の古墳時代の堅穴鍛冶遺構」『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』栃木県教育委員会

内山敏行 2000「東国の甲冑」頌寿記念会（編）『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版

内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』7 古代武器研究会

内山敏行 2008「小札甲の変遷と交流—古墳時代中・後期の絨孔2列小札とΩ字型腰札—」菅谷文則（編）『王権と武器と信仰』同成社

内山敏行 2012「豪族居館・首長居宅と関わる鉄器生産—北関東地域の古墳時代鍛冶—」『たたら研究』51 たたら研究会

梅澤伊勢三 1962『記紀批判—古事記及び日本書紀の成立に関する研究—』創文社

梅澤重昭 1998「綿貫観音山古墳の埴輪祭祀」『綿貫観音山古墳』I 埴丘・埴輪編（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

**エ行：**

江本直・島津義昭・木村幾多朗 1978「阿蘇谷の石棺」『九州考古学』53 九州考古学会

エンゲルス・F（村井康男・村田陽一（訳））1954『家族・私有財産および国家の起源』大月書店

**オ行：**

大阪歴史学会 1989『ヒストリア』124号 特集難波宮以前—新発見の大倉庫群をめぐって— 大阪歴史学会

大阪府立近つ飛鳥博物館 2005『王権と儀礼 埴輪群像の世界』

大阪府立弥生文化博物館 1994『稲作とともに伝わった武器』

大阪府立弥生文化博物館 2001「環濠集落基礎資料集」『弥生都市は語る 環濠からのメッセージ』

大澤正己 1977「福岡平野を中心に出土した鉾の分析」『広石古墳群』福岡市教育委員会

大澤正己 1991「大県遺跡とその周辺遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『河内・大県遺跡周辺の鉄・鉄器生産の検討』古代を考える会

大澤正己 2005「長原遺跡出土鉄滓およびスラグ様遺物の金属学的調査」『長原遺跡発掘調査報告』XII 市営長吉長原東住宅6.7号館建設に伴う発掘調査報告書 財団法人大阪市文化財協会

太田博之 1995「句兵を表現する埴輪」『古代』100 早稲田大学考古学会

太田亮 1928『漢・韓史籍に顕はれたる日韓古代史資料』磯部甲陽堂

大谷徹 2001「埼玉県内における全身立像人物埴輪の様相—日高市高萩公民館旧蔵の人物埴輪の紹介—」『埴輪研究会誌』5 埴輪研究会

大塚初重 1959「大和政権の形成 武器武具の発達」小林行雄（編）『世界考古学体系』3 日本III 古墳時代 平凡社

大塚初重 1966「古墳の変遷」『日本の考古学』IV 古墳時代 上 河出書房新社

大塚初重 1974「古墳の発生は何を物語るか」斉藤忠（編）『日本考古学の視点』下 日本書籍

大塚初重・小林三郎 1968・1971「茨城県舟塚古墳」『考古学集刊』I（4-1）、II（4-4）明治大学考古学研究室

大西智和 2001「地下式横穴墓群内における墓の配置の規定要因に関する基礎的研究—宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群を事例として—」『鹿児島女子短期大学紀要』36 鹿児島女子短期大学

大林太良 1984「原始戦争の諸形態」大林太良（編）『戦』社会思想社

大平聡 2002「世襲王権の成立」鈴木靖民（編）『倭国と東アジア』吉川弘文館

大藪由美子 2008「弥生時代の武器による骨切創の実験研究」菅谷文則（編）『王権と武器と信仰』同成社

小笠原好彦 1985「家形埴輪の配置の古墳時代豪族の居館」『考古学研究』31-4

小笠原好彦 2014「日本の古墳に配列された形象埴輪と中国の明器と俑」『日本古代学』6

岡田英弘 1977『倭国』中央公論社

岡村秀典 1993「中国新石器時代の戦争」『古文化談叢』30 下 九州古文化研究会

岡本孝之 1998「外土壘環濠集落の性格」『異貌』16 共同体研究会

岡安光彦 1983「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵」『考古学雑誌』71-4 日本考古学会

岡安光彦 2008「白兵戦と考古学—二つの誤解—」菅谷文則（編）『王権と武器と信仰』同成社

小川清彦 1997『古天文・暦日の研究』斉藤国治（編）皓星社

小倉芳彦（訳）1988『春秋左氏伝』上 岩波書店

小田富士雄 1966「九州」近藤義郎・藤沢長治（編）『日本の考古学』IV 古墳時代 上 河出書房新社

乙益重隆 1970「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本』3 角川書店

小野忠熙 1951『島田川』周防島田川流域の遺跡調査研究報告 山口大学島田川遺跡学術調査団

小野忠熙 1959「弥生時代の団郭村落の諸問題」『地理学評論』32-6 日本地理学会

小野本敦 2004「盾持人物埴輪の研究」『史観』151 早稲田大学史学会

小野山節 1959「馬具と乗馬の風習 半島経営の盛衰」『世界考古学体系』3 日本III 古墳時代 平凡社

**カ行：**

カーシ・J・D、エプリング・F・J（香原志勢・鈴木正男（訳））1974『攻撃性の自然史』ベリかん社

カイヨワ・R（秋枝茂夫（訳））1974『戦争論 われわれの内にひそむ女神ペローナ』法政大学出版局

鏡山猛 1956a「環溝住居址小論」（一）『史淵』67.68 合併号 九大史学会

鏡山猛 1956b「環溝住居址小論」（二）『史淵』71号 九大史学会

鏡山猛 1958「環溝住居址小論」（三）『史淵』74号 九大史学会

鏡山猛 1960「環溝住居址小論」（四）『史淵』81号 九大史学会

柏田有香 2009「京都盆地における変革期の弥生集落—鉄器生産遺構の発見—」『古代文化』61-3 古代学協会

カステラン・G（西海太郎・石橋 英夫（訳））1955『軍隊の歴史』白水社

片岡宏二 2003「環濠の新解釈」『三沢北中尾遺跡』小郡市教育委員会

片岡徹也 2009『軍事の事典』東京堂出版

片山一 1998「新方人骨」『縄文人と弥生人』神戸市教育委員会

ガット・A（石津朋之ほか（監）歴史と戦争研究会（訳））2012『文明と戦争』上・下 中央公論新社

角川日本地名大辞典編纂委員会（編）1986『角川日本地名大辞典』



45 宮崎県 角川書店  
 金関丈夫 1951「根獅子人骨について（予報）」『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団  
 金原正子・金原正明 1999「えびの市島内地下式横穴墓群 69 号墓から検出された糞石の寄生虫分析および花粉分析」『人類学研究』11 人類史研究会  
 兼康保明 1996「弥生時代の絨殺をめぐって」『横田健一先生還暦記念日本史論集』横田健一先生還暦記念会  
 神谷正弘 2006「中国・韓国・日本出土の馬胄と馬甲」『東アジア考古学論叢』－日中共同研究論文集－ 奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所  
 亀井正道 1995「武装する人たち」『人物・動物はにわ』日本の美術 346 至文堂  
 亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42－3 考古学研究会  
 亀田修一 2000「鉄と渡来人－古墳時代の吉備を対象として－」『福岡大学総合研究所報』240 福岡大学総合研究所  
 亀田修一 2003「渡来人の考古学」『七隈史学』4 七隈史学会  
 川越哲志 1968「鉄および鉄素材の起源をめぐって」『たたら研究』14 たたら研究会  
 川西宏幸 1988『古墳時代政治史序論』塙書房  
 川西宏幸・辻村純代 1992「古墳時代の巫女」『博古研究』2 博古研究会  
 川畑純 2011「衝角付冑の型式学的配列」『日本考古学』32 日本考古学協会  
 川畑純 2015『武具が語る古代史 古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版会  
 河村秀根・益根（阿部秋生解題）1969『書紀集解』1～5 臨川書店  
 管榮太郎 2003「弥生時代環溝集落小論」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会  
**キ行：**  
 ギアツ・C（小泉潤二（訳））1990『ヌガラー19世紀バリの劇場国家』みずず書房  
 キーガン・J（遠藤利国（訳））1997『戦略の歴史 抹殺・征服技術の変遷』心交社  
 菊池大樹 2009「中国先秦時代におけるウマと馬車の変革」『中国考古学』9 日本中国考古学会  
 菊地実（編）2011『季刊考古学』116 戦争と慰霊の考古学 雄山閣  
 木崎原操 1971「小木原古墳群調査報告」『えびの』2号  
 岸俊男 1955「防人考－東国と西国－」『万葉集大成』平凡社（岸俊男 1966『日本古代政治史研究』塙書房に再録）  
 岸俊男 1959「古代豪族」『世界考古学大系』3 古墳時代 平凡社  
 岸俊男 1984「画期としての雄略朝 稻荷山鉄剣銘付考」『日本政治社会史研究』上（小笠原好彦・吉村 武彦（編）2000『展望日本の歴史』4 大和王朝 東京堂出版に再録）  
 岸本一宏 2010「第1主体部副葬品配置の検討」『茶すり山古墳』総括編 兵庫県教育委員会  
 北郷泰道 1982「地下式横穴墓の形態分類と副葬品のセット関係」『宮崎考古』8 宮崎考古学会  
 北郷泰道 1994「武装した女性たち」『考古学研究』40－4 考古学研究会

北野耕平 1963「中期古墳の副葬品とその技術史的意義－鉄製甲冑における新技術の出現－」『近畿古文化論攷』吉川弘文館（野上丈助（編）1991『論集武具』学生社に再録）  
 北野耕平 1964「野中アリ山古墳 小結」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室  
 北野耕平 1975「稲城考」『日本史論集』時野谷勝教授退官記念論集 清水堂  
 北野重 1991「柏原市所在の製鉄関連遺跡」『河内・大県遺跡周辺の鉄・鉄器生産の検討』古代を考える会  
 来村多加史 2001「古代国家と軍制」『季刊考古学』76 雄山閣  
 北山茂夫 1956「日本における英雄時代の問題によせて」『日本古代の政治と文学』青木書店  
 北山峰生 2003「蛇行剣の分布と変遷」『考古学ジャーナル』498 ニューサイエンス社  
 喜田貞吉 1914「上古の陵墓（太古より奈良朝末に至る）」『皇陵』仁友社  
 木下礼仁 1993『『三国史記』にみえる倭関係記事』『日本書紀と古代朝鮮』塙書房  
 九州考古学会・嶺南考古学会 1998『環濠集落と農耕社会の形成』京都帝国大学文学部考古学教室（編）1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』桑名文星堂  
 金斗喆 2003「무기・무구 및 마구를 통해 본 가야의 전쟁」『가야 고고학의 새로운 조명』서울：해안  
 金斗喆 2004「加耶と倭の馬具」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館研究報告 110  
 金富軾 1980（井上秀雄（訳注））『三国史記』1 東洋文庫  
 金富軾 1983（井上秀雄（訳注））『三国史記』2 東洋文庫  
**ク行：**  
 クーン・T（中山茂（訳））1971『科学革命の構造』みずず書房  
 久住猛雄 2007「「博多湾貿易」の成立と解体－古墳時代初頭前後の対外交渉機構－」『考古学研究』53－4 考古学研究会  
 久保哲正 2001「恵解山古墳の鉄器埋納施設について」『京都府埋蔵文化財論集』4 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 久保天随（校訂）1913『七書』上 博文館  
 九州前方後円墳研究会 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会  
 クラウゼビッツ・C（清水多吉（訳））2001『戦争論』上 中央公論社  
 クラストル・P（渡辺公三（訳））1987『国家に抗する社会』水声社  
 栗田寛 1901『栗里先生雑著 卷十二』「上古の兵制 明治二十三年七月稿」吉川弘文館  
 栗林誠治 1999「馬具の修理痕」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』3 徳島県埋蔵文化財センター  
 栗本英世 1999『未開の戦争、現代の戦争』岩波書店  
 車崎正彦 1999「東国の墳輪」『はにわ人は語る』国立歴史民俗博物館（編）  
 車崎正彦 2004「人物墳輪・動物墳輪」『考古資料大観』4 弥生・古墳時代 墳輪 小学館  
 黒坂勝美（編）1951『新訂増補国史大系 日本書紀』前 吉川弘文館  
 黒坂勝美（編）1952『新訂増補国史大系 日本書紀』後 吉川弘

文館  
 黒崎直 2015「卑弥呼と鬼道と」『卑弥呼—女王創出の現象学—』  
 大阪府立弥生文化博物館  
 桑原久雄 1997「戦士と鹿—清水風遺跡の弥生絵画を読む—」『宗  
 教と考古学』金関恕先生のご希をお祝いする会 勉誠社  
**コ行：**  
 小出輝雄 2006「環濠は戦争用遺構か」『古代』119 早稲田大学  
 考古学会  
 小丘保 1961「骨損傷のある古墳時代赤色頭蓋」『解剖学雑誌』36  
 日本解剖学会  
 鴻巣隼雄 1939『日本書紀の編纂に就いて 特に使用語句を中心  
 として見たる上代に於ける国史編纂についての一考察』刀江  
 書院  
 光本順 2001「古墳の副葬品配置における物と身体のカテゴリ及びそ  
 の論理」『考古学研究』48—1 考古学研究会  
 小片丘彦 1981「日本人の疾病と損傷」人類学講座編集委員会(編)  
 『人類学講座』5 日本人 I 雄山閣  
 国立歴史民俗博物館 2003『炭素 14 年代測定と考古学』国立歴  
 史民俗博物館研究業績集  
 国立歴史民俗博物館 2007「弥生農耕の起源と東アジア 炭素年  
 代測定による高精度編年体系の構築」『NEWS LETTER』7  
 故実叢書編集部 1993a『刀剣図考、武器考証 第一』改定増補故  
 実叢書 19 明治図書出版株式会社  
 故実叢書編集部 1993b『本朝軍器考、同集古図説、軍用器、同附  
 図、武器袖鏡』改定増補故実叢書 21 明治図書出版株式会社  
 小島憲之 1988『上代日本文学与中国文学 出典論を中心とする  
 比較文学的考察』上 塙書房  
 小島憲之ほか(校訂) 1994『日本書紀』1 新編日本古典文学全  
 集 小学館  
 小島憲之ほか(校訂) 1996『日本書紀』2 新編日本古典文学全  
 集 小学館  
 小島憲之ほか(校訂) 1998『日本書紀』3 新編日本古典文学全  
 集 小学館  
 古代を考える会 1991『河内・大泉遺跡周辺の鉄・鉄器生産の検  
 討』  
 後藤守一 1928「原始時代の武器武装」『考古学講座』1 雄山閣  
 後藤守一 1931「埴輪の意義」『考古学雑誌』21・1 日本考古学会  
 後藤守一 1935「前方後円墳雑考」『歴史公論』4—7(後藤守一 1936  
 『墳墓の研究』雄山閣に再録)  
 後藤守一 1937a「埴輪より見た上古時代の葬礼」『齋藤先生古稀  
 祝賀記念論文集』齋藤先生古稀祝賀会 刀江書院  
 後藤守一 1937b「日本上古時代の弓」『民族学研究』3—2(後藤  
 守一 1942『日本古代文化研究』河出書房に再録)  
 後藤守一 1942a「上古時代の冑」『日本古代文化研究』河出書房  
 後藤守一 1942b「上古時代の楯」『古代文化』上(13—4)、下(13  
 —5) 日本古代文化学会  
 後藤守一 1942c「埴輪より見た上古時代の葬礼」『日本古代文化  
 研究』河出書房  
 小林行雄 1941「堅穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論  
 文集』(小林行雄 1976『古墳文化論考』平凡社に再録)  
 小林行雄 1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』2(小林行雄 1976『古  
 墳文化論考』平凡社に再録)  
 小林行雄 1950「古墳時代における文化の伝播」『史林』33—34

史学研究会(「中期古墳時代文化とその伝播」と改題し、小林  
 行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店に再録)  
 小林行雄 1951a『日本考古学概説』東京創元社  
 小林行雄 1951b「上代日本における乗馬の風習」『史林』34—3  
 (小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店に再録)  
 小林行雄・杉原莊介(編) 1968『弥生式土器集成図録』真陽社  
 小林行雄 1976「神々の虚像—神話教育と考古学—」『古墳文化論  
 考』平凡社  
 小林行雄 1982「古墳時代の短甲の源流」『帝塚山考古学研究所設  
 立記念 日韓古代文化の流れ』帝塚山考古学研究所(野上丈助  
 (編) 1991『論集武具』学生社に再録)  
 小林謙一 1974「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」『考古学研  
 究』上(20—4)、下(21—2) 考古学研究会  
 小林謙一 1979「地下式横穴の甲冑と大和政権」『日向の古墳展—  
 地下式横穴の謎を探る—』宮崎県総合博物館  
 小林謙一 1997「古墳時代における初期の甲冑」『文化財論叢』  
 II 奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集刊行会 同  
 朋舎出版  
 小林謙一 2006「東アジアにおける甲冑の系譜をめぐって」『東ア  
 ジア考古学論叢』日中共同研究論文集 奈良文化財研究所・遼  
 寧省文物考古研究所  
 駒田信二(編) 1985『世界の戦争』4 中国の戦争 講談社  
 近藤好和 1997『弓矢と刀剣 中世合戦の実像』吉川弘文館  
 近藤義郎 1956「日本古墳文化」歴史学研究会・日本史研究会(編)  
 『日本歴史講座』1 岩波書店  
 近藤義郎 1966「序説・古墳とは何か」『日本の考古学』古墳時代  
 上 河出書房新社  
 近藤義郎 1976「原始資料論」『岩波講座日本歴史』25 別巻 2 岩  
 波書店  
 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店  
 近藤義郎・今井堯 1971「群集墳の盛行」『古代の日本』4 角川書  
 店  
 コンラン・T 1997「南北朝期合戦の一考察—戦死傷からみた特  
 質—」『日本社会の史的構造 古代・中世』大山喬平教授退官  
 記念論集 同朋社  
**サ行：**  
 サーヴィス・E(増田義郎(監)) 1991『民族の世界—未開社会  
 の多彩な生活様式の探究—』講談社  
 蔡熙国 1987(全浩天(訳))「高句麗の城の特徴」『田村圓澄先生  
 古希記念 東アジアの日本』考古美術編 吉川弘文館  
 崔鍾圭(定森秀夫・緒方泉(訳)) 1984「韓国・中期古墳の性格  
 に関する若干の考察」『古代文化』36—12 古代学協会  
 崔鍾澤(オ本佳考(訳)) 2001「5—6 世紀高句麗の武器と馬具—  
 漢江流域出土遺物を中心として—」『古代武器研究』2 古代武  
 器研究会  
 西郷信綱 1967『古事記の世界』岩波書店  
 財団法人大阪府文化財センターほか 2006『古墳時代に生きた渡  
 来人の軌跡—長原遺跡・葦屋北遺跡・上私部遺跡を中心に—』  
 斎藤忠 1985『古典と考古学』学生社  
 齊藤大輔 2014「古代東アジアにおける装飾鉄鈿の系譜」『第 11  
 回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会  
 酒井隆史 2004『暴力の哲学』河出書房新社  
 境靖紀 2004「弥生時代の鍛冶工房の研究—福岡県春日市赤出遺

跡の再検討―『たたら研究 44』たたら研究会  
 阪口英毅 2009「前期・中期型甲冑の技術系譜」『月刊考古学ジャーナル』581 ニューサイエンス社  
 阪口英毅 2014『七観古墳の研究―1947・1952 年出土遺物の再検討―』京都大学大学院文学研究科  
 坂本和俊 1998「シンポジウム「古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題」開催にむけて」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会  
 坂本太郎 1946「纂記と日本書紀」『史学雑誌』56-6（坂本太郎 1988『古事記と日本書紀』坂本太郎著作集 2 吉川弘文館に再録）  
 坂本太郎 1988『古事記と日本書紀』坂本太郎著作集 2 吉川弘文館  
 佐川正敏 1996「王と鉞―中国新石器時代の戦争―」『考古学研究』43-2 考古学研究会  
 桜岡正信 2014「金井東裏遺跡の調査―古墳人の生活空間―」『金井東裏遺跡と渋川市の古墳時代』平成 26 年度調査遺跡発表会 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 笹山晴生 1962「日本古代の軍事組織」『古代史講座』5 学生社  
 笹山晴生 1975『古代国家と軍隊』中央公論社  
 笹山晴生 1984「文献に見られる戦術と武器」大林太良（編）『日本古代文化の探求』戦 社会思想社  
 佐田茂 1974「人物埴輪に見える衣服の型式」『史観』111 早稲田大学史学会  
 佐藤良二 1998「石器と戦闘」『弥生戦争とサヌカイト』香芝市二上山博物館  
 佐原真 1964「石製武器の発達」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会  
 佐原真 1979「弥生時代論」『日本考古学を学ぶ』3 大塚初重ほか（編）有斐閣  
 佐原真 1986a「初め戦争はなかった―考古学からみた戦争の歴史―」『一粒の粃』学習院大学考古学研究会定期講演会講演録（「戦争と平和」と改題し、佐原真 1993『考古学千夜一夜』小学館に再録）  
 佐原真 1986b「家畜・奴隷・王墓・戦争―世界の中の日本―」『歴史科学』103 号（金関恕・春成秀爾（編）2005『戦争の考古学』に再録）  
 佐原真 1992『日本人の誕生』体系日本の歴史 1 小学館  
 佐原真 1999「日本・世界の戦争の起源」国立歴史民俗博物館（編）『人類にとって戦いとは』1 東洋書林  
 佐原真 2005『戦争の考古学』金関恕・春成秀爾（編）佐原真の仕事 4 岩波書店  
 佐原真・近藤喬一 1974「青銅器の分布」『古代史発掘』5 講談社  
 澤田吾一 1927『奈良朝時代民生経済の数的研究』富書房  
**シ行：**  
 潮見浩 1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館  
 塩谷修 2001「盾持人物埴輪の特質とその意義」『日本考古学の基礎研究』茨城大学考古学研究室 20 周年記念論文集 茨城大学考古学研究室  
 島田貞彦 1929「埴輪土物の配置に就いて」『史林』14-4 史学研究會  
 下條信行 1991「西日本 第一期の石剣・石鏃」『日韓交渉の考古学』弥生時代篇 六興出版

下條信行 1994『弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作成と地域間の比較研究』平成 5 年度科学研究費補助金（一般研究 C）研究成果報告書  
 下向井龍彦 1987「日本律令軍制の基本構造」『史学研究』175 広島史学研究会  
 ジャグノン・N（蒲生正雄（訳）） 1977「報告／ヤノマメ族の社会組織と戦争」『戦争の人類学』M・フリードほか（編）『戦争の人類学』ベリカン社  
 朱永剛（徳留大輔（訳）） 2002「中国東北先史環濠集落の変遷と伝播」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』九州大学  
 朱栄憲 1963「菓水里壁画古墳発掘報告」『各地遺跡整理報告 考古学資料集』3  
 白石太一郎 1969「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』16-1 考古学研究会  
 白石太一郎 1975「ことどわし考―横穴式石室の埋葬儀礼をめぐって」『橿原考古学研究所論集』創立 35 周年記念 吉川弘文館  
 白石太一郎 1990「渡来文化の大きな波」『古墳時代の工芸』古代史復元 7 講談社  
 白石太一郎（代） 2008「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金（基礎研究（A））  
 新山保和 2013「栃木県出土の人物埴輪についての覚え書き」群馬考古学研究会（編）『東国の考古学』六一書房  
**ス行：**  
 末永雅雄 1930「圓照寺墓山第一號古墳調査」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』11 奈良県  
 末永雅雄 1933「七観古墳とその遺物」『考古学雑誌』23-5 日本考古学会  
 末永雅雄 1934『日本上代の甲冑』岡書院  
 末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂  
 末永雅夫 1974『古墳の航空大観』学生社  
 末永雅雄 1981『日本上代の甲冑』（増補版）木耳社  
 末永雅雄 1968「円照寺墓山一号墳」『奈良市史 考古編』奈良市史編纂審議会  
 末永雅雄 1979「古代軍行抄」『橿原考古学研究所論集』5 吉川弘文館  
 杉井健・上野洋史（編） 2012『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告 173  
 杉山秀宏 2009「榛東村高塚古墳出土人物埴輪について―上毛野の武人埴輪の系譜について―」『群馬県立歴史博物館紀要』30 群馬県立歴史博物館  
 杉山秀宏ほか 2014「群馬県渋川市金井東裏遺跡の発掘調査概要」『日本考古学』38 日本考古学協会  
 杉山晋作 2000「千葉県/芝山古墳の埴輪器列」『はこわ群像を読み解く』かみつけの里博物館  
 杉山晋作ほか 1999「討論 埴輪変質の背景を語る」国立歴史民俗博物館（編）『はこわ人は語る』  
 鈴木尚 1975「斗争により損傷された 3 個の古人骨」『人類学雑誌』83-3 日本人類学会  
 鈴木一有 1996「前期古墳の武器祭祀」『雪野山古墳の研究』考察

編 八日市市教育委員会  
 鈴木一有 2010「古墳時代後期の衝角付冢」『待兼山考古学論集』  
 II—大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集— 大阪大学考古学研究室  
 鈴木真哉 2000『刀と首取り—戦国合戦異説』平凡社  
 鈴木靖民 1985「倭の五王の外交と内政 府官制の秩序の形成」『日本古代の政治と制度』林睦郎先生還暦記念会（編）続群書類従完成会  
 鈴木靖民 1990「歴史学と民族学（文化人類学）—日本古代における首長制社会論の試み—」『日本民俗学大系』10 國學院大學  
 鈴木靖民 2002「倭国と東アジア」『日本の時代史』2 倭国と東アジア 吉川弘文館  
 須藤宏 1991「人物埴輪のもつ意味—群馬県井出二子山古墳別区出土の形象埴輪からの検討—」『古代学研究』126 古代学研究会  
**セ行：**  
 清家章 1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会  
 清家章 1998「女性首長と軍事権」『待兼山論集』32 大阪大学考古学研究室  
 清家章 2004「弥生・古墳時代の女性と戦争」『女性史学』14 女性史総合研究会  
 清家章 2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版局  
 積山洋 1990「古墳時代中期の大型倉庫群—難波のクラと紀伊のクラをめぐる試論—」『大阪の歴史』30 大阪市史編纂所  
 全栄来 1987「古代山城の発生と変遷」『田村圓澄先生古希記念 東アジアの日本』考古美術編 吉川弘文館  
 千田 嘉博 2009「戦国領主と城郭」『文化財学報』27 奈良大学文学部文化財学科  
**タ行：**  
 ダイアグラムグループ（編）（田島優ほか（訳））1982『武器—歴史・形・用法・威力』マール社  
 高木市之助 1933「叙事詩と上代文学」『上代日本文学講座』3（高木市之助 1976『吉野の鮎』講談社に再録）  
 高久健二 2004「嶺南地域の武器組成—紀元前 2 世紀後葉—紀元後 4 世紀を中心に—」『古代武器研究』4 古代武器研究会  
 高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』20—2 考古学研究会  
 高島忠平 1980「佐賀県川寄吉原遺跡出土の銅鐸土製品の人物絵画」『考古学雑誌』66—1 日本考古学会  
 高橋克壽 1988「器埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71-2  
 高橋克壽 1993「四世紀における短甲の変化」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館  
 高橋克壽 1996『埴輪の世紀』講談社  
 高橋健自 1910「日本上古の刀剣に就きて」『史学雑誌』21—8（斎藤忠（編）1987『日本考古学論集 8 武器・馬具と城柵』吉川弘文館に再録）  
 高橋健自 1922『古墳と上代文化』国史講習会  
 高橋健自 1925『銅鐸銅剣の研究』聚集社  
 高橋健自 1926『考古学講座』埴輪及装身具 国史講習会 雄山閣  
 高橋工 1995「東アジアにおける甲冑の系統と日本—特に 5 世紀までの甲冑製作技術と設計思想を中心に—」『日本考古学』2

日本考古学協会  
 滝口宏ほか 1956『千葉県芝山古墳群調査速報』『古代』19・20 合併号 早稲田大学考古学会  
 滝口宏 1963『はにわ』日本経済新聞社  
 滝沢誠 1990「狐塚古墳出土の短甲」『茨城県史研究』64 茨城県史編集委員  
 滝沢誠 1991「鉾留短甲の編年」『考古学雑誌』76—3 日本考古学会  
 滝沢誠 1994「甲冑出土古墳からみた古墳時代前・中期の軍事編成」『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 雄山閣  
 武末純一 1990「北部九州の環溝墓落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集 乙益重隆先生古希記念論文集刊行会編  
 武末純一 2010「弥生武器形青銅祭器の集落内埋納」『先史学・考古学論究』V 甲元眞之先生退官記念 上 龍田考古会  
 武田佐知子 1993「埴輪の衣服について」『考古学ジャーナル』357 特集 埴輪にみる装飾と服装 ニューサイエンス社  
 竹中正巳・大西智和 1998「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 69・70 号墓発掘調査概報」『人類史研究』10 人類史研究会  
 竹中正巳・大西智和 1999「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 69・70・71・72・73・74・75 号墓発掘調査報告」『人類史研究』11 人類史研究会  
 竹中正巳・大西智和 2000「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 76・77・78・79・87・88・89・90・91 号墓発掘調査概報」『人類史研究』12 人類史研究会  
 竹中正巳ほか 2007「地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨に認められた陥没骨折」『南九州地域科学研究所所報』23 南九州地域科学研究所  
 竹中正巳ほか 2010「島内地下式横穴墓群から新たに出土した受傷痕の認められる古墳時代人骨」『鹿児島女子短期大学紀要』45 鹿児島女子短期大学  
 建部遯吾 1906『社会学的研究 戦争論』金港堂書籍  
 伊達宗泰 1968「円照寺墓山二号墳」『奈良市史 考古編』奈良市史編纂審議会  
 辰巳和弘 2011『他界へ翔る船—黄泉の国の考古学』新泉社  
 田村和裕 1999「大隅地域における地下式横穴—分類・編年と基礎的位置づけ—」『人類史研究』11 人類史研究会  
 田中茂 1990「宮崎・鹿児島県の円墳」『古代学研究』123 特集 島各地域の円墳—主として大型円墳をめぐって— 古代学研究会  
 田中新史 1975「五世紀における短甲出土古墳の—様相—房総出土の短甲とその古墳を中心として—」『史館』5 史館同人  
 田中晋作 1981「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』93 大阪歴史学会  
 田中晋作 1993「武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について」『古代文化』上（45—8）、下（45—10）古代学協会  
 田中晋作 1994「古墳時代常備軍成立の可能性について」（『ヤマト王権と交流の様相』5 古代王権と交流 名著出版  
 田中晋作 1995「古墳時代中期における軍事組織について」『考古学研究』41—1 考古学研究会  
 田中晋作 2000「古墳時代常備軍成立の可能性」『古代武器研究』1 古代武器研究会

田中晋作 2001「古墳時代中期における武器の副葬・埋納に関する理解をめぐる」『古代学研究』155 古代学研究会

田中晋作 2004「古墳時代における軍事組織について」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館研究報告 110

田中晋作 2008「古墳時代における軍事組織について」『古代武器研究』9 古代武器研究会

田中晋作・西川寿勝（編）2010『倭王の軍団―巨大古墳時代の軍事と外交』新泉社

田中雅一（編）1998『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会

田中琢 1991『倭人争乱』集英社版日本の歴史 2 集英社

田中義昭 1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の考察」『考古学研究』22-3 考古学研究会

田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究―人骨が語る古代社会―』柏書房

谷川士清 1937『日本書紀通証』国民精神文化研究所

谷木光之助 1930「埴輪の装置状態」『考古学』1-4 東京考古学会

谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社

**チ行：**

千葉基次 2015「夏家店上層文化―銅青―」『駒沢考古』40 駒澤大学考古学研究会

朝鮮民主主義人民共和国文化保存指導局写真帳編集室（編）1979『高句麗壁画』朝鮮中央歴史博物館

**ツ行：**

塚口義信 2010「4・5 世紀における丹波の政治集団とヤマト政権」『古代学研究』186 古代学研究会

塚田良道 1994「埴輪の軍楽隊」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI 同志社大学考古学シリーズ刊行会

塚田良道 1996「人物埴輪の型式分類」『考古学雑誌』81-2 日本考古学会

塚田良道 1998「女子埴輪と采女―人物埴輪の史的意義―」『古代文化』上巻（50-1）下巻（50-2）

塚田良道 1999「武装人物埴輪の成立過程」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズVII 同志社大学考古学シリーズ刊行会

塚田良道 2001「埼玉丸墓通出土の人物埴輪―小古墳における人物埴輪の構造―」『埴輪研究会誌』5

塚田良道 2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣

塚田良道 2010「男子埴輪の衣服と文様」『考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズX 同志社大学考古学シリーズ刊行会

塚本敏夫 1993「鋳留甲冑の技法」『考古学ジャーナル』366 ニューサイエンス社

辻川哲郎 1999「器財埋納施設に関する一解釈」『考古学に学ぶ』遺構と遺物 同志社大学考古学シリーズVII 同志社大学考古学シリーズ刊行会

辻村純代 1983「東中国地方における箱式石棺の同時複数埋葬」『季刊人類学』14-2 京都大学人類学研究会

辻村純代 1988「古墳時代の親族構造について―九州における父系制問題に関連して―」『考古学研究』35-1 考古学研究会

津田左右吉 1913『神代史の新しい研究』二松堂書店

津田左右吉 1919『古事記及び日本書紀の新研究』洛陽堂

津田左右吉 1924『古事記及び日本書紀の研究』岩波書店

土橋寛 1960『古代歌謡論』三一書房

都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20-4 考古学研究会

都出比呂志 1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29-4 考古学研究会

都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』343 日本史研究会

都出比呂志 1996「国家形成の諸段階―首長性・初期国家・成熟国家―」『歴史評論』551 歴史科学評議会

都出比呂志 1997「都市の形成と戦争」『考古学研究』44-2 考古学研究会

都出比呂志 2011『古代国家はいつ成立したか』岩波書店

都出比呂志（編）1998『古代国家はこうして生まれた』角川書店

津野仁 2011「楯列と陣法の源流―古墳時代の楯の配置と組成―」『考古学ジャーナル』616 ニューサイエンス社

**テ行：**

鄭澄元・申敬澈（定森秀夫（訳））1984「古代韓日甲冑断想」『古代文化』38-1 古代学協会

鉄器文化研究会 2000『表象としての鉄器副葬』第 7 回鉄器文化研究集会

寺沢薫 1978「大和の高地性集落―「上ノ山遺跡」の紹介とその占める位置―」『青陵』36 橿原考古学研究所

寺沢薫 1999「環濠集落の系譜」『古代学研究』146 古代学研究会

寺沢薫 2000『王権誕生』日本の歴史 2 講談社

寺沢知子 1979「鉄製農具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』4 吉川弘文館

寺前直人 2010『武器と弥生社会』大阪大学出版会

**ト行：**

藤間生大 1962「四・五世紀の東アジアと日本」『岩波講座日本歴史』1 原始および古代 1 岩波書店

鳥取県教育委員会（監）2005『日本海をのぞむ弥生の国々―環濠から見える弥生社会とは―』

友田真理 2008「胡漢交戦図の分布とその歴史的背景―漢代画像石を中心として―」『中国考古学』8 日本中国考古学会

豊島直博 2000a「古墳時代中期の畿内における軍事組織の変革」『考古学雑誌』85-2 日本考古学会

豊島直博 2000b「鉄器埋葬施設の性格」『考古学研究』46-4 考古学研究会

豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房

虎尾俊哉（編）2000「巻第八 神祇八 祝詞」『延喜式』上 集英社

敦煌文物研究所（編）1980『中国石窟敦煌莫高窟』1 平凡社

**ナ行：**

内藤芳篤 1974「弥生人腰椎に見られた石鏃嵌入の 1 例」（抄）『人類学雑誌』82-1 日本人類学会

直木孝次朗 1965「古代国家と村落―計画村落の視点から―」『ヒストリア』42 大阪歴史学会

直木孝次朗 1968『日本古代兵制史の研究』吉川弘文館

中川龍隆 2001「馬具の系譜―最古の轡をもとめて―」『季刊考古学』76

中国聡 1991 「墳墓にあらわれた意味—とくに弥生時代中期後半の甕棺墓にみる階層性について—」『古文化談叢』25 九州古文化研究会

中国聡 2004 『九州弥生文化の特質』九州大学出版会。

中野和浩 1998 「地下式横穴墓の群構造」『宮崎考古』16 宮崎考古学会

中野和浩 2001 「島内地下式横穴墓群」第4回九州前方後円墳研究会大会『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅱ分冊（資料編）九州前方後円墳研究会

中野和浩 2012 「島内地下式横穴墓群の概要」『シンポジウム「島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』えびの市教育委員会

中橋孝博ほか 1987 「福岡県志摩町新門遺跡出土の縄文〜弥生移行期の人骨」『新門遺跡』志摩町教育委員会

中橋孝博 1990 「永岡遺跡出土の弥生時代人骨」『永岡遺跡』Ⅱ筑紫野市教育委員会

中橋孝博 1997 「福岡県筑紫野市隈・西小田遺跡出土の弥生時代人骨」『隈・西小田地区遺跡』筑紫野市教育委員会

中橋孝博 1999 「北部九州における弥生人の戦い」福井勝義ほか（編）『人類にとって戦いとは』1 東林書林

中村慎一（編）2001 『東アジアの囲壁・環濠集落』金沢大学文学部考古学研究室 平成 12 年度文部科学省科学研究費補助金・特別研究（A1）

中村友博 1987 「祭人が模擬戦をすること」金関恕ほか（編）『弥生文化の研究』8 雄山閣

中山清隆 2001 「馬具の系譜—最古の轡をもとめて—」『季刊考古学』76 雄山閣

永井昌文ほか 1976 「磨製石剣嵌入人骨について」『スダレ遺跡』穂波町教育委員会

長野県立博物館 1998 『古代シナノの武器と馬具』

南雲芳昭 1993 「馬形埴輪における騎馬の基礎的研究」『研究紀要』11 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

南雲芳昭 2012 「上野地域における盾持ち人埴輪の様相」『古墳の守り人—一盾持ちをはこわと古墳—カミツケの里博物館

二行：

新納泉 1983 「装飾付太刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30—3 考古学研究会

西川宏「武器」1966 近藤義郎・藤沢長治（編）『日本の考古学』Ⅴ 古墳時代 下 河出書房新社

西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』10 岡山史学会（西嶋定生 1972 「古墳と大和政権」歴史科学協議会（編）『歴史科学大系』2 古代国家と奴隷制 下 校倉書房に再録）

西嶋剛広 2012 「熊本地域出土銀留短甲の検討」杉井健・上野祥史（編）2012 『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告 173

西野吉論 2008 「弥生時代後期から古墳時代初期における集落の変遷について」『研究紀要』75 日本大学文理学部人文科学研究所

西宮一尾 1970 『日本上代の文章と表記』風間書房

西本豊弘 2007 『弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—』平成 16〜20 年文部科学省・科学研究費補助金 学術創生研究費 平成 17・18 年度研究成果報告

日韓集落研究会 2009 『日韓集落研究の新たな視点を求めて』

仁藤敦史 1998 「古代における宮の成立と発展」『古代王権と都城』吉川弘文館

仁藤敦史 2011 「帝紀・旧辞と王統譜の成立」『史料としての『日本書紀』—津田左右吉を読みなおす—』勉誠出版

仁藤敦史 2015 『『日本書紀』編纂史料としての百済三書』『国立歴史民俗博物館研究報告』194

日本考古学協会（編）1961 『日本農耕社会の生成』東京堂

日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会 2012 「弥生時代後半期の鉄器生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』

ネ行；

榊垣田佳男 1986 「打製短剣・石槍・石戈」金関恕ほか（編）『弥生文化の研究』9 雄山閣

榊垣田佳男 1998 「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店

榊垣田佳男 2002 「遺物組成からみた高地性集落の諸類型」『古代文化』54 古代学協会

榊垣田佳男 2013 「弥生時代の近畿における鉄器製作遺跡—「石器から鉄器へ」の再検討の前提として—」『日本考古学』36 日本考古学協会

ノ行：

野上丈助 1968 「古墳時代における鉄および鉄器生産の諸問題」『考古学研究』15—2 考古学研究会

野上丈助 1975 「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点」上『考古学研究』14—4 考古学研究会

野上丈助（編）1991 『論集武具』学生社

野島永 2000 「鉄器からみた諸変革—初期国家形成期における鉄器流通の様相—」『国家形成過程の諸変革』考古学研究会例会シンポジウム記録 2 考古学研究会例会委員会

野島永 2008 「弥生時代における鉄器鋳造をめぐる」『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』研究成果報告書 平成 17〜平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））

野島永 2009 『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣

野島永 2010 「弥生時代における鉄器保有の—様相—」『京都府埋蔵文化財論集』6 創立三十周年記念 京都府埋蔵文化財調査研究センター

野田嶺志 1995 「古代の精兵」門脇禎二（編）『日本古代国家の展開』上 思文閣

野田嶺志 1980 『防人と衛士—律令国家の兵士—』教育社

野田嶺志 1999 「村の将軍—タケルと精兵の軍—」『日本社会の史的構造 古代・中世 大山喬平教授退官記念』同朋社

乗安和二三 2005 「弥生時代における乳幼児用埋葬をめぐる」『考古論集』—川越哲志先生退官記念論文集—川越哲志先生退官記念事業会

ハ行；

萩原恭一 1995 「房総半島の古代集落遺跡に見る人口動態」『研究紀要』16 千葉県文化財センター

橋口達也 1986 「犠牲者」金関恕ほか（編）『弥生文化の研究』9 雄山閣

橋口達也 1992 「弥生時代の戦い—武器の折損・研ぎ直し—」『九州歴史資料館研究論集』17 九州歴史資料館

橋口達也 1995 「弥生時代の戦い」『考古学研究』42-1 考古学研究会

橋口達也 2007 『弥生時代の戦い、戦いの実態と権力機構の生成』雄山閣

橋本達也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会

橋本達也 1998 「四、五世紀における韓日交渉の考古学的再検討 第三章 堅矧板・方形革綴短甲の技術と系譜」『青丘學術論集』12 韓国文化研究振興財団

橋本達也 2002 「九州における古墳時代甲冑—総論にかえて—」『考古学ジャーナル』496 ニューサイエンス社

橋本達也 2005 「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論—松林山古墳と津堂城山古墳から—」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退官記念—』大阪大学考古学友の会

橋本達也 2006 「甲冑編年研究の日韓比較—帯金式甲冑を中心として—」『日韓古墳時代の年代観』歴博国際研究集会 発表要旨

橋本達也 2010 「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価—中期と後期を分かつもの—」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集—』大阪大学考古学研究室

橋本達也 2012a 「九州南部における島内地下式横穴墓の位置づけ」『シンポジウム「島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』えびの市教育委員会

橋本達也 2012b 「古墳時代甲冑研究の現状」杉井健・上野祥史（編）『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告 173

橋本達也・鈴木一有 2014 『古墳時代甲冑集成』（大阪大学大学院文学研究科 科学研究費補助金 基盤研究 A

橋本達也・藤井大祐 2007 『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館

橋本輝彦 2002 「纏向遺跡第 109 次出土の木製輪燈」『古代武器研究』3 古代武器研究会

橋本博文 1980 「埴輪祭式論—人物埴輪出現後の埴輪祭列をめぐって—」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会

橋本博文 1993 「人物埴輪にみる装身具」『考古学ジャーナル』357 特集 埴輪にみる装飾と服飾 ニューサイエンス社

橋本博文 2008 「古墳時代の豪族居館と生産組織」『國學院雑誌』109-11 國學院大學

バタイユ・G（生田耕作（訳））1973 『呪われた部分』二見書房

花田勝広 1989 「倭政権と鍛冶工房」『考古学研究』36-30 考古学研究会

花田勝広 1999 「手工業生産の展開と渡来人—鉄器生産工房を中心に—」『渡来文化の受容と展開—5 世紀における政治的・社会的変化の具体相—』2 第 46 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

花田勝広 2000 「倭政権と鍛冶工房 補記」『展望日本の歴史』4 大和王権 東京堂出版

花田勝広・阪口英毅 2012 「鉄と鉄製品」『講座日本の考古学』8 古墳時代 下 青木書店

土生田純之 2003 『日本全国古墳学入門』学生社

土生田純之 2009 「古墳時代論への試み」『天理大学考古学研究室 紀要』6

浜田耕作 1936 「前方後円墳の諸問題」『考古学雑誌』26-9 日本考古学会

林巳奈夫 1972 『中国殷周時代の武器』京都大学人文科学研究所

早野浩二 2005 「臨海の古墳時代集落—松崎遺跡の歴史的素描—」『研究紀要』6 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

原秀三郎 1972 「日本における科学的原始・古代史研究の成立と展開」歴史科学協議会編『歴史科学大系』1 校倉書房

原秀三郎 1984 「日本列島の未開と文明」『講座日本歴史』原始・古代 1 歴史学研究会・日本史研究会（編）東京大学出版局

原田大六 1962 「南鮮政策と後期古墳」『考古学研究』34 考古学研究会

春成秀爾 1990a 『弥生時代の始まり』東京大学出版会

春成秀爾 1990b 「男と女の闘い—銅鐸絵画の一瞥—」『国立歴史民俗博物館研究報告』25

春成秀爾 2003 「弥生早・前期の鉄器問題」『考古学研究』50-3 考古学研究会

春成秀爾 2007 「節分、方相氏、熊送り」『歴史書通信』歴史書懇談会

ハンセン・V・D（遠藤利国（訳））2003 『図説 古代ギリシアの戦い』東洋書林

坂靖 1998a 「古墳時代における大和の鍛冶集団」『橿原考古学研究所論集』13 創立六十周年記念 吉川弘文館

坂靖 1998b 「近畿地方」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』第 8 回東日本埋蔵文化財研究会

坂靖 2000 「埴輪祭式の変容」『古代学研究』150

坂靖 2009 『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』雄山閣

坂靖 2013 「三ツ寺 I 遺跡は「豪族居館」か」『古代学研究』198 古代学研究会

ヒ行；

東日本埋蔵文化財研究会 1993 『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物— 第 2 回東日本埋蔵文化財研究会

東憲章 1994 「地下式横穴墓の副葬品」『考古学ジャーナル』380 特集地下式横穴墓』ニューサイエンス社

東憲章 2001 「日向（宮崎県）の地下式横穴墓」第 4 回九州前方後円墳研究会大会『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅱ分冊（資料編）九州前方後円墳研究会

東憲章 2005 「前方後円墳と地下式横穴墓」『季刊考古学』90 雄山閣

日高慎 2000 「埼玉県埼玉瓦塚古墳の埴輪群像を読み解く」『はにわ群像を読み解く』かみつけの里博物館

日高慎 2002 「形象埴輪の意義追求をめぐる方法的課題について—塚田良道氏の研究方法をめぐって—」『埴輪研究会誌』6 埴輪研究会

日高慎 2010 「茨城県玉里古墳群にみる古墳時代後期首長墓系列」『考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズX 同志社大学考古学シリーズ刊行会

日高慎 2014 「甲塚古墳の埴輪記列について」『甲塚古墳』下野市教育委員会

日高慎 2015 「埴輪に表現された被葬者」『同支社大学考古学シリーズ』X I 森浩一先生に学ぶ 1 森浩一先生追悼論集

日高正晴 1958 「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』43-4 日本考古学会

日高正晴 1988 「日向地方における地下式墳の編年的考察」『考古

学叢考』斎藤忠先生頌寿記念論文集 下 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会吉川弘文館

平群達哉 2008「朝鮮半島嶺南地域における副葬磨製石剣の性格」菅谷文則（編）『王権と武器と信仰』同成社

広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎（編）『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社

広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』45-3 考古学研究会

広瀬和雄 2003『前方後円墳国家』角川書店

広瀬和雄 2007『古墳時代政治構造の研究』塙書房

広瀬和雄 2008「前方後円墳祭祀の理論—墳頂部の内外方円区画をめぐって—」『国立歴史民俗博物館研究報告』145（広瀬和雄 2010『カミ観念と古代国家』角川学芸出版に再録）

兵庫県立考古博物館 2010「雲部車塚古墳の研究」『研究紀要』3 フ行；

フェリル・A（鈴木主税・石原正毅（訳））1988『戦争の起源』河出書房出版

深澤芳樹 1998「戈を持つ人」『みずほ』24 大和弥生文化の会

福井勝義 1897「せんそう 戦争 war」梅棹忠夫ほか（編）『文化人類学事典』弘文堂

福井勝義・新谷尚紀（編）国立歴史民俗博物館（監）2002『人類にとって戦いとは』5 イデオロギーの分化装置 東洋書林

福井勝義・春成 秀爾（編）国立歴史民俗博物館（監）1999『人類にとって戦いとは』1 戦いの進化と国家の形成 東洋書林

福尾正彦 1980「日向中央部における地下式横穴とその社会」『古文化談叢』7 九州古文化研究会

福島孝行 2007「弥生墳墓における鉄剣の副葬（1）—丹後地域—」『考古学に学ぶ』III 森浩一先生傘寿記念献呈論集 同志社大学考古学シリーズIX 同志社大学考古学シリーズ刊行会

福島日出海 1998「石製及び青銅製武器の切先副葬について」『九州考古学』73 九州考古学会

福田アジオ 1980「村落領域論」『武蔵野大学人文学会雑誌』12-2 武蔵野大学（「ムラの領域」と改題し、福田アジオ 1982『日本村落の民俗的構造』弘文堂に再録）

藤井忠俊・新井 勝紘（編）国立歴史民俗博物館（監）2000『人類にとって戦いとは』3 戦いと民衆 東洋書林

藤井信男 1952「日本書紀各巻成立の一考察」『大倉山論集』1 大倉精神文化研究所

藤井等 2005「畿内の方形周溝墓制」『季刊考古学』92 弥生墓制の地域的展開 雄山閣

藤井康隆 2004「中国東晋南朝の武装について」『古代武器研究』5 古代武器研究会

藤尾慎一郎 1996「弥生戦死者の証言」『倭国乱る』国立歴史民俗博物館

藤尾慎一郎 1999「弥生時代の戦いに関する諸問題—鉄・鉄素材の実態と戦い—」松木武彦ほか（編）『人類にとって戦いとは』2 東洋書林

藤尾慎一郎 2004「新弥生年代の試み」『季刊考古学』88 特集弥生時代の始まり 雄山閣

藤尾慎一郎 2009「弥生開始期の集団関係」『日韓先史時代の集落研究』平成 21 年度国立歴史民俗博物館国際研究集会

藤尾慎一郎 2013「弥生文化像の新構築」吉川弘文館

藤尾慎一郎 2014「弥生鉄史観の見直し」『国立歴史民俗博物館研

究報告』185 国立歴史民俗博物館

藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘 2005「弥生時代の開始年代」『総研大学文化科学研究』1 総合研究大学院大学

藤木久志・宇田川武久（編）国立歴史民俗博物館（監）2002『人類にとって戦いとは』4 攻撃と防御の軌跡 東洋書林

藤田和尊 1988「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『橿原考古学研究所論集』8 吉川弘文館

藤田和尊 1991「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42 1989 年版 日本考古学協会

藤田和尊 1995「古墳時代中期における軍事組織の実態—松木武彦氏の批判文に応えつつ—」『考古学研究』41-1 考古学研究会

藤田和尊 2006『古墳時代の王権と軍事』学生社

藤田三郎 1999「唐古・鍵遺跡出土「盾をもつ人物」の絵画土器」『みずほ』29 大和弥生文化の会

藤田等 1987「鉄戈」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念論集 同朋舎出版

藤原哲 2004「弥生時代の戦闘戦術」『日本考古学』18 日本考古学協会

藤原哲 2009「弥生時代の武器と戦闘の技術」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦（編）『弥生時代の考古学』6 弥生社会のハードウェア 同成社

藤原哲 2011「弥生社会における環濠集落の成立と展開」『総研大学文化科学研究』7 総合研究大学院大学

藤原哲 2012「副葬品配列からみた武器の価値」『総研大学文化科学研究』8 総合研究大学院大学

藤原哲 2013a「古墳時代中期における軍事組織の一側面—島内地下式横穴墓群の分析を中心に—」『日本考古学』36 日本考古学協会

藤原哲 2013b『『日本書紀』戦闘記述における考古学を用いた批判的検討』『古代学研究』198 古代学研究会

藤原哲 2014「戦争・国家・軍事組織の発生—弥生時代から古墳時代の軍事組織、軍事参与率、服従度、凝縮性の割合から考える—」『古代学研究』204 古代学研究会

藤原哲 2015「古墳時代における軍事組織像の検討」『古代文化』67 古代学協会

藤原学 2003「須恵器生産と鉄」佐々木 憲一・吉村 武彦・大塚 初重（編）『古墳時代の日本列島』青木書店

フリード・M、ハリス・M、マーフィー・R（大林太良、蒲生正男。渡辺直経（訳））1977『戦争の研究』ペリカン社

古瀬清秀 1991「鉄器の生産」石野博信ほか（編）『古墳時代の研究』5 雄山閣

古谷毅 2012「島内地下式横穴墓群出土武器武具の資料的意義—保存状態と武器武具の性格—」『シンポジウム「島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』えびの市教育委員会、

ホ行；

ホイジンガ・J（里見元一郎（訳））1989「遊びと戦争」『ホモ・ルーデンス』ホイジンガ選書 I 河出書房

ボードリヤール・J（宇波彰（訳））1980『物の体系—記号の消費』法政大学出版局

ボードリヤール・J（宇波彰・今村仁司（訳））1981『生産の鏡』法政大学出版局



ボールディング・K (内田忠夫ほか (訳)) 1971『紛争の一般理論』ダイヤモンド社

細川修平 2003『倉庫建物にみる古墳時代社会の変質』(『人間文化』14 滋賀県立大学人間文化学部

穂積裕昌 2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣

堀田啓一 1979『高句麗壁画古墳にみる武器と武装』『橿原考古学研究所論』4 創立四十周年記念 吉川弘文館

堀田啓一 1993『渡来人—大和国を中心に』石野博信ほか (編)『古墳時代の研究』13 東アジアの中の古墳文化 雄山閣

堀田満 1999『宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 69 号墓から出土した種子の鑑定結果』『人類史研究』11 人類史研究会

ポナー・K (大内義一・森博 (訳)) 1971『科学的発見の理論』上 恒星社厚生閣、

マ行；

埋蔵文化財研究会 2006『弥生集落の成立と展開』第 55 回埋蔵文化財研究集会

埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 1988『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』愛知考古学談話会

前澤輝政 1996『「倭国大乱」考』『古代学研究』134 古代学研究会

前田豊邦 1996『弥生時代の大濠についての覚書』『紀要』村川行弘先生古希記念特撰 財団法人のじぎく文化財保護研究財団

真壁成史 2003『西日本における古墳時代後期の精錬・鍛冶遺構の検討』『考古学に学ぶ』(II) 考古学研究室開設五十周年記念 同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

増田精一 1967『画像石よりみた漢代の騎馬戦闘』『東京教育大学文学部紀要』61 東京教育大学文学部

増田精一 1970『武器・武装—とくに札甲について—』『新版考古学講座』5 雄山閣

増田精一 1976『埴輪の古代史』新潮社

松尾昌彦 1996『補修痕のある馬具』『伊那』6 伊那史学会

松木武彦 1989『弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—』『考古学研究』35—4 考古学研究会

松木武彦 1991『前期古墳副葬品の成立と展開』『考古学研究』37—4 考古学研究会

松木武彦 1992『古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価』『考古学研究』39—1 考古学研究会

松木武彦 1994『古墳時代の武器・武具および軍事組織研究の動向』『考古学研究』41—1 考古学研究会

松木武彦 1995a『考古資料による軍事組織研究の現状と課題』『展望考古学』考古学研究会 40 周年記念論集 考古学研究会

松木武彦 1995b『弥生時代の戦争と日本列島社会の発展過程』『考古学研究』42—3 考古学研究会

松木武彦 1999『戦争』安斉正人 (編)『用語解説現代考古学の方法と理論』I 同成社

松木武彦 2000『戦死か刑死か副葬か?—棺内の石製武器からみた弥生社会像—』『瀬戸内弥生文化のパイオニア—新方遺跡の新視点—』文部省科学研究費 古人骨と動物遺存体に関する総合研究シンポジウム実行委員会

松木武彦 2001a『弓と矢の系譜』『季刊考古学』76 雄山閣

松木武彦 2001b『人はなぜ戦うのか 考古学からみた戦争』講談社

松木武彦 2007『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版局

松木武彦・宇田川武久 (編) 国立歴史民俗博物館 (監) 1999『人類にとって戦いとは 2 戦いのシステムと対外戦略』東洋書林

松下孝幸 1985『福岡県小郡市横隈孤塚遺跡出土の弥生時代人骨』『横隈孤塚遺跡』II 小郡市教育委員会

松下孝幸 2001『弥生時代の殺人事件—スケルトン探偵の事件簿』『シャレコウベが語る』長崎新聞社

松田毅一・ヨリッセン・E 1983『フロイスの日本覚書—日本とヨーロッパの風習の違い』中央公論社

松本政春 1985『軍防令差兵条に関する二、三の考察』『歴史研究』23 号 (松本政春 2002『律令兵制史の研究』に採録)

松本政春 1999『広嗣の乱と隼人』『続日本紀研究』33 続日本紀研究会 (松本政春 2002『律令兵制史の研究』清文堂出版に再録)

松本政春 2002『律令兵制史の研究』清文堂出版

豆谷和之 2003『弥生環濠論』『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念論集

マリノフスキー・B (寺田和夫・増田義郎 (訳)) 1967『西太平洋の遠洋航海者』『世界の名著』59 中央公論社

マルクス・K (向坂逸郎 (訳)) 1969『資本論』岩波書店

丸山竜平 1995『魏志倭人伝にみる「倭国乱」と考古学—その問題の所存をめぐって—』『東海学園国語国文』48 東海学園国語国文学会

ミ行；

三品彰英 2002『百濟記・百濟新撰・百濟本記』『日本書紀朝鮮関係記事考證』上 天山舎

水野敏典 1993『古墳時代後期の軍事組織と武器副葬—長頸鏃の形態変遷と計量に見る武器供給から—』『古代』96 早稲田大学考古学会

水野敏典 2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』平成 18～20 年度科学研究費補助金基礎研究 (C)

水野正好 1971『埴輪芸能論』『古代の日本』2 角川書店

水野祐 1954『増補 日本古代王朝史論序説』小宮山出版

宮崎敬士 2012『中九州の鉄器生産と流通』『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会

宮崎県立西都原考古学物館 2008『日韓の武具』

宮崎考古学会県南例会実行委員会事務局 2011『地下式横穴墓研究の新展開』平成 23 年度宮崎考古学会研究資料資料集

宮本一夫 2012『北部九州の鉄器生産と流通』『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会

ム行；

向井一雄 1990『西日本の古代山城遺跡—類型化と編年についての試論—』『古代学研究』125 古代学研究会

むしゃこうじ・みのる 1973『『日本書紀』のいくさがたり—「欽明紀」を例として—』『日本書紀研究』7 日本書紀研究会

村上恭通 1995『星ヶ谷遺跡の鍛冶遺構について』『みづほ』15 大和弥生文化の会

村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店

村上恭通 1999『鉄製武器形副葬品の成立とその背景—三韓・三国時代と前方後円墳成立期を対象として—』『先史学・考古学

論究』Ⅲ 白木原和美先生古希記念献呈論文集 龍田考古学  
村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店  
**モ行；**  
モース・M（吉田禎吾・江川純一（訳））2009『贈与論』筑摩書  
房  
桃崎祐輔 2006「馬具からみた古墳時代実年代論—五胡十六国・  
朝鮮半島三国伽耶・日本列島の比較の視点から—」『日韓古墳  
時代の年代観』歴史国際研究会 研究発表資料  
森貞次郎 1966「武器」和島誠一（編）『日本の考古学』Ⅲ 弥生  
時代 河出書房  
森博達 1999『日本書紀の謎を解く 述作者は誰か』中央公論新社  
森井貞雄 2015「弥生時代の城塞集落が物語ること」『森浩一先生  
に学ぶ』森浩一先生追悼論集 同志社大学考古学シリーズX I  
同志社大学考古学シリーズ刊行会  
森岡秀人 1996「弥生時代抗争の東方波及」『考古学研究』43—3  
考古学研究会  
森岡秀人 2002「高地性集落研究の現状と今後の展開」『古代文  
化』54 特輯 弥生時代高地性集落研究の現状と課題 古代学協  
会  
森田克行 2008「新・埴輪芸能論」『埴輪群像の考古学』大阪府近  
つ飛鳥博物館 青木書店  
森田克行 2011「大王の荘厳なる埴輪宇宙」『考古学ジャーナル』  
617 特集 後期前方後円墳の埴輪体系 ニューサイエンス社  
森田悌 1995「埴輪の祭り」『風俗』34-1  
森田悌 2001「埴輪の武人像」『群馬大学教育学部紀要』50 群馬  
大学  
森田悌 2008「埴輪祭式と顕事・幽事」『埴輪の風景—構造と機能  
—』東北・関東前方後円墳研究会（編）六—書房  
門田誠一 1988「古代伽耶の戦士」『考古学と技術』同志社大学考  
古学シリーズIV 同志社大学考古学シリーズ刊行会  
門田誠一 2006「古墳出土の曲げられた鉄器について」『文学部論  
集』90 佛教大学  
**ヤ行；**  
谷木光之助 1930「埴輪の装置状態」『考古学』1-4  
柳沢一男 1995「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮  
崎県史研究』14 宮崎県総務部県史編さん室  
柳沢一男 1998「宮崎県蓮ヶ池横穴墓群の墳丘を有する横穴墓と  
線刻壁画」『宮崎考古』16 宮崎考古学会  
柳田康雄 2014「青銅武器・武器形祭器の使用痕跡」『日本・朝鮮  
半島の青銅武器研究』雄山閣  
山内紀嗣 1997「布留遺跡出土の鉄鉋」『天理参考館報』10 天理  
参考館  
山内紀嗣 1997「古墳時代の布留遺跡」『ヤマトの開発史』2  
奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 19  
山尾幸久 1978「百濟三書と日本書紀」『朝鮮史研究会論文集』15  
朝鮮史研究会  
山尾幸久 1986『新版・魏志倭人伝』講談社  
山極寿一 2007『暴力はどこからきたか』日本放送出版協会  
山崎純男 1990「環濠集落の地域性—九州地方」『季刊考古学』31  
雄山閣  
山崎武 1995「生出家埴輪窯製品と供給先」『関東における埴輪の  
生産と供給』日本考古学協会 1995 年度茨城大会シンポジウム  
資料

山崎武 1996「埼玉県鴻巣市東小学校所蔵の武人埴輪について」  
『埴輪研究会誌』2 埴輪研究会  
山崎頼人 2009「武器副葬のはじまり」『地域の考古学』佐田茂先  
生佐賀大学退官記念論文集 佐田茂先生論文集刊行会  
山崎頼人・杉本岳史・井上愛子 2005「筑後北部三国丘陵におけ  
る弥生文化の受容と展開」『古文化談叢』54 九州古文化研究  
会  
山下晋司・内堀基光 1986「トラジャにおける死の解決」『死の人  
類学』弘文堂  
山田英雄 1976「区分論」『日本書紀』株式会社ニュートンプレス  
山田隆一 1988「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」  
『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善先生華甲記念会  
山田隆治 1960「首狩りと人身供犠」『図説世界文化史体系』2 世  
界の民族 角川書店  
**ユ行；**  
湯浅邦弘 1999「『春秋』に於ける戦争とその思想」『中国古代軍  
事思想史の研究』研文出版  
**ヨ行；**  
楊泓（来村多加史（訳））1985『中国古兵器論叢』関西大学出版  
部  
用田政晴 1980「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』27—3 考  
古学研究会  
横山浩一 1985「型式論」『岩波講座日本考古学』1 岩波書店  
吉田晶 1993「古代における住民の武装と国家的軍制」『歴史評  
論』514 特集 論争・古代国家成立期の諸段階 歴史科学協議  
会  
吉田広 2012「近畿における銅戈の展開」『菟原』Ⅱ 森岡秀人さ  
ん還暦記念論文集 菟原刊行会  
吉田広 2014「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物  
館研究報告』185  
吉留秀敏 1994「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』33  
九州古文化研究会  
吉村和昭 1987「短甲系譜式論—鋌留技法導入期を中心として—」  
『考古学論攷』13 榎原考古学研究所  
吉村和昭 2003「地下式横穴墓出土の甲冑」石野博信（編）『古代  
近畿と物流の考古学』学生社  
吉村和昭 2007「甲冑観察の視点」『巨大古墳の時代—九州南部の  
中期古墳—』宮崎県立西都原古墳博物館  
吉村和昭 2011「宮崎県西諸県地域における地下式横穴墓の墓群  
形成と埋葬原理」『九州考古学』86 九州考古学会  
吉村和昭 2012a「被葬者像の検討」『シンポジウム「島内地下式  
横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』えびの市教育委  
員会  
吉村和昭 2012b「地下式横穴における埋葬原理と女性への武器  
副葬」『南九州とヤマト王権—日向・大隅の古墳—』大阪府立  
近つ飛鳥博物館  
**リ行；**  
李秀鴻 2015「韓半島南部地域青銅器—三国時代における環濠集  
落の変化と性格」『国立歴史民俗博物館研究報告』195  
李南爽 2004「韓国 忠清南道出土の武器・馬具について—龍院  
里古墳群出土品を中心に—」『古代武器研究』4 古代武器研究  
会  
李蘭瑛・金斗喆 1999『韓國의 馬具』馬文化研究叢書Ⅲ 韓国馬

事会・馬事博物館  
 柳瀬 1959 「北朝の鎧馬騎俑」『考古』1959 年第 2 期 考古雑誌社  
 楊昌煥（諫早直人（訳））2008 「加耶馬具の変遷と性格」『古代武器研究』9 古代武器研究会  
**レ行：**  
 レーニン・V（角田安正（訳））2011 『国家と革命』講談社  
**ロ行：**  
 ローレンツ・K（日高 敏隆・久保 和彦（訳））1985 『攻撃―悪の自然誌』みすず書房  
 ロジェ・M（山内和（訳））1984 「流通形態」『経済人類学の現在』法政大学出版局  
**ワ行：**  
 若狭徹 2000 「人物埴輪再考―保渡田八幡塚古墳形象埴輪の実態とその意義を通じて―」群馬町教育委員会『保渡田八幡塚古墳』史跡保渡田古墳群 八幡塚古墳保存整備事業報告書 調査編  
 若狭徹 2002 「埴輪様式論」『季刊考古学』79 特集埴輪が語る古墳の世界 雄山閣  
 若槻真治 2009 「倭国軍事考」『古代文化研究』17 島根県古代文化センター  
 若槻真治 2011 「夷征論―倭国軍事考第三章―」『古代文化研究』19 島根県古代文化センター  
 若槻真治 2013 「軍兵論―倭国軍事考第四章―」『古代文化研究』21 島根県古代文化センター  
 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』12 日本考古学協会  
 若林邦彦 2013 『「倭国乱」と高地性集落論・観音寺山遺跡」シリーズ「遺跡を学ぶ」91 新泉社  
 若松良一 1986 「形象埴輪群の配置復元について」『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会  
 若松良一 1992 「再生の祀りと人物埴輪―埴輪群像は殯を再現している―」『東アジアの古代文化』72  
 若松良一 2011 「後期前方後円墳の埴輪体系をいかに把握するか」『考古学ジャーナル』617 特集 後期前方後円墳の埴輪体系 ニューサイエンス社  
 若松良一・日高慎 1992・1993・1994 「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼―埼玉瓦塚古墳の場合を中心に―」『調査研究報告』上 (5)、中 (6)、下 (7) 埼玉県立さきたま資料館  
 和歌森太郎 1958 「大化前代の喪葬制について」『古墳とその時代』2 朝倉書店（和歌森太郎 1980 『和歌森太郎著作集』4 古代の宗教と社会に再録）  
 和田晴吾 1987 「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』34-2 考古学研究会  
 和田晴吾 1998 「古墳時代は国家段階か」都出比呂志・田中琢（編）『古代史の論点』4 権力と国家と 小学館  
 和田理啓 2010 「日向の首長系譜」第 13 回九州前方後円墳研究会『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会  
 和田秀松 1936 『本朝書籍目録考証』宮本印刷所  
**C：**  
 Carneiro・R・L.1970 *A Theory of the Origin of the State*.Science169  
 Chagnon,N. 1983 *Yanomamö The Fierce People*.3rd ed.Holt,Rinehart and Winston Inc,Orland

**K：**  
 Keeley,L.1996 *War before civilization*.Oxford University Press, New York  
**L：**  
 Leblanc .S. A. 2004 *Constant Battles: Why We Fight*. St. Martin's Griffin: Reprint.  
**N：**  
 Nikitin.Y ほか（徳留大輔（訳））2002 「沿海州地方における古代の城塞と環濠集落」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』九州大学  
 North .D. C, Wallis .J. J, Weingast .B.R.2009 *Violence and Social Orders: A Conceptual Framework for Interpreting Recorded Human History*. Cambridge University Press  
**O：**  
 Otterbein,K. 1994 *Feuding and Warfare*.Gordon and Breach Publishers,Amsterdam  
**P：**  
 Pinker .S. 2011 *The Better Angels of Our Nature. Viking Adult: Trade Paperback*.  
**T：**  
 Turney-High,H. 1971 *Primitive War its Practice and Concepts*.2nd ed.University of South Carolina Press, Columbia,  
**V：**  
 Vayda,A. 1960 *Maori Warfare*.Dai Nippon Printing Co,Hong Kong  
 Vayda,A. 1976 *War in Ecological Perspective*.Plenum Press,New York.

## 報告書等文献

**全国：**  
 一瀬和夫・車崎正彦（編）『考古資料大観』第 4 巻 弥生・古墳時代 埴輪 小学館  
 川越哲志（編）2000 『弥生時代鉄器総覧』東アジア出土鉄器地名表Ⅱ 広島大学文学部考古学研究室  
 国立歴史民俗資料館 2003 『はこわ―形と心―』  
 帝室博物館（編）1931～1944 『埴輪集成図鑑』1～12  
 東京帝室博物館 1920 『日本埴輪図集』上 歴史参考図書刊行会  
 日本考古学協会茨城大会実行委員会 1995 『関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会 1995 年度茨城大会シンポジウム資料  
 日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会 2012 「弥生時代後半期の鉄器生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』  
 橋本達也・鈴木一有 2014 『古墳時代甲冑集成』（大阪大学大学院文学研究科、科学研究費補助金 基盤研究 A  
 東日本埋蔵文化財研究会 1993 『古墳時代の祭祀―祭祀関係の遺跡と遺物― 第 2 回東日本埋蔵文化財研究会  
 埋蔵文化財研究会第 20 回研究集会世話人 1986 『弥生時代の青銅器とその相伴関係』埋蔵文化財研究会第 20 回研究集会資料 第 I ～第 IV 分冊

埋蔵文化財研究集会 1988『定形化する古墳以前の墓制』第Ⅰ～Ⅲ分冊 第24回埋蔵文化財研究集会  
埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 1988『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』愛知考古学談話会  
埋蔵文化財研究会 1993『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』埋蔵文化財研究会第33回研究集会実行委員会  
埋蔵文化財研究会 2006『弥生集落の成立と展開』第55回埋蔵文化財研究集会

#### 福島県：

会津若松史出版委員会（編）1964『会津若松史』別巻1  
表郷村教育委員会 1997『建鉾山』Ⅱ  
郡山市教育委員会 1999『大安場古墳群』  
福島県教育委員会 2001『はにわ一座がやってきた』  
福島県立博物館 1988『東国のはにわ』

#### 茨城県：

赤羽横穴群報告書作成委員会 1987『赤羽横穴墓群B支丘1号墓の調査』  
茨城県教育委員会 1960『三昧塚古墳』  
茨城県教育委員会 2015『舟塚古墳』埴輪編  
茨城県立博物館 2013『はにわの世界—茨城の形象埴輪とその周辺—』

茨城県立歴史館 2004『茨城の形象埴輪—県内出土形象埴輪の集成と調査研究—』

石岡市教育委員会 1972『舟塚山古墳周濠調査報告書』  
財団法人茨城県教育財団 1988『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』17

新治村教育委員会 1986『武者塚古墳』

西宮一男 1969『常陸孤塚』

筑波大学 1981『筑波古代地域史の研究』

水戸市立博物館 1983『関東の埴輪—人物を中心に—』

明治大学博物館 2010『王の埴輪』玉里舟塚古墳の埴輪群

#### 栃木県：

大平町教育委員会 1974『七廻り鏡塚古墳』

小山市教育委員会 1972『桑57号墳発掘調査報告書』

下野市教育委員会 2014『甲塚古墳—下野国分寺跡史跡整備関連発掘調査報告書—』

栃木県教育委員会 1996『はにわワンダーランド—埴輪に見る下野の古墳文化—』

栃木県教育委員会 2014『しもつけの“埴輪群像”—そのすがたをさぐる—』

藤岡町教育委員会 1977『山王寺大柁塚古墳』

前澤輝政 1983『佐野市八幡山古墳調査概報』『古代』16 早稲田大学考古学会

三木文雄 1986『那須駒形大塚』

壬生町立歴史民俗資料館 1989『しもつけのはにわ人たち』

壬生町立歴史民俗資料館 2003『よみがえる古代のはにわ人たち』

#### 群馬県：

伊勢崎市教育委員会ほか 2011『本関町古墳群』

太田市教育委員会 2009『世良田諏訪下遺跡』

太田市教育委員会 2012『オクマン山古墳』

かみつけの里博物館 2000『はにわ群像を読み解く 保渡田八幡塚古墳の人物・動物埴輪復元プロセス』

かみつけの里博物館 2012『古墳の守り人』—盾持ち人はにわと

古墳—

群馬県 1932『上芝古墳趾・八幡塚古墳』『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』2

群馬県 1981『群馬県史』資料編3 原始古代3

群馬県教育委員会 1980『塚廻り古墳群』

群馬町教育委員会 1990『保渡田Ⅶ遺跡 保渡田古墳群に関する遺跡群』

群馬県教育委員会 1992『神保下條遺跡 鎭川流域における埴輪出土古墳の調査』

群馬町教育委員会 2000『保渡田八幡塚古墳』調査編

群馬県立歴史博物館 2009『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！』～これが最後、東と西の埴輪大集合～

後藤守一 1932『上野国佐波郡赤堀村茶臼山古墳』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981『清里・庚申塚遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『有馬遺跡』Ⅱ

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『新保田中村前遺跡』Ⅲ

財団法人群馬県埋蔵文化財調査団 1998『綿貫観音山古墳』Ⅰ墳丘・埴輪編

財団法人群馬県埋蔵文化財調査団 1999『綿貫観音山古墳』Ⅱ石室・遺物編

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『多田山古墳群』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『成塚向山古墳群』上毛郷土史研究会 1929『渡田八幡塚外囲発掘概況・八幡塚古墳と埴輪概況同上実測図版並出土品写真版』

渋川市教育委員会 1980『空地遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡発掘調査概報』

渋川市教育委員会 1986『中村遺跡』

高崎市教育委員会 1991『山名原Ⅱ遺跡』

高崎市教育委員会 2005『史跡日高遺跡』

高崎市観音塚考古資料館 2010『古墳時代後期中型円墳の埴輪群像—高崎市吉井町中原1号墳—』

帝室博物館 1937『上野国碓氷郡八幡村大字剣崎字長瀬西古墳』『古墳発掘品調査報告』

富岡市教育委員会 1972『富岡5号墳』

沼田市教育委員会 1995『沼田市史』

前橋市教育委員会 1997『小二子古墳』

#### 埼玉県：

朝霞市教育委員会 2011『一夜塚古墳出土遺物調査報告書』

浦和市教育委員会 1986『北宿・馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』

浦和市遺跡調査会 1994『井沼方遺跡発掘調査報告書(第12次)』

鴻巣市教育委員会 1987『鴻巣市遺跡群Ⅱ 生出塚遺跡(A地点)』

鴻巣市教育委員会 1987『鴻巣市遺跡群Ⅲ 生出塚遺跡(D・E地点)』—遺構・遺物編—

鴻巣市遺跡調査会 1999『生出塚遺跡(P地点)』

埼玉県 1982『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代・弥生・古墳

埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』

埼玉県教育委員会 1986『瓦塚古墳』

埼玉県教育委員会 1997『將軍山古墳 史跡埼玉古墳群整備事業報告書』

埼玉県立さきたま資料館 1988『埴輪人の世界』  
埼玉県立さきたま史跡の博物館 2014『ハニワの世界』  
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『関越自動車道関係  
埋蔵文化財発掘調査報告XVIII 屋田・寺ノ台』  
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『小前田古墳群』  
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999『中里前原北遺跡』  
II  
東松山市教育委員会 2008『おくま山古墳』（第1・2次）  
東松山市 2010『鉄製短甲を探る―東耕地3号墳の出土品から―』  
『広報ひがしまつやま』  
富士見市教育委員会 1987『針ヶ谷遺跡群』  
和光市教育委員会 1993『午王山遺跡』  
**千葉県：**  
我孫子町教育委員会（東京大学文学部考古学研究室編）1969『我  
孫子古墳群』  
市川考古博物館 2002『市川市出土の埴輪』  
市川博物館 1981『法皇塚古墳』  
市原市教育委員会 1976『上総国分寺台遺跡発掘調査概要』III  
市原市教育委員会 1980『上総山王山古墳発掘調査報告』  
市原市教育委員会 1988『「王賜」銘鉄剣概報』千葉県市原市稲荷  
台一号墳出土  
市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター 2004『市原市  
山倉古墳群』  
市原市埋蔵文化財調査センター 1989『市原市文化財センター年  
報』昭和62年度  
大崎台B地区遺跡調査会 1997『大崎台遺跡発掘調査報告』II  
小見川町教育委員会 1978『城山第1号前方後円墳』  
柏市教育委員会 2001『花野井大塚古墳(まか)』  
上総国分寺台遺跡調査団 1974『東間部多古墳群』  
上総国分寺台遺跡調査団 1982『上総国分寺台発掘調査概』  
国府台遺跡第29地点調査会 2002『国府台遺跡』  
小林三郎・熊野正也（編）『法皇塚古墳』市川博物館研究調査報  
告3  
財団法人君津都市文化財センター 1988『宮脇遺跡』  
芝山町 1992『芝山町史』資料集1 原始・古代編第2分冊  
芝山はにわ博物館 1975『遺跡 日吉倉―千葉県印旛郡富里村日吉  
倉遺跡調査報告書―』  
芝山はにわ博物館 1975『下総小川台古墳群』  
芝山はにわ博物館 1976『下総片野古墳群』  
芝山はにわ博物館 2004『芝山はにわ解説書』  
芝山町 1992『芝山町史』資料集1 原始・古代編 2  
杉山晋作(まか) 1989「千葉県君津市所在八重原1号墳・2号墳の  
調査」『古墳時代研究』3 古墳時代研究会  
田代新史 1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』77 早稲田大  
学考古学会  
千葉県 2003『千葉県の歴史』資料編 考古2  
千葉県開発公社 1971『市原市大厩遺跡』  
千葉県教育委員会 1951『上総金鈴塚古墳』  
千葉県教育委員会 1988『千葉県成田市所在竜角寺古墳部第101  
号古墳発掘調査報告書』  
千葉県都市部 1974『市原市菊間遺跡』  
土浦市立博物館 1990『常陸のはにわ―埴輪が語る古墳時代の常  
陸―』

道庭遺跡調査会 1983『道庭遺跡』  
流山市教育委員会 2000『下総のはにわ』  
早稲田大学 2010『武射経僧塚古墳』石棺編  
**東京都：**  
北区飛鳥山博物館 2001『環濠を持つムラ・飛鳥山遺跡』  
北区教育委員会 1998『七社神社前遺跡』II  
熊野神社遺跡調査会 1991『山王三丁目遺跡』  
狛江市教育委員会 1992『弁財天池遺跡』  
世田谷区教育委員会 1982『下山遺跡』I  
世田谷区教育委員会 1999『野毛大塚古墳』  
都立赤塚公園遺跡範囲確認調査会 1989『都立赤塚公園内における  
環濠集落範囲確認調査概要報告』II  
**神奈川県：**  
厚木市教育委員会 1992『登山1号墳出土遺物調査報告書』  
綾瀬市教育委員会 1996『綾瀬市史』9  
折本西原遺跡調査団 1988『折本西原遺跡』I  
神奈川県教育委員会 1988『神奈川県埋蔵文化財調査報告』30  
考古資料刊行会 1971『そとごう遺跡調査概報』  
財団法人かながわ考古学財団 2003『下寺尾西方A遺跡』  
財団法人神奈川県立埋蔵文化財センター 1985『山王山遺跡』  
財団法人神奈川県立埋文センター 1991『砂田台遺跡』II  
財団法人横浜市埋蔵文化財センター 1990『全遺跡調査概報』  
財団法人横浜市埋蔵文化財センター 1991『大塚遺跡』  
殿屋敷遺跡群C地区発掘調査団 1985『殿屋敷遺跡群C地区発  
掘調査報告書』  
東海大学校地内遺跡調査委員会 1990『東海大学校地内遺跡調査  
報告』1  
本郷遺跡調査団 1995『海老名本郷』X  
三田史学会 1953『日吉加瀬古墳』  
緑区教育委員会 1986『緑区史』資料編第二巻  
横浜市域北部埋文調査委員会 1968『横浜市域北部埋蔵文化財調  
査報告書』  
**新潟県：**  
新潟県教育委員会 2000『上信越自動車道関係発掘調査報告書』  
VI  
新潟県教育委員会 2009『県内遺跡発掘調査報告書』I 山元遺跡  
新津市教育委員会 2004『八幡山遺跡発掘調査報告書』  
**富山県：**  
小矢部市教育委員会 1992『谷内21号墳』  
**石川県：**  
財団法人石川県埋蔵文化財センター『谷内・杉谷遺跡群』  
金沢市教育委員会 1996『西念・南新保遺跡』IV  
羽咋市教育委員会 1973『羽咋市史』原始・古代編  
**福井県：**  
甘粕健(まか) 1967「福井市原目山古墳群の調査」『日本考古学協会  
第33回総会発表要旨』日本考古学協会  
福井県郷土誌懇談会 1960『足羽山の古墳』  
福井県埋蔵文化財調査センター 1994『福井県教育庁埋蔵文化財  
調査センター年報』8  
福井市 1990『福井市史』資料編1 考古  
**山梨県**  
帝室博物館 1937「甲斐国東八代軍左右口村大字上向大丸山発掘  
短甲」『古墳発掘品調査報告』

## 長野県：

飯田市教育委員会 1992『八幡原遺跡』  
財団法人長野県埋蔵文化財センター1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2  
財団法人長野県埋蔵文化財センター1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』16  
財団法人長野県埋蔵文化財センター1999『上信越道埋蔵文化財発掘調査報告書』8  
財団法人長野県埋蔵文化財センター1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』16  
財団法人長野県埋蔵文化財センター2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
長野県 1982-1983『長野県史』考古資料編 主要遺跡  
長野県教育委員会 1972『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田地区』  
長野市教育委員会 1992『篠ノ井遺跡群』4  
松本市教育委員会 1978『弘法山古墳』

## 岐阜県：

大垣市教育委員会 1992『花岡山古墳群』  
岐阜市教育委員会 1962『岐阜市長良龍門寺古墳』  
各務原市教育委員会 1994『宮原遺跡 A 地区発掘調査報告書』

## 静岡県：

庵原村教育委員会 1961『三池平古墳』  
磐田市教育委員会 1982『新富院山墳墓群』  
磐田市教育委員会 1989『安久路 2・3 号墳発掘調査写真集』  
静岡県教育委員会 1990『静岡県史』資料編 2 考古 2  
大東町教育委員会 2004『史跡高天神城跡 二の丸ゾーン発掘調査報告書』  
財団法人浜松市文化協会 1990『松東遺跡発掘調査報告書』  
財団法人浜松市文化協会 2000『山の神遺跡』5  
財団法人浜松文化協会 2005『梶子北（三永）・中村遺跡』  
浜北市教育委員会 1966『遠江赤門上古墳』  
浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』  
浜松市教育委員会 1998『千人塚古墳、千人塚平・宇藤坂古墳群』  
浜松市博物館 1998『千人塚古墳(ほか)』  
袋井市教育委員会 2004『愛野向山Ⅱ遺跡』  
袋井市教育委員会 1999『石ノ形古墳』  
袋井市教育委員会 1994『冢子塚九号墳』  
袋井市教育委員会 1999『石ノ形古墳』  
富士宮市教育委員会 1993『富士宮市の遺跡』  
御厨村郷土教育研究会 1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』

## 愛知県：

愛知県 2007『愛知県史』資料編 3 考古編 2  
財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『阿弥陀寺遺跡』  
財団法人愛知県埋蔵文化財センター1991～1994『朝日遺跡』  
財団法人愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』  
財団法人愛知県埋蔵文化財センター2002『平手町遺跡』  
財団法人愛知県埋蔵文化財センター2003『猫島遺跡』  
財団法人愛知県埋蔵文化財センター2007『伝法寺野田遺跡』  
春日井市教育委員会 2000『松河戸遺跡』  
吉良町 1957『吉良町資料』1  
豊田市教育委員会 1996『梅坪遺跡』Ⅲ

名古屋市教育委員会 1999『埋蔵文化財調査報告書』30  
日進町教育委員会 1987『岩崎城跡発掘調査報告書』

## 三重県：

安濃町教育委員会 1998『大城遺跡発掘調査報告書』  
松坂市教育委員会市 1981『八重田古墳群発掘調査報告書』  
松阪市教育委員会 2005『三重県松阪市史跡宝塚古墳 保存整備事業に伴う宝塚 1 号墳・宝塚 2 号墳調査報告』  
三重県教育委員会 2005『三重県史』資料編 考古 1  
三重県埋蔵文化財センター1998『一般国道 42 号松坂・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅶ  
三重県埋蔵文化財センター2004『筋違遺跡発掘調査報告』  
三重県埋蔵文化財埋文センター2005『天花寺丘丘陵内遺跡群発掘調査報告』Ⅵ  
森浩一ほか 1973,「三重県わき塚古墳の調査」『古代学研究』66  
古代学研究会  
四日市市教育委員会 1966『大谷遺跡発掘調査報告書』  
四日市市教育委員会 1973『永井遺跡発掘調査報告書』

## 滋賀県：

大阪市立大学 1953「滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳調査報告」『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要』大阪市立大学文学部歴史学教室  
京都大学 1923『近江国高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告 8  
滋賀県教育委員会 1938『滋賀県史蹟調査報告』7  
滋賀県教育委員会 1961『滋賀県史蹟調査報告』12  
滋賀県教育委員会 1981『北陸自動車道関車遺跡発掘調査報告書』Ⅵ  
滋賀県教育委員会 1992『針江北遺跡・針江川北遺跡』Ⅰ  
滋賀県教育委員会 2005『下鈎遺跡』  
滋賀県教育委員会 2010『宇佐山古墳群発掘調査現地説明会資料』  
滋賀県教育委員会 1986『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ  
守山市教育委員会 1990『守山市文化財調査報告書』38  
守山市教育委員会 2006『下之郷遺跡確認調査報告書』Ⅲ  
守山市教育委員会 2007『伊勢遺跡確認調査報告書』Ⅴ

## 京都府：

綾部市教育委員会 1979『綾部市文化財調査報告』5  
岩滝町教育委員会 2000『大風呂南遺跡群』  
梅原未治 1920『久津川古墳研究』  
大阪大学 1992『長法寺南原古墳の研究』  
大宮町教育委員会 1987『大谷古墳』  
加悦町教育委員会 1992『須代遺跡』  
加悦町教育委員会 2005『日吉ヶ丘遺跡』  
京都帝国大学文学部考古学研究室 1943『大和唐古弥生遺跡の研究』桑名文星堂  
京都府 1933『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』14  
京都府 1936『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』17  
京都府 1939『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』20  
京都府教育委員会 1960『京都府文化財調査報告』22  
京都府教育委員会 1987『埋蔵文化財発掘調査概報』  
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996『平成 5 年度京都市埋蔵文化財調査概要』  
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1986『京都府遺跡調査報告書』6  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1989『京都府遺跡調査概報』36  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1991『京都府遺跡調査報告』15  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1997『瓦谷古墳群』  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1999『京都府遺跡調査概報』89  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2004『京都府遺跡調査報告書』36  
城陽市教育委員会 1974『城陽市埋蔵文化財調査報告書』2  
同志社大学 1990『園部垣内古墳』  
丹後郷土資料館 1980『水無月山遺跡調査報告書』  
丹後町教育委員会 1983『丹後大山墳墓群』  
長岡京市教育委員会 1990『史跡恵解山古墳』  
野田川町教育委員会 1990『西谷遺跡発掘調査』現地説明会資料  
野田川町教育委員会 1990『大石西 B 古墳群発掘調査』現地説明会資料  
堀内明博 1998「雲宮遺跡（シンボ工業敷地内）」『第6回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』  
峰山町教育委員会 1977『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』  
峰山町教育委員会 1975～85『扇谷遺跡発掘調査報告書』  
山城考古学研究所 1983『丹波の古墳』I  
山城町教育委員会 1953『椿井大塚山古墳発掘調査報告書』  
弥栄町教育委員会 1979『坂野』  
**大阪府：**  
大阪市立美術館 1960『富木車塚古墳』  
大阪大学 1964『河内における古墳の調査』  
大阪大学 1976『河内野中古墳の研究』  
大阪府 1932『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』3  
大阪府 1936『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』7  
大阪府教育委員会 1953『河内黒姫山古墳の研究』  
大阪府教育委員会 1982『唐櫃山古墳発掘調査概要』  
大阪府教育委員会 1987『陶邑』  
大阪府教育委員会 1989『東山遺跡発掘調査概要』  
大阪府教育委員会 1999『土師里遺跡』  
大阪府教育委員会 1999『田井中遺跡発掘調査概報Ⅷ』  
大阪府教育委員会 1994『甲田南遺跡発掘調査概報』  
大阪府立近つ飛鳥博物館 2005『王権と儀礼 埴輪群像の世界』平成17年度秋季特別展図録  
柏原市教育委員会 1996『大泉の鉄—発掘調査15年—』  
柏原市教育委員会 2002『田辺遺跡—国分中学校プール建設に伴う遺物編—』  
交野市教育委員会 1989『森遺跡』I  
交野市教育委員会 1990『森遺跡』II  
交野市教育委員会 1991『森遺跡』III  
交野市教育委員会 1992『森遺跡』IV  
交野市教育委員会 2000『交野東車塚古墳』  
岸和田市教育委員会 1995『久米田古墳群発掘調査概要』  
京都大学文学部博物館 1993『紫金山古墳と石山古墳』  
古代学研究会 1953『カトンボ山古墳の研究』  
財団法人大阪市文化財協会 1998『山之内遺跡発掘調査報告』

財団法人大阪市文化財協会 1991『長原遺跡発掘調査報告』IV 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 前編  
財団法人大阪市文化財協会 2005『長原遺跡発掘調査報告書』XII  
財団法人大阪府文化財センター1979『池上遺跡』第2分冊  
財団法人大阪文化財センター1980『亀井・城山』  
財団法人大阪文化財センター1984『府道松原和泉大津千間連遺跡発掘調査報告書』I 西浦遺跡・菱木下遺跡・万崎池遺跡・太平寺遺跡  
財団法人大阪文化財センター1984『山賀』その3  
財団法人大阪府文化財調査研究センター2002『亀川遺跡』  
財団法人大阪府文化財調査研究センター2009『讃良郡条理遺跡』IX  
財団法人大阪府文化財調査研究センター2010『葎屋北遺跡』I  
財団法人大阪府文化財調査研究センター2011『私部南遺跡III・有池遺跡・上私部遺跡・上の山遺跡』  
財団法人大阪文化財調査研究センター1996『大阪府下埋蔵文化財研究会（34回）資料』  
財団法人枚方市文化財研究調査会 1989『枚方市文化財年報』IX  
堺市教育委員会 1982『東上野芝遺跡発掘調査報告』『堺市文化財調査報告』10  
堺市教育委員会 1989『百舌鳥大塚山古墳発掘調査報告』『堺市文化財調査報告』40  
阪口英毅 2014『七観古墳の研究—1947・1952年出土遺物の再検討—』京都大学大学院文学研究科  
第二阪和国道内遺跡調査会 1969～71『池上・四つ池遺跡』1～17  
高槻市教育委員会 1996『古曽部・芝谷遺跡』  
高槻市教育委員会 1977『安満遺跡発掘調査報告書』—9 地区の調査—  
同志社大学 1999『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』  
豊中市教育委員会 1987『摂津豊中大塚古墳』  
豊中市教育委員会 1990『御獅子塚古墳』  
寝屋川市教育委員会 1988『高宮八丁遺跡』石器編  
寝屋川市教育委員会 1992『高宮八丁遺跡』II  
日本考古学協会 1954『和泉黄金塚古墳』  
羽曳野市教育委員会 2010『庭島塚古墳発掘調査報告』  
東奈良遺跡調査会 1981『東奈良発掘調査概報』  
樋口隆康ほか 1961『和泉国七観古墳調査報告』『古代学研究』27 古代学研究会  
藤井寺市教育委員会 1994『土師の里8号墳』  
藤井寺市教育委員会 1997『西墓山古墳』  
藤井寺市教育委員会 2013『津堂城山古墳』—古市古墳群の調査研究報告IV—  
由良大和古代文化研究協会 1991『盾塚鞍塚珠金塚古墳』  
**兵庫県：**  
淡路市教育委員会 2011『五斗長垣内遺跡発掘調査報告』  
出石町教育委員会 1993『出石町史』  
伊丹市教育委員会 2000『口酒井遺跡』  
揖保川町教育委員会 1985『養久山墳墓群』  
加古川市教育委員会 1985『カンス塚古墳発掘調査概報』  
加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』  
香寺町教育委員会 1986『法花堂2号墳』

神戸市教育委員会 1993『大開遺跡』  
権現山 51 号墳刊行会 1991『権現山 51 号墳』  
三田市教育委員会 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅰ  
山東町教育委員会 1978『柿坪中山古墳群』  
龍野市教育委員会 1984『龍野市史』4  
龍野市教育委員会 1996『新宮東山古墳群』  
豊岡市教育委員会 1975『但馬・妙楽寺遺跡群』  
豊岡市教育委員会 1987『北浦古墳群・立石墳墓群』  
豊岡市教育委員会 1988『大篠岡・半坂墳墓群』  
豊岡市教育委員会 1992『上鉢山・東山墳墓群』  
兵庫県 1935『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』11  
兵庫県教育委員会 1985『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和 59 年度』  
兵庫県 1992『兵庫県史』考古資料編  
兵庫県教育委員会 1993『内場山遺跡』  
兵庫県教育委員会 2010『史跡茶すり山古墳』  
兵庫県立考古博物館 2010『雲部車塚古墳の研究』『研究紀要』3  
兵庫県社会文化協会 1974『兵庫県埋蔵文化財調査集報』2  
八鹿町教育委員会 1990『小山古墳群・東家の上遺跡』  
八鹿市教育委員会 2002「沖田 11 号墳・短甲の発見」『八鹿発掘超情報』2  
和田山町教育委員会 1978『秋葉山墳墓群』  
和田山町教育委員会 1996『和田山町文化財調査報告書』7  
**奈良県：**  
橿原考古学研究所 1977『メスリ山古墳』  
橿原考古学研究所 1978『兵家古墳群』  
橿原考古学研究所 1981『奈良県遺跡調査概報』  
橿原考古学研究所 1981『新沢千塚古墳群』  
橿原考古学研究所 1982『見田・大沢古墳群』  
橿原考古学研究所 1985『宇陀地方の遺跡調査』昭和 59 年度  
橿原考古学研究所 1986『宇陀地方の遺跡調査』昭和 60 年度 大  
和高原パイロット事業地内の発掘調査概報告書  
橿原考古学研究所 1989『斑鳩藤ノ木古墳概報』  
橿原考古学研究所 1992『野山遺跡群』Ⅲ  
橿原考古学研究所 1993『奈良県文化財調査報告書』69 後出古  
墳群—18 号墳—  
橿原考古学研究所 1996『奈良県遺跡調査概報』1995 年度  
橿原考古学研究所 1996『南郷遺跡群』Ⅰ  
橿原考古学研究所 1999『黒塚古墳調査概報』  
橿原考古学研究所 1999『南郷遺跡群』Ⅱ  
橿原考古学研究所 2000『南郷遺跡群』Ⅳ  
橿原考古学研究所 2000『南郷遺跡群』Ⅴ  
橿原考古学研究所 2003『後出古墳群』  
橿原考古学研究所 2003『南郷遺跡群』Ⅲ  
橿原考古学研究所 2008『ホケノ山古墳の研究』  
橿原考古学研究所 2008『四条シナノ遺跡』  
橿原考古学研究所付属博物館 2008『はにわ人と動物たち』—大  
和の埴輪大集合—  
御所市教育委員会 2001『鴨都波 1 号墳』  
田原本町教育委員会 1985『多遺跡発掘調査報告』  
田原本町教育委員会 1995『唐古・鍵遺跡』  
天理市教育委員会 1999『平等坊・岩室遺跡』

奈良県 1930『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』11  
奈良県 1941『奈良県史蹟天然記念物調査会抄報』2  
奈良県教育委員会 1957『奈良県埋蔵文化財調査報告書』1  
奈良県教育委員会 1957『奈良県埋蔵文化財調査報告書』1  
奈良県教育委員会 1973『磐余・池ノ内古墳群』  
埋蔵文化財天理教調査団 1995『布留遺跡三島（里中）地区発掘  
調査報告書』  
埋蔵文化財天理教調査団 2006『布留遺跡豊井（宇久保）地区発  
掘調査報告書』  
埋蔵文化財天理教調査団 2010『布留遺跡和之内（樋ノ下・ドウ  
ドウ）地区発掘調査報告書』遺構編  
**和歌山県：**  
有田川町遺跡調査会 2009『旧吉備中学校校庭遺跡』第 4 次発掘  
調査  
御坊市教育委員会 2002『堅田遺跡』  
財団法人和歌山県文化財センター 2007『太田・黒田遺跡』  
樋口隆康ほか 1985『大谷古墳』  
和歌山県 1983『和歌山県史』考古資料  
**鳥取県：**  
会見町教育委員会 1993『天王原遺跡発掘調査報告書』  
倉吉市教育委員会 1982『四王寺地域遺跡群遺跡詳細分布調査報  
告書』  
倉吉市教育委員会 1996『下張坪遺跡発掘調査報告書』  
西伯町教育委員会 1992『清水谷遺跡』  
財団法人鳥取県文化振興財団 1999『長瀬高浜遺跡Ⅲ・園第 6 遺  
跡』  
財団法人鳥取県教育文化財団 2001『大塚岩田遺跡・大塚塚根遺  
跡』  
財団法人鳥取県教育文化財団 2002『青谷上寺地遺跡』4  
財団法人鳥取市教育福祉振興会 1994『紙子谷古墳群・宮長ケケ  
鼻遺跡』  
佐々木古文化研究所 1962『馬山古墳群』  
大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書』  
鳥取県教育委員会 2000『島古墳群』ほか  
鳥取市 1983『鳥取市史』  
**島根県：**  
石見町教育委員会 1977『中山古墳群発掘調査概報』  
出雲市教育委員会 2007『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』17  
鹿島町教育委員会 1985『奥才古墳群』  
江津市教育委員会 1973『波来浜遺跡発掘調査報告書』  
財団法人松江市教育文化振興事業団 2005『田和山遺跡』  
島根県教育委員会 1980『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化  
財発掘調査報告書』  
島根県教育委員会 1991『要害遺跡』  
島根県教育委員会 2000『一般国道 9 号江津道路建設予定地内埋  
蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ  
島根県教育委員会 2002『田中谷遺跡・塚山古墳・下がり松遺跡・  
角谷遺跡』  
島根大学 1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』  
安来市教育委員会 1974『宮山墳墓群』  
山本清 1989『山陰の石棺について』『出雲の古代文化』六興出版  
**岡山県：**  
今井亮ほか 1969「美作津山市沼六号墳調査報告」『古代吉備』6



古代古備研究会  
岡山県 1986『岡山県史』  
岡山県教育委員会 1982『殿山遺跡・殿山古墳群』  
岡山県教育委員会 1986『岡山県史』18巻 考古資料  
岡山県教育委員会 1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』8  
岡山県教育委員会 1998『高下遺跡・浅川古墳群ほか』  
岡山県教育委員会 2007『百間川兼基遺跡4 百間川沢田遺跡5』  
岡山大学 2007『勝負砂古墳第7次発掘調査』現地説明会資料  
近藤義郎 1992『榊築弥生墳丘墓の研究』  
山陽町教育委員会 1975『用木古墳群』  
山陽町教育委員会 2004『正崎2号墳』  
月の輪古墳刊行会 1969『月の輪古墳』  
津山市教育委員会 1982『京免・竹ノ下遺跡』  
日本古文化研究所 1938『近畿地方古墳墓の調査』3  
矢掛町教育委員会 2001『清水谷遺跡』

#### 広島県：

広島県教育委員会 1979『広島県史』考古編  
広島県教育委員会 1983『亀山遺跡』-第2次発掘調査概報-  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター1981『石槌山古墳群』  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター1985『大槌遺跡群』  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター1986『大宮遺跡発掘調査報告書』  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター1990『東郷遺跡・焼け遺跡』  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター1998『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』  
広島市歴史科学事業団 1991『広島市佐伯区五日市町所在城ノ下A地点遺跡発掘調査報告書』  
東広島市教育委員会 1993『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II  
東広島市教育委員会 1994『史跡三ツ城古墳整備事業報告』

#### 山口県：

阿東町教育委員会 1998『宮ヶ久保遺跡』  
財団法人山口県埋蔵文化財センター1988『国森古墳』  
財団法人山口県埋蔵文化財センター2004『古永遺跡VI地区』  
下関市教育委員会 2000『綾羅木郷遺跡』  
山口県教育委員会 1961『山口県文化財概要』4  
山口県教育委員会 1973『宮原遺跡・上広石遺跡』  
山口県教育委員会 1983『朝田墳墓群』VI  
山口県教育委員会 1985『よみがえる弥生のムラー突抜・馬場遺跡-』  
山口県教育委員会 1987『岡山遺跡』  
山口県教育委員会 1993『石走山遺跡』  
山口県教育委員会 2000『山口県史』資料編 考古1  
山口市教育委員会 1990『下東遺跡』

#### 徳島県：

徳島県教育委員会 1946『眉山周辺の古墳』  
徳島県教育委員会 1963『前山古墳』  
徳島県教育委員会 2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』  
徳島大学 1998『庄・蔵本遺跡』1

#### 香川県：

大川町教育委員会 1992『大井七つ塚古墳発掘調査報告書』

香川県教育委員会 1951『史跡名勝天然記念物調査報告』15  
香川県教育委員会 1994『香川県埋蔵文化財発掘調査報告』  
香川県埋蔵文化財センター1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』29  
香川県埋蔵文化財センター2002『鴨部・川田遺跡』III  
坂出市教育委員会 2001『市内遺跡発掘調査報告書』  
善通寺市教育委員会 1992『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』  
高松市教育委員会 2001『鬼無藤井遺跡』  
長尾町教育委員会 1991『川上・丸井古墳発掘調査報告』  
丸亀市教育委員会 2006『中の池遺跡』-第12次調査-  
日本考古学協会 1983『香川の前期古墳』

#### 愛媛県：

今治市教育委員会 1974『唐子台遺跡群』  
愛媛県 1986『愛知県史』資料編 考古  
愛媛県教育委員会 1981『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』II  
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1995『持田町3丁目遺跡』  
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1998『斎院・古照』  
財団法人松山市埋蔵文化財センター1991『祝谷六丁場遺跡』  
財団法人松山市埋蔵文化財センター1998『岩崎遺跡』  
財団法人松山市埋蔵文化財センター2003『久米高畑遺跡』  
山本雅夫ほか 1984『伊予市猪の窪古墳発掘調査報告書』『愛媛考古学』7 愛媛考古学協会

#### 高知県：

高知県教育委員会 2006『田村遺跡群』II

#### 福岡県：

甘木市教育委員会 1979『池の上墳墓群』  
甘木市教育委員会 1983『古寺遺跡群』II  
甘木市教育委員会 2004『平塚川添遺跡』II  
大牟田市教育委員会 1975『潜塚古墳』  
小郡市教育委員会 1988『横隈北田遺跡』  
小郡市教育委員会 1988『三国の鼻遺跡』III  
小郡市教育委員会 1992『津古内畑遺跡』6  
小郡市教育委員会 2000『小郡市史』4  
小郡市教育委員会 2002『上岩田周辺遺跡』  
小郡市教育委員会 2003『三沢北中尾遺跡1地点』  
小郡市教育委員会 2007『三沢南沢遺跡』  
小郡市教育委員会 2008『力武内畑遺跡』8・9・10  
小郡市教育委員会 2012『大保横枕遺跡』2  
小田富士雄 1979『福岡県・丸隈山古墳』『九州考古学研究 古墳時代編』学生社  
春日市教育委員会 1976『大南遺跡調査概報』  
粕屋市教育委員会 2002『江辻遺跡第5地点』  
嘉穂町教育委員会 1992『アナフ遺跡』  
苅田町教育委員会 1984『葛川遺跡』  
北九州市教育委員会 1994『南方裏山古墳』  
九州大学文学部考古学研究室 1968『有田遺跡』  
児玉真一「福岡県京都郡豊津町平遺跡発見の箱式石棺墓と副葬品」『九州考古学』55 九州考古学会  
犀川町教育委員会 1997『古川平原古墳群』  
財団法人北九州市教育文化事業団 1991『高津尾遺跡』4

佐野一ほか 1969「福岡県鞍手郡若宮町西ノ浦古墳調査概報」『九州考古学』36・37 九州考古学会

下稗田遺跡調査会指導会 1985『豊前下稗田遺跡』

志免町教育委員会 1974『七夕池遺跡群』

竹並遺跡調査会 1979『竹並遺跡』

筑紫野市教育委員会 1993『隈・西小田地区遺跡群』

津屋崎町教育委員会 1991『宮司井出ノ上古墳』

中山平次郎 1917「銅鉾銅剣の新資料」『考古学雑誌』7-7 日本考古学会

原田大六 1991『平原弥生古墳』

日本考古学協会 1972『日本農耕文化の生成』

福岡県教育委員会 1952『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』13

福岡県教育委員会 1963『福岡県須玖・岡本遺蹟調査概報』

福岡県教育委員会 1971『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2

福岡県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXVII

福岡県教育委員会 1981『三雲遺跡』II

福岡県教育委員会 1983『石崎曲り田遺跡』I

福岡県教育委員会 1986『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』6

福岡県教育委員会 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』6

福岡県教育委員会 1993『九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告書』25

福岡県教育委員会 1994『堺町・大碓遺跡』

福岡県教育委員会 1994『江垣畠田・長通遺跡』

福岡県教育委員会 2005『彼坪遺跡』III

福岡県教育委員会 1995『板付遺跡環境整備報告』

福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会 1977『立岩遺跡』

福岡市教育委員会 1983『比恵遺跡』

福岡市教育委員会 1986『古武高木』弥生時代埋葬遺跡の調査概要

福岡市教育委員会 1989『有田・小田部』10

福岡市教育委員会 1989『老司古墳』

福岡市教育委員会 1992『福岡県西区国史跡野方遺跡環境整備報告書』

福岡市教育委員会 1995『クエゾノ遺跡』

福岡市教育委員会 2000『古武高木遺跡群』VII 弥生時代墳墓の調査 3

福岡市教育委員会 2001『雀居遺跡』6

福岡市教育委員会 2001『那珂』27

福岡市教育委員会 2005『雑餉隈遺跡』5—第 14・15 次調査報告—

福岡市教育委員会 2007『伊都国を支えた大型環濠集落を発見—西区・今宿五郎江遺跡、大塚遺跡第 11 次調査—』報道発表資料

文化財保護委員会 1956『志登支石群』

宗像市教育委員会 1986『宗像埋蔵文化財発掘調査概報』

宗像市教育委員会 1997『宗像市史』1

宗像市教育委員会 1988『久原遺跡：概報古代棟方をさぐる』

宗像市教育委員会 1999『田久松ヶ浦遺跡』

宗像市教育委員会 1993『弥生時代の墓制を考える』

宗像市教育委員会 2001『東郷登り立』

宗像市教育委員会 2004『光岡長尾』I

宗像市教育委員会 2009『概報田熊石畑遺跡』

夜須町教育委員会 1986『広報やすまち』

八女市教育委員会 1983『立山山古墳群』

八女市教育委員会 1986『室岡山ノ上遺跡』

八女市教育委員会 1997『埋蔵文化財概報』IV

行橋市教育委員会 2005『稲童古墳群』

呼子町教育委員会 1981『大友遺跡』

**佐賀県：**

唐津湾周辺遺跡調査会調査委員会 1982『末櫛国』佐賀県唐津市東松浦郡の考古学的調査研究

基山市教育委員会 1978『千塔山遺跡』

唐津市教育委員会 1982『菜畑遺跡』

佐賀県教育委員会 1979『二塚山』

佐賀県教育委員会 1983『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』3

佐賀県教育委員会 1989『礫石遺跡』

佐賀県教育委員会 1990『西石動遺跡』

佐賀県教育委員会 2003『柚比遺跡群』3

佐賀県教育委員会 2005『吉野ヶ里遺跡』

佐賀県文化館 1967『新郷土』20-1

武雄市教育委員会 1991『小楠遺跡』

中原町教育委員会 1990『原古賀遺跡群』I

**長崎県：**

九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室 2013『カラカミ遺跡』IV

縄文文化研究会 1976『対馬の考古学』

東亜考古学会 1953『対馬』

豊玉町教育委員会 1980『対馬豊玉町ハロウ遺跡』

峰町教育委員会 1974『恵比須山遺跡発掘調査報告』

長崎県教育委員会 1974『対馬：浅茅湾とその周辺の考古学調査』

長崎県教育委員会 2005『原の辻遺跡』総集編 I

**熊本県：**

江本直ほか 1978「阿蘇谷の石棺」『九州考古学』53 九州考古学会

熊本県教育委員会 1987『下山西遺跡』

西合志町教育委員会 1993『西合志町埋蔵文化財報告』3

西弥護免遺跡調査団 1980『西弥護免遺跡調査概報』

山鹿市教育委員会 1982『方保田東原遺跡』

三角町教育委員会 1986『宇土半島古墳群分布調査報告』II

**大分県：**

宇佐市教育委員会 2001『宇佐地区遺跡群発掘調査』

宇佐風土記丘資料館 1986「免ヶ平古墳発掘報告書」『研究紀要』3

宇土市教育委員会 1978『向野田古墳』

大分県教育委員会 1989『草場第二遺跡』

大分県教育委員会 1997『三和教田遺跡 C 地点』

大分県教育委員会 1997『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』6

大分県教育委員会 1998『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』9

大分県教育委員会 2000 『中原舟久手遺跡』  
大野町教育委員会 1980 『大野原の遺跡』  
中津市教育委員会 1995 『幣旗邸古墳 1 号墳』  
**宮崎県：**  
えびの市教育委員会郷土史編さん委員会 1994 『えびの市史』 上  
えびの市  
えびの市教育委員会 1990 『永田原遺跡、小木原遺跡群蔵地区  
(A・B 地区)、口ノ坪遺跡』  
えびの市教育委員会 2000 『内小野遺跡』  
えびの市教育委員会 2000 『佐牛野遺跡』  
えびの市教育委員会 2001 『島内地下式横穴墓群』  
えびの市教育委員会 2002 『長江浦地区遺跡群 内丸遺跡・弁財  
天遺跡・馬場田遺跡・水流遺跡・役所田遺跡・小路下遺跡・浜  
川原遺跡』  
えびの市教育委員会 2005 『東川北遺跡群 手仕山遺跡・古屋敷  
遺跡・内牧遺跡・彦山第 5 遺跡』  
えびの市教育委員会 2009 『島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡元遺跡』  
えびの市教育委員会 2010 『北岡松地区遺跡群 天神免遺跡 岡  
松遺跡』  
えびの市教育委員会 2010 『島内地下式横穴墓群』Ⅱ  
えびの市教育委員会 2009 『島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡元遺跡』  
えびの市教育委員会 2010 『北岡松地区遺跡群』  
えびの市教育委員会 2012 『島内地下式横穴墓群』Ⅳ  
えびの市教育委員会 2015 『えびの市島内 139 号地下式横穴墓調  
査速報—1500 年前の大量の副葬品を納めた地域首長墓を完  
全な状態で発見—』  
国富町教育委員会 1985 『市の瀬地下式横穴墓群』『国富町文化財  
調査資料』4  
西都市教育委員会 2003 『堂ヶ嶋第 2 遺跡』  
新富町教育委員会 1986 『川床遺跡』  
日本古文化研究所 1940 『西都原古墳の調査』  
延岡市教育委員会 2004 『平成 15 年度市内遺跡発掘調査に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 上多々良箱式石棺群 (第 2 次)、  
中川原町右衛門山地点、野田八田遺跡群 (第 3 次)、木ノ下遺  
跡、赤木遺跡 (第 9 次)、野地古墳』  
高千穂町教育委員会 1989 『春姫登横穴墓』『高千穂町文化財調査  
報告書』8  
高原町教育委員会 1991 『立切地下式横穴墓群』  
高城町教育委員会 2005 『牧ノ原遺跡群』  
延岡市教育委員会 2004 『野地古墳』  
宮崎県 1915 『西都原古墳群調査報告』  
宮崎県 1944 『六野原古墳調査報告』  
宮崎県 1976 『持田古墳群』  
宮崎県 1993 『宮崎県史』資料編 考古 2  
宮崎県教育委員会 1966 『宮崎県文化財調査報告書』29  
宮崎県教育委員会 1969 『持田古墳群』

宮崎県教育委員会 1994 『九州縦貫自動車道 (人吉～えびの間)  
建設工事とともに埋蔵文化財調査報告書』2 野久首遺跡 平  
原遺跡 妙見遺跡』  
宮崎県教育委員会 1997 『池内横穴墓群発掘調査整理報告書』  
宮崎市教育委員会 1999 『下郷遺跡』  
宮崎県教育委員会 2003 『西都原 171 号墳』  
宮崎県教育委員会 2004 『史跡 生目古墳群』  
宮崎県教育委員会 2005 『高田遺跡』  
宮崎県教育委員会 2007 『西都原 173 号、西都原 4 号地下式横穴  
墓、西都原 111 号墳』  
宮崎県教育委員会 2007 『西都原古墳群男狭穂塚女狭塚陵墓参考  
地地中探査事業報告書』  
宮崎県総合博物館 1980 『下北方古墳』—遺物編—  
宮崎県埋蔵文化財センター2006 『下耳切第 3 遺跡』  
宮崎市教育委員会 1977 『下北方地下式横穴第 5 号』  
宮崎市教育委員会 2010 『生目古墳群』Ⅰ  
**鹿児島県：**  
鹿児島県教育委員会 1984 『外川江遺跡・横岡古墳』  
鹿児島県教育委員会 2007 『入来遺跡』『先史・古代の鹿児島』  
資料編  
鹿児島大学総合研究博物館 2008 『岡崎古墳群の研究』  
文化庁 1974 『成川遺跡』  
**中国：**  
河北省文物管理处 1975 『河北易県燕下都 44 号墓発掘報告』『考  
古』1975 年第 4 期 考古雑誌社  
遼寧省文物考古研究所 1997 『朝陽十二台鄉磚廠 88M1 発掘簡  
報』『文物』1997 年第 11 期 文物雑誌社  
山西省考古研究所・晋城市文化局・高平市博物館『長平之戦遺址  
永禄一号屍骨坑発掘簡報』『文物』1996 年第 6 期 文物雑誌  
社  
**韓国：**  
慶星大学校博物館 2000 『金海大成古墳群一概報—』(日本語版)  
国立晋州博物館 2001 『晋州大坪里玉房 1 地区遺蹟』Ⅰ  
東義大学校博物館 2000 『金海良洞里古墳文化』(日本語版)  
嶺南文化財研究院 2002 『蔚山川上里聚落遺蹟』  
嶺南文化財研究所 2002 『大邱東川洞聚落遺蹟』  
釜山大学校博物館 1982 『東萊福和泉洞古墳群』Ⅰ  
釜慶大学校博物館 1998 『山淸沙月里環濠遺蹟』  
釜山大学校博物館 1993 『金海禮安里古墳群』Ⅱ  
釜山大学博物館 1995 『蔚山檢丹里마을遺蹟』  
釜山大学博物館 2001 『蔚山蓮岩洞遺蹟』  
釜山大学博物館 2002 『蔚山芳基里遺蹟』  
**朝鮮民主主義人民共和国：**  
朱永憲 1963 『薬水里壁画古墳発掘報告』『各地遺跡整理報告 考  
古学資料集』3

弥生時代と古墳時代の軍事組織と社会  
藤 原 哲  
博 士 （ 文 学 ） 論 文

総 合 研 究 大 学 院 大 学  
文 化 科 学 研 究 科  
日 本 歴 史 研 究 専 攻

平 成 28 年 度 （ 2016 ）  
平 成 28 年 6 月 製 本